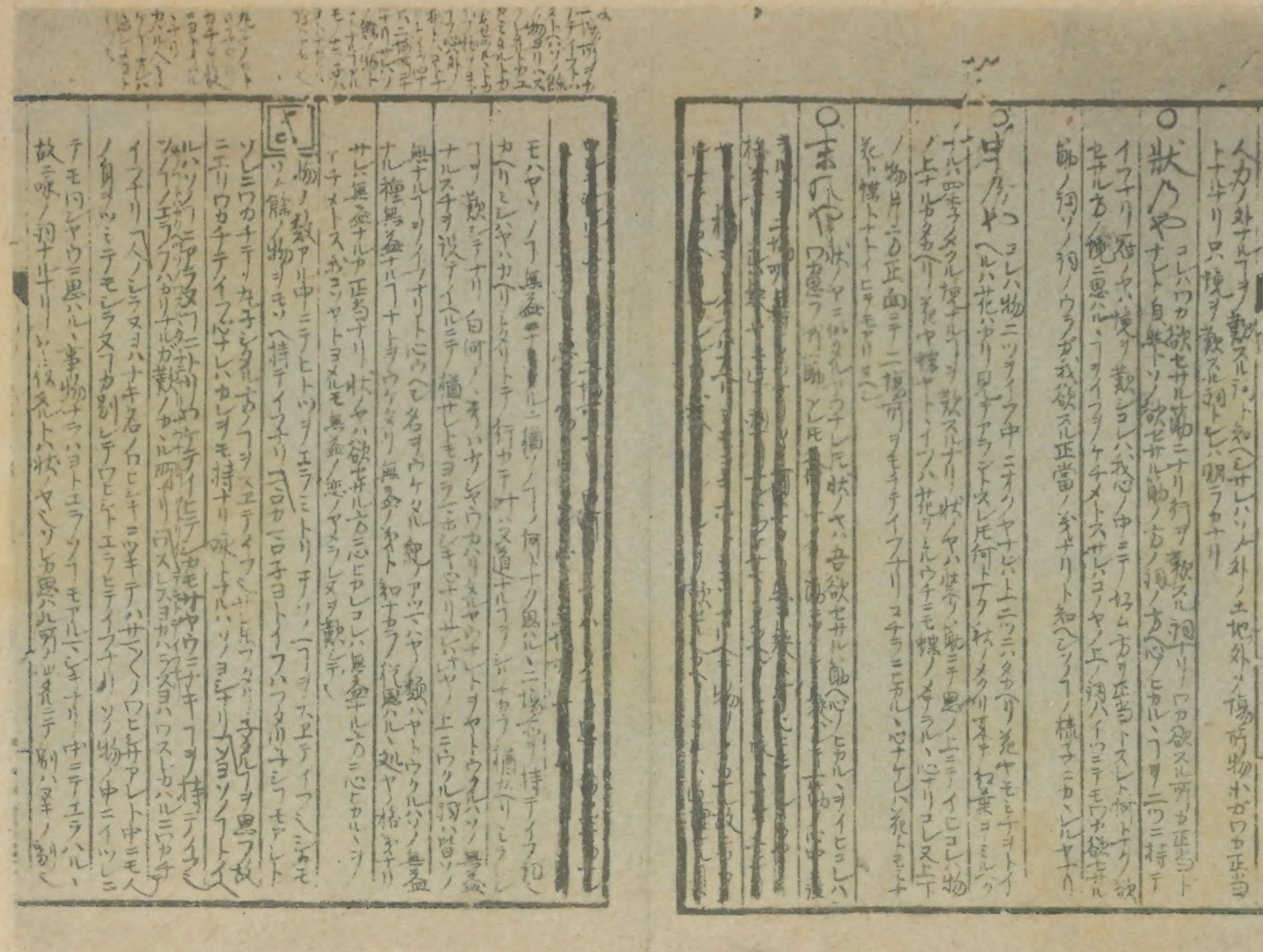
國民精神文化文獻七

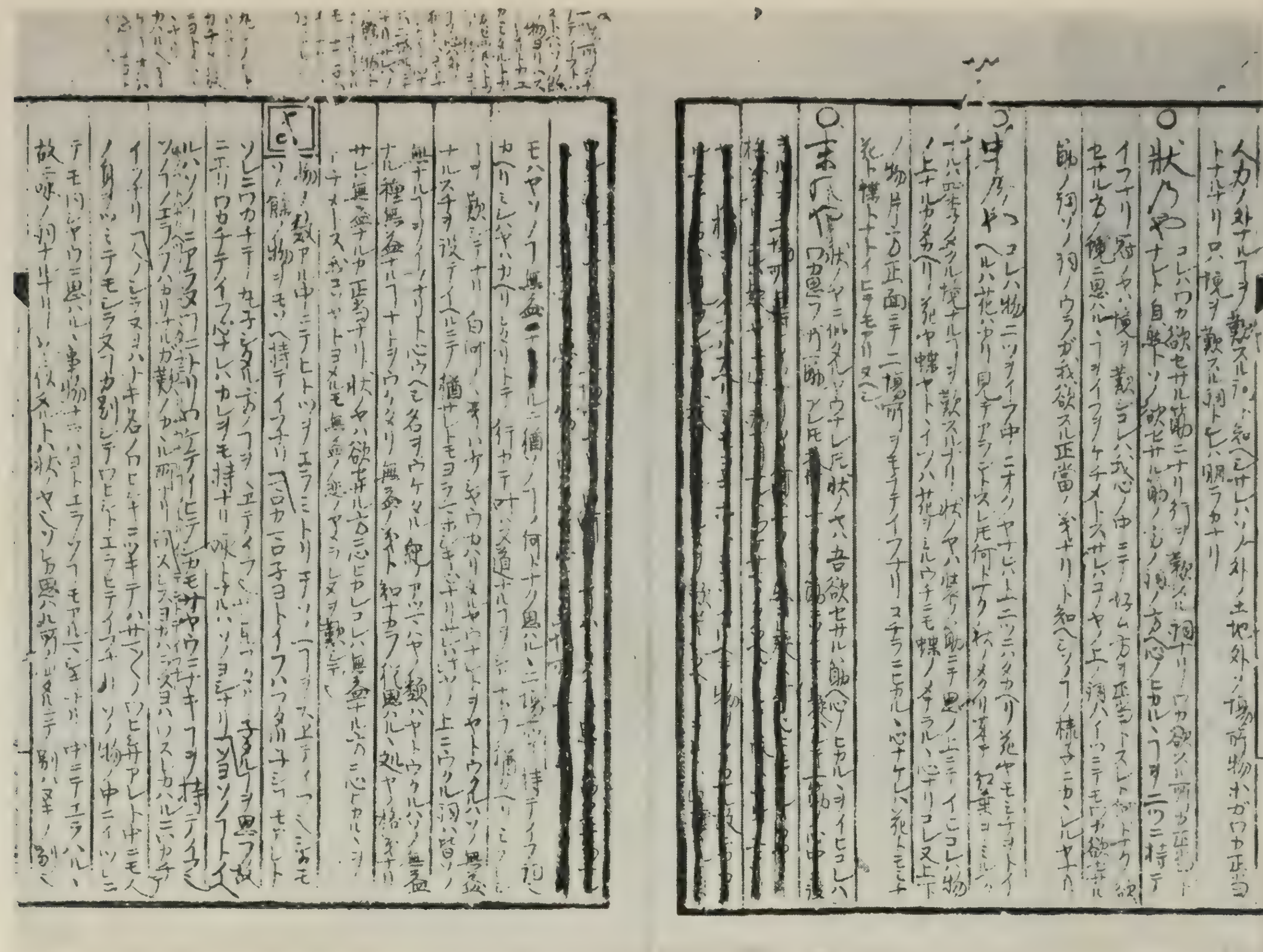
富士谷御杖集

第五巻

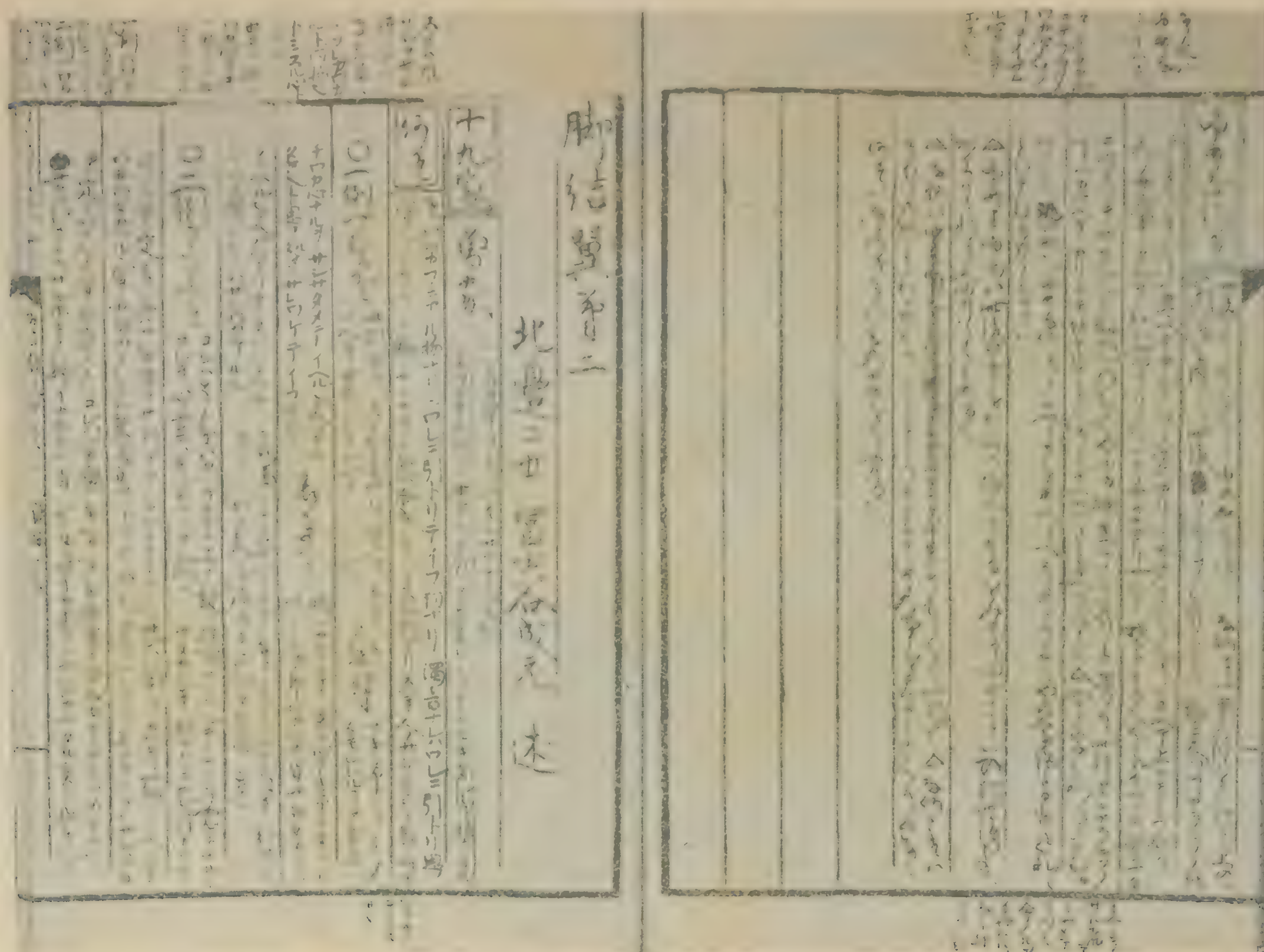
國民精神文化研究所



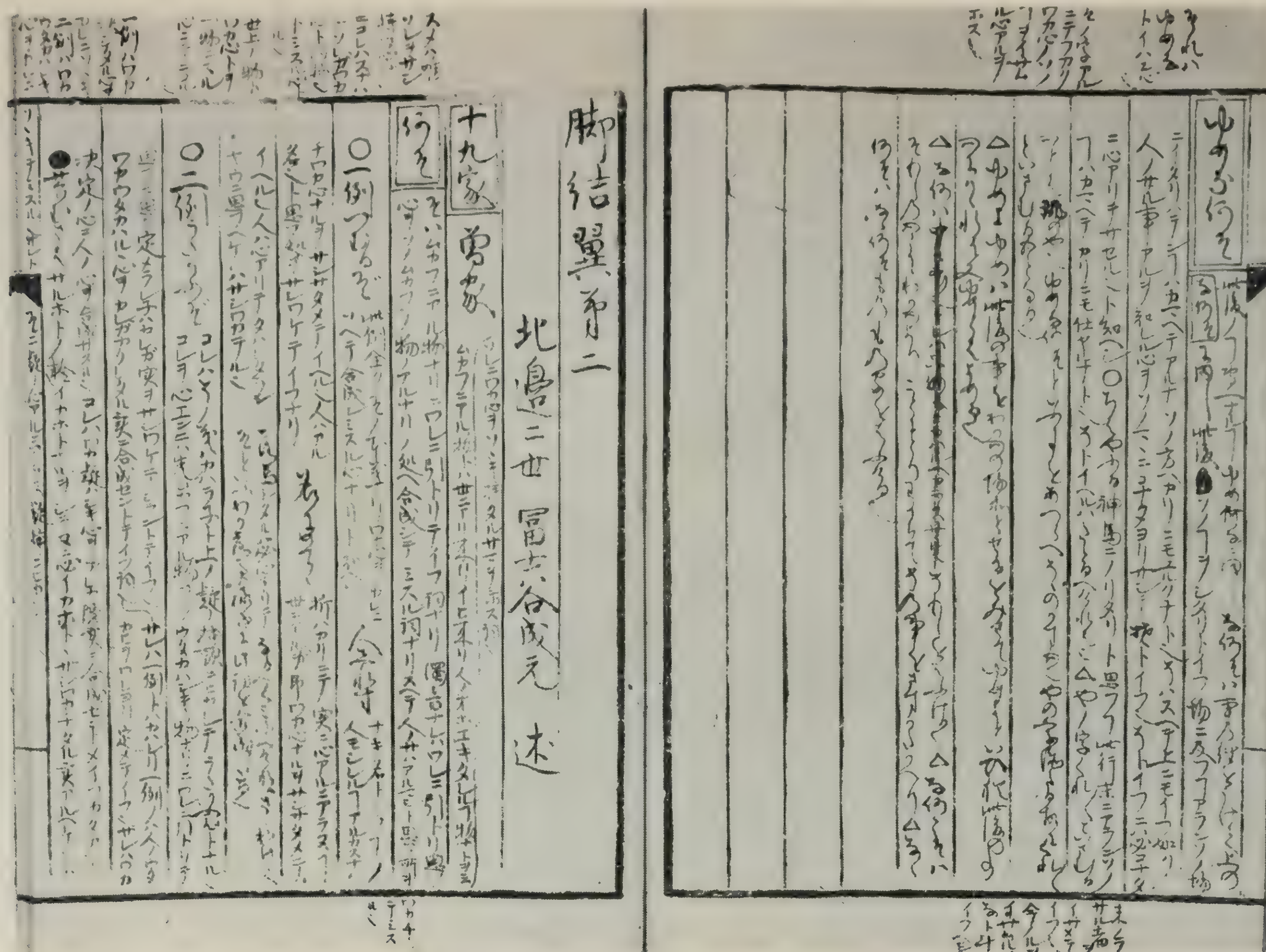
脚結翼草稿（本所所藏）



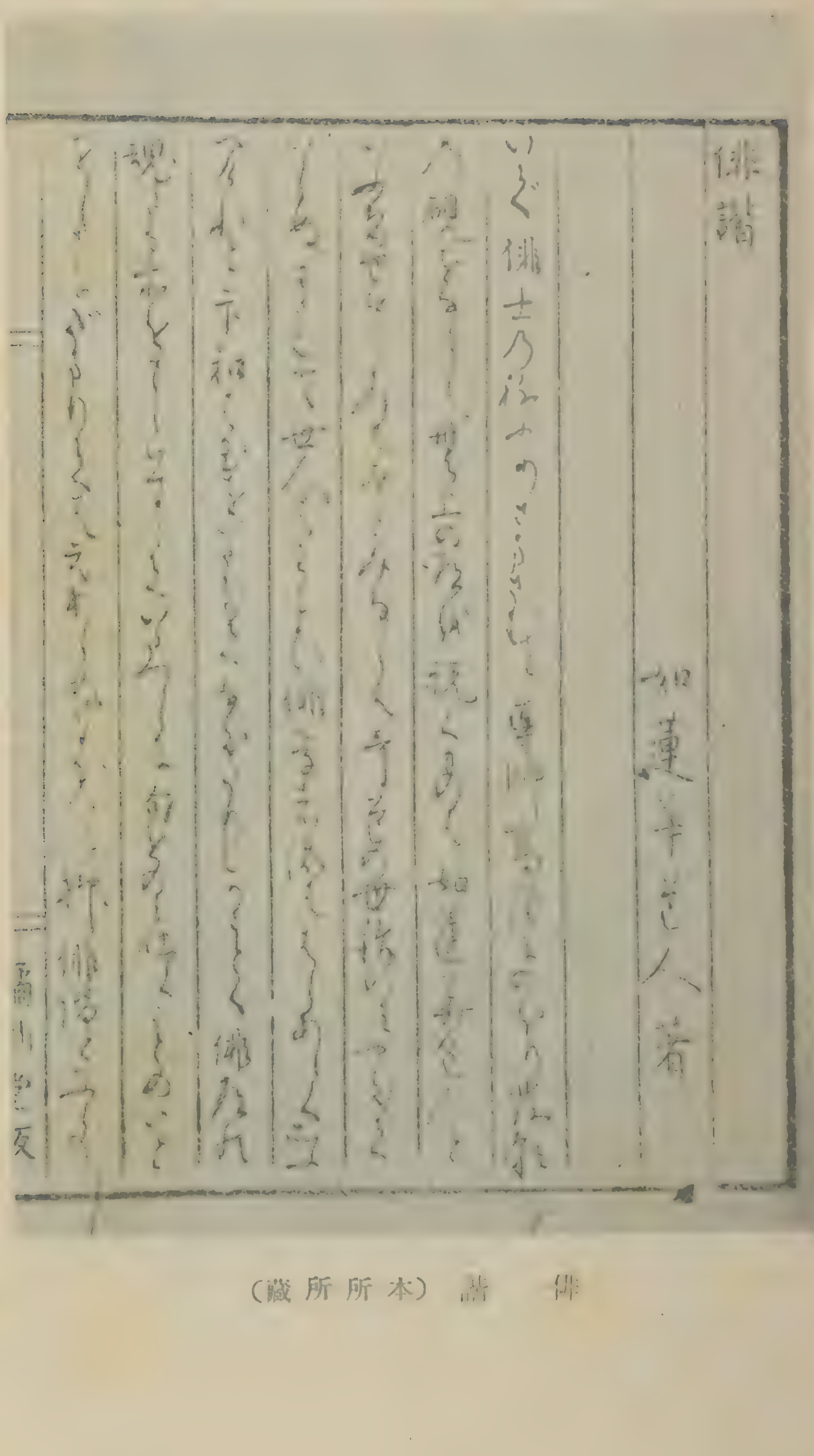
脚結翼草稿（本所所藏）



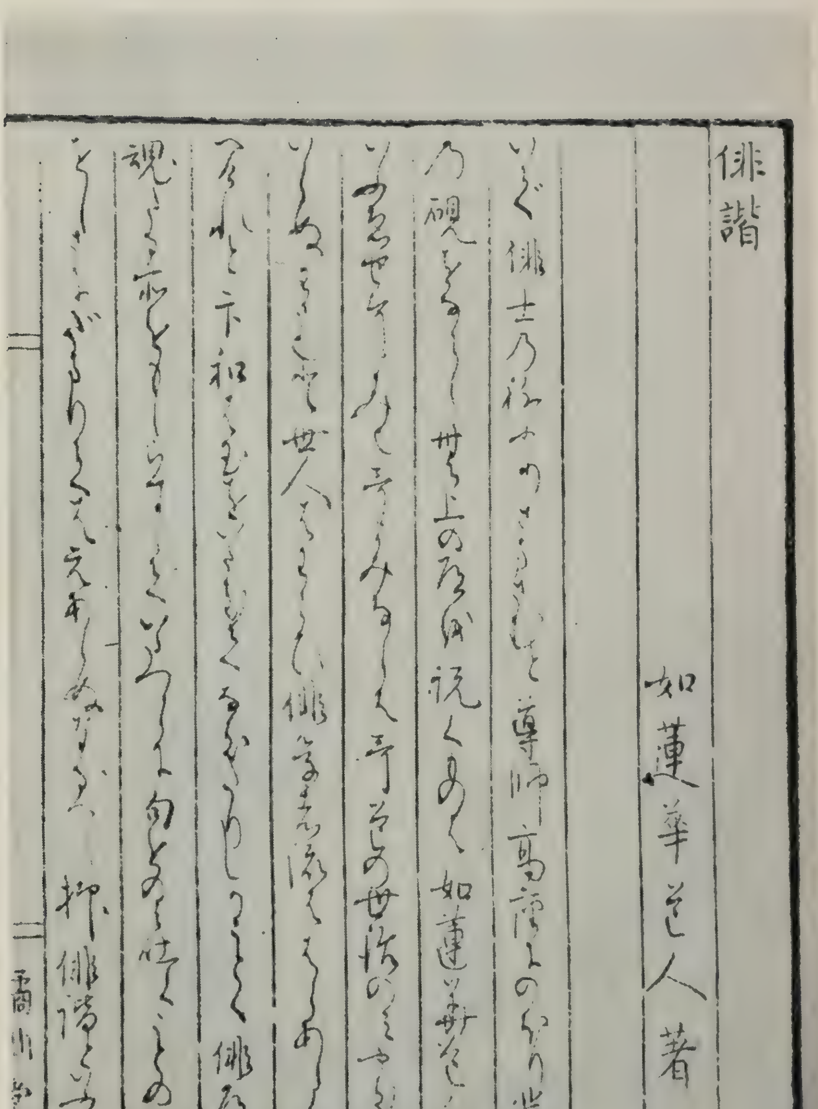
脚結翼草稿（本所所藏）



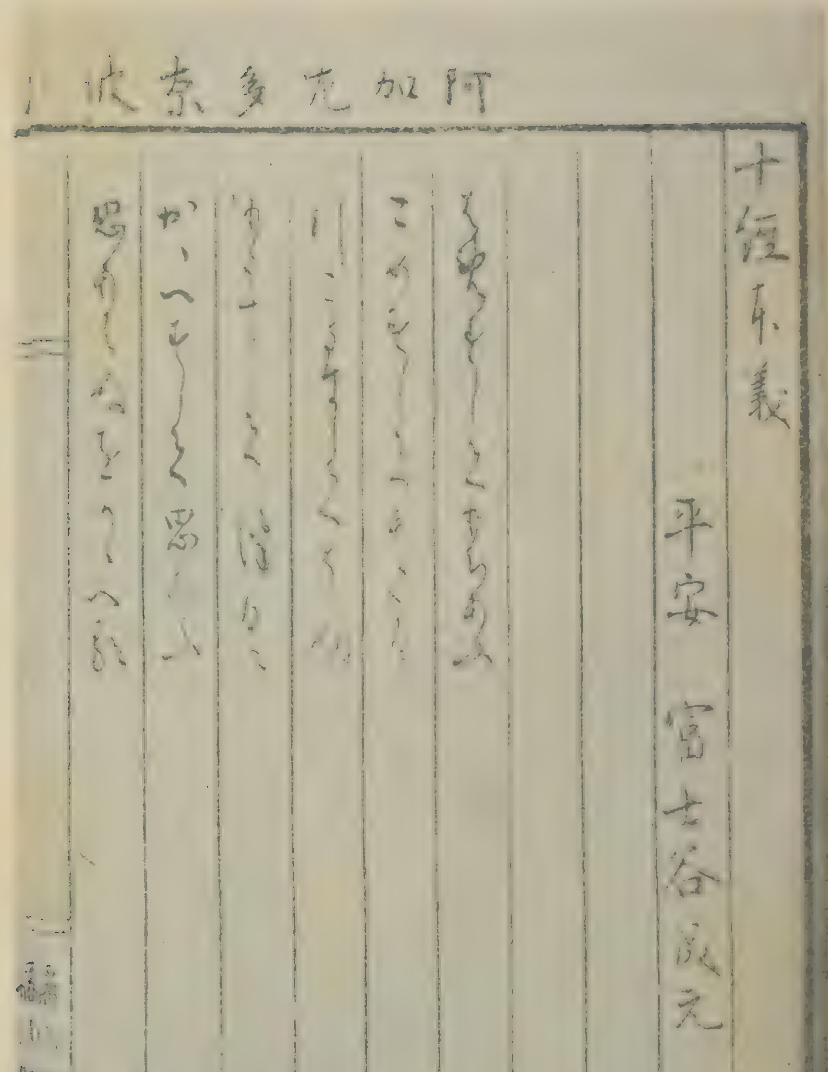
脚結翼草稿（本所所藏）



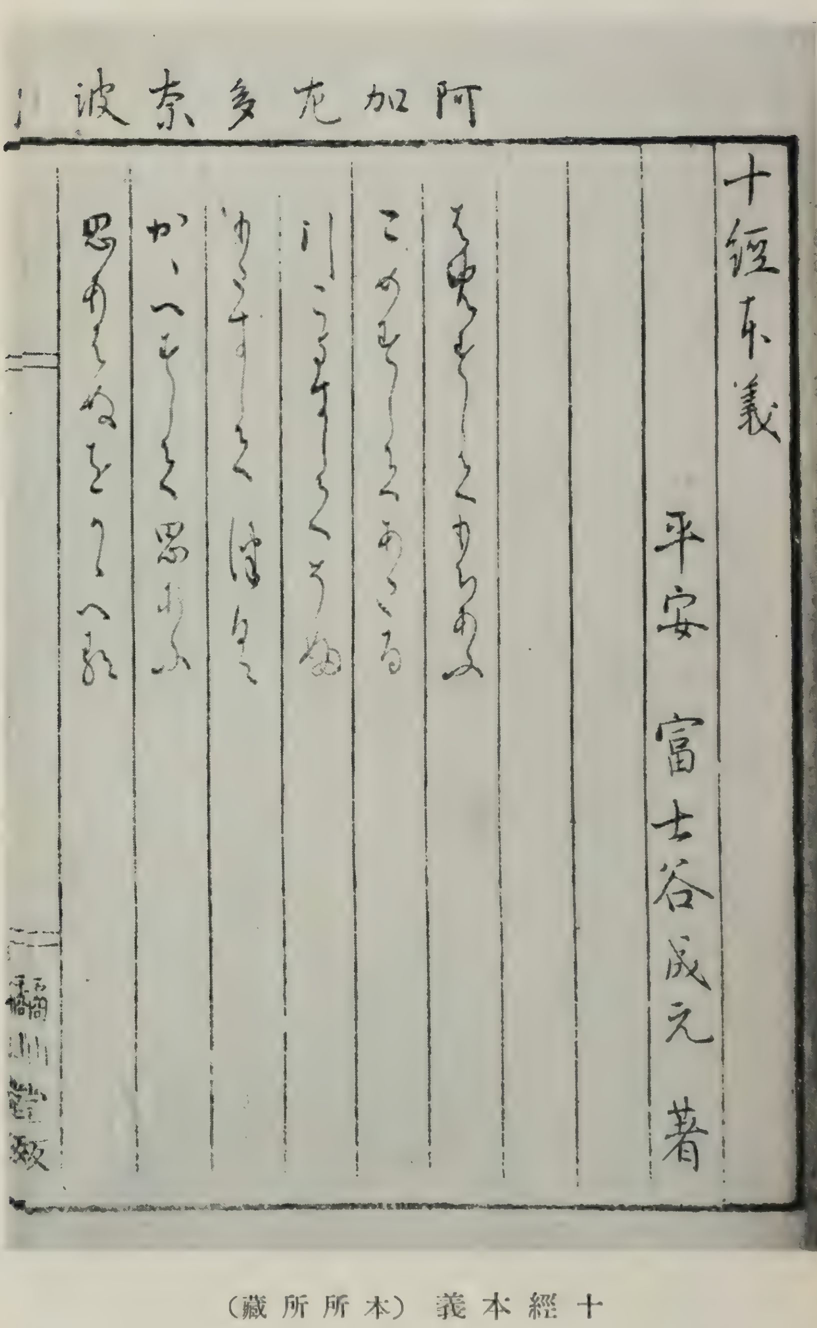
俳 諧 (本所所藏)



俳諧（本所所藏）

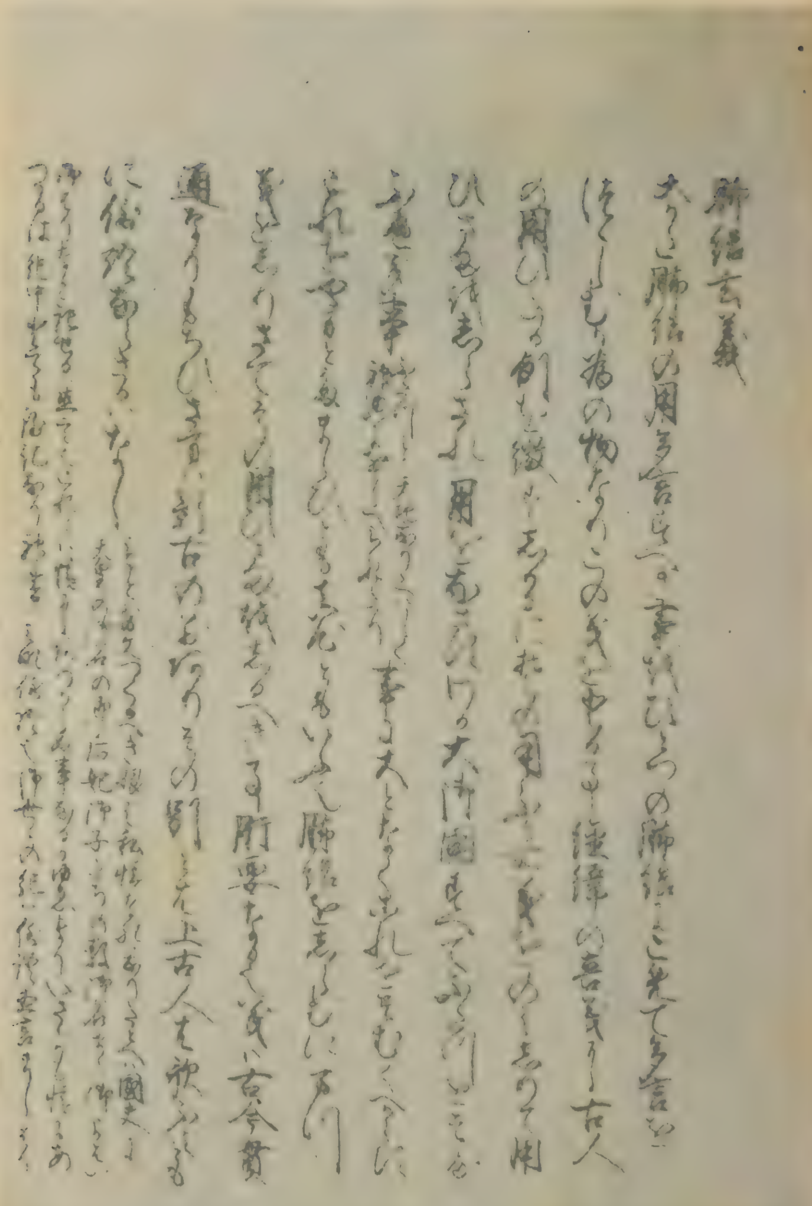


十經本義（本所所藏）


十經本義

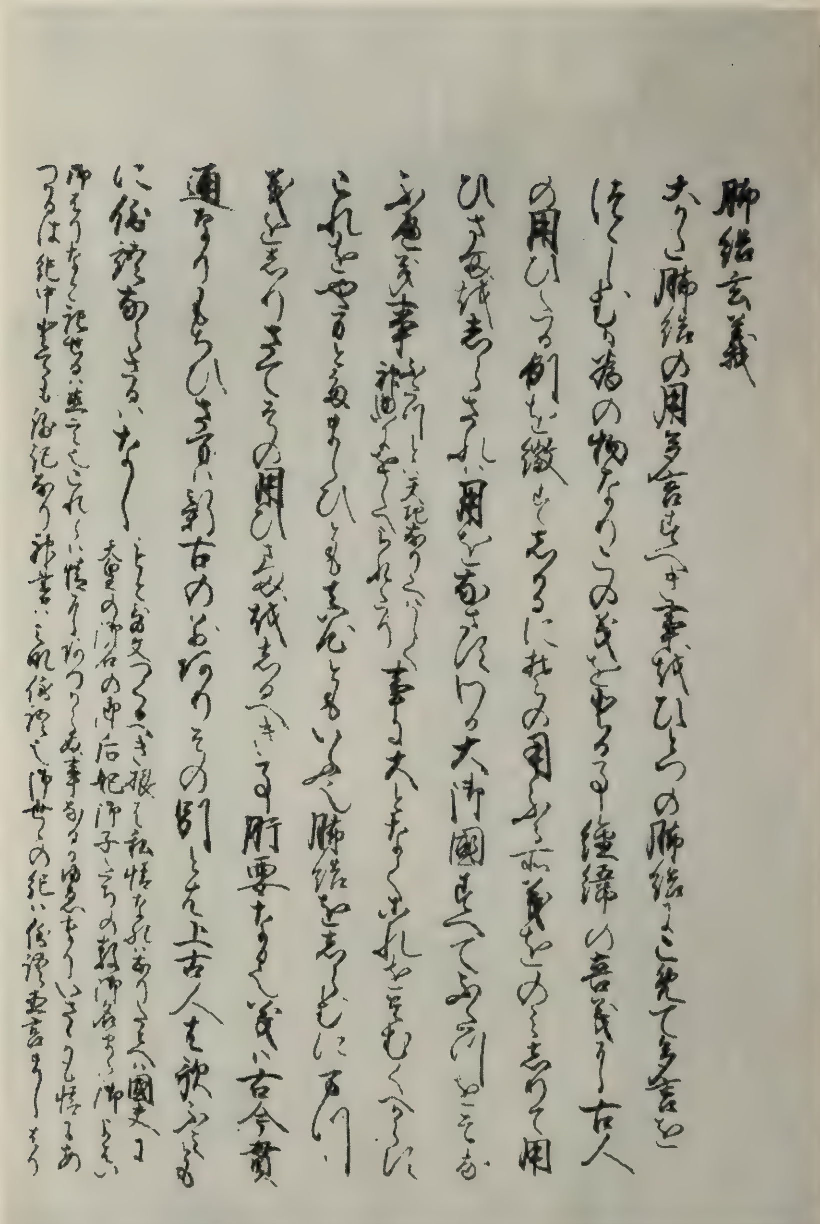
平安 富士谷成元 著

十經本義（本所所藏）



脚結玄義

脚結玄義　(吉田仁平氏所藏)



脚結玄義

脚結玄義（吉田仁平氏所藏）

凡例

一、富士谷御杖集第五巻は御杖の言語に關する著述を蒐集して一巻とする。御杖の言語研究はここに盡きるのではないが、主要なものは此の巻に揭げる如きものである。

一、編輯校合の態度は從來に同じ。但し此の巻に限つて些か異る所は左の如くである。

○詞葉新雅に於ては

(1) 明らかな誤字は傍に（ママ）と注すか訂正したが、中にはその餘地なきためそのまゝにしたものがある。
例へば、億病（三二頁）。

(2) 下段から次行上段につゞく時は、*印をつけて見易からしむる事とした。*印は原本にはないものである。

○脚結翼草稿に於ては

行間傍註の中には、原體裁を示すのが印刷技術上困難なものが存し、これらは大體適當と思はれる所に組込んだ。この部分は「」を以て包んだ。

○俳諧天爾波抄に於ては

(1) 物資節約の意で各巻の初に扉をつけない。

(2) 句讀點は原本では・になつてゐるが、今。にかへた。

一、此の巻は助手三宅清が是を編纂し、印刷の校合は專ら助手青柳秋生・編輯囑託井上京子が擔當する。

一、此集の材料を提供せられた吉田仁平氏、福井三郎氏、龜田次郎氏、富成梓氏及富山圖書館の好意に對し深く感謝する。尙、解題に記述せる御杖の門人岡正寛・五十嵐篤好の子孫の所在については鄕土史家國澤彌吉氏を煩はせて報知を得た事を感謝する。

富士谷御杖集第五卷目次

挿繪目次

富士谷御杖集第五巻解題

三宅清

詞葉新雅　一巻

詞葉新雅は「おほむね」の叙述によれば富士谷成胤が父兄即ち成章・成壽に聞きおける限りを編んで一冊に成したものと言ふが、しかし是は著述の一様式であつて、純然たる成壽（御杖）の自著である。內題の所に「北邊成壽論定」と記し、門人西村惟俊・藤木正名の筆授（授は受の誤であらう）になつてゐるが、刊本の筆致は正しく成壽（御杖）の自筆であつて自著・自筆を刻らせたものである。

此書は里言から雅言を檢索するやうに工夫していろは分に分類せる語彙の書であつて、書名に詞葉新雅と言ふ新は里言、雅は雅言を言ふのであらう。

語彙の採集の模様は「おほむね」に記す所では、萬葉集・古今・後撰・拾遺をもとゝし、後々の集、三十六人集・古今六帖から土佐日記・うつほ・源氏・枕草子・かけろふ・さころも・さらしな等より集め、又古事記・日本紀・古語拾遺・遊仙窟を以て補つたと言ふが、此書に原典を明記してゐるものは次のやうである。

（歌集）　萬葉集・古今集・後撰集・拾遺集・古今六帖・賴政卿集・元輔集・重之集・人丸

（物語）　伊勢物語・眞字伊勢物語・うつほ物語・源氏物語・大和物語・さころも・榮花物語・土佐日記・蜻蛉日記・枕草子・更級日記

（雜）　古事記・日本紀・古語拾遺・和名抄・遊仙窟

收載せる語彙は何を標準に撰んだものか明らかでない。かつ、水玉堂の廣告に詞葉新雅二編と言ふのが見えてゐるからもとより此書の語彙が何等か根柢的の意味を持つと言ふわけのものでもなく、任意的なものの様である。表紙内面にも言ふ如く、此書は和歌和文連歌俳諧などに用ゐる雅言の檢索書であり、此書の語彙は歌文連歌俳諧に用ゐるべき語彙である。しかし、所々に殆んど使用すべからざる語彙も交つて居り、たとへば

シヤウベンツボ　　〈おほつぼ 和名ニ夫虎子

と言ふ如きは凡そ歌文には用ゐやうもないものであらうし、俳諧には又かやうな雅語は用ゐない筈である。此書の語彙採集が任意的なる事はかう言ふ點にも窺はれる。

次に此書の用途が里言より雅言を檢索する事を目的とするものなので、この爲に里言と雅言とを對照なさしてあげてゐるのであるが、この對照は適切な場合も多いが、ややもすれば里言の概念内容と雅言の概念内容とに稍隔りが存し、言はば適切でない場合も多い。卽ちたとへば

インクツナ　　いぶせし うもれいたし　所せし

のやうにインクツナと言ふ一里言の内容が、「いぶせし」「所せし」「うもれいたし」の三の雅語に對照になつてゐ

るが、この三語は各々內容にかなりの差異を持つ語である。而して「所せし」がインクッナの意に用ゐられるやうな場合は極めて限られた場合の事であつて、一般的にインクッナに對照せしめるのは稍穩やかでない。

又たとへば

イッデモハナイ　つねならぬ

の如きは嚴密に言へば對照にならない。イッデモハナイの雅語は「つねならぬ」ではなく「つねにはあらぬ」であり、「つねならぬ」の里言は「イッデモデハナイ」でなければならない。かやうな場合は雅俗の對照の詳しくない場合である。

又たとへば

トシワカナ　〳〵かたなりに

のやうなのは、トシワカナの里言の內容が雅言〳〵かたなりにの內容よりも廣いのであつて、〳〵かたなりには單に年の若いといふ意味のみではなく、年若なので生ひととのつてゐない事が添ふ限定せられた意味である。一般に老人に對して若い者をトシワカナと言ふ場合に〳〵かたなりにと言つてはをかしいのである。〳〵かたなりには多くの場合は女子が年頃の一人前の女になりきらない意味の年若を指して言ふのであつて、此意味の註がなくては對照にならないのである。

又たとへば

カシコブル　　〽さかしらに　〽さかしがる正

の如きは、「さかしらに」と言ふのは副詞的用法の形であつて〽さかしがると同じつらに置かるべきではなく、又カシコブル（動詞）にも對照にならない。かやうな場合は、語法に就いての考察が疎である。

又たとへば

カタヲヌグ　　〽ひきほころばす　片袖ヲヌグナリ

の如きは、この雅言はこの雅言の行はれた平安朝の衣裳の上に於てふさはしい詞なのであつて、近世の町奴などが肩ぬぎ風俗にはおよそ似合はしくない。語彙は環境を異にせる具體的感情を離脱し、概念的表象に於ける融通のみでは正確に使へないものなのである。具體的言語と意義表象との關係についての考察がこの場合ないのであつて、雅言の使用はこの方面の考察がなくては不可能である。

又たとへば

フジユウノナイ　　〽やんごとなき　貴人ヲ云

の如きは、〽やんごとなきに元來不自由のないと言ふ意味はない。この對照は、やんごとなき卽ち身分の貴い、身分の貴い卽ち不自由のないと言ふ三段の飛躍をなしてゐる。不自由でも、貴人には「やんことなき」と言へるのであつて、フジユウノナイと言ふ里言の對照として〽やんごとなきをつらねるのは穩やかでない。

又たとへば、

ソンケウスル　〳けいめいする
ノチヅレノコ 後妻子　〳むかひばらの子
ガヲ、ラス　〳くちあかする

の如きは誤解とすべきであらう。

以上の如き點は此書の實際使用に於て缺點とすべき所である。

此書のやうな里言から雅言を檢索しようと言ふ目的のためには、雅言里言の對照に非常に嚴密な注意が必要である。然らざれば用をなさない。里言のもつ意義・色彩・陰影が對照せられた雅言の意義・色彩・陰影に正しく一致せざる場合は雅言の正しい用法は得られない。そこに誤用牽強が起る。たとへば、

カタクロシイ　〳くすしき　まめなる
　　　　　　　〳じほうなる

の如き、〳くすしきの語にカタクロシイ意などは固よりないのである。「くすしは「奇しであつてカタクロシイではない。然るに「くすしをこの里言に對照させたのは如何なる根據に立つか明らかでない。思ふに源氏物語の女性論に、吉祥天女を思ひかけたらば「法氣づきくすしからむ」と言ふ、この場合の「くすし」をカタクロシイとでも里言にうつし、この譯語を普遍化させたものかと考へる。此書には源氏物語の語彙がかなり入つてゐるやうである。「くすし」の語に元來なかつた意味をかやうに附會的に與へ、普遍化してゐる事は言語の研究としては不穩なよくない事である。

たとへば緣側で畫食中に無斷で無賴の徒が闖入して部屋內の箱に手をさしのべ云々の怪しからぬ行動を行ふのを

眺めたとする。しかしこの故に「緣側」と言ふ語と「無賴の徒」と言ふ語とには何の必然も起つて來ない。「緣側」と「晝食」とにも何の必然もない。その無賴の徒の行動は一の場合にすぎない。然るにここから「緣側」に對して「晝食」「無賴の徒」の語を普遍的に通じる意味のもののやうに揭げるが如き論理のない飛躍が此書の雅俗對照には交るのである。

此書に於て著者御杖は雅言を里言に譯す譯語の典型を發表してゐるのであるが、里言と雅言との對照を普遍化して示さうとする所に嚴密な注意が足りなく、理論的にもかやうな牽强が存し、雅言に元來なかつた意味を附會的に普遍化する弊害を注意すべきである。

里言雅言の對照と言ふ事は富士谷派の言語研究の一の長所である。成章のあゆひ抄かざし抄に里言を配してゐる事は周知の如く、又御杖も此書の外種々の著述に於て里言の譯を行つてゐる。即ち「和歌いれひも」「百人一首燈」をはじめ、「古今集講述」、「後撰和歌集 第十四」などが存し、又「うたふくろ」の詞四具の條なども里言の譯を揭げてゐる。「古今集講述」(文化二年)には

凡ふる言に里言をあてゝ心えさする事は(中略)成章をおやとして近比は世にもうちまねぶ人も聞ゆれ

と述べて居り、此の「うちまねぶ人」とは古今集鄙言葉(尾崎雅嘉)や古今集遠鏡などを指して言ふのであらうが、これらに對して成章は遙か年代的にも先んじ、譯としても甚だ高度に完成せる成果を示してゐるのである。御杖が幼よりあゆひ抄を導として歌を學んだ所にこの「詞葉新雅」のうまれる機運が考へられるのであるが、此書の刊行

は寛政四年御杖の廿五歳の頃であり、随つて猶部分的に不備は免れなかつたのである。此書の里言譯は到底、あゆひ抄などの完成せる嚴密な譯の比ではなく、あゆひ抄に

いにしへの花かめは今の花いれそといはんに、花つゝ花桶は花いれにして花かめにあらす、これは古は一すちにいまはさま／＼なるかたかへり、又いにしへのふみは今の狀なりといはむに、ふみは文書をも消息をもさすへけれは、古はひろく今は一すちなるいきほひことなり、

と言ふ如き部面への注意が足りないやうに思はれる。

要するに此書は雅言を手ぎはよく里言で示す富士谷流の衒學的著述とも言ふべきであつて、初學者の實用よりはむしろ專門の歌よみを相手としてゐる著述とも言へるのである。初學者は此書に熟して雅言に興味を持つ機緣とはなり得ようが、此書の里言雅言の對照が上述の如き理論的缺陷を持つが故に、歌をよむに際して、里言から雅言を檢索する事が必要とせられる程度の雅言の素養しか持たない者には、此書のやうな對照では決して雅言を使ひこなせるものではないと思ふ。此書の表紙內面に

此書は和歌和文連哥俳諧共に趣向はたちながら詞心のまゝにいひかねたる時その俗語の頭字につきて部分の下を求むへし

と言ふ効能書のやうな用は實際にはなさないであらう。

然らば此書は價値のないものであらうかと言ふに、以上のやうな不備や又實用になり難い點は上述の如くである

が、しかし元來、富士谷流が里言の譯を施す重要な意味は雅言・脚結の意義用法を詳しく理解させんが爲である。

上世の哥とみえてはやく心えかたきやうなれと、よみつめの［も］の字眼目なる事、里言をもておもひえつへし、（あゆひ抄一ノ十オ）

さりとて里言もあてえぬ詞をはいかゝはせむ、あつへきをあてゝ心うれはこそ、言外の心もおのつからたち出てはみゆれ（同一ノ十オ）

もとより［かは］と［か］はなはたちかきあゆひなること里言にてもしるへし、（同一ノ十四ウ）

と言ふ如くに、里言の譯を配してゐるのは雅言の意義用法を詳しく知らしめる方法であつて、かくの如く雅言の意義用法を詳しく知らしめる意味に於いてあゆひ抄は歌をよむ指導をなしうるのである。あゆひ抄の著述の主意は此點に存してゐるのであつて、詞葉新雅はこの主意の里言譯を、檢索と言ふ方向へ應用せるものである。その應用は以上のやうな缺陷の故に遺憾ながら目的を達してゐないが、里言譯を雅言に施す事によつて雅言の意義用法を詳しく知らしめると言ふ點では、固より完成せるものではないが分相應にかたりの價値は許さなければならない。

尙、此書に掲げた里言には今日あまり用ゐないやうなものも多い。その里言の性質も純粹に其頃の京都の里言のみではないかも知れない。

又音聲の上で「沁む」を

シユミコム

ネコリジユンデ
カラダニシユミコム
コ、ロニシユミコムヿ

「滿足」を

マンロクニナイ
マンロクナ
マンロクニイカヌ

と言ふ如きは其頃の俗語の發音研究の一材料になるであらう。

脚結抄翼　二卷

表紙の外題には「脚結翼草稿」とあるが、內題によつて「脚結抄翼」と呼ぶ。「脚結抄翼」とは脚結抄の補翼と言ふ意味であらう。本集の底本に用ゐたものは本所所藏の御杖自筆の稿本であつて、脚結抄の卷の一及卷の二の初數條の稿を合綴して一册に綴ぢたものである。

脚結抄翼の成立に就いては未だ詳細は明らかでない。「國語學書目解題」に

あゆひ　せう　よく　脚結抄翼卷數未定

富士谷成壽（御杖）撰　寫本

この書は、脚結抄の注解にして、俗語にて脚結の意味を說きあかし、古歌などを引きて其例を示せり、按ずるに、此書のこと、曾て世間にきこえず、其家に傳へたるもの、撰者自筆の稿本二冊存す、なほ多くありしものなるべきか、

と述べてゐる稿本二冊と言ふのが、ここに複刻の底本に用ゐるものと同じものか否かは不明である。卽ち、その內容の解說が本集の底本に用ゐるものと必ずしも合致しないのである。しかし、「國語學書目解題」に御杖自筆の脚結抄翼二冊と言ふものは此集に收載する稿本をよそにしてはその現所在明らかでなく、かつ從來脚結抄翼についての學界の知識は上揭の「國語學書目解題」に說く所を殆ど出てゐないのである。

まづここに刻する稿本について敍述するに、この稿本には脚結抄翼第一の初に

北邊二世富士谷成壽　述

とあり、第二の初に

北邊二世富士谷成元　述

と記してゐる。御杖が成壽から成元と名のりをかへたのは寬政六年の頃であつて、御杖自筆の歌集「寬政甲寅詠藻」の表紙に「憚世子之諱改成元」と記してゐる如く、御杖の仕へた君侯の嗣鑑壽の字を諱んで成元にかへたのであるが、脚結抄翼稿本は恰もこの改名の頃に成つた事が知られるのである。この稿本の外、種々の稿が書かれたものか

又はこの不完全な稿のままで打切られたものかは明らかでない。

此稿は脚結抄の一の巻及び二の巻の初少々を講釋補翼せるものであつて、條によつて精粗の差はあるが、まづその條の脚結の意味・用法を概說し、次に脚結の用例として脚結抄に揭げた證歌について具體的に脚結の意味を解說してゐるのである。この稿の中心はこの例歌に就いて具體的に用法を說く部分に存し、脚結抄證歌注釋とでも言ふ事が出來る程のものである。この例歌の一々について脚結の意味を說く所に自ら一の類型が生じてくるのが注意せらるべく、その類型が該脚結の一般的用法の概說に歸着するのであるが、かくて達し得た一般的用法から更に演繹して例歌を說いてゐる場合も多い。

御杖の學風から言つてかやうな脚結の用法の詳注は度々の推敲を經たものであらう事が想像せられるが、此稿本も猶決定せる注と言ふものではなく、恐らく御杖の脚結研究の一過程を示すに過ぎないものであらう。しかし、その微細な語の陰影に沈潛して思索を凝らす御杖の特質はよく表現してゐると思ふ。

此稿は純然たる脚結の研究であるが、御杖の歌學の形成上に於ける此書の地位はその方面に於ける價値とは別に又極めて注意すべき意義を持つのである。御杖の歌論は既にも述べた如く、脚結抄について歌をよむ事と、中世の歌學とを礎地として始るのであるが、言語の表裏境が說かれる據は脚結の働にかかつてゐる。この脚結の働と言ふ事が御杖の特異な歌論の原據であるが、この脚結抄翼はかの歌學說の成立以前に於けるその脚結研究の一面を示すものなのである。此稿の初に

不恨之恨　不禁之禁　不誂之誂　不數之數　不歡之歡

とか、

理中之理　理外之理

詞　義　理　誠

時

境　一物之境　二物之境

有無之徼

の如く、歌論的思索の據になるやうな語彙を記してゐるのは卽ち、から言ふ脚結の研究の内から彼の特異な歌論が發生してくる經緯を示すものである。

此稿は言はば御杖の最初の言語研究の成果であるが、此稿の內に旣に「アユヒ抄書入」「古言あゆひ」などに言及して居り、又聲妙についても述べてゐる。卽ち、「二例さゝぬ中のや」と言ふ條に「さゝぬ」は「さす」の誤とし

誤ナルヘキ〻上ニイフアユヒ抄書入ニクハシ

と述べてゐるのは、あゆひ抄書入に

壽按コノサスサ、ヌノ〻下ノ何やは何ノ下ニイヘルカマコトニシテコ、ハサスサ、ヌノ名タカヘリトミユイカニトナレハ下ニ疑ノカサシアルハサ、ヌナリ下ニコトハアルハかくならむトサス心アレハカクイフナリ

と言ふ如き、彼の此稿以前に於ける脚結研究の一面を示すものである。

「古哥あゆひ」に就いては「もがも」の條に

古哥アユヒニクハシ

と述べてゐるが、この「古歌あゆひ」と言ふものは現在未知の書であつて明らかでない。「古歌脚結」といふ名目は既に「脚結抄」の內にも見え「俳諧天尓波抄」の內にも御杖の著述のやうに記してゐる。而して「古歌脚結」と言ふ標題の書も現存してゐるが、現存のものは御杖の門流の編む所であつて、御杖の自ら編成せるものではない。しかし既に此稿を著す頃には御杖は古歌脚結についてもかなりの研究をしてゐる事が想像せられるのである。

「聲妙」に就いてはこの流に「五十音靈名幷ニ本義」と言ふ著述も現存してゐるが、言語殊にあゆひの働がこの聲妙に基くと考へてゐる。聲妙は成章の既に述べてゐる所であるが、御杖はあゆひが靈妙な働をなす點を聲妙に結合して、脚結の働變化の妙を讃歎して聖なるものと稱してゐるのである。

脚結抄翼は脚結抄の全部に亙らず、一部分のみの不完全な稿本しかのこつてゐない、而してその敍述も思索の奔放にすぎて客觀性の缺如してゐるものも多いので、必ずしも學術的意義は高くないが、御杖の學の展開の考察には極めて重要な意義を持つと考へる。

俳　諧

全備しない零篇であつて、本所所藏御杖自筆の稿本の內の一部分である。この稿本は表紙に「開國論　全」と記し、その內容は「開國論」（本集第二卷所收）「俳諧」及び「經緯本義・各義」（本卷所收、別項）の三部から成る。

「俳諧」は內容から言ふと、俳諧の天尒波を注しようと言ふ意圖のもとに書かれたものゝやうであるが、完備してゐない。初に總論のやうな部分があつて俳諧も歌の道と同じく「たゞ／＼言語を俳にかへて言行をつゝしむ」道であるとし、芭蕉の言などを掲げて俳にも道の存する事を說かうとしてゐる。この俳に於ける魂を說く立場から「俳士のねふり」をさまさうと言ふのが此著の主意であつて、俳の魂は歌の道に於けるが如く言を俳にかへてつゝしむ所に存し、この方法が詞の道なのである。俳諧の天尒波は卽ち詞の道の稽古の主題なのであつて、此著はこの意味に於て天尒波を解說しようとするものなのである。

この總論の奥に「天尒波目錄」と言ふ標目を掲げてゐて、俳諧の天尒波の品目をあゆひ抄の分類を標準として示す豫定のやうにみえるのであるが、稿が中絕せられてゐて備つてゐない。

次に「あら野」と標目を掲げ、「あら野」の初約十句についてその天尒波の解說を行つてゐる。このやうにして「あら野」の句の一々について天尒波を解いて行くのが此著の最初の形態のやうであるが、初十句ばかりで中絕になつてゐる。

次に「手尓於葉の事」と記して、「梧一葉」の「手尓於葉の事」の條の初二條を批評解說してゐる。

次に「あら野」の卷初から

蝶鳥をまてるけしきや桃の枝

まで百七十一句を記し上欄に句毎に天尓波を標記してゐる。

この「俳諧」は以上の五部から成つてゐる。「俳諧」と言ふ內題は初の總論の標題であるが、總論は卽ち俳諧の詞の道の稽古として天尓波を說からとする序說なのであるから、以上の五部に亙る標題としてもよからうと思ふ。

此稿の成立せる年時については明らかでない。內題の所に如蓮華道人著と記して居り、この如蓮華道人とは卽ち御杖の文名と考へられるが、御杖がかかる號を用ゐてゐる場合が他に存しないので、此點から年時を推す事は難いが、かやうな號を用ゐかつ總論の內に、

いで俳士のねふりさまさむと導師高座にのぼり發願の硯をならし無上の道を說くものは如蓮華道人といふゑせ哥よみ之

といふ如き、御杖が彼の特異な歌論を築き上げる前の內典や外典を涉獵せる頃の匂を持つ語句が存し、內容としても修行稽古を强調する思考は「稿本歌道非唯抄」などに近い。而して此稿が「俳士のねふりさまさむ」と言ふ所は、「歌道解醒」(文化二年)の解醒に通じるのであつて、年代の近い事を示すであらう。更にこの「俳諧」に於て天尓波の用法を說からと言ふ意圖が彼の「俳諧天尓波抄」になるとすれば、此稿は天尓波抄の草稿ではないが、天尓波

抄はかう言ふ研究を經て至る所なのであつて、此稿は天尓波抄の成立に先立つものとすべきである。天尓波抄は此稿の第三部のやうな組織の天尓波研究を脚結抄の組織に組換へて演繹的に記述せるもので、この轉換の點にも御杖の學風が反映してゐる。

かくて此稿は文化三年の天尓波抄、文化二年の歌道解醒の成立以前に成つた事が知られると思ふが、此稿の前に綴ぢてゐる「開國論」には中臣成元謹錄とあり、奧の「十經本義」には富士谷成元著とある。而して此稿も通じて筆致も同じであるから、少くとも成元時代のものであつて、成壽時代には溯り得ない事は明らかである。而して總論の內容が稿本歌道非唯抄の思想に近似し、殊に言語と俳諧との差別を注意して「言語を俳にかへて言行をつゝしむこれを俳の道とはいふ」と言ふ所には彼の言靈歌論がかなりに成熟してゐる事を示すのである。しかし此稿に於ける言靈と言ふ語をみるに

しかるに天尓波といふ物はもと哥道の持前の物にもあらすもと天地の言靈にして不思議の妙用をたすものなり

と述べてゐて、言靈の思考內容は脚結抄に所謂「あめつちのことたま」から出てゐないのであつて、御杖の特異な言靈の概念は未だ明示してゐないやうである。かやうな點から考へて、此稿は彼の言靈歌論がかなり成熟してゐるが未だ完備するに至らない頃、稿本歌道非唯抄に近い頃の著述と考ふべきであつて、年時は明かでないが、寛政末年から享和年中の成立であらうかと考へる。

十經本義・各義・經緯各義・經緯本義・經緯各義・十經本義・五緯本義・五十音各義・經緯各義

外題に「開國論」と記す一册の御杖自筆の稿本の一部分であつて、「開國論」及び「俳諧」と合綴になつてゐる。

奥の「十經本義」の條に

平安　富士谷成元　著

と記してゐるから、成元時代に成るものであらう。

經緯の說は言はば一種の言語哲學であつて、五十音圖についてその各の經（行）緯（段）に一定の意味が存すると言ふ考である。富士谷流では色々の經緯の說をなしてゐて、多種多樣の解說がなされてゐる。その主なものは別項所載の「經緯略辨」の他、あゆひ抄經緯の書入、「經緯奥呂」などが存し、各〻詳略ひとしくないが、その主意は五十音圖の音韻に存する意味を原理的に解明しようとするものである。廣い意味に於て音義說の一派と言ふ事が出來る。

この御杖自筆の零篇にも數度の推敲を重ねてゐるが、而も猶、解明を得ない部分が存し、かかる原理的說明の容易でない事を示してゐる。ここに記す所の御杖の解の如きも、これを學術的のものとはし難く、たとへば

阿　はめすしてもちあふ

麻　つかぬをもつ

の如き場合にしても、アイウエオの五音に「はめすしてもちあふ」意がどういふ風にして存在してゐるのか、マミムメモの五音に「つかぬをもつ」意が果して存するか、所詮御杖の微妙な思索の神秘的な言表と言ふにすぎないものが多い。而してかう言ふ經の原理的説明に對して緯の説明は一層不備が多いやうで、私・公・過・現・來のやうな概念の對立を以てこの緯の差異を説かうとしてゐるやうであるが、猶宇緯については解を得ないもののやうである。この宇緯の解を闕いてゐるのは、御杖の音韻學に於ては「う」音を根源的なものと考へるのでその解説には最も愼重を期せるものであらう。

尙、「經緯略辨」(別項)及びこの解題の奥に掲載せる經緯奥旨・經緯圖本義其他を參照せらるるがよからうと思ふ。

俳諧天尓波抄　六卷

刊本六册。文化三年の皆川愿の序を添へ、奥に

文化四年丁卯仲冬

の刊記が附いてゐる。

初めに門人浦井氏識の凡例があり、此書著述の主意・來歷の開題を行つてゐる。その叙述によれば、

けに連哥は、この脚結抄にておのつからその用たりぬべし、俳諧は、もとより俗語にして、ふるきてには、俗

のてにはを、交へ用ふるものなれば、俳諧によりててにはの義をさとさば、俳諧者流の人の眼をひらかんのみ

ならず、この脚結抄をみむにもたよりあるべしと、

言ふ御杖の言について御杖の心のおもむきたりしに乘じ、卽ちあゆひ抄の部立例立によつて七部集中の句を配しその辨を記せるものであると言ふ。この開題の叙述では、門人の編述の體裁になつてゐるが、內容は純然たる御杖の自著であり、注の內にも「これ成元がおもひえたる事なれば」などと記してゐるのである。かつ刊本の筆致も御杖自筆のものを彫らせたものと考へられる。

此著の成立の年代は門人浦井氏の識語に文化三年丙寅夏日と記し、皆川愿の文化三年丙寅孟冬既望の序にも

書成乞予言共事因爲題

と言ふから、多分其頃卽ち文化三年秋頃の著述であらう。卷四の「かほ」の條に

哥よみもたゞこゝをおどろけとて、數年口さがなくいひくらせども、千歳餘の醒とけがたし、今此書によりて、俳諧者流の人ども、ねふりをさましたまへかし、

と言ふ解醒の思想は文化二年七月の「歌道解醒」に通じるものであつて、年代の接近してゐる事を思はせる。

此書は俳諧七部集の句に照しててにはの用法を說述せるものであるが、その根柢は俳諧も連歌も歌も主意に於ては同じものと考へる思想であつて、俳諧も亦「すべて詠哥の本意に、毫毛もたがふ事なきものゝ」と言ふ如く、歌に言魂を言へば俳にも入魂と言ふ事が必要なのである。而してことに「俳諧は少字なれば、ことに言靈をむねとせ

ざれば、なにをかいはれん」(四の巻) と言ふ。この俳に魂を入れる事を司るのが、即ちてにはの働である。

ことに天尓波は、この魂の用をつかさどる物なれば、(凡例)

發句などは少字なれば、いよ〱これを弁へずしては、魂を入るゝ事かなふべからず、(三の巻)

俳諧天尓波抄はこの主意のもとに、脚結抄の部立分類によつて俳諧を用例に掲げててにはを解いてゐるのである。上述の如く「言靈をむねとせんには、歌も俳諧もこと道にはあらざるべきなり」(六の巻)と考へられるが、しかし、てにはの用法は俳に於ては必ずしも歌の場合と一致しない。

又哥にては、らんかてかとかかとなど、さま〱に他の天尓波を繼てもつかふ、俳諧にてはその變化すくなし(二の巻)

かつ脚結抄に立てた脚結には俳諧には用ゐないものも多い。二の巻願屬に「てしがな」「も何しが」「ね」を掲げた奥に、以上皆俳諧には用ゐてゐないが、歌に用ゐるから此書にも収載せる由を言ひ、

たとひ例なくとも、つかひて句意をたすくべきこ

と述べてゐるやうに、集中に用例のないてにはをも掲げるのである。

(何し何ば)　これ又集中例見えず

(良家)　集中例みえず

(がてら)　俗語も同じ詞なるに集中例みえず

のやうに例のないものも掲げてゐるのである。俳諧には用例のないものがかなりに多いのである。此書は俳諧のてにはの抄であるから、もし純粋に俳諧七部集に即してその用法を究める事のみが此書の主意であるならば、かやうな集中に例のみえない項目を掲げる必要はない筈である。然るに此書に於ては、脚結抄の部立のままに、これを俳諧に演繹して解からうと言ふのであり、この態度からかやうな集中用例のないてにはの存留にもなつたのであらうが、一面に於ては俳も歌も主意は同じと言ふ立前に依存し、俳に用例はないものも俳につかつてよいとの意味で掲げてゐるのであらう。即ち脚結抄の末書として脚結抄の形態に於てもと異質のものに非る歌・俳の道を説かうと言ふのが此書の意圖と考へられるので、俳諧に用例はなくとも歌・俳の道に於けるそのてにはの義を解説し用法を叙述する事が略かれない事情だつたのであらう。

此書のてにはの解説は脚結抄に對し一層詳細になつてゐる所も交るが、解説の特徴としては音義説の入つてゐる事を注意すべきであらう。

凡詞の義をくはしくせんには、經緯五十音之の義を知るより外の道あるまじき事、これにても思ふべし（六の巻）

氏故にわが家學、五十音の義によりて、かくその義をくはしくする也、（二の巻）

この音義によつててにはの本義を解くと言ふのが此書の方法であるが、その詞の本義とはたとへば「ぞ」を解いて

その本義、人の思ふ筋あるに、其うしろの筋へ思戻らせ、その筋をつたはする詞之、（三の巻）

と言ふ如き説明を掲げる事が出來る。音義的解釋そのものは所詮主觀的な根據のないものであつて、價値は問題外

であるが、此書の内に既に「五十音を經緯弁とてくはしくとけるにいふがごとく」(二の卷)と言ふから、此書の成る頃には經緯に就いてかなりの研究をなし、一應の解に達してゐるものと考へられる。（此卷別項所載の「俳諧」に合綴の「經緯本義・各義」はその一面を示すものであらう。）とにかくこの經緯音義說を以ててにはの詞義を解くのが脚結抄に殆どなくして此抄に著しい特色をなすものである。

此書の編成は、御杖が若年より脚結抄に就いて詠歌を工夫修行せる點に發し、脚結抄の部立が體系化の準據になるまでに脚結抄に沒入してゐる事を一の因に掲げる事が出來る。此著は目錄の條にも言ふ如く、脚結抄を本にし、その末書といふ意識のもとに記述をなしてゐる。此著はかくの如く脚結抄に就いての御杖の補說的研究の集成と言ふべきものであるが、脚結抄に對する補說的研究として御杖の脚結抄書入を調べるに、此著の論旨に通じるものを指摘する事が出來る。

氏よといふ天尓波をつかふ心得、かの哥がるたをとるに、むかふばかりに目をつけたるが、我前にてとられたるがごとしともかたられき(一の卷「よ」)

と言ふのは脚結抄書入に、

杖云タトヘハ哥カルタテフモノヲトルニ向フハカリニ目ヲツケタルカ我マヘニテトラレタルカコトキ心ナリ

と言ふ論であり、此書に

かはあてゝみる心く、やはおもひやる心く、(二の卷「か」)

と言ふのは脚結抄書入に

枝云かハアテ、ミル心やハオモヒヤル心ナリ

と言ふに通じる。かやうな場合は數條揭げ得る。たゞ、これらは「枝云」と記すからその書入は御杖年代に成るものかも知れない。しかし「詠歌法」の書入では壽按と言ふ成壽年代の書入が轉寫本には御杖按に書きかへられてゐるやうな場合もあり、現存の御杖書入脚結抄がすべて轉寫本なので原本には成壽按もしくは成元按だつたものを轉寫の際に枝按に書きかへたものかもわからないのである。もしこれらの枝按がもと壽按・元按なる場合は、これらの補按がそのまま御杖の著述天尓波抄に織込まれてゐる事になる。もし然らずして御杖自筆の原書入に旣に枝按なる場合は御杖が天尓波抄著述の際の解を後年までも敷衍して述べてゐる事が知られるのである。(これらの一致は天尓波抄の注文を門人が抽いて御杖の按として書込んだものかとも考へられないではないが、書入の枝按には天尓波抄の注文にない文言の添つてゐるものもあつて、すべてが天尓波抄の注文の書込とは考へられない。)

これらの脚結抄書入と天尓波抄との交渉の年代の點は猶明らかでないが、書入に成元と記す成元時代のものに就いても、

成元云(中略)なはもとふたつの物の持あひの手はなれたる物になりたる義なりされとわか詠ふる心と人の心とを一枚になしてそれにて手はなれたる物にせんとていふ詞之(詠ノなんノ條書入)

と言ふのは、天尓波抄に

なの字の義は、詠の属になの条にいふがごとく、ひとつにはならぬはづの物を、ひとつ物になす心なれば、我思ふことは彼は心もなきを、しひて一枚ものゝごとくなすべしと、心のうちに思ふぞとさとす心ぞ、（二の巻）と言ふに通じる。成壽年代成元年代の書入の詳細なものに接しないので今は以上の指示をなすに留る。

この若年の御杖の脚結抄に就いての研究と共に、一方では天明の頃からその道にも馴染んで來た俳諧の部門に於て、猿蓑序や梧一葉などを媒介として俳諧の魂に沈潜し、七部集のてにはの研究に向つた事（その具體的な成果としては此卷別項所載「俳諧」がその片端を示す）、この二の方面が結合して御杖の歌論の體系の内に入り來つたものが卽ちこの俳諧天尓波抄と言ふ事が出來る。御杖の歌論の成長から言へば、此著は恰も彼の言靈歌論の成熟期に成つたもので、神道・詠歌・言語の哲學體系は此書の内にもうかがふ事が出來るのである。

此著は御杖の言語研究の部門に於ては最も大部のもので、言はば主著ともすべきである。御杖の脚結抄を立脚點とする言語研究には脚結抄翼及び晩年の脚結玄義がのこつてゐるが、翼は未定稿であり玄義は簡略なもので、かつ從來世に流布してゐない。俳諧天尓波抄は刊行になつたものでもあり、脚結抄の末書として對照せられて來たもので、脚結抄に天尓波抄所說を抄錄記入せるものも諸所に存在してゐるやうである。

脚結玄義　一卷

脚結の玄義を解明せる書の謂。玄義とは幽玄の玄、貫之髓腦に玄之又玄と言ふ玄で、縕奥精髓の意であらう。玄

義と言ふ名は御杖の著述にはあまり用ゐない所であるが、奥呂と言ふと同じ程の意と考へられる。

此書の成立は卷初の五十嵐篤好の序によれば御杖が富山に遊歷中何がしの爲に書いて與へたもので、その草稿を金澤の遠田眞折が御杖から讓られ所持してゐるのを篤好が文政六年二月に轉寫せるものである。奥に文政四年辛巳越中國富山客中著と御杖の識語があつて其頃の稿と言ふ事が知られるが、今少々補つて記述すれば、富士谷御杖大人歌文所載の御杖の著述の條には

一あゆひ玄義　寫本　一卷

是は文政四年氏國へ來給ひし時富山にて岡正寛にかきて給ひし書なり

と述べて居り、此書は富山の岡正寛の爲に著述せるものなる事が知られる。岡正寛に就いては詳細は明らかでないが、岡氏の過去帳によれば岡氏は

越中富山に住し元祖正圓より五世正休まで商家島野屋と号す六世正寛文化四年丁夘七月六日父宜休惠民倉賑窮料の功により始て仕官す與外組賜俸三十俵

とあり、正寛は五世宜休の三男、幼名を直三郎と言ひ、通稱を順吾と呼ぶ。號を謙齊（ママ）又富士舍と言ひ和歌を善くすと言ふ。天明五年八月六日生、文政十年七月十一日卒。年四十三。院號を謙恭院と言ふ。御杖との交際は何時から始るかは明らかでないが、文政三年三月の頃に「越中富山岡順吾正寛需」として御杖の詠が存し、次いで四年六月から十二月にかけての越國巡遊にも九月から十月にかけて御杖は岡氏のもとに於て歌會を行ひ又歌を詠んでゐる。

而して九月には「岡正寛ぬし富士のやの記」を書き、十月には「越中富山藩岡宜休翁傳」「岡宜休翁所藏古鏡の記」を書いてゐる。此の脚結玄義の著述も亦其頃の事で、多分文政四年十月頃に書かれたものであらうと思ふ。

此書は脚結の蘊奥を解明せるものであるが、初の概論にも記すやうに、脚結の用ゐやうの眞髓卽ち所謂玄義は經緯の義に用例を徵して理解せられると言ふのである。脚結を究めると言ふ事は卽ち脚結の意味とその用法とを知る事であつて、脚結の意味は古今貫通であるが、用法には新古の別が存し、古の用法は倒語、中古以來は直言と考へる御杖の持論から特に脚結の古の用法を解明せるものである。

此書は脚結抄の敷衍と言ふべきもので、分類部立は卽ち脚結抄と同じく、廣い意味で言へば脚結抄の末書であるが、その解明の立場態度は純粹に御杖の哲學の體系の內に入つてゐる。卽ち脚結抄に於ては脚結の說明に際して、たとへば

何へ（略）　そのところにいまたいたらすして、其方をさしてゆく心也

何と　詞のさしつゝくを、中にへたてゝあかす詞也、

の如くに所謂脚結の義を解いたものも、概してその脚結の用例用法の概括に基いての說明であり、穩やかなものが多いのである。この二例も任意に揭げたものであるが、脚結抄のいづれの條の注解に於ても同じ事が言へる。然るにこの脚結玄義に於ける御杖の解の態度は脚結の義を用例用法を概括歸納して說くのではなく、經緯の義を以てまづ解釋を與へるのである。たとへば「なむ」と言ふ詠の脚結を解いて

むは諸音の源にして心にもの事を思ひていまだ發せぬ義なり（略）何事にまれなと思ふ事をひとり心に思ひて

いまだ發せぬ事をいふは即誂之

と説明し、「らん」を解いて

らは内に物ありと思へとたしかにしられぬ歎なりんは前にいふかごとくいまだ心の内にありて外に發せぬ義なりされはむかふの物のうちを心に思ふ心の詞なり

と言ふ如く、「む」や「ら」と言ふ一音の持前の義を解いてその結合によつて「なむ」「らん」と言ふ脚結の義を説くのである。此書の解の内にはかやうな脚結の義を示すに經緯説が所々に用ゐられてゐる。

○やよともにや經にてあ緯とお緯とは義反する故之

○めむをえ緯にかよはせたる也んの義に同しされとえ緯の義にての心に思ふ所の行さきをいはんためにえ緯へかよはせるなり

○らめ（略）未然をいふ心なる事え緯の詞のさたまりなり

○てん（略）未然を思ふ事え緯の義なり

○つゝ（略）てとつは同音なからえ緯う緯の別はあるなり

○さ　さ經もとその物のまゝにそふ心なり

と言ふ如く、經緯の義を掲げた所が所々に存し、御杖はかう言ふ經緯説を脚結の義を解釋する際にも演繹的に用ゐ

てゐるのである。經緯說は一種の音義的解釋であつて、云云の音は云云の意義なりとするのであるが、その由來に於ては一部の用例に基いて歸納的に立てられた場合もあるが、これを音義として決定してしまふ事は一部の用例を以て全を推すといふ論理的缺陷を免れないのであつて、音義說はこの意味で常に牽强附會に陷る事が多い。又用例に基かない場合が多いのである。御杖が經緯說を以て脚結の義を解いたのは、脚結抄が用例・用法の歸納として概して穩やかな注解を施すに對して、此書の方法上の著しい特異點であつて、かう言ふ演繹的方法は卽ち又御杖の哲學の特徵を示すものなのである。

かやうな脚結の音義的義解に徵するに古歌に於ける脚結の用例を以てして、脚結の玄義が知られると言ふのであるが、此書に於ては脚結の用法を解いて用例を揭げる事が甚だ少い。用例に徵すると言ふ點が甚だ不備と言はなければならない。脚結の用法は詳細に用例に基いて示されるのではなく、御杖の解釋に於て成立せる用法を抽象的に簡略に言表してゐるに留る。而して加ふるに御杖の解釋の根柢にかの倒語論があつて、「これまた又本情のうへにはいふへからす」(てしかノ條)「これ又本情のあつらへに用ふましきなり」(やノ條)「これも本情のうへに用ふへからす」(ねノ條)「これ又本情によすへからす」(をノ條)など屢々注意を促してゐるやうに、倒語的用法を說くのがその特徵である。この點が脚結抄に對して此書の特異な性格を形成してゐる。脚結抄が用例を揭げて用例と作ふ穩やかな注解が多いに比し、此書は用例は脚結抄に委せて言はば單に用法の抽象的說明にすぎない。而して脚結抄が主として中古の歌の用例に基いて揭げるに對して、此書は中古以來は直言として重んぜず專ら御杖の倒語と考

へる所の古代の歌を對象にしてゐる。脚結抄になくして此書に初めて掲げた用例は甚だ少いが、類別すると記紀の歌（二）・萬葉集（約六）・續紀宣命（一）・古今集（約三）・土佐日記（一）・伊勢物語（約二）・百人一首（二）などであつて、萬葉集が最も多い。此事は總論に「万葉集の歌みな倒語く、その外古き祝詞もおなし」「土佐日記伊勢物語その外いふへからぬ事のいはてかなはぬ時のうた文は古にたかふ事なし」と言ひ、脚結の倒語としての働を對象としてゐる御杖の立場の自ら反映せるものと考へられる。而して此書の內にも萬葉集燈を併せ考ふべしとしてゐる（もかなノ條）如く、此著の底流は「萬葉集燈」に通じるのであつてこの意味に於て御杖が此書に於て脚結を解く根柢は主として萬葉集と言ふ事ができるのである。かやうな點にも此書の脚結抄に對する特異な性質を識別すべく、此書は脚結抄の末書とは言ふものの御杖の言語哲學體系の內のものであり、「萬葉集燈」を著して倒語の御國風を具體的に解示せる晩年の御杖の、「萬葉集燈」に對しては骨ばかりのやうなものながら、同し意味でその脚結說を窺ふ事の出來る重要なものに掲げてよからう。

　此集に複刻の底本に用ゐるものは吉田仁平氏所藏の嘉永元年五月吉田友香の筆寫本である。わかり難い所はもとの字形のまま書寫せる由のことわり書が附いてゐるやうに、所々に文意を成さない箇所がある。今さやうな所には括弧を附して編者の按を注し讀者の便に備へる。括弧のない注や本ノマ、は底本に記す所であつて、編者の今按はすべて（　）を以て圍んだ。

天地初發之圖・歌ノ五級・經緯畧辨

此集の複刻に底本に使用せるものは富山市立圖書館所藏の寫本である。此本は奥に「己丑仲春寫之　定重」と記す大形美濃紙の寫本であつて三部を合して一册に綴ぢてゐる。己丑仲春は文政十二年であるが、筆寫者の定重については未詳である。五十嵐啓次氏所藏の短册の內に

海汀にて
　越の海うらわはけしき汐風も
　きみかゆきしをよきて吹らん　　定　重

といふのがあつて、同し頃の歌よみであらうと思はれる。

天地初發之圖には中臣御杖の識語が存し、恐らく文化末年のものであらう。富士谷御杖大人歌文所載の著述の解說に

一天地初發等之圖　寫折本　　一枚　文政五年板行
　是は古事記を說給へる時手近くさとし給はんために書たまへる圖なり

と言ふのも此集に複刻せる類のものであらうが、文政五年の刊本は何處の書目にもなく、編者の未だ接しないところである。

歌ノ五級は奥に富士谷御杖とのみしるし、年月の記載がないが、御杖が五十嵐篤好へ遣す文政六年九月十日付書狀の奥に同じものを書き送つてゐるから、多分篤好がこの書狀から抄出して餘の二部と合せたものであらう。五級

の思想は既に夙くから記述して居り、たとへば本集第二卷所收の「略式五級」にも記述せる所であるが、この「歌ノ五級」は文政六年九月御杖の晩年のものである。

經緯略辨は、篤好の識語に

さて此畧弁は文政四年に旅寐し給ひし頃眞折等に書て給へるなり

とあり、龜田次郎氏藏本には

文政四年辛巳十月

富士谷御杖識

の識語がある。其頃の著述であらう。

此書の內容は經緯の理論的槪說及び經緯圖の注から成るが、經緯理論として說く所は、經緯（五十音）の義は經の義に緯の義を加合せしめて解義を行ふと言ふ點に歸着して居り、この點が御杖の經緯說の世の常の音義說に異る特質であると御杖自ら語つてゐる。而してその經の義及び緯の義は然らば何によつて知るかと言ふに

予は自然の聲によりて義をしるなり

と言ふ。「自然の聲によりて義をしる」と言ふ意味は言はば音感覺に基く所の言語解釋の立場であらう。たとへば、「さや〳〵」「すぶ〳〵」「ほら〳〵」のやうな語彙に於てはこの音聲の內にその意義を表すやうな感象が存在するやうに思はれる。かやうな音聲そのものを以て意義を象徵せる如き語彙はわが國に於ても夙くから注意に上つて居

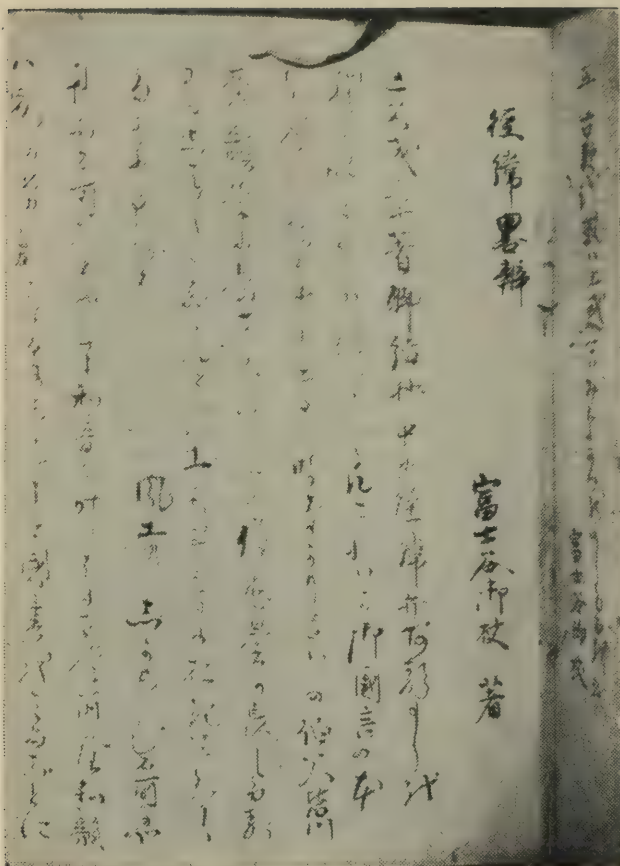
り、「希雅」のやうな研究も存するが、御杖の「自然の聲によりて義をしる」と言ふのはこのやうな音感覺を五十音の一々について沈潜呻吟して經毎緯毎に原理的に整理して解示せるものである。この方面の研究にはかなりに主觀的なものが入るのが常であつて、この意味で經緯理論はその根柢に於て非學術的な分子が多い。

この經緯理論に經の義をもととし是に緯の義を加合して一音の義を解くと言ふ方法の形式は、この書にも言及してゐる如く、悉曇の摩多・體文の組合にも似てゐる。悉曇の韻學に長じてゐる密宗の僧にも學んだと言ふから、この書の經緯理論はその影響をうけたものでもあらうし、又古來の反切法の影響とも考へられる。即ち經と緯との契合點としての五十音の各音が經の義に緯の義を掛合せた一の義を持つと考へる思考の様式は、假字がへしの方法と同じである。又この書に「やいゆえよ」を「いや・いい・いゆ。いえ・いよ」の二合音とし「わゐうゑを」を「うわ・うゐ・うう・うゑ・うを」の二合音と解してゐるのも、反切法から發展して來た分解的説明と考へられるのである。「五十音靈名幷ニ本義」の内に、

へ反切のことふるくよりいひさま〴〵に取なせども未くはしからずそれをいかにといふに其根源を正しくすゐをかでその義きこえがたしもとうぬき活動する所にてこと葉のもとなれはこれを母とすべしあたてことはの始なれはこれを父とすべし其母とする所のうぬきあたてにかよひて余の三十六声はうみ出るなりされはくあのかとかよひてなれるも一旦くうとうの根源へ引付て夫よりあとうつりてかとなるへくうあと心得てみるべし扨そのうぬきあたて十四音のもとはう一字なり父も母もかねていつれとも定めかたきはその打合活動して行ところなれ□□故

に其はしめはうの一字也比う一字なる事をよく〳〵考べし
これその源をいふなりさて又このこゝろをえて本として五十字の反切をも思ふへしこれは末なり其外のたてぬきにてかよひなれるはその五十になれるのちのことなれはこのことゝ打混思ふへからす

と述べてゐるが、此言は必ずしも御杖の言でないとしても、富士谷流の記す所であつて、その經緯理論が反切法に因縁してゐる事を思はしむるものである。

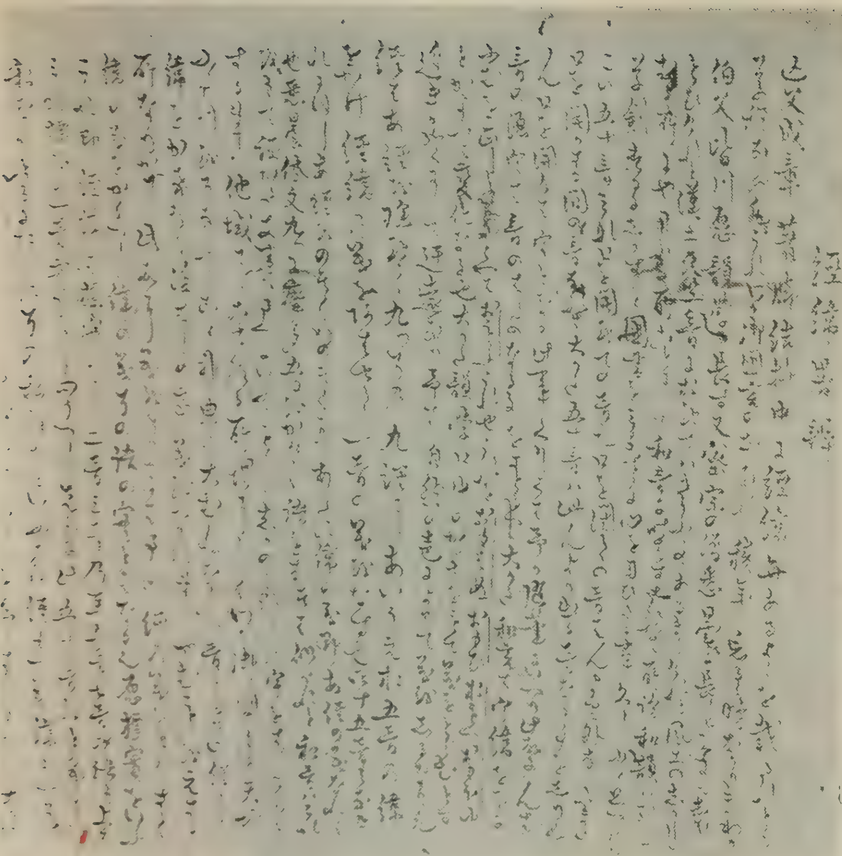


富山圖書館藏本

此書の所論は學術的價値を別として言へば、かなりに思索を凝してゐるものであつて、篤好が「此説また妙論なり」（富士谷御杖大人歌文所載）と言へる如くであるが、所詮主觀的音感覺に依據せるもので、客觀性の薄いものとしなければならない。

此書の現存せるものは、編者の調査し得たものは富山市立圖書館藏本・龜田次郎氏藏本の二部であるが、この二本は稍

種類の異るもので、龜田氏藏本は富山圖書館藏本に「金澤なる手末かもたる」といふものと考へられる。富山圖書館藏本は恐らく眞折所藏の本を篤好が借寫せるものの轉寫であらう。



龜田次郎氏藏本

龜田氏藏本は表紙の識語に富士谷御杖の自筆と記されてゐるが、筆致は御杖の筆ではない。折本であつて表紙に「西勝寺」と記されてゐるからその舊藏であらう。（此本に就いては立命館文學第二卷第十一號〔龜田次郎氏・富士谷御杖著「經緯略辨」について〕に紹介が掲載せられてゐる。）

此集に複刻の底本に用ゐるものは富山圖書館藏本で、是に龜田氏藏本を以て校合を加へた。但し經緯圖の注の部分は校異を示すのが困難なので別圖に掲げる。

附錄

御杖の言語研究をうかがふべき材料の補遺として、經緯奥呂・經緯圖本義・脚結抄裝圖解を複刻する。これらは御杖の自著といふよりはその門流の編む所であるが、御杖の言語說の研究には一應參照すべきものである。

經緯奥呂は「阿庸比奥呂」といふ内の一部分である。底本には小西大東氏所持の大八木万左式舊藏のものを撰んだ。同じ寫の梅村三内舊藏のものが東京帝國大學國語研究室の所藏に入つてゐる。大八木も梅村も赤松祐以の門流であつて、富士谷流の語學を攻究せるものである。底本の意味不明の部分はあゆひ抄書入を以て通じるやうに今按を添へた。この部分は（　）を以て示す。

經緯圖本義は富成梓氏所藏の「五十音靈名幷本義」と言ふ一部の内のもので、原寫の筆者は不明である。第二圖の注はすべて朱筆である。たゞ五十音圖の五十文字・中央の縱線・幽顯より上方左右に別れる曲線・幽顯の圖の九字をつなぐ縱横の線・曲線の始發點の「幽」「顯」二字及び五十音圖の上部から左右を圍む文字のみが黑書である。

脚結抄裝圖解は福井三郎氏所藏の並河基廣書寫のものを底本に用ゐる。この裝圖解は所謂御杖の裝抄と言ふものであつて、昭和九年複刻の「かさし抄」の附錄として刊行になつてゐるものと同じものであるが、昭和九年刊本は底本が誤脫が多いので意味の通じない箇所が數箇所に存する。靜嘉堂文庫所藏の「脚結抄附錄」と言ふのも同じものであつて、刊本の誤脫を訂し得るが、今は御杖の三門人（福田・並河・榎並）として知らるる並河基廣自筆のものによつて複刻する。「裝抄」の稱は原著にはなかつたのであらうと思はれる。

經緯奥呂

アカサタナハマヤラワ

表離教包柔秀向淘役裏

ア　持マヘナリニ別物ニシテ云遙ムカフニアルカ思慮ノ及ハヌ心

おほらかにして外をつかさとると知へし

カ　カタキモノアタル心ワカ方ヘ眞向ニクル狀シヒテ引ツクル心

シカトサシサタメテカクアリキト云心

もとをはなれらつる事をつかさとる

サ　サラ〳〵トナツル心オモフスチ(へ)ハ其ワサヲシタカハシムルヲ云

向ノアルカタチニシタカヒソヒ行心ナリ彼カ外皮ニツキソヒテユク

人ノ思フスチアルニ其ウシロノスチヘ思ヒトラセソノスチヲツタハスルナリ

せまくしつまる事をつかさとる

タ　物ニツキ粘着セントスル心其ハタラキヲ重クモタスル心ナリ退テアルモノカ來タリツク人ノミル所ノ正面ナルモノヲソレヨリウシロノ方ノ向ヨリミエヌ所ヘツキタルナリ

かきりをたて物をわかつことを主る

ナ　手ニ握リタルモノ、外ヘニシ.リイツル心彼方ノヿヲカロクツクルヿニシテ云二ツノモノ、一ツモノ、コトクナル心彼(カ)ヲ持タシメラレテ彼外ヘ出ルカタチナリ一ツナラヌモノヲ一ニスルノ思ナリ

物にいたりつきそふ事を司とる

ハ　モノ、アラハル、員數ノ中ニテモヒトツコトナルヲ數スル心ワカ持チシメタル所ヲハツサレタルナリ

あらはれのそむ事をつかさとる

マ　物二ツアルニツク心其ワサヲ內ニモタスル心我ツキタルモノニテノキタルヿノ合ヘキモノヲハ合セヌナリワカ本意ナラヌスチヲイヒテワカ本意ノ(ニ脫)スチ思ヒヨセサセントスルナリ

ほかにいてゝなけきおもはるゝ事を主る

ヤ　外ニ物アリテ中ニ入カタチアリ向ノモノ、心ツカス(ラ)シテサル方ヘ引ヨセテ思ハスルナリ彼カモチタル(ナ)ウチニ入コム心目ニミエヌモノカ物ノ中ヘイリコム思ナリ內ノ形狀ノ他ヲソハセントスレトアタハサルヿノ思入ル、ナリ

ほかにいてゝむとする勢ある事を主る

ラ　一重物ヲヘタテタル心彼カウチラノ外ヘミユル思ナリ

こゝろゆるきて妙用をほとこす事を主る

ワ　物ノ本末アフカタチ彼カモチマヘカフルナリ（チ脱）

せはくして内をつかさとる

ア　向ニ手ノト、カヌ心彼か場所トナル遠ク不及思ナリ

はるかにあふかるゝ事を主る　力及ハス思ヤム心

イ　サシアタリテアルモノ、後ノカタチ思ハスルナリ彼カ場所ヘユク心タトヘハ硯ハ山ニアル寸ハ石ナリ体トナル今硯ト云寸ハ過往トナル

をしめともはなるゝ事を主る

ウ　彼カ場所ヨリワカ場所ヘクル現在ノハタラキヲ云

こそりてすゝむ事をつかさとる　集リシマルヘキ心　ウ

エ　我場所ヘユク心一旦アリシヿヲサラニハタラカスル心此方ノ物ノ（ヲ）彼方ノ用ニカケ云他念ナキ故ニアツラヘノ心トナル

うちへいりこみてはたらくを主る　廣向ニ及フ心　エ

オ　我場所ニスル心今マテ氣ノツカストアリシヿノフト氣ノツキタル心アリ及フヘキヲ不可及ノ思

さしさたむる事をつかさとる　思出ラレテヨリツク心　ヲ

ヰ　うちの妙用の外にあらはるゝを主る

ア　イ　ウ　エ　オ
　ウ　俚言ワタテノ云(ウ)ナリ

ヤ　寸(イ)　ユ　士(エ)　ヨ
　寸　俚言アタテ
　士　俚言アタテ

ワ　ヰ　云(ウ)　ヱ　ヲ　俚言ヰ云ヱヲ四音ミナアタテトナル

ヰ　輕ク云トキハ俚言アタテノイナリ
　　重ク云トキハ俚言ヤタテノ寸(イ)ナリ

云　輕ク云トキハ俚言アタテノウナリ
　　重ク云トキハ俚言ワタテノ云(ウ)ナリ

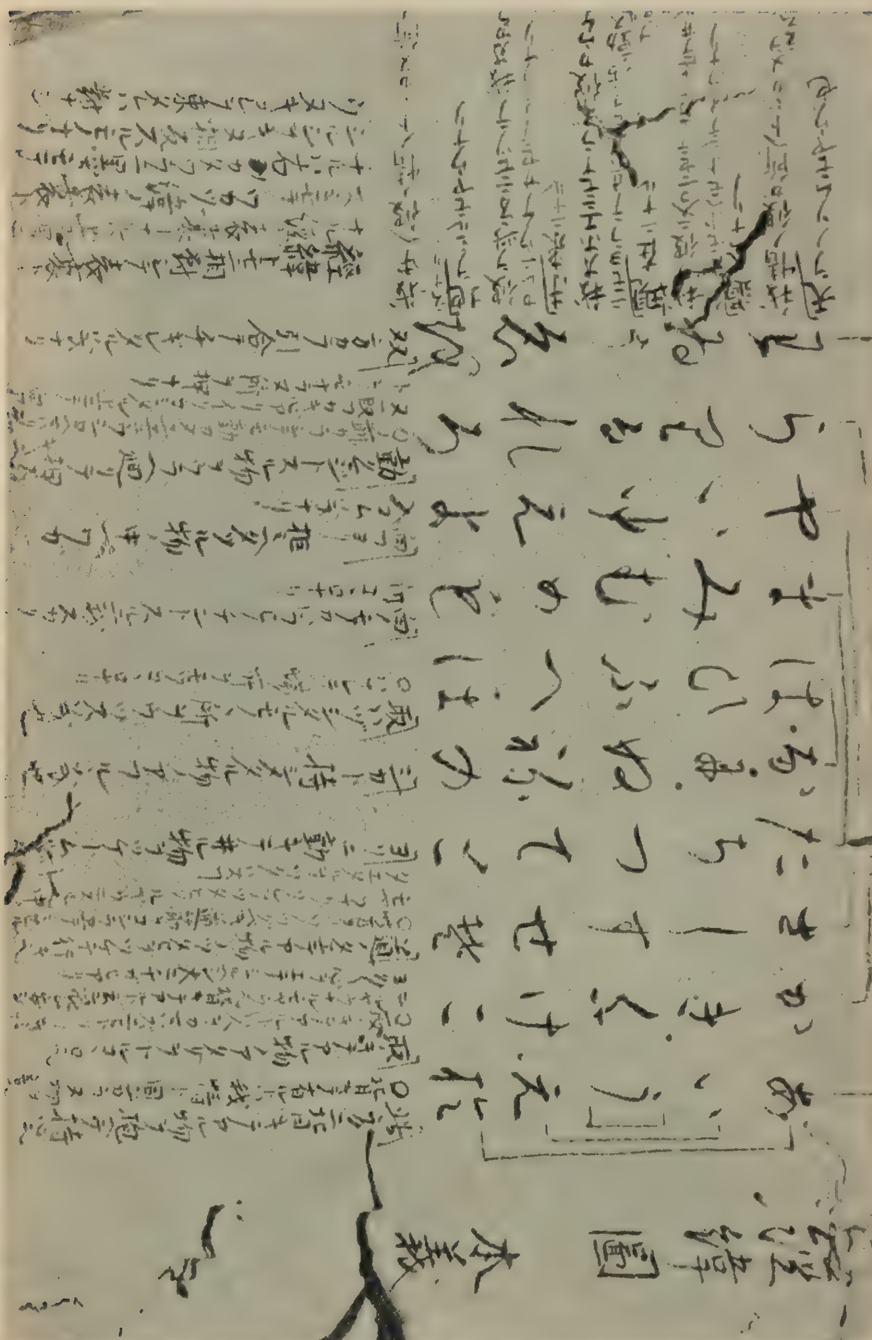
ヱ　輕ク云トキハ俚言アタテノエナリ
　　重ク云トキハ俚言ヤタテノ士(エ)ナリ

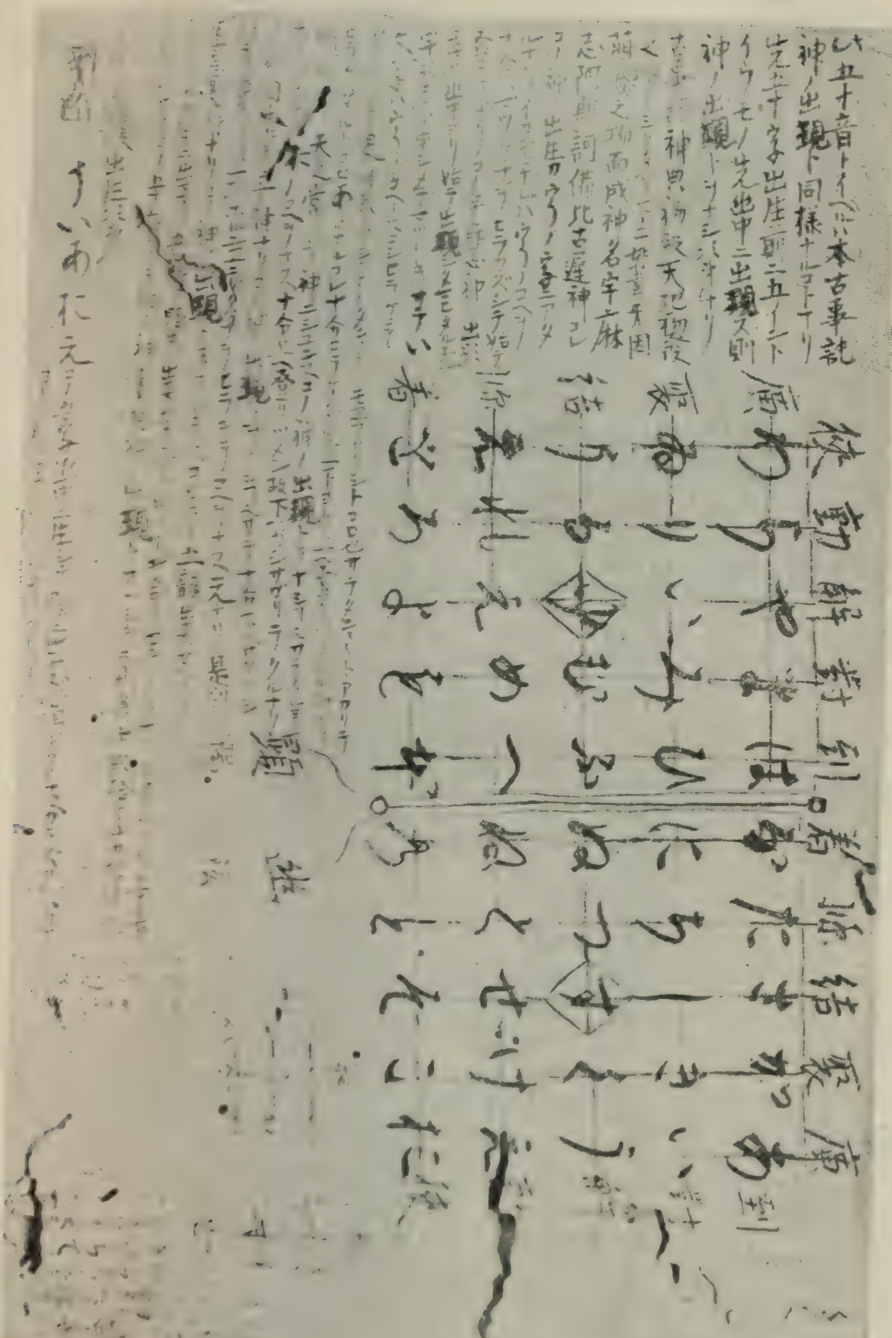
ヲ　輕ク云トキハ俚言アタテノオナリ
　　重ク云トキハ俚言ワタテノヲナリ

タ　ヂ　ヅ　テ　ト
此濁音ノウチヂヅ二ツハ俚言ジス(ズ)ナリ
連声ノ外訛ハ此ニイハス

經緯圖本義

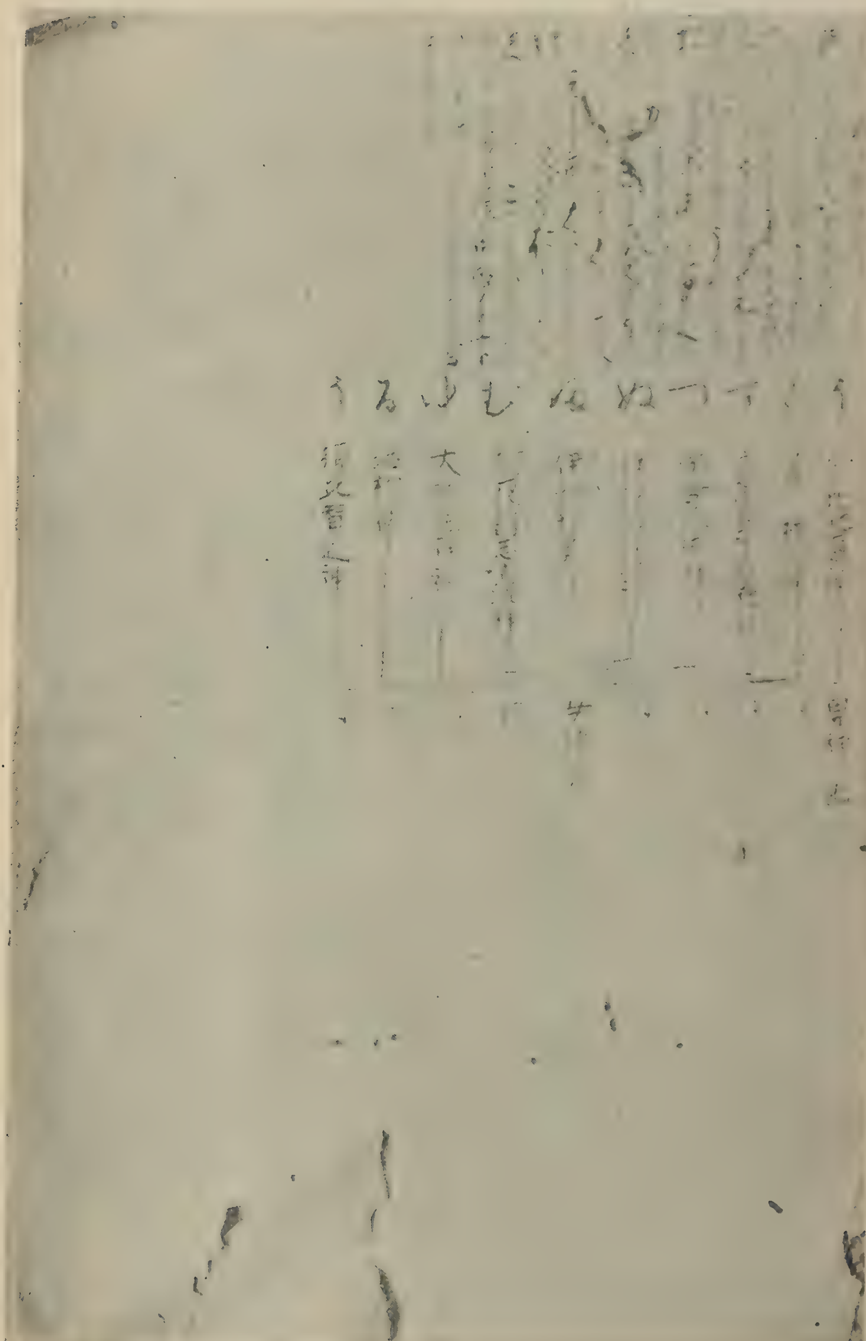
第一圖





第二圖ノ一

第二圖ノ二



富士谷御杖大人口授　　門人　福田美楯筆受

脚結抄装圖觧　　同　　井河基廣謄寫

装　圖　見抄故略之

一居　無末靡　將（ウ 井）　率（ヒキウ 井）　參（マウ マ井）

萬葉春霞たつともうとも　日本紀　急居（ツキウ）

漢文に將字ゐてと訓す

抄大旨にいはくかへしさま末广なし又云かへしさまはかたかきにはふけりと依之氏居部に似たるとてまかはすへからす

不　本末广 往目來　奴ゝゝにねな　如氏不倫の装につきて装となれる也

一來　無末　來（アラマシ）より令身をつきてこしとなれるを後世之身のしと混して其差別をしらすきしかたのしをつくは來（キ）し令身のしを繼つるは來（コ）し志家のしをつく例は無之

一爲　無末　來（アラマシ）より令身をつきてせしとなれるを後世之身のしと混して其差別をしらぬ事來部のことし令身の往有广はせ無广はし也装の來をうくるは令身往をうくるは爲身なり後世何せしといふへきを何ししといひ何ししといふへきを何せしといふ皆氏往目來のけちめをよくわきまへぬ

か故也委敷は見三身圖説

一寝　無末

濕字ぬるは　有广（レレレ）　捨部　雨露にぬるゝ也

塗字ぬるは　無广（リレラ）　打部　漆墨にぬる也

一得　無末　經（フル）　ふ　ルへへへレ　本广往目來庎

旧字ふるれは恨部にて末广あり

觸字ふるゝ　捨部　降字ふる　打部

旧字ふるす　打部　古字ふるし芝狀部

一見　無末　居（ヰル）　鑄（イル）　射（イル）　噴（ヒル）　煮（ニル）　似（ニル）　干（ヒル）　著（キル）　試（コヽロミル）　顧（カヘリミル）

居をると訓すれは孔部すうると訓すれは捨部

煎入（イルイル）　無广　打部　煎入　有广　捨部

切　無广　打部　切　有广　捨部

熒にゆると訓すれは越部

試字後世誤て恨部の裝となしてこゝろむるといふ非也

一打 無广　移(ウツス) 遷(ウツル) 雜(マシル) 消(ケツ) 逢(アフ) 結(ユフ) 借(カス) 刈(カル)
去(サル) 釣(ツル) 足(タル) 降(フル) 散(チル) 遣(ヤル) 張(ハル) 買(カフ)
怒(イカル) 祈(イノル) 絞(シホル) 閲(セメク) 放(ハナツ) 勇(イサム) 潜(カツク) 洗(アラフ)

三言は二言を本とし一言を末とす四言五言宜倣之

祓(ハラフ) 給(タマフ) 伸(ノフ) 活(イク) 破(ヤフル) 折(ヲル) 向(ムカフ) 立(タツ) 取(トル) 仕(ツカフ)
知(シル) 垂(タル)

これら無广ときは打部有广ときは捨部

騒(サワク) 忍(シノフ) 願(チカフ) 疑(ウタカフ) 喜(ヨロコフ) 煩(ワツラフ) 病(ヤム) 潤(ウルフ) 羨(ウラヤム)
愛(スサム) 狂(クルフ) 包(ツヽム) 益(マス) 挑(イトム)

これら來より敷状をつきて鋪部

一捨 有广　植(ウヽル) 聚(アツムル) 責(セル)(ママ) 易(カフル) 預(アツクル) 堅(カダムル) 定(サダムル) 備(ソナフル) 卜(シムル)
極(キハムル) 加(クハフル) 上(アクル) 下(サクル) 傳(ツタフル) 交 枉(マクル) 愁

これら來をたてゝなりもしをつきてへウワルへアツマルへセマルへアツカルなとゝ無广は打部

觸(フル)、隱(カクル)、乱(ミダル)、恐(オソル)、

これら皆古は無广にて打部

受(ウクル)　秉(カヌル)　辨(マキマフル)(ママ)　枯(カル)、束(ツカヌル)　榮(サカユル)　失(ウスル)　詣(マウツル)　諫(イサムル)

答(コタフル)　堪(タフル)　仆(タフル)、調(シラフル)　掛(カクル)　告(ツクル)　別(ワカル)、斷(イハユル)　沍(サユル)

撫(ナツル)　吼(ホユル)　譽(ホムル)

これら有广也分字無广別字は有广枯刈同義なり脚結令身をつきてカラスなと丶訓ス

瘦(ヤスル)　穢(ケカル)、愛(スサムル)　覺(サムル)　曇(クモル)　クモラフ　ケカラフなと丶來より敷狀となる

これら來をたて丶やさしきけからはしきすさましき目さましきくもらはしきなと丶敷部ニ入

恐(オソル)、頼(タノムル)

これら來を隱らして　オソロシキ　タノモシキと敷部ニ入

頼(タノムル)　止(ヤムル)　痛(イタムル)　取(トル)、附(ツクル)　續(ツヽクル)　解(トクル)　伏(フスル)　折(ヲル)、掘(ホル)、

漏(モル)、浮(ウカフル)　仕(ツカフル)　添(ソフル)　滿(ミツル)

これら有广無广にかよふなり其義種々にかはる事靡四例の條下にくはし

來より令身をつきて　タノマス　ヤマスなと丶云

一恨 有广 閉(トツル) 除(ヨクル) 報(ムクユル) 摯(ヨツル) 强(シフル) 用(モチウ)(ママ) 浴(アムル) 耻(ハツル)

試字此恨部に似たれとも見部なる事見前條

戀 銹 佗

これら來の起たるまゝにて サヒシキ コヒシキなとゝ敷部ニ入

朽(クツル) 生(イクル) 懲(コル)・帶(オフル) 綻(ホコロフル) 伸(ノフル) 濡(ヒツル) 媚(コフル)

これら來をたてゝ令身をつく クタス イカスなとゝ打部ニ入

濡(ヒツル) 生(イクル)

これら來をたてゝなりもしをつきて ヒタル イカルなといふ時は無广にて打部ニ入

悔(クユル)

これら來をたてゝクヤシキといふ時は敷狀ニ入

む末をつきてクヤムなといふ時は打部ニ入

恨(ウラムル)

これら來を(ふせ)(ニニ)たてウラメシキなといふ時は敷狀ニ入

一越 有广 消(キユル) 絶(タユル) 枯(カル)、荒(アル)、活(イクル) 榮(ハユル) 愈(イユル) 崩(クユル) 潰

明(アカス)

萠(モユル)　愕(オビユル)　肥(コユル)　費(ツイエル)　冷(ヒユル)　醒(サムル)　更(フクル)　肖(アユル)

これら來をたてゝ令身をつきて　キヤス　タヤス　カラス　なとゝ云嵐字のあらしは荒字來をたてゝ令身をつきて往名となれる則嵐也林字のはやし屎字のこやし榮肥の往(キシカタ)の名となれる也

令身をつきたるは皆打部ニ入　無广

一落　有广　起(オクル)　戻(モツル)　過(スクル)　亡(ホロフル)　畏(オツル)　生(オフル)　下(オル、)　醸(カムル)　老(オユル)　和(ナクル)

これら來を隱(ナハラ)して　オコス　モトス　スコス　なとゝ令身をつきたるは打部ニ入　無广

起　戻

これら來を隱(ナハラ)してなりもしをつきて　オコル　モトルといふ時は打部ニ入　無广

一影(カケロフ)(カケル)　移(ウツロフ)(ウツル)　誇(ホコロフ)(ホコル)　衰(オトロフ)(オトル)　有广　隱(カクロフ)(カクル)　有广

これら皆ろふと隱してふ末となりて打部ニ入影は名なれとカゲルといふ裝源氏にもあり衰字劣字本同義也

一交(マシラフ)　渡(ワタラフ)　捕(トラフ)　計(ハカラフ)　雩(キラフ)　散(チラフ)　足(タラフ)　照(テラフ)　知(シラフ)

語(カタラフ)　變(カハラフ)

往のりに相(あふ)字をつきてらふといふ則りあ反ら也前のろふと混すへからす何さふといふ裝も此例

に同し裝の往のしに相とつきてしあ反則さ也かくすといふ裝に相字つきてかくしあふをかくさふと云

一悔(クヤム・クヤシキ)　烈(ハゲム・ハゲシキ)　凉(スヽム・スヽシキ)　賴(タノム・タノシキ)

敷狀の本よりむ末の裝打部ニ入　哀(カナシキ)　樂(タノシキ)　なとゝは其本末よりむ末の裝となるけちめあり

○む末にならぬ

一芝　旨(ウマシ)五味名　青(アヲシ)　赤(アカシ)　白(シロシ)　黑(クロシ)　丸(マロシ)　利(トシ)　鈍(ニブシ)　明(アカシ)

高　低　廣　狹　小　善　長　短　遠　近

多　少　遲　速　賢　貴　憂　輕　重　暑

寒　堅　淡　弱　直　貪　細　太(フトシ)　此フトシ古フトシキト鋪狀ニイヘリ

後世芝狀トナレリ　暗(クラシ)　剛(ツヨシ)　安(ヤスシ)　悒(イフセシ)　淸(キヨシ)　薄(ウスシ)　痛(イタシ)

○む末にならす薄らくなと打ニ入

洽

遙(ハルカ)　靜(シツカ)　圓(マトカ)　定(サダカ)　柔(ヤワラカ)　長閑(ノトカ)　明(アキラカ)　冷(ヒヤヽカ)　寬(ユタカ)

暖(アタヽカ)　延(ノヒラカ)　淸(サヤカ)　滑(ナメラカ)　朽(ナダラカ)　平(タヒラカ)　安(ヤスラカ)　緩(ユクラカ)　濕(シメラカ)　圓(ツフラカ)

裕(オイラカ)　淸(キヨラカ)　薄(ウスラカ)　大(オホラカ)　漫(ソヽラカ)　珍(メツラカ)

これら何かとつきたるかをはふきてけくけしけきと芝狀にいふ例也

訝

一鋪　奇(クシキ)　恠(アヤシキ)　喜(ウレシキ)　哀(カナシキ)　樂(タノシキ)　惡(アシキ)　賤(イヤシキ)　貧(マツシキ)　寂(サヒシキ)　委(クハシキ)
美(ウルハシキ)　未(イマタシキ)　訝(イフカシキ)　惜　齊

遠〻長〻清〻なと丶かさね詞あるときは皆鋪狀をつきてとほ〳〵しきなか〳〵しきすか〳〵しきなといふ

一思　聞(キク)　歡　喜

これら來を隱らして令身をつきてはおもほしきこしなといひ又被身をつきてはおもほゆきこゆなと丶いふおもふ來より敷狀をつきておもはしきと云

有名未往之弁

一孔末り往りふたつともあり也故に初學のひと疑難をい(た)ふけり事の往目來こそせせゐゐゐててち(見着爲來捨越落)ちなとの如し其けちめ明らかにしらすはあるへからす

末

古今物　郭公みねの雲にやましりにしありとはきけとみるよしもなき　末

同　ありとみて頼むそかたきうつせみの世をはなしとや思ひなしてん　末

拾　かきつくる心みえなるあとなれとみてもしのはむ人やあるとて　孔引

清少　すひつにさえたるすみのあるして　孔引

古　いにしへにありきあらすはしらねとも千とせのためし君に始めん　往

後拾　ことゝはゝありのまに〳〵都鳥みやこの事をわれにきかせよ　往

古　とりかくす物にもかなや世の中をありしなからの我身とおもはん　往

後　何にかは袖のぬるらん白波のなこりありけもみえぬこゝろを　往

拾　いつれをかしるしとおもはんみわの山ありとしあるは杦にそ有ける　往

後　みる時は事そともなくみぬ時は事ありかほに戀しきやなそ　往

古　しかりとてそむかれなくに事しあれは先なけかれぬあなう世中　末

伊　あたなりと名に社たれ（ママ）櫻花

後　涙川なかすねさめもあるものをはらふはかりの露やなになり　末

貫之　あたなりとおもふ物から櫻花みゆる所はやすくやはゆく　末

後　くや〳〵とまつ夕くれと今はとてかへるあしたといつれまされり　末

同　君（ママ）かふる涙にぬるゝわか袖と秋のもみちといつれまされり　末

新古　たのめすは人をまつちの山なりとねなましものをいさよひの月　末

蜻蛉日　嵐のみ吹める宿に花すゝきほにいてたり。とかひやなからん　末

後拾　行はこそあはすもあらめ箒木のあり。とはかりは音つれもなし　末

古　戀すれはわか身はかけとなりにけりさりとて人にそはぬ物ゆゑ　末

古　かすかのはけふはなやきそ若草のつまもこもれり。われもこもれり。　上下末往

ゝ　みさふらひみかさと申せ宮きのゝ木下露は雨にまされり。　末

ゝ　さく花はちくさなからにあたなれと誰かく春をうらみはてたる。　引

君をのみおもひこしちの白山はいつかは雪のきゆるときある。　引

うつほ物語十五

なよ竹のしけれる宿にたゝよにそへむかすはしるやは

これらのるは皆事の末なり有名のるとは同しからす

すへて織降釣足刈帰知散取なとの類皆打部にて末引まかひやすし又孔にあゆひの引あひありてたり

テアリ　たりトアリ　けりケアリ（引）　さりスアリ（末）　さりソアリ　なりニアリ　なと皆有名の例ならふへし

やはをつきてあるやはありやはとふたつにかよへり又疑の属何やはをつきてはありやはせぬとはか

りいふ氏ありは事往にてよめるおりやはせぬかへりやはせぬしりやはせぬとりやはせぬなと丶同し皆往をうけて何ぬとうちあふ也前のやはは事の末をうけてあるやはかへるやはとるやはといふ有名のみ三例ありとしるへし

清少納言すひつに炭のあるして氏して抄毛天家云何して引广をうく事末のるとはひとしからす

一去　いぬルにねなレ　死
脚
本末广往目來
去にケル誂何ね
去ナン

一捕　とらまふ　とらまへ　にらまへ　すまふ　すまひ
ら广
广ら
打住

ふると广て

一數　かすまふ　かすまへ

かそふを延してかそまふるへき例なれと源氏にかくあり

一散　ちらふ　歸　かへらふ　變　かはらふ

合ユへ内
相ラレアノ反
切ユへ外
アハノ來

古メカシク
今メカシク
メクノ來ヨリ
鋪ヲウク

紛マキラハ
内
外
マキラシテ
氏身ノ上シハ令身ニテ相ノ字ヌク
相之拔クトテナシ

恥
交カハシクノ來ヨクル
六ケハシク

靡 有無之別 有四例

一例 無广自立自添裏也 有广立之添之表也

一立 添 續 滿 屈 忍 向(ムク) 迎(ムカフ) 活 客(ママ) 平
浮(ウク ウクル) 沈 垂 伏 分 附 違(タカフ チカフ) 代 進 愛(スサム) 退(ノク シリソク)
幷 和(ヤハラク) 育 集(ツトフ) 調(トヽノフ)

これら無广は自(シカアル)也 有广は之(シカラシムル)也

雲霧たち たつ 物のそひそふ 無广すち也
烟家たて たつる 物をそへそふる 有广すち也

二例 無广鮮之 仕之 取之 表也 有广自鮮 自仕 自取 裏也

二例

捨

一解 仕 取 折 拆 破(ヤル ヤフル) 給 祓 切 碎 漏
知 揚 釣 拔 掘 燒 寄(ヨル ヨルヽ) 續 割 欠 殺(ソク)

これら有广は自也 無广は之也

紐氷なとのとけとくは有广也　自　とく　とけ　とけんと云　紐文章なとのときとくは無广也之ヲと
く　とき　とかんと云　我か君につかへつかふは有广也　奴をつかひつかふは無广也

三例　装む末則ますまするの差也　無广まし有广ませなり

一頼（ダノム／ダノムル）　止（ヤム／ヤムル）　痛　撓　進　慰

これら人の契をたのみおもふ無广すち也裏
頼しけに人にいひちきるは有广すち也表

四例　有广表と裏と二あり則自之也　無广裏のみあり則自也

一明（アクル／アク）　籠　開

夜年なとのあくる有广自明にて裏也
窓戸なとのあくる有广明之にて表也
家宅器物の類あく無广自明裏也

同あくる自明之有广　表也

雲霧なとのこむこめは有广自籠裏也

夜なとのこめこむるは有广籠之表也

人の群たるなとのこむこみ無广自篭裏也

同こむるこめてなとは有广籠之表也

美栖

まとりすむうなてのもりの大神のみことよさせるときはいつそも

詞葉新雅

全

詞葉新雅

此書は和歌和文連哥・俳諧共に趣向はたちながら詞心のまゝにいひかねたる時その俗語の頭字につきて部分の下を求むへし和歌和文の詞を委く考てあてたり

おほむね

さきにわか父わか兄。此國のことはをあきらめて。くはしくときおけるふみとも多く。世にもさやうの書數しらすあれと。哥よみしらぬ人の。里言より古言をもとめむに。とみの便とせむとて。聞おけるかきり。里言を上とし。古言を下にあてゝ冊子とす

父兄。つねに。詞よりおこれる哥をはふかくいやしめるより。いにしへ今。詞はたかへとも。心かはらぬよしをかたらるゝつひて〳〵つたへられたるをは。かくあつめて一部とし。哥のみならす。連哥俳諧にもたすけとせり

いまた歌よみしらぬ人も。此書にむかはゝ。おのつから詞にたやすきをしりて。やかて此道に志をおこすへし

事にあたり時にのそみて。つねにいふ詞の。いにしへはいかにかいひけむとしりかたき時は。やかて此書をとり出て。里言の上のもしにつきて。其部をもとむへし

方言さま〳〵にたかひ。又同しき所にすむ人といへとも。各いひつけたる里言もあれと。今はたゝ門人につたへられたるまゝをのせたれは。方言にかなはぬ里言も有へし

古言里言の別は。かんなと片假名をもてしらすあてたる里言のうちに。いたくいやしけなる詞もありけれと。此書もとやことなきわたりにはえうなくこそとて。なほあらためす
今いろはの哥をもて部類したるは。古きにいたらむに。ちかきよりみちひかむとてなりいとゐ。をとお。えとゑをつゝめたるは。今の世。假名遣にくはしからねは。里言にあたりて古言をもとむるに。まとはせしかため也されと其詞をかゝむ時は。たゝ此書にかきおきたる假名遣のまゝをたかふへからす
詞は。万葉集。古今。後撰。拾遺をもとゝし。後々の集の詞をも。おもひえたるまゝをつたへられ。猶三十六人集。六帖。その外物かたりは。土左日記。うつほ。源氏枕草子。かけろふ。さころも。さらしななとにとれり。又古事記。日本紀。古語拾遺。遊仙窟等をもてこれを補へり。猶今つき〳〵に傳へられんをも世にあらはしてむ
古言の点つきたるは。哥によみつけぬ詞也。たゝこれ古き例をしるさせたる也。字音なる詞をおきては。点ある詞とても。我ちからにてよまむは難なかるへし
里言に。あをやとかき。ふをうとかき。なをのとのせたる所少からす。ひとへにむけなる人のみやすからむかため也。又正しきもあるは。其たかへるを思ひえむ便とする也

古言一言を。こゝかしこに出し。里言ひとつに。古言をふたつみつもあてたるは。輕重なとはありなから。義のかよへは也

里言は私にあてられたるにあらす。古集ともを例してなり。それからうちにも。形容又は諺をもてもあてられたる所少からねと。いさゝか例をいてゝあつることとなし

寛政壬子秋九月

弟　富士谷成胤識

詞葉新雅 初編

北邊成壽論定

門人 西村惟俊
藤木正名 筆授

○い部 幷ゐ

イヒ出ス	ことにいづる いひいづる
イヅバイニナル	みつる
イヤガルホドナヲ	いとふにはゆる
イツトナシニ	時ぞともなく まなく時なく
イツカモ〳〵シテ	日ごろへて ひをへて
イマヽデトカハル	ことになる
イチブンニ	身ひとつに
イツデモカハラヌ	ときはなる つねなる
イサヽカ	露 ちり へいさゝか
イツシヨニ	ともに もろともに へとも〳〵に

イロ〳〵トナル　となりかくなり

インクツナ　いぶせし　うもれいたし　所せし

イニヽクイ　たちさりがたき

イゼンニモ　はやくも　へさき〳〵も

イリ用ノアル　ようある

イツマデモハナイ　ありはてぬ　世命ナトニヨメリ

イヤガウヘニ　あるがうへに　いや　いよ〳〵

イキツク　いたる

イヒクロメル　いひなす

イヤガル　いとふ

イテツク　かたまる　古長ニいやかたまれるトアリ

イフナラバイヘ　いはゞいはなん

イハウト思ヘドイハレヌ　いひわづらふ

イツデモメヅラシイ　とこめづらなる

イニトモナイ　たゝまくなしき

イカイコト　さはに　おほし　あまた

イツシヤウ井ル　世をつくす

イヒツケル　あつらへつくる　へおほする

イロガカハル　うつろふ　色かはるモ

イタミシヨ　いたづき　箭ノイタツキニヨセテモ

イキテ井ル　いける　いくハイキルナリ

イフニイハレヌ　いひしらぬ　えもいはぬ

イソガシイ　いとなし　いとまなし　ひまなし

イツデモカウハアロウナレド　いつはあれど

イヒタイ　いはまほし　いはばや

イキセキト　いそぎて

イヤナスチニナロウカト思　いむ

イヒフラス　いひながす

イヒカケテヤメル　いひさす

イヒモツテイテ　いひ〳〵て

イロ〳〵ト思　おもひみだるゝ　心づくし

イロ〳〵ノヿ𪜈ヲ　ヘわざ〳〵を

イチブンノ心モチ　ひとつこゝろ

イツケン（一件）　ひとふし

イヌル　かへる　いぬる

イツモノヤウニナイ　たゞならぬ

イツシヨニヒツクヽル　つかぬる

イヒヤクソクスル　ことにむすぶ　ちぎる

イハズニマツテヰル　心のまつ　松ニヨセテヨメリ

イヒキツテシマウ　いひはなつ

イヤオウ　いなせ　いなともせとも𪜈

イフ通リニスル　ヘいふことにつく　いふにつく𪜈

イヒナレル　いひしく

イヒワケバカリニ　しるしばかりに

イヒツギヲスル　きこえつぐ

イチヅイニ　ひとへに　ひたすらに

イツシヨコウニ　ひとつに

イレチガエル　かはす

イツデモハナイ　つねならぬ

イヒヤウガナイ　ことのはもなし　いはむかたなし

イラ〳〵セズニ　心しづかに

イヒ出サヌ　ことにいでぬ　しのぶ　いひいでぬ*

*口なし　コレハ山吹ノ花ノ色ナドニヨセテ口ノナイト云フコヽロニヨメリ

イヂバル　つなびきする　すまふ　馬ニヨセテヨメリ

イロドル　心げさうする　なまめく

イケンスル　いさむる　かうじ　かんだう　いましむ

イサカウ　あらがふ　物あらがひナドアリ

イトマゴヒスル　まかりまうしする

イカツガマシイ　〽ひゝらぎをる

イマデハマタ　いまはた

イフテミレバイヒニクイ　いへばえに

イビキ　〽いびき　いびきをかきゝしらぬ音すれば云ゝ　源

イケタリコロシタリ　〽いけみころしみ　人ヲシカルニイヘリ

イラヒドイ　〽いりもみする　風ニイヘリ

イロ〱ト　とかく　とざま　かうざま

イヤナガラニ　うきながら

イキヂ　みさほ

イソ〱トスル　心ときめく

インギンニスル　かしこむ　〽いや〱しくする　源

イドミアフ　いどむ

インキナ　いぶせし　所せし　うもれいたし

イヅナツカヒ　まぼろし

イヒタテノアルノゾミゴト　〽いたはりのぞみ

井ドコロ　すみか　よすが

イキゴミ　〽いきざし　遊ニ氣調トカケリ

イサミスヽンデ　いそしく　紀ニ勤ヲヨメリ

イナヽキスル　いばふ　いばへてナドアリ

イラヌ物モステ物ニセス　〽おとしあふさず

イチメンニ　へかいなでて

イヒスヱル　へいひそす

息
イキモキレ〱ニ　へいきのしたに

イキテ井ル間ガスクナイ　世ののこりすくなし

イヒツヾケル　いひつゞくる

イヒホドク　のぶる

イヒワケスル　いひとく

イラヌモノガ多イ　くだ〱し

イカウ　いと

イツノマニヤラ　いつしかも

イチバイ　いとゞ

イマトナツテマタ　いまさら

イヨ〱　いや

イチバンノ　かみなき

イヒツメル　同上 又いひつむる モ

井ゴヽロガヨイ　へゐよし さふらひようし給ナド

イハズニシラス　へつきじろふ

イロドリアフ　なまめきかはす

イリワリヲイフ　同上

イロ〱ノモノ　へくさはひ 紀ニ雑物又種々

イカホド　いくばく

イツノコゾ　いつしか

イヤ〱　いなや いな〱

イマトナツテハモハヤ　いましは いまは

イマモツテ　いまだ

イマサラガマシウ　さらに

イツモ　つねに

イマゴロハモハヤ　いまははや

イチヅニ　ひたに　同上　ひたみちに氏

イヂワルク　あやにくに

イマサラ　さら〳〵に　さらに

イマカ〳〵　うまや〳〵

イヒオロス　おとしむ

イテモドル　たちかへり

イキガカヽル　〽けはひかゝる　其カゲヲ蒙ルナリ

イロメカシテ　〽けさうびて　〽けさうだちて

イフモクダジヤ　〽さら也　〽いふもさら之　〽ことさらびたり

イライテガアルマイ　〽てんつかれまじ

イラヌヿマデ　よしなしごとまで

イチヤウニ　ともに

イチムキニ　ひたすらに　ひたふるに

イツカウニ　むげに

イマデハ　いまは

イチバンガケニ　まづ

イラツ　〽いそがす　いそぐ氏

イカサマ　げに

イキテ井ル　またゝく　老人ノ生ノコヅテ井ルヲ云

イヤゾ〳〵　いな〳〵

イヒクサ　ことぐさ　〽もてなやみぐさ

イヒカ子ル　〽ことこむる　いひ出かぬる氏

イヒホグス　あはむる

イフウナ　〽されはみたる　〽こと〳〵しき

イロ〱ノヿガイヅ時ニナル　へさしつどふ
イヂラシイ　びむなし　いとをし
イヅポウヘバカリユク　ひたおもむきに
イヅポウヘカタヨッタ心　ひたふる心
イヅヽイ　へひとよろひ　一具ナリ
イッペンドウリスル　わたす　わたる
インキヨスル　世をのがるゝ　世をすつる
イカナ〱　いかで
イ子ムル　ねふる

イロジロナ　へ雪はづかしき
イッヘンデ　ひとわたりに
イチヅナ心　ひとへごゝろ
イチゾク　ひとざう　一族
イキノコッテ井ル　へもこよふ　またゝく𪜈
イン子ン　へすくせ
イクツモ　さはに　おほく　あまた　かずなく
イチドウニ　たぐひて
イチメンニ　ひとつに

○ろ部

ロケンスル　あらはるゝ　もるゝ
ロトウニタツ　はふるゝ　さすらふる

ロンナシニ　かやすく
ロンヲスル　あらがふ　あらそふ

ロクニナイ　かたほなる

○は　部

ハジメテミル　みそむる　うひにみる

ハヅカシイ　はづかし　やさし　はぢかゝやく

ハキサウヂスル　はく　はらふ

ハグレル　友まどはす

バチガアタル　たゝる

ハナス 離　さくる　古おもふ中をはさくる物かはトアリ

ハガユイ　もどかしき

ハマル　おぼゝるゝ　古波のしわにやおほゝれん又後ニ泪ニモヨメリ

ハナレヌヤウニスル　ならす

ハナニツクホドニ　めづらしげなく

ハツ〳〵ニ　はつかに　はつ〳〵に𪜈

ハナレル　はなるゝ

ハンジヤウスル　時めく　さかゆく　さかうる　時をうる

バシヨガセバイ　ところせし

ハリアゲテ　ふりたてゝ　声ナリ鳥ニヨメリ

バツトヒヤウバンニカヽル　さわがるゝ

ハエル　おふ　草木ノ生スルナリ　ハエテアルハおふるト云

ハツカウスル　世にしらる

ハンブンドヲリ　なかば

ハナノサキノ　めにちかき

ハタヽキスル　はぶく　打はぶく　鳥ニヨメリ

ハンブン　なかば　かたへ

*ドノハナシ、玉フハおほせごと　あるナドカクヘシ

ハナデアシラウ　心にもいれぬ

ハリアヒニクイ　くらべぐるしき

ハエシゲル　おひしげる

ハゲシウツトメル　〽いそしくする

ハナヲスヽリアゲル　〽はなずゝりする　泣ニモ老人ニモ

ハナヲカム　〽はな打かみて　泣ヤムサマナリ

バラ〳〵ト立サワグ　〽ほろ〳〵と　さわぐ

バケモノヽヤウデ　〽へんぐゑめきて

バヅクンナ　〽ぬけたる

ハ子ノケテシマハヌ　〽おとし　あふさず

ハジメテ　うひに

ハナシスル　かたる　かたらふ　〽物かたりする　貴人ナ*

ハタ　側　かたはら　かたへ

ハリツケル　〽おしつくる

ハイル　おりたつ　田ノ中河ノ中　ナドヘハイルニヨメリ

ハエナヲス　おひかはる　草木ノ枯テ又別ニ生スル之

ハラタテル　〽はらだつ　〽いきまきする　源

ハチハラウヤウニイフ　蜂　〽はちぶきいふ

ハリアフ　いどむ

バラリ〳〵ト　ほろ〳〵と

バラ〳〵トナヅテ　ちりほひて

ハレナ　おもだゝしき

ハヅカシガル　おもがくしする

ハナガヒコツク　へはなのあたり をごめく
ハンデキナ　へかたなりなる
ハナシアヒテ　かたらひ〲
バナレル　へ世づく
ハラタテ、ナク泣　へむつかる
ハヤカラ　まだき
ハダユルス　うちとくる
ハシカイ　こゝろとし
ハリバンヲサセル　へまもりめ つくる
ハランダガミエル　へけしきばむ
バカ子ンヲツカウ　へくね〲しき
ハキ〲ト　へさだ〲と
ハリヒヂスル　へひゝらぎゐる

ハノ子ガアハヌ　へわなゝく　へ打わなゝかる氏
ハレガマシイ　へかゝやかしき
ハナヤカナ　へよそほしき
ハナレヌ　なるゝ なづさふ
ハツキリト　さだかに
バイマシテ　まして
バツクンチガウ　へこよなし
ハヤイ　とき はやき
ハランダヤウスジヤ　たゞならず
ハレ〲シイ　へけせうなる
ハダシジヤ　へあとを〱らうなし つゝし
ハリヒヂノヤウス　へひぢもち
バンバト　へしどけなく

ハヅカシナガラミル　へしりめにみる

ハナガサク　花さく　花ほころぶナドハツ子ニイヘリ*

*花のひもとく　又ひもとくトハカリモ又ゑみのまゆひらくモ

ハノヌケタ人ノクチモト　へひそむ

バツクンニナル　へすごす　びわを引すごすトアリ源ニ

ハヌケノ物イヒ　へ邑すきひがむ

ハヲモレル声　へすきひがむ

ハラム　子もつ

ハナアカス　契たがふる

ハヒアルク　はひもこよふ紀ニ匍匐透迤ヲヨメリ

ハンチヤナ　なか〳〵なる

ハシクレ　かたはし　かたかど

ハスカイニ　なのめに

ハヅミニカヽツテ　心にのりて

ハズニハマフヌ　そらだのめなる

○に部

ニベモシヤ〳〵リモナイ　へあはつけし　へすげなし

ニゲル　にぐる

ニホヒグルメニ　香ごめに

ニツカハシウナイ　つきなし

ニホフ　かほる

ニゲジタクナ目ツキ　へにげめをつかふ

ニタ〳〵トワラウ　〽ほゝゑむ　かたゑむ

ニクゾウカナイ　つみなきさま　にくからず

ニヨロダカイ　〽そびやぎたる

ニツポン(日本)ビイキ　〽やまとだましゐ

ニガ〳〵シイ　あぢきなし

ニクウナイヤウスジヤ　〽けにくからず

ニアハシイ　〽ふさはしき

ニゲカクレル　〽あとをくらうなす

ニワカアメ(雨)　〽ひぢがさあめ

ニクテラシイカホ　〽つなしにくきかほ

ニチモサチモユカヌ　せんかたなし　せんすべなし

ニツコリトワラウ　同上

ニラミアフテ井ル　かほくらべする

ニウワニ(柔和)　〽なだらかに

ニツポンウマレツキ　〽同上

ニノ足フム　たゆたふ

ニクテラシイ　〽けにくし

ニベモツケズニ　〽すげなう

ニラマレテ　あたまれて　万ニあたみたる虎モヨメリ

ニドヽナイ(二度)　またなき　ふたゝびとなき

ニギヤカナ　〽にぎはゝしき　にぎはふモ

○ほ　部

ホウコウスル　つかふる　〽みやづかへする

ホツテオク　〽とりおく

ホウジヲスル 法事　〽わざする　後のわざ𪜈

ホウガラナ　むなしき　うつに

ホウビヤル　〽打かくる　何ヲ打かく　るト用ベシ　かづくる𪜈

ホウガヘスル 方替　〽かたゝがへする

ホツタイスル　〽かしらそる　〽かみおろす

ボカシタヤウニミエル　にほふ

ホトケクサイ 佛　〽ほうげづきて

ホウグ　〽ほぐ 源

ホメソヤス　いひはやす

ホンノリト　同上

ホコリジユンデ　同上

ホツケル　はつるゝ　糸ナリ

ホカノ心　あだしこゝろ

ホカノコハ思ハヌ　なには思はず　難波ニヨセテ

ホツトリシテ　〽うんじてうむ　〽思ひうして𪜈

ホウヒモラウ　かづく

ホウヅヱツク　つらづゑつく　物思フサマナリ

ホウビ　〽ろく　〽かづけ物

ホウケル　〽ほきたる　〽ほけしれて

ポロリ〳〵ト　ほろ〳〵と涙又　落葉ニイヘリ

ホンサイニセウト思 本妻　とまりにと思

ボウヤリト　ほのかに　万ニ髣髴

ホコリニマブレテ　ちりばみて

ホウグハイニシテ　〽かしこまりも　おかず

ホソイ声　かれたる声 小兒ノ声ニ云

ホトケノヤウナ　つみなきさま 小兒ヲイヘリ

ホカノヿナシニ　たゞ

ホン〳〵ニ　同上

ボツトミエル　打けふる 源まゆのあたり打けふり云〻

ホカニカマハズニ　ことゝ

ホカノ物ヨリモ　物より ことに

ホドライ　ほど

ボチヤ〳〵イフ　へつぶやく

ホノアタリ　頬　へつらつき

ホンニ　まことに

ホ子ミニコタヘル　身にしむ

ボウズアタマ　へまろなるかしら

ホンニシ（ママ）　へさうじみ

ホトチカウイテ行　せめて

ホウ〳〵ヘ　かた〴〵に

○へ　部

ヘンジスル　こたふる へいらへする

ベツモノニナル　ことになる

ベツタリトクモル　くもり ふたがる

ヘントウ、ツ　同上

ベタ〳〵トフル　はだれふる雪霜ニヨメリ又はだれ霜

ベツ〳〵ニナル　わかるゝ

ヘンポウ　むくひ　むくふトモ用ベシ

ヘヤツヾキニ井ル　〽つぼね　ならぶる

ヘイコウスル 閉口　〽くちつげむ　紀

ヘンクツナ　〽ひがめる　〽かたくなし

ベツダンニ　心ことに　さらに　さらがへりて

ヘイユスル 平愈　をこたる　病ナリ

ベツノヿモナイ　〽けしうは　あらず

ベタツイテ井ル　〽あいだれたり　人ノサマナリ

ベンガワルイ　〽すけみたるくちつき

ヘンシモ　かた時も

ベツノ　こと　こと人こと所又こと木ナドアリ

ヘリヲトル　〽はしをさす

ヘタ 下手　〽わるもの

ベシテモナク　なほ

ヘイゼイ　とはに　つねに

ベンガヨイ　〽物よくいひとほる　〽ゆたけきさきら吻之

ヘン子シヲオコス　そねむ　ねたむ

ヘドヲツク 嘔吐　〽たぐりす

○と　部

トンセイスル　身をはふらす　世をすつる　山に身をなぐ　うき世をいづる　世をのがるゝ　山にいる　世の塵を出る　*

*世のちりをはなるゝ　身をすつる　ナドナホサマ〲ニヨメリ

トグ　みがく

トシガヨツタ　みつわぐむ　年たかくなる　おいぬ

ドウゾハヤウ　はやも　はや

ドコガシマイカシレヌ　はてなし　かぎりなし

*中ぞらに　はしたに　はしたなく　いさよひて　ナドサマ〳〵ナリ

トガメル　同上

ドウナリトカウナリト　とにも　かくにも

トキモアロウノニ　時しもあれ

トリチガヘテ　ヘとりたがへて　ヘもてたがふる

ドチラガフカイト　ふかさくらべに

トヾコホル　よどむ　水ナラデモ

ドウデハナクナル　ありはてぬ　命世ナトニヨメリ

トウナリトイヘ　いはゞいはなん

トツケモナウ　おもひかけず　おもひもよらず

トヲカラ　はやく

トリシマラズ思　雲のはたてに　おもふ

ドチラヘモツカズニ　はしに　うきて　間ナリ　又＊

ドンツク　とがむる

ドロ〳〵トヒヾク　とゞろく　とゞろに𪜈

ドウシテモカウシテモ　とても　かくても

トシキリスル　としきりする　棄ナリ

トメヤウニコマル　とゞめわづらふ

トリキハメタヿガナイ　さだめなき　つねならぬ

トキモトキ　時しもあれ　あひにあひて　折しもあれ

ドコデモカウハアロウケレド　いづこは　あれと

ドチラガ上ジヤゾ　いづれまさる

トメヲスル　ヘしるす

ドウモシヤウガナイ　わびしき
トヲル　わたる
ドノヤウナ心モチテアロゾ　何ごゝちせん
ドコゾデハアフ　めぐりあふ
トンボウサキ　すゑ　うれ　藤のうら葉モコレ之
トヲノク　かるゝ　遠ざかる　離ナリ
ドウヤラカウヤラ　ヘからうじて
トリツキハガナイ　つきなし　古ニ無月ニヨセテモ
トリカヘス　とりかへす
トシヨリラシウナル　おきなさび　おきなびてモ
ドウヤラミエルヤウナ　おもかげにたつ
ドリヤ　いで　いざ
トリハダニナル　ヘいらゝぐ　寒キ時ノ事之
鳥肌

トリワケテ　わきて
トリツギスル　きこえつぐ
トイキツク　なげく
ドヤ〳〵ト　むれて　打むれて
トヲツテシマイニクイ　すぎがてに
ドチラヘモユク　かよふ
トヲス　ぬく　つらぬく
トリモドス　ヘこひかへす
ドウブクチウデ　おなじ心に
トリオトス　おとす
トウザイシラズ　いわけなし
トウセイムキナ　いまめかしき
トリニガス　ヘはづす

トリツギヲタノンデ　〽ほとりにつきて

トリシマリガナイ　〽おほざうなる

トヅテカヘシ〳〵　をちかへり　引かへし　くりかへし　立かへり

トボケル　〽おびれて

ドモル　〽どもる

トシハモユカヌ　〽わりなきよはひ

トリエノナイデハナイ　〽かどなきにはあらず

トガメヲウケル　〽かうじうくる

ドコヤラワケアリソウナ　〽よしばむ

トツパオイツ　たちゐ　ゐたち𪜈

ドコト云ヿナシニ　そことなく　そこともしらぬ

ドツシリト　〽づしやかに

トシガイク　〽ねびゆく　〽ねびまさる

トマリバンスル　〽とのゐする

ドレヤラシレヌ　おぼめく

トシガヨル　〽おいしらふ　ふりゆく

ドレコレナシニ　なへて　おしこめて　おしなへて

ドクシヤウニ　〽思よりけに

トヲ〳〵シウナル　かれ〴〵になる

トシワカナ　〽かたなりに

トモダチ　かたらひ人

トビキリノ　〽こよなき　たぐひなき　かみなき

トギレル　とだゆる　おこたる

トビタツバカリ　そゞろはしく

トコロヲカヘヌ物ニナル　つきしむ

トシワカニウツクシイ　なまめかし

トヅクリトナイ	へなま〳〵の
ドミル	へにばむ　紫のにばめる紙トアリ　源
ドノヤウニ	いかに
ドウカ	いかゞ
(ママ)トノヤウナ	いかなる
トカク	なほ
ドレホド	いかばかり
トウブンノヿニ	いさゝめに
トモ〳〵ニ	ともに　もろともに
ドコ	いづこ
ドツチヘ	いづち
ドチラ	同上
トント	うち
トビ火	はしり火　古俳
トウリウスル	すまふ　古事ニ逗留ヲヨメリ
ドウジヤ	いかに
ドウマア	いかゞ
ドウゾシテ	いかで
ドウシタトテ	いかでかは
ドウアルカ	いさ
ドチノホウヘ	いづかたに
ドリヤ	いざ
ドウイフトコロ	いづく
ドレ	いづれ
ドコニゾ	いづら
ドウモ	えも

ドウシテナリモ	とにもかくにも
ドウイフヿガアヅテモ	よに　よにも
トウ〳〵	つひに
(ママ)トチラヘモ	同上
ドウイフワケデ	などて
ドノヤウニアロ	いかならん
ドウリデコソ	むべしこそ
(ママ)トウシテマア	いかでか
ドウアヅテモ	あながちに
トボ〳〵トスル	たど〳〵し
ドメヤウニシタレバ	いかなれは
ドウヤラスルト	どもすれば
トリツクロウ	〵とりまかなふ
トテモノヿニ	ことならば
トホウモナク	たえて
ドウナリカウナリ	ともかくも　とにかくに
ドウデモ	なほ
ドウシタモノゾ	なにぞ
ドレトモヒヅクルメテ	みながら
ドウリデ	むべ
トリモナヲサズ	やがて
ドンナ	〵かたくなしき　〵ふつゝかなる
トボツキナガラ	たどる〳〵も
トイフテソンナラ	さりとて
トヲクニミル	ふりさけみる
トキ〳〵	ふし〴〵　とき〴〵　をり〳〵

ドレトナウ　へおほどかに

トシタケタ女ヲセワヤク　へふる物あつかひ

トイキヲツヾケテスル　へうめく

トリシマラヌテ 手跡　へてんながにかく　へてんがちなる

トシガイテケククワルウナル　へあげおとりする

トリツク嶋モナウ　たのむかけなく　世にあふれて

トメキスル　こがす　しむる　こがらす氏

トキニトツテ　へさしあたりて

トシガタケル　へさだすぐる

ドコモカシコモ　都もひなも　宮もわらやも

トリシマリガナイ　へしどけなく

トツテオイテ　へひめて

ドコヤラムサツイテ　へ物むつかしく

ドコヤラウツキリト　へ物あざやかに

トシヨツタクチツキ　へひそみて

トシヨリノ物イヒ　へすきひがめる言

トリキハメズニスル　すさふ

トリノコシニアフ　すもりになる　鳥ノ巣モリヨリ云之

○ち　部

チヤウホウスル　すさむる

チヨツトシタ　はかなき

チツトノマ　時のま　露のま　しばし　とばかり　玉のをばかりナトサマ〲ニイヘリ　又あからさまに

チツト　つゆ　ちり　へすこし

チヤウ〱シイ　たどりなき

チカラニナル　たすくる

チツタモチラヌモ　散　ちるちらず　花ニモ葉ニモ

チヨイトミル　ひとめみる

ヂリ〱ト　やゝ

*なるうきたるナドナホサマ〱ニヨメリ　又おれたるモ

チツトバカリ　露はかり　塵ばかり　玉のをばかり

チカイホドキツウナル　ちかまさりする

チジヨクヲスヽグ　おもておこす

チヨウドヨイコロアヒ　へおひすがふ　へふさはしき

チヨツトトマル　かさやどりする　雨ヨリイフナリ

チウニブラリト　なか〱に　たゞよひて　なかぞらに　よるべもしらず　うきて　ゆたのたゆたに　ナドアリ

ヂツチリトシテナイ　所さだめぬ

チギレ〱　たえ〲

ヂキヅケニ　たゞちに　ひたみちに

チカヅキ　へあひしれる人

チウヤヲワカタズ　ひるよるわかず

チウハンナ　はしたなし　なか〱なる　はしたなか空*

チイサイ　へさゝやかなる　へちいさき　ほどなき　へちいさやかなる

ヂキニ　とみに

チラバウテアル　へちりほひたる

チウハンナ物シリ　へおれもの

チヱヅイテ　へおとなびて

チウデ　そらに

チワスル　ヘなまめく　ヘなまめきかはす

チヨツト　うち

チヤト　はや

チカイナリニ　ちかながら

チソウスル　ヘあるじする　ヘもてなす氏

チウブンノ人カラ　ヘなまもの

チガヒナシニ　かならず

チヤル　ヘそほる　ヘさるがうごとする

チヱナシ　ヘしれもの

チカヨツテ　せめて

○り　部

リヨウホウニ　兩方　ふたしへに

リツパナ　ヘおもだゝしき　ヘあざやかに

リコウソウナ　かど／＼しき

リチギナ　ヘまめ／＼しき　まめに氏

リキミアフテ　いどみて

リツシンスル　なりいづる　ヘおとなぶ氏

リクツクサイ　かど／＼しき

リヨウブン　ヘしるよし　ヘらうずる所　ヘさう

リハツナ　ヘさとき　さかしき

リキミカヘツテ　ヘひゝらぎゐて

○ぬ　部

ヌグウ　のごふ　涙ニヨメリ
ヌケメナシニ　思ひぐまなく　またく
ヌンメリト　へなだらかに
ヌケテ出ル　のがるゝ
ヌスミ出ス　ぬすむ
ヌラリクラリト　となりかくなり

ヌイヲスル　ぬふ　後ニアリ
ヌケメナクセイ出ス　へかくごん　へいそし
ヌイモノスル　ぬふ　ひねる　源手習ニミエタリ
ヌケツクヾリツシテ　へからうじて　とかくして
ヌヅクリト　さりげなく
ヌメタナ　たのまれぬ

○る　部

ルスツカウ　なしとこたふる
*たぐひなき　たとしへなき　よになきナトサマ〴〵アリ

ルイガナイ　世にゝぬ　ふたつなき　へになき　世にしらす　*

○を部 幷 お

オトロヘル	おとろふる 時をうしなふ
オビタヽシク	さはに かずなく あまた おほく
オホゴヱアゲテヨブ	よびとよむ
オモヒサダメラレヌ	おぼつかなし 思ひわづらふ
オモヒ出スタ子	おもひで
オキワスレル	おきまどはす
オトガスル	おとづるゝ
オモヒヤル	里ト同
オキバガナイ	おきどころなき
オモシロイ	おもしろき 心ゆく
オトシツケテ井ラレヌ	しづ心なし
オンナジトコロニ	所もかへず 所もさらず
オナジスヂニシテ	よそへて
オナジ穴ノキツ子	よる おなしかざし
オモハレル	おもほゆる
オモヒツヾケル	おもひつらぬる
オシタヲシテ	おしなみ
オモヒナシ	おもひなし おもひなす𪜈
オキトモナイ 起	おきうき
オモヒツク	おもひよる おもひつく𪜈
オモヒキル	おもひやむ おもひたゆる
オヒ〳〵ニカサナル	しく 紀ニ重浪ヲしき波トアリ

オチブレル　しづむ　へおちぶるゝ　へちりぼふ　へおちゐる

オホイキツク　大息　なげく

オナジクラ井ナ人　めならぶ人　古花かたみしトアリ

オシテカヅテガワルイ　へびんなし

オイヤル　やらふ　馬ニヨセテ　むちをおほす

オモフテ井ル通リニハ　思ふがごとは

オモテダヅタヿ　へおほやけごと

オモヒコム　へ思ひねんずる　おもひいる

オリル　おるゝ

オモフホドニナイ　思ふがためはあかぬ

オチコグチハ　おちくちは　拾木葉ニヨメリ

オモヒアハス　おもひあはする

オレガノジヤト思　おのがと思ふ

オドモリ　つもり

オホヒヤウバンノ　評判　名たゝる　おとに聞

オンナジキムキ　おなじ心　ひとつ心

オナジメウモク　名目　ひとつ名　おなしかざし

オモフマヽニナラヌ　心ともせぬ　思ひならぬ

オモヒキル　おもひはなるゝ　上ニモ出

オモヒ出ス　おもひいづる

オイカケテイテ　おひて　おひつきて

オサエル　おさふる　泪ニツ子ニヨメリ　又後ニけうそくをおさへてトアリ

オモハシイ　おもふさまなる　へふさはしき

オモヒタツ　里ニ同

オモヒクラヘテミル　思ひくらぶる

オモフ通リニナル　おもひなる　思ふにかなふ＊

*〳ほいかなふ 〳ほいとぐるナド サマ〴〵ニイヘリ

オホカタ をさ〳〵

オホバヘニ 〳同上

オホギマヘニ おほけなく

オドケテ 〳おほどけて

オヤガホヲスル 〳おやがる

オモヒトマル おもひとどまる 思ひとぢむる

オホゴヱ 〳おほどれたる声

*おくまけてナトヨメルモ皆コノ詞ナリ

オコリフルウ 〳わらはやみ ノ

オトナゲナイ 〳わらはげにて

オシカヘシテ 〳かへさひ申給ふて云〻 源かへさひ

オソロシウ かしこく

オトナシウナル 〳およすげ行 〳おとなびて

オホヤウデ 〳おほどきて 〳おほどかに

オ丶チヤクナ 〳おぞましき

オドシノタ子 〳おとしぐさ

オシアフテ井ル 〳おしこりて

ヲイ を アリテ人ノヨブニ答ル之 をといらふナド

オニノヤウナ 〳おに〳〵しき

オクノホウノ 〳おくまりたる 万ニおくまへたる*

オカシイノヲコラエル 〳はなのあたりをごめく

オレナラデハト思 〳われはがほ

オツピライタ 〳かばらかなる 〳ゆほひかなる

オカゲテ みかげに かげに みかげにかたかけて氏

オモテダ丶ヌ かげ〳〵しき

オトナシウ　〽おいらかに

ヲンザニハ　はて〱は

ヲリモヲリ　あひにあひて

オソワレル　〽つきおどろかさるゝ
おどろく

ヲナコノゴウ
女業　〽いつゝのなにがし　源
いつゝのさわり氏

ヲカシイ　〽をかし

オクビヤウモノ　〽おくたかき
もの

ヲトコマサリ　〽おずましき　古拾ニ
强女謂之於須志

オモテムキハ　〽うはべは
うへは

ヲリワルウ　うちあはで

オモヒカヘス　おもひかへす　のどむる
思ひのどむる氏

オンナジヤウナ　〽やうの　源東やうの
物と人わらえなる云々

オケ〱　いで

オナジスヂヲナンベンモスル　〽れんずる

ヲリモアロウニ　折しもあれ

オソレオヽイ　かしこし
〽かたじけなし

オモヒサタメテオク　心にむすぶ

オクビヤウニ
臆病　〽おくして

ヲトコラシイ　〽をゝ〱しき
紀ニ雄略

ヲヽソウジヤ〱　〽をいさり〱
をいハ問答言之

オダテル　そゝのかす
頼政卿集ニモミユ

オモヒツメテ　〽くして　〽うんじて
〽思ひくして　〽思ひうして氏

オビエヌマジナイ　〽うちまきしちらす
散米なり

オイ出ス　やらふ

オモヒマワセバ　あはれ

オイテクレ　いでや

オヅヽケ　いま
オナジヿナラ　おなじくは
オソレイル　かしこまる
オホセラルヽ　〽のたまふ
オホギリヤウ　〽まことのうつはもの
オチツイタ　〽しづまれる
オモワセブリ　〽けしきばむ
オクユカシイ　こゝろにくき　ゆかしき
オモヒイレ　〽おぼえ　人望ナリ
オモヒツキガナイ　心づきなし
オトシコム　はかる
オクユカシミガナイ　〽あふなし　あさはかなる　〽あはつけし　〽あは〳〵しき　〽あはつかにナドサマ〴〵ナリ
オモテムキノザシキ　〽みなみおもて

オソラク　よも
オテマエ　おのれ
オツトツテ　〽さしあたりて
オシツケワザナ　〽おしたちたる
オモシロミヲソヘル　〽けうさかする
オチツイテ井ラレヌ　〽はやる　〽心はやる　〽けしきはやる
ヲシヘル　〽ふでのしりとる　筆ハタトヘニテ万事教ルヲ云　源
オモヒ出シワラヒ　〽おもひいでわらひ
オントウニ　〽こめきて
オトシコマレル　はからるゝ　謀ニアタル之
オモヒナシデカ　心のなしにや　おもひなしにや
オモヒアタル　おぼゆる

オホバヘナ　〽ゆほひかなる
オロカシイ　〽しれ〳〵しき　〽かたくなしき
オシガヨワイ　〽しりびに
オボシメサレル　〽おぼさる　〽おぼえたまふ
オトヅレヲスル　〽せうそこする
オヨビゴシニ　〽およびて
オホセツケラレル　〽おほせらる
オホセガキ　〽せんじがき　代筆ヲオシナヘテ云
オシナラシニ　〽ひとしく　〽ひとしなみに　源
オシツヨウ　ひたふるに
オヅ〳〵ト　〽おづ〳〵
オクソコナシニ　〽おふなく

○わ　部

ワレトワカデニ（ママ）　みづから　こゝろもて　心づから　人やりならず　我と　われから　おのれ　心から
ワメク　〽のゝしる
ワヅカ　わづかに　はつ〳〵に　はつかに
ワザ〳〵ト思ヒタツテ　ふりはへて　さしはへて
ワルイヿジヤ　〽ようなし
ワケガシレヌ　あやなし　あやめなし
ワケテハイル　しのぐ
ワカ（ママ）モノニスル　しむる　しめおく　氏
ワケカナイ　をさなし　いわけなし

ワカヤグ　わかゆる　わかえて氏

ワガ身ツメツテ人ノイタサ　我にて知ぬ　つみてしる

ワキメモフラズ　ひとすぢに　ひたふるに

ワルイシムケヲセヌ　〽おとしあふさず　無用ノモノニモ目ヲカケル心ナリ　〽つらからずもてなす氏

ワカチナシニ　わりなく　〽おしこめて

ワガ心バカリデタイセツニスル　〽わたくし物に思ふ

ワルウシタラ　〽ようせずは

ワケアリソウナヤウス　〽よしめく

ワガジユウニスル　〽らうずる　〽れうずる氏

ワレモ〱　おのがじゝ

ワルサナ　まさなき

ワル〱ウ　〽まが〱しく　紀ニ狂言悪事ヲマガコト、アリ

ワカレメ　けぢめ

ワガカラダノヤウニナイ　我にもあらぬ

ワラヒグサニナル　人わらへなる

ワキマヘガナイ　思ひしらぬ　いわけなし

ワラヒタイヲコラエル　〽はなのあたりをごめく

ワヅサリト　〽わらゝかに　〽今めかしく

ワケノアリソウニ　〽よしばみて

ワザトシラヌフリスル　つれなしづくる

ワキカライケンスル　〽くちいるゝ

ワケヘダテナシニ　おしなへて

ワキヘイカズニ　所もさらず　所もかへす

ワルウナイヤウスジヤ　〽けにくからず

ワルイ詩　〽こしをれぶみ　卑下シテモ云ベシ

ワルイウタ　〽こしをれ　卑下ニモ云ベシ

ワカ〳〵シウナル　こまがへる　万ニ草こまがへるナトヨメリ　若反トカケリ　又わかゞへるトモヨムヿツ子ナリ

ワビコトスル　〽てをする

ワカレ〳〵ニナル　〽あかるゝ　紀ニ散ヲヨメリ

ワルシナニトリナス　〽ざうげんする　さかしらする

ワガモノデナイ　しめのほかなる

ワラヒイル　〽わらひくつがへる

ワリクドキヲイフ　いひとく

ワガマヽヲスル　〽こしのぶる

ワルウナロカトキヅカイナ　あたらしき　紀ニ惜トカケリ

ワカラヌ物イヒ　〽からさえづり

ワルシナニイフ　〽おとしむ

ワルイスジヤウ　したくさ　下種ナリ

ワザ〳〵ト　ふりはへて　さしはへて

ワケモシラズニ　おもひしらずも

○か部

カラダガフタツホシイ　身をわけてしが　よしもがな　身もがなふたつ　みをわけばや　みをわくる

カラタヲナイ物ニスル　はふらす　身をすつる

カラダフサウヲウナ　身におはぬ　みよりあまる　不相應

カホヲミアハス　みかはす

カラダヲ粉ニシテ　みをつくして　澪標ニヨセテモ

カクシテハナシスル　へみそかごと

カラダニシユミコム　身にしむ

ガツテンシツケテ井ル　ときくる

カルハヅミニ　たやすく／へかやすく

カケガヘノナイ　ふたつなき

カゾヘヌイテシマウ　よみつくす

カヘ〴〵スル　あひかふる　かふる

ガツテンガイカヌ　いぶかし／おぼつかなし

カウアロトハ思ハナンダ　おもひきや／思ひかけきや

搦 カラミアハス　しがらむ

カクシオホセニクイ　しのび／がたき

カヽリアヒノナイ　しられぬ

カタノ通リヲスル　ならふ

カラダモナゲ出シテ　身にかへて

カクサズニ　はぎにあけて／古俳土左日記等ニアリ

ガツテンガイク　とく／おもひしる

カンガヘモツテ　たどる〳〵

カシコブル　さかしらに／へさかしがる圧

カズトリ　ありかず

カホツキデシレル　いろにいづる／ほにあらはるゝ

カヅケル　おほする

カルハヅミニナイ　をさ〳〵しき

カクシテ井ル　しのぶ

カクシヌク　しのひはつる

カタコトイフ　へよこなまる／へほゝゆがめていふ

カタイツポウヘタワム　なびく

肩 カタヲナラベル　なずらふる

カタマヅテ井ル　むれゐる　むれたつ　鳥之

カワリヤスイ心　うつしごゝろ

カタミ　里ト同

貸 カス　里ト同

カナシイ　かなしき

カゾヘル　かぞふる　よむ

カケテイク　かける　馳之

カタイヂナ　〵ひが〳〵しき　〵こゝろごわき

カズガオ、イケレド　いよのゆげたも

カホガアヲザメテ　〵はなじろみて　臆病ナルサマ之

カビクサイ　〵かびくさし

カマエノウチ　ちかきしめのほど

カワイガル　〵なづる　〵らうたうする　かなしむ

カワル　うつる　かはるモ　うつろふ

カワリニウヱル　うゑつぐ　草木ナリ

借 カル　里ト同

カタイツポウ　かたへ

カタテニ　かつ

カタオモヒ　かたおもひ　かたごひ

カコツケル　かこつ　かこちよする

カドグチ　はいり方

カ子ツケソメル　〵はぐろめする

カセニナル　ほだし　絆ナリ

戒 カイヲサヅカル　〵いむことうくる

カホガアゲラレヌ　おもなし　おもておかむかたなし

カホ出シガナラヌ　同上 無面目ナリ

カホガアハサレス　おもがくしする ハヅカシキ之

カホヲカクシテ　おもがくしに

カウコウ 孝行　へけう

カホニ火ガタカレル　へかたはらいたし

カヅテキタホドナ　かごとばかりの

カヽリキヅテ井ル　へかゝづらふ

カタホデワラウ　へかたゑむ へほゝゑむ

カタ心ニカヽル　うしろめたし かた心づくし

カクシテアル　かげ〳〵しき

嗅 カギクラベル　かぎあはす

カンゴリト　かごかに

カラダヲチヾメテ　へかいほそりて

我 ガヽハラレヌ　をるゝ花にをれつゝ 源胡蝶

カホツキ　へつらつき へおもやう

ガタ〳〵フルウ　へわなゝく

カシコウナイ人　へしれもの

カコツケコトバ　かごと

カタソヅペラ　かたかど かたはし

カクレテ井テ　かくれて かくろひて

カタハシカラハナシスル　へ物がたりもかきくづす

カチドキヲアゲル　へらんざう 源 鬪雞ニイヘリ

カミニタツ物ガナイ　かみなし

嗅 カギワケル　かぎわくる

カビル　へかびて

カドチガヘ　ひとたがへ たなべの磯 六

カザリ　よそひ

カホカタチ　〽ようめい 容面ナリ

カサ子カケル　たゝみなす 假山岩ナトニイヘリ

ガクモンノギンミ　れうし 寮試ナリ

カタヅケル　そばむる

カヅタリトセヌ　なま〳〵の

カキヤウ　〽筆づかひ

カケカマワヌ　つれなき 〽むじんなる

カタクロシイ　〽くすしき 〽じほうなる　まめなる

カンジイラス　同上

カホガヤセル　おもやする

カル〳〵シウ　〽あはつかに 〽あはつけて

カエヅテ　かへりて

カタ　ためし ならひ　あと

カウセキ 行跡　〽たゝずまひ

カクベツニ　ことに　心ことに

カタヨヅテ井ル　そばむ

カタワキカラミル　そばめ かたはらめ

カナリニ　なのめに

カワイラシイ　〽らうたき 〽らう〳〵しき

カケドクニスル物　のりもの 賭物之

ガヲヽラス　〽くちあかする

ガクモン　〽ざえ 又里同 才之

カタイヅサウニ　ひたふるに

カクダンナ　〽こよなき

カンシヤクヲオコシテ　まじり ひきあけて

カレゴヱ　から邑　源ニフクロウノナクヲイヘリ

カウマンブル　ヘ思ひあがる

カンリヤクスル　ヘことそぐ

カケゴウツゼニ　賭碁錢　ヘごてのぜに　源

カキサガス　ヘあばむる

カシコダテ　賢　ヘさくじり

カラタカウキ物ニナル　さすらふる

カイホウスル　ヘみる　源ニ看病ニイヘリ

カラダガチイサウナルヤウニ　ヘ身もしむるやうに

カヤウ〳〵ノ　ヘしか〳〵の

カラダモナエテ　しなえうらぶれ

カゲグチイフ　ヘしりうごとする　ヘしりうごつ𪜈

カクシテオイテ　ヘひめて

カミヲスク　かみをけづる

カヂヲスル　ヘごしんまいる　まいるハ尊て之

ガヲスル　賀　ヘことほきする

カクレガナイ　ヘあざやかなり　ヘひたゝく　日爛之

カスラハヌ　ヘつれなき　ヘあいなき

カワイカラズ　ヘあいなく

カホツキスル　ヘめかす　何めかすト用ヘシ

カウゲナシニ　たかきもみじかきも　たかきいやしき

ガセイニ　ヘみゝはさみがちに　女ナリ源箒ニアリ

カタヲツケル　ヘしたゝむる

カゲグチ　ヘしりうごと

カンジンニシテ　ヘえうして

カタヲヌグ　ヘひきほころばす　片袖ヲヌグナリ

カホヲツキアハシテ　ひたおもてに

カラメイタ　＼からめきたる

○よ　部

ヨコニナル　ふす

ヨケテ井ルマモナク　みちもさりあへず

ヨケイ　さはに かずなく　あまた　おほく

ヨリヲカケル　よる 糸ナドニ

ヨビニヤル　よぶ

ヨリツキニスルホウ方　よるべ

ヨコタワツテアル　よこほりふせる 山ニヨメリ

ヨビコンデ　＼よびいれて

ヨブケレドキカヌ　よべときかず

カケカマイナシニ　すくよかに ＼すく／＼しく

カドヒシノアル　そば／＼しき ＼そばづきたる

ヨマイゴトイフ　ふることいふ

ヨケル　さく さくる　よく よきて𪜈

ヨガナヨヅピト　よたゞ よるはすがらに　よもすがら

ヨドヲシニ　ヨガナヨヅピトニ同

ヨリドコロニスル　よすが かたかけて

ヨイ　よき まほなる

ヨヅテハツギ／＼　よりはへ 糸ナリ

世ヨニナレヌ　＼よにへぬ よの中をしらぬ　＼よづかぬ

ヨビモドス　よびかへす

ヨコタヲシニ　へよこさまに

ヨミガヘル　しにかへる

ヨンドコロナウ　心にもあらで　こゝろならでモ　思はずに
へほいにもあらでナトイヘリ　又えさらぬ

ヨザトイ　いざとき

世ヨガスヱニナッテ　にごりのすゑに

ヨイヒヤウバン　へかうざくなる名
警策ナリ

ヨコガホ　かたはらめ
そばめ

ヨノナカノドウリ　よのさが

ヨルニナッテ　へよさり

ヨワ〳〵トシタ　へよろぼはしき
源手跡ニイヘリ

ヨッポド　やゝ

ヨイハサテ　よしや

ヨシ〳〵　よし

ヨブリスル　いさりする
夜漁

ヨゴレタ　へきたなき

ヨリツキニクイ　いちはやき
いつかしき

ヨウナイ　かたほなる

ヨレ〳〵トシタ　かよれる
かよれる姿　源ニトアリ

ヨコニミル　同上

ヨケラレヌミチ　よきぬみち

ヨイヿデナイ　へようなし

ヨイスジヤウ　へやんごとなき
きは

ヨク〳〵思カヘシテミレバ　大かたは

ヨイワイノ　同上

ヨイハ　同上

ヨシ〳〵ソンナラバ　よしさらば

ヨモヤ　同上

ヨニマタトナイ　よになき

ヨクフカウ　〽ふくつけく　遊ニ貪

ヨロコバシウテタマラヌ　〽てをつくりて　ひたいにあつる

ヨイナカ　〽ゆるびなきなからひ　おもふどち

ヨタンボウニナッテ　〽ゑひしれて　土日　源等ニアリ

ヨリアツマル　すだく　人ヲモ虫鳥獣ヲモ　万ニ多集

ヨモヤカシ　よに　よも

ヨコムキノ　そばめたる

ヨイキリヤウ　ふりがたき　さま

ヨリサワッテ　〽ふれはひて

ヨイ詩　〽きやうさくに　警策ナリ

ヨイカゲンナミヤウ　みなし　めのみなしモ

ヨロ〳〵トシタ　〽ひはづなる　〽よろぼはしき

ヨクフカウ思　〽ふくつけがる

○た部

タビゴトニ　ごとに　たびに

タヅネル　ことゝふ　とふ　問訪兩用

タテキル　とづる

タメシテミル　こゝろむる

ダマス　〽すかす　〽をこづる　はかる　〽あかつる　あざむく

タワム　たわむ　とをよる　万

タワ〲ト　たわゝに　とをに　たわに㕝　とをゝに

タチナレテ井ル　たちならす

タグル　たぎ　繩たぎ　トヨメルコレナリ

タヅテモスワヅテモ　たてれをれども

タキツヾケヌ　たきすつる　たきすさふ　火之

タノミガイガアリサウナ　たのもしき

タントナイ　すくなき　まれなる　まれらなる㕝

ダマサレテ　あさむかれて　はかられて

ダシニツカフテ　おほせて

タンノウスル　なぐさむ

タガイチガイニ　かたみに　たがひに

タバニスル　つかぬる

タヨリズクナイ　心ぼそし

タワムレル　たはるゝ

ダルイ　たゆし　手もたゆく　あしたゆくナドアリ

タヽリガタル　たゝる　たゝりなす㕝

タヅタリ井タリ　たちてみゐてみ　伊物

ダレカレナシニ　たれとなく

タクサンニ　さはに　おほく　あまた　くだ〲しく　數なく

タノミスクナイ　あだなる

タガイニ物イフ　いひかはす　へいひしらふ

タクサンニアル　おほかる

ダレデモアテニシソウナ　人だのめなる

タガイニ　同上

タンキナ　こゝろみじかき

タマリカ子テ　おもひかね　おもひあまり　＊

*しのびかね　たへかねて　ナドナホ
サマ〱ニヨメリ

タガイニシンセツデ　思ひかはして

*こゝろおなじき　心ひとしき
ナドヨメリ

タヅ、井ツ　たちてみゐてみ　たちゐ　ゐだち　源

タツジン　〱いうぞく
人　諸ゲイ何ニモ云ベシ

タイキナ　おほけなき

*ウツホニミエタリ　はしたトハ
チウハンナルコ、ロナリ

タノミズクナイ心　花ごゝろ　あだなる心

*あかづる㠯をこづる㠯訓ジタリ
はかる

タマゴ　かひ　とりの子
諸鳥ニイフベシ

ダルソウニ　たゆげに

タカラカニ　〱たかやかに

タマノヤウナ　〱たまの　源玉の
をのこみこトアリ

ダラ〱ト　ごもなく
心ながく

ダレデモ同ジヤウニ思フ　おもひ
かよふ＊

タイセツニトリアツカウ　〱かしづく
〱いつく

ダレデモスキソウナ　〱今めかしき
〱今めきたる

ダイジノムスメ　〱いつきむすめ

タヅテモ井テモワルイ　たつもはした
ゐるもはした＊

タヅシヤニカク　〱はしりがき

タマサレル　をこづる　あざむく
紀ニ誘ヲヨメリ又＊

タマ〱ニ　わくらはに　たまさかに
たま〱に

タヲレカ、ヅテ　打よろぼひて
紀ニ徙倚ヲヨボフ

タトエガタナウ　たとしへなく

タ、ミヨセル　〱たゝみひろぐる
源蟬ニ唐風ニイフ

タツブミ　〱たてぶみ

タンレンスル　へれんずる

タマツテハ井マイ　へなほあらじ

タノミガイノナイ　へむとくなる　水のうへむとくなるけふのあつかはし　さト源常ニアリ　又枕ニむとくなる物すまひのまけて＊

＊いるうしろでナト見エタリ　無徳ノ義ナリ

タニン　うときひと　他人ナリ

ダレヤラシレヌヤウニ　やつれて　やつして

タヾサヘ　いとゞしく

タラヌ　あかず

タビ〳〵ニナル　しきる

タトヒ　たとへは

タイガナイ　まさなし

ダメヲサス　へけちさす　碁ナリ

＊コレハ体外ヨリイフコトバナリ　よういふかしハ内ニイフベシ

タナ　へにかい　厨子ノ棚ナリ

ダレカレ　へなにがしくれがし

タカイニハラタテル　むかひ火つくる

タラヌトコロガナイ　へぐしたり　へぐする

タツタ　たゞ

ダレガマア　たれしかも

ダイジニカケル　へいたはる　へかしづく　へいつく

タカウトマル　思ひあがる

タルム　たゆむ

タテモノニスル　へけうそうする

タシナミブカイ　へよういふかき　こゝろにくき＊

タテワカツテ　へこまとかに　かたわく

タノミニナラヌヤウス　あだげなる　〽あだめく　〽あだへて

タヅシヤナ人　さかしき人

タイガイ　おほよそ　おほかた

タカヅテ井ル　〽たちこむ

ダイヒツ　〽おほせがき　じがき　代筆ナリ　〽せん

タヅシヤナ　〽すくよかなる　〽すく〳〵しき

タノミズクナイ人　あだ人

タイマツ　まつ　さきのまつ　源良

タイガイニシオボエテ　〽ゆゑづけて

ダラリト　〽ゆるゝかに　ごもなく　心ながく

タラシテ　〽すかして　〽こしらへて

○れ　部

レイ　ためし　あと

レヅキトシタ　をさ〳〵しき

レイノ　〽れいの

レキ〳〵ノ　〽やんごとなき　をさ〳〵しき

レイニスル　あとゝなす

レイガワルイ　ゆゝしき

レツヲタテヽ　つらをみださず

レイイフ　〽よろこびいふ

○そ　部

ソツト　みそかに　へやをら　へやわら

ソノツヾキニ　へそのすなはちに

ソンショラズ　おもひの外に　おもひかけず

ソレ〳〵ニシワケル　わく

ソバニ井タイ　同上

ソレニスル　なす　みなす閑なす　いひなすナトヨメリ

ソロヒキツタ　ひとしき

ソエンナ　うとし　うすくなる

ソバ　かたはら

ソフ〳〵トシタ　つねならぬ　後　そば〳〵しき

ソダテアゲル　おほしたつる　人草木ヲモ　なておほす

ソフテ井ル　すむ　男女偶居スル之

ソレハソレニシテオイテ　おきて

ソノカワリニ　しろに　拾鴬の　なかむしろには云ゝ

ソバニオキタイ　なつかしき

ソコ子ル　なるゝ　衣ニカギル詞ナリ

ソレバカリガ　ひとり

ソエンナヤウニスル　うとむ

ソコタヽク　つむる　つくす

ソシラヌカホ　つれなし　つれもなき

ソヽコシイ　はしたなし　はした

ソウデハナイ　あらぬ

ソウデハアルマイ　あらじ

俗ゾクテ井ル　にごりにしむ

ソレソウオウニ　＼おふな〳〵　眞伊ニ随分ヲヨメリ

ソウリヤウ　＼たらう　男之

ソレノホウガ多イ　がち　ねさめがち　なかめがちナド云

ソヾナカス　そゝのかす

ソロリトアケル　＼そゝきあくる　障子ナド之

ソワ〳〵トシタ　そゞろはしき

ソワツク　同上

袖ソデノナカニモツ　＼袖ぐゝみにもつ

ソヅトキヲツケル　＼つきじろふ　和名ニ觝ツキジロフ　漢語抄ニ云以テレ角觸ルレ物ニ也トアリ牒ナトヲツキテシラスルナリ

ソシラヌカホスル　＼つれなしづくる　＼むしんなり

ソロヒキヅテアル　＼ぐしたる　またし

ソヅトクル　＼はひわたる　＼やをらわたる𪜈

ソハノモノヲタノンデ　＼ほとりにつきて

ソレ〳〵ノ　＼みゝにつけたる　身ゝ之

ソヅトノゾク　かいまみする　紀ニ覗其私屏

ソブリ　＼たぢろき

ソノイカイコトノ　そこらの

ソラトボケスル　そらおぼれする

ソワ〳〵スル　そゞめく　＼さうどく

ソコモト　そこ　まうと　あそん　あそ𪜈

ソライロノ　そらのいろしたる

ソムカズニ　＼うけばりて

ソバカライフ　＼くちいるゝ

ソツフト　へやわらづゝ　源	ソバヲハナサヌ　枕ごとにする
ソウジヤトイフテモ　いでや	ソレデモ　さても
ソウアロウトモ　さりとも	ソレコソハ　さこそ　さこそは
ソノヤウニモ　さも	ソウナラバ　さは
ソレ〳〵　こと〴〵	ソウ　さ　しか
ソウバツカリ　さのみ	ソウ〳〵　同上
ソレホド　さばかり　しかばかり	ソウナリ𪜈　さも
ソレハドウアロトカマワヌ　さもあらばあれ	ソレホドニモ　さしも
ソノマヽデ　さながら	ソレナリニ　同上
ソウシテ井ナガラ　さしながら	ソウジヤ　さぞ　しかぞ
ソシテ　さて	ソレデ　同上
ソウシテミタラバ　さては	ソノヤウニ　さ　しか
ソレガシカモ　さるは	ソンナラバ　さらば

ソウナウテサヘ　さらでだに
ソウナイノデサヘ　さなきだに
ソンナラバトイフテ　さりとて
ソウハイヒツヽ、ヤツパリ　しかすがに　さすがに
ソウジヤトイフテ　しかりとて
ソウジヤケレド　されど　しかはあれど
ソレナリトモ　そをだに
ソチ　な　なれ
ソレサヘアルニ　まして
ソウ〳〵モナラヌニヨツテ　かぎりあれば
ソノヤウニゾ　さぞ
ソレデナシニ　さらで
ソウジヤ〳〵　同上

ソウナイノサヘ　さらぬだに
ソウナウテモ　さらでも
ソリヤコソ　さればや　そじや　さればよ　〳〵くはや
ソノヤウニバカリ　しかばかり　さのみ
ソノヤウニアルナラ　しかしあらば
ソノヤウニサテモ　さも　しかも
ソマツナ　おろかなる
ソチナド　なれ
ソノマヽ、スグニ　やがて
ソレコソドウナリト　さもこそ
ソレホドニゾ　さぞ
ソレ〳〵　そよ　そよ〳〵
ソレガ　同上

ソレ　そ

ソレヨリウハメニ　よりけに　螢よりけに云〻　古

ソウオウナ　〽ふさはしき　アガメテ　御ふさひ氏　源包

ソバニオカイデハ　〽てをはなちては

ソレ〱ノシムケ　〽あて〱のこまげ　源乙

ソレハソレニシテ　〽さる物にて

ソコヲ心ザイテ　同上

ソウト云デハナウテ　さとはなしに

ソバヅカイノコドモ　〽さふらひわらは　タヾ人ニハ云ガタシ

ソ子ム　そねむ

ソレ〱ニワカル　〽しな〲しく

ソウハワルイトイフ　もどく

ソイツラ　〽すやつばら　源玉人ヲイヤシメテ云之

ソレヨリホカデ　はなれて

ソンケウスル　〽けいめいする　〽けうそうする

ソコキミガワルイ　心のおに

ソノ人ナラデハト思テ　〽あまえ〱て

ソウトモ〱　〽さかし

ソコヲメガケテ　さしはへて

ソウナラソウニモセヨ　〽さはれ

ソウシテ井ナリニ　さしながら

ソコモトタチハ　〽きんぢらは　源又蜻ナドニアリ

ソバニバヅカリ井ツケテ　みなれそなれて

ソウデハナイガト思　もどかしき

ソエル　〽もてつくる　そふる

ソウナウテカナワヌコナラ　ことならば

○つ　部

ツカマエル　とらふる

ツカマエテ井ルマモナウ　とりもあへず

ツレダヾセテ　たぐへて

ツメテ井ル　へさふらふ

ツリ出サレル　あざむかるゝ

ツイテイク　したがふ

ツヾイテイカヌ　たゆる　とだゆる　おこたる

ツヽポリト　同上

ツイ　たやすく　かやすく

ツヾケサマニ　つぎて

ツギアテル　つゞりさす　埜ノナク邑ニモ

ツミトガニモナラヌ　とがなき

ツレダツ　たぐふ

ツヽポリトタヅテ井ル　たちやすらふ　たゝずむ

ツレテイク　あざむく　いざなふ

ツカレ　いたづき　拾物名

ツヤ〳〵トスル　にほふ

ツク子ント　つく〴〵と

ツク子ントシテ井テ　ひとりして

ツイハ　たはやすく

ツメル　撕　つむ　雪ノツム又草ナドヲツムニヨセテモ

ツボヲリニハサム　へつぼさうぞくする　女ニカギレリ

ツギアテガイシテ　よそへて　思ひよそへて

ツブ〳〵ガキ　ヘはなちがき　小兒ノモノカクニ云

ツヽム　包　ヘおしくゝむ

ツマリキヅテ　ヘおしこりて　數十人ノオシ合ヰル之

ツヽシミブカイ　ヘよういふかし　ヘ心よういふかし𪜈

ツヨウナイテ　手跡　ヘよろぼはし

ツヾマヤカニ　ヘつゝやかに

ツカエガオコル　ヘむねつぶ〳〵となる　物思フナリ

ヅヽカリト　同上

ツヾラオリ　つゞらおり　マガリ坂ナリ

ツクライケガナイ　うはべなき方

ツ子ノヤウス　うつしざま　現ノサマト云之

ツキツメテ　せめて

ツヨウヤワラコウイフ　ヘいけみころしみ

ツギナ　次　ヘにのまちの

ツラ出シガナラヌ　おもなし　おもてぶせ

ツパコミニ　なへて　おしなへて　ヘおしこめて

ツヽシム　つゝむ　ヘよういする

ツクボウテ　ヘついゐて

ツミナシジヤ　ヘつみなきさまなり　小兒ノサマナリ

ヅパシリト　ヘづしやかに

ツボノウチ　ヘつぼせんざい　つぼ𪜈

ツク〳〵思フ　ヘねんずる

ツカウドナ　かど〳〵しき

ツヤウチノヤウス　ヘうちめ　衣ナリ

ツマルトコロハ　つひに　つひには

ツマリハ　同上

ツモリヨリモギヤウサンニ　ことのほか

ツケマワス　まつはす

ツクリゴトイフテ　〽こしらへて

ツガウノワルイ　〽びんなき

ツクライケナシニ　〽きすくに

ツヤ〳〵ト　〽みやびかに　にほはしく

ツキビト傳　〽かしづき

ツキノワルイ　〽けにくき

ツギヘ〳〵　〽ずんに

ツイセウイフ　〽へつらふ　〽ほとりばむ

ツンボウ　〽みゝしひ

ツキヤイニ　〽おもはずに

ツ子ノヿニナヅテ　めなれて

ツケマトウ　まつはるゝ

ツリメ眼ニナヅテ　〽まじりひきあげて

ツガウノヨサソウナ　〽さるべき

ツキモノ　〽ざけ　邪氣之　〽ものゝけ　古ハ病ヲ多クハモノ、ケトス

ツギヘウツルメ眼　〽めうつし

ツヤヲモタス　〽えんだつ　色メカス之

ツキヨヅテ　せめて

ツギヘ〳〵マワル　〽ずんながるゝ　盃ニ云又めぐる𪜈

ツキアルク　〽ついさうしありく

ツラ〳〵トイフ　〽口どにいふ

ツイニ　いまだ　まだ

○ね　部

子カラ　いまだねげに／まだをさく

子ヘイラヌ　はかなき

子イリコム　ぬる

子ヲオセバ　もとより

子ルニモオキルニモ　おきふし／おくといぬとは

子テ井ルアイダニ　ぬるがうちに

子ヌケノセヌ　おぼろげの

子ゴイ　いぎたなき

子トボケテ　へねびれて／へねをびれて

子オキノナリ（姿）　ねぐたれのかたち

子ンコウ（年功）　へらう

子カラミヌ　みるめなき戀ニ／海松和布ニヨセテモ

子コロブ　ふす

子モトガクサツテイク　もとくだちゆく／古笹ニヨメリ

子ラレヌ　ねられぬ／いもねられぬ

子サセル　しづむる／人をしづめてトヨメリ

子ヌケノシタ　おほろげならぬ

子ンイレテ　へいかめしう

子タガル　いぎたなし

子オキノカホツキ　へねびれたるかほ

子オキノカミツキ　ねみだれがみ／ねぐたれがみ

子ンガ子ンヂウ　よとゝもに

子タム　へそねむ

子ムタイ目モサメルクラ井ニ　めざましき

子テモサメテモ　里ト同

子ヨウト思ウケレド　ねむとはすれど

子ホリハホリ　あながち

子コビタイ　へひたひちかやかに　源夏イヤシキ皃トス

子ンガケル　こゝろにかくる

○な　部

ナニクワヌカホスル　ことなしぶ　しらずがほなる　ことなしび𪜈　つれなしづくる

ナンゾトイフト　ことしあれば　ことにふれて

ナイ〱　へみそかに

ナングワツモ〱　つきごろ

ナンノカノトイフテ　とふしかくふし

ナミダグム　さしぐむ涙

ナンギソウニ　わびしらに　物わびしらに

ナンニモセズニ　ことなしに

ナン子ンモ〱　としごろ

ナゲヤツテオク　とりおく

ナリユキ　ふちせ　ゆくさき

ナミヨル　よる　なみよる𪜈　衣ニヨメリ　紕ナリ

ナンテモワスレヌ　物わすれせぬ

ナイモドウゼン　あるかひもなし

ナイシヤウデソシル　へしりうごと

ナカデモイツ゚チ　わきて

ナツ゚トクサス　なごむる　なごす氏

ナラベテ　なめて　つらねて

ナガイキスル　ながらふる

ナガウイツマデモ　ながれて　ながらへ

ナキ〳〵　なく〳〵

ナニモカモ　なにも

ナツク　なつく

ナイ物ノヤウニ　なき物のごと

ナラビタツ゚テアル　なみたてる　人ニモ木ヲモ

ナガウ　ながく　ひさに

ナウテノ通リナラバ　名にしおはゞ　名

ナマル　へだむ　へ邑ゆがむ　へしただむ氏

ナント云ヿナシニ　われて　のわれて　みか月　思ふナドアリ

ナツ゚トクスル　うけひく　へきゝいるゝ

ナガ〳〵ト　打はへて　ながらへ

ナニツケル　なづくる　名

ナウテホドニモナイ　なのみ也けり　名のみして

ナガジリスル　ながゐする

ナリカワル　なりかはる

ナンノヤクニモタヽヌ　へやく　なき

ナガサレル　へながさるゝ　さすらふる

ナガイアイダ　ひさしきほど

ナガミジカナシニ　ひとしく

ナカノヨイ　〽むつましき　〽ゆるびなきなからひ

ナカヨウハナシスル　むつごと

ナサケナガル　〽うれふる

ナサケナイヤウスヲ云テヤル　〽うれへおくる

ナンノカノトサタスル　ことしげし

ナニモカモヤメニシテ　ことやめて　まづ

ナカウドニン　〽いがたうめ　源東ニミユ

泣　ナキゴヱ　〽はなごゑ

ナンベンモ〳〵　をちかへり　くりかへし　たちかへり　打かへしナドソノ外いくかへりトモヨメリ

ナンベンモナク 鳴　をちかへり鳴　しばなく　鳥之

ナカラハンヂヤクナ　〽をれたる　はしたなき　〽をれ〳〵しき

ナブリモノニナル　〽らうぜらるゝ

ナンゾヒトスヂアリソウニ　〽よしばみて

ナカヨウスル　むつぶ　むつまし

ナサケナイ　うれはしき

ナンギナ　わびしき　わづらはし

ナマヌルウナル　ぬるむ　水ニヨメリ

ナンゾノハシニハ　ことしあれば　ことにふれて

ナデタリタヽイタリ　〽いけみころしみ

泣　ナキヤム　〽はなうちかむ　なきやむ氏

ナマオボエノヿヲイフ　〽ほゝゆがめていふ

ナマジリナ人　〽をれもの

ナントモナイカホデ　〽かゝやかしからで

ナリニクイヿヤノ　かたしや

ナンゾヒトスヂアリソウナヤウスデ　〽よしめきて

ナイジヤクリスル　〽ざくりもよゝ　榮花玉臺也

ナヽマガリ　〽つゞらをり

ナゲヤリノ　なほざりの

ナニホドノヿガアロウ　〽なでうことかあらん

ナラシ　〽ならし　下ナラシナリ

ナニトヤラノ　〽何がしの　何がしの　院何かしの寺ナドアリ

ナンノナイ　難　〽ぐしたる

ナニヽフソクノナイ　〽ぐしたる

ナニトゾシテ　いかにして

ナニホド　いくら

ナン千ナン百ホド　いくそばく

ナンノヤクニタトウゾ　いでや

ナニカニツケテ　かず〳〵に

ナヲル　おこたる　病ナリ

ナントモオモハズニ　〽ないがしろに

ナサソウナ　なげの

ナンノクモナク　〽なにのいたはりもなく

ナダメル　〽なだらむる

ナンベンモボヤク　〽うめく

ナゲヤリニナラヌ　〽やごとなき　〽やうごとなき㕝

ナゼニヤラメヅタニ　あやに

ナンボホド　いかばかり

ナンゼンナン百　いくそ

ナニカドウヤラ　いさや

ナンボウデモ　さらに

ナニノタメニ　なに　なにに　なにしか

ナニシニ　同上

ナルホド　げに

ナンジヤイノ　なぞ　なぞや

ナマナカ　なか〱

ナゼニ　など　などか

ナンデゾイノ　などてかは

ナントイフ心デ　なにとて

ナント云ヿガアロゾイノ　なにかは

ナニカサシオイテマア　まづ

ナントセウ　いかにせん

ナントアロウゾ　いかならん

ナンジヤゾイノ　なぞや

ナルタケハ　あながちに

ナンベンモ　かへす〲

ナンボウソウアリ𪜈　さりとも

ナンノ　なにか　なにかは

ナンゾイノマア　なぞも

ナゼゾイノ　などかは

ナニシニマア　なにしかも

ナンジヤイフテミヤレ　なにぞは

ナンゾイノ　なにかは

ナニカナシニマア　まづ

ナントマアセウゾ　いかゞせん

ナン子ンモ〱　よをへて

ナントモシレヌ　あやし

ナンギシテ　へ、からうじて

ナルホドソウジヤ　へさかし
ナレ〳〵シウ　なれがほに

ナリフリ　へもてなし　へさま
ナイシヤウ　へわたくし

ナンギサセル　わづらはす
ナニカヤメテ　たゞ

ナニモナシニ　たゞ
ナンノヿナシニ　たゞに

ナブル　へまさぐる
ナンノツケラレヌ難　へてんつくまじき　あかぬ所なき

ナイシヤウムキノザシキ　へきたおもて
ナカノヨイ　水もるまじき　なか

ナニ丶モカニモアタル　しほじむ
ナメタカホツキ　われがほ　へしたりがほ　われはがほ

ナカダルミ　病のひま（ひま）ナトモイヘリ
ナニカニエンリヨブカイ　物づゝみする

ナダメテ　へこしらへて　へなだらめて
ナマジイナ　へよしなき

○ら　部

ラクナ　やすき
ライゲツ來月　たゝむ月

ラチモナイ　へよしなき
ラチヲツケル　わく

ライゲツニナヅタラバ　月かへて

ラクソウニ　へくつろぎ がましく

ラチガアカヌ　へはか〴〵しからず

ライチガナイ　ほどなし

ラクニミヲモツ　身　へこしのぶる

○む　部

ムチウナ　心そらなる

ムシガクウ　虫　むしはむ

ムツチヤリトシタ　あやなき あやめもしらぬ

ムシツ　ぬれぎぬ ぬれきぬき するトモツ子ニヨメリ

ムキヅナ　めでたき

ムカシ　むかし いにしへ　むかしへ

ムク　向　むかふ

ムサ〳〵トクラス人　いたづら びと

ムリハナイ　ことわり

ムヤクナ　あやなき あぢきなき　へやくなき

ムラ〳〵トスル　あはたつ 雲ナリ

ムシツノナヲトル　名　なき名たつ なき名とる

ムルイナ　世にゝぬ たぐひなき　世になき

ムカイニ出ル　むかふる 人ニテモ何ニテモ

ムシズル　虫　むしはむ

ムゾウサニ　へはしなく（ママ）

ムラサキガハゲル　紫色　はひおくるゝ	ムゴウ　〵思よりけに　〵むじんに
ムコドリスル　〵男する　〵をとこにつく	ムツカシイヿモナウ　〵かやすく　たやすく
ムシヤウニサムイ　そゞろざむし	ムヅチリト　〵ふくらかに　肥タルサマナリ
ムチヤツイタカホ　〵ねびれたるかほ	ムヅチヤリトシテ　〵ねびれて　目モト鼻モトナド云
ムサ〳〵トシタ　むつかしき	ムカシヂカイフウ　昔風　〵なかさだのすぢ　手跡ニイヘリ
ム子ガセツナイ　むねはしる　源　古ニむねはしり火ナドアリ	ムナサワギガスル　同上　むねくるし𪜈
ム子ガハリサケル　むねくるし　又同上	ム子ガイタノヤウニナル　板　〵むねつぶる　〵むねつとふたがる
ムシカゴ　虫籠　むしのこ	ムチヤツキナシニ　くまなく
ムカウヘモイカズニ　たゆたひて　ゆたのたゆたに	ムダニ　いたづらに
ムザ〳〵ト　いたづらに	ムダニ子ル　いたづらぶし
ムリナヿジヤ　わりなし	ムリヤリニ　わりなくしひて
ム子ンナ　うれたし　うれはし	ムルイニ　〵いみじく
ムドクシンナ　心づきなし　〵むじんなる	ムゴン　無言　しじま　源末

ムドクシンナ心　ひたふる心 盗人ニイヘリ

ムリムタイニ　〵まが〳〵しく

ムガニ　〵つみなきさまに 〵じはうに

ムカシメイテ　〵こだいに

ムイキニ　たどりなく

○う　部

ウカ〳〵ト　ことぞともなく

ウラミヌク　うらみはつる

ウヅスリトタツ　たなびく 雲霧霞烟ナドニ云

ウヅキリト　さやかに さやに　さやけく

ウマレツキノクセ　さが

ウマレツキガワルイ　さがにくし

ウポ〳〵ト　あくがるゝ あこがるゝ𪜈

ウソツク　いつわる

ウマアイ　おもふどち 〵とくい

ウヅサンスル　思ひやる はるけやる　なぐさむ

ウワサニキク　おとにきく

ウヅテカエテ　にはかに

ウリフタツジヤ　にたり かよふ　おぼゆ

ウヅトリトシテ井ル　ながむる

ウトロナ　むなしき うつほ

ウレシイ　うれしき 古人ハ自他ニカケテ云

ウソサビシイ　うらさびし
ウイテ出ル　うかひいづる
ウタヽ子　里ト同
ウタガウ　里ト同
ウワベ　同上
ウズガマウ　うづまく　川滝渕ナドニヨメリ
ウシロムイテミル　かへりみる
ウミノムカウノ　うみごしの　海
ウチニモソトニモ　同上
ウルソウ思フ　へにげめをつかふ
ウマレツキ　へほんじやう
ウバ　へめのと　へちぬし　へまゝ　源
ウヅサンノシカタガナイ　思ひやる　かたなし

ウイタリシヅンダリ　うきしづみ
ウキアガル　うかひいづる
ウツムケニナル　うつぶす　うつぶしぞめのナドヨセテヨメル
ウワカワ　うへ　へうはべ
ウヱナラベテ　うゑなめて　植
ウラヤマシガル　うらやむ　うらやまし
ウワベデアシラウ　心にいれぬ
ウチデモソトデモ　おくにも　とにも
ウキ／＼ト　へ花やかに
ウケアウ　へうけばる
ウソグライ　ほのぐらき　紀ニ凌晨
ウチアケテ　へおふなく
ウツヽノヤウニナツテ　われにもあらで

ウワサ　〽おと　音に聞 ナトヨムコレ之
ウツサンマデニ　〽心やりばかりに
ウチツカヌ　そゞろはしき　しづまらぬ
ウシログライ　〽なまくの
ウソギタナイ　むつかしき
*うもれト斗モ云源横ニ月夜ニ戸ヲサシコメタルヲあなうもれやトアリ
ウイダチ　〽うひだち　病起ナリ
*にのぞきたるたかどのナド源ニカケリ
ウヅテツケタ日ヨリ　かしこき日
ウレシウナイ　うし
ウキミヤツシテ　〽かゝづらひて
ウヅキリトシタ　きよらに　〽物あざやかに　〽あざやかに　〽けうらに
ウワキモノ　あだ人　すきぐしき人

ウチキデ　〽かいひそみて
ウケコタエスル　いらへ　こたふる
ウワくトシタ　同上　あだなる
ウソハヅカシイ　〽なま人わろし
ウツトシイ　いぶせし　うもれいたし又*
ウゾヤノミマイモノ　〽うぶやしなひ
ウエヘツキ出シテ　のぞきて　泉に　のぞきて又水*
ウヅテツケタ　かしこき　〽さンべき　〽さるべき
ウチコム　〽あはむる
ウタガイモナウ　うらもなく
ウヤマウ　〽けいめいする　〽けうそうする
ウツクシウ　きよらに　〽けうらに
ウワハゲノシタ　〽うはじらみたる

ウカ〳〵クラス　へ世にめぐらふ
ウヅキリセヌ　へびさうなき
ウツリギナ　へすきたわめる
ウヂ〳〵ト　たゆたひて
ウツケタヤウニ　しれ〴〵しく
ウゴ〳〵トスル　へもこよふ　紀ニ逶迤
ウメル　うづむ

○の　部

ノコラズ　のこりなく
ノミコミツケテ井ル　ときくる
ノコルカタモナク　おもひぐまなく
ノブトウ　へおしたち
ノンドリト　のどかに　うらゝかに
ノバシテオク　のどむる　へなだらむる
ノロウヤウニ　咀　へうけはしげに
ノリチガエル　のりたがふ　舟ニヨミテ法ノ違フニヨス
ノリコス　こゆる
ノヅシリト　ゆたかに　をさ〳〵しく　へよだけく
ノンビリト　へいうに
ノケタウ思ウ　へつまはじき　する
ノチヅレノコ　後妻子　へむかひばらの子
ノコリオヽイ　へくちをし

ノウ　やよ

ノツテキテ　〽あまえて

ノセラレル　〽すかさるゝ

ノコラズソノ通リデ　かぎりにて　何の――ト用ヘシ

○く　部

グワンモウ　〽のぞむこと

クツタクナシニナル　思ひはるゝ

グレハマニナル　同上

クスボル　くゆる

グワイブン　〽きこえ

クツタクスル　おもふ

クイキリガナイ　わづらふ　わづらはし

ノク　さる

ノケモノニシテオク　ふるす

ノウジヨ　能書　〽てのはかせ

クツシヤミスル　はなひる　古　はなもひぬ哉

クイチガウ　たがふ

クスベル　ふすぶる

グワイケンガ　よそめに

クイモノヲサガス　あさる

クツタクガタエヌ　おもひつきせぬ

クセヅク　ならふ

クラベアハス　くらぶる
なぞらふる

グル〱マワル　めぐる

グワイノワルイ　同上
又打あはぬ

グサ〱スル　むなしき

クツタクシクタビレテ　うらひれて
うらぶれて

クツタクナシニ　おもひなく

*いときなし氏　をさなし　きび
はなるナトイヘリ

クスンダ　〵くすしき

クラ　〵ぬりごめ
倉　〵くら氏

クワラリト　〵かはらかに
〵けせうに

クヅレカヽツテ　〵打よろぼひて

クセニナツテアル　さが

グニヤ〱ト　〵たをやぎて
〵なよ〱と

グルリニ　めぐりに　浦わ島わ
ナドノわ同之　万廻ワトカケリ

グメンノワルイ　〵びんなき

グワイブンノワルイ　〵人わらえなる
〵人わろき

クツタクガオヽイ　むすぼゝるゝ

クライ心　こゝろのくま

グワンゼガナイ　いわけなし
いとけなし　*

クチヲシイ　ねたし

グレ〱トスル　とすれば
かゝり

クスリ　ゆ煎薬之　くすり氏
やむくすり氏　止薬ナリ

クフウスル　〵かたふく

クル　くる
來　とひくる　〵よぎりくる

クセガワルイ　さがなし
さがにくし

クチノウチデイフ　〵つぶやく

クワイチウフデ　懐中筆　〽つかみじかきふんで　源

クツタクガヤム　むねあく

グド〱イフ　くねる　〽むつかる　紀ニ憤ムツカル

クタビレル　くづをる　頽ナリ

グド〱トシタ　同上

クワヱル　〽くゝむ

クロヽヲオロス　〽くるゝ戸にくぎさしかたむ

クチリコウナ　ことよき

クワイニン　懐妊　たゞならず　〽けしきばむ　〽すこしふくらかに　こしのしるしナドナホサマ〲ニイヘリ

クチクセ　ことぐさ

クラ井　〽きざみ

クワン井ヲメシアゲラレル　官位　〽御ふだけづらるゝ

クラマギレ　ゆふまぎれ　ゆふまどひ

クチスギ　〽なりはひ

クチノウチデワラウ　〽むゝとわらふ

クリコトイフ　同上

グズ〱トシタ　〽くね〲しき　〽なまくね〲しき

クヽメル　くゝむる　乳ブサニイヘリ

クチゾヱスル　〽くちいるゝ

グナ〱ト　〽なよ〱と　〽なよびかに

クスミキツテ　〽くしはてゝ　〽ふしめになりて

グワイブンノワルソウナ　〽わろびたる

クラノイヌバシリ　〽くらのまち

クチバヤニ　〽くちどに　〽舌どに　氏

クウ　〽くふ　〽はむ　〽すく　ウツホ源ナドニ　松の葉＊

*をすきて又紀ニ以レ水送レ飯トアル
送ヲスクトヨメリ　土日ニくらふ氏

○や　部

ヤカマシイ　かしかまし

ヤクソクスル　ちぎる　かねこと　契むすぶ

ヤリチガエル　かはす

ヤウ〳〵ニ　〽からうじて

ヤアコレ　いで

ヤメテシマワレヌ　同上

*萩のうれわら〻かにおけるしら
つゆトヨメルコレナリ

ヤセボウシ　〽そびやぐ　かげとなる身古

ヤレノウ　やよ　〽や　源箒ニやとおびゆれどトアリ　〽や〻　同良
ニや〻とおどろかしトアリ　子タル人ヲヨビオコス声ナリ

ヤブヅテステル　〽やりかくす　〽やりすつる

ヤカマシイオト　さやぐ

ヤクニツク　役　〽うけたまはる

ヤセル　おもやせ　面ノ痩ルㇾ　おもひやする　かげとなる

ヤミツク　〽こ〻ちそこなふ　得病ナリ

ヤメニシラレヌ　〽とぢむまじき

ヤアワリト　〽やをら　わ〻らかに　〽やわら　万ニ秋*

ヤマノヤウス　山　山のた〻ずまひ

ヤマイアガリ　〽うひたち

ヤブル　やる

ヤスム　やすむ　やすらふ

ヤセボウシニナル　同上

ヤマカラノミヤゲ　山づと

ヤツパリ　なほ

ヤウスガチガウテ　＼やうかはりて

ヤクニモタヽズニ　＼ふように

ヤクニタヽヌ　＼ふようなる

ヤメタリシタリスル　すさふ　すさふ　雨すさふ　やきすさふ　ふりすさふナド皆此義ナリ　風すさふ　吹

ヤマイガオモル　＼あつしくなる　紀篤癃アツイ

ヤレオソレオヽヤ　＼あなかしこ　＼あなかしこや

ヤツヽサガリ　未時　＼ひつじくだる　何ノ時ニモ云ベシ

ヤヅカイ　ほだし

ヤチウ　＼よなか

ヤセコケル　＼やせさらぼふ　かげとなる

ヤマノイリクチ　山　やまぐち

ヤガテ　いま

ヤウス　けはひ

ヤブレタトコロ　まよひ　万ニ衣ノヿニイヒ源ニ茵ニイヘリ

ヤクメノヤウニ　やくと　わざと　こと〻

ヤンデハ思ヒ〳〵スル　心のすさひ

ヤレオソロシヤ　＼あなおそろし

ヤサシイコト　＼みやび　伊物

ヤクソクゴト　＼すくせ

ヤゼン　＼よべ　＼よんべ土日

ヤメニシテ　おきて　＼ことやめて

ヤレ〳〵　あな　あはれ

○ま部

マイニチ　ひごとに　朝な夕な

マイヨ　同上

マゼコゼニシテ　こきまぜて

マヘカタカラ　はやく

マイモドツテ　たちかへり　をちかへり

マイ〳〵シテ井ル　いざよふ　たゆたふ

マヘカタモ　へさき〴〵も

マンナカ　同上

マイニチマイバン　朝な夕な　くるとあくと

マ子スル　まねぶ　人まね　古俳

マイバン　よごとに　よな〳〵　よる〳〵

マイアサ　朝ごとに　朝な〳〵　あさなげに　朝にげに

マゼコゼニトリコム　こきいるゝ　袖ニヨメリ

マヘカタノナリデ　はやながら

マイカゼ　吹まく風　いりもみする風

マツサカリ　さかり　さきみつる

マツサイチウ　もなか

マケギライ　へ物ねたみする人

マアザツト　あら　すきかへし　古ニあらナドアリ

マツセ　末世　末の世　ながれての世　くだりての世　にごりの末

マヅスグナ　すぐなる　すなほなる　なほき
マタヾノミ　人づて
マンゾクナ　こゝろゆく
マケズオトラズ　いどましき
マカナイバヾ　ヘたらめ　をさめ　紀ニ専領ヲ訓ス
マンロクニナイ　ヘかたはなる　なのめなる
マシヤウメンナ　ヘ同上
マリバ　鞠場　まりば　かゝり𪜈
マガリサカ　坂　ヘつゞらをり
マル／＼トコエテ　ヘつぶ／＼と　こえて
マコトシヤカニ　つぎ／＼しく　なほ／＼しく
マギラカス　まぎらす
マヘカラ　もとより

マタギヽ　人づて
マヅテ井ルカナンゾノヤウニ　まちがほに
マケル　おとる　まくる
マイカヘス　舞　ヘいりあや　楽ヲクリカヘシ舞之　源ニアリ
マル　ヘしのばこ　ヘはこ𪜈　葉器ナリ
マンロクナ　ヘまほなる
マイチド　ヘかへさひ　源かへさひ申給ナドアリ
マワリ道デナイ　ヘよきぬみち
マル／＼ト　ヘつぶ／＼と　肥ル之　圓ツブラト訓ズ
マヨケスル　魔除　ヘつるうちする
マガリナシニ　くまなく　曲ヲクマト訓
マギレテシレヌ　まぎるゝ
マダカ／＼　いつしかと

マア　いま
マヘビロニ　かねて
マンザラニ　うつたへに
マタシテモ　ともすれば
マタベツダンニ　同上　ことに
マダラニ　里ト同　かのこまだらに　人丸ヿ
マブタ　へまがは　眶之
マジヤウニ　まごゝろに
マクラガミニ　里ト同　枕ノ上ナリ
マコトニセヌ　へけんぎする　うたがふヿ
マンロクニイカヌ　ふてうなる　不調之
マイタキヌ　絎　へこしざし　腰ニサスベケレバイフニヤ
マモリガタナ　みはかし　みハ尊称ナリ

マモナウ　あへず
マヘビロカラ　かねてより
マア〱　かつ〲
マタホカニ　また
マタトナイ　たぐひなき　へになき
マケタクワタイ　へまけわざ
マケヌ氣キ　へまけじ　だましゐ
マナザシ　へまぶし
マシニ　けに　螢よりけにト占ニヨメルコレ之　異ケ之
マタトアルマイホドナ　へけうなる　希有之
マカリチガウタラバ　ことあやまりに
マツシロニ　しろく　ましろに
マケヲシイ　ねたし

マヅスグニ　なほく たゞに　すぐに すなほに

マチオヽセテ　まちつけて まちえて

マタゲル　またぐ

マカレテオイテ　まかせて

マツベテ　あつめて つかねて

マケマイト　へまけじ たましゐに

マチタイクツスル　まちわぶる

マチボウケニアウ　まちふくる まちあかす

マタゲテイキタウ思　またぐ心 古俳

マガイモナウ　さだかに しるく

マンガチニ　へおしのけて

○け　部

ケウニイヅテ　心ゆきて 心にのりて

ケシカラズハヤウ　いとはやも

ゲヒンナ　いやしき あやしきモ

ゲンザイニ　うつゝに まのあたり

ゲンヂウニ　へいつくしく

ケブナ　あやしき

ケシカラヌ　いと

ケンジヤウムキニ　なみに

ケツマヅク　つまづく

ゲイニヌケル　へいうそく

ケガレテクル　〽いきぶれ
＊ばうぞくなるもてなしなるト源ニアリ　放俗ノ義ニヤ
ケシカケル　〽むかひ火つくる　紀ニ向燒
ケウガル　あさましき
ケイ〱シウ　〽けゞしく
ゲス　〽里ト同　下種ナリ
ケイヲヒク　〽けをかくる
ケガニモ　〽ことあやまりにも
ゲヒンニシヤベル　〽さえづる　あまのさえづり
ケヅサイスル　〽きよまはる
ケダカイ　〽あてなる　〽あてびて
ケンソナ　さかしき　〽すくよかなる
ケリチラス　〽くえはらゝかす　紀ニ蹴散

ゲビタヤウス　〽ばうぞくなる　むねあらはに＊
ゲビタカホツキ　〽しもがちなる　おもやう
ケイコゴト　〽ざえ
ケウノサメタ　同上
ケニクイ　〽けにくき
ケンブツ　〽けさうの人　見證ノ義ナリ
ケンドウニ　〽こちなく
ゲビタコヱ　〽あはつけき声
ゲヒンナ　さとびたる　〽あはつけき
ケチナ　ゆゝしき
ゲンキガナイ　〽あえかに
ケレウ　たとへは　たとひ
ケンドウニイフ　そは〱しく　いふ

ケイキ　けしき　けはひ

ケヅク　なか〳〵に

ケヅシテ　思ふもしるく

○ふ部

フソウオウナ　おほけなき

フンバリ　みさほ

フルイオトス　はらふ

フミトマル　とまる

フハンジヤウナ　時ならぬ　時をえぬ

フカウスル　ふかむる　かむる又色ヲモヨメリ　春をふ

フリヤウ　ふりは　霜のふりは　古ニトアリ

フタヤウニ　同上

ケライ　へずゝさ　へらうどう

ケイキマデニ　けしきばかりに

フンコツシテ　身にかへて

フク　のごふ　泪ニヨメリ

フユキセヌ　不凋　葉がへせぬ　はがへぬ

フダンニ　とはに　つねに

フミチヤ〳〵クル　ふみしたく

フクトサヘイヘバ　ふきとふく　風ナリ

フタトヲリニ　ふたしへに　二方ニナリ

フタマタニ　同上

フリオ・セヌ　ふりとげぬ　雨雪ノルイナリ

フタニナル　同上　おほふ氏

フタツハイヅテ井ル　ふたごもりする　蠶ナリ

フリコメラレル　ふりこめらるゝ

フキタヲス　ふきしをる　ふきなびかす風之

フタニスル　おほふ　又同上

*すりするナドモイヘリ　八重垣つくるモコレ之イトヒロキヲ云ベシ

フダンタイセツニスル　ヘいつく　ヘいつきすうる　ヘかしづく

フイヲウタレル　おどろかさるゝ

ブンダツテ　わきて　ことに

*ルヲイヘド古語ニハ長病ナラデハイハズ得病ハこゝちそこなふト云

フウゼツ　人ごと

フツガウナ　同上

フサガル　ふたがる

フシマロブ　ふしかへる　ふしまろぶ氏

フンデミル　ふみ見る　文ヲ見ルニヨセテ

フミマヨウ　まよふ　まどふ　ふみまよふ　ふみまどふ

フサグ　おほふ　ふたぐ　とづる

フシンスル　とのづくりする　貴カラズハイフベカラズ*

フソクナ　あかず

フシギナ　あやしき　おぼつかなき　ヘいぶかしき

フイヲウツ　おどろかす

ブラ〳〵ヤマイ　ヘわづらふ　俗ニ病ヲ得タ*

フダンノヿニナヅテ　めづらしげなく

フグメンナ　ヘびんなき　ヘふびんなる

フグアイナ　同上

フツクイフ　うらむる

フゲンキニ　〱ひはづに　〱あえかに

フシンシナヲス　〱家つくりあらたむ　拾ニアリ

フエンリヨニ　〱おしたち　〱おこがましく　〱おこに

フケイキニナル　おとろふる　時うしなふ

フタリ同ジヤウニ思　おもひどち

ブラツク　たゞよふ

フウフニナル（夫婦）　〱たぐふ

フシアワセナ　時ならぬ　時をえぬ

*なるこゝちすト源野ニアリモノ
オモヒニ留飲シタルナリ

フツクリト　〱ふくらかに　〱ふくよかに氏　肥タルヽ之

フデ　ふで　ふんで氏　源澪

ブシツケナ　〱なめげなる　なめし　紀ニ同上　〱むらいなる　ナトサマノ〱ナリ　無礼之

フンジツスル　うしなふ

フダンヨリモ　つねよりも

フシンセツナ　おろかなる

フケイキナ　時おとろふ

フタツトナイ　たぐひなき　になき

フイト　わくらはに　〱ふと　〱ふいに

ブラツカス　たゞよはす

フウフ（夫婦）　〱たぐひ

ブツ〱トナル（鳴）　〱つぶ〱となる　むねつぶ〱と*

ブタ〱ト　〱つぶ〱と　肥タルサマ之

フデノチク　つか

フウジタジヤウ（状）　〱つゝみぶみ

ブシツケラシイ　〵なめげなる

フルイ〳〵アルク　〵うすづく　みかどもりのさむげなるけはひ
うすづきいてきてもトアリ　源槿サムゲナルサマナリ

フルイ〳〵　わなゝく〳〵

フウガワリニ　〵やうはなれて
〵やうかはりて

ブキヤウナ　〵つたなき
みじかき心

ブンザイ　〵きは

ブラツイテ　〵より所なく
よるべなく

フソクヲイヒタソウニスル　ふすぶる

フデキナ　〵ふてうなる

フルマイスル　〵あるじする

フカイリヨウケンモナウ　〵あさへたる
たどらず

ブツダンノトウメウ　〵みあかし

*きならしの衣ナトモヨメリ

フタリノナカ　〵なか
〵なからひ

フジユウノナイ　〵やんごとなき
貴人ヲ云

ブラツイテ井ル　たゆたふ
ゆたのたゆた

フツト　もはら

ブンゲン　同上

ブンフソウオウナ　身におはぬ
みにあまる

フサウ　〵ふさはしき

ブコツナ　〵こちなし
〵こち〴〵し

ブナンニ　〵あゑかに　和名淡路
郷ノ名平安ヲアヱカトアリ

フスマ　〵さうじ

フダンキテ井ルキモノ　みなれ衣
きなれ衣*

フシヤウ〴〵ニ　〵しぶ〳〵に

フウノヨイ　へしなやかなる

フクロベル　ほころぶる

フリノコサレル　すもりになる　鳥ノ巣モリヨリ云

フツヽカナ　へふつゝかなる

○こ　部

コヽロカラ　こゝろから　こゝろづから

コイ　こ　同上義ナリ

コトヅケル　ことづくる

コレハコレソレハソレト　こと／＼

コヽロイキ　こゝろばせ　古物名

コガレジニ　こひしぬ

コリル　こる　こりぬハ　コリサルナリ

フダンノヿデナイ　へひざうなる　非常之

ブテウホウナ物イヒ　へすげみたる　口つき

フリカヘツテミル　かへりみる

ゴザレ　こ　來ヨノ心之

コトヅケ　ことづて　つて𪜈

コヽロモチ　こゝち

コヽロボソイ　心ぼそし

コヽロヲハナサス　こゝろおく

コヽロヲカヘ／＼スル　心がへする

コリズニ　こりずまに　こりず

コヽロヨウイフ　ことよき
コボレル　こぼるゝ
コヽロオモシロウ　心にのりて　心ゆく
コンザツスル　みだるゝ　〳らがはし
コシガフタエニナル　みつわぐむ
コヽロガヲサメニクイ　たぎつ心
コチラヘコヌヤウニスル　ふせぐ
コヽロザス　さす
コウシヨクメク　すき〴〵し
コヽロヲカケル　〳けさうずる　〳よばふ
コヽロエチガイ　あやまたる　あやまつ
コラエニクイヲコラエル　おもひせく
コマル　わづらふ

コチラアチラ　このもかのも　こなたかなた
コヽロエテ　こゝろして
ゴツチヤニナル　みだるゝ
コツポリトハイル　こもる
ゴガナイ　はかりなき　ごもなく
コヽロヤスウ　〳かやすく　たはやすく
コヾヱデハナシスル　小声　〳さゝやく　〳さゝめごと　〳さゝめく
コウシヨク　好色　すく　〳色このむ　〳すきたわむ
コスリツケル　する
コヽロニシユミコムヿ　あはれ
コトバヲツガウ　契る　〳ことにむすぶ　〳いひ契る
コヽロ子　したのこゝろ
コンジヤウ　こゝろ

コンジヤノワルイ（ママ）　＼きたなき心　紀ニ黒心

ゴザ〳〵トカタマツテ　むれて

コヽロガヽリガナイ　うしろやすし　心やすし

コヽロ子ヲフソクイフ　うらを　うらむる

コヽロナイ　心もしらぬ　心なき

コヽロニハナレヌ　＼こゝろづきに　おもふ

コリヌイタ　こりとも　こりぬ

コヱヲアゲル　音たつる　ねにたつる

コヽロエチガイシテ　ことあや　まりに

コマイ　こじ　來ラジト思之

コ子バコンデ　こずはこず

コヽロニキヅシリトアタル　おぼゆる　むかしおぼゆる　神代おぼゆ　るナドイフコレナリ

コラエオヽセラレヌ　たへはて　がたき

ゴクツブシ　人かずならぬ　かずにもあらぬ　数ならぬ

コヽロガヽリナ　うしろめたき

コヽロヲウチアケル　うらとくる　打とくる　心とくる

コグチ　つま　はし

コゲル　こがるゝ

コヽロノコリガナイ　心ゆく　＼あかぬ所なし

コヽロヲシヅメル　心しづむる

コトガオコツテ　＼ことありて

コチラノホウ　こなた

ゴザレト云ヤウナ　こてふににたる

コウキムキノヿ　＼おほやけごと

コヽロホドニイカヌ　思ふかためは　あかぬ

コトワリイフ　へいなふ

*ニアリ屋根ノ板ヲフク下ニウチナラベタル細キ木ナリ

コ丶ロデワロウテ井ルヤウス　へはなましろく

コビヘツラウ　へほとりばみ

コトノオシテ　琴　へとりのゆのてつき

コワイ　へおそろしき　へむくつけき　へむく〳〵しき　へおどろ〳〵しき

コミイヅテ　へおりたちて　へおもだちて

コワガル　へおづ　へおぢこうずる

コウジテ　へこうじて

コドモラシウ　へわらはげにて　へをさなげに

コノウヱモナウ　へこよなく　かみなき

コソ〳〵ト　へかいほそりて　やをらかいほそりていでたまふト源ニアリ身ヲチヾメテノ心ナリ

コヱモタテズニイフ　へいきのしたにいふ

コマ井　へはねねのみのこりて板ぶきはほト源*

コウノナイテ　書　功　へはなちがき　小兒ノ手跡之

コヅラニクイ　へにくらかに　へけにくき

コトヒク　琴　かきならす　かきなす氏

コラヱル　たふる　ねんずる　おもひねんずる

コ丶ロヅカイモナイ　へおだしき　うしろやすき

コゾリアフテ　へおしこりて　へこぞりて

コマリイル　へこうずる　へこうじて氏

コ丶ロデダイジニ思テ井ル　へわたくし物に思ふ

コノヤウナ　へかゝる　へかうやうの

コンモリト　へかごかに

コ丶ロガマヘスル　へよういする

ゴテン　御殿　＼おとゞ

コリコウニ　＼つゞやかに

コエル　肥　こえて　こゆる　氏

＊紀ニ嗜ヲツナムトヨメリサレバヨウ井ナクイトミニク丶ケニクキカホトイフナルベシ又万ニモヨメルツナシト云魚アリソレガヤウニニクキ貞トニヤ

コトバノ尾ニトリツイテイフ　＼つま甚

コンジン　金神　＼なか丶み　長中兩説　コレヲヨクルヲかた丶がへト云

コダワリヲ心ニコシラエテ　＼むかひ火つくる

コウケン　＼うしろみ

コウシヤニ　＼ぐうづきて

コレノウ　＼や＼や丶　やよや

ゴザ〱ト　同上

コノイカイコトノ　こ丶らの

コラエカ子テ　あへず

コ丶ヲダイジト　＼だいじと

コ丶ロオボエ　＼つまじるししをり

コヅラニクイカホ　＼つなしにくきかほ　＊

コト丶モセズニ　＼ないがしろに＼ことにもあらず

コウ　功　＼らう

コワイノヲコラエル　＼むねつぶ〱となる

コ丶ロノコリナ　うらめし

コ丶ロヲクダク　里ト同　又心つくし

ゴタ〱ト　＼くだ〱しくこちたく

コレホド　かばかり　かくばかり

コレホドタントノ　同上

コ丶デコソト　をりはへなりはへて

コウ　かく

コノマヽデ　かくながら

コウシタ　かゝる

コレガカノ　これやこの

コノ通リノ事ジヤハサテ　さぞな

コレガソレデアロウ　こやそなるらん

コレクラ井　かばかり　かくばかり

コレゾトイフテ　へとりたてゝ

コンカギリ　心づくし

コノヤウニシテ　かくて

ゴマヲタク　へけしやく　けしの香ナドアリ

コウケンスル　へ筆のしりとる　へうしろみする

コヽロデサダメテオク　へ心おきて　紀ニ居懐

コノヤウニ　同上

コウシテコレナリニ　かくしつゝ

コノヤウナ　同上

コレハ　こは　こや　下疑ベシ

コトアタラシウ　さらに　さらにも

コレハマタ　はた

コバラノタツ　心やまし

コヽロモトナイ　おぼつかなし

コシガカヾム　へみつわぐむ　さす氏　へおいかゞまる

コンイヲウケル　へけしきたまはる　貴人ヨリ之

ゴシユイン　御朱印　へけん

コフウナ　へふるめいたる　へこだいなる　へこだいに

コトガオヽイ　こちたし　万事痛

コトバダクサンナ　こちたし　万言痛

コヽロヨウイ　〽心がまへ

コヅチヘゴザレ　〽こちや　〽こちこ

コヽロナシデ　思ひなしに　心のなしに

コチノコ　〽あこ　吾兒ト云之童ヲシタシム称ナリ

コマカイテヲヒク　すがゞく　琴ナリ

コブリナ　〽さゝやかなる

*童子佩レ鑴ノ心ニテイフ詞ニヤ

コヽロアテ　あらまし　〽がね　坊がね　后がね　むこがね　ナトイフコレナリカ子テシカ思ヒオクナリ

コトヒクテツキ　〽ゆしあんずる　琴　ゆハ左手あんハ右之

コオヽテタマラヌ　身もしむるやうに

コシヤクニ　〽さくじり

コシカケテ　〽しりかけて

コヽロマチニマツ　したまつ

コヽロモウケ　同上

コヽロヅカイガナイ　〽心おきなし

コヱノアンバイ　〽こはざま

コマカイ　〽こまやかなる

コヽロザイテ　さして　さしはへて

コザカシイ　〽さくじり　鑴ナリ詩ニ*

コトヨセテ　ことづけて　かこちて

ゴリヤウブン　〽みさう

コジケル　〽しゝこらかす

コシガヨワイ　〽しりびに

コヽロイツパイ　もろごゝろに

コイメノヒクイヲ子ガウ　＼せうさい／＼といふ 双六ナリ

コンカギリ　こゝろながく

○え部幷ゑ

エコヒイキスル　身をわくる　＼物による

エリワリ　＼わざと さしはへて　ふりはへて

エンリヨナシニ　＼おしたち なく　はゞからず　＼たけく　＼なにのいたはりも

エンザ　＼わらふだ 圓座ナリ

エシレモナイ　うたて

エモンツクラウ　＼けさうする

エリキライスル　人わきする

エンポウニミル　ふりさけみる

コシラエスル　＼まうけする いそぎ

エダガデキル　枝 さえだ さす

エンポウニ　遠く はるかに　めもはるに

エンノナイ人　うとき人

エキモナイヿニ　いたづらに

ヱツボニイル　＼ゑみのまゆ ひらく

ヱイリノソウシモノ　畫　＼物がたりゑ

○て　部

テウシニノツテ　のりて　心にのりて

テンガウガマゴトニナル　たはむれにくし

天 テンヲフサグ　あまぎる　雪ナドニヨメリ

デニクイ　いてがて

テマエムキノ　へわたくしの　人やりならぬ

テモトニアルヤウナ　手にとるばかり

テマエバカリノ心デ　心ひとつに

テホン　へほん　手跡ヲナラフナリ　へてほん𪜈

デヌケタ　ぬけたる　拔羣之

*ガキニモセズ　風流メカヌナリ　行ヲナラベカキテ

テバシカソウニ　同上

テンガウスル　たはふるゝ　たはるゝ

手 テヾサガシアタル　さぐる

デクワシテ　あひにあひて

テゴタエ　しるし

テオボエ　かひ

テマエノホウ　こなた

デキバエガセヌ　へいできえして

テモサヽスマイ　ちりもすゑじ

テヅヽナカキヤウ　へおひつきかく　文ノチラシ*

テオボエノアリソウニ　へかひ〳〵しく

テウドヨイヿジヤ　へよかんなり

テンガウラシイ　＼ざればむ
テニイレル　しむる
テニイツテ　＼ぐうづきて
＼らうありて
テウドコノ通リ　さこそは
デスギテ　＼さしすぎて
＼さしすぐして
テザツリ　同上
テソボリスル　＼てまさぐる
＼まさぐる
テナライノシヽヤウ　＼てのはかせ
テキタワレル　敵　あたまる丶　万ニあたみたる虎トヨメルコレ
ナリ　仇ムノ義ナリ
テウドヨカロウ　あへなん
＼ふさはしからん
テゴワナシユセキ　＼いかれるて
テツキ　里ト同
テカケ　妾　＼めしうど

デンツギ〳〵ニ　つぎ〳〵に
テヅヨウカク　書　＼もじづよう
デムカウ　むかふる
デアイガシラニ　うちつけに
テアタリ　てさぐり
テアソビ　＼まさぐり
もの
テイ子イナ　＼くはしき
テモチブサタデ　あへなく
テゴトヲヒク　すがゞく
琴ナリ
テモト　てつき
テノビニナツテ　＼たゆめて
テシブイ　＼しうねき

テアツウ　へしたゝかに
テキ、　へうつくしくひねる　物ヲヌフナリ源習
テンマク　幕　へひらばり
テガルウ　すが／＼と
テジヤウブナ　へすく／＼しき　ナドイヘリ　へすくよかなる　へしたゝかに
テマガイル　へいとまいる

テミジカニ　へひぢゝかに
テンガウノヤウニヒク　へひきまさぐる　箏ニイヘリ
テヲノバシテ　へおよびて
テギレイニ　へきよらに　きよく　へけうらに氏

○あ　部

アテズツポウニ　心あてに
アツチコツチ　をちこち　万ニ彼此
アシツイデニ　足　みちゆきぶりに
アトデ　のちに
アチラコチラヘ子ル　とふしかくふし

アチラヤコチラニ　こなたかなたに
アレコレト　これかれ
アトノアトマデ　のち／＼まで　ありてのゝちも
アガル　のぼる
アテニスル　たのむ

アテニサセル　たのめ　たのむる
アライオトス　あらふ　すゝぐ
アタラシウナル　あらたまる
アタカタキ　あた　仇ナリ
アヤカリニクイ　あえがたき
アチラノホウ　あなた
アサバン　あさな夕な
アシヤスメモセズニ　あしもやすめず　あしたゆく
アルヤウデナイ　ありてなし
アルヤラナイヤラ　あるかなきか
アサ子　あさい
アウジセツ　逢　あふご　栂ニカケテ　古ニ
アトニノコツテ　おくれて

アンラクナ　たのしき
アタマヲアゲル　へかしらもたぐる
アヂモシヤ〳〵リモナイ　味　あぢきなき
アヤカツテ　あえて
アカイ　あかし　赤モ明モ
アサ〳〵　あさな〳〵　あさなげに
アヒ〳〵シテキタ　あひこし
アチラムキノホウ　あなたおもて
アルモナイモドウゼン　ありてなし
アリドコロ　ありか
アヅタラ　あたら　あたらしき
アイダナシニ　ほどなく
アトニナツテ　おくれて

アンジ子ニ子イル　おもひね
アンナイシヤ　しるべ
アカヲヌク　きよむる
アトノノコリ　なごり
アリタケコタケ　かぎり
＊ナドアリ　コレハ花或ハカヅラナト
ナリ又かざしの玉モアリ
アタマヲ出ス　かしらさし　いだす
アシモトニアルホドニ　かげふむ　ばかり
アタマモアゲズニ　おきもあがらず　モノウキ体ナリ
アホウ　おろかなる　へかたくななる
アワテフタメキ　いそぎまどはし
アラワニナシニイフ　ほのめかす　かすむる　かすめなすナド
アリ紀ニ畧ヲカスムトヨメルニテ思フベシ
アホウノヤウニナヅテ　へしれて　へほけしれて

アンナイナシニハイル　へおしいる
アンナイスル　へせうそこする　へあないする
アカヌケノシタ　へきよき　へきよらに　へけうらに
アリソウモナイ　なげの
アタマニサス（頭）　かざす　をりかざす＊
アタマ　かしら
アリガタイ　かしこき
アブノウ思ウ　心もとなし
アガヅクリオリタリ　おりのぼり　のほりくだり
アヤマル　へかしこまりいふ
アマリモノニナル　はふるゝ　へあふるゝ
アタヽカウナル　ぬるむ　水ニイフ＊

*ツ子ナリ　又身さへぬるみてト
モヨミ源ニモシカカケリ

アニ　〈せうと　〈なせ　〈このかみ

アマヤドリ　かさやどり

アブナイ　あやうし

アトサキノカンガヘナシニ　たどり心なく

*ろすくなしトモアリ　年ワカキ
人ノ心モチヲイヘリ

アテドナシニ　たづきもしらず

アトサキヲモツトモラシウ　つぎ〳〵しく

アリアワサヌ　〈うちあはぬ

アリツキ　よすが　よるべ

アヽサテ　あはれ

アツチニアルモノハ　あは

アヽ　同上

アンジフクレテ　〈おもひふくれて

アネ　〈なね　〈いろね　〈このかみ　源松

アフギ　かはぼり　扇　夏ノ扇ナリ

アブナソウニナイ　あやうげもなし

アトサキミズニ　同上　たどりごゝ*

アテジマイニ　そらに　うちつけに

アバレル　〈そほるゝ　〈そほれてモ

アリノマヽナ心　うらなき　うはべなき

アトカラヂキニ　〈打すがひて　〈おひすがひて

アチラムキニ　そがひに

アイダ　ほど

アラ　あな

アンマリ　あまり

アレハソウジヤガト　かはと

アテモナシニ　すゞろに　遊ニ湯

アホラシイ　＼おこがまし　＼おこなり氏

アトサキミテ　たどりて

アイダニ　まれに

アカヌケガシテ　＼けざやかに　＼物あざやか

アンバイガツク　＼けしきばむ　＼よしばむ

アンバイガコヅラニクイ　けにくし

アナホゼリニ　あながちに

アサロウナル　あせて　色あせてナトヨメリ　水あせて

アサライ　あさき　あさはかなる

朝 アサハヤウ　同上

アイキヤウガコボレル　＼あいだれたり

アノ　かの

アザトイ　はかなし

アンドジヤ　心やすし

アレホド　さばかり

アヲツ　またゝく　灯ナリ

アンバイ　けしき　けはひ　け

アンバイガサヅパリトアル　＼けざやかに　＼けざやき

アタリ／＼　ふし／＼

アヅタラモノナ　＼あたらしき

アソビゴトノタ子　＼あそびぐさ　小兒ノ可愛スヲ云

朝 アサトウ　＼つとめて　朝まだき

アテニシガイノナイ　あひなだのみ

アラクマシイ　あらましき　波ノ音ナドヲ云

アゲクノハテニハ　はて〳〵は
*思フヲシリテミツカラソコニノミナル、義ナリ
アタリマエデアロウ　へあへなん
アイタテナイ　へあいなし　へあいだちなし
アセガピツタリト　へあせもしとゝに
アソビトモダチ　同上
アナタサマ　へあが君　へあがほとけ　人ヲタヽヘテイフ之　ウツホニハわがきみほとけトモイヘリ
アツブテキナ　へあつごえたる
アラタメテ　さらに　さらがへりて　ことさらに
アルタツイデ　ゆくて　道ゆきぶりトモ
アルキ〳〵　ゆく〳〵と　ゆく〳〵
アルキブリ　あゆまひ
*人わろきそやト源梅ニアリ

アマエル　へあまえて　彼カ我ヲフカク*
アトヲクラマス　あとをくらう　なす
アイソガナイ　あへなし
アソコニ　へあしこに　源葉寄等ニアリ
アソビアイテ　へあそひがたき　童ノ友ナリ
アツクロシイ　へあつかはしき　暑
アブセル　へさといかくる　源槇ニ香炉ヲ人ニ打カクルニイヘリ
アヲザメテ　へさをに
アシツイデ　同上
アルキモツテ　同上
アトスボリニ　しりびに　いとしりびに＊
アンナイナシニ　ゆぐりなく　紀ニ不意之間

アマエタ物イヒ　〽したつき　和名譂誕

アヂナ物ヲクウヤウナ　〽あはつかに　淡ノ字義ナリ　〽あはつけく　〽あは〳〵しく

アレコレト　〽何くれと　〽これかれ

アンマリキガタカウテ　すみすぎて

アグミハテル　〽ごうずる

アカヂノニシキ　〽ひごんき

アラウ　あらふ　すます　髮ヲスマスト云フモアリ

アイソガツキル　めであさむ

アワテル　〽あはつる　〽すだきあはて　源横

○さ　部

サツパリトシレル　〽けちえんなる　掲焉之　さだかに

ザツトスル　〽ことそぐ

サシツケテ　さしはへて

サキバライ　〽さきをおふ　前駈ナリ

ザンゲン　〽さかしら　〽ざうげん

サゲガミノヤウス　〽かみのさがりは

サシヅスル　〽ふでのしりとる　コレハタトヘニ筆ト云之

サヽヤク　さゝめく　万ニ耳言

サシデヽ　〽さしすぐして　〽さしすぎて

サツト　さと

サジキ　さじき　紀ニ假庪サズキトアリ

サワギスク　〽ゆすりみつる

サンキヤクナ　〽ものげなき 〽かるぐしき

サヅパリトスマヌ　〽てうたぬ 双六ニカケテ云 源夏

サテモ〳〵も　同上

サア　いざ

サゾ　しかぞ さぞ

サイカクスル　〽たばかる

サルホドニ　さも

サゾ〳〵　さぞな

サレバコソ　さればよ

サガス　たづぬる さぐる とむる

サダマリノ外ニナル　のりたがふ 舟ナドニヨセテ

サス　里ト同 とづる さす 戸ナドニ云

ザヅザトナガレル　たぎる 水涙ナドニ云

サツギマツル　〽あはつる 源横笛だちなとすだきあはて給

サテモ　さも も アユヒ云

サレバドウアルカ　いさ

サアソンナラ　いざゝ

ザンネンナ　〽くちをしき

ザツナ　〽らうがはしき

サヤウノコジヤ　さぞ

サリトテハ　里ト同

サヅパリト　さやかに さだかに

サワル　ふるゝ

サシアワシテ　折しもあれ 時しもあれ

サマ〳〵ニナル　となりかくなり

サガリヤウ　さがりは 髪ニイヘリ 源箒

サムイ　さむし　さゆる

サカサマニ　里ト同

サシツカエル　さわる

サルトコロヘイク　ヽ物へまかる　洛外ニ云ヘシ

サンリサガヅテ　おくれて

サマ／＼ナ心　おれる心　古長藤衣おれる心トアリ

サイゲンノナイ　かぎりなき　はてなき

ザツトコヽロエタ　おろかなる

サトル　ヽ思ひしる　晤道ノ了ハヤガテサトルトイヘリ

産　サンノイミアキ　ヽいかにあたる　いかトハ五十日ナリ　いかのもち　ゐナドイフモコノ寸ノ了ナリ

ザシキ　ヽいでゐ

サモシイ心　ヽはらぎたなし

サシアシスル　ヽぬきあしにあゆむ

サキニタツ　さきだつ　さきにたつ　氏

サラス　里ト同

サイタノモサカヌノモ　さきさかず　花之

ザツト　あら　古あらすきかへしトアリ

サマ／＼ニ思ウ　おもひみだるゝ

サイドスル　人わたす

サタマヅタ了ガナイ　つねなき　さだめなき

サガル　おるゝ　下宿スルナリ

サンヌル　いぬる　いにし　いぬる十よかナドイヘリ

サダマリ外へ出ル　ヽはふるゝ　あふるゝ

サイナンウケル　ぬれきぬきる

サガシアタラレヌ　ヽおひまとはして

サビシイズキ　〽人うとうもてなす

サイワイナ日ガラ　〽かしこき日

サワガシイソラ　そらのみだれ

サノミナンノナイ　〽つみかろげなる

サヽワリ　〽つゝが　源ニわか身につゝかあることゝちすト　病ノ亅ニモイフナリ　アリ

サイシキヱ　彩色画　〽つくりゑ　源須

サカニクル　逆　ねぢけたる　ねぢけがましき

サワガシイ　〽らうがはしき

サキタヽセル　〽うしなふ　人ヲ我ヨリ先ニ死セシメシ之

サリナガラ　〽しかはあれど　〽さはあれど

サイチウ　時と

サイシヨ　はじめ

○き　部

キガ子スル　心おく

キヲオカヌ　心とくる　うらなき　打とくる

キノシレヌトコロ　心のくま

キル　伐木　こる　木　つま木　たきゞ　杣　宮木*

*ナトヨメリ　こりつむハキリテツミオクヽ　㦲ニヨセテモ

キガイレル　心やくる

キヲトビアルク　木　こづたふ　鳥猿ノルイ

キデミエヌ　木　こがくれ

キヽナレル　耳なるゝ　きゝなるゝ

キヽアイタ　同上　又聞あくト

キニン　よき　たかき
貴人

キヅバリト　さだかに

キガオヽイ　心あるゝ　ぐまなき　駒ナドニヨセテヨメリ　はふ木あまたナドヨメリ　大ぬさ　おもひ

キヤウオウスル　へあるじする　へもてなす

キビシウ　へいみじう　いたく

キエイルヤウニ思ウ　心ぼそし

キエニクイ　消がて

キヽツヽ　きゝながら　きく〳〵

キヽツケル　同上

キヽナレテ井ル　きゝなるゝ　きゝわたる

キヽワケガナイ　きゝだにわかぬ　思ひしらぬ

キヽツケテ井ル　同上

キビシイ風　風はやし　風いたし　へいりもみする風

キヤスメモセヌ　やすまず　ふさずやすまず

キブシヤウナ　ものうき

キモノツブレタ　あさましき

ギヤウサンニイフ　いひさわぐ

キワタヅテ　わきて

キアワス　里ト同

キヽ出ス　きゝつくる

キカセトモナイ　きこえぐるしき

キイタヿノ中デモ　きくがなかにも

キヌケニナヅテ井ル　ながたる

キクタビレ　うらふるゝ　うらびれて

キガヽリニナイ　うしろやすき

キツトシタ䒾モアリソウニ　ことありがほに

キヌケニナツテ　こゝちもあらず　〽ほけしれてナドアリ　こゝちなく　心もそらに　〽しれて

キモチ　こゝち

キヲシヅメル　心しづむる　思ひしづむる

キガオチツカヌ　心もとなし　しづ心なし

キテホシイ　こまほしき

キチウ　忌中　〽いみ　ドニハ　〽いみにこもる　〽おもひトイフヘシ又ヤガテ　コレハ親ルイナトニ云　父母兄弟ナ　〽四十九日トモ拾ニアリ

キメイスル　〽いみはつる

ギヤウサンニ　〽いかめしく

キツトシタ　〽はか〴〵しき　〽をゝしき

キラビヤカナ　〽はなやぎたる　まばゆき

キガヽリナ　うしろめたき

キカエル　ぬぎかふる　かふるモ　衣之

キブンガワルイ　〽こゝちあし　病ナリ

キマメナ　こゝろがろき

キゲントル　〽けしきとる　〽こゝろとる　拾

キリモナシニ　ごもなく　かぎりなく

キカズニ　きかで　耳なし山ナドヲモヨメリ

キヨシンナル　〽おほとのごもる　貴人ニイフベシ

キツトモセヌ　はかなき　〽はかなだつモ

キカザル　〽はなやぐ　衣ナリ

キヤウダイ　はらから

キウジスル　＼はいぜんする

キウニ　にはかに

キガスマヌ　＼をさめぬ

ギヤウリキ　行力　＼おこなひのらう

キヲトリウシノウテ　われにもあらで

キリヨウヨシ　＼かたちある　＼うつくしき　＼おかしき

ギシキ　規式　里ト同

*かりし御ひゞきにもト源ニアリ　万ニハ神のごときくナドアリ　雷之

キバリアウ　つなびきする

キゲンカワルイ　＼おもほでりす　怒ナリ

キシヨクワルガル　＼むつかる

キブサイナ　＼うるさき

キガツマル　＼うして　＼うんじて　欝ナリ

キンジヨマワリ　＼ほとりばみたる所

キヨウヨムコヱ　經　＼どきやうの声　＼ずきやうの声

キワメラレヌ　おぼめく　おぼ〳〵しき

キモノ　衣　＼よそほひ

キワガタツ　きはぐ〳〵し

キガユルマル　＼いきのぶ

ギヤウサンナキコエ　ひゞきよそほし*

キヲツケル　＼よういする

キケンガナヲル　＼なごみて

キナラシタ小袖　＼なよゝかなる衣

キウクツナ　いぶせき　所せき　うもれいたし

キガノビヌ　＼くして　＼くんじて　屈ナリ

キリナシニ　うちはへて　上ニモ出

キチウノキモノ　忠中衣　ヘうすゞみごろも　源袞　ヘにび色　モ几帳ノ帷子ナトマテソムルヨシ之　衣ナラデ　ふぢ衣
キガヨワル　ヘおもひくづをる
キガトリシマラヌ　あだなる
キズノナイ　ヘくしたる　めでたき
キタナイ　ヘむつかしき
キヲトリノボス　われかの　けしき
キツト　かならず
キヲカヘテ　ヘいまめかしく
キロク　記録　ヘにき　日記之
キミアイヲツケル　ヘけしきばむ
キトウ　祈禱　ヘげんがたの　おこなひ
キヤシヤナ㒵スル　ヘいきのしたに　引いれていふ
キガキカヌ　心おくるゝ

キガクサル　同上
キガチヾマリキル　くしいたし
キタナウナル　やつるゝ
キモチガジウブンニナイ　むねあく　まじき
キツウ　いと　いたく
キノドクナ　ヘいとをしき　ヘかたはらいたし
キカヌ氣　ヘまけじ　だましゐ
キミアイ　けしき　けはひ
キヲトラレル　ヘけどらるゝ　妖怪ナド之
キンデイノケイビキ　金泥　ヘけかけたる　かねのすぢ
キヲツケル　ヘ心しらふ　天武紀　有意（コヽロシラヒ）　ヘ心ばむ
キガハヤイ　こゝろとき

キガセイテ　心いられに
心いられする

キガツキスギル　＼心ばみすぐす

キモガツブレル　あさまし

*われかのけしき　われにもあらず
ナドイヘリ

*とき心のつくからにかつは心の鬼も
みえけり　謙德公　源ニモアリ

キヲヘダテル　＼あだへかくす　こゝろへだつる　思ひへだつる
こゝろのくまナドアリ

キリヤウノアル　＼ざえかしこき
＼かど〱しき

キノドクナヤウスニ　＼いとをしげに

ギシミアウ　きしらふ
つなびきする

キヽワケガヲソイ　みゝと
からず

キヽワケガハヤイ　耳とし

キマリヲツケル　＼したゝむる

キガヽナワヌ　ひそみ心

キガイラ〱スル　同上　むねはしる
心はしる

キモヲトラレル　＼心ぎも
つくる

キガトヲヽナル　＼こゝろぎも
つくる*

キズモツアシ　心の鬼
わかためにう*

キラクニナル　心やすし
＼こしのぶる

キリヤウガミエテ　＼かど〱しく

キタウケ　＼きたおもて
北面

キヽゾコナウ　きゝひがむる
きゝたがふる

キヽソケラレヌ　同上
きゝわきがたし

キミアイノアリソウニ　＼さび〱しく

キエタイ　＼かたはらいたし
＼しぬべくおぼゆ

キヲヒクウモヅテ　心をせめて

キニイル　すさむる　荒涼ト同ジカラズ

キドリスル　へけしきどり　へ心とる

キヅヨイ　へすく〳〵しき　へすくよかなる

キバラシスル　おもひやる　へこしのぶる

キツシリトツマル　へおしこりて　数人立コムナリ

キズノナイ　めでたき

キニス、ム　同上

キニス、マヌ　すさめぬ

キジユツナイ　心おかるゝ

キバラシマデニ　へ心やり　ばかりに

キニムク　心にそむ

キナガウ　心ながく　キミジカニハ心みじかくト云

○ゆ　部

ユツタリト　のどけく　のどかに　ゆたけく　へよだけく　へゆるゝかにナドアリ

ユキアタリガアル　さわる　とゞこほる

ユキトヲツテシマイニクウ　過がてに　行過がてに

ユキモドリニ　あふさきるさに

ユ゜キニクイ　ゆきがて

ユビザス　さす

ユクモノガユカズニアル　よどむ

ユキアワセル　へいであふ

ユウテウニ　へゆるゝかに　心ながく

ユビ　＼およびナリ　今云小指ニアラズ五指トモニおよびトイフ小指ノ一ハ和名ニ小於与比トカケリ

ユガミナシニ　まほに　なのめならず

ユガミスヂコツテ　かたほに　なのめに

ユフカタ　＼ゆふざりつかた　古ニアリ　＼ゆふざり　後ニアリ　其外夕くれ　夕まくれ　ゆふべ　たそかれ　た*

*そかれ時　かはたれ時　あれはたれ時　又すゞめいろ時トモ云

ユダンスル　たゆむ

ユダンサセテ　たゆめて

ユキトヾカス　＼くちをしき

ユルリット　＼くつろぎて　＼ゆるゝかに

ユルリトシタヤウスデ　＼くつろきかましく

ユキガケニ　うちつけに

ユエンノアル　よしある

ユウビニ　＼いうに

ユウ〱ト　同上

ユメハンジスル　＼夢をあはする

ユフカタニナツ(ママ)ニ　ゆふつけて

ユキチガイニ　みちかひに

ユコウ　＼みそかけ　衣桁　みそハ御衣ナリ

ユフベ　＼よべ　＼よんべ　土日

○め　部

メヅタニハ　みだりに

メアテ　たづき

メヅタトフク　ふきにふく風ナリ

メガケテ　同上 めにかけて

メヅタニアルク　あしもやすめず

メンボクヲウシナウ　おもてふする　おもてぶせ𪜈　後ニ花のおもてはふせつへらなるトアリ　〽めいぼくなし𪜈

メンボク　〽めいぼく

メヅタトキコエテ　きゝにきこえて

メヲハナサヌ　めがれせぬ　めがれぬ

メンドウナ　うるさし

*きみち𪜈アリ　又よみぢ𪜈

メシ 飯　〽かたがゆ 又いひ𪜈　和名ニ饘

メニイヅバイ涙(ナミダ)グンデ　〽涙をひとめうけて

メヅタナヿデ　同上

メヅタトフル　ふりにふる　雨 雪又木葉ヲモ

メザス　さす

メガ出ル　もゆる いづる　もえ 草木之

メイ〳〵ハナレ〴〵ニ　おのかちり〴〵

メンボクヲツケル　おもておこす

メガハナサレヌ　あかぬ めがれせられぬ

メミエヲユルサレル　うへしる 〽まへゆるさるゝ

メイドノミチ　くらき道 源ニ 今はのくら*

メイジン　〽かみなききは

メシルシ　〽つまじるし

メイドノミヤゲ　〽よみづと

メヲアテヽミラレヌ　まばゆし　キラビヤカナルニモアハレナルニ
モイヘリモト日光ノムガヒカタキヨリイフ之＊

＊又ヤカテ　夕日まばゆき　朝日
まばゆき　日かけまばゆきナドモ云

メイワクナ　うれはしき

メヅタニサムイ　そゞろざむし
すゞろざむし　同

メン〳〵コウニ　おのがじゝ

メイワクサセル　へはしたなむる

メモト　同上

メニカドタテヽ　へまじり
ひきあげて

メツケ　へまもゆめ　後又源
へけさう氏

メガスワヅテ　へまなこゐ

メテタガル　へことほぐ

メニアマル　へめざましき

メヲヌスム　へめをあやまつ

メイワクガル　へかりがる
辛ガル之

メモトモダルソウニ　まみたゆげに
病者ノサマ之

メヅタニ　すゞろに

メイ〳〵ニ　同上

メツキ　まみ

メタヽキスル　またゝく

メモアテラレヌ　へまみいと
いたし

メツキガオソロシイ　へまぶしつべだ
ましき

メヅポウカイニ　へおほどかに

メニナミダヲモツ　涙さしぐむ

メモチロツクホドニ　めもあやに
見ル物ノ上ニ云

メモクランデ　めもきりて
泪ニテ之

メノカスムヲコスル　めをしほる　老眼ノサマ之

○み部

ミヅニカクレル（水）　みかくるゝ　みかくれて𪜈

ミルニモセヨミヌニモセヨ　みまれみずまれ

ミブンフソウオウ　身におはぬ　みよりあまる

ミナレル　みなるゝ

ミエタリミエナンダリ　みえかくれする　ナドヨメリ　古　みえみ見えずみ

ミヲナゲル　身なぐ　身をなぐ　谷ナトヘ落入テ死スルヲモ　拾ニ虎のたぐひに身をなげば又山ニ入ルヲモ云

ミヅヲノマス（水）　みづかふ　馬ニナリ

ミツケル　みいづる　みつくる𪜈

ミヅノ中ニアツテ（水）　みこもりに

ミヲコニスル（粉）　身をつくす　みをくだく

ミタイ　みばや　みまほしき　みまくほしき

ミノブンザイヲシル　身をしる　みのほどを知

ミヅニナレル（水）　みなるゝ　見馴ルニカケテモ

ミタトヲリニナイ　みしごとも　あらず

ミモダエスル　身をやく　くるしむ

ミガク　里ト同

ミヅガマウテアル　みこもり　池ナドノ水ナリ

ミツ〳〵ニ　みそかに

ミツ〳〵ニハナシスル　へみそかごと　する
＊シナキスキヿセルヲモ云
ミモカマワズニ　身にかへて
ミステル　みすつる
ミセタイ　みせはや　見せまくほしき
ミチガチガウ　ふみたがふ
ミヤゲ　つと　家づと
ミスボラシウナル　おとろふ　やつるゝ
ミヂカイ　身近　したしき
ミノウヘ　うへ　我うへ人　のうへナド云コレ之
ミスカサレル　心みえなる
ミドコロノアル　へおかしき
ミモチヨウ　ちりもつかじと

ミツプヲスル　みそか男する　父母ナトノユル＊
ミエタ物ガミエヌ　みえさす
ミテモ〳〵ミタラヌ　みれど　あかぬ
ミヲキラレルヤウナ　へ身をきり　くだくこゝち
ミエルヿガスクナイ　へみらく　すくなき
ミチクダリ　よし
ミカエル　思ひます　心ヲ變ズル之
ミエスク　しるし　心みえなる
ミガノル　みのる　みをむすぶ　草本之
ミナニナル　つくる
ミムキモセヌ　思ひはなるゝ　おもひすつる
ミウゴキモセズニ　へどうもなく
ミブンニスギテ　おほけなく　みにおはぬ＊

*みよりあまれるナドアリ　大物ニ柱ノミコヲ童女ノ思カケテヨメル哥アリ

ミグルシウナヅテ　やつれて

ミゴトナ　〜よそほしき

ミハカヅテ　同上

ミナニナラヌ　つきなき　つきしなき　つきぬ

ミトモナイ　かたはなる

ミエタトヲリナ　うらもなき

ミウゴキ　〜みじろき

ミチガヘル　みまがふ

ミマウ　とふ　ことゝふ　とふらふ

ミヽヤカマシイ　かしかまし

*〜あはの御ことわりやナド源ニアリ

ミエタトヲリノ人　〜きすくびと　うらなき人

ミブンソレ〴〵ノ　〜みゝにつけたる　〜あて〴〵の

ミルニヒマガイル　〜めのいとまいる

ミアワシテ井ル　〜ためらふ

ミアワス　たゆたふ　いざよふ　やすらふ　又同上

ミニヒヅカケテセワヤク　〜うしろむ

ミグルシウナル　やつるゝ

ミエノワルイ　〜人わろき

ミナガシニセズニ　みすぐさで

ミイチブンニ　身ひとつに

ミヲフタツニシテ　身をわけて

ミヅクサイ　あは〴〵しき　〜あはつけき*

ミヅクサイリヨウケン　〜あはのことわり

ミナミウケ　南面　〜みなみおもて

ミヨイ　めやすき

ミオヨンデ井ル　めなれたる

ミウゴキスル　へみじろく　へ打みじろく𪜈

ミイ〳〵　みる〳〵　みながら

ミツクライヲヤル　みなす

ミテシヤウビスル　みはやす

ミヽガチカイ　みゝとし　みゝかたからず

ミガラガサダマラヌ　しななし　へしな〴〵しからず

ミアテガウ　みなす

○し　部

シゴク　こく　こきませて　こきたれてナド云

シマイマデミヌ　みはてぬ　夢ニ多クヨメリ

ミツケテ井ル　めなれたる　みなれたる

ミスボラシイ　へみだてなき

ミモヅテクルニ　めにみす〳〵

ミオヨビ〳〵スルニ　めにみす〳〵

ミニツマサレテ　身をつみて

ミテ井ルマモナウ　見もあへず

ミヽガトヲイ　耳ほの〴〵し

ミカ子テ　へいとをしさに

シヤウコリモナウ　こりずまに　こりず

ジシンニ　みづから

シシンバカリ　身ひとつに
ひとり

シマイガシレヌ　はてなき
かぎりなき

ジヤウヂウ　とはに
つねに

シヤンスル　たどる

シゴト　ふるまひ　わざ
おこなひ　いとなみ

*又からさえつりナドイヘリモト
鳥ノ声ヨリイフナルベシ

シダイニ　やゝ

シカタガナイ　すべなし
せんすべなし𪜈

ジウニンナミ　へよろしき　人なみ
なみ〳〵　なみ𪜈

シカトシタアトモナイ　あとはかもなし

シレヌヤウニシテ　人しれず

シホタレル　しほるゝ　しほたるゝ
しほなるゝ　なるゝ

シヤウコマデニ　しるしばかりに

シマイクチ　はて

シリノシマイハ　はて〳〵は

ジツトシテ井ル　所もさらぬ

シヤンシモツテ　たどる〳〵

シヤベル　さえづる
あまのさえづり*

シニワカレ　さらぬ別

ジヤマスル　さまたぐる

シンダ　すぎにける
死　すぎぬる

ジヤウタイナシニ泣（ナク）　よゝとなく

シリヌク　おもひしる
知

シユミコム　しむ

シリツヽ　しりながら
しる〳〵

シロウスル　しらぐる
白　調布ニヨメリ

シタガマワラヌ　舌　かたこと

シワケヲスル　わく

シリスヱル　へゐつく

ジヤウジユスル　成就　なる

ジヤウナレニナル　なるゝ

シヤウクハンスル　めづる

シンキナメニアウ　うきめみる

*うげなるさまなれどトアリ　箋ニカケタルナリ

シニクイ　かたし

シユシヤウニナル　神さぶる　へかう／＼し

シラス　つぐる

ジヤウコンニ　同上

シユギヤウスル　おこなふ　多クハ佛道ニノミヨメリ　又ぐやうほふトアリ　行法ノ義ナリ　源

シンザン　にひまゐり　いままゐり

ジゝンヒトリマヘノ　わが身ひとつの

シヤウインスル　承引　うけひく　へきゝいるゝ

シユツセスル　へなりいづる

シヨウコトナシニ　なく／＼

シンキナ　うし　心やまし

シンキソウナ　うげなる　後ニつりの*

シキリダケ　かぎり

シンクガアル　からき　塩ナドニカケテ

シカタガワルイ　つらし

シンボウヅヨウ　心ながく

シゾコナウテ　ことあやまりに

シユツケスル　出家　＼かみおろす　家をすつる　思ひの家をいづる　世をそむく　ヤガテ＼ほうしになるモ

シタメナ　＼おとりざまなる

ジタイスル　いなふ

シヤンスル段デモナイ　たどりもあへぬ

シヌル　＼とぢむる　源ニおもき病者のにはかにとぢめつる

シタニオカヌ　ちりもすゑぬ

*ルヲぢトイヒ哥合ナドノ勝負ナキ番ヲモぢトイフ之

ジギスル　＼ぬかづく

*なめし　紀ニ無礼ヲヨメリ

ジヽンヤラワカラヌ　われかの

*田トアリ　又やくと

ジマンバナシ　＼ふきがたり枕

シタリガホ　里ト同　又＼われはがほ

シアンナシニ　おもひしらで　たどらで

シヤウジンノゴクラク　極楽　＼いける浄土

ジツトシテ　＼どうもなく

シワスセツパクニナル　＼としもせむる

シヤウブナシ　＼ぢ　碁ノセキトイフモノニナリタ*

シキモノ　ひじきもの　伊物　＼ぢしき　筵道ノルイカ

シツレイナ　＼をこなる　＼むらいなる*　＼をこがましき

シヤウベンツボ　＼おほつぼ　和名ニ夫虎子

シゴトニシテ　わざと　万ニわざとつくれる秋の*

ジマン　＼われぼめ　われはがほ

ジマンガホ　＼われがほ　＼われはがほ

ジユツナウ思フ　＼かたはらいたし

シヅカズキ　ヘ人ゝとう　もてなす

シタイガイニスル　ヘかろめらうずる

シカリツケル　同上　又せめく　古

シヤンニモオヨハズ　ヘかやすく　たやすく

ジヤウズ　上手　ヘかみなき　きは

シクセニナツテアル　さが　性之

シヤンニオチヌ　たど〱し

シタ〱ノモノドモ　たひしかはら　元輔集かずにもあらぬたひしかはらをトアリ又源蓬ニモミユ

ジツクリトセヌ　そば〱し

シヤレル　ヘざればむ　ヘあざれて

シラレトモナイ　つゝましき

シタイヤウニスル　ヘらうずる　ヘれうずる

シヤウゴクヾワツノツトメ　正五九月　ヘねざう　年三ノ音ナリ　後世ノタメニサウジンナドスルコナリ

ジヤウジユセヌ　ヘかたなりなる　ヘなま〱の

シカラレル　ヘかうじうくる　ヘかんどうせらる

シクジリゴト　ヘかしこまり

シニタイコヤノ　かたしや

シンキデタマラヌ　ヘかしらかき　ありく

シキタリノカタ　ならひ

シナヤル　ヘたをやぐけしき　もてつくる

シツトリトナイ　そゞろはしき

シヽガツク　肉　ヘなりあふ

シマイマデコノ通リノ　ヘつひの

ジウニツキノ画エ　十二月　ヘ月なみのゑ

シヤウヂキニナイ　ねぢけがましき　ねぢけてモ
ジヤウブツヲシヌカヌ　へなまうかひ　成佛
*なさけ　なげの筆づかひナドイヘリ
*伊物ノなほやはあるハジツトシテ井ラレウカヤノ心ナリ
ジユドウ　へなにがしのをしへ　儒道
シナヤカニ　へなよびて　へなよ〱と
シメワライスル　へむゝとわらふ
*なる物すまひのまけているうしろでトアリ
シツカリトシタ　へむね〱しき　へはか〴〵しき
シヨシンラシイ　うひ〱しき
*かぎりなく　ごもなくナドアリ
シボリ　くゝりぞめ　源
ジチメナ　へまめなる　へじほうなる

シンダアト　へなきうしろ
シンジツデアリソモナイ　なげの　なげの*
ジツトシテハ井ラレマイ　なほあらじ*
シタナラシ　へならし
シナヤカナナリ　へなよびすがた　容
シンキワカス　へむつかる
シンコウゲノナイ　へむとくなる　枕ニむとく*
シヤウドナシニ　へむごに
ジヨサイノナイ　うはべなき　万　うらなき
シマイモシレズニ　うちはへて　はてなく*
ジユウラシウ　へくつろぎがましく
ジチメナカホスル　へまめだつ　遊ニ瞋
シンソコカラワカ〱シイ　うらわかき

シンソコカラサビシイ　うらさびし

シンソコカラナレル　うらなるゝ

シゼンハ　おのづから

ジジンノ　おのが

シドカナイ　〽をさなし　〽しどけなし

ジユツナイ　くるし

シンテイヲミル　こゝろをみる

シヌル　しぬ　〽うする　〽身まかる

シヤウタイガナイ　まさなし

シヤベツ　けぢめ　わき

シヤウコニン　〽けんそ　見證　檢證ナドノ義ナルベシ

シウギイフ　〽ことほぐ

シヤクリアゲテナク　泣　〽さくりもよゝとなく　源総ニアリ又榮花ニモさくりもよゝたりトカケリ

シンソコカラカナシイ　うらがなし

シラズ　いさ　しらず　古ニ人はいさ心もコレナリ

シゼンニ　同上　〽じねんに

ジヤウヒンニ　〽あてはかに　〽あてに

シンド　いたづき　勞ナリ

シブトイ　〽しうねき

ジブン　ころ　〽ころほひ

ジマンクソウ　〽ほこりかに

シンジツヲミセテ　〽せちに

シツトリミノナイ　〽けしきはやれる

ジヤウガコワイ　〽心ごわき

シヤクリ　〽さくり　源榮花等ニアリ

シンデモシマイソウニ　〽こゝろぎもゝつくるやうに　又しぬべく　ナドアリ

シヤウキヲウシナウ　〽こゝろぎもつくる　われかのけしき　ナドイヘリ

シヤンニクレテ　〽てをおしもみて　〽おもひふくれて　思ひいりて　ナドアリ

シカタデシラス　〽てかく　〽つきしらふ

シマイニハ　ありへてのちは　はては

ジヤウヒンメカシテ　〽あてびて

ジタ〳〵ニ　しとゝに

シロスギル　〽しろうさをに　源末白

シヤウジ　〽さうじ　フスマヲモ云　障子

シヨリ〳〵ト　〽はら〳〵と

シオ・セヌ　〽しゝこらかす

シコヂケル　〽同上

シツポリトフル　〽しめやかなる雨

ジヤレヿスル　〽あざるゝ　〽あざれかゝるも

シバラクノアイダ　あからさまに　しばし

ジヤウヒンナ人　〽あて人

シヤベリチラス　〽さえづる　〽いひさわぐ

シヤレタ　〽されたる　されたる　くれ竹ト源良ニアリ

ジコク　〽きざみ

シンジツ　〽じち　〽まごゝろ

シヅコナウ　〽同上

シツポリト　〽しめやかに

シタヂ　〽したかた　源梅　世のおもしと成給へきしたかた

シンナリトシタ　へしなやかなる
シタテル　へしつらふ　へ引つくらふ
シツトリトシテ井ル　へしづまれる　人ザマナリ
シリメヅカイ　睨　へしりめにみる　貝ヲソムケテ物ヲミルナリサレバハヅカシナガラミルヲモ心ニソマヌ物ヲミルニモ用ウ
シンマイボウズ　へしぼちハジメテ出家シタル之
シカツベラシウ　へさび〳〵しく
シヲレテ　同上
ジヤウオロス　ざうさす　万鑠刺　源槿ニじやうモ
シヤウトウデナイ　正当　へひがさまに
シヲツクル　詩　へふみつくる　へぜくつくる　絶句之
ジヤウブナ　へすく〳〵し　へすくよかに
*たゝびすんながれてトアリ又かはらけめぐる　さかつきめくるモ
シユツケ　へすけ　へほうし　へ大とこ　へひじり　山ぶし　野ぶしナドイヘリ

シツラウ　へしつらふ
シモ〳〵ノヘヤ　へしも室　雑舍之
シツトリミ　へしづかなるけ
シユンデ井ル　しめる　神紀ニ　衰ヲヨメリ
シヲ〳〵トシテ　しめりて　衰之
シソク　里ト同　紙燭之
シモツレル　へしゝこらかす　病ニイヘリ　源紫
シンルイウチ　へひとざう
シリガルニ　へすが〳〵と　へすがやかに
ジユンバイ　順盃　へずんながるゝ　源　吹ニおほみきあま*
ジユンニ　へずんに　順之

シキリニ 頻 ＼せちに 又里同
シンボウスル たふる しのぶ
シツパクナ ＼くすしき
シマツスル ＼ことそぐ
ジタイスル すまふ

シランダ しらざりし
シンボウシカ子テ しのびあまり たへかねて
シラヌカナンゾノヤウニ しらずがほにて
シガイ なきから から氏 死骸ナリ

○ひ 部

ヒトメニミヤル みわたす
ヒトナミニ ひとしく ひとしなみに
ヒソカニ みそかに
ヒマナ のどけき いとまある
ヒゞク 里ト同 又とよむ 万ニ響動ナドアリ
ヒキトメル とりとむる ひきとむる氏 とゞむる

ヒトクルメニ みながら ひとつに
ヒツクルメニ みながら
ヒトリマヘニ 身ひとつに
ヒヤウシニカヽツテ のりて 心にのりて
ヒゞカス とよまする とよむる氏
ビヤウチウ 病中 たれこむる ＼おろし こむる 簾帳ナドニ

ビンギ　たより

ヒトツヲメドニシテ　さしわけて

ヒキサケテセバマル　さけかゞむ　拾ニあしぎぬはさけかゞみてぞトヨメリ　あしぎぬハアシキ絹ト云ナリ

ヒヅヽヅケテ　おして　紀ニ忍歯王ハ御歯ノカサナリテオヒタリケレバオシ歯ト名ヅケタルヨシミユコレ之

ヒトノミヌアイダ　ひとま　古

ヒヤウバンスル　いひさわぐ　さわぐ

ヒヅヽイテ井タウ思　なつかしき　したふ

ヒトノカラダノヤウニ　われにも　あらず

*なみ／＼ならぬ　へおしなへたらぬ　ナドアリ

ヒトメヲハヾカル　里ト同　人めもる　氏

ヒトノクチノハ　人ごと　よの人ごと　氏

ヒトカタマリ　ひとむら

ヒトリ子コロブ　ひとりぶし

ヒヅパヅテクル　かどふ　後

ヒトクセ　さが　へひがみ

ヒアガル　ひる　かはく

ビヅクリスル　おどろく　いわけて　へおびゆる　紀ニ驚駭

ピラツカス　しでて

ヒトヽヲリデナイ　よにゝぬ　なみならぬ　*

ヒトリダヅテ　ひとり

ヒトデヲコエテ　人づて

ヒノウチ　ひるま　干ルニヨセテモイヘリ

ヒトコト　一事　ひとふし

ヒトリ子イル　ひとりね

ヒガナイチニチ　〽日ひとひ　ひぐらしに　ひねもす

ヒトカタマリヅヽ　むら〳〵

ヒイキニ思ウ　心よする　こゝろひく

*ゲロフニアリ　又重之集ニすなはちごとに毎トモヨメリ

ヒトシヤンガアル　〽思ふ心あり

ヒヤウシ　拍子　〽はうし

*なみの　なみ〳〵のナドアリ　又なのめなる𪜈

ヒナミチヤウ　日次帳　〽にき　日記之

*ウケタルサマナリ

ヒトオメスル　おもぎらひする

ビリ〳〵フルウ　〽わなゝく

ヒカゲモノ　〽かげ〳〵しき身　妾ナドヲモ云

ヒゲダクサンナ　髯　〽かづらひげおふ　源

ヒキヤブル　〽やる　〽ひきやる

ヒツパリアウ　つなびきする　馬ナトニヨセテ　拾

ヒヅツヾキニ　〽うちすがひて　〽すなはちにカ　*

ヒトヽヲリノ人　おほよそ人

ヒマイリ　〽いとまいるわざ

ヒトヽヲリノ　〽二のまちの　源帚ニアリ又　*

ヒトヽヲリニ　なみに

ヒウツリノヤウス　火　ほかげ　灯ノ火ノ光ヲ　*

ヒマヌスム　〽ぬすまふ

ヒヅコンデアル　〽おくまりたる

ヒトキワタヅテ　〽かど〳〵しく　〽きは〳〵しく

ヒカゲノ　〽同上

ヒザカナ　乾魚　〽からもの

ヒソ〳〵トイフ　さゝめく

ヒトクセアル　へひがめる

ヒク氣*ガナイ　へたけし

ヒヤウケル　へそばづく

ヒヅツヾケ〳〵イフ　いひつゞくる

*リタルナリ　紀ニ委曲ヲつばらかなる
トヨミ万ニ曲ミヲつばら〳〵トヨメリ

ヒノヤウニハラタテアウ　へむかひ火つくる
火。

ヒキサイテステル　へやりかくす　へやりすつる

ヒトギヽガワルイ　へ人ぎゝやさし　へ人わろし

*イフヲツヾメタルニ　まつりごつ
ナトイヘルモコノ例ナリ

ヒヅクルメテ　なへて　おしなへて

ヒサシウシテ　同上

ヒトヽヲリ　おほよそ

ヒトチガヘ　人たがへ

ヒトクセアル人　へひがもの

ビンボウナ　袖せばき　袂せばし氏

ヒトクチヅヽウタウ　へつゞしりうたふ

ヒトツ〳〵　つぶ〳〵と　つばら〳〵ノツヾマ*

ヒヅヽキヽヅテ井ル　なづさふ　なるゝ

ヒキサク　さく　へやる　へひきやる

ヒトキリヤウ　へかど　へざえ　へひとかど

ヒトリゴトイフ　へひとりごつ　ごつハごとすト*

ヒキヽリニ　ひたふるに

ヒサシウアヅテ　へて　ほどへて

ヒトリデニ　おのづから

ヒワヅニ　へあえかに　へひはつに氏

ヒヨワイ	〽かよわき
ヒヤウシノナイ	同上
ヒトゲノナイ人	けどほき けうとき
ヒヤウシナウ	あへなく
ヒヤアセカク	〽あせも しとゝに
ヒヤウケル	〽さるがうごとする
ビヤウキ病氣	〽ざけ 邪氣之 〽ものゝけ やまひ
ヒンノヨイ	〽みやびかなる 〽あてなる 〽あてびたるナドアリ 又みやびふかし 里ニ對シテミヤビト云
ヒトノシラヌクヅタク	下のおもひ 下安からぬ
ヒツタクル	同上
ピタ〳〵ト	〽ひし〳〵と 足音之 源貝
ヒツパル	〽ひきしらふ
*つまどのみすをひきゝ給へばトアリ	
ヒヤウシヌケノシタ	〽さら〳〵しき
ヒトヅキアイ	〽まじらひ
ヒトヂカウナイ	同上
ヒヨ〳〵ト	〽あえかに 〽ひはづに
ヒドイメニアウ	〽さいなまるゝ
ヒヤウケタヤウナ	〽さるがうがましき
ヒノクレマギレニ	ゆふまどひに ゆふまぎれに
ヒキノケル	〽ひきかなぐる
ヒノヨウジン火	〽火あやうし 夜行ノ者ノ詞之
ヒトヅキガヨイ	〽ひぢゝかなる
ヒツカヅク被	〽ひききる 著ルナリ 源宴*
ヒツカブル	〽同上

ヒソウシテ　〽ひめて　秘スル之

ヒキ氣ナ　〽ひそめる　〽ひそみ心

ビヾシイ　〽びゞしき

ヒゲスル　卑下　〽ひげする

ビシヨガナイ　〽びさうなき　〽ものげなき

ヒゲヅラ　〽ひげがちなるかほ

ヒヤウバンノタ子　〽もてなやみぐさ

ヒヤクアシモムカウ　百歩　〽もゝふの外

ヒマニアカシテ　〽いとまいれて

ヒツソリトシテ　〽ひそみて

ヒタモノ　ひたに　ひたすらに　ひたふるに　ひたみちに

ヒトラシウスル　〽人めかす

ヒトサワギニ　人　人のまぎれに

ビンサキ　鬢　〽びんぐき　びんぐきをつくろひ給ト源末ニアリ

ビヤウシンニ　〽ひはづに

ヒツヽケル　〽もてつくる　添ル心ニモカヨヘリ

ヒル子　午寝　里ト同

○も部

モノニ心エタ　こゝろある

モチマヘノヒトキバリ　みさほ

モライニヤル　〽こふ　〽こひにつかはす

モチヾガエテ　〽とりたがへて

モノヲヤル　〽物とらする　〽こゝろざす

モタラス　よする

モヨウ　あや

モウイマモシヌルヤウニ　しぬ〳〵と

モクゼンニ　めのまへに　〽まのあたり

モツタイガツク　神さぶる

モドシテモラウ　〽こひかへす

モチロン　勿論　〽ろなう

モノシリガホデ　〽さかしだつ　さかしらに

モツタイノアル　〽おもりかなる　〽おも〳〵しき

モウスモオソレオヽイ　かけまくも　かしこき

モテアソビ物ニスル　〽かたらひ犬とおもふ　源末ニきんをばなつかしきかたらひ犬とおもへるトアリ

モノナレヌ　〽うひ〳〵しき　ナトアリ　多クハ少女ニイヘリ　〽世をしらぬ　〽よづかぬ　〽よにへぬ

モチマヘノクセ　さが

モエルナラモエシダイヨ　もえばもえ　火之

モテナス　里ト同　又あるじする

モダエル　なやむ　なやまし

モドル　かへる

モノズキナ　〽ことこのむ　好事之

モトノ心ヘモドル　おもひかへる

モノシリ　〽はかせ

モチマヘノキリヤウ　〽ほんざい　本才之

モツタイナイ　かしこし　〽かたじけなし

モンモカタモナイ　〽かたもなく　源荒屋ニ云

モチマヘノクセ　さが

モヂ／＼スル　〽つめくふ 噛レ爪之

*なほ／＼しくナトサマ／＼ニイヘリ

モノカ𪜈思ハズニ　〽ないがしろに

モヽダチトル　〽くゝり引あぐる サシ貫ノクヽリ之

モツパラ　もはら

モノシヅカニ　〽ひそみて しめりて

モヽケル　〽あつごゆる みあつごえたる 源菜きば紙云々

モツタイブツテアルク　ねる 静ニ歩ム之

モツタイガアツテ　〽しうとくに 宿徳之

モノヽワカチ　〽物のけぢめ 〽物のあやめ

モツテノホカナ　〽たいく／＼しき

モツトモラシウ　〽うべく／＼しく 〽つぎ／＼しく*

モツサリト　〽ねびれて 〽むつかしげに

モテアマス　なづむ

モハヤ　はや

モシモ　もし

モンモウナ　〽こちぐ／＼しき 〽かたくなしき

モノズキスギル　〽ざれくつがへる

モノイハズニ井ル　しじま 源

モノズキラシウ　〽わざとめきて

○せ部

センドキイタ　耳なるゝ　きゝふるす
*なみ／＼ならぬ　よにしらぬ
へおしなへたらぬナドアリ
セケンナレヌ　へよにへぬ　へよづかぬ
セバイ　せばし　ほどなし
*なげきあまり　わびてナド
サマ／＼ナリ
セイジンサセル（成人）　へ人なす
セイ出ス　へつとむる
ゼンタイ　おほかた　おほよそ
セワヲヤイテ　へいろひて　源
セイジンスル（成人）　へおよすげゆく
セウ／＼デハ　おぼろげには
セウ／＼ノヿデナウテハ　おぼろげならでは
セウシニ思ウ　へかたはらいたし

セケンナミデナイ　よにゝぬ　なみならぬ＊
セケンナミ　よのつね
センドイフタ　いひしく　いひふるす
セツポウツキテ　おもひかね　思ひあまり＊
センドミタ　へめなれたる　へみふるしたる
センベツスル　へはなむけする　へうまのはなむけ
セイ出シテ　へおりたちて　やくと
センドクヅタクシテ　思ひ／＼て
セナカガナガイ　へおぜながなる
セイ・ヅバイ　へいそしく　へたけく
セウ／＼ノ　おぼろげの
ゼンマワリ　へわうばん　膳部之
セイモンダテ　かごと　眞伊ニ神言＊

*ヲヨメリ　又うけびてナドモ云
紀ニ誓約　又祈　又ちかごと　ちかふ

セケンガサワギタヅテ　ヘ世ゆすりて

*ト源ニヨメリよるべの水トハ社前
ノ水ナリト古説

セキバライスル　ヘこわづくる
ヘしはぶく

セイトウヲタヾス　ヘまつりごつ
政道

ゼヒニ　あながちに

セワシイ　しきる

セワヲヤク　ヘうしろむ　ヘあつかふ　ヘみあつかふ　ヘとりまかなふ
ヘちからいりをするナドイヘリ

セツカンスル　ヘさいなむ

セグルシイ　こゝろはしる　くるし　むねはしるナド
サマ〳〵ヨメリ

セツロシウナシニ　ヘゆく〳〵と
ゆくら〳〵に

セツロシウ　しきりに

セケンナレル　ヘ世づく

セイモンガチガウ　よるべの水に
みくさゐる *

セイ　ヘたけだち

センコロ　ヘさいつころ

セヒトモ　しひて

セワシノウスル　ヘさうどく

セメテノヿニ　せめて

ゼンヒヤウ　ヘさとし
万ニ怪

セキガオコツテ　ヘしはぶきやみ
痎　にて

○す　部

スヂミチ　ことわり

スルドウハヤウ　とく

スジツ　數日　ひごろ

*簾帳ナドヲタレコメタル病中ノサマ之

ステ物ニセラレル　ふるす

スンテミレハスマレル　すめばすみぬる

スミアイタ　すみわぶる　世ヲモ家ヲモ

スミトモナイ　すみうき

スンガリト　ヘすが〱しく　ヘすがやかに

スヽケタ　すゝたれたる　すゝたれて

スワラシテ　坐　ヘすゑて

ズットアトマデ　のち〱まで

ス子シライ　數年來　としごろ

スッコンデ　ヘたれこめて　ヘおろしこめて　*

スデヾ　空手　たゞに　むなしく

スサマジウ　さはに　あまた　おほく　かずなく

スダチスル　すだつ　鳥ナリ

スモウトリ　相撲　ヘすまひ

スミニクイ　すみがたき

スヲクム　巣　すつくる　すをくふ氏　すくふ

ズヾグロウナッテ　すゝたれて

スミキッテアル　すみわたる　すむ氏

ズンズトイク　すゝむ

スマサレル　ある　あるべきに　ありぬべしノ類

スタレモノ　はふるゝ身

スクウ　むすぶ　スルナリ　水ヲ掬

ステヽオク　かへりみぬ　古長ニ　朝ゆふわかずつかふとてかへり　みもせぬ　わか宿のトヨメリ

スルヿモナシニ　つれ／＼と

スミトヲストコロ　つひのすみか

スツポリトカブセル　おほふ

スダキ　へいわけ　紀ニ喘息

スデノヿニ　ほど／＼　ほど／＼しきモ　拾　宮つくるひだの　たくみのてをの音のほど／＼しかるめをもみし哉．

スツテニ　同上

ズカト　おしたち

スコンニナル　へあまたゝびながるゝ　盃ナリ

スヂガタヽヌ　わりなし

スヂモナイ　わりなき

ズンブリトヌレル　ひつ　万ニ漬

スイリスル　かづく　海人ニモ　水鳥ニモ

スマジイコトヲスル　へつみを　をかす

ステ物ニ思ウ　おもひすつる

スリヨル　へゐざり　よる

スワツテ井ルセイ　へゐたけ

末　スヱニナツテ　へとよりて

スイリヤウシアテタヤウニ　へ思ひおよび　がほに

スヂメガヨイ　へしやらず

スヽンデヤメヌ　〽たけし　貴人ニイヤシキモノヽハヾカリナクマジワルヲハたけしトモイヘリ

スキトヲルヤウナ　〽玉のをのこ　源玉のみこ云ゝ

スイリヤウスル　そらに思ふ

スカヌカホツキ　〽つなしにくきかほ

スコシモ　つゆも　ちりも

スツペリ　のこりなく　みな

スツキリ　みな　のこりなく

スツパリト　〽けざやかに　〽あざやかに

スクナイキヤウダイ　兄弟　〽まれ〳〵のはらから

スヂヤイガソウデナイヤウスナ　〽まが〳〵しき

スバシカイ　〽心とき

スジヤウノヨイカホスル　〽じやうずめかす

スヂリモヂツテ　しどろもどろに

スヽメル　〽そゞのかす

スイトタカイ　高　〽そびやぐ

スラ〳〵ト　〽すが〳〵と

スコシ　里ト同

スグサマ　とりあへず

スゴイ　〽けうとし　すさまじ

スヂニツイテイテ　とめて

スカヌ　心づきなし

スキトヲルヤウニ　〽きよらに　〽けうらに

ステモノニセヌ　〽あふさぬ　不溢之

スイモアマイモシル　しほじむ

スカシノアル　〽すきたる

スマヌコトイハレル　へもどき おふ

スゲナウ　へすげなく

スンガリトシテアル　へすが〳〵し 清ヲスガトヨメリ　へすがやかに氐　神紀ニ

スミ画(エ)　すみがき

スクンダ　へすげみたる

スマシスギテ　へすみすぎて

スキノナイ 透　へゆるびなき

スタ〳〵ト　いきもつぎ あへず

スコシモチガワヌ　へうたがひなき

スノナイ（ママ）　すくなし ともしき

詞葉新雅　大尾

寛政四年壬子秋九月

皇都書舗

京極通五條上ル町
葛西市郎兵衛

同町
同　嘉兵衛

脚結翼草稿

不恨之恨　不禁之禁　不誂之誂　不歎之歎　不歡之歡

理中之理　理外之理

詞　義　理　誠

時

境　一物之境　二物之境

有無之徼

ある人をなしとみしにもかなしき（まされる）はなきをはありと思ふ之けり

脚結抄翼第一

北邊二世冨士谷成壽 述

咏屬

や 我正當ノ場所アリテアナカチニ又一場所ノ思ハシトスレト思ハレテ二場所ヲモチテイフ義

○冠のや

○冠ヲウケタルハタトヘハ菅ハヨク伏ス用ノ自然ト世間ノ常言トナリタルハ專カレカワサナルヲ數スルナリフストイハントテスカハラトオケルナレト伏見里ヲタテ、イフニハ伏見里ワカ正當ナリ冠ノ上ニヤトヨメル義ヲハカケテ(虫)□イヘハ菅ノ伏ス用ヲ數スルニテヨク伏サヌ物モアルヲ正當トスルナリ○名ヲウケテハ小塩ノ山ヲタテ、イハントスルニ大原ヤトオクハ大原ニテモアルカナ此小塩山ヲ我物トセリト思フ心ナリ今ワレ小塩ヲ正當トスルノアマリニソノ土地ノ大名ヲ以テ數シタルナリ自然ト大原ニ小塩山アルヿノ自然ナルヲモチテイフ之今ワカイフト大原ノ小塩ヲモテルト二場所ナリコレ又下正當ナリ○脚ヲウケタルイカホノヤ天ナルヤノ類ハ猶名ヲウケタルニ同シ○装ヲウケタル天トフヤノ類ハ冠ヲウケタルニ同七言モ此例ナリヤ上ノ物ハ物名又ハワサヲモイフヿツテナリ下ハツテニ名ナリイツレニモ冠ノヤハ世間ニシカ成ハテタル所ノ能ヲ數シテワカ力ノ外ナルヿヲ思フ詞ナリ○七言ノナクヤサ月ハ外ノ月ハ郭公ナカヌ月ナルヲ五月ニカキリテコレカナクヿニナレルハト五月ノ外ニタカフヲ數スルナリ古今用サマカハレリトハ詞ノ上ニ

テヤノ下ニソノ上ノ物ニツキタル名ヲスヱテイハヌカタカヘルニテ心ハ同シサレハ此ヤハ何ニテモアレ上地ナラハ土地物ナラハ物ノ外ノ物外ノ土地トハコトナル能アルヿノ人力ノ外ナルヿヲ歎スル詞ト知ヘシサレハソノ外ノ土地外ノ場所物等ガワカ正當トナルナリ只境ヲ歎スル詞トシレハ明ラカナリ

○狀のや　コレハワカ欲セサル筋ニナリ行ヲ歎スル詞ナリワカ欲スル所カ正當トナレト自然トソノ欲セサル筋ノ方ノ詞ノ方ヘ心ノヒカル、ヿヲ二ツニ持テイフナリ冠ノヤハ境ヲ歎シコレハ我心ノ中ニテ好ム方ヲ正當トスレト何トナク欲セサル方ノ境ニ思ハル、ヿヲイフヲケチメトスサレハコノヤノ上ノ詞ハイツ・ニテモワカ欲セサル筋ノ詞ソノ詞ノウラガ我欲スル正當ノ義ナリト知ヘシソノヿノ樣子ニカ、レルヤナリ

○中のや　コレハ物二ツヲイフ中ニオクヤナレハ上二ツニハタカヘリ花ヤモミチヲトイヘルハ花ハカリ見テアラントスレ𪜈何トナク秋ノメクリ來テ紅葉ヲミルヘクナルハ四季ノメクル境ナルヿヲ歎スルナリ狀ノヤハ裝ノ筋ニテ思ノ上ニテイヒコレハ物ノ上ナルカタカヘリ花ヤ蝶ヤト、（ママ）イフハ花ヲミルウチニモ蝶ノメテラル、心ナリコレ又上下ノ物片方正面ニテ二場所ヲモチテイフナリコチラニヒカル、心ナケレハ花トモミチ花ト蝶トナトイヒテモアリヌヘシ

○末のや　狀ノヤニ似タルヤウナレ𪜈狀ノヤハ吾欲セサル筋ヘ心ノヒカル、ヲイヒコレハワカ思フ所一筋アレ𪜈モハヤソノヿ無益ナルニ猶ソノヿノ何トナク思ハル、二場所ヲ持テイフ詞之カヘリミシハヤハカヘリミタリトテ行カテ叶ハヌ道ナルヿヲシリナカラ猶カヘリミラレシヿヲ歎シテナリ白河ノ、哥ハ少シヤウカハリタルヤウナレトヤトウクルハソノ無益ナルスチヲ・設テイヘルニテ猶サレトモヨラマホシキ心ナリサレハ此ヤノ上ニウクル詞ハ皆ソノ無ナルヿヲイフナリト心ウヘシ名ヲウケタル紀ノアツマハヤノ類ハヤトウクルハソノ無益ナル種無益ナルヿナトヲウケタリ無益ノ義ト知ナカラ猶思ハル、處ヤノ格義ナリサレハ

よ二場所ヲカケテイフトハタトヘハソノ餘ノ物ヨリハスクレタルトカユカミタルトカ愛セラル、トカイフ物ヲヨトイフ心ハ外ノ物トハコトナリトイフ心ナレハ二場所ニナルナリサレハソノ餘ノ物トコトナルヿアルモノ

ナラ子ハヨトナカムル詮ハナキ之

丸子ノヒトリ子ヨリカチタル故ニヨトイハルヽナリカハル人多ケレトオレハ怠レヌヨトイフ之

即コレホトツラキヿハアルマイトイヘルナリ

狀ノヤノ如クナレトソレハ好ム方ニナサントスレト自ラ好マヌ方ニヒカ

無益ナルカ正當ナリ狀ノヤハ欲セサル方ニ心ヒカレコレハ無益ナル方ニ心ヒカル、ヲケチメトス我コソヤトヨメルモ無益ノ戀ノヤメラレヌヲ歎シテ之

よ

物ノ數アル中ニテヒトツヲエラミトリテソノ一ヿヲスエテイフ之シカモソノ餘ノ物ヲモソヘ持テイフナリ〈マロカマロ子ヨトイフハフタリ子シヿモアレトソレニワカチテ丸子シタル方ノヿヲスエテイフ之サレ𪜈フタリ子タルヿヲ思フ故ニエリワカチテイフ心ナレハカレヲモ持ナリ咏トナルハソノヨシナリ〈ソヨソノヿトイヘルハソノヿニアラヌヿニトリワケテイヒテシカモサヤウニナキヿヲ持テイフ之（外ノヿトハカクヘツソノワスル、タ子ニナリサウナルヿヲトリイテントテイフナリ）ソノヿノエラフハカリナルガ數ノカヽル所ナリ〈ワスレスヨカハラスヨハワスレカハルニワカチテイフナリ〈人ノシラヌヨハナキ名ノワヒシキニツキテハサマ〱ノワヒシサアレト中ニモ人ノ身ヲツミテモシラヌヿカ別シテワヒシトエラヒテイフナリソノ物ノ中ニイツレニテモ同シヤウニ思ハルヽ事物ナラハヨトエラフヿモアルマシキナリ中ニテエラハルヽ故ニ咏ノ詞ナルナリヤニ似タルトハ狀ノヤ之ソレカ思ハル所（ママ）ノ似タルニテ別ハヌキノ別之

な

物ノ分別スル理アリテ一所ノユルカサレヌヿニ自然トナリテアルヲ數スル詞ナリサレハソノユルカシカタク自然ナル故ニ咏ノ詞トナレリコノ用ヘキ様ハソノユルカサレヌ所ヲ正當ニ持テ下心ニハ猶コレト分別シタル理ノ本ヲカケテイフヘシ上ニウケタル詞ノ義ガ正當タリト知ヘシ

○とはぬつらしな（トハヌトイヒテナニトモナキ心ニテハ井ラレヌヿヲ云下同）トハトハヌヲハムカフノ人ハツラシ𪜈思ハテトハヌナルヘケレトソノ理ノ本ヲオシテ見レハツラシトイハテハ叶ハヌヿゾト天下ノ人誰ニテモ思フヘキヿニ自然トナリテ我力ニオヨハヌヿトナリアルヲ數クナリ○いつともしらぬ舟出かなしなトハカナシトイフ詞ノ義ノ正當ト自ラニ成リテユルカシカタキヿヲナケヽルナリ○來てみへき人もあらしなトハモハ

ル、二場所ヲ持テイヒコレハ一方ニカタヨレルヲユルカサントスレトユルカサレヌ勢アルヲ云ナリ

かニなノ字ソフハかトイヘハ又必來格スヘキ物ヲ起ス声ナレハワレヨリソレヲなト定メテ外ノ來格ヲマタサルノ心故ナリ

▲タノモシトイフヿハ何ニモアレハカ〱シクシタ、カナル物ヲミテ思フヿソトカ子テノ心アテナリ

ヤアランカトイフ疑モツケカタクアラシト思ハ子ハナラヌヿ正當ノ理ニ叶ヒハテ、ユルカシカタキヲナケクナリ△タトヘハツラシトイフ詞モオモキモアリ輕キヿモアリソノ中ニモ重キハツラシトイフ詞ノ正當トナレルヿノイカニス𪜈ソレヲユルカスヘクモナキ故ニナトイフ之自然ニナルトハ心ヲ以テシカスルニアラス伐カラニテハナク自ラソレノユルカサレヌヲ云之あらしなトイヘルハ少シカハレルヤウナレトモシモト疑ノカケラレヌ所なノ格義ナリ

かな

先かハ我兼テ心アテニシオキタル一筋アルニ今コトサラニソレトアテチカヒナル筋ノ出來テオノツカラカノ兼テノ心アテニアタリ動カサル、義ナリ心アテニ違フヿノ別ニソコヘ來リアタルヿ咏ノ出ル所ナリなハ上ノ義ニ同シソノ心アテトハチカヒタル筋ノ自ラ來リ格ル所ノモトノ心アテノ筋ヘ引モトスヿ難キ勢アルヲハナトイヘル之サレハ心アタリト違フタルヿノ自ラ出來テシカモカ子テノ心アテノ通リニオシツケニモセラレヌ勢アル時ニヨムヘシ

助字ノ哉ト漢文ニ用ルモ義全同シ

○靡のかな

上ニ受タル靡ノ詞皆ソノカ子テノ心アタリトハ自ラ引タカヒテ出來タルヿヲイフナリト知ヘシ

○めつらしき哉トハメツラシトハマツ人ノ來ルコソ珍シクハアレ珍シト思ハル、ハコレ斗ニテ外ニハコレホト珍ラシキヿハアラスト思ヒシハカ子テノ心アテナリソレニ雁ノ初テナク声ノ何トナク珍ラシトイハテハ叶ハヌ物トナリ出タルヲ哉トハヨメリサレハ上ニウケタル詞ノ對伏意乃カ子テノ心アテノヿナリ▲ト知ヘシコレハ上ノマツ人ニアラヌ物カラトイヘルハ乃心アテノ自ラタカヘル理ヲイヘリ○たのもしき哉二葉ハマダイフカヒナキ物ナリ大抵木高クナリタルヲコソ陰トモタノムヘキヿソトカ子テ心アテニシ非タルカ思ヨラス二葉ヨリ陰トタノマテハ叶ハヌヤウニ自ラ心ニ思ハレテユルカスヘカラヌ所ヲ哉トハヨメル之コレハ木高き松のたねトイフハ乃なトユルカスヘカラヌ理ヲイヘリ上ノ哥ハ上ニカノ字ノ出タル故ヲコトワリノ

物ニツクトハイヘドモ物ニツキテノ心ヲイフ之

なノ字ハ對伏ニフクメタリコレハなノ字ノ出タルヲコトワリかノ字ハ對伏ニフクメタリ○こぬかなとトハイツモユク物故女ガ又近キホトニハゼヒ來ヘシト心アテニシテアル所ヘイカニシテカ心アテタカヒテコヌヿヨト思ハセントスコレハ人ニカナト思ハセント設テイヘルマテニテ唯同シあはてかへりしトイヘルハコレハかト思ハセントスルノ理ヲイヘリなハワレカラ行カヌ物ナレハなノ字ハカヽレト對伏ニフクメタリ○古今二首に聞つゝ戀わたる哉トヨメルハかモなモ對伏ニマカセテフクメタリヨミ方サマ〴〵ナルヲミルヘシ

○名のかな 靡ノ哉ハ事ノ上ニテ心アテノタカヘルナリ名ノカナハ物ノ上ニテイフカタカヘリ義ハ唯一同ナリ○心をぬさとトハ旅ハウキ物ナリト知リ居タルガ兼テノ心アテナリソレガ心ヲハヌサト同シ如ク摧クニツケテウシトイフホトニテアラント思ヘトシカユルカサレヌ物ト今旅ヲハシラレタル心ナリ上ノ句ハアテ違ニ自ラナリキテユルカセカタキ源ヲイヘリ是ハかモなモ出ル理ヲ上ニイヘリ○ゆくかたのなきトハ心トイフ物ハワカ思ヒ次第ニナリテ思ヒナホセハウキヿモナクサム物ソトオモヘルガ兼テノ心アテ之我身ノ内ニアル物ナレハナリソノアテチカヒテイカヽニスレドモヤル方ノコシらへかたきか哉なり〔心ノゆくとは滿足したる義之〕是はかもなも對伏にふくめたり○猶立かへるは心といふ物は我身の内の物なれはわかまゝなりとおもへる上に同し古の戀しくなりてもあなかちにおもひたりとて益なき事なれはさのみは思ふましき筈なりされはさのみ思ふましと思へはおもはすにゐらるゝ物そと我心を思ひ居タルガ兼テノ心アテナリソレニ引違テ何トナク古ノ思ハレテ忘レント思フニ隨ハセカタキヿヲかなトハヨメリコレハ下ノ戀しきことに物忘れせてトヨメルハかトナリ行由ヲ云ナリ△スヘテ哉ノ上ニウケタル詞皆心アタリニタカヘル物ノ出來リタルヿヲ詞ニヨミ出ヘシソノ詞ノ對伏カ兼テノワカ心アテナリ其對伏ト詞ノ上下ノ間ニテイカニモ對伏ノ方ノヿニナシカタキ勢アルヿヲタニヨメハなノ字ハ動カヌナリ

ウシロメタクオモヘリトテカヒナシト思ヘリシニノ心ナリ

何も何かな

もトハ何ヿニモアレソノ義相當ナル物ヲ上ニ置テソレニハコトノ外ナル物ヿヲハソレニツケントテイフ言ナリ毛家ノもモ唯一ツナレトモトヨリヨリツカヌ物ヿヲヨセントスルナレハ歟ノ詞トモナレルナリヨリツカサル物ヲヨセントスル故ニサテモノ里言ニアタルナリタトヘハサテモアツイトイフハ帷子ヲ着テ井テアツキ故ニ肩ヲヌキタルハ相當ノヿナリス、シカラセントスルナリソレニ暑キ寸ニサテモノ里言アリコレソノ肩ヲヌキタル方ヘツケントスルナリ涼炎ハ乃コトノ外ノ物ナルナリ又燈ノクラキ故ニカ、クルニ猶クラキ寸サテモクラキト云アカキトクラキハソノ反ナレトクラキヲアカキ方ヘヨセントテイフナリコレ詠ノもナリソノ雲泥ナルモノヲヨセントスレハソノ間ヨリ必情ヲ生スヘシソノ情乃もノ上ニ承ル所ノ詞ナリサレハソノ承タル詞ヨリ上ニイフ所ノ詞ニハカナラスカノ相當ノ理ヲフクメル詞アリト知ヘシヿレハヤカテアラハレタルモ理ニカクレタルモ對伏ニユツレルモアリ哉ハ上ニ同シ例ナリソノ中ニモなノ字もノ引ハリニナル心アリ動カヌ所アルヨリカノコトノ外ナル物ノヨリカタキ心アリヨリカタキ故ニもノ上ニ承ヘキ詞ヲ生ス○をちこちのトハ山中ハタツキモシラヌハ相當ノ理ナリソレニタツキナキト人ヲ喚トハ雲泥ナレトモトヤ山中ノヿナレハ喚フヲタツキシラヌ方ヘヨセントテオホツカナクモトハイフナリカ、ル山中ニ人ヨフ声ナトハスヘキヿニモ思ハサリシニ今思ノ外ニヨフ所かナリシカタツキシラ子ハヨンハ不術ナリトハイヘ𪜈猶外ノ声トハ聞ナサレヌがなナリ○をみなへしトハ荒宅ニ女一人アレハ必男アリテ人ミカレテ歎クトミユルヿ相當ノ理ナリ荒タルヤト、ハ住カレタルヿヲ云ソノ來ヌヲ恨メシトオモヒテアル男トワレトハヨリツカヌ物ナレトソノ男ニ我ヲセマホシキ心ヨリウシロメタクモトイヘリカ、ル荒宅□（虫）女ハ男ニツキテ傍ヨリモウシロメタカラス見ユヘキヿト思ヘリシニ一人立テウシロメタキ所かくイカニ見レ𪜈アタリニ男ナケレハウシロメタキノ詞ウコカヌ所なナリ此哥ハカヘリツメナレハ下句上句ノ上ニアル心ナレハ唯上ニ同シ○水の面にトハ古今哀傷ニ諒闇ノ寸ヨメルナリ水面ノ花色ハウルハシキヿ相當ノ理ナリソレニ花ト待トハヿトノ外ノ物ナレト花ノ色ノ方ヘ君ノ御カケヲヨセントテサヤカニモトイフナリ込者ノ俤ハホノカニコソオモヒ出ラルヘ

常情ト引タカヘルホトノヿナラ子ハかトイフ詮ハナキ之

コトノ外ナル物ヲヨセントスレハソノ間ヨリ一情生スルソノ生スルヲ人ニモタセ思ハセントテなヲハフクナリ

トメントスル心トトマラヌ花ト之

遲クイレト思フ心

キト思ヘルニサヤカニ見ユル所かナリイカニモ少シノマキレモナクオホエラルヽ所なナリ○音羽河トハセキイレテオトス瀧ハ面白カルヘキハツナルヿ相當ノ理ナリサテ瀧ト人心トハコトノ外ナル物ナレトコレヲヨセントスルグアイヨリみえもトハイフナリモトヨリ瀧ニ人心ミユヘキ理ナシト思ヘルニ今見ユル所かナリシカモイカニ見レトモソノマキレナク主人ノ心サマノ見ユルニ疑ナキ所なナリコノ哥ハもノ字ノ下ニ又再人ノ心ノミエトアル心ナリ

何も何か

もハ上ニ同シかハ哉ノかニテなノ字ヲハフケル心ナリイカニトナレハかハ上ニモイフ如ク今マテノ常情ヨリハ今又別ニ心ニアタルヿ出來レルヲトリタテヽイフナレハカナラス又ソレニ來格スヘキヿヲマツヘシコレハ理ノツ子ナリ一陰ニ一陽來リアタルモかナリ陽來レハ又陰ソレニ來リソフガ如シサレハワガかト心ニアタレルヿヲイヒ出レハ聞人或ハサニハアラストカ又ハソレハカヽル理ナリトカイカニモサナリトカイフ心ヲ生シテワレニ來格スヘシソレヲマツ爲ニなトイハサルナリ乃なノ字ヲ聞人ノ心ニ設サスルナリかなトヨムハソノ人ノ來格スヘキヲマタレスメ自ラワレニ決定セテカナハヌ理アル故ニなトハオサヘテヨムナレハかトハカリヨムハ少シカロキナリ漢文ニ何乎タリト用ル乎ノ字ニ同シ心ウヘキヤウハ猶かなノかノ字ト同シ上ニ承タル詞今ノ心ニアタレル所ナリソノ對伏カ子テノ常情之○とゝむへきトハチル花ハトヽメカタキ物ナルヿ相當ノ理ナリサテ花ト心トハコトノ外ノ物ナレト猶トヽメントスル心アルヨリハカナクモノ情出タルナリ心ハワカ物ナレハトヽメント思フニカヒナキ物ナリトノコトワリヲシレルカラニハソレニ隨ヒテタクフマシキニソレサヘ花ニタクヒユク所かノ字之アマリ理ヲ出テワカ心ニアタレルヿナレハ人モカヽルヿハアルヿニヤトなノ字ヲマチタルナリ何故ニなノ字ヲハフケルソト思フニコノ歎息ヨリ人心ヲ動カサン爲ナレハナリコノ花ハ女ニタトヘタルナレハソノ女ニモキカセテイカニモ理外ニ我ラヲ思玉フソトなノ字ヲ心ニ設サセントノ心ナルヘシ○あかなくにトハアカヌニカクルヽハ月ノ相當ノ理ナリサテワカ心ニアカヌ

ト早クイル月ト之

玉ニモヌケル春ノ柳カノ哥ハ音羽川ナトノ例ニ同シ

なトイヘハ月マタク入レルヿニナルナリ

初秋ヲ時トサク萩ト仲秋ヘカヽリテ吹マヨフ風トナリ

ト月ノ無情ナルトハ火水ナレトアカヌ方ヘヨセントメミレハマタキモトイフ情生スルナリサリ圧今シハシハカクレシト思ヘリシニ引タカヘテマタキニカクル、ヿノ心ニアタル所かナリサテソノ一座ノ人心ニなノ字ヲ設サセン爲ニカトノミイヒテソノなト人ニキカスル心ヨリ下句ヲイヘルナリ下句ノ所ヘ心ヲオトサントテ夜ヲハフケルナルヘシ○吹まよふトハ風ノ吹マヨフ比ハ秋モヤヽフカキ比ナレハ寒キハ相當ノ理ナリサテ風ト萩トハ別種ノ物ナレトコレヲヨスレハソノ間ヨリウツリモトイフ情ヲ生セリコノ哥上ノ音羽河ノ哥ト同シク今一度もノ下ニウツリ行トイフ心ナリツラクコソアレヨソニウツルマテニハアラシトタノミシニ今何トナクウツルヤウスノ我心ニフトアタル所かナリなヲ待タル心ハソノ懸想人ニコレヲキカセテ餬ウツリタルナレハなトイフ心人ニ生スヘシ生スレハ小シクイトヲシキ心モ生センカトテ我ヨリナトモ先イハヌナリもヲ今ノ実ヿニカケテイハヽ契リアレハ變セサルハ相當ノ理ナリサテソノ理ト變シヤスクタノマレヌ心トハ雲泥ナレトソレヲ不變ノ方ヘヨセントスレハウツリモトイフ言イテクルナリ△スヘテなヲハフクニサマ〳〵アリ世人ニスヘテ來格ヲマテルハとゝむへきノ哥ノ如シ猶ソノ中ニソノ女モコモル心ナリあかなくにノ哥ハソノ一座ノ人ニマテルニテ惟喬ノミコモコメタリ吹まよふノ哥ハ傍ヨリ見居ル人ニマチテ懸想人ヲモカネタリ

○中のもにかかなの打合なき例　コレハ上ノ何モ何哉ノもノ字ノ心ニイリ、カタカハスコレハ哉ノ心ノカヽラヌナリ

○中のもなくても　もハもノ義アレハ咏ノかハカリヨミテモ害ナケレハナリ

○うたかひのかは　コレハ例ヲ以テコレヲ知レルナリソノ故ハ今物ヲウタカフニ歎息ハナシ疑テ後決シカタキ寸ニ歎息ハアルナリ此故ニかノ上ニ中ノもハヨマサルナリかもトイフアユヒ乃かハ疑テサテ決シカタキ歎ヲモトイフナリ

も

もノ義ハ中ノもニカハルヿナケレトヨミツメニアル故心エ少シカハレリ第一ニ出タル詞ハ乃相當ノ理アル所ナリコレ對伏ニユツリ又ハ理ニアヅケナトシタリサテ第二ニ出タル物カノ上ノ物ヿトハ理雲泥ナル

モノナリコレヲヨセントスレハ第三ニ出タル詞生スルナリコノ詞ヲヤカテ承テもトヨミツムルヿツ子ナリ○わかせこかトハコノ第一二ノ句ノ對伏意君コノ比來玉ハヌナリサテ蛛ノフルマヒハ人ノ來ル表ナリトイヘハ來玉ハヌトハ雲泥ナレトコレヲヨセテミル寸ハ來玉フヿカ子テシルシトイフ詞生スルナリソノ生スル所以乃歎ノカヽル所ナリ○秋たちてトハ第一二ノ句相當ノ理アル所ナリ秋來數日ナラ子ハアツカルヘキハ理ナリソレニコノ子ヌル朝ケノ風ハ秋ヲ催ス風ナレハアツカルヘキハ夏ニ近キ故ナルカ故ニ二理夏秋ノ別アリサレトソレヲ夏マタ近キニアハセテミレハ涼シトイフヘキ情オコリテサテもトハヨメルナリ夏ノ方へ引ツケントスレト引ツケカタキ故ニスヽシモトノ言ハオコルナリ○我家の園にトハ雪フレハ春ナレト冬ノ物ナルヿ相當ノ理ナリサテ鶯ハ春ノ物ナリサテ冬ノ物ノヿニ引ツケントスレト引ツケカタキ故ニなくもトハヨメルナリ鶯ハ冬ナカス春ヲ待テナク物ナレハイカニ雪フレト猶春メク心ニなくもトイヘル之○そのそこにトハ遠方人ナレハ遠クミユル花ハ何ナリト知テアルヘキヿ相當ノ理ナリサテ遠方ニ白クノミ見エテ何トモワガ分カヌハ知レル遠方人トシラヌ我トハ雲泥ナリサレトソレヲシレル方ニ引ツケテシラントスレト遠方ニテシラレヌ故問ハ子ハナラヌ心ヲ生スルナリサレハ何ノ花ゾトイヒテもニウケタルナリサレハモヲ眼目トイヘリ○かけをおそれけんトハ莊子出処ニテ世説ニモアリワカ影ヲ人ノ追カトオソレテ走リ〳〵テツヒニ死セル人ノヿナリ古語ノ通セサル故ニ今ノ里言ハソレニソヘテトカ子ハナラヌヿヲカケトハタトヘタルナリ

味ノアユヒハスヘテあぬきノ邑おぬきノ邑ニカキレルヿ自然ノ理ナルヘシ

○やなもノみつ心かよふ事

ヤハ二場所ヲ持テオノツカラ片方へヒカルヽ歎ナリなハ外へソレヲ動カセタクテモユルカサレヌ歎ナリもハ雲泥ノ物ヲ引ツケタルニヨリモツカヌ歎ナレハ各別ナレト皆槩スルニ詠ナレハカヨハセテサマ〳〵ニ心理ヲナセト皆歎ニオツル故ニカヨハスルナリ異本トナレルハ各義ヲ失ハシトテ之

疑屬○末靡にかよふあゆひを云〻

おほむね十一丁ノ表ニコノヿ出タリアハセテ知ヘシ末ニカヨフトハ不倫じノ如シんハ末ト靡ニカヨフトイヘリ乃何やノ下ニこむやこしやのトイ

多端アリテ定カタキヿヲ中ニモワカ心ニ先アタリタルヿヲかトイヒテソノイヒタルヿノ對伏ノ物ハ聞人ノ心ニモタセテモシ此外ノアタリカトオス詞之

かハコナタヲ正面ニメカナタニアテヽイフナリやハカナタヲ正面ニシテコナタヲカケテイフナリコノ故ニ思フ問フノヿアリ

必上ニかト自ラ我心ニアタラ子ハナ

フ哥アル此やノ字ナトナリこむかこしかトモヨミテモ語路モアシカラヌ故ニやニセンカかニセンカトマトハル、ナリソノ餘ハ皆語路ニテモシラルヘシトイフ心ニテおの〳〵定まりたるうけさまありトハカケルナリ世上脚結ニ義ナクシテ通用セル危ウサヲコノヒトツニテモ知ヘシ言外ニコノ意アリテカケルナリ

○疑のかさしをうくるに云ゝ

かハ上によみて下によますトハ疑ノカサシヲかノ字ヨリ上ニヨミテかの字ヨリ下ニ疑ノカサシハヨマスト之いくはくの川をつくれはか何かうらみむノ類之やモ上下ノヿハ同前ニ心ウヘシたてるやいつこぬしやたれナトノ類コレナリ

か

詠ノかニ同シケレト疑フ義ノ出ル故アルハソレニツキテノ通情アルニ人モ我モソノ情アルニフトオノツカラワカ心ニアタルヿアルヲヤカテムカフノ物ニアタルカアタラヌヲアテ、ミラル、義ナリ我情ニフトオノツカラアタリクルヿノアル所あぬきノ義之ソノ我心ニアタルハ必ソノ外ニソレニ對スヘキ物アルヘシタトハ、サマ〳〵ニ見ユルモノ、中ニモヒトツ我心ニアタルヿアルヿヲイヒ出テムカフノ物ヲ人ノ見タル情ニワカ情ノアタルアタラヌヲ察セントスル詞ナリサレハかハマノアタリナラヒタチタル物ノ中ニテフトオノツカラ心ニアタル物アル心トナル故子ノタトヘモ出タリやハ隔アリテカナタニハ手オヨハヌ方ノオノツカラ手ノ及ハヌヲ歎スル中ニコナタヲモ持テイフ心ナリ君やこしノ哥モシカル故ニ逢ツルヿハモハヤ過タルアトナルハヘタテアルナリシカルニ逢タルヿハサタカニアルヤウニ思ヘト君カ來テアヘルニヤ今後トナリテミテハオノツカラシラレヌヤウニナレル疑ナリサレハアヒシ寸ヲ正面ニミテ今シラレヌ寸ニナリテ及ハレヌ心ヨリヤト疑フナリ夢かうつゝかトハ今夢ウツ、ナトアル中ニモ夢ナルヘク我心ニオノツカラアタル所ヲ人モサオモフカヲミントテかトヨメリソレニ又夢ニテハナシ現ナルヘク心ニアタリクル心ニ現かトヨメルナリ重タルかハ皆カクサマ〳〵ニ心ニアタル心ヲヨメルナリ我心ニアタル所ヲ主トシテヨムナレハかノリコレやかノ別

ラサル故アルヿヲヨメリ

秋ノ野ノ哥ハ中ニかアレト三句ヨリ又一趣意ナレハヨミツメト同シ

ナリサレハかハかノ字ノ上ニウケタル詞スナハチ今ワカ心ニアタル物ヿヲヤカテヨミ出テサテ又來格ヲ伺フナレハソノ上ニ承タル詞ノ對伏スナハチ今心ニアタラヌ物ヿナリト知ヘシやハ上ニウケタル詞乃カナタノ場所ニテソレニ對伏セル物ヿ場所等ノコナタニアリテソコヘ手ノ及ハヌ所ナルヿヲカケテイフナリト知ヘシ○秋の野のトハタレニテモタ、錦着タル人ノ袂ノ如クミルヘキニフト自ラワカ心ニ草ノ袂ト思ハル、ヲイヒ出テ他人ノ心ニアタリオトロカシテ實否ヲマツ心ナリ花薄ノ上ヘサナクハナド、イフ詞アル心ナリコノ下三句乃かトイヘル心ノアタリニナレル故ヲイフ之○わかうへにトハタレモ只マコトノ露ナリトミルヘキニフト自ラ我心ニカイノ雫ト思ハル、ヨシヲイヒテ他人ノコレヲミル心ニアタレルナリコレハ我らヘトイヘル所かト心ニアタリヲ生セルナリ○こりすまのトハワレハカヘル斗ノヤウニ思ハル、カ歸スマシト思フ心ナトモアルカトノ心ナリ○心さしトハ雫ノイカニモ花トミラル、ヨリコレハ心サシヲソコノフカク染テヲラレタル雫ノ枝ナル故ニカトワカ心ノアタリヲイヘリサテマタ此外ニカク花ト見ユル故アルカトイヘルナリ畢竟此哥ハをりけれはかトアル心トミルヘキナリ○秋風のトハコレラノ外ニマタ何ゾナルヤトオモヘル心ナリ

かに

かハ上ニ同シにハ何コトニモアレソノ物ノ前置又ハ下ジキ又ハ場所ニスル処ノ動カスニ外ノフレナシニナリテアリ來レル心ヲイフナリタトヘハ古今ノ秋野に人まつむしの声すなりトイヘル哥ハ人まつむしの声すなりヲイマイフニソノ松虫ハ外ニモナカス〆秋ノ野ニシモナキテアル心ニにトヨメルナリサレハ此かにノ脚モ必上ニ誂願等ノ心ヲハヨメルソノ願誂乃人まつむしのニ同シモトソノ誂等ヲタテ、今イフナリサテソノアツラフルオコリハかトワカ思アタルヿヲ場所ニモトヨリナシテアツラヘテアルヨシヲシラスル脚ナリいぬきノ義委シク弁ヘシソノ誂願ハモトヨリかトイフ所ヲフレス〆場所ニシ來リテアツラヘヲカフナリトイフ心ヲモツテにトハイフナリ

○さくら花トハチリカヒクモレトイフハ老ノ來ントイフカソノ老ノ來ン道モモシマトハウカト思アタルヿアリソウユカウカハシレ子𪜈先ソノかト思フヲ場所ニシテちりかひくもれトハイフナリトイヘル心ナリソレテモマトハウカマトハヌカノシレヌ所か之ソノかヨリクモレトアツラヘタルガにノ格義之ソノかトイフ所ヨリ外ヘハフレヌ場所ヨリくもれトアツラヘタルナリ○なく涙トハ雨とふらなんト子カフヿハ我妹ノワタリ河ノ水マサラハカヘリ來ンカトワカ心ニアタルヿアリ歸ルカ歸ルマイカハシレ子ト先ワカ心ノアタリヲ外ヘハフラサス場所ニシテソレヨリサテふらなんトハアツラフルソトノ心ナリ

端書ニ疑ナキ中ニ疑ノマシレルヲヨムトイヘル詞ヒタトアタルナリ

何か何.

かノ義上ニ同シ上何モ上ニ同シクソノ詞ハ乃吾心ニアタレル所ノ物ヿナリソノ對伏ヲ人心ニモタセテコレニハアタラヌカト求ル心トナルナリ下何ハ第一例ハ必定決定ノヿヲヨムヘシコレ上ノ何かニタカフ所ナリタトハ、染タヿハ染タレ𪜈何色ナリシヤオホエヌ寸先吾心ニアタル花田色ニカトヨミテ下ニ染シトヨムヘキカ如シ第二例ハ故ナキ物ヿノ眼前□ナルヿヲヨメリ

○一例おもふ中のか

コノ例上ノ何かト同シタトヘハイツレニヤシレカタキ物イクツモアル中ニ何トナク先吾心ニ思アタレル物ヲ先一ツ出シテかトウクルナリうたかふ中のかハスコシコレニコトナリサレト下何ハ二例𪜈ニ同シク必定疑ナキ物ヿヲヨメリ○までといひし何ニモセヨ露ノヿヲイフタヿハ違ナケレト他ノ人カイヒシヲ聞タリシニヤ又ソノ人カ我ヲタノマシメタルヤラシレ子ト先たのめトイフヿカ心ニ何トナクアタル故ニかトウケテタシカニソコモトガタノマシメヤツタカト思フタトアタレルナリ置し露トイフガ決定ノヿヲ云ナリ○いつのまに花ノチルヲ惜ミタリシヿハ決定アリシニ疑ナキヿナリソレカシレヌ中ニモキノフト心ニアタルヲかトウケテソノ他ノ日ニ對シタリ○奥山のワカ戀シケクテクルシサ堪ヌ身ノアリサマノ何トカハイハルヘキサマナルヿ必定ナリサレハいはんトイヘル詞決定ノヿナリけぬとノ詞心ニアタレル之未消ナトニ對シテイヘリ○あすか川過なんノ詞決定ノヿナリ雨フルカラニハ何ニモセヨ花ノ寸過タルハ決定ナリソノ中ニ散トイフヿ心ニアタレルナリサテ色變スルナト未散ナトニ對シテイヘリ○定な

何ヿニモアレ故ノシラレスメシカアルヿアルニシカレ氏シカアルカラニハ何ソ故ナクテハカナハヌヿナレハかトヨミテソノ実ヲエントスルナリソノ何ソハ故アルヘキニ疑ナキ所かノ格義之アリトイフハイフヿヲキケト所シラレスシカリトハイヘトトコソニアルカラニイフニハ疑ナケレハシラントテかトヨメリ

きかはらんヿハセヒ氏ノヿニテ決定ナリソノ中ナカニモ近キあすト
イフヿノ心ニアタレルナリサテアサテヨリ末ノ他日ニ對シテイヘリ

○二例うたかふ中のか

上ハおもふ中のかニコトナリ上何ハおもふ中のかハ疑ハシキ中ニ心ニアタルヿ
ヲ一ツヨミ出ルヽコノうたかふ中のかハ疑ハシキナリヲ詞ニ出シテかトウクル

ナリサレハ皆疑ノ頭挿ヲウクルナリコレハ下ノ哥ノ何をかたねといつれかあまのナトイフ哥コレナリいくはくの田をつくれはかたかみそきゆふつけとりかナトハ猶疑ノカサシハアレト中ニ又別ニ詞ヲヘタテヽウケタレハおもふ中のかノ例ニ近キヤウナレト猶たかトイヒいくはくのトイヘル詞ニ心専ナレハ二例トナレリコレヲ心エン樣アリいつれ何ナトイヘハ実物ナシ只ソノ心ニ方ヲタツル所ノ心ニアタル所ヲ出セルナリサテソノ中ノ実ヲ得ントテかトハイフナリ何ニモセヨトコゾニハアロウト思フトイフ心ナリサスレハやノ如クナレト二場所ヲ持テハイハヌナリ下何モおもふ中のかニハコトナリコレハ今何ヿニモアレ端ノマノアタリミエテアリテソノ故ノシラレヌヲシラントテソレヲシラント思フ方ノ心ニアタレル詞ヲ上ニイフナリヿハ目ノマヘニテ故ノシレヌ物事ヲハ下ニヨムヘシタトハヽ故シラヌヿノ眼前ナルヲ下ニイヒテソノ実物ハ何デモコヽカラコヽマテノ内ニアラウト思フガトかノ字ニウケテイフ心ナリ○小舟さしあまの玉もかる浦トイフ所アリトハキケトモ実ニ何方ニアルカモシラヌ故ニかノ下ニアリコレヲ知ラントスルハソノ実所ヲシラントスルナレハ浦ハイツ方ニモアリソノ内トレソトイフ心ニテかトウケタルナリ○忩くさ種ナケレハ生セ子ハ種アルハアレト何ヲ種ニスルカソノ実シレスサレト生スレハ何ソハ種ナルヿ疑ナシコレヲシラントスルニ何ゾハ種ナルヘケレハ何をかトハヨメリ○たかみそき立田山にをりはへて鳥ノナク声スルハスレト何故スルヲシラスサレトナクカラニハ故アルヿ疑ナシコヽテコソトナク故ヲシラントスレハ誰ソハミソキシテ鳥ニ木綿ツクルナルヘケレハかトウケタリソノ人ヲ知ラントテノ心ナリ旅ノ首途ノ心イカニワヒシカラント思フヨリノ疑ナルヘシ
○いくはくの何故カホトマテ呼故ヲシラスサレトヨフカラニハ田ヲ多クツクルニ疑ナシコレヲシラントスル

ニ何ニモセヨ多クノ田ヲツクルナルヘシトソノツクル田ノ分量ヲシラントテかトウケタリ○花よりも花ナモ人ヲモ見タルハミタレトイツレヲ後ニコヒントミタリシヤラシラレスサレトミタルカラニハセヒトチラソヲコヒントミシニ疑ナケレハ吾心ノイニシヘノ思ヲシラントテいつれをさきにこひんトハイヘリソノ時カラコチラヲコヒルテアロウト思フテミタト決定ヲシラン爲ナリ○ちる花をウラミタルヿハウラミタレト何ノ故ヲシリテウラミタルモシラレスサレトウラミタルカラニハ何ソハ故アリテウラミシニ疑ナケレハコレヲ賞トシテウラシタトイフヿヲシラントテナリ此哥ハかはノかノ如シ本ノ義ハナセニカクウラミタルヤラトノ心ヨリ何からうらみむトイフナレト早ク心エントスレハかはノ心ニミレハ早ク心エラル、故ニかはノかトイフヿモアルナリ○たか爲の霧ノサホ山ヲ立カクスハカクセト何故ニカクスヲシラスサレトカクスカラニハタレソノ爲ノ錦ナル故ナルヿハ明ナレハソノ錦ヲ領知セル本人ヲシラントテかトイフナリ羨テかトイフ之○夏むしをコシ亦かはノかノ如シハカナシトイヒタルハイヒタレト何故イヒタルヲシラスサレトイヘルカラニハ何ソヨシアリテハカナシ〱トイヒシニ疑ナシソノ物サ子ヲシラントテ何かトハイヘリコレハ今下ニイヘル所ノ理ノ心ニフトオモホエタルヨリかトシラントスルナリ上ノ我身モ氏ニトヨメルモコレニ同シ

○かたみも今は　何せんにノ下ニ見むノ詞ヲ畧セルコヽロナレハぞヲハヅセトハアルナリ　○伏やは別の事之　あはれいくよのやとなれやナトハ疑のかさしノ下ニやノ字アレハナリサレトコレハ別ノヿニテこゝにイフハ中ノか中ノやノ上ノヿバカリナリト云ナリ

かは

かハ上ニ全同シコノアユヒコトニ疑ナキヿニ疑ヲ設タル心専ナリはハ上ニウケタル物ヲツヨク正面ニ見テソノ物ノ落着ノ遠方ナルヲイフ詞ナリウケタル物ヲ正面ニミル故ニオノツカラ分別モカヽルナリソノ落着ノ方亦専方ノ分別ヲナス義アリサレハ此詞ハ我心ニハモハヤ決シテカクアルヘシトオモフヿアルヲカリニモシカウモアロウカト思フ心アタリヲ云出シテカトヨムナリサテソノかト受タル詞ノ對伏カ則決シテ

かノ上ニ承タル詞ヲヤカテはトスヱタル心ナリトミルヘシ

カウアラントハ思ヘト、思フヿナリ乃ソノ對伏ノ方ガはトイヒタル落着ノ方角トナルナリはノ上ニ正面トウクルハかノ上ニアル何ニテモ物アリソレヲウクルナリソノかトイヘル詞ノ對伏乃今ワカ正面トスル所ナラヌ故ニ遠キ心アルナリ此故ニコノ義ヲツ、ムレハ反語ノ如クナルナリワレニ大抵ハ疑ナキヿヲモシモヤトテかトヨミテサテ下ニはト添タルニテ聞人イヤ〳〵ソウテハナイソノ裏ノ方ノソレテハナイ方シヤソト聞人ノ心ニ落着ヲ設サセテイフ詞ナリソノ落着かノ反ナレハソウテナイトカヘルナリサレハかノ字ノ上ニ何ニテモアレ名ノ出タル物ヲウケテはトイヒサテソノヿヲウケテかトイヒソノかトイヒタル對伏カ乃はノ落着ノ処トナルナリ今ワレハソノ物ヲ正面ニ見テはトイヒかト心アテヲイフナレハソノ對伏ノ方ハ自ラワレニ遠キ方トナルナリ〇声たえすトハ鶯ヲ聞人ニメヨメルナリ一年二度ハ春ノ來ヌヿ眼前決定ノヿナレト鶯ノ声タエスナカヌヲミレハトウカ二度モクヘク思ハルレハかトイフナリサテソノ春ヲ夏ナトニワケテスヱテはトウケテソノ春ニツケテノ落着ヲ思ヘト云心ナリサテ鶯コレヲ思フニナルホト二度クヘキ春テハナイト落着ヲナスナリサスレハ声たえすなけやトイハル、ハ尤ナルヿソト思ハセンノ詞ナリ〇何かそのワルキヿトシリツ、戀ニマトフハ人ノナラヒニテ誰モシカルヿハ決定ノヿナレト名ノ立ヲワカキツウヲシク思フニツケテオモヘハトウカワレヒトリノヤウニ心ニアタレハかトイフナリサテ我ヲ人ニワケテツヨクスヱサシテはトウケテソノ我ニツケテノ落着ヲ思ヘト云ナリサテ聞人コレヲ思フニイカサマソコモトヒトリテハナイト落着ヲナスナリサスレハ名のたつもをしからすトイハル、モ尤ソタレモ〳〵ソノトホリニマトフテ井レハカクスヿモナキ同穴ノモノナリト思ハセントテノ詞ナリ〇うつゝにて夢路ニカクマトフテ井レハ吾モ吾ニテハナイヿ決定ノヿナレトナニカウツ、テ契リタルヿアルヤウニイハル、ヲミレハトウカ夢チニハマトヘ𪜈ヤハリ吾ハ吾ノヤウニ思ハルレハかト云ナリサテ吾ヒトリト云モノヲツヨクスヱテはトウケテソノ吾ノ落着ヲ思ヘト云ナリ聞ムカフノケサウ人ノ契ヲワスレタト云ウラメル人コレヲ思フニイカサマ夢チニマトフテ井レハソコモトモソコモトデハナイソト落着スルナリサスレハうつゝにてたれ契けんト現テ契ツテオイタヿモオホエヤラヌハ尤ソト思ハ

セントテナリ◯ちきりけん年ニ一度アフハ逢トイフヘキホトノヿナラヌハ現前ノヿナレト初何ニモセヨ年ニ一度ト契ツタカラハ一度デモアフノゾト思フタニ疑ナケレハアフかトイフナリサテ逢トイフヿヲスヱテはトウケテサテソノ逢トイフヿノ落着ヲ思ヘトナリサテ星コレヲ聞テナルホト一年一度アフハアフト云モノテハナイソト落着スルナリサスレハ契けん心そつらきトイハル、モ尤ソト思ハセントテナリ△かはハ必上ノ句ニかはトイフヿノアタリアリソノ詞ノ對伏ヨリ決定ノヿヲモかト疑ハル、心出來ルナリはト落着ヲ思ハスルハかトイヘル詞ノ對伏ナリソノ落着ヨリ又上ノ句ノ詞ハ出ルナリト知ヘシ世ニ反語ト打マカセテイフハヿタラス落着ヲ聞人ニオモハセテ得心サスル詞ナリサレト下ニ出タルあかぬ別の又うきは物かはナトノ哥ハヤカテ上ニ對伏スヘキ詞ヲイヒ出テかトウケタリコレハかトイヘル理明ナリコレマタ一例ナリカヤウナルハ上ノ句ノ詞ノ對伏カ乃ソノ方ヲツライウイナト、オモヤルハ尤シヤトイフ心ニナルナリかはノ落着ヨリ出ヘキ詞ナ上ノ對伏ニテキカセタルナリ上ノ哥氐ト意ハカハルヿナクメヨミ方カハレリ又あまのはらふみとゝろかしの哥ハ上ノ句ニヨムヘキ詞ヲ皆畧シテ餘音ヲ以テキカセタルナリコレ又一例ナリコレハナルホト雷モ思フ中ヲサクル物テハナイソレナラハワカ中ヲカク避ルヲツラシト思ハル、ハ尤ソトノ心トナルナリ古今に我身もともにあらん物かはコノ哥ハ上ノ哥氐ト同シ例ナリなとよめるやうにはあらてト二哥ヲ出セルハ乃正シキ例ト畧例ト二例ヲアケタルナリ鳥は物かはうきは物かはハ又一例ナレハ又下ニカクトケルナリ

何かは何

心エハ專上ニ同シサレト中ニアルニテ少シタカヘリコレハ上ノ何かはヨリハ疑ノ心少シツヨケレハかト上ニ承ヘキ詞ヲ下ヘオロシテ上ニ疑ノカサシヲ承ルナリサレト心エハ何かはニ同シ◯

さく花は花ミナアタナレト春ヲウラミヌキテフタ、ヒ春キタリトモ花ハミマイト思キル者モナクヿハ必定ナレトウラミハツル者ノアリナシノシラレ子ハかトイヘル之人ノナラヒトシトテ花カアタニチルソトテ春ノシワサノ如ク春ヲウラムモノ多キ故ニたれかはトヨメルナリ聞人ナルホトウラムハウラメ氐ウラミヌイテ春來タリ氐花ハミシトイフ人ハナイサスレハ花ガアタナリトテ春ヲウラムモタ、中心カラノヿテハナイサ

中のかはハヨミツメ引離ニテ打アフヘキ定マリ之
引合ハセテ合点サセントスレハ中のかは□ムヘシ
□ニイヒフセ

スレハ春モウラマヌカヨイワイト得心サスル詞ナリたれトイフモノヲスヱテはトイヒサテソノ誰トイヘル落着ヲ思ヘトナリ乃かはノ下ノ言ノ對伏カ落着トナリテ誰モウラムモノハナイト聞人オモハル、ナリモシウラミハツル人アランモハカリカタケレハ疑ナシト思フ中ニモ決定シカネタレハ疑ノカサシヲ上ニウクルナリ○君をのみシラ山ナレハ雪ノキユル寸ナキハ必定ト思ヘトモシキユル寸アランモシレヌニ今人キユルヤウニイフ故益ウタカハレテいつかはトヨメルナリサテいつトイフヿヲスヱテかはトイヒサテソノいつトイフヿノ落着ヲオモヘトナリソノ落着ノ方ハ乃初ワカ心ニ必定ト思ヘル方ヲサスナリサレハかはノ下ノ詞ノ對伏ソノ落着ナリ聞人コレヲキヽテナルホト白山ハ雪ノキユル寸ハナイワイサスレハシラ山ノヨシモシラスシテワカキユル寸モアルヤウニ思ヘルハアヤマリナリト得心サスル詞ナリコレハ人ノワレヲ思ハストウラミテネンコロナル心モ今ハナキヤウニイヘル人ヘノカヘシナリサレハ上ノ句ハ則ワカ身ニタトフ雪ハ乃ワカソノ人ニ慇ナル心ニタトヘタリワレヲ思ハスト人ノイフヲカヘシテ君をのみおもひこしちのトハヨメルナリ△コノ中のかはハヨミツメノかはニタカフヿアリ何かはハはトサセル落着ノ方ガ乃かはトウケタル詞ノ對伏ニテソノ對伏ヨリ出タル心別ニヒトツアリテソレヲ上ノ句ヘイヒ出ルナリサレハ落着ハかはノ上ノ詞ノ對伏[デ]得心ハ上ノ句ノ詞ノ表ニテスルナリ中のかはハかはト承タル詞ノ落着ヲソノかはノ下ノ詞ノ對伏ニシテソノ對伏ト上ノ句ノ言ノ表トヲ引合ハメ見テヤカテ[ツ]ノかはノ下ノ言ノ對伏ニテ得心スルガタカヘリサレハコノ上ノ句ノ言ハ得心スヘキ種ニナルヿヲイフヘシ何かはハソノ得心スヘキ種トイフニハアラテ上ノ句ハモハヤソノ詞ノ表ニ屈伏サスルナリサル故ニ中のかはハ上ノ古今ノ天のはらふみとゝろかしノ哥ニ同シ例ナリ心エハ同シケレト中のかはハ必定トオモフ心ニモモシサウイフヿカアラウモシレヌ故疑ノカサシヲかはトウケタリ天のはらナトハ必定ソレニ決シタル勢アルヿヲ人ニ得心サセン爲ニカリニ疑フ心ナレハ例ハ同シクシテかはトイヘル心少シタカヘル故別ノ例トナレルナリスヘテヨミツメノかはハ吾心ニ必定ノヿナレト人ノ心ニテソレガ理ヲ思ハセン爲カリニ疑フナリ中のかはハ必定ナカラモシサルヿアランモシレヌ心ヨリイフナリト知ヘシ

テ合点サセントスレハ必ヨミツメノかはニヨムヘシ

かのかはハかはヨリハウタカヒノツヨクナル之

別ノヿ今人ノナラヒトナリテアレハ濫觴アルヿハ必定ナレト誰カシラレ子ハたれかはトヨメリクルシキ物トシリナカラハハシムヘカラ子ハはトイヒテソノクルシキヨシヲ思ハセタルナリ

○誰かは秋のくるかたにハタヽ中のかはノ例ナリサレト下引靡ニテトマラスメアレハうちあふへきよみつめもなしトイフナリコレハあさむきいてたるさてみかきもりとのへもる身のトツヽケン爲ニ靡ヲカクシテあさむきいてヽトヨメルナリ近衞ナリシニ外衞へ出タルハ身ノ不幸ナルヿ必定ナレトモシタレソ讒シテ誘出タルモシレ子ハ誰かはトヨメリソノ誰ノ落着ヲオモヘトナリ聞人ハ天子或ハ大臣ナトナリナルホト外衞へ出シタルハタレモ誘出タルニアラスソノ身ノ不幸トイフモノナリサレハナケクモ道理ソト得心サセン爲ナリ○かのかは別てふ事はたれかははしめけんタヽ疑ふ中のかニ同シはノ字ノ心ハかト疑ヘル所ノ落着ヲ思ハスルナリ乃オレカハシメタトイフ物ヲシラントテカトイヒサテナルホトハシメタ人ハクルシキ物トイハルヽハ尤ソト人ニ心ニ思ハセントテはトイフナリはノ字ニテオノツカライハサレトモ下ノ句ノ意ニカケアハセテ得心落着ヲナスナリ下句ニアラハ上ノ句へモ落着スヘシ反シテ落着スル心ノナキガかはトカハレル所ナリ凡コノ別アルハ上下ノ句ノ味ニテワカルヽナリ哥ニ理アリト見ハかはナリト知ヘシ理ナクイヒナカシタル哥ナラハかのかはナリト知ヘシ意味ハカハラス○かはのかたかまことをかわれはたのまんコレハ中のかはニ同シ我ハトイヘルはノ字乃かはノはノ字ヲワリタル心ナリはノ字ナキモ猶理ヲイヘル哥ナレハかはのかナリコレ又僞とおもふ物からトイヘルハ乃僞ト思ナカラヤハリオレヲ頼ムナトムカフニ得心サセテ以後僞ノ心ハモタレヌト落着サスル詞ナリ上ニ得心サスヘキ種トナルヘキ詞アラハかノ字ノウケタル詞ノ對伏ニテ上ノ實ノ上ヲ引合ハセテ落着スル心トハナルナリヨク見ワクヘシ上ニ得心サスヘキ言ヲ出セハかトウクル詞ノ對伏トカケアハシテソノ反ニ落着スヘケレハ詞ノ勢ニテはノ字ヲハフケルマデ之タレカ誠ヲワレハタノマウソト疑フモモトソノ僞ナカラモソノケサウ人ナラテハタノム心ハワレニナキヿ必定ナレト僞ヲタノムヘキ習ナケレハ疑ハシクテワレナカラたかまことをかトハイフナリ△かのかはかはのかアルハ哥ノ文字數定マレル物ナレハナリタ・理ナク理アルヲ以テ見定ムヘシ

疑味心おほくかはらぬトイフハワカ手ニ及ハヌ所ハナケキモウタカヒモ生スレハナリ

片ツケウト思フ心ハかナリ片付ラレヌガもナリ

装ヲウケタルヲノカサテモトイフモ物トヲ物トノ間ニ立ツ物ヲトリタテ、イフヘケレハ之月霞ノコレナリサレハも例トハ少シカハレリ

[下ハ]必むらんナトニテ打アフヘシ此二例𪜈同シ

かノ字ハスヘテ通

何かも

ソノ物ノ相反シタル二スチヘトチラヘモ片付ラレヌ所ヨリかトウタカヒもトナカムルヽかハ疑のか上ニ同シもハ咏ノもニか同シサテコノかハ上ノヨミツメノかニ同シコノ心ハ必上ノ詞ノ内ニ相反スル物アルヘシコレヲヨセントスレハ必ソノ間ヨリ疑ハシカラヌ中ニモ疑ハシキヿノかト詞ノツクヘキ詞出來ヘシソレヲウケテ卽もト數セルナリ早竟かトウタカフヘキヿノ其間ヨリ出ルナリト知ヘシ○天のはらトハ古郷ニテハ山ヨリ出タルニコヽニテハ海ヨリ出ルハ相反セル物ナリコレヲヨセテ決シ知ラントスレハ疑フヨリ外ナケレハかトイヒもトヨメリサレ𪜈必定三笠山ヨリ出タルナルヘケレハやニテハナシかノ格義ナリ○梅かえをトハ霞中ニアリテムカフニハ見ラレヌ梅アリコナタニハ見タク思フ人アリコレヲミントスレト霞ノカクセハ見ラレヌ故ミラルヽカミラレヌカヲ片ツケントスレハかトウタカハテハナラヌナリコノ哥らんトヨメハタヽ疑ナリニナルヽトチラヘソ片ツケウト思ヘ𪜈片ツカヌテかもナリ霞ニ意ヲソヽキテ人ノカリニヤ來テヲルトテカクス霞かトウタカヒサテもトナカメタリ花ト人トノ間ニタテルハ霞ナレハソノ霞ノ心ヲカウモアランカトテ霞ニツケテかトイヘリ上ノ三笠ノ山ニノ哥モ古郷ノ三笠山ト明州ノ海天トノ間ニテ疑ヲヒクハ月ナレハ月ニツケテかトイヘリ

何かも何

かモもモ前ニ同シシカレ𪜈中ナレハ少シツヽカハレル所出來ルナリ下ニテ知ヘシ

○おもふ中のかも

コノかハ決定ナル中ニ疑ノマシレルヲイフニハアラス疑ハシキ中ニモカリニ決メイフ心トナレリソノ故ハかもノ上ニウケタル詞ワカ疑ハシキ中ニモ先コレナラント思フヿヲハヤカテイヒ出テウクルナリ下ノ詞ハゼヒイツレニモセヨソウハアルヿヲ下ニイフナリ下ノ詞ハ疑ふ中のかもモ同シ上ノ詞ノタカフヲモテ二例トスもハ一首ノ内ノ意味ニ必反對スル物アルヘシ求テシルヘシコレヲヨセントスル間ヨリ乃ワカ心アタリノ詞ハイツルナリソレヲかトウケテヨムナリソノ詞ノ對伏カ乃ワカ欲スル所ニテソコヘヤラマホシケレトサウハユカヌヿノフト心ニアタル心ナリト知ヘシ○今もかもトハイツサク

庸ノ理ニコユルヿノ自ラ心ニアタリ來ル義ナリサテかトヨメハソノ通庸ノ理ヲ出タルヿナレハカヤウノヿ世ニモアリヤト後格ヲ思フノ詞ナリアマリニ心エラレヌヿナレハ味トナルナリ疑トナルハ猶同シヿナレトソノ後格ヲ求ル心ツヨクナレハナリ

此モハかトウタカハ子ハナラヌ詞ヲ生スルナリ

疑ふ中のかもハやニハカハリテ多クカウナラン思フヿアレトサシヒカヘテ疑ノカサシヲイフナリ

ヘクハシラ子トモ大カタ今コロナトハサカント思フ故ニ今もトイヒテかトウケタリ行見ルヘキ小島ノサキト行見カタクサハリアルワレトヲ何トソシテユキミント思ヘ𪜈行カタシサスレハ思ヤルヨリ外ナケレハ今もかもトハヨメリサテソノワカサハリアルヿ今ヨリ少シ後期ナラハユキモセラルヘケレハ実ハ今サキニハ(ママ)子ハヨイガト思フ心アルナリサテ下ニハ遅速コソアレセヒ咲ニホフハ咲ニホフヘケレ𪜈シラレヌ故らんトハイヘリサハリアルト云ヿヲシレルハ思ヤレル心ヨリナリサハリナキ身ナラハヤカテ行見ルヘケレハナリ或ハ路遠キ故ニモアルヘシ○足引のトハ人モシトハンカモシラ子𪜈大カタハ一人子スヘク思ハルレハひとりかトイフナリサテ二人ヌヘキハワカ本意ナリコレ一人ノ詞ノ對伏ナリ下のねんトイヘル詞一人ニモアレ二人ニモアレヌルヿハ子デハアラヌヿナレ𪜈シレヌ故んトヨメリサテ來レト思フテマツワレトユカシト思ヒテマタスル人トヲ何トソ來ラセント思ヘト來ヌ故サスレハ一人ヌルヨリ外ナケレハ一人かもトハイフナリ△もハ上下ノ詞ヲカケテ生スル之かハ上ノ詞ハカリ生スル之

○うたかふ中のかも「実ハサカスコヽロナリ

コノかハ決定何ニテモアレシカナスヘク思フヿアル内ニトレヲソレニ用ヒンカモシラレヌヲ決セントテノ疑ナリサレハおもふ中のかもニハカハリテ疑ノ方途トナルナリかもヨリ下ノ詞ハおもふニ同シ上ノ詞タカヘルハおもふハ疑ハシキ中ニテワカ心トアタルヿヲエリ出テコレカト物ヲ出シテソノアタリヲマツナリサレハおもふトイフコレハ決定コレハカクセント思フヿノ中ニモイツレカモシレ子ハ疑ノカサシヲモテソノ実トナルヘキ物ヲアタリヲマツ心ナレハワレヨリ試テ出ルトワレハ無心ニメタヽ求ル所ハカリニ心ヲアテヽイフカタカヘリコレ又ソノカサシノ對伏乃ワカ欲スル所ナエントスルナリ上ニ同シ○あはれてふトハアハレトイフ言コソ決定戀ノミタレノ束緒ナレトモシナキ時ニハ何ヲスヘキ心アテモナケレハ何をかトイヘリソレヨリ外ニハコレガヨキトイフ物モシアランカトテ求ル心アリ何をノ對伏コレヲトイフナレハコノ心トナルナリサテセヒアルニモセヨナキニモセヨツカヌルヿハセヒツカ子ヽハ乱タルマヽハクルシケレハ決定ツカ子ントスレトアハレトイフ言ナキ時ハ何ヲトイフヿシレ子ハせんト

ハイヘリサテアラセントスルニナキハ反對ナリコレヲセヒアラセントスルニナケレハ求ルヨリ外ナケレハ何ヲトイフナリ○たれをかも松ハ高年ノ物ナレハ決定ワカシル人ニスヘケレ圧ワレヨリミレハ若年ナレハ友ニテハナキナリシカル寸ハ別ニ物ナケレハタレヲかトイヘリサテコノ人カヨキ友ソトイフ物アランヲホリセルナレハ誰ヲノ對伏ナリサテセヒナキニモセヨアルニモセヨワカシル人ヲエ子ハ心ホソケレハ決定シル人アラセントスルニナケレハせんトイヘルナリサテワカ至高ノ老年ト皆ワレトタカヘル若年ナル者斗ナルヿ反對ナリコレヲイヨ〱友ニセントスレト松サヘ友ニアラ子ハ求ルヨリ外ナケ子ハ誰をかもトハイフナリ△うたかふ例ハ上カ下カノ詞決定ソレガ今ノ用ニ相當ナル物ヲ出シテサテソレノコチラノ用ニタテカタキヿヲイフヘシ乃コノ詞ヨリ疑ハ生スルナリアハレテフ言ト松トハソノ相當ノ物ナリなくはト友ならなくにハコチラヘ用カタキヿナリ

かノ義中ニ於テ半途ニ怠ル、心アリ□マト見ツケコトニ□聖人ノ作トイフヘシ失レタレハ手ニオハヌナリサレハヤトイヘリサレトハ初ニ知井タルヿヲイハントテかトイヘリ

かや

かハ上ニ全同義ナリシカレ圧コレハモトヨリ覺悟シタルヿヲフト覺悟ニタカフヿアルヤウノ時ニ用ル義ナリ人ニ聞タルヿニモアレワレト覺悟セルヿニモアレフト決シカタク又ハ怠レタルヲ又求出ントスルル義ナリサレハ人ニ聞或ハ覺悟シタル所ハ疑ナキ之フトシレス怠レタル所ハ疑ノマシルナリサスレハ猶疑ナキ物ナリシニ疑ノオコリ來レル心トハナルナリやハモトソノ語レル人ニモセヨワカ覺悟セラレタルソノ時ノ事物ニモセヨ失ヒ怠レタル物ナレハ今失ヒ怠レタルワカ場所トハ遠クハナレテ手ニオヨハヌ物トナルナリソノ失ヒ怠レタル場所ト因本ノ所ト二場所ナリ失ハス怠レサルサキヘカヘサントテ其因本ノ場所ヲ志シ持テイフ詞之失ヒ怠ルレハソノ因本ハ別場所ニナルヿツ子ノ理ナリかトハカリニテハ疑ハルマシキハツナルニフト失ヒ怠レテ疑ハシクナレル故ニ求ル心ナリシカレ圧マタカウデモアロカト思フ心モソフ義アル故ニ全ク怠却セラレ全失ヘルヿヲシラセントテ又やトイフナリかトやトノ別コ、ヲ以テアキラムヘシ○はりはこの此哥ハ散木集はりばこノ物ノ名カトオホエタリ猶可考ふたつの袖にさしつれとトイヘル詞自ラ初メ覺悟セルヿヲイ

オホエテ居ルハツナルガトナルニテかナリサレト手ニオハ子ハタツ子テカナハヌ故やナリ

やハスヘテ我ニうれふる事あるにひかれて□場所をおのつから疑はるゝ心之うけたる詞の對伏かわか場所之

フナリひとつもみえすハ乃疑ノオコル所ヲイヘリ落にけるトハワカ失却シナカラフトワカ心ニアタリテモシカウモアロウカト思フヲイフ詞ナリ此對伏上の中のかもト同シクワカ欲スル所ナリ落ハセスコヽニアリト云ヿヲ求ルナリシカレ𪜈猶落タリトイフヿモイフハイフ物ノ不分明ナレハ再やトイヒテ落タリトハイヒツヽ実ニシラヌヿヲイヒテ求ル心ナリかトイヒやトイヘルニテトヒ求ル心モ自ツヨクナルナリ求ル心ツヨケレハワカ知ラヌヿモツヨシト知ヘシサレハ此かやノ上ノ詞ハソウハイヒツヽ実ハシラヌ義トナルヽかトハカリニテハ多クハソレナルヘキ勢アル心ナレハタカフナリヨク分チ知ルヘシ○何とかやくきのすかたはトワカテル所ノ對伏ニ花ノ名モキヽシリ覺悟シ井タリシニトノ心フクメリサテ下ノ句皆疑ヲ生スル所以ナリサテ初キヽシリ覺悟シタル寸ハナニデモセヒ何トカイヒタリシヨトオモフ中ニモ定テモイヒカタケレハ何とトイヒテかトウケタリサテソノ對伏ソノ名ハカウイフトイフヿヲ求出ント欲スルナリ此かハうたかふ中のかもト同シク多クハカウト思フヲサシヒカヘテイフ心ナリサレト実ニサシヒカヘスノイフテミヨトイハレタル時ドウモイフテミルヿモナク忩レタル故再やトイヘリ

△はりはこのノ哥ハおもふ例何とかやノ哥ハうたかふ例ナレト多カラヌ詞ナル故オシコメテ一例トセラレケルナルヘシサレハおもひうたかふ二例アリト知ヘシ△上下の詞イツカタニテモ表カ對伏カニ初メ覺悟シタルヿヲイヒサテ疑ノ生スル所以ノ詞アルヘシシカラスメハかやトハイヒカタシ

や

二場所ナルニ一場所ハワカ今ノ場所今一ツノ場所ハワカ手ノ屆カヌ場所之ソノ手ノ及ハヌ場所ヘ心ノ自ラヒカレテヤマヌ心ナリサレハ手ノ及ハヌトハ知ラヌ所カ遠キ所ニテシレヌカトナル故疑トナルナリ此故ニカトカハリテ全知ラヌ所ノ心ニ知ラマホシキ心ノ自ラオコルヲイフ脚結之底タル詞ムカフノ場所ノ疑ハシキヿヲイフヘシサレトワカ心ニ欲スルヿヲ詞ニイヒテやトウクヘシきこゆやハキコエサセタキヽスヽシヤ

キコユルカトウタカフハコチニキコユマシキ〻アル故ナリ

み山へのトイフニテワカ忍子ニナキテ声キコエヌワカ場所ヲミセタリ

ハすゝしからせたき之ソノ詞ノ對伏乃ヤハリワカキラハシキ方ノ〻カト疑フ心アリ聞ゆやは聞えましきかといふ之すゝしやハあつからんかといふ之さて上か下かに今のわか一場所のさまのしらるゝ詞あるへし○數ならぬ數ナラヌワカ身ナレハ忍ヒテツ子ニ泣井ル之サレハワレモ忍ヒ子ニナケハわか場所にても声は聞えぬ之されとも人にはきこゆるか我場所ならねはしられすさてきかせたき心は人わか声をきけは哀もかくへけれはきこゆやと疑へり人に聞えぬを歎く心もはらなる故此疑の心におのつからやまぬ歎息之〔人ニシラレヌ身ヲナケヽル哥之〕○すゝしやとわか家の内なとは暑さ堪かたけれは葦むらあたりはすゝしからんかとおもふ之すゝしやとうたかふはわか場所のあつき故之あつきを歎く心もはらなれはすゝしからせんとて此疑心におのつからやまぬ心之さてまさると下にいへるはかの疑の決せる之まさるの詞の對伏まさらぬほとのあつさは乃わか暑き場所をみせたり〔アツキヲナケヽル哥之〕○くや／＼と今わか場所は人の來ぬか場所之さて來させたくおもふにしられねはくや／＼とゝいへりまつ夕暮そのわか場所をしらする詞之かさねたるはつよくその事の疑はれて心におのつからやまぬをいふ之度をかけてくや／＼といふ之重詞は皆これ之○こんやこしやとはこんやか此例之火水なれはこじやは對伏をいふなれはわか欲するをいふにあらす嫌はしき事をいふ之火水はこの例之さて下のやにうけたる詞乃わか場所なり來させたくおもへとしられねはこんやといへりさていよ／＼來ぬかとおもはるゝをこじやといへり火水ならぬはたゝこんか／＼と來る事はかりおもはれ疑はれていふ之火水なれはこんとこぬと二方をもちていふ之されはこんやはこまじとおもへとゝいふよりいふ詞之こしやはこんとはたのめどゝいふよりいへる詞之此や二ツにして解すへし場所の反するまて之上二句來不來わか場所なるをしらせたり上二首人ノ來サルヲナケヽル哥之

○やはのやカハノカノ所ニイヘリワカシラレヌ場所ヲ持テイフナレハ落着サニテハアルマジト落井ルガかトノ別ナリ○やのやはハソノ疑フ向フノ場所ノ落着ヲ心ニ持テサシイフ〻ヲミスルマテナリ

上ニウクル詞ハ上ト同シクワカ願ハシキ心アル詞ヲイフ之上カ下カニワカ場所ヲシラスル詞ア□キ上ニ同シ

何や何

やは上に同し

○一例さす中のや（さゝぬ一ノ誤ナルヘシ何やハ何ニイヘルカ正例ナルヘシ詞考直スヘシ）

さすとは物所等をさす之下にうけたる詞乃疑ノカリシナレハさゝぬ之されは下に疑のかさしのたれいつこ何なとをおく之猶うけたる詞はしらまほしきむかふの一場所のやらすをいふ之その對伏今のわか一場所之そのわか場所のうちにむかふの場所のうたかはれてやまぬ心おのつからおこれる之○春かすみ霞たゝす雪ふる吉野山が乃わか場所之そこより霞のたちて春色あるへき所はいつかたかしられす吉野に春色遲きかなけかしき故におのつからこれを疑ふ心おこる之この春色あるへき所をさし定めむとていつことはいふ之さてこれは下句わか霞たゝぬ場所をうれふる心をさとせり全春色遲きをうれへたる哥之○山吹の花色衣われはぬしならぬかわか場所之ぬしとならまほしき心よりぬしをさし疑ひてやとよめりさし定めむとてたれとはよめる之わかぬしならぬかなけかしけれはおのつからぬしを疑ふ心のおこれる之とへとこたへすなといふはわかぬしならぬをうれふる場所をしらせたる之これは衣女に比したるにや全わか物ならぬをなけゝる哥之○うちはへて花の心をさしてやといふ之わか心乃わか場所之春にあへるわか心はいとのとかなる故に花の心ものとかにせまほしき歎よりおのつから疑はるゝ之全花ををしむ心之上句はわか心のとけき場所をさとせり花の心はしられぬをしらまほしさにやといへりさて何と打あはせたるなれと今少し聞人理しられねはいそくらんと添たる物と知へし○涙川露をさしてやといふはらふはかりならぬ涙かわか場所之さやうにかろき涙ならまほしきよりかれか場所をやと疑ふ心おのつからおこれる之涙川の上句皆わか歎の深き場所をさとせりなりは添たる物と知へし我歎ふかきをうれへて淺き歎の理しられぬをうたかへる之

○二例さゝぬ中のや　さすゝ「誤ナルヘキ「上ニイフアユヒ抄書入ニクハシ

さすとはさゝぬの反也さゝぬとはいつこたれなと疑なからさし定めむとすれとうたかはしけれはやといふ也これはやの下皆たゝ我心におもふこと定かたきなから

先さしてよむや也さすさゝぬはやの下の詞にて名付たる也うちいつる波やなといへるは上のうけさまは正例也装をうけたるはその詞の上に必やといるへき所あるへしふりやとゝめぬはかへらん人をやふりとゝめぬとよむへけれとやもしより下は皆わか主意となれはふりを上にうけてふりやとよめる也皆かくのことし△やより下の詞心をつくへし何にてもあれわか主意のある所也しかなしたき心なる詞をやかてよめるもありそれにつけておもふ心あるありおもふ心あるよりその詞あるありこれもとやは今むかふ物にわかおもふ所をかれにひかれておのつから疑はるゝ心のおこる義なれはなり上にうくる詞は今むかふ所の自然をうくへし○谷風に花いまたさかぬ初春なれは花をおもふ心あるにかの波にむかひて疑を生せられし也○月やあらぬ春も月もむかしのことくならぬやうにみなさるゝよりやと疑へる也わか今むかしにあらぬ歎をは月春にひかれて疑を生せられし也わか身ひとつはといへるも餘の事は今目前に皆かはりはてたる歎也○花のちるわれも侘しき心あるより鶯のなくにひかれておのつからかれもわひしきかと疑をひかれたる也○なかれいつる流れいつる所の源でさへ見えさるほとの泪川なれはまして沖の深さはしられすとの心をふくめたり思ひをならせんの歎を源のみえぬよりおのつから沖のひむ時の疑はれたる也底をしるとは干る也干るとは我思ひの成就なれはおのつから疑はおこる也○春くれはこしの人をおもふ心あるを厂のかへるにひかれてことのつてられんかと疑を生せられし也○いつとなくこひのならんことを歎かるゝよりたえぬにひかれて浅間の烟にやと疑をひかれたる也たえぬより浅間を出せり専たえさせまほしきに心ある哥也たゆるは思ひの成る也○雪のうちに春來りて鶯のまたるゝ心を春來れるにひかれてとくらんかとうたかひを生せらるゝ也事ほとなく鶯なかむられしさ

のこもれる哥之○我を思ふ人にわれを思はせたき歎をわか人を思はさりし事ありしにひかれておのつから疑をうこかされたる之○春霞わか花のあかぬ心より厂のかへるにひかれて花なき里にすみならへるかと疑を生せる之専われはみても／＼あかぬ花なるをとの心をふくめり○もみちはも人をとゝめ置てあはまほしき歎を紅葉時雨にひかれてかれはわかことき心なくてとゝめぬやとうたかへる之専人をわか留守にとゝめおかまほしかりし心之○おもひやる人にあはまほしき歎を夢にたにあはぬにひかれておのつから境の疑を生せられし之○かゝみ山老をなけくは人の常情なり此歎をかゝみ山といふにひかれて老やはてぬるとうたかひを生せられし之

やは物にひかれて*自ラ疑を生せられかはわか心をおこして疑ふ之

何や　やは上の義に同しれもしは今此事ある象のむかしにもあれ物にかくれてしられぬ所の象を現にかけておもふ心之されはれやは物の故を疑ふ心之

○うたかふ伏や　うちあひはかはりたるもあれと心はさゝぬ中のやの心えに同しやより下に猶主意ありされとさゝぬ中のやにはかはりてやより下に二事あるへしその一ッはわか場所一ッは彼か場所之そのわか場所にする事によりてかれか場所にひかれておのつから疑の生せらるゝをいふ之○あれにけり住けん人の戀しくしたはるゝ心をおとつれなきにひかれていくよの宿なれやとの疑を生せられし之それによりて今の此事あるをおもふ故にれやといふ之人の音つれなき象の空に又かくれて数世をへたることのかくれたるを思へるなり○たか爲に久しくありてみたるゝみるといふに心あり此瀧の見事さに久來てみる之されと布の如くみゆる故とる人やあらんと思ひし心を今とる人なきにひかれて布なれやと疑を生せられし之これも下の句の象のかくれて又あるを今此事ある故をおもひてよめる之○春くれはむすふは乱るゝ之あれはにみゆるはあはをなといひてあは／＼しくかたからぬ糸之春くれはとは氷のとくるを云之むすほゝれみたるゝか氷のとけたるより見所ありておかしけれといかにむすほゝれてあしくならんとおもふに猶あはとみゆるにひか

［もし］より上は彼か場所やより下

は我場所にて我場所の故を得むとするより彼か場所のる故となるへき事の疑はれたるゝ之

コレハ猶疑ノ心ト心ウヘシやはノ心サニテハアラシト人ノ心ヲ落着サスル詞之

れていかなれやと疑を生せられしゝれやの心上に同○わかなつむよし野山は花も㝡上の所にて花またるゝに春色おそき事の歎かるゝに雪さへふるにひかれて春日野に疑をつけられたる之此哥は上の二首とは打あひかはれりこれはなれやにてきるゝ心之何なれやわかなつむらんの心をなれやにまかせてはふけるゝこれをはふけるはそのわかなに主意なくよしのに春色遅きに主意あれは之これはれやのれの義わかなの事にかけて心うへし○我こひはこれは一二の哥と例同ししけさまさるをなけく心をしる人なきにひかれて上の疑おのつから生せられし之れも上に同し○秋のよはこれは四の哥と例同しかすみを哀む心を霧にひかれて上の疑おのつから生せし之れやも四の哥と同しく心うへし○すまのあまのこれは置所はかはれと一二の哥に同し君にあはむとする心をは來ぬにひかれてま遠なる故かと疑を生せし之れもし一二と同しく心うへし○天河天河の音の冬夜のすこくさひしさに音すへくおもふ心を音せぬにひかれて上の疑を生せられたり此れもしも一二と同し例之いしまにたきつ音わか心のかゝる所之

○第二かへす伏や

これはやより上の詞彼か場所之やより下の詞わか場所之わかおもふ所の理をしらせんとておのつからかれか場所に心ひかれてやといへる之疑の心をもたれ共詠の心にみても叶ふへしこれ疑詠はちかき故之第三例なとは全詠のやなれとこゝに出せるは伏やを論し明すたよりにひかれて之此例もとやはのはもしをはふける心なれはやとかれか場所を歎息してその歎息のあたり又わか場所へ人の心を落着せさせむ事をおもふ詞之くはしくはやはの下にくはしこれはかはに同しくわか理ありておもひ定めたる事なから聞人にその理をもて服せしめむの心よりかりに疑ひてみするゝさて人わか場所をかれか場所に引あはせていかさまさにてはあらしと心に落着するゝ畢竟理をいへは人屈伏して感する事なき故に感伏させむか爲に理を活して疑を設るゝれやは上にいふ如くそのわけをおもふ詞之これは理をもて主意とすれはことに分れやすしわか場所のわけをおもふよりかれか場所を疑ふ詞之○春されは此哥はやもしよみつめにあれと旋頭哥なれは次の哥と同しく中にあるに同し上三句わか場所之下三句彼か場所之わかみれとあかぬより

そのあかぬ故をおもふにまひなしにたゝ名のるへき花の名なるへくはおもはれぬよりなれやといふ聞人のいかにもみれとあかぬ花とあらんからには只名のるへき名にてはあるましとまひせで叶はぬ心をおこさする心之○しほたるゝ上三句彼か場所之下弐句わか場所之浮たる波にぬるゝ袖のぬるゝ故を人にしらせむとその故をおもふに蜑の袖にことならすおもはるゝよりなれやといふ聞人のいかにもしかぬるゝほとの袖なれはあまの衣にことなる事はあるましとふかくぬるゝなけかしさを人しらてはあるましくなす心之〔ママ〕〇

○第三なかむる伏や　上にいふ如くこれは詠の心専なれと疑の心もありこれ父やより下の詞わか今みる場所之やより上の詞かれか場所之かれか場所はいつとても我にしられぬ所手の及はぬ所なれは疑とも詠ともなる之故をおもふ事上の例ともに同しわか今の場所の故をしらんとすれはおのつからかれか場所の疑はれいかにもと歎せらるゝ心をいふ之○神かきの我ゆふかけたりと卯花のみゆるよりその故をおもふに彼か神垣のあたりにさくも便ありとの心にてさけるなるへしけにことわりそと詠たるこゝろ之○草まくら上四句かれか場所下一句我場所之露のこほるゝ故をしらむとするに草枕もこよひはかりの秋風なれはなるへしけにことわりそと詠たる之

○第四ねかふ伏や　上下の二場所上に同しそれたにあれは我場所とする所の事はかなへはれといふ之されとわか手におはぬ所の物なれはやといふ之やより下の我場所の詞必わか欲する事をありのまゝにいへりその欲する詞にひかれてやもし手の及はぬ所の物をねかふ詞とはたる之声妙の變化きことに聖化なるを知へし○有明の時鳥の今一こゑなかむ行方をみまほしきよりいかなる事あらはその故にておもふに叶はむと思ふに有明の月なりともあらはとおもへとなけれは我手の及はぬ所なれとおのつからやとねかはれ歎かれたる心之○あふ坂の人のかけをたにみまほしさにいかにあらはみられむとおもふにあふ坂の関も

畢竟やは詠の心之

上ノウケタル詞ヨリ上ニ必はノ字ノ勢ヲソフル詞アルヘシソノ詞ニヒカレテ人ノ心落着ノハヅミトナル之物ミナハツメバ早クイタレバノ故之

コノ對伏ノ心ニ君ヲハオクラサストイフカ我心ナリトモトイフ詞落着ノ方ヘノハヅミヲはノ字ニツクル詞之

△しか落着さへ人の心にすれは即遠

りたに心あれはその故をもてみらるへき事なりと思へともかたくまもる人なれは我手に及はねとおのつからやとねかはれなけかれたる心之

「彼カ心中ヲ疑ヒトヒテワカ思ヘオトサントスル之かはハワカ思フ処ヘ落サントテワカ心アタリヲイフ心之

何やは

心かへりて落着すとはかはの下にいへるに同しやはわれしかせむしかあらむとおもふ事あれと彼は又さならすとやおもふへからんもはかりかたきか故にわかそのおもふ心を彼に達せんとすれはかならす疑はて叶はぬよりやといふ之はとはその上の事のうちに物あるへしそれか分別をなしうけてやかてその物の落着をおもはする心之△上にうけたる詞は彼かおもふらんとおもふ詞をうくへしそのうけたる詞の對伏乃わかさならんとおもふ心之はその詞のうちの物の分別をなしうけてやかて彼かおもふらん心の場所よりその詞の對伏乃我心なれはわかおもふ心へ落着させて得心させんのこゝろ之我思ふ心わか場所彼か思ふ心彼か場所なりわか思ふ心のとほりを致さむとすれとその致さんとする所は乃かれか心のうちへなれは彼か思ふ所にさはるへされはとてかれ思ふ心はわれに見えぬ所なれはうたかはてかなはぬ事となる之やははまのあたりかれかおもふ心を我にしらてはわかおもふ心達致しかたき故にいふ詞之かはゝかれかする事の心えかたきにつけてわかおもふ所の理あるをいひ出てかとよみてその理を彼かしらてはかの心えかたきことのわかおもふやうにはならぬ故にいふ詞之されはかははわかおもふ理を彼に通せんとすれはわか方主となる之されはかはにには必上に彼かわさを一ツいひてさて下に別にかはとうくる事はある之やはゝ上よりすへて彼かわさをいへる心なしかはゝさる理あらんやよくおもへといふ之やははそなたはかくおもひ給ふかさるにてはあるましよくおもへといふ心之

○かきりなきかく限なき雲井のよそに君にわかれてゆけと君の身こそともなはれねわか心に君をおくらせてゆかんとおもひ給ふかさる事はあらしよく思へよときく人の心にいかにも心はわかめにみえぬ物なれは心にはわれを伴ふて遠き所へもゆかれんもしられすと落着する之△人を心におくらさんといふは人のおもふらんと思ふ心をいふそこを疑ひてやといふ之身は格別心にははとうけて人を心におくらさすとおもふ我心へ落

別にもわか人を忘れぬ心は達致するゝ

何やはニハ只チヨトシタルニ詞ニテはノハヅミヲツクルナリコレハ上カ下カニ一事ヲイヒテはノハヅミヲツクルゝ長短ノ別アリ
やはドノヤウニ思ヤルゾトイフ心ナリ
かははカウハ思ヤラヌカトナス心ナリ

着さするとてはといふ之○おもひけん我を思ふ人は我よりもともにあひおもふへき事たるに人の君をあひおもはて人の絶たるを君なけき給ふにわか君をおもへと君われを思ひ給はぬむくひはなき物そと君はおもひ給ふかといふ之聞人いかにも我はおもへと絶たる人あれは我をおもふ人をおもはぬむくひにてあらんもしられすとおもはせんとてゝしか落着さへ人の心にすれはすなはちわれおもへとその人の思はぬにむくひを恐れてわれをも思ふ心にならんなれは我を人に思はせんの心達致すへしむくひなかりけりとは人の思ふらんとおもふ心をいふそこを疑ひてやといふ之外の事は格別むくひはと分別しうけてすなはち君を思ふわれをおもひ給はぬむくひ之と落着させんとてはといふ之對伏のむくひありけりとおもふか我心之そこへ落着させんとてゝまさしやといふ詞落着の方へのはづみをはの字につけたる之

何やは何

やはノ義は前に同しすへてかはト同シクしかなりといへは人心のつねにてしかならしと思ふへき故に人の心に順にして疑ひて不言にその理を思はする詞之

○第一さす中のやは

サストハ上にいふか如くことを定めてさす之やはノ下の詞さす心之これはやノ下ニワカ思フヿヲ一事對伏ニシテイヒ出タルヿアリソレニツキテソノヿヲ人ノ心ニサナラスト思ハンヿノアルヘキモ人ノ心中ナレハ斗カタキ故ニやはトヨム之イカニシテやトウタカフソトイヘハ上ト同シクカノ上對伏ニイヘル我心ヲ達致セントスルニ肝心ノ人心ニ不得心ナル所アリテハワカ思フ心達知セシムヘカラチハナリサテヤヨリ下ノ詞ノ表ハ彼カ心中ヲ思フ心對伏ハワカ思フ心之はトイフハ對伏ヘノ落着ヲ思ハスル心ナルヿ上ト同シ○春のよの一二ノ句春ノ闇も色こそみえねかは闇にかくるゝと思ひ給ふかといふ之それかかくれぬ故にあやなしといふ之といひて對伏へ落着させむとての詞之キク人イカニモ闇ハアヤナシトイハル、カラニハ色ハカクス𪜈香ハカクレマジト香ノフカキヲ思ヒ知ル之モト夜梅香ノフカキヿヲ人ニ達致センノ心ヨリ云之○三四五ノ句淺瀬にこそうは波はたつ物なりといふははノ字ノ勢をあらせて之底もしらぬほとのふちに波はさはく物とおもひ給ふかと之聞人にいかさま淺き瀬にこそあた波つねにたつ物

かはノナイトカヘルハ彼カ心ニ之やはノアルマイトカヘルモ彼カ心ニ之我彼ヲアハセテカヘス心トナルナリ

といはるゝからには淵はさはく事もあらしとおもひしらする之淵とは乃わか心ふかきにたとふ○ふちはさはか
しと人おもひしらては心の不變を達致しかたけれはやはといふ之さはかぬといふ對伏わか心之○諸ともに秋
のわかれはをしくあらすと汝は思ふかと蓋にいふ心之蓋の心に諸ともになきてとゝめよといはるゝからは秋
の別を惜と思ふならんけにをしからぬ事はあらし諸ともになかんと思ふ之されとこれは詞の上之今別ゆかん
とおもふ人にをしといへは諂諛之として蓋によせていふ之蓋になきてともにとめよといふからにはいたくわ
れをゝしとおもふにやけにをしからぬにもあらしと思ふへしさて後わかをしとおもふ心は行人に達致する之
○色ならは心はみせけると思ふやうにみせらるゝ物とおもひ給かといふ之その行へをよく思へさにはあらし
といふが乃對伏の心之聞人色ならはうつるはかりも染られうといはるゝからにはけにおもふ心はどうもみせ
られまじと思ひしるへししか思ひしりて後はしめてわか心のあつきを人おもひしる
へき之されはみせられぬ心をみせんの心にてかれか心をやはうたかひしらせたる之
○さくら花春くはゝれる云ゝ人の心ニアカル、ヤウニナリテホシキ心ニテあかれやはせぬトイフナレハやは
せぬノ方マサル之やはするトイヘハたゝ櫻のあかるゝといふ事ありとおもやるかといふにてなるほとあかれ
ましと人おもふ心となる之やはせぬにてはなるほと櫻のあかるゝやうには心のもたれましと思ふ心となれは
一段自然まされは之春くはゝれる年てさへといはるゝからにはといふ心之さて後あまりに櫻のあかれぬより
あまりにさくらのあかまほしと思ふ心達致する之せぬ
は中心を明界よりいふ之するはたゝ明界にての差別之

○第二さゝぬ中のやは　サ、ヌトハやノ下ニ疑ノカサシアレハナリ疑ノカサシハイツレカシラスシテイフナレハさゝぬトイフ之やはノ心用ヒヤウハツマスル詞等上ニ同シされとすこ
したかふ事あるはやはの下に疑のかさしを必置てさてその下の詞の對伏へ人の心を落着させんとすれと何と
もとよりその落着をもうたかはせ置たる物なれはその對伏もしられすこの故にその疑のかさしの下へ直にわ

そハ人ノ心ヲソコヘソフヤウニコチラカラサシテミスル詞之ワカ心モ即ソコニソヒタル之

そトサセルハ即カレカ場所と我場所トノ間ノ様子ヲサシテ思ヒコマスルナリやはノはハ我場所ノ方角ヲ導ク

かそれをさし定たる事をいひ出てさてその下にそれへおとすはつみの詞をみせたる之〇命やは命ハ何トイフ物とおもひ給ふそといふ之聞人あふにかへはをしからすといはるゝからはいかなる物ならんと疑ふへしその疑ひたまふは露のことくあた物なれは之といふに聞人けにをしからすとまていはるゝからには露の如きあた物にてなきにしもあらしと思ふ之さて後わか命をかろんする心は達致する之命を輕んする心達致すれはおふを重んする事も達致せんとての事之

△これはもとより命は露のことくあた物なれはとうち出していはむなれとはしめよりしかいへはされとたれかはをしからぬさはいひなから猶をしからむと人やおもはんとて命はいかなる物ならんと人心のしられぬをうたかひていへる上にかれをも又うたかはせてさて後あた物といへる故人得心して後わかおもふ心達致する之古人の心を用る事かくのことしよく思ふへき事之コレハなそ／＼のことし命はなにそといふに人しらすといへは露のことしと又こなたよりいふ之

やそ

やはやはの義なり義上ニ同そトハムカフノ物ノ様子ニツケテわか思ひのかゝるすちをむかふの物にそへてしらする詞之清音ノ時ハわか心のむかふの物にそゝく様子をみする詞之むかふの物のうちにてわか心にえりわけてその様子をさしてみする心之濁音ノ時はむかふの物のうちにてそのやうすにえりわけらるゝ心のそゝきたるをみする詞之されは清音はたゝむかふのやうすにかゝりぞはわか心のその物にそゝきたる心となる之これはそはそもトモアル例ヲ思ヘは清音ニヨムヘシ△やははそのやといへる事の落着を虛にしておもはせぞそは上にすへてうけていへる詞あるひはその物なと物事の様子をわかちさしてそのやうすにつけてわか場所の落着を思はするかたかへり上にうけたる詞の對伏即わか場所之そとさしたるかれか場所と對伏のわか場所とをかけあはせてわか場

ワカ場所ヘカレカ場所トノカケ合ノアタリノソレヘモトルヤウニハツマセテヨムカ肝要之

心ナレハタカヘリ
ソノヿニモセヨソ
ノ物ニモセヨ外ノ
物事ト對〆ワクル
心ハカヽル之
人ノ心ヲソトサセ
リ

所へおとさんとする之

○はかなくてこれはおもふかことはよりをやそとうけたる之上は別之たゝはかなくして君か心と同し心に成てあひみしかそれは同しけれと我おもふほと君は思ふであらうかその君か心の樣子をみてわか心のほとをしれと之さてわれは君にはまさりてふかくおもふといふ所へかれか心をおとさむとて之もとわか思ふほと人は思はしと思へとしられぬ故らんやとはいふ之されは上にうけたる詞の對伏即わか場所之○年にありて彦星といへと我にまさりて物思ふ事はあらしと思へとしられねはらんやといふ之さてその〔一年一度アフ〕彦星のさまに心をつけさせてそといへりさて對伏へそのかけ合こそ落着をとらんとて之○やとみれはさしなからはゐぬ心と我はさためて居れとも人はいかにみ思けんもしらねはらんやといふ之さてそのよもきか門のやうすをとくと心をつけておもひかへせと之これをそといへりさてさしてはゐしと思ふわか心の場所へおとさんと之○よの中を世ヲウシトイフナラハ片時モ生テハ并ラレマシク思フハワカ場所之コレ對伏意之されとさても猶ありへられんもしらねはらんやとよめりさてその世中ノウキ時ノヤウスヲとくと思ひかへしてみやれといふ之これをそといへりさてありへられすといふ所へ落さんと之この哥は下に一句ありこれはありへられんと思ふ人あらん時その人か心にそれもしのひたらはありへられんといふ心あらんかとてその人の心をおさへていかにもわか對伏意の場所へ落着せねはならぬやうに思はせんとて此句を添たる之これはされはその字を今一段つよくはつませて之○こす波にわかかへりしさまを人はあはれとも思ひかけしと思ふかわか心なれともし思ひかけんもしらねはらんやといへる之さてそのわか袖ぬらしてかへりしさまをとくとみよとて又今そとよめる之それを人の聞てそのさまを今又おもへはけにわれはあはれとも思はさりしことのいとをしさよと心をおとさんか爲之

△様を見てその心を思はせそのはつみにてわか趣意ノ所へ人ノ心ヲオトサセントスル詞ナリやトイフヿイカニトナレハカレカ場所ハモトヨリワカ趣意ノトヲリニムカフモセント思ヘトワカ手ノト、カヌ所ナレハやトイフニテそトイヘルヨリ人ノ心ソノ疑ヘル所ニ心ハツクナリ例ノ不言ニメカレカ得心ヲ活サントテ之ヘテ物盈ルニ人心ト、マラスカケタル所ニハ人心ツケハツトメテモ虚無ヲ設ヘキニワカ手ニ及ハヌ所ナレハ旁々トイヘルニ理ナキニアラスそトイフニテ人ソノ様子ヲ観シ観スレハコレハカクセ子ハナラヌトイフヿ必オコルヘシソレニワレカラハ疑ヒテ出セルモノナレハソノ人ノ観心必ワカ疑ヘルヲアヤシムヘシアヤシメハワカ場所トスル所へ人心來リテ不言ニメ人ワカ意ヲ領シ感伏スヘキ之

○やそは　コノ詞ヲ思ヘハ上ノ哥ナト皆そはトイフヘキはヲ畧セル心之はハソノそトサセル様子ノ落着ヲ敎フルナレハやそノ委シキ之やはノ間ニそノ字イレルナリ○やそもハそトサセルヿヲワカ手ニ歎シテミセテカレニソノそトイヘル様子ヲフカク心ニモタセントテ之もノ字カ、ルハわか場所に彼か場所の手に及はねは彼か場所をわか場所へ引つけんとするに引つけられぬ歎之

願屬　思フヿノ叶ハヌヿヲシヒテナサントスル寸ノ詞ナリ

ばや　上ニハ必今シカセントワカ思フ心ヲウクヘシソノ詞ノ上ノ方ニ必ソノ願フヨシアルヿヲヨムヘシはトハ上ニウケタル詞を他事に分別してその事の落着するさまを思はする心之やトハむかふの場所のわか場所より手の及はぬをみする詞なりされははトイヘルハワカ子カフヿハカヤウノヿカ子カハシソノ子カハシキヲ落着サセントスル心ナルヲミスルナリサレ𪜈ソノヿノ成就セヌ場所にありて叶はぬを歎く心なりはノ字タトヘハ雪ハ白キ物ソトイフハ雪ヲ外ノ物トワケサテソノ雪ヲヤカテシロキ所へ持ユキテ落着させむとする心なれはわか思ふ所へたゝちにたゝ今落着させむとする心ある故にへはなはた急にねかへる詞なれは云ヽトモイヒ初

装ノ早トイフ詞はやもさかなんナトイフ寸願フ詞ナルニ同シコレヲ濁レル心之急ナル心アルハコノ故ナルヘシ

何ミセハ何ナラントイフバノ字ト同シク心ウヘシサレハハノ落着ハやトノ間ニハブケル心之

ばト濁ルハマツカリニ見セタルニシテ見テ思フ故ニ濁ル之

キク人ノソレハカクスレハソノヿ成就スルソトイハンヿヲマツ心アルナリ

にへ事にあたりて云ミナトイヘルハ此はノ字ノ心ナリさてやの字あるにてはとの持合にてしかもその成さむと
する事は手の及はぬ事なるをなけく心あるゝ手に及はねはこそねかへはやとはいふなれ○はノ字濁音ナルニ心
アリスヘテ濁ルハ物ト物事と事又事と物なとひとつになす心なり水をいれはやはいれとはやト別ノヿニアラス
いれといふ事がはやと思ふ事になりてありといふ心をもて濁音とするゝ皆可准之○さ月こば世ニハイマタキカ
ストイフ内ノ声ヲキカバ思フマヽナレトサウナラヌヿヤトイフナリ五月來ハナキフルサント思フヨリチカフ之
サレトキカレヌ故ニやナリ○あたらよの心シリタラン人ニミセタラハイカニ面白シトオモハント思フ処へ落着
サセントスルガばナリされ〔と〕（虫）サル人モトヒ來ヌ故ニやトナカメタル之あたらト思フガチカフ種之○春の田に
口へ水ヲ入レタラハイカニタシカニナラントイフ処へ落着サセントスレトイレン水モナカリシニヤやトイヘリ
すきいれぬへきほとよはりたる故にねかふ之△すへてチカフ心てしかなもかなナトニカハレルヿヲヨク知ルへ
シさ月こはノ哥ハ四月ノ時ニアタリテチカヒあたら夜はソノ夜ノ花月ニアタリ春の田にはソノすきいれぬへき
をみての心之がなナトハソノ願タニカナハヽカクセント思フヿアル之ソレハヨミ出タルモカクセルモアリは
やハカクチカヘトソレカ出來ヌヨト歎スル心ナリモトヨリ難キヿナラハコレカ出來ヌヨナトイフマテモナキ
ヲ思フ
ヘシ

ばやな

はやハ上ニ同シなハ詠ノなナリはやトイヘハソレハカクセハ落着スヘキニトイフ心ノ人ニオコラ
ンヲマツナリなノ字添タルハモハヤ出來ヌヨリ外ナシ外ノ仕方ハナシトワレカラ定メ出テ人ノ心
ヲオサヘタル之コレハ多ク上ノ五コトニアリ中ノ五コトニモヨムヘシ上ニウクル詞ハばやニ同シサレトはやハ
カクモアラハコノ願ナラント思フ心アリコレハなノ字アルニテ何はやトイフ心ノユルガサレヌヨシヲミスル詞
之○きかはやなアリシ昔ノ声ハキコユルカト聞タク思ヒテキカバウレシカラント落着サセントスレト中絶テキ
クヘキヨシモナケレハやナリサレトキク人シカラハユキテコソキクヘキニト思ハンヲ押ヘテトテモ人ノ心カハ

リタレハヨリツキテキカレマシキヨリなト歎たる之○みせはやなをしまの蜑にも袖のぬれたる色はかはらぬをみせはわかかく深き思も人にしられんといふ処へ落着させむとすれとそれをみするよしもなき故にやとよめりさて聞人さらは人つてにたにみすへしといはむを押へて人つてにもみせむよしなきは人の心つれなけれはつきなしと歎く心をなとは詠たる之をしまの蜑の袖とかはらぬ故は並てみせねはならねとかたき事なれはなといふ之

がハワレモカク思フカ人モカク思フカト人トワレトノ心ヲ𪜈ニセントテナルヘシ

ナカメスツル故ニがト濁ラテハ叶ハヌヿナリ○上ノもハ難シトイヘ𪜈トイフ心之

老ユク身ヲワカエントテ不老ノ薬ヲエントスルハコト外ナル物ナリ

ワカ心變セサレハ人モソノ方ヘ心ヲトムル之ソレヘ一

もが

もハ間アル物ヲヨセントスルニヨラヌ歎ナリヨラサルヲシヒテヨセントスル心ヨリイフ詞ナリかハワカ心アタリノヿヲ彼ニアタリテ應ヲ求ル心アリサテ濁ルハもト難キヿナレトかト應ヲ得タル心ニナリタキ心ヲモテ濁音ナル之サレハ此詞モト難キヿニテワカ欲スルニマカセカタキヿナレトモシワカ思フ心ノ應アランモシラネハがトイヘル之かト清メハムカフノヿナリニシオキテ理ヲ他ニアタリテ思ヒヲ出ス心トナル之がト濁レハかトカレニアタリ試ムルホトノ間ナクヤカテソノヿノ心ニ切ニ思ハル、ヲサトス之サレハばやハネカヒテ後ソレカ叶ハヌ之ソノ上モトヨリ難キニハアラスもかハモトヨリ難キヿヲネカヒナカライカテ欲スルニ叶ハセントスル心ニテ相反セリ清音トスレハもハもトテナカメステかハカトテ外ニ求ル心トナルヲカタキナカラネカハシキ心ヲサトサントテがト濁ル之抄云心をくつろけてもといふ詞をくはへたりトイフハもニハヨラサルモノナルヲナカメスツル心アルヲ以テイフナリアマリニヨシナキネカヒナレハもトイフ之○老すしなすのコノ薬得タシト思フニコ、ヨリハ天外ナル蓬萊ニアルモノナレハエントスルニエカタケレト猶ソレカモシエラレンヨシモアラハエタク思フソト之コレモガノ心之

もがな

もがハ上ニ同シなハ詠ノナニ同シクソノヿノユルカヌヲサトス詞ナリサレハもがトネカフ心ノワレモシラスアリテ外ニナクサメモシ仕方ヲカヘンナトノヿノナキヨシヲイフ心之キク人ノ心ニト

途ナル心ヲミスル詞ナリ

下ノも上ノもへ心ノモトル心ナリ

がハスヘテ人モシカ思ハントノワカ心トヒトツニセントテなハ叉ソノ上ヲ今一段オサヘテコレニチガハジトイフ之

、メサスルナリなノ字あぬきニアレハ中心ヨリソレカユルカヌ心オコルヨシヲイフナリ○花の木にワカ身一旦沈淪セレハモハヤ叉ウカフヘキヿナキニメイフ之シカ沈淪シタルヲウカヘントスルハホトアル物ナリシカルヲウカヘントスルハカタシヤト思ヘト猶子カハル、心ヨリモシソノヿノ叶フヿモアランカトアキラメンノ心ツカスカタキヲシヒテ子カハル、心ヲなる時もかなトイヘル之○世中に世ノナラヒニテ死別ハナクテカナハヌヿ之ソレヲ今ワレハナキヤウニト思フハ筋ナキヿナレト中心ヨリソレヲ思ヒアキラメテ死別ハアリウチノヿト思ハンヿノナリカタキニ猶シヒテイカニモシテミバソノ死別ナカラン筋ハナキカト求ル心ノアキラメカタキヿヲイフ之○ありそ海の濱ノ眞砂殘ラス我物ニセントスルハカタキワサナリ人ノ持ツ物ニハ分量アルニ分量ヲ越タル物ヲワカ物ニセントスレトセラルヘクモアラ子ハカタシヤト思ヒスツヘキニ猶叉イカナル仕方アランモシレスト求ル心ノトテモ眞砂皆やハトラル、トアキラメンヿノセラレヌヲイヘルナリ

もがも

もかハ上ニ同もハ詠ノも之もがトハ願タレ𪜈猶ソノヿノ求エカタキヲ自知メサテモ子カフニハマカセカタキ物ナルヨトナカメステタル之古哥アユヒニクハシ

△もがハカタキヿヲ子カフヿヲオシタテ、求ル心ナリサレハ君かやちよをわかえつゝみむトイフ所へ心ヲオトシタリモトもトカなトカイフヘキヲ畧ケル心ナリ事ニハカナル寸ハ事ヲ省クナラヒナレハ詞トテモソ理ナ（ママ）リ君か八千よをトイフ処へ心ヲ早クオトスヘケレハなノ字もノ字ナトノナキ之難易ノ差別ハアレトはやニ少シ似タル所アリサレト畧ケル詞ナレハ勢モ同シトハ思フヘカラス△もかなハもかト子カヘル心ヲ今一度カタケレトソレカヤメラレヌ心アルサマヲミスル之サレハオシタテ、求ル内ニモもがハ求ル心ヲ専トシもかなハ求ル心専ナル内ニワカ其子カフ心ハ叉ヒルガヘサヌヨシヲイフヲタカヘリトスサレハもかなハワレヲ堅メテミスル之トシルヘシシカラハもがハ叉ヒルガヘス心アルカト疑フ人モアランナレトサマテノヿニハアラスもがハタ、ヒタフルニ求ル心アル之ト知ヘシサレハもがハムカフニ心アリもかハ求ルコナタノ心ヲツヨクスエ

テ求ル之ト知ヘシ△もがもハもかトハネカヒナカラ又はしめもトイヒタル心ヘモトリテナカメスツル之サレハもかハ求ル心ヒタフル之もかなハ求ル心ノ外ニ變スヘカラヌヲイヒもかもハ求ル心ハアリナカラモドリテソノ求ノカタキヲ歎スルヲハタカヘリトス

上ノスヘテモト一もハ物事アリソレ筋ノハナキヿヲソニテヨセテイフナレニリ

やハ只ワカ心ハカリノヿニナル之なハ人ノ心ヘモオスガタカヘリ

かひかねノ哥ハワレヒトリノ旅情ナレハやトイヘリコレハ世人スヘテノ心アルヘキヿナレハ之

もかもや

もかもハ上ト同シクモトヨリ難キヿナレトイカテ思フニ叶ハセントト思フヨリ人モカク思フナルヘシタレモ〳〵カクハ思フヘキヿナレト猶心ニマカセカタキヿヨト思フナリさてやトイフハ猶ソノ手ノ及ハヌ處ナルヿニ本ヨリ定マリ來レルヿヲナケキテトテモワカ心ノマヽニセラルヽヿナラス手ノト、カヌ所ノヿナリト歎息シタル之サレハもかもハもトイフ処ヘハ心ヲモトセ𪜈猶ワカ願モヤメカタキ心又カレモ思ニハ叶カタキ境アル物ナル両方相敵シテ不和不順ヲ歎スルマテニテ猶ネカフ心ノコレリもかもやハワカ場所ト彼カ場所二場所ヲタテ、ワカ場所ヨリ手ヲカケントスレト彼ノ場所ヘハ及ハヌヨシヲイヒテナラヌ願ヲネカフ心ヲ歎スル之サレハやハ打すてたる心ありトハイフナリサレハもかもハ猶ソノ願ニ心ノコル之もかもやハ心ノコラヌニハアラネトノコシカタキヲイフヲタカヘリトス◯かひかねを風ヲ人ニアレトイフハモトカタキヿナレト古郷ヘノコトツテセンヨシナキヨリシヒテモ人ニセマホシキ心ヲ旅ニシテハタレモカヽル心ハアルヘキニサテモ此願ノカタサヨヨク〳〵思ヘハ少シヨリ処モアルヿナラハコソ願ハメ風ヲ人ナレトハモトヨリネカフヘキヿナラヌヲトイフ之此やハ末ノヤノ心ニテ無益ノヿノ思ハル、心アリ

もかもな

もかも上ニ同シなハもかなノなニ同シカタキヿナレトイカテソノカタキヲシヒテナサント思フ心ヲ人モシカ思フナランカクイフニタガハジヤト人ノ心ニオシテイフナリ人ノ心ヘモオスニテワカ心モソノ願ヲユルカシカタク思フ心ヲミスル之サレハ切なる心ありトイハレタリ◯よのなかは不變ノ物ナラヌヲ常住ノコトクセンハイトカタキニワカ身ワツカナル舟ノ繩ノ如キ命ヲタノメドモイツ死モシカハリモセ

ント思フカナシサヨリシヒテ常ニセマホシキヲ人モ同心ナラント思フガイカニコノ子ガヒノ叶ヒカタク難キヨト思フ之カク思フ心ヲ外ニナクサメユルカサンカタハナキニアラスヤト人ノ心ヲオサヘタル之サテワレモソノ常ナラマホシキ心ノユルカヌヨシヲイフナリ

もかなや

もかなハ上ニ同シイトカタキヿヲ子カフ心ヲ人モシカ思ハントワカ心トヒトツニシテサテソレカコルカス方ナカラントワカ願フ心モ外ニユルカス方ナキヲミスル之サテやハ上ノもかもやノやニ同シクサハユルカサレヲトモ猶手ノ及ハヌ所ノヿナレハ無益ナル願ナル心ヲ数シスツルナリかもハヨリカタクヨセカタキ二物ナルヿヲミセかなハソノヿニ切ニ心ツキテユルカサレヌヨシヲナケクタガヒメナリなトやトハやハセンカタナシト思フ之なハイカテ〱トナラヌマテモ思ヒヤメラレヌヨシヲイフヲ違トスやヲ打捨たりトイフモ猶イトカタキヿナレハ之なモソノヿカタキニ猶ミ心ノツクヲ云互ニ切ナル心ナレトやハカレニヒカレテイフ心アリなハワカ心ニツケテイフ心アル之もハヨラヌ物ヲヨセントスル心ナレハ又タカヘリ○とりかへすトテモトリカヘサレテトフリユク身ノカナシサニトリカヘサントスル心ハ人モ同シ心ニテ外ニユルカシナクサメン方ハナカラント思フ心ヲヨク思ヘハモトヨリワカ子カフ場所ト世ノ過ユク場所ハ手ノトヽキワサノカヽルヘキ所ナラヌヲイト詮ナキ願ヤト数スル心之

てしが

てしハ常ニはやくも人を思ひ初てしみてし人こそ戀しかりけれナトイフてしナリてハ物事アルヲソレヲ又コナタノヿトツケナリニ未來ニスヽミユク心ナリしハ過去ノしナリソノナリ來リシサマヲミスル詞ナリサレハてしはソノ物ヲコチラヘツケテユクヿニシソレガ今マデツキナリニ來リシサマヲ形容スル義ナリサテソレヲかトイヘル之かハ清ナレハワカ心ニ何トナクアタルヿヲイヒテカレガ方ヲ心ムル詞ナリ濁ナレハワカ心ノ思フアタリニカレガアタリヲアハセモツヿニシテイフ心ナレハ濁レハ願詞トナルナリ早竟てしトイフヿヲがト思フト云心ナリサレハもかなもかもナトハタヽ現在ニテソノヿヲ成サンヿヲ子カフ心ニテ未來

やハ場所ノカハルヲイヒもハ物ノヨラヌヲ云之

コノ哥ハ又我身トワカヿヲイフナレハなトハイフヘカラス

かハ清ナルハワカ思ハルヽヿノ何トナク理ナク思定ラルヽヿヲモテカレカソレニ叶フカナハヌヲ試ムルナリコレヲ濁ル寸ハソノ理ナク思ハルヽ心ヲヤカテカレト

叶フヿニシテ思ハントテ之コ、ヲモテ子カフ詞トナル之てトしトノ間ニ必何トカ詞アル心ナリコレヲハブキテてしトイフ之てんナトニ同シ
てしハスヘテワカワサニツヨクカゲテカノ志ノ一事ニ及ホサントスル心アリ

ヲ思フ心又てしがハ未來ニテ過去ニナランヿヲ現在ヨリ思フ心アリ願ノサマタカフヲ知ヘシ此故ニもかもナトハ上ニ体ヲウクル之てしかなハ上ニ必用ヲウクコレてノ字ノツ子ノウケサマナレハ之かろくほりするトアルハもノ字ナキ故ナリモトヨリシヒテセハナラサルヘクハアラヌヿノ現當ニシカタキヿノアリテ子カフ心ナリサレハはやニ似タレトカレハ現當ノヿニアタリテ子カフナリコレハソノヿヲシハテン後ノヿヘカケテ子カフ心タカヘリ〇おもふとちアツマリタニセハナリヌヘキヿナレトソノ思フ友ノ心モハカリカタク又ソノ人サハリナトアリテシカタキ時ノ子カヒ之たひねヲシテシマヘル寸ノコ、チイカニウレシク思フヿナカラント思フヨリヤカテワカナニトナクソレノ思ハレテソノ思フニカナハセンヿヲ子カフ心ヲがト云之〇耳なしのコ、ヨリハ遠キ所ナレハ之コレモシヒテトリエントスレハトリエラルヘキモノナルナリソレヲトリ得テワカ物トシテトリ置タランニイカニ思フヤウニ心ユカント思フヨリ自然トソレガ思ハレテソノ思フニカナフヿニセンヿヲ子カヒテがトイフ之△上ノ哥モたひねシタル後ノ心ヲ思ヘルナリ只たひねせんト思フ斗ノ心ナラスコレソノたひねシテノソノ時ノコ、チヲイカナラント思フ故ナリ後ノ哥ハ末句ニ下染ニセントスルヿアレハソノ心明ナリトリエテ後ノワサニカケントスレハナリコレ又ソノトリエテ後ノソノ時ノコ、チヲ思フ故ナリタ、トリエント子カフノミニアラス

何てしがな

てしかハ上ニ同シなノ字ハ詠ナリなハワガてしがト思フ心ノ何トナクユルガサレヌ勢ヲミスルナリ即人ノ心ヘモソレヲシカト子カフゾトモタスル心之サレハ人心ヲモソレヘツケテユルガセヌ心トナル之早竟てしかハてしかなヲなノ畧カレタルナリ畧クハスヘテソノヿ俄ニナルナリコノ故ニてしかハ今モソノヿセマホシキ心トナリてしかなハソノヿヲ心ニモチテ變セスアルサマヲミスル之哥コトニカハルニハアラ子トコノ義アルヲモテソノ哥ノ心ヲトキヤウタカフヘキヿヲシルヘシ〇耳なしエテ後イカニウレシカラント思フエテシマヒタル心ヲ思フヿノツ子ニユルカサレスノミアルヲ云忍フヘキヿノクルシサノツ子ニ心ニ

ハナレヌヲミセントテなトイフ之キク人モゲニ忍フニハサモアラント思ハン心ヲ引クナリ思ふとちの哥ハ今モソノヿノセマホシク心ノス、ミタルサマヲミスル之サレハてしかハス、ム心アリてしかなハ心ニ思テアル心アルナリ

も何てしが

もノ字アルニテ難キヿニナルトハもハモト間ノハナレノキタル物ヲヨセモツヿニシテイフ詞ナレハソノ間ノハナレタル心ヨリ難キヿノ象トシテ用ルナリてしかハ上ニ同シ○あなこひし今トイヒテハ目ノ前ヘトリ出カタキモノナレトモソレヲヨスルヿニシテミルヿニシテシマヘル寸ノ心イカニウレシカラント理モナク思ハル、心ニヤカテカレガ叶ヘル物ニセントシテ手カフ心之今トイフハ急ナル之ユルキニ對スル詞之ユルク間サヘアラハ猶ミラルヘキモノナルヲマタレヌ心ニ戀シサノ切ナルヲミセタリもハ今トイフニカ、レル之

も何てしがな

もモてしかなモ上ニ同シ○春かすみ菜ハ人トハコトノ外ナル物ナレトソレニシヒテモナラントナルヿニシテソレヲナリハテタル寸ノコ、チイカナラント思フ心ノナニトナク理モナク思ハル、心ヲヤカテソレガ叶フヿニセントシテ手カヘル之サテソノ理ナク思ハル、心ノヤマズユルガヌヿヲミスル之イカデ〱トソノヿヲツ手ニ思フ心内ニモチテアルサマヲなトイヘリ今俄ニナラントスルニアラスサテ人モケニ人スサメヌ身ニハシカコソト思ハスル之△あなこひし今もト急ニイヘレハなノ字ナシコレハもトイフ物ノコトノ外ナルモノヲソレニナラセントスル心ニテ俄ナルニアラ手ハなトイフ之サテ春霞ノ哥ハ人もつむやとトイヘル心アレハてしノ心明ナリコノ二例ヲ思フニてしかハもアルモナキモソノてしヨリ末ノヿヲヨマスコレなノ字ナクテ心俄ナル故ナリてしかなハもアルモナキモスヘテソノてしヨリ後ノヿヲソヘテヨメリコレハなノ字ニテヿユルケレハナリ人ノ心ニ一旦なトモタセタルモノナレハ又ソノ後ノヿヲイフモサワガシカラ手ハ之なナケレハクダ〱シクナレハ畧キテ思ハセタルナリ聖作思フへシ

も何しが

コレハ上ツ世ノ脚結ナリ畢竟何も何てしかノてノ字ノナキナリ中昔ヨリハてノ字ヲソヘテノミヨメルナリコレハてしトしトノ別ヲモテワカツヘシ〔もノ字アレハカタキヿヲ子カフ之〕之身ノし

詞ノ上ニ先タツテトツケテたト里スてしハテ置タト里スてしノ詞ハてノ字ソヒタルニテソノ上ニウケタルヿヲカノしノ後ノ心マデ猶ソノヿヲ持ナリニシテユク心アレハてしニハ必ソノてしノ後ニ又別ノ一トワサアルヘシしかハ只サナラヌ場所ニ井テソレハ先タツテカクアリシトワカ願ノ過去ニナランヤウニアラハイカニウレシカラント思フマテノヿ之てノ字ハ物ニ物ヲツケナリニス、ム心ナレハ上ニうけタルヿト又別ニ一事アルトソレヲツケテワカ思フ方ノヿニセントスル心アリてしかなノ例ハ下ニヤカテソノ一事ヲ別ニヨメルヲ思フヘシ〇かひかねをコレハ古今大哥所ノ甲斐哥之甲斐ノ國ノモノ、都ナトヘノホルトテ道ニテ遠江ノサヤノ中山ノヘタ、リテ甲斐カ子ノミエヌヲナケキテヨメルナリ中山ノヨコホリタレハサヤカニミントスレト山ヲ除ンヿカタキヿナレハもトイヘリシカ難キヿ之トイヘ𪜈何トソ見タリトイフ後ノ心ニナラハイカニウレシカラン今イカテミマホシト心ノソレニ切ニカ、レルヲ云之コレ故郷ノ山ナレハセメテソレヲタニ見しトイフ心ニナラハトソノシ難キヨリ子カヘルナリサテコレかきほにさける山となてしこトイヘルニ同シク下ニカノ一事ヲモイハス餘セルハがなニアラヌ故之山かつのモ即ソノカタキ理ヲ下ニノフルナリコレモ三四五ハもトイヒテカタキ故ヲイフ之みむよしもかなトヨムニハ心モチカハレリみむよしもかなトイヘハソノミル処ヲ悦フ心ナリもみしがハソレヲタニ見ハソレヲナクサメテコノユクサキノ旅路モ心セメテナクサマントイヘル心ナリてしトノ別モ——シテシマウタト同シ見ルヿニテモ皆ワカワサヲカケテイフ之しがハ只見しトイフ詞トシテ歎スルニテシヒテワカワサヲカケントスル心ナシサレハスコシてしがヨリハ打ステナガメ捨タル心ソヘリさやニミルトイフヿハカタキヿナレトサヤウニアラハソノ後ノ心セメテナクサマントソノ難キヿヲツヨク難シトシスエテイフ之今もみてしがナトハ今トイフハカタケレトイカテイマミン今イカニモシテミマホシトノ心カ、ルナリ

道ヲユキ〱子カフナレバがなトイヒテアル間ハナケレハがトノミイフナリ

此哥ナトハ山ヲノクルナレハてしトワサヲハカケラレヌ之

○何ましかはカクアラハヨカランニト思フ心ナリモシコレカクアラハト事ヲ心ニ設テヂカフ心ナレハ又上ノ脚トモトハカハレリも何てしかなナトニマキラハシケレハヨク〳〵考ヘワカツヘシ設ルトソノヿニ今心ノ乗テアルトノ別ナリ○願のね後撰雜二ニ贈大政大臣へひくらしの声をこひしみけぬへくはみ山ほとりにはやもきねかしトイヘルコレナリコレハ去倫のぬノ立居シテ伏タルナレハ願ノ心トナレルナリ

誂屬誂屬（マヽ）

内外ニカヨハスヿヨク知ヘシ有情ノ物ニアツラヘイサムルヿハ人シル所ナレト非情ノ物ニアツラフルヿ人思カケス外ヲモ内トスルハ神ヲ感スルノ道ナレハ之石ニ神存スルカ如キヿマノアタリモアルヿナリ○君臣カヨフヿナトイフハ里言ニ尊卑ヲワケテアツルニイトマナケレハナリ里言ハ尊卑ニクハシクワカレタリ所ミニテ尊卑ヲワケテ心エテ里言ニナツムナトナリコノ國外ヨリ内ヲ尊フヿコレニテモ知ヘシ内ニ誠アレハ言語ニカヽハラスイカニ言語ニ尊卑ヲタツルモ内ニ僞アリテハ詞ヲカサルニオツレハイヤシトスルコレワカ國ノ風俗ナリ巧僞不拙誠トイフ所ナリヨク考フヘシ

何よ

彼カ場所トワカ場所トカハリタルニ彼カ場所トスル所ヲモテワカ場所ヘスヱモタセテイフ詞ナリサレハ詠ノよモ同意ニオツル之詠ハワカ心ニソノ物ヿノフカク思ハルヽヿヲカレハナニトモ思ヒタラヌヲソノ心ヲワカ思フ場所ヘツケスヱサセテイフ之やノ反ナリ誂ハ彼ハナニノ心モナキモノヲワカ願ハシキ場所ヘ心ヲスヱサセントテイフ詞之○かすか野の野守ハ若菜ニ心モアルマシキニワカ若菜ツマンニホトシラレヂハホトシラントト思フ場所ヘ野守カ心ヲスヱサセテイフナリ○みな人は苔ノ衣ハワカカハケト思フ情モシラテヌレタルヲワカカハケト思フ心ヘ引ツケテカハカセントテ云之○おひしけれアヤ杉ハナニ心モナクワカ昇進ノヿモナニトモ思ハヂトソノ緣ヲ濃紫ニナサンノ心ヘカレヲ引ツケテおひしけれトハアツラフル之スヘテカレハソノ心ナキ物ヲシヒテワカワサヘ引ツケテシカナラセントテイフ詞ナリ

○此以下ハ皆装ノヿヲ序ニイフ之

○よのありなし心多くかはらすトハ里言ヲアツル上ニテカハラヌト云ナリ実ハ別アル之

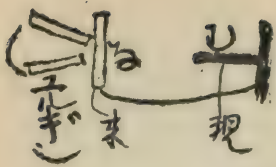
○靡なき詞をは目にふせてよむスヘテ何るトるノ字ノツカサル装ヲ靡なき詞ト云之目ハ目ノマヘト云之ふするトハえぬきノ字ヘ立居サセルヲ云コレハ装ナカラ詠トナルノヿヲ云之○靡ある詞をはおほくは目をうけてよとよめりコレハるノ字ノツク装ヲ云さたむるトイフヲむヲめトカヨハセテよトツケテ世人さためよナトイヘル類之哀とはみよナトハヤカテみるトイフヲ本ヲウケテよトウケタルモアレハ多くはトハイフナリわふとこたへよナトハこたふるトイフヲカヨハセタルニテさためよニ同シ山かつらせよナトハみよナトニ同シ例ナレトコレハ即するトイフ寸ヲせトフセテよトウケタリ○くはふるトくはへぬト靡ノアリナシニテカハレハナリソノ内よハ心ツヨキナリツヨキ上ニよナキハ例ノ畧法ニテ事ニハカニ詠ノ心急ナリト知ヘシ○來をこともこよともあつらふるたくひまれにみゆコレハ未來ヲサシテアツラフル之よノ字ソヒソハヌハ上ノ心ナリコレハくるトイフくヲおぬきヘカヨハシタルナリ○その舟ちゝめとゝむる卜有靡ノ詞ナルニむヲめトフセタル斗ニテよノ字ソハヌ之コレハ上ノ例ニタカヘハ又イヘル之コレハヿニハカニ詠急ナルカ故ナリ今トヽメヨト云之よトイヒ居ルホトモナキ心ナリ○きけよとへよ無靡ニハよノ字ナキ例ナレトコレハ文ニハアリ近來ハ哥ニモアリトナリコレハきけトイフ之文ニ古カヽレタルハソノヿヲフカク彼カ心ニスヱサセントテよトソヘタルナルヘシ○狀はたちもとやかて詠らふる詞となれりなかれハ志狀之久しかれハ鋪狀之立トハあぬき之なく久しくトイフくノかトカヨヘルコレヲ立本トイフ之サテれトフセテ詠フル之○よゝコレハてゝつゝるゝナト重法ニテソノヿノツヽキユクヲ云之よトハカリハ一度ナリよト思フ心ノツヽキユクヲよゝトアツラフル之サレハツヨクナル之ツヨシトハ心ニフカクよト思ハルヽヲ云之

何や

よトハ反セレハうちふるまへるトイフ之よハワカ思フ場所ヘカレヲ引ツケテシカセヨトソレニカタメテ詠フル之やハ彼ハワカ心ノ如ク自由ニハセラルマシキ物ニシオキテサテワカ思フ所ノヿヲモテ彼ヲソヽノカシイフ詞ナリサレハよハタトヒ難キ物ニモアレシヒテワカ思フ所ヘ引スヱテイフナリやハタトヒ易キモノニモアレ難キモノニシオキテイフカタカヘリ○こゑたえすナケトイフトテナクヘキ鴬ナラヲハなけやトソ

、ノカシテイフ之即ワカ声ノキカマホシキ心ヲタテントテ云之〇つのくにの來ヨトテ人ノツラキハ來マシキモノニアラヌヲシヒテワカ思フ所ヲタテンノ心ヲモテソ、ノカシイフ之〇なけやなけ下ニやノ字ヲハフケル心ナリコレハツヨクカタキヿヲ思ヒソ、ノカス心之

△よやよトシヒテワカ思フ所ヘカレヲ引ツケテ誂ヘテサテ思ヘトカタキヿナレハ今一トタヒやトソ、ノカシテイフナリコレハよトイヒ又やトイフニアラススヘテ詞ハ下ハ実之上ハ虚ナリよヲ虚ニミテよト思ヘドやトヨム心ナリト知ヘシ



何ね

シカナリハテ、後モハヤ外ニユルカテスワルヿニナラシメントテ云詞之よは今ノヿノ内ニテコノ方ヘトワカチテ心ニモツヤウニスルナレハタカヘリ〇思はむと恷レハツルニカタマレハモハヤ名ノ立ツコトモナキヤウニナレハねトアツラフル之〇春風は吹ハテ、シマフニカタマレハ再花チルヘカラ子ハソノ方ヘカタメテ外ノユルキナクナレト云之トカクソノ後ユルキナカランヲ思フ心ヲタテ、アツラフル詞ト知ヘシ

△願のねまかはすへからすトハコレハ徃ヲウケ來ヲウクル之ひなへさそはねナトコレ之承さまたかへれは心ヲハカリテ二屬ニワカテル之義ハタ、同シ

なん

なはカレカ動クヘキヲスワリテユルカヌモノニシテイフ心之むハ間アルモノ、方ヘ今ノヿヲト、カセテイフ之サレハなハカノワカアツラフルヿノ行サキノトマリノ処之むハ今ノ人物ノ心ヲソコニ赴カスル心ナレハ誂ハむニアリ〇しぬる命アハントハイフマシキ人ヲイハン方ヲスヱテソノ方ニ赴カセタリ〇まてといはゝ子テハユクマシキ勢ナルヲモテなんトアツラヘタリ〇春たてはトクヘカラサル勢ヲミテ之

〇ぬノカヨヒナラ子ハねノ如クソノ後ヘハカ、ラヌ之〇むノ義ノ間アル所即なトスヱタル所トナレリ物事ノソノ方ヘハカタキ心カ、レリ

○起ハみな過去ノ詞ナレハ之立ハソレニシオキカクルハソレニスル心ナレハ誂トナル之

（禁属）

禁詞

な

何は皆現當をうくる之今わか嫌はしき方へその事のゆるくへきをみてゆるかすましとていふ詞之かたくいさむるといへるはゆるかさぬ所専なれは之○今さらに今歸りはするさまはなけれと山へかへるをきらひてかへるなといふ之○冬の池に今人はしらねと人にしられんをきらひてしらすなといふ之

△なよよの字上にもいふ如くわか方にてわか思ふ場所をたてゝそこへ引つけていふ詞なれはなを今ひとつかためていふ心之されはくれ〳〵といふほとの心といへり○わするなよわかれなは今わするへきさまたなるをかなしみてつよくなよといへる之わするなとはかりいへはゆるかさぬ用はかりとなる之よの字そふ時はいつまてもそこのかはらぬをねかふ心ありと知へし

もはやそのことのそれになりたるほとの勢なる時にいふ之

な何そ

何は皆過去の詞をうくなにはうけ様上に同しされと此なと上のなとは分別する所かはるへし上のなはするかせぬかのゆるかさぬ所を主意とす此なはしかしてるはありなからいまたその事のしはてぬ所にていふなれはしはつるとしはてぬとのけちめにていふかたかへりさてそのな何といさめたる筋へかれか心をそはせてそとはいふ之よといふよりはかろし上つよにな何こそといふをむかへておもへは此そはそのしはてぬ方としはつる方とをさしわかちてしはてぬ方へ彼か心をそはせていふ之なよりはゆるしとは現當にて白黒のけちめをたつると今その筋にはありなからしはつるとはてぬ所にていさむる心なれはゆるしとはいふ之○山たかみいたくわひしけなるさまなれとわひはてゝせんかたなしとはおもふなわれみはやさんほとに

ソハ彼カモトヨリオホエテアル所ヲソノマヽサシオシヘテイフ詞之サテソトサシタルニハ必コナタニ思フ心アリテノヿナルヲカレニ思ハスル心之

その字は其方にわかかくありといふことを上にもせよ下にもせよいひきかせんとてそと其筋へ彼か心をそは

せ置心之

との心之みはやさんをいはん爲にそといふ之○百草のこれか何なとかはる所之人かそのわたりを往來して居る故いまたとかめはつる人もなきをなといさめたり思ひたはれんをいはんとてそとよめる之○戀しくは紅葉を吹てはあれともいまたちらさぬにちらさんかとてなとよめりさてみても忍はんといふ心をいはんとてそといふ之○かくれぬの今まてくるは來ていとひといふまてにはなけれと心よからぬをいとひはつるまてにはあるなと之さてねぬなはたゝしと思ふといふ心をいはんとてそといふ之

△なと何な何そとの別の比喩はとゝまるとゆくとは黒白のけちめなれは之東西今日明日も黒白なれとゆきてはありて東へゆかぬなれはな何その心之あすゆくへきにといふもゆきてはありてあすゆかねは之此別よく〳〵考わくへし

○けふはなやきそと舟かたふくなとの別野を今やきてはありてわか居るわたりまていまたやきはてぬをなやきそといさめたりこれは二ッのこもれりがそのわけ之舟かたふくな今かたふきはせねとかたふきもすへきをきらひてなといふ之

△あすをもこめていさむるにはあらすとはけふといふ詞に對して人さや聞んとていふ之只けふのうちにてわか居るあたりをもやきはつることをすなといふのぞといふ之

始——な——終 な何そ

なゆめ　な何そも

なハムカフヨリ出テクル物ヲコチラカラツトオサヘタル心之な何そハムカフノ物ノコノ末ノ所ヲ思ヒテソノヿノ終ノ処ニ心ヲオキテイサムルナリ

な何そもハ行末ヲ思ヒテ行末ニ心ヲオキテ末アランヿヲイサムルナリサレハ今ト行末トノ

な何そも

な何そは上にかはれり來をうくる之されはこれは終を思ふにあらす行末を制する心專一之此故に今ノヿト末ノヿト不工合ナルヲモテもノ字アリその事に及ふへき勢あるを制する詞之もはわか禁するか如くはなりかたからんことをはしひておもひよせて制する心そはる之と知へし○わするとも忩ラレハ必かれはつへき勢なるをみてかれなはてそといひさて忩れなからかれさらんことはえあるましけれとし

アンバイニテもノ字アルナリサレハ今ノ一事ハ此後アリ𪜈サモアラハアレト一事ハユルシ一事ハイサムル心もニコモレリ もノ字ノ心アル故ニコノ二首𪜈ニ上にともトヨメリ

ひてそれをたにとこひねかひてもといへる之怠る丶とかれはてぬとはよりもつかぬことなれとせめて思ひてもとわする丶はせんかたなしかれはつる事なりともあるなとの心としるへしキトといふことを思せられたるはもの字ある故之そといへるはわひしくかなしけれは之

なゝ何そも

なゝとかさぬるはなといへる上にもまだゆるくへくやとて又なとかさねたる之さてな何そもは上に同し○花の色はあかすみるともアカス見バ必手フレテ折ヌヘキ勢アレハなトイサムレト猶手ヤフレント思フヨリ更ニなとかさねてさて何そといふは此行末の所さならんと思ふより行末を制する心之終に心を置ていふにあらすさて又あかすみるたにをしき心なからそれはさもあらはあれ手をふる丶事なりともすなと此行末を制する心より今とをかけあはせてもといふ之そトイヘルハをしけれは之

ゆハ現當ニヘタテアル中ヘワカ神氣ノイリコミユクヿ めハナレタルモノヽハナレナリニコチラヘウツルヿ夢ハ現在ノヿノ夢トハナレタルナリニ夢ニウツリテミユルヲ云

何なゆめ

なはうけも上の何なに同しく現在之ゆハ現ニテ現ニ彼カ場所ヘイリコミユク心之めは此後ワレニ對シ見ユルヿヲ今カラカケ持テイフ之夢トイフモチテユク末ニ見エ來ヘキヿヲ現ヨリカケ持テ名ツクル名之サレハ此脚ハなトユルカヌヤウニ今ノヿヲオサヘテコノ後モサルヿナカレト今ノヿヲオサユルニツケテ末ヲモカケテ禁シタル之サレハゆめハコノ後トテモト思スヘシ○こひしくは今色にいつる事をすな色にいつる方へゆるぐな此後とても色にいつなゆるくなといふ之○ちはやふる今あらかふ事をすなあらかふ方へゆるぐな此後とてもあらかふなゆるくなといふ之色にいつなは色ニ出ヘキヲミテカチテオサヘあらかふなはあらかふヘキヲミテオサヘタル之

ゆめ何な

これはなゆめには少しかはるへしゆめとさきに出たれは先此行末の事はかりをいさむる心之（なトイサメテユメトイフヿモスナトイフ心之）な何そもに似たれとかれは行末とも今のひと事はゆ

るして一事を禁する心もニアリこれはたゝ此行末を今よりかねて此後か
まへてかくすなといふ心之此二詞ゆめトなト互ニ標実ニナル別マテ之

ゆめな何そ 此後ノ事専一ナル事ゆめ何なニ同しな何そは事の徃をうけて上のな何そに同し此後ソノ事
ヲシタリトイフ場ニ及フ事アランソノ場ニイタリハテン事ハカマヘテアルナソノ方ヘカリニ
モユルクナト之そハスヘテ上ニモイフ如ク人ノサル事ナルヲ知レル心ヲソノマヽニコナタ
ヨリサシテそトイフ之そトイフニハ必コナタニ心アリテサセル之ト知ヘシ○ちはやふる神
馬ニノリタリト思フ事此行末ニアランソノ事ハカマヘテカリニモ仕ヤルナト之そトイヘル
ハたゝるへけれは之△や/字くれ〴〵といさむる心とは誂のや之ゆめな何そといふ事をあ
末ノラサル者ヲイ
サメテイフ之今ノ
ルヲイサムルハな
ト斗イフヘシ
つらへそゝのかす心之やの字添たる
故にくれ〴〵といさむる心となる之
△ゆめよゆめは此後の事をわか心の場所とせるをみせてゆ
めよといひ猶此後の事心にかゝれは又ゆめとはよめる之
△な何はそもしをはふける之△な何こそはそもしの心にてわか心よりことにとり
わかちてその事をさすかたかへり△なゝ何そはなゝ何そものもの字をはふける之

それハゆめなトイ
ハン心之
そノ字アルニテフ
カクワカ心ノソノ
事ヲイサムル心ア
ルヲ示ス之

脚結翼第二

北邊二世富士谷成元 述

スメハ唯ソレヲサシ持ツ心斗之ニコレハスナハチソレガワカ心ト同物之トミスル心トナル之

世上ノ物トワカ心トヲ一物ニスル心ニテニゴル之

一例ハワカ決シタル心ヲカレニソヽ

十九家 曾家

ムカフニアル物トハ世ニアリ來リイヒ來リ人ノオホエキタレルヿ物ナトヲ云ソレニワカ心ヲソヽキ持タルサマヲ示ス詞之

何そ

そハムカフニアル物ナリニワレニ引トリテイフ詞ナリ濁音ナレハワレニ引トリ思フ心ヲソノムカフノ物ノアルナリノ処ヘ合成シテミスル詞ナリスヘテ人ノサハアルマシト思フ所ヲワカチテミスル之

○一例つむるぞ 此例全クそノ本義ナリワカ心ヲカレニソヘテ合成シミスル心ナリト知ヘシ

人しれす ナキ名トイフヿノ人モシレルヿアルカスナハチワカ心ナルヲサシサタメテイヘル之人ハアル名之ト思フ処ヲサシワケテイフナリ

名にめてゝ 折ハカリニテ実ニ心アルニアラヌヿ世ニアルガ即ワカ心ナルヲサシサタメテイヘル之人ハ心アリテタハレタランヤウニ思フヘケレハサシワカテル之落馬シタルハ必心アリてなるへくみゆへけれはさしわけてそといふわか落馬の様子に此詞を合成したる之

○一例うたかふぞ コレハその義ハカハラチトト上ノ疑ノ挿頭ニヒカレテうたかふ心トナル之コレヲ心エンニハ先ムカフニアル物ヿノウタカハシキ物ナリニワレニ引トリテ思フニ思ヒ定メ

キ二例ハワカウタカハシキ心ヲカレニソヽキテミスル之サレトそニ疑ノ心アルニアラス疑挿ニヒカレテ之

此第一例ハそノ下必物名ナルヘシこゝにつめたきトイヘルハタトヘマテ之

ラレヲハカレガ実ヲサシワケテシラントテイフ之ワカウタカハル、心ヲカレガカクレタル実ニ合成セントテイフ詞之サレハ一例トハカハレリ一例ノハ人ノウタカヒヲワレヨリ定メテイフ之サレハワカ決定ノ心ニ人ノ心ヲ合成サスル之コレハワカ疑ハシキ心ヲカレカ隠実ニ合成セントノイフカタカヘリ●苔むさはサルホトノ齢イカホトナルヲシラヌニ必イカホト、サシワカチタル実アルヘケレハソレニワカイクヨト思フ心ヲ合成セントテイフ之●千とせふるタレゾノシカラミニカヽリテカヘリタルヘケレハワカ誰ナラント思フ心ヲカノ物ニソヘテカレガ隠実ニ合成セントテイヘル之

△いつそはいつそもノ論はハソノ時ヲ求出ンノ心主トナレハ一首ノ爲ニ心カロシもハシラレヌヿヲシラントスルニ歎アレハ心オモクスヘテ上ノ五句ヲ一字ニウクレハそもノ方ナルヘシトイハレタル之

△そもノそヲスムハケニアユヒノ理シラヌ之そもそはハスヘテ疑ふぞノ例ナリスメハ合成シ定メントスル義ナク只ソレニ心ノソフ義ハカリニナレハ必濁ルヘキ理ナレハ之

○よはひいくよそハムカフノ齢ニワカイク世ナラント思フ心ヲ合成シテミスル詞之○かけてかへすそ色ツキタル松ノ葉ニ下ノ句ノワカ心ヲ合成シ示ス之

二例ヲタツルハソノワカ心ノ決未決ノタカヒアレハ之

何そ何　二例○二例　めくらす中のそ

そノ心上に同シクそヨリ上ノ物ヿヘそヨリ下ノ物ヲ合成シテソノ上ノ物ヿノ様子ヲミスル詞ナリスヘテその上ノ

物ヿニサマ〳〵ノ様子アルヲワカ思フ所ヲソレニヨセテソノ様子ヲサシワケテミスルナリサレハ上ノ物ハ世人皆シレル処ノ物ヿヲサス下ノ詞タトヘハ水そつめたきトヨマンハその詮ナカルヘシソレモぬるカルヘキ水ナレ圧トノ心カヽラハそノ詮アルヘシコノ理ヨク思フヘシ人モナルホトソレハサナリイフニヤ及フトオモフホトノヿナラハコト〳〵シクそトサシワケテイフニ及ハヌハ之めくらすトハその下の詞の下にそノ字あるへ

き心なれはゝ里言はそを下にいふゝさて又上の詞必世人のしかあるへしとおもふことならは詞は無用ゝこと
の外なる事のその様子に思ひよせらるゝをそとはよむゝ○大かたは月をみる事のつもれは老とならんとは人
しらさることなれはそれに感したるさまを月によせ合せて月のさまのしかるを思はせたるゝ○
水のうへに此処は泊ならぬさまなれはこゝを泊にと思ふ心をよせて此所の様を思はせたるゝ

○第二あたる中のそ　コレツヽニ多クヨム例ゝあたるトハ下ノ詞しきゆくなるきナトしかとそのその字の上の物事にあたりていへは也ぞの義上に同しその下の詞の心え第一例にいふに同し只一例は下物ゝこれはよそひなるかたかふゝこれ専一例の下にいふを思ふへし○さくらちる春の雪はふれはやかて消る物なるを消かてにすれはそのさまを雪に合成してさとすゝ○こゑをたにわか魂こそかなしかるへき理なるにの心よりいふゝその君はかなしからぬ理なれとゝいふゝ○梅のはなやみにこゆれはしるくなといふ事はなかるへきにあるとそのしるきさまをさとすゝ○なかしとも思ひはさま〳〵になるへきをはてぬと定めていふゝ秋夜はなかく思ひはつへき理なれはゝ○のこりなく

俳諧

俳・諧

如蓮華道人 著

いで俳士のねふりさまさむと導師高座にのほり發願の硯をならし無上の道を説くものは如蓮華道人といふゑせ哥よみ之哥よみならは哥道の世話のみやきていらぬわさ之と世人はわらひ俳學者流ははらあしく思ふへけれと卞和は玉をいたきてなきたりしかことく俳道の魂たる所をもしらすしていたつらに句をのみ吐くことのいとをしさにだまりてはえあらぬなるへし抑俳諧といふ事その名古今集の俳諧哥よりいてそのおこりは連哥者流の人の興しそめけるよりはしまれりされは哥よみなとは俳諧はいといやしきもの之とおとしめおもふ事俳諧の道ある事を弁へさるか故之この俳諧の道を弁へぬはもと哥の道の本意をしらさるよりおこれりいといふかひなき事之又俳諧者流は俳こそ後世の風俗にかなひたる物なれ哥は耳なれぬ詞のみつかひて流行におくれたる物之と思へりこれ又哥道をしらぬ故のひか心え之その哥道をしらぬは俳道の本意をしらぬか故なりよゝに宗匠と称していかめしくひゝらきをりてふかき旨もありけにいへとも蕉翁の

骨髓をえたりとおほゆる人はいまたおほえすされともさすかに功を累たるによりてまゝ蕉翁のさまにかなへられたる句もあれと猶みなその形の似たるはかりにて開眼せぬ佛たるへしされは俳學者流の人哥道をよくまなひされは俳道の本意いつまても垢ぬけはせらるましき事之たとへは虚分よりおこれる頭痛なるを頭痛の療治斗してゐたらんか如しさるはさまく\の理屈をつけて哥道をまなはせんとする心歟とうたかふ人もあるへけれと予か心さらにさにあらぬ證をいふへしまつ俳諧は連哥よりうつり連哥は哥よりうつりたる物にして三即一一即三なりこと更發句は哥の半にて文字の數すくなき物なれは餘情のこもる所は哥にもまさりたる所あるもの之されともそのたましひとする道は三道ともにたゝ一つにて哥數寄(ママ)は哥をよみ連哥好は連哥をし俳諧好は俳諧をするまての差別之こゝの道理をよく心えて眼をひらくへき事之此主意さらにわか私意にもあらす桐一葉といふものをみしに蕉翁の曰〽俳諧はその比連哥の席みちて五七句十句もつけあひ興したる之俳諧哥を續哥にしたる也すへて連哥の式目よりやはらけ來るもの也俳諧哥のこゝろを以て俳諧の連哥といふ云々上下畧　又同書に〽たとひ座毎にかちたれはとて人をすかしあさむきくらますにあらすや和哥の神の冥慮おそるへし云々上下畧　又同書に〽下の卷に秘藏の手尓於葉ことく\くしるす俳學執心の好士和哥の神をちかひて此兩卷ゆるすへきにや云々なとあ

あら野の序　翁

柳櫻の源をあらそひ蝶鳥のおのからさまく\なる風情につきていさゝか實をそこなふものもあれはにや

コレラ俳ニ必道アルヘキ證ナリ

桐〽誠をそなへたる
か魂なり
〽有文体といふ事
〽一句の精靈ある
へからす

るをみるへしたゝ〳〵俳に道ある事は哥によりてたつね知へし

○俳の道の本意の事たゝかりそめにはかきもつくしかたき事なからそのあらましをいふへしまつこれを心えむには第一つねの言語と俳諧との差別をしるへし世のさまをみるに此差別をしりて俳諧をする人なし哥よみもこれに同し此事いかにとなれは言語にていひてすむ事ならは俳諧は別にいらぬもの之しかるを世人はたゝ言語にいひてすむへき事をは俳諧にしあるひは詞にてつくりなして道なき句のみ多し佛の狂言綺語とていましめたまへるをしらすや今のよのことくは哥も連哥も俳諧もみな狂言綺語なりわか今いふ道ある時はかつて狂言にあらす綺語にあらす古今貫通の大經典たるへしかの和哥の神の冥慮おそるへしといはれたるをこれにもよくおもひあはすへしたゝ〳〵言語を俳にかへて言行をつゝしむこれを俳の道とはいふ之哥道も亦かくのことしくはしくこゝにいひつくしかたしきかむと思ふ人は來り給へ

○蕉翁の吐句のことくならは哥よみもよみえたりといふへき場なりしかるを哥よみの俳をいやしむはおのれか道しらぬ恥をあらはすなり俳諧何かはいやしからんたゝ〳〵言を俳にかへてつゝしまむにあに天地鬼神の感動なからん天地鬼神感動すへくは人は勿論なりしかるにたゝ人にほめらるゝ事をよろこひて人のめにおもしろからんやうにとのみ心かけ天地鬼神の心をよそに

したるはすへて哥人にもあれ俳人にもあれ詞賊とやいはんすへて詞の道は言をつゝしむ爲にこそあれさなくはいかて言語の外に詞の道あらん神道には隠身をしへたまひ人丸は〽あしはらのみつほの國は神のまに言擧せぬ國とよまれ論語には古者言之不出恥躬之不逮とも老子は多言は少言にしかす少言は不言にしかすといひ佛は忍辱ををしへたまふこれらをみて詞の道なくて叶はぬ道理ならひに哥にもあれ俳にもあれ修辞家の本懐を弁へしるへし

○以上いふ所は俳道の修行なり稽古はこれと別なりすへて修行と稽古とわけて心うへしさてその稽古とはいかなる事そといふに句つくりの事なりたゝ十七字の中に無量の道義をいひとらん事はいと〳〵かたき事之かの須弥山を芥子のうちにいるゝたくひ也これをはいかにせはいひえられむといふに天尓波をくはしくする事第一なり哥も天尓波にくらくしては我よむ哥は勿論古哥の本意をもうる事あたはす俳諧は上にいふ如く哥の三十一字にいふへき事を十七字にいふ事なれはいよ〳〵天尓波にくらくしては情をのへかたく句つくりつたなくなるへき事之天尓波の肝要なる事はたとへは〽はせを　たひねしてみしやうき世のすゝはらひといふ句たひねみるうき世すゝはらひかくのことくしてはいかなる心ともしられすたゝ〽して〽し〽や〽のこれらの天尓波が蕉翁の情なり此故に天尓波にくらくしてはおもふ事いはるゝ物にあらすされとも俳士な

とはさもあるへし哥人もこれをくはしくわいためたる人世にたえてなきをやかへす〳〵天尓波はいかにも〳〵心をこめてまねひしるへし

○人のいふをきけは連哥者流に天尓波の事をいふに哥の天尓波とは別物之連哥の天尓波は哥の天尓波にてはおしかたしなといひて物〻しくいふ事いとをかしき事なり俳諧者流にもかやうなる心えちかひをいふ人きこゆこれ全体天尓波といふもの何物といふ事をしらぬか故之たゝ哥道にまけじとてかやうにはいふ之しかるに天尓波といふ物はもと哥道の持前の物にもあらすもと天地の言霊にして不思議の妙用をなすものなりされと連哥俳諧の天尓波は哥と別之といふも無理にあらぬ事は三十一字にいふへき天尓波を十七字にていふ事なれはすへて哥の如くにうちあひなと正しく用ゐては詞の取まはし出來かたけれはすへて天尓波の義を本にたてゝ或は轉し或ははふきて用ゐなれたるもの之これによりて別物と思ふはいふかひなき事之すへて何事も末はかりをとらへてはいかほとにらみつけてもその主意はえかたきもの之その本をしりてさて末をみれは首を傾くるにも及はす解そせらるゝものなりかの哥の天尓波と別物之と心えたる人いらぬ骨折するかいとをしさにその本より末に變化して用たる樣をときて衆の眠をさまさするもの之

予哥よみなるか故に蕉翁をそしるかと人思ふへしかつてさにあらす此誤は即季吟の誤之季吟の誤は貞徳か誤之それより師傳を泝つてみるにそのもとは哥人の誤なり桐一葉にたとひあやまりありとも先師の心えある事なるへしと思ひて私の見をなすへからすとありか丶る穏なる心さまなりけれは師傳のま丶をいはれしに相違なし罪は師にありて蕉翁になし

○今此てにはをとくにつけて蕉翁か桐一葉下巻に秘藏の天尓波とて神文をもてつたふへきよしか丶れたるをみるにこれは貞徳季吟なとよりつたはれるなるへししかれとも貞徳季吟なといまた天尓波の道にはいとをさなき人〻なりもろ〱の抄物なとにてそのをさなき事しるしされは此桐一葉の天尓波の名目なとまきらはしくて學ふ人まなひかたきか故に今その部類を明らかにして天尓波のすちをよく弁へられんやうにせりされと俳士の鼻祖たる蕉翁のさも秘められし昔なれは者流にては誤もなほ誤とはしらぬ事もあれは今これをくはしく論するをみるへし定家卿とたにいへは鬼神のことくおそれてむつかしき御哥はさるやうこそあらめなと思ひなすはいともいふかひなきわさ之蕉翁とてもた丶師傳のま丶をいはれたるにてすへてその比の學者は今世のことく何事もくはしからさる故なりよく〱思ひ弁ふへき之

天尓波目錄

此部立はわか父成章のあらはせる脚結抄にすかりたる之（校者註目錄ナシ）

［と］とはかり

これは〳〵とはかり花のよしの山　貞室

といふてばつかりといふ心之とはすへていつゝのととて例五ツなり〳〵といふ〳〵とみる〳〵と思ふ〳〵ときくかくのこと
き下の詞をはふきてた〳〵とばかりつかふ例なり

［哉］

我まゝをいはする花のあるし哉

哉はすへて普通の物事とはかはり我心のあたりにちかひたる事

[と]

とはすへて〱ときく〱と思ふ〱とみる〱といふ〱とするなといふ下の詞をはふきて[と]とばかりいふ心なり

アラノ　これは〱とはかり花のよしの山　貞室

コレハといふてはつかりゐるといふへきをはふきたる物之

をはすへてさらはすまじき事をさうする時につかふ詞之俗語にたゝらかノ＼とつかひてをれども皆此心ある之

アラノ我まゝをいはするはなのあるし哉　路通

コレラ我マヽハイハセヌ筈ノヿナルニソレヲイハスル心ニテをト云之

［哉］

哉はすへて我心のあたりを達へてくる物の心にせまりていはるゝ詞なり俳諧にては多くは物の名をうけて柳哉櫻哉なとゝいふ之哥にても此例ありしかれとも元來これは正例にはあらさる之すへて詞の下に（又きしき）うくすつぬふむゆるうのつきたる詞をうくるか正例之たとへは〽おもふ哉〽みる哉〽きく哉なとの如ししかるに名をうくるは即此詞の間へその物の名をはさみていふ之たとへは〽何ゝ思ふさくら哉かくのことしこれを哉の正例と心うへしさて俳諧は文字の數すくなきか故にすへて天尓波の打合をはふきあるひは轉して用うるがつねなれはみな此哉の正例とは違へるものゝやうにみゆれとも一ツもたかふ事なし即下に論するをみるへししかるに焦翁の桐一葉をみるに〽治定のかな（治定といふ事はとちらへもつかぬいひやう之聞えぬ事之治定といはゝなにの詞も皆治定也これは翁のひとり誤られたるにもあらす哥學者流の誤をつたへられたる之）〽かにかよふ哉（これは哥にもある例なりたゝ〽なをはふきたるもの之さりなからはふくはふかぬとはつかひやう別之すへて事の急なる時は詞は畧くか詞のつねの例之これらも其心得にてみれはよくわかるゝ之）〽うく哉〽しつむ哉〽現在の哉これらの名目すへてすちのたゝぬ事之哉に現在の過去のといふ心はなき事之過去の事にしていへは過去になり現在にしていへは現在となる之さて哉留不相應とて〽あはれ哉（これは上にいふ所の名の哉にてあしきとはいはれぬ事之隨分つかふへし上にうけあらは勿論なくてもうけある心にてつかへは無子細之）〽かすか哉（これは一向詞をなさぬものなれはあしきといふも理之かすかはかすかとはかりはいふましき詞之かすかなる哉といふへきもの之此ゆゑにこれはかならすつかふましき事なり）〽はるか哉（これもかすか哉と同しく語をなさぬ例なれはつかふましき例と知へし）〽おもふ哉（これをあしといふ事其意をえすこれは哉の正例なる事上にいふか如し少しも遠慮なくつかふへし翁のいはれたりとてこれは故もなき事之）〽おつる哉（これ又正例之隨分つかふへし）なと出され

たる此今細注したるか如くなにをさして不相應といはんよしなき事也〳〵かすか哉〳〵はるか哉のふたつをこそ不相應とはいふへけれ〳〵あはれ哉〳〵おもふ哉〳〵おつる哉これらを不相應といふは哉の義にくはしからす古のつかひたる例をこまかに試みぬ故の事之又うく哉とて〳〵ひかる哉〳〵みゆる哉〳〵ひらく哉此三ッうくとてあしきといふ事これ又くはしからぬ故之はしめに論するか如くもとこれ哉の正例にして名をうくるは轉法也哉の義は第一これをしらすしては得かたし元來哉の義を手にとるやうに弁へぬよりこれらもうくなとゝいふ名をつけたるもの之全体天尓波の義の本源は五十韻の義をしるにありてその意味明白たる事之志ふかゝらん人は猶くはしくまなひて今わかいふ所を得意すへしかへす〳〵もたとひ翁かいはれたりともこの正例は神代以來の正例なれはかならす〳〵蜘躊なくつかふへしもしそのつかふ人の罪となるへき事ならはその罪はわか身に蒙るへしかへす〳〵慮なくつかふへし

正例　アラノ　我まゝをいはする花のあるし哉　路通
コレラいはする哉トイフヘキ間ヘ花のあるしトハサメル物之

同　山ことにくひ物しひる。花見かな　尚白
「コヽニアルヘキ哉ヲ下ヘマハシタルモノ之

同　花のなか下戸引てくる。かいなかな　龜洞
「カナ
花ノ中ヘハ爭テモユクヘキニ下戸ノイヤガルサマヲ哉トイヘル之

畧例　アラノ　うすぐもりけたかく花の林哉　信徳

コレハケダカク花の林ガミユルヿ哉トイヘ(ママ)ヘキヲ、ハフケル之モシけたかきトアラハ正例ノ哉ナルヘショク〳〵分別シテオモヒワクヘシ

[て]

（校者註此前ニ白紙一張アリ）

てはすへて一事を持て又一事をするくさりに用うる詞なり手といふ名すなはち此心なり我思ふ心とむかふ物とをくさる爲の用ある物なれは之

アラノ　はなの山とことらまへて哥よまん　　　　最風

コレハ哥ヨムニソノトラヘ所ヲクサラントテイフ之

［に］

此には俗にデといふ心なり俳諧にてはやかてデともつねにいふ之されと桐一葉にかでなといふ事好むましきよしみえたり

アラノ　山さとにくひものしひる花見哉　　　倚白

此しは脚結抄に芝狀といはれたるし之これは天尓(ママ)にはあらす裝なり俳士はこれをも天尓波之とおもへるか故に今わけていふ

アラノ　暮さひしぱ花のうしろの鬼かはら　友五

たゝ切字といへり切字といふ事元來裝脚結の差別なき論之

此そはシャツといふ心之これは物そかなしき風そすゝしきなといふそとは用ゐやうたかへりこれは物にも人にもむかひて問ふ心之

アラノ何事そ花みる人の長刀　　　　　　　去來

[そ]

【へし】

へしはさうはなき事をそれにしていふ天尓波之

アラノ　花（ママ）の雲すこしは花（ママ）もましるへし（ツテアルテアロフ）　野水

らんと混すへからすらんはその内に思ひこみて推する詞之へしは此方からあてがふていふ詞なる差別ある之

[もなし]

もなしとて俳家にては天尓波の類につらねたりされと〳〵なしはもと裝にて〳〵もは天尓波之まして

アラノ　はなの山つねをりくぶる枝もなし　一井

手尓於葉の事　此於ノ字ハ誤ナリ天尓波ニ於ノ字ヲ用ルヿナシ

一切字の事

かな　もかな　や　し　じ　ぬ　はね字　か　けり　そ　つ　す　よ　せ　れ　へ　け　いかに

右十八字

此切字といふ事元來とちらへもつかぬ名目之天尓遠波かと思へは中に虚辭の下のはたらきたるもましれり此故に詞の道理をしらぬ人は甚まきらはしくしてよく弁へす弁へぬもことわり之こゝに十八字とて出されたる中にへかなへもかなへやへしへじへぬへはね字（これはらんけんの類ナルヘシ）へかへけりへそへつへずこれらは脚結之へよ（これも洒ぬす人よ〳〵ナトイヘルハ脚結なり混すへからす）へせへれへへへけこれらは皆装の下の變化之ゆけおせとれおもへなとの類これ之これらを下知として上られたれとこれは脚結にはあらさる之へいかにこれは挿頭之いかにが切るゝならは此たくひの挿頭切るゝ詞多くあれとこれ斗を出されたるいかゝの事之

一かな

治定と付られたり哉は治定の心はなき脚結之治定といふ名目これ又とちらへもつかぬ名目之哉斗か治定なるへきいはれなし

とはかり　アラノ　これは〱とはかり花のよしの山　貞室
哉を　我まゝをいはする花のあるし哉　路通
哉　うす曇けたかく花の林かな　信徳
て　花の山とことらまへて哥よまむ　晨風
し　暮淋し花のうしろの鬼かはら　友五
哉に　山さとに喰物しひる花見哉　尙白
そ　何事そ花みる人の長刀　去來
へしもは　花(ママ)の雲少しは花もましるへし　野水
哉　はなの中下戸引てくるかいな哉　龜洞
もなし　花の山つねをりくぶる枝もなし　一井
ぬが　みあけしが麓に成ぬ花の瀧　俊似
けり　兄弟のいろはあけけり花の時　鼠蟬(ママ)
よは　ちる花は酒ぬす人よ〱　舟泉
やに　冷汁に散てもよしや花の陰　胡及

にぞ　はつ花にたか傘そいま〱し　長虹

にけり　柴舟の花咲にけり宵の雨　卜枝

けり　をる時に成て散けり花の枝　鷗歩

や　つれたつや從弟はお(を)かし花の時　荷兮

哉　疱瘡のあとまたみゆる花見哉　傘下

や　あらけなや風車賣花の時　薄芝

哉　花に來てうつくしくなる心かな　たつ

たりに　山あひの花を夕日に見出したり　心苗

や　おもしろや理屈はなしに花の雲　越人

や　なりあひや初花よりの物わすれ　野水

けり　ひとり來て友撰ひけり花の山　冬松

哉　花鳥とこけらふきゐる尾(ママ)上哉　冬文

よ　首出して岡の花みよ蚫とり　荷兮

哉　月花もなくて酒のむひとり哉　はせを

哉　かしの木の花にかまはぬすかた哉　同

つらん　鳥籠のうきめみつらん郭公　季吟

○　目には青葉山ほとゝきす初かつほ　素堂

けり　いそかしき中に聞けりほとゝきす　釣雪

や　蠟燭の光にくしやほとゝきす　越人

や　おひし子の口まねするや時鳥　松下

○　あとやさき氣のつく野への時鳥　重五

ん　時鳥とれからきかん野の廣さ　柳風

哉　時鳥はゝかりもなき鳥かな　鼠彈

や　晴ちきる空なき行や時鳥　落梧

や　蚊屋くさき寐覺うつゝや時鳥　一髪

や　三聲ほと跡のをかしや時鳥　同

哉　時鳥十日もはやき夜舟かな　風泉

や　うれしさやねいらぬさきの郭公　杏雨

や
や
けり
哉
そ
哉
哉も
哉
○
哉
や
哉
哉
哉

あふなしや今むきてきく時鳥　傘下
くらかりや力かましきほとゝきす　同
馬と馬よはりあひけり時鳥　鈍可
哥かるたにくき人かなほとゝきす　智月
うつかりと春の心そほとゝぎす　市山
かる〳〵と笹のうへゆく月夜かな　梅舌
それかしも月みる中のひとりかな　湍水
月ひとりばひどりがちの今宵哉　一雪
雨の月とこともなしの薄あかり　越人
けうとさに少し脇むく月夜かな　昌碧
屋わたりの宵はさひしや月のかけ　市柳
をかしけにほめてなかむる月夜哉　一髪
とこ迄もみとほす月の野中哉　長虹
峠まて硯いだいて月見かな　任他

や　けり　や　や　や　や　哉　とじ　なり　や　や　哉　やし　哉

一ッ屋やいかいことみるけふの月　鵜洞

名月は夜明るきはもなかりけり　越人

名月やとしに十二はありながら　文鱗

名月やかいつきたてゝつなぐ舟　昌碧

名月やはたしてありく草の中　傘下

名月や皷のこゑと犬の聲　土水

みるものと覺えて人の月見哉　野水

むつかしと月をみる日は火もたかじ　荷兮

いつの月もあとをわすれてあはれ也　同

名月や海も思はす山もみす　去來

名月や下戸と上戸のむつましき　胡及

名月はありきもたらぬ林かな　釣雪

宵にみし橋はさひしや月のかけ　一髪

十三夜

影ふた夜たらぬほとみる月夜哉　杉風

もなし（いかに）　暮いかに月の氣もなし海の果　荷兮

哉　みる人もたしなき月の夕かな　同

○ども　舟かけていくかふれとも○海（ツモラズ）の雪　芳川

ず　何事のみたてにも似す三かの月　はせを

ん　夕月夜行燈けしてしはしみん　卜枝

や　何日とも見定めかたや宵の月　一泉

や　天川見習ふ比や月のそら　雀聲

哉　よいほとにはなして歸る月夜哉　一髪

たり　うつかりとうつふきゐたり時鳥　李桃

や　雪の日や船頭どのゝ顔の色　其角

ん（いさ）　いさゆかん雪見にころふ所まて　はせを

哉　竹の雪落てよるなく雀かな　塵交

や　かさなるや雪のある山た（只）ゝの山　加生

哉　車道雪なき冬のあしたかな　小春

けり　初雪をみてからかほをあらひけり　越人
哉　初雪に戸明ぬ留守のいほり哉　是幸
哉　ものかけのふらぬも雪のひとつ哉　松芳
たり　くらきよに物かけみたり雪の隈　二水
哉　雪ふりて馬屋にはいる雀かな　梟仙
ん　よるの雪おとさぬやうに枝をらん　除風
や　雪の日や川筋はかりほそ〲と　鷺汀
なりや　初雪やおしにきる手のきれい也　傘下
哉　雪の江の大舟よりは小舟かな　芳川
し　雪の朝から鮭わくる聲高し　冬文
や　雪の暮猶さやけしや鷹のこゑ　桂夕
や　ちら〲や淡雪かゝる酒强飯　荷兮
や　はつ雪や先草履にて隣まで　路通
し　はかられし雪の見所あり所　野水

じな
じ
や
誰（疑ノカザシ）
す
たし
哉
や
哉
哉
こそ
よ
や
ん

二日にもぬかりはせしな花の春　はせを
たれ人の手からもからし花の春　古梵
若水や几千年のつるへ縄　風鈴軒
松かさり伊勢が家買ふ人は誰　其角
うたか否連哥にあらすにし肴　文鱗
月雪のためにもしたし門の枩　去來
かさり木にならて年ふる柏かな（松ハ門ニタテラル、ニト云之）　一晶
元朝や何となけれと遲さくら　路通
元日は明すましたるかすみ哉　一笑
齒かために梅の花かむにほひ哉　如行
ふたつこそ老にはたらねとしの春　落梧
若水をうちかけてみよ雪の梅　龜洞
いせ浦や御木引やすむ今朝の春　同
ことふきの名をつけてみんやとの梅　昌碧

しか　去年の春ちいさかりしか芋頭　元廣
疑ノや　小柑子栗やひろはんまつの門　舟泉
けり　とし男千秋樂をならひけり　同
哉　山柴にうら白ましる竈かな　重五
し　松高し馬引つるゝとし男　釣雪
哉　月雪のはしめは琵琶の木とり哉　同
けり　つれて來て子にまはせけり万歳樂　一井
哉　うら白もはみちる神の馬屋哉　胡及
疑ノやん（下ニ又アリ）　見覺えんこやあら玉の年の海　長虹
哉　今朝と起て縄ふしほとく柳哉　鼠彈
や　さほ姫やふかいの面いかならん　同
や　蓬莱や舟の匠のかんなくず　湍水
ぞ　佛より神そたふとき今朝の春　とめ
疑ノや　野宮やとしの旦はいかならん（イツモ注連アル故歟）　朴什

カサシ たが　かさりにとたかおもひ出すたはら物　冬文

や　正月の魚のかしらや炭たはら　傘下

哉　けさの春さひしからさる閑哉　冬松

詠ノ や　あい〳〵に松なき門もおもしろや　柳風

哉　大服はこその青葉のにほひ哉　防川

装 まゐれ　鶯の聲きゝまゐれとし男　昌勝

けり　傘に朶(ママ)かゝりけり恵方棚　夕道

○　袖すりて松の葉ちきるけさの春　梅舌

疑ノ やん 上ニモ例アリ　たてゝみん霞やうつる大かゝみ　野水

疑ノ や　曙は春のはしめやとうふくら(ママ)カ　同

なり　初春のめてたき名なり賢魚　越人

や　初夢や濱名のはしの今のさま　同

詠ノ やし　しつやしつ御階にけふの麥厚し　荷兮

にけり　萬歳のやとを隣に明にけり　同

や　巳のとしやむかしの春のおほつかな　同

哉　我は春目かとにたつるまつ毛哉　般齋

や　我等式かやとにも來るや今朝の春　貞室

哉　わかなつむあとは木をわる畑かな　越人

哉　精出してつむともみえぬ若菜哉　野水

哉　七草をたゝきたかりてなく子哉　俊似

哉　女出て鶴たつあとのわか菜哉　小春

哉　側濡てたもとのおもき磯菜哉　藤蘿

哉　吾ぅらものこしておかぬ若菜哉　素秋

けり　石釣てつほみたる梅折しけり　玄察

裝 もとかし　鷹すゑてをるにもとかし梅の花（チタクモタカヲト云哥ノ心）　鷗歩

哉　梅の花もの氣にいらぬけしき哉　越人

ん　藪みしれもとりにをらんうめの花　落梧

哉　梅をりてあたりみまはす野中哉　一髮

ぞ　哉　や　哉　や　や　じ　（疑）哉　や　哉　哉　哉　哉　や

花もなき梅のずわいぞたのもしき　冬松
みのむしとしれつる梅のさかり哉　蕉笠
梅の木に猶やとり木やうめの花　はせを
鶯のなきそこなへるあらし哉　若風
うくひすのなくや餌ひろふ片手にも　去來
あけほのや鶯とまるはねつるべ　一桐
鶯でちいさき籔(ママ)もすてられし　一笑
鶯のこゑに脱たる頭巾哉　市柳
鶯になじみもなき(なしやトイハ、詠ナリ)や新屋しき　夢ゝ
鶯に水くみこほすあした哉　梅舌
さとかすむ夕をまつのさかり哉　野水
ゆき〳〵てほとのかはらぬ霞哉　塵交
行人の簔(ママ)をはなれぬかすみ哉　冬文
かれ芝やまたかけろふの一二寸　はせを

や
たりけり
や

かけろふや馬の眼のとろ〳〵と　傘下
水仙のみる間を春に得たりけり　路通
蝶鳥をまてるけしきや桃の枝　荷兮

十經本義

阿　われかれをすゑる　　和　われ彼をはつす

加　われかれをあつる　　羅　われ彼をゐさらす

左　われかれをそはす　　也　われ彼をもとす

多　われかれをつかす　　麻　われ彼をのかす

奈　われかれをあはす　　波　われ彼をわくる

初五經は彼か用を主とす後五經は我用を主とす

ア　物を我にすゑる
カ　物を我にあてる
サ　物を我にそはす
タ　物を我につくる
ナ　物を我にあはす

ワ　物をかれかぬける
ラ　物をかれかこもる
ヤ　物をかれかいる
マ　物をかれかはる
おさへる
ハ　物をかれか出る
しきる

各義

阿　かれ我にすわるにするにすわらぬ

伊　かれ我にすわらぬ現にすわりたる過をてらす

宇

衣　かれ我にすわらぬ現をすわるへき來にうつす

於　かれ我にすわらぬにするにすわる

外ノ外ナリ

阿　むかふ　すわる

加　あたる

左　そはふ*

多　持あふ

南　思あふ

外ノ内ナリ

内ノ内之

和　はまる　「あらぬ所へすゑる

良　こもる

也　引こむ

末　とめる

波　かゝへる

内ノ外ナリ

*（校者註）「そはす」ノ「す」ヲ消シテ傍ニ「ふ」ト訂ス。「は」モケスベキモノニシテ「そふ」ナルベシ。

經緯各義

阿經五字

阿　私にするゑむとするものを公にするゑる

以　現にするゑむとするものを過にするゑる

有　公にするゑんとするものゝ私にするゑんとする

衣　現にするゑんとするものを來にするゑる

於　公にするゑんとするものを私にするゑる

和經五字

和

爲

雲

惠

於

外界之五音

- 外界中ノ外ナリ
  - 阿　はりあふ
  - 加　あたる
  - 左　そふ
  - 太　つく
  - 南　思合ふ
- 外界中ノ内ナリ

內界之五音

- 內界中ノ內ナリ
  - 和　こもる
  - 良　はまる
  - 也　引こむ
  - 麻　もつ
  - 波　かゝへる
- 內界中ノ外ナリ

ア　はめすしてくみあふ
カ　こめすしてあたる
サ　引こますしてそふ
タ　もたすしてつく
ナ　かゝへすして思ひあふ

ワ　くみあはぬをはめる
ラ　あたらぬをこめる
ヤ　そはぬを引こむ
マ　つかぬをもつ
ハ　思あはぬをかゝへる

經緯各義

○阿緯十声

阿　私にすゑるものを公にすゑる
加　私にあてるものを公にあてる
左　私にそはすにするものを公にそはす
太　私に持あはすにする物を公に持あはす
南　私に思あはすにする物を公に思あはす
波　私にかゝへるにする物を公にかゝへる
麻　私にもつにする物を公にもつ
也　私に引こむにするものを公に引こむ
良　私にはまるにするものが公にはまる
和　私にこもるにするものが公にこもる

○伊緯五声

伊　現にすゑるにするものを過にすゑる
伎　現にあてるにするものを過にあてる
之　現にそはすにするものを過にそはす
知　現に持あはすにするものを過に持あはす
尓　現に思あはすにするものを過に思あはす
比　現にかゝへるにするものを過にかゝへる
美　現にもつにするものを過にもつ
以　現に引こむにするものを過に引こむ
里　用にはまるにするものが心にはまる
爲　用にこもるにするものが心にこもる

○宇緯五聲

宇

九

須

通奴不牟遊留雲

○衣緯十声

衣　現によせるにするものが來による
計　現にあてるにするものが來にあたる
世　現にそはすにするものが來にそふ
氏　現に持あふにするものが來に持あふ
年　現に思あふにするものが來に思あふ
遍　現にかゝへるにするものが來にかゝへる
女　現にもつにするものが來にもつ

盈　現に引こむにするものが來に引こむ
例　現にはまるにするものが來にはまる
惠　現にこもるにするものが來にこもる

○於緯十壱

於　公にするゑるにするものを私にするゑる
古　公にあてるにするものを私にあてる
曾　公にそはすにするものを私にそはす
止　公に持あはすにする物を私に持あはす
乃　公に思あはすにする物を私に思あはす
保　公にかゝへるにするものを私にかゝへる
毛　公にもつにするものを私にもつ
与　公に引こむにするものを私に引こむ
呂　公にこめるにするものを私にこめる
袁　公にはめるにするものを私にはめる

十經本義

平安　富士谷成元　著

阿　はめすしてもちあふ
加　こめすしてあたる
左　引こますしてそふ
多　もたすしてつく
奈　かゝへすして思あふ
波　思あはぬをかゝへる
麻　つかぬをもつ
也　そはぬを引こむ
良　あたらぬをこめる
和　持あはぬをはめる

五緯本義

阿　以　宇　衣　於

五十音各義

阿經

阿　私をくみあはす物に公がくみあふ
以　現をくみあはす物に過がくみあふ
有　現公にくみあふ物が現私にくみあふになる
衣　來にくみあふ物に現をくみあはす
於　公にくみあふ物に私をくみあはす

加經

加　私をあてる物に公があたる
伎　現をあてる物に過があたる
九　現公にあたる物か現私にあたるになる
計　來にあたる物に現をあてる
古　公にあたるものに私をあてる

は　私をかゝへるにする物を（が）公がかゝへる

ひ

ふ

へ　來をかゝへるにする物を現（ママ）

ほ　公をかゝへるにする物を私にかゝへる

阿経

あ　私にくみあはすものが公にくみあふ
い　現にくみあはすものが過にくみあふ
う
え　現にくみあふものを來にくみあはす
お　公にくみあふものを私にくみあはす

加経

か　私にあたらすものが公にあたる
き　現にあたらすものが過にあたる
く
け　現にあたる物を來にあたらす
こ　公にあたる物を私にあたらす

左経

さ　私にそはす物が公にそふ

し　現にそはす物が過にそふ

す

せ　現にそふものを來にそはす

そ　公にそふものを私にそはす

多經

た　私につかするものが公につく

ち　現につかするものが過につく

つ

て　現につくものを來につかす

と　公につくものを私につかす

奈經

な　私に思あはするものが公に思ひあふ

に　現に思あはするものが過に思ひあふ

ぬ

ね　現に思あふものを來に思ひあはす
の　公に思あふものを私に思ひあはす

波　經

は　私をかゝへさする物が公をかゝへる
ひ　現をかゝへさする物が過をかゝへる
ふ
へ　現をかゝへるものに來をかゝへさする
ほ　公をかゝへるものに私をかゝへさする

麻　經

ま　私をもたするものが公をもつ
み　現をもたするものが過をもつ
む
め　現をもつものに來をもたす
も　公をもつものに私をもたす

也經

や　私を引こまするものが公を引こむ

い　現を引こまするものが過を引こむ

ゆゝ

え　現を引こむものに來を引こます

よ　公を引こむものに私を引こます

良經

ら　私をこもらすものが公をこめる

り　現をこめさするものが過をこめる

る

れ　現をこめたるものに來をこめる

ろ　公をこめたるものに私をこめる

和經

わ　私をはめたるものが公をはめる

ゐ　現をはめたるものが過をはめる

う

ゑ　現をはめたるものに來をはめる

を　公をはめたるものに私をはめる

經緯各義

阿經

あ　私の外に持あふ物が公の外に持あふ

伊　現の外に持あふ物が過の外に持あふ

う

え　現の外に持あふ物を來の外に持あふ

お　公を外に持あふ物を私の外に持あふ

スケル　タメル　ショラス　ツヽム　コムル　ハメル　オホフ　カヽヘル　オサヘル　ツキコム　引コム

手ニアタラヌ　手ニアタル　ミコム　ミコス　ハラム　カコフ　フカクスル　底ニスル

オトシツケル　シツメル　○

外等　あ　外て[1]　にらます　　内等　わ　しつむる　内で持あふ　からになる　ゐさす　｜

外爻　か　外であてる　はけます　　内爻　ら　すます　内であたる　とりおく　はらむ　しつむる　｜○｜

さ　表にそはす　　や　裏にそふ　しさらす　ひづこむ　｜）｜

外文　た　表にひづ[2]　おす　すからす　ねはらす　　内文　ま　裏に　ひづつく　おす　つゝむ　おさへる　すはらむ　遂さ　｜（｜

外物　な　しゆます　　内物　は　裏に思あふ　かゝへる　はらす　（

（外へ出ントスル物之　東方の　地上より地中にむかひての機之

スヘテ物ノ形の動靜にあらす[3]　神の動靜之

名は皆神につくなり

（内ヨリ出ントスル物之　西方の　地上より地中にむかひての用なり

名は機にあり

（校者註）

1. 「外て持あふ」トシ「持あふ」ヲ消ス、「外て」ハ消スベキモノ。
2. 「表にひづつく」トシ「つく」ヲ消ス、「表にひづ」ハ不完句。
3. 右二行左一行ハ書込ニテ、コノ一行ハ外・内ノ兩者ニカヽル。

俳諧天尓波抄

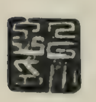
俳諧天爾波抄序

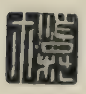
夫聲者皆其物形理之所相摩而生者也形理之所相摩故又有物與生焉聲物是也民之言語者物感于心而意萠焉意所結者亦物也是以備聲物之所類以貌其意是其言語之所由發也古之言語其用聲物精與其意象適矣是以其言簡而旨深矣今之言語不論適否而逐俗習其聲之所用率皆不能與物切也補苴以周之故其言繁而旨亦淺矣是古今之別夷夏之所同者也是故晩世之以其辭倣古者率亦皆準厚於薄儕賢於庸甚者訛白爲黑譬猶力微而運重不取敗於其旨者鮮矣亡弟成章用力於倭歌思救世之流弊其所甞著有挿頭脚結二抄其子成元纂先緒而益又宣明其義也以夫俳歌亦出於倭歌之支流故間甞廣其先達之良規而以辨今副墨之訛習著之爲俳諧天爾波抄亦猶以演乃

父之所志也書成乞予言其事因爲題

文化三年丙寅孟冬既望

皆川愿書





俳諧天爾波抄

九例

大人。もと神道歌道もはらなるに。今此俳諧の天尓波を弁ぜらるゝ事。有國が。大人のいとまをうかゞひたるによれる事なれども。大人つねに曰。哥よみは連哥俳諧をいやしみ。連哥者流は。哥よりもさき也とひゝらき。俳諧者流は。哥連哥ともに流行におくれたりとす。これ文人のつねとはいへども。一家の内にして兄弟たがひに諍ふがごとく。いとも〳〵おろかなる事なり。たゞ連哥は哥をば二人してよむ也。哥は連哥を一人してする也。俳諧は哥連哥を。今のよの言をもてよむにて。いづれかひとしからざらん。其祖たる人は。さらに〳〵さやうのおろかなる心はもたれざりつらんを。後世となりて。この弊さかりに成ゆき。三道ともに活計の媒と成たるより。偏固なる説ども出來て。つひに人をまどはすにいたれりとて。大人かねて連哥をも俳諧をも。いとまある時は心を入れてもてあそばれぬ。しかるに連哥俳諧の者流。おのが道を貴からせんとて。天尓波も。哥によむとは別の傳ありなどいひ。先輩の書おけるもの。いひおける言どもをくはしくも吟味せずして。心を惑はす事歎息に堪ざる事なり。

なにとぞして此弊をのぞかまほしけれど。いとまなきことそうらめしけれと。物語のついでにいはれけるにすがりて。つひに此冊子はなりぬる也。大人の先考。國學にふかく心を用ひて。つひに詞を三具にわかち給へり。いはゆる挿頭（カザシ）抄装（ヨソヒ）抄脚結（アユヒ）抄。これが抄なり（脚結とは。世にいふてにはの事なり）その部分などのやう。まことに古今の規範にして。他人の目のをよびがたき所也。この脚結抄を時々とひきゝしついでに。哥に用ふると。俳諧に用ふるとの異同あることをとひしに。大人のいはく。げに連哥は。この脚結抄にておのつからその用たりぬべし。俳諧は。もとより俗語にして。ふるきてには。俗のてにはを。交へ用ふるものなれば。俳諧によりててにはの義をさとさば。俳諧者流の人の眼をひらかんのみならず。この脚結抄をみむにもたよりあるべしと。大人が心のおもむきたりしにのりて。即あゆひ抄の部立例立にしたがひて。七部集中の句をあてゝ。その弁をそのまゝしるしたる也。今このいとなみ。哥よみには無用の事とみん人もあるべけれど。この敝（ママ）をのぞきて。四海までも兄弟たらんにいたらんは。よろこばしからずや

大人の。哥を教ふる事。神道にもとづきて。言霊をむねとす。これ千歳湮没せし事なれば。今はたゞ他域のことをいふがごとくに思ひてこれを味はひしる人すくなし。これにつけても蕉翁の句。ならびに門弟子の句ども。その言霊を時々かたらる。これ大人が私に俳諧をも引つけていふにあらぬ證をみよ

とて。晋子がかゝれたる猿蓑集の序をとり出て示されぬ。げにつねにもみる物なれど。たゞおほよそに。詞をたくみにしてかける物とのみ見つるに。大人が弁をきくに。はじめて俳諧の言靈をば。はやく晋子が述おかれしなりけりとはしりぬ。その序に云。〽幻術の第一として。その句に魂の入らざれば。夢に夢みるに似たるべし。中略たゞ俳諧に魂のいりたらんにこそとて。我翁行脚の比。伊賀越しける山中にて。猿に小蓑をきせて。俳諧のたましひを入れ給ひければ。たちまち斷腸の思ひを叫びけん。あたにおそるべき幻術なり。云〻とかゝれしは。即言靈の事にて。柿本人麻呂の。〽言だまのたすくる國とよまれ。山上憶良〽ことだまのさきはふ國ともよまれし哥萬葉にありのごとく。その句に入りたる靈の。不測の感動をなすことをば。こゝに幻術とは書なされたるなり。これをもてみれば。蕉門のをしへ。俳諧はこの入魂にある事明らかなれば。すべて詠哥の本意に。毫もたがふ事なきものゝ。ことに天尓波は。この魂の用をつかさどる物なれば。これを明らかにせざればいかでか此幻術をうべき。本意すら詠哥にひとしき教なるを。詞のならひのいかでか哥とかはるべき。此俳諧入魂のことをよく心えて。切にこの抄をよむべし。入魂のことは。大人のかゝれたる言靈弁あり。これをみてさとるべし。猶よの晋子が。夢にゆめみるに似たりといはれしは。魂なき發句は。一句も發句とはいひがたく。百萬句もいたづらものゝといふ心ゝとの論。猿蓑集序の注にくはしくかきおかれたり

支考が評じたる百韻に曰へとばれぬ蛇籠廻る遠さよ評云蛇籠をまはる川のとほさよとつくるべしとあり。これ即まはるといひ遠さといふに。とばれぬところなるべしとは。見る人より心をいれてみてこそ魂はあれ。そのよの人〻はこゝをのみ眼としつるにこそ。晋子がいはゆる幻術の上手下手こゝにあるべき之。後學よく思ふべし。されどこの入魂に二筋あり。輕重これ之。これらは輕き方之。重きとは人事にあづかる事を云なり。この弁も。猿蓑の序にみゆ

此抄をつくれる事。蕉翁も泉下に愁眉をひらかるべしとおぼゆるは。すべて。今の俳諧者流。俳諧はたゞ俗語をもていふものなれば。さのみ古語をふかくまなぶにをよばずとのみおもへり。されど桐一葉に。俗語のいやしきことをいはれ。又この支考が百韻の評にもへ月の形(ナリ)次第に細き寒さかなといふ句。次第にといふ詞重しと評ぜられしも。細くなりゆくとこそいはめとぞおもはれけめ。これらをもてみるに雅俗用ふる所句意によるべし。この句も。次第にといへば。夜をかさねゆく事活ざるが故に評じたる事。ひとへに幻術の効うすきを思はれし也。古言をまなぶ事いらぬ事となおもひそ。一言をしれば百言をこむる事あるもの之。まして幻術の効にさへかゝはるぞかし。俗にして魂あらば俗たるべし。雅にしてたましひあらば雅たるべし。たゞ的とする所は。晋子がいはゆる入寛のひとつたるべき也。大人これをさとさむとて。七部の集芭蕉句集ども。そのたましひをとかれたるあり。今つぎ〳〵

によにひろめて。蕉家の窗燈のひかりをかゝぐべし

世に切字といふ事。まことの童蒙をみちびくためこそあれ。元來いといふかひなき事之。そのきれ字といふ中には。てにはもあり。又てにはならぬもありて。法としがたき事ども也。されど多くはてにはなれば。別にこれが切字とてしるにも及ばず。たゞ此抄をよくみて。てにはだによくはたらかば。おのづから切字の用たりぬべし。切字としてをしふる事。童蒙のためとはいへども。その敵(ママ)あり。その故は。初學のもの。きれ字はなくて是非叶はぬ事とおもふより。しひて切字をたち入るゝ時は。かへりて心ならぬ詞も出來るものにて。後にいたりてもそのくせやみがたきなり。たゞ〳〵。句のきるゝといふは。一句の心の首尾する事をいふなればゆめ〳〵。文字詞など。かたちにかゝはりてきるゝにあらず。古人もしかあればこそ。いはゆる切字と称するものなき句。あげてかぞへがたし。今これをさとさむために。七部集中。きれ字なき句どもをあぐ

荒野　さま〳〵の過しをおもふ年の暮　除風

同　としのくれ杼の実ひとつころ〳〵と　荷兮

猿蓑　欄干に夜ちる花のたちすがた　羽紅

同　たびまくら鹿のつきあふ軒の下　十里

同　五羽六羽庵とりまはすかんこ鳥　元志

同　梅わかなまりこの宿のとろゝ汁　芭蕉

同　にはとりの聲も聞ゆる山ざくら　尙白

同　有明のはつ〳〵にさく遲ざくら　史邦

同　起〳〵の心うごかすかきつばた　仙化

續猿蓑　初しぐれ小鍋の芋の煮加減　馬莧

同　田植哥まてなる顏のうたひ出し　重行

同　ぬけがらにならびて死る秋の蟬　丈草

同　はれやかに床おきなほす花の春　一鷺

同　梅さくら中をたるますもゝの花　水鷗

同　ふみ倒すなりに花さく土大根　乃龍

炭俵　年のくれたがひにこすき錢づかひ　野坡

これらの外。猶多けれどもらしつ。おほくはみな。天尓波をはぶきたるものなれば。さきにもいふがごとく。切字とてしるは敵(ママ)あり。たゞこの抄をよくまなびしるべきなり

この抄もと。天尓波をむねとする事なれば。發句附句をえらはず。例をもてのせたり。そのうち。前句のうつりにて。天尓波の用切なるは。前句をあげてこれを弁ず。無用なるはこれをはぶけり。猶本書をひらきみて。そのてにはのやうをもみるべき也

こゝに正例變例畧例をいふ事。その句の多少にてこれを定む。ならびに。古歌の例。あゆひ抄にくはしく例をたてられたるによりていふ也。てにはをまなばむには。まづ正例をしりて後。變例畧例をもしるべしとぞ。此ついでに大人の曰。たとへば。頭巾はかしらをつゝむ物なりとしりたるうへは。袱紗にもつかふべし。芭蕉翁はいふもさら也。門弟子の句どもをみるに。後世の俳諧者流のごとく。まづ古哥のさまをもみしらず。 俳諧は俗言の事なればなどおもふがごとき人は。 一人もあらざりしとみゆる事。その句どもに。古言をよくつかひこなされたるにて明らかなりと。今こゝにいふに及ばず。奥に句〻をあげたる中に。その弁こゝにをよべる所あるをもてしるべし

大人曰。哥よみすら。わが亡父まで。てにはをあきらめたる人。古よりきこえず。まして俗語をむねとする俳諧者流。こゝに心を用ひぬもことわりなる事なれども。蕉翁をはじめ。門弟子の。かばかりふかくまなびしりたりしをみて。おの〳〵恥て。奮激あらまほしき事なりとぞ。有國がこゝろざしひとへにこゝにあり。はじめにいふがごとく。哥よみ連哥俳諧の者流。たがひにいやしめあふがゆゑに。たと

ひ弁じてもそのたゞしきをうべからす。今この大人の。おのが道をことにしながら。かばかりせちにこれを論ぜられたる。まことに蕉翁の腸をみるべき梯なりかし

文化三年丙寅夏日　　浦井有國識

目錄

五屬第一

詠屬、や　よ　な

かな　も

疑屬　か　や

願屬　ばや　もがな

誂屬　よ　や　ね

なん

禁屬　な　な何そ

十九家、第二

會家　ぞ　こそ

乎家　を　ものを

波家　は　ば

毛家　も　み
仁家　に　にて
止家　と　ど　てふ
　　　とも　ども
志家　し
乃家　の　が
邊家　へ
良家　ら
能美家　のみ　ばかり　まで
陀尓家　だに　すら　さへ
余利家　より　から　ゆゑ
那牟家　なん
碁登家　ごと
毛天家　もて　して

加保家　がほ

那加良家　ながら

加天良家　がてら

六倫第三

可倫　べし

不倫　ず　ぬ　て

なし

將倫　ん　め　まし

らん　らし

有倫　あり　けれ　けん

たり　なり

去倫　ぬ　に

來倫　き　けり　けん

く

十二身第四

氏身　て　つ　つゝ

之身　し　しか

咩利身　めり

那利身　なり

由久身　ゆく

阿不身　あふ

也留身　やる

加奴身　かぬ

被身　る　らる

令身　す　む

爲身　す

如身　ごと

八隊第五

美隊　　　　　　　　みさ
久隊　　　　　　　　く
介隊　　　　　　　　け
加之隊　　　　　　　かし
奈倍隊　　　　　　　なへ
母乃隊　　　　　　　もの
八多隊　　　　　　　はた
加天隊　　　　　　　がて

以上

右の部分。わが父成章のあゆひ抄の部分にして。てにはの種姓をくはしくみわけて。屬家倫身隊とす。すべてかたちある物は部をわくる事やすし。無形の物いとかたきが中に。てにははことにとらふる所もなき物なるを。かばかり筋をたつる事。まことにいと〳〵かたきわざなり。哥よみも猶くはしくはしらぬ人多し。もと一首の哥一句の連俳も。てにはばかり活物にして。その餘の

詞は皆死物なれば。これをわきまへでは。すべて活地はふむべからず。たゞこれわが歎息とする所なり。くはしくは脚結抄にのべられたれば。今はそのいひのこされたる所を補ふ之。されば脚結抄を本とし此抄を末としてみば。たがひに思ひうる所その益あるべし。これ哥道俳道たがひに光をかはせとてなり。連哥は此ふたつの間なればおのづから言外に心あるべき之とかたらる

俳諧天尓波鈔巻之一

北邉大人口授　　浦井有國　筆受

○五屬　コノ屬家倫身隊ト五門ニワケタルハ。脚結抄ノ大規模ニシテ。古來人ノ弁ゼザル所也。委クハ抄ニアリ

○詠屬上

詠とは世にいふ歎息なり。凡詞は歎息よりおこる物なれども。こと更歎息をむねとする詞を一屬とはなしたる也

[や]　惣じてやといふ心は。内のもやうの。他をそはせむとすれどあたはざる事を思ひ入るゝ天尓波也。そのあたはぬ所あるが故に歎息の詞とはなる也。くはしくわくれば四例あり。されどたゞつかひ方のかはるのみにて。心はたがふ事なき也。つかひ方のかはりゆくは。上下の事がらのかはるにひかるれば也。此道理は。やの字にかぎる事にあらす。すべての天尓波。みな此心をもて心うべし　疑のやハコノ屬ニアラズ。別ニ下ニ疑ノ屬アルニ出セリ

○第一例　冠のやト云

此例哥にてはへ大はらやをしほの山古今へみまさかやくめのさら山同上へかづらきやくめぢのはし後撰へ高嶋やみほの杣山拾遺　かやうなるを正例とす

春日　さゝなみや三井の末寺の跡とりに　旦藁

これは前句へ力の筋を繼し中の子野水　この力の筋といふより。三井寺をつけたるもの也サヽナミハ其アタリノ地名ナリ。漣漪ノ亊ニハアラザルナリ。日本紀ニ證アリ　これらは。さゝなみの地の内に三井寺をおきて。他の寺の循ぜぬよしを。おもひこまする心なり。三井寺の衆徒。やゝもすれば干戈をふるひしが故に。他の寺のつきそはぬ所とはなる也。この心をいはずして。やの字にこめたる也。おほくはかやうのやは。のといふべきをば。やといひしもの也。しからばのといはんがよく聞ゆべきに。やとしもいふは。心ひとしからねば之。たとへばこれを。さゝなみの三井といふ時は。たゞ。さゝなみにある三井寺といふ心ばかりに成て。内の。つきそひがたきもやうを思ひこむ心はかゝらぬ也としるべし。されば此やをつかはむには。なに事にもあれ。その物に領分をもたせて。他のものとは。ひとかは(皮)あちらの物になしていふ時の用之と心えてつかふべし。これ他の物と等類しがたきをさとす爲なり。古人。天尓波をつかひたる。麁畧ならぬこと。此ひとつにても思ふべき之

冬日　岡嵜や矢矧のはしの長きかな　杜國

前句　眞昼の馬のねふたがほなり　野水　馬サヘコノ橋ノ長キニ退屈シタル心ニ見テ。即人ノ心ヲ活カシタル附ザマナリ。コレ猿蓑ノ序ニ。晋子ガ。入魂トイヘル所ノツケヤウナリ。委シクハソノ序ノ注ニイヘリ

猿蓑　文月や六日もつねの夜には似ず　芭蕉

これらいづれも正例なり。この文月やの句は。地名ならねど。文月の六日といふべきをやといひし句なれば。同じ例なりと知るへし○これより轉して。やの字の下をば。上とはつゞかぬ事をもよめり。〽あふ坂や梢のはな新古今〽むさし野やゆけども秋の同上〽松しまやしほくむ蜑同上などいふこれなり

猿蓑　廣澤やひとりしぐるゝ沼太郎　史邦

同　松しまや鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

炭俵　おほはらや蝶の出てまふ朧月　丈草

同　近江路やすがひにたてる鹿の長　土芳

同　松かげや生（イケ）舟橋に江の月見　里東

同　はえ山や人もすさめぬ生（ナマ）ぐるみ　小鯤

春日　古池やかはづとびこむ水の音　芭蕉

これら此例なり。この〽松陰や〽はえ山や〽古池やの三句は。地名にはあらねど。たゞ同じ例之。

いづれも上にいふがごとく。やは。他のもの丶つきそひがたき心をいふ也。この〽古池の句。後世此やをよく弁へぬが故に。或は悟道の句なりなどもいひ。或はさびしみなど。あらぬ事どもをかたはらいたくいひて。いまだ翁の肺肝をさせるものなし。是は。古の字に眼をつくべし。これ新の字の反(ウラ)にて。古池は。新池にたがひて。水草萍など生みちたるを魂とす。その萍などふかくおひたる中へ。蛙のとびこむ音は。こと〳〵しからず。いふにいはれぬよきはまりぐはひなる事。或人。古き池へ蛙のとび入りしをみしに。音もせぬほどなりしと語りき　新池のをよばさる所なるを感歎せられし心なり。この句は必。世人なに事をもよく容(イ)る丶事あたはずして。あはひうるはしからずめざましきありさま。ひとへにもの丶理をよく心えぬ新池なる事を諫まほしさに。あはれ。萍生みち。ふるび神さびて。何事にもよく馴來れる古池のごとくあれかしとの心なりとはおぼしき之

○さてまた。此例より又轉じて。やより上をば物にしてもいへり。哥にも〽さむしろやまつよの秋(新古今)〽ゆふしでやしげき木間(後拾遺)〽道しばやおどろの髪(同上)などよめるより。連俳にはおほくはこの例なり。連俳にては。正例よりも此例なるをむねとする事。さらにこのみての事にあらず。やむことをえざる勢によれり。その故といふは。哥は。もじ數おほくして。いかなる事をも正しくいはるれども。連俳は。字數すくなければ。いかにもして。ひとつの天尓波に。多くの心をこ

もらせ。詞をはぶかざれば。句をなしがたきが故に。此轉例を正例のごとくつかふ也。後のよの人。この故をわきまへず。歌の例とはたがへる事もあるやうに。おもひもいひもするはいたく誤れり

瓢　曉道やなはしろ時の角大師　正秀

荒野員外　きさらぎや晒を買ひに夜をこめて　冬文

同　夏の日やみるまに泥のてりつけて　荷兮

同　遠淺や浪にしめさす蜊とり　龜洞

猿蓑　木からしや頰腫いたむ人のかほ　芭蕉

同　下京や雪つむうへのよるの雨　凡兆

同　髮剃や一夜にさびて五月雨　同

同　日の道や葵かたふく五月雨　芭蕉

炭俵　たちばなや定家机のあり所　杉風

同　竹の子や兒の齒ぐきのうつくしき　嵐雪

同　名月や椽とりまはす黍の虛（カラ）　去來

同　朝がほやひるは錠おろす門の垣　芭蕉

同　秋かぜやなすびの數のあらはるゝ　木白

同　寒菊や粉糠のかゝる臼のはた　芭蕉

同　寐心や巨燵ぶとんのさめぬうち　其角

同　日のかげやごもくの上の親雀　珍碩

同　山ぶきや宇治の焙炉のにほふ時　芭蕉

同　螢火やふきとばされて嶋の闇　去來

同　柴の戸や蕎麥ぬすまれて歌をよむ　史邦

同　なゝ草やあとにうかるゝ朝烏　其角

同　はつ露や猿のふす芝の起あがり　去來

同　闇のよや巣をまどはしてなく千鳥　芭蕉

同　振舞や下座になほる去年の雛　去來

同　あさ露や鬱金ばたけの秋の風　凡兆

同　螢見や船頭酔ておぼつかな　芭蕉

同　目の下や手あらふほどに海涼し　市隱

同　小坊主や松にかくれて山ざくら　其角

東叡山ニアソビテ

續猿蓑　石ぶしや裏門あけてゆふすゞみ　牡年

同　栗ぬかや庭にかたよるけさの秋　露川

同　さみだれや蠶わづらふ桑の畑　芭蕉

同　菊の香や庭にきれたる履の音　同

同　喰ものや門うりありく冬の月　里圃

同　ふくるよや稲こく家のわらひ聲　万乎

同　枩の葉やほそきにも似ず秋の声　風國

同　食時やかならず下手の鉢叩　路草

同　松茸やしらぬ木葉のへばりつく　芭蕉

同　元日や置所なき猫の五器　竹戸

炭俵　ひるがほや雨ふりたらぬ花のかほ　智月

同　世中や年貢ばたけの芥子の花　里東

同　うぐひすや門はたま〱豆腐賣　野坡

同　鶯や竹の子藪に老をなく　芭蕉

同　うの花やくらき柳のをよびこし　同

同　さみだれや傘につけたる小人形　其角

續猿蓑　片壁や雪ふりかゝるすさ俵　圃吟

同　のこる蚊やわすれ時出る秋の雨　臼友

同　柴うりや出て時雨のいくめぐり　闇指

同　こがらしや背中ふかるゝ牛の聲　風斤

同　草の戸や暑さを月にとりかへす　我峯

同　柚の色や起あがりたる菊の露　其角

同　ひとつ葉やひと葉〱のけさの霜　支考

同　蜻蛉やなにの味ある竿のさき　探丸

同　はつ霜や犬の土かく爪のあと　小(北)魮

同　いな妻やかほの所がすゝきの穂　芭蕉

同　月かげや海の音きく長廊下　牧童

同　蔦の葉やのこらず動く秋の風　荷兮

同　暑き日や扇をかざす手のほそり　印苔

同　籠の目や潮こぼるゝはつ鰹　葉拾

同　はつ春やとしは若狹の白比丘尼　前川

炭俵　青雲や舟ながしやるほとゝぎす　素龍（ママ）

同　花もりや白きかしらを突あはせ　去來

同　麥畑や出ぬけても猶麥の中　野坡

同　あさがほや日傭出てゆく跡の垣　利合

續猿蓑　うぐひすや柳のうしろ藪のまへ　芭蕉

同　藪嶋や穂麥にとゞく藤の花　荊口

同　近道や木の股くゞる花の山　洞木

同　萬歳や左右にひらいて松の陰　去來

同　出かはりやあはれすゝむる奉加帳　許六

同　夏のよやくづれて明し冷し物　芭蕉

同　世の業や鬢はあれども若夷　山蜂

同　二の膳やさくら吹こむ鯛の鼻　子珊

炭俵　たなばたやふりかはりたる天川　嵐雪

同　こうろぎや箸で追やる膳のうへ　孤屋

同　名月や誰ふき起す森の鳩　洒堂

同　さくら木や菰はりまはす冬搆(ママ)　支梁

これらは詠のやなりとは明らかなる句ども也。また句によりては。疑ともみえ。詠ともみゆる句もある事之。後世今世の人。此詠疑などの例の。かやうにわかれある事をくはしく弁へざるが故に。たゞすゞろにやといひて。詠か疑か。自身にもしらざるが多し。今こゝにいふは。それらのたぐひをあかさむが爲なり。もとよりやもかも。詠と疑との二様につかふ音なる事。下のかなの條下にいふがごとく。上古は。かな詠をも。かも疑をも。かよはしてかもとのみいひけるをもてしろ

べし。この故に。古人の句にも。詠とも疑ともみゆる句はあるなり

猿蓑　たちさわぐ今や紀の鴈いせの鴈　沢雉

同　青柳のしだれや鯉のすみ所　一咲(ママ)

炭俵　木がくれて茶摘もきくや時鳥　芭蕉

續猿蓑　霄(霽)の雨しるや土筆の長短　闇指

同　門砂やまきて師走のあらひ髪　里東

千子ガウセケル寸

猿蓑　なき人の小袖もいまや土用干　芭蕉

荒野　あけぼのは春のはじめや胴ぶくら　野水

かやうの句ども。天尓波を弁へざる人は。かならず詠のやかと思ふべし。これらはいづれも。下にらんけんならんなるらんなど。さま〴〵のやのうけ詞をはぶける物にて。いづれも疑のやゝ。よくこの差別をしりて句を吐べし

○また物の名ならねど。猶この例なるあり。哥にも〽時鳥なくやさ月 古今 〽夕つくよさすや岡べ 同上 などよめり。これは。第二例の状のやに似たれども。状のやは。〽めづらしや〽おもしろやな

ど。つねにもいふ詞のごとくいふ例にて。これにはたがへり。されば畢竟。此まへの例の。〽のこる蚊や〽ゆく年やなどいふをば。倒になして。〽年ゆくや〽蚊のこるやといはんがごとくなれば。たゞ同じ例なる事を知るべし。されどもかく倒になるは。たとへば此下にひける句の。〽梅ちるやといふは。〽ちる梅やといふとは。その心大にたがへり。〽ちる梅やといはゞ。散るといふことを体になしていふ之。〽梅ちるやといはゞ。ちるを用にしていふがたがへり。このたがひめばかりにて。つかひやうは上の例と同じ事之

句集　ほとゝぎすなくや五尺のあやめ艸　芭蕉

炭俵　梅ちるや糸の光の日のにほひ　土芳

猿蓑　雪ちるや穂やの薄の苅のこし　芭蕉

また雪梅など。上に物のなくても。此例なるあり。これは。詞ながらも。そのはたらきたる詞をうくるなれば。同例なりとしるべし。下の狀のやにまぎらすべからず

荒野員外　段〻やをしほ大原嵯峨の花　許六

荒野　うれしさやねいらぬさきのほとゝぎす　杏雨

同　つれだつや従弟はをかし花の時　荷兮

續猿蓑　をり〳〵や雨戸にさはる荻の聲　雪芝

同　自由さや月を追行置巨燵　洞木

同　みえすくや子持ひらめの薄氷　岱水

同　涼しさや竹握りゆく藪づたひ　半殘

悼少年

同　かなしさや麻木の箸もをとな並(ミ)　惟然

同　ゆきつくや蛙の居る石の直(ロク)　風睡

炭俵　すゞしさや浮洲のうへのざこくらべ　去來

春日　春めくや人さま〴〵の伊勢參り　荷兮

荒野　おもしろや理屈はなしに花の雲　越人

同　おどろくや門もてありく施餓鬼棚　荷兮

同　我等式が宿にも來るや今朝の春　貞室

これらみなおなじ例なり

○また右にあげたる例ふたつの。初五もじならでも。や―といへる句もおほし。これ猶心得まへに

同じ

猿蓑　住つかぬ旅のこゝろや置巨燵　芭蕉

炭俵　悔みいふ人のとぎれやきり／＼す　丈草

荒野　うめの木に猶やどり木や梅の花　芭蕉

續猿蓑　椽にねる情や梅に小豆粥　支考

炭俵　鹿のふむあとやすゞりの躬恒形　素龍

荒野　うぐひすのなくや餌拾ふ片手にも　去來

續猿蓑　猶清くさくや葉がちの水仙花　氷固

同　ほとゝぎすなくや湖水のさゝ濁　丈草

同　山鳥のちつともねぬや峯の月　宗比

同　目礼にこまるすゞみや石の上　正秀

同　この比の垣のゆひめや初しぐれ　野坡

同　曉の雹をさそふやほとゝぎす　其角

同　さきかゝる花や飯米五十石　桃首

同　早稲苅ておちつきがほや小百姓　乃龍

同　人もみぬ春や鏡のうらの梅　芭蕉

炭俵　朝めしの湯を片膝や庭の花　孤屋

同　食の時みなあつまるや山ざくら　野坡

猿蓑　こゝろなき代官殿やほとゝぎす　去來

同　入相のひゞきの中やほとゝぎす　羽紅

續猿蓑　あら猫のかけ出す軒や冬の月　丈草

炭俵　さみだれの色や淀川大和川　桃隣

同　おちつきは魚屋まかせや櫻がり　利牛

同　十五日たつや睦月の古手賣　之道

同　雀よりやすき姿や衣がへ　雪芝

同　花ずゝきとらへぢからや村すゞめ　野童

同　目下にも中の詞や年の時宜　孤屋

續猿蓑　ふりおとしゆくや廣野の鹿の角　沢雉

猿蓑　人の手にとられて後や櫻海苔　杉峯
同　ひばりなく中の拍子や雉の聲　芭蕉
同　禪寺の松の落葉や神無月　凡兆
同　なくやいとゞ塩にほこりのたまる迄　越人
同　草臥て宿かる比や藤の花　芭蕉
同　引かけてゆくや雪吹のてしまござ　去來
同　猨のあとふみけすや濱千どり　史邦
續猿蓑　黒ぼこの松のそだちやわかみどり　土芳
同　みる所おもふところやはつ櫻　乙州
同　とりあげてみるや椿のほぞの穴　洞木
炭俵　柿の袈裟ゆすり直すや花の中　如(北)枝
同　初雪の見事や馬の鼻ばしら　利牛
同　唐黍にかげろふ軒や魂まつり　洒堂
同　散のこるつゝじの蘂や二三本　子珊

同　鳥のゆくやけ野のくまや風の末　猿雖

同　螢みし雨のゆふべや水あふひ　仙花

○またためづらしき例なるは

句集　夏の月御油よりいでゝ赤坂や　芭蕉

これなり。これは上にあるべきを下へまはされたるにて。へ夏の月や御油よりいでゝ赤坂まで。といふべきを。一句を皆やにてうけて夏の月のほどなきを歎息せられし也。畢竟上にひける。轉例のやの一例なり。まことに翁の手際なりかし。これらにても。翁の。天尓波を自在に用ひられし事あきらか也。今世の人志を勵ますべし

○さてこれらの例にして。下のうちあひ。哥の例とたがへるあり。この差別よく心うべき事なり

荒野員外　山川や鵜のくひものをさがすらん　落梧

同　日のいでやけふはなにせんあたゝかに　舟泉

續猿蓑　春雨や蓑につゝまん雉子の聲　洒堂

春日　はるの野やいづれの草にかふれけん　羽紅

これらの句のごとく。下にらんけんんなどうちあはす時は。哥にては。かならず疑のやの例なり。

しかるにこれらは。猶冠のやの例にて。やとはいはれたる之。哥よみの心にては。甚こゝろよからずおもはるれど。連俳は字數すくなきが故に。なるたけは縮めていふがつねなれば。これらも難ともいひがたけれど。くはしくいへば變例なり。されば。これは變例之としりて用ひむには科あるまじき之。さりながら。正例にしくはなければ。おなじくは變例をこのむへからず。さなくとも。又よく意をうつさるゝ天尓波もある物をや

炭俵　秋かぜに蝶やあぶなき池のうへ　　依々

この句なども。正例よりいはゞ。かやうにいふはかならず疑のやなれど。此依々が心は。詠のやの心にてせられし句にやあらん。又

荒野　ゆふがほや秋はいろ〳〵のふくべかな　　芭蕉

道灌山ニノホル

猿蓑　道灌やはなはその世をあらし哉　　嵐蘭

荒野　ゆく年や親に白髮をかくしけり　　越人

これらの句。哉とうけ。けりとうけたり。いづれも變例にて正しき例とすべきにあらず。蕉翁も。もとより正しき例とおもひてせられしにあらざるべし。一時の變化なるべき也。世の俳諧者流。

この翁の句に目をうばはれて。や哉といひて。むつかしげにいひならへり。げにかく正例ならねば。差畧なくしては出來がたかるべし。されども。何ぞ秘事傳授もある事のやうにおもふはひがこと也。つゞまる所。上に出せる正例の句ともが。まことの正例なりとよくわきまへたらん時は。や哉もなにの苦かあらん。やと哉とをよく弁ふるが。やかなをつかふ傳授ぞと心えて。よくこの抄をあきらめ知るべし。畢竟此蕉翁の句も。夕がほは秋いろ〱のふくべとなる事。他の草のをよびにあらざる事をいふが。やの心之。さて此一句の本意は。此夕貞の。秋色〻のふくべとなり出る事。これまでいやしき花ぞとおもひあなどりしが。あてちがひなる心を。おしたてゝいはむとての句なれば。哉とは下におかれたる之。されば上のやは。哉の境内にてのやなりと心うれば。不審もなき事之。此句。夕がほは。つねに賤しきかきほなどにさく物なればと思ひあなどりしが。秋色〻のふくべとなるをみて。これまであなどりしは心えたがひなりしよとの心にて。かならずこれは。人の人をあなどるを。諫めまほしさにせられし句なるべし。又

荒野　青くとも木賊は冬の見物かな　文鱗

といふ句あり。これらも上下のてにはのうちあひ甚快からぬ句之。されど。上の蕉翁のや哉の句は。うちあはねども差畧あるなり。これはまことに快からぬ句なれば。かれをこれらに混じおも

ふべからず。いかにといふに。ともといふ詞は。假令(タトヒ)といふ事をふくめる詞なり。されば下には。〽木賊は冬の見物にせんといはでは。此とも落着せぬ事之。また下の哉をたてゝいはゞ。上をともといふべき理なし。しからば上を。〽青けれどゝいはでは哉にうちあはぬ之。すべて後世にては。天尓波。俗語といひやうたがひゆきたれば。かやうの事もよそ事のやうに思へり。たとへば俗語にていふにも。〽タトヘ寒カラウトモ行カウとこそいへ。〽タトヒサムカラウトモ行クヿカナといふ詞はよもつかふまじ。予がつねにいふごとく。俗語にいふとほりの天尓波が何にもなりなば。いかでかかやうの事あらん。これはやの例にはあらねど。すべてのてにはの心得のため。や哉のついでにこゝにいふなり。凡正例の外は。心してつかふべき事なり

○第二例　狀のやト云

これは〽なつかし〽おもしろし〽ゆかしなどいふ詞をうけて。やとおく例なり。上のうけやうのたがへるばかりにて。やとつかふこゝろは。猶第一例の冠のやに同しく。やの下なる詞を。上の詞の中へ入れて。その下の詞の等類のものを心にたてゝ。それが及ばぬ事としておもふ心なり　狀トハなつかしゆかしナド云フ詞ノ名ナリクハシクハ脚結抄ニ見エタリ

荒野あらけなや風車賣る花の時　　薄芝

同　友へりてなく音かひなや(イヿヤノ)よるの鳫　且(旦)藁

猿蓑　いそがしや(イヿヤノ)沖のしぐれの眞帆片帆　去來

荒野　家(ヤ)わたりの後はさびしや(イヿヤノ)月のかげ　市柳

同　あぶなしや(イヿヤノ)今起てきくほとゝぎす　傘下

同　三聲ほどあとのおかしや(イヿヤノ)ほとゝぎす　一髪

同　蠟燭のひかりにくしや(イヿヤノ)ほとゝぎす　越人

同　いそがしや(イヿヤノ)野分の空の夜這星(ハ)　一笑

同　何にとも見定がたや(イヿヤノ)よひの月(ハ)　一泉

同　冷しや(イヿヤノ)灯のこる夏の朝(ハ)　藤蘿

同　間(アヒ)ゝに杢なき門もおもしろや(イヿヤノ)　柳風

同　白芥子にはかなや(イヿヤノ)蝶の鼠いろ　嵐蘭

同　ちからなや(イヿヤノ)麻かるあとの秋のかぜ　越人

續猿蓑　をがむ氣もなくてたふとや(イヿヤノ)けふの月　山蜂

同　待霄(宵)の月にゆかしや(イヿヤノ)定飛脚　景桃

同　柿つゝむ日和もなしや（イフヤノ）むら時雨（デ）　野狄

同　おもはずの雪見や（ヤノ）比叡の前後　丈艸

同　虫の喰ふ夏菜とぼしや（イヤノ）寺の畑　荊口

荒野　のどけしや（イフヤノ）麥まく比の衣がへ　一井

同　のとけしや（イフヤノ）湊の晝の生（ナマ）ざかな　荷兮

春日　瓦ふく家もおもしろや（イフヤノ）秋の月　野水

炭俵　柿寺に麥穗いやしや（イフヤノ）つくりどり　荊口

猿蓑　笠あふつ柱すゞしや（イフヤノ）風の色　史邦

同　なつかしや（イフヤノ）奈良の隣の一しぐれ　曾良

翁ヨリ暮ノヿイカヽトアリケレバ

炭俵　爪とつてこゝろやさしや（イフヿヤノ）年籠り　素龍

瓢　色〻の名もむつかしや（イフヤノ）春の草　珍碩

同　めづらしや（イフヤノ）眉烹るなりと立とまり　荷兮

荒野員外　のどけしや（イフヤノ）はやき泊りに荷をときて　昌碧

春日のどけしや（イフヤノ）筑紫の袂伊勢の帶　越人

續猿蓑　母方の紋めづらしや（イフヤノ）きそ始　山蜂

同　枯のぼる葉は物うしや（イフヤノ）鷄頭花　万乎

荒野員外　雨やみて雲のちぎるゝおもしろや（イフヤノ）　落梧

炭俵　めづらしや（イフヤノ）內で花見のはつめしか　杉風

かくのごとく。置所はいづかたにても。俗言のコトヤノといふ心になるは。みな此例なりとしるべし。但此コトヤノといふ俗言にて。すなはちはじめにいふがごとく。他の循ぜられぬことにしていふ心は明らかなり。此例にまぎらはしきは

荒野員外　涼しやとむしろもてくる川のはた　野水

これらなり。これは涼シイカトといふ心にて。この例にあらず。疑のやなり。哥にもかやうによむ事なり。心をつけてわかつべし。又哥にては。やいといふ天尓波あり。これは此狀のやの例也。へあなうやい定賴集へ住わびぬやい好忠集などこれ之。連俳にはみえず。歌にても。後世はえつかはぬ天尓波なり。ヤイといふ俗言の心にはあらず。くはしくは脚結抄にみゆ

○第三例　中のやト云

これは何や何やとつかふを云。哥にも。〽花やてふやといそぐ日も枕草子〽花やもみぢをみるほどに風雅などよめり。あまり古くはつかはぬてにはなれば。其比の俗言なり。今のよにもいふ詞之。されば哥にはこのましからぬ天尓波之。俗言には。ナニヤカヤとそへていふ之。花ヤ紅葉ヤナニヤカヤなどつねにいふ之。さればこのナニヤカヤといふことを。間へくはへて心うべきなり。

これは詠のやにてはなきやうなれど。猶はしめにいふやの本義よりかやうにはつかふなり。たとへば。此花やもみぢをみるほどといふ哥は。花と紅葉とかたみに循ふ事なき心にて。花をみれば紅葉はむかしとなり。もみぢをみれば花はむかしとなりゆくさまを。やとはいふ之。此やの字なき時は。たゞ二物をならべたる心と成之。この故に詠のやの一例とはする之

荒野　あとやさき氣のつく野べの郭公　重五

同員外　耳や齒やようても花の數ならず　野水

續猿蓑　森の蟬すゞしき聲やあつき聲　乙州

同　聲ごとに獨活や野老や市の中　苔蘇

荒野員外　にぎはしく瓜や茸やをになひ込　且（旦）藁

炭俵　薊や苣に雀鮨もる　利牛

右のごとく薊やちさになどいふも。下のやのありなしにて。たゞおなじ心得なり

○第四例　末のやト云

これは。をやはやなどいふやの事之。哥には。へかくるゝまでにかへりみしはやへみだりに人はよせじ物をやなどよめり。この例の心は。わが思ふ事しりたる事をば。人はしらぬより。しらさむとすれど。をよばざる心にして歎く詞なり。これ又やの本義はうごかぬをみるべし。されどこれは。發句には例みえず。哥にても。文章の方に多き天尓波なり

［よ］これは。からせよ。さうせよ。などいふよにはあらず。それは下の誂の屬に出せり。此よの心は。上の詠のやの眞反(マウラ)なり。（五十音ニヨリテ。やトよトハ眞反ナルヿヲシルベシ）されぱやは。むかふへとゞかぬ心。よは。こなたのあとの方へとゞかぬをおもはする心之。哥にも。へそよそのことゝ思ひ出てへいなばのそよといふ人のなき。などよめるそよは。俗語に。ソレヨ〱といふ心なり。此故にこのよは。あり過たる事を思ひかへすほどの心之。これその今の場よりはうしろの方にて。循ぜられぬ場となりてあるなり。こゝの差別よく弁ふべし。哥よみもこれを弁へしらずして。へ思はずよへうらみずよと。心えもなくつねによむぞかし。此心ならで此よを用ひば。あたらぬ所もいでくべき也。やとよと。よく味はゞ。眞反なる事手にと

るがごとくなるべし

荒　ちる花は酒ぬす人よ〱　　舟泉

此句の心。はなちる時は。をしさのあまりに。誰もみな前後をわすれて酒をものむが故に。ちる花の。酒をばしらず〱人に多くのまする事を。酒ぬす人とはいひなしたるにて。盗人といふに。しらずおぼえず酒のへりたる心を活かされたる之。ちる花はをしくあはれなる物とのみおもひて。酒ぬす人とは人〻心もつかぬ事を歎息せる心之。この心をもて。やと眞反なる事をさとるべし

猿　百舌のゐる野中の杭よ神無月　　嵐蘭

炭　もち汐の橋のひくさよけふの月　　利牛

同　天氣の相よ三日月のてり　　孤屋

同　息災に祖父の白髪のめでたさよ　　岱水

同　涼しさよ塀にまたがる竹の枝　　卯七

同　ゆく年よ京へとならば狀ひとつ　　湖春

同　鍋蓋のけば〱しさよ年の暮　　孤屋

荒　折かけの火をとる虫のあはれさよ　　探丸

同　鹿笛の上手をつくすあはれさよ　樹水

同　たなばたよ物かす事もなきむかし　越人

瓢　花はあかいよ月はおほろよ　路通

員　百萬もくるひ所よはなの春　同

續　すゞしさよ牛の尾ふりて川の中　万乎

猿　草かりよそれがおもひか萩の露　李由

同　晝眠る青鷺の身のたふとさよ　芭蕉

別僧

同　ちる時のこゝろ安さよ芥子の花　越人

續　百姓になりて世間ものどかさよ　馬莧

これらが中に。〽たなばたよ物かす事もなき昔。といふ句は。謎のよのやうなれど。句意をおもへばさにあらず。又後世あしくこゝろえなば。やともいふべき句なり。されば今こゝにこれを弁ずべし。此句意もと。物かすとは。七夕には衣糸などさま〴〵のものを手向るをば。かすと。歌によみつけたり。その貸すは。彦星にあふそなへの爲之。されば物かすは。即逢ふよの事をいふにて。

あふとてもたゞ一夜なるが故に。かへつてあはざりし昔がましなる物を。棚機はさはおぼさずやといふ心なり。かの〳〵昔はものも思はざりけり。とよめる意をえてせられたる句之。しかるに。よといひし心は。棚機は逢足らぬが故に。あひたし〳〵とばかりつねにおぼすべけれど。却てあはぬ昔の方がくるしさもなしとは。さらに〳〵思はずしらでおはすをさして。よとはいひしもの之。これをたとへば。〳〵たなばたやといふ時は。常の人ならばたゞあふ事ばかりを欲すべきに。織女はあはぬ昔を戀しくおぼす事。常人の循ずべき所にあらずと思ふ心とはなる之。さればよといふとやといふとにて。あはぬ昔がましそと思ふ心。むかふの料簡になりてこなたの循ぜられぬと。わが思ふ所にかなたの循ぜぬとの差別ありとしるべし。但よの字の置所はいづ方にありても心はかはらぬ之

此よといふ天尓波をつかふ心得。かの哥がるたをとるに。むかふばかりに目をつけたるが。我前にてとられたるがごとしともかたられき

[な] これは。〳〵かうするな〳〵どうするななどいふなにもあらず。又俗言に。〳〵希有な〳〵めつさうななどいふなにもあらず。詠のなといふな也。ドウスルナナド云ハ。禁ル詞ニテ。下ノ禁留ニ出セリ。又メツサウナナドイフハ。なるトイフ詞ノるノハブカリタルニテコレトハ別ナル知ベシ　此

なの心は。物の持合の他のをよばざる歎息なり。たとへば。飯を食する時そへてくふ物を。俗には菜(サイ)と云。いにしへは是をなといへり。その古なといひしを音にて。後世はサイといふなるべし。さて今菜(サイ)といふは。魚肉をも野菜をも押くるめていふ事。即いにしへのなといふ義にて。今なといふは。野菜の方にばかりのこりて。魚にはいはぬやうになれり。サレバ古ハ野菜モ食料ニスル寸ニなトイヒ。魚モ食料ニスル寸なトイヒテ。タヾツ子ニハ。菜ハソノ名ナイヒ。魚ハいをトイフガ古ノ言也。サレバ今サイトイフハ。カヘリテイニシヘニヨクアタレリ　されば。なといへば野菜の事とのみ世には心得たれど。さにあらず。すべてなとは魚肉野菜ともに飯にそへてくふ物の名也としるべし。此なといふ名の義も。飯とよく持合ひて。他の菓子などはをよばざるが故の名なり。これひとつをもてもなといふ咏嘆の心はしるべし。哥にては。〽つらしな〽かなしななどよめども。かやうにいふ例。俳諧にはまれなり。連哥にはつかひたり。俳諧とてもつかふにあしかるまじき天尓波なれど。たま〳〵例のすくなき也と知るべし。じなばやなやなといへる例のみえたり　芭蕉翁ノ〽船頭酔ておほつかなナドハ。オホツカナシト云詞ヲカクしナツメテイヘルモノニテ。コノなノ例ニハアラズ哥ニテモツ子ニイト多クツカフヿナリ。〽はかな〽あちきなナドイフコレナリ

猿　むざんやなかぶとの下のきり〴〵す　芭蕉

実盛ガ甲ナドヲミテ

これは。かぶとの下にて蛬のなくむざんさ。實もりとの持合。他の戰死の士にことなるをなげか

れて。なとはおかれし也。はじめにいへる菜のたとへにていはゞ。此句は菜なり。実盛は飯之とし
るべし。実盛が討死。他にはたがへりしことをふかくあはれむ心。このなの字にこもりて妙なり

荒　二日にもぬかりはせじな花の春　古　梵

建長寺ニテ

同　落葉かく身はつふねともならばやな　越　人

このなをつかふにまた心得あり。名の字をなと訓ずるは。たとへば。越人といふ名は。越人によくもち
あひて。荷兮とはまぎれぬ心なり。すべて名はものゝまぎれぬためなるをもて。此なも。他のまぎれぬ
を思ふ心なりとしるべし

俳諧天爾波抄巻之一　終

俳諧天爾波抄巻之二

○五属 下

○詠属 下

かな 歌にては。上古は。かもとのみよめり。中昔よりかなとよみ来れり。されば中昔よりは。かもは疑の辞。かなは詠の辞とわかれたり。上古にては。詠をも疑をも。ひとつにかもとよみたるをおもふに。もと疑といふも。心の及ばぬ所あるが故之。詠は勿論その心なれば。上古にこれをば。ひとつにかもといへるもさる事なり。此故に。今此かなといふ天尓波を心うるにも。このよしをしるべき事肝要なり。なに事にもあれ。今までわがおぼえたる所とは相敵したる物にあひて。今までの理をあてんとすれど。かなたの持合。手のさしがたき所あるをなげく心之（ナゲクトハ歎息スルコナリ）猶下の疑属のかの條下をあはせて心うべし。（なハ此上ニアルなニ同ジアハセテ心ウベシ）　さてこのかなに二例あり。靡の哉。名の哉と云。靡の哉といふは。〽なつかしき哉〽みゆる哉〽しらぬ哉〽ゆく哉〽おもふ哉など。みな詞をうくるを云。（靡トハ。亾父ガ裝抄ニテノ目安ナリ）名の哉とは。〽心をぬさとくだくたび哉〽うらやましくもかへる浪かななど。物の名をうけたるを

云。されど此二例もとはひとつにて。靡をうくるが哉の正例なり。いかにといふに。名をうけたるとても。その名の上に。かならず哉につゞくべき詞はある也。即此うらやましくもかへる浪哉といふは。〽うらやましくもかへる哉浪がといふ心なれば也。シカラバ浪かへる哉トモヨムベケレド。カク下上ニナスハフカキ理アルヿニテ。綱目ヲサトサンガ爲之。委シクハリが言靈弁ニイヘリ。されば哉は。たとひ物名をうけて。〽山ざくら哉〽ほとゝぎす哉〽あらしかな〽もみぢ哉などいふとも。その上には。是非その哉につゞくべき詞はあるべき事なり。卒竟物名は。その詞と哉との間へはさみたる物之。俗語にいふも。〽サムイヿカナ〽面白イヿカナといふが即いにしへの哉なり。されど後世になりては。此さだめなるを弁へず。正をうしなひて。かく名をうけながら。上に哉にうちあふべき詞なき哥も出來たるは。みな後世の誤之とするべし。いにしへはさやうのみだりなる事はふつとなかりし事之。しかるに連哥などには。此正例なるはかへりてすくなくして。名の哉のみ多く。中には上のうちあひの詞なきもあり。哥よりみればすまぬ事のやうなれども。さにあらず。まへにもいふがごとく。字數すくなければ。正例にして用ふるにいとまなきが故なれば。さらにひがことにあらず。又その打あひの詞なきも。字數すくなきが故に。そのうちあひの詞をはぶきたるなり。これは連俳にてはかへりて罪にあらず。哥にては隨分正例にもよまるゝほどの字數あるに。うちあふべき詞を略するは。その罪のがるべからず。ことに哥一首三十一字の字數も。哥道の本意をしる時はさらにさやうに正例

をよむいとまなきほどくつろきなき物にはあらず。こゝには用なき事なれども。もとより哥は。言にてはいはれぬ事の又心にこめてもおかれぬ事が哥になるなれば、いかにもして言少（コトズクナ）ならんやうによむべきはずの物なるを。後世は。おもひつきたるほどの事は。のこらず詞にあらはすものと心うるから。さやうに正例をよむいとまなくなる之。此故に。歌にてうちあひなき哉は罪ありて。連俳にては罪といひがたしとはいふ也。さて又。芭蕉翁のあらはされたる桐一葉といふものに。うき哉とて。今いふ所の正例たる靡の哉を嫌はれたり。これによりて今の世までも。俳諧者流は。うき哉とてせぬことのやうに覺えたり。これいはゞすこしはくはしからぬ事なるは。名をうけたる句も。皆名の上に哉のうちあひ詞はみゆるが多くはぶきたるも多くみゆるに。そのうちあふ詞のあるもなきも弁へずしての事とみえたり。されどこれは芭蕉翁のとがにはあらず。國學をきかれけん何がしたちのこれを弁ぜぬを。蕉翁の傳へられたるなれば。実は哥よみの誤をつたへたるなり。これは奪つていふ之。又予（アタ）へていふ時は。うき哉とて此靡の哉をいむやうにいはれたるも。心ある事なるべくおぼゆ。其故は。まへにいふごとく。俳諧は字數すくなきものなれば。哥の正例のごとく天尓波をつかふ時は。自然と魂のこもる所せばくなるが故に。このまれざりしなるべし。それをいかにといふに。發句は十七字にて一首なり。哥は十七字にて半なり。しかるに哥につかふがごとくつかふ時は。一首たるべき十七字が。半のご

とくなるが故に。きらはるゝ之。浮哉といふ名目をつけられしをも思へば。ひとへに一首尾になると。首斗になるとの心なるべし。首尾せざれば浮と名づけられしもさる事之わが今いふごとくならで。たゞ靡の哉をうき哉とて嫌はれたるならば。即蕉翁自身の吐句に。へ狂句こがらしの身は竹齋に似たる哉（冬日）かやうの哉はつかはるまじき事ならずや。これ一句だちに。哉が落着したる故ぞかし。又みづからのならでもいと多し

○第一例　靡の哉ト云

神田祭

猿　さればこそひなの拍子のあなる哉　蚊足

同　此ごろのおもはるゝかな稲の秋　土芳

春　花に埋れて夢より直に死なん哉　越人

同　曉の夏陰茶屋のおそきかな　昌圭

炭　片はげ山に月をみる哉　利牛

荒　茶の花はものゝついでにみたる哉　李晨

同　衣かへ刀もさしてみたき哉　鼠彈

同　此月の恵比須はこちにいます哉　松芳

荷兮ガ四十賀

同　いく春も竹そのまゝにみゆる哉　重五

員　やけとなほしてみしつらきかな　其角

また荒野。除風が句に〽あふのけにねてみん野べのひばり哉といふ句。即この〽しなん哉といふ句の例を上へあげて名の哉としたる例之。又續猿蓑に。露沾〽物〻の心根とはん月見哉。これも此例なり。これらの門弟子。もし蕉翁のかたく禁ぜらるゝ事ならば。師のいましめを犯して。かゝる句どもをせられんやうなし。又かたくすまじき事ならば。師翁もこれをゆるさるべからず。もしいましめながらゆるされたるならば。蕉翁が食言といふべし。後世の俳諧者流。かゝる理をも弁へず。たゞ蕉翁のいましめきらはれたる事なれば。つかふはあしとのみ心得たるは。流祖の教を守るがごとくにして。かへりて蕉翁を食言者とする也。されば今よく此哉の心を明らめて。一句に浮くかうかぬかを心に決定してつかふべし。蕉翁もたゞ浮くをこそあしとはいはれたれ。靡の哉をあしといはれたるにはあらず。こゝをよく明らめたらん人は。はじめて蕉翁の腸をもさぐりうべきぞかし。浮くといふ事。今哥にてこれを喩すべし。〽くれ竹のしげくものを思ふ哉ひと夜へだつるふしのつらさに。六帖貫之 といふ哥

など。此上句ばかりにては。その心落着せぬが故に。下句に。一夜へだつるがつらさにとはいひたるものゝ。これらの上句を發句にして。十七字一首とせば。いはゆる浮哉といふべきものなり。うくとうかぬとの境をば。これにてさとるべし。さらに／＼靡の哉すまじき事と。蕉翁の禁じられしにはあらず。もとより哉の正例は此靡の哉なりとしりて。さていかやうにも轉用はすべき事之　コヽニ出セル内ニ。付合ノ句アルハ。靡ノ例ナルニヨリテナリ。コレハ浮哉ノ論ハカヽラヌヿナリ

○第二例　名の哉ト云

荒　橿の木の花にかまはぬ姿哉　芭蕉

春　雲をり／＼人を休むる月見哉　同

これらのごとく。側に――を引たる詞が。即下の哉へつゞくべきが。その間に＼姿＼月見といふ事のはさまりたる也。上にいふがごとく。これをもて。もとは靡の哉が正例たる事をしるべし。花のかたはらにては。見ぐるしき物は恥かしかるべきに。かしの木の。ひとり。花のうるはしく咲たるにも。姿をつくろはで。かたはらにたちたるをみて。世人の。榮をうらやみ。諂上をし。人に恥てかたちをかざるならひを。引あてむとすれども。橿の木の心法に及ばぬ心を。哉とはいはれし之。此句ノ魂ハ。世人ノサマヲソシリ諫ランレタルナリ　又雲をり／＼といふ句も。人は月をみる事を貪れば。隈なくてみむこそうれ

しければ。雲が人を憐むとならば。晴のきて月をみするこそ。情とはたれも〳〵思ふべき事なるに。あまり見つゞくれば。目も心も勞れんかとて。雲の月にかゝりて折〻は人の目心を休むる。その雲の心の。世人の情は引あてられぬ事を。哉とはいはれしもの之。されば哉は。かまはぬとやすむるとのことを歎ずるにてはある之。これをもて今いふ所の說を會得あるべし 以下皆――ヲ以テ。下ノ哉ノ打合ヲシラセタリ

春　若竹のうらふみたるゝ雀かな　龜洞
同　箒木の微雨こぼれてなく蚊哉　柳雨
同　先明て野の末ひくき霞かな　荷兮
同　山ぶきのあぶなき岨のくずれ哉　越人
同　山畑の茶摘をかざす夕日哉　重五
同　朔日二分柳のうごくにほひ哉　荷兮
同　初春の遠里牛のなき日哉　昌圭
集　晝みれば首筋赤きほたる哉　芭蕉
同　あさがほにわれはめし喰ふ男哉　同
春　傘をたゝまで螢みる夜哉　舟泉

同　鳫聞てまた一ト寐入りする夜哉　雨桐

同　芹摘とてこけて酒なき瓢かな　且藁

瓠　生鯛あがるうらの春かな　珍碩

荒　よをこめて雪車にのりたる嫁入哉　長虹

同　おろしおく鐘しづかなる霰かな　勝吉

同　さびしさはかしの實おつるね覺哉　芦夕

同　淺漬の大根あらふ月夜哉　俊似

同　ほとゝぎすはゞかりもなき鳥かな　落桐

同　我うらものこしておかぬ若菜哉　素秋

同　哥がるたにくき人かなほとゝぎす　智月

送翁

同　秋かぜに申しかねたるわかれ哉　野水

同

同　いなづまにはしりつきたる別かな　釣雪

同　すゞしさは座敷よりつる鱸かな　昌長

同　冬がれに風のやすみもなき野哉　洞雪

同　柴の戸をほどく間にやむあられ哉　杏雨

同　しら浪とつれてたばしるあられ哉　重治

同　木葉たくあとはさびしきゐろり哉　一髪

同　馬屋より雪車(ソリ)引出す朝かな　一井

同　うちをりてなにぞにしたき氷柱哉　夜舟

同　高聲に頰をあかむる雉子哉　一雪

同　夕やみの唐網に入るかはづ哉　一井

同　ほとゝぎす十日もはやき夜舟哉　風泉

同　花に來てうつくしく成る心かな　たつ

員　あてこともなきゆふ月夜哉　野水

猿　舟人にぬかれて乗しゝぐれかな　尚白

同　澁柹をながめて通る十夜哉　裾道

同　夕がほによばれてつらき暑さ哉　羽紅

同　鵲のはしよりこぼす霰かな　示蜂

同　椶櫚の葉の霰に狂ふあらし哉　野童

同　野の梅のちりしほ寒き二月哉　尚白

同　じだらくに寐れば涼しきゆふべ哉　宗沢(次)

同　ある僧の嫌ひし花の都かな　凡兆

同　新田に稗殻けふるしぐれ哉　昌房

同　野馬に子供あそばす狐かな　凡兆

同　呼かへす鮒賣みえぬあられ哉　同

青亞追悼

同　乳のみ子に世をわたしたる師走哉　尚白

同　あながちに鵜とせりあはぬ鷗哉　同

續　鮎の子の白魚送るわかれかな　芭蕉

同　炭燒に澁柹たのむたより哉　玄虎

同　茨ゆふ垣もしまらぬあつさ哉　素覽
同　腰かけて中にすゞしき階子哉　洒堂
同　ふとる身の植おくれたる早苗哉　魚日
同　藻の花をちゞみよせたる入江かな　殘香
同　積あげて暑さいやます疊かな　卓袋
同　夕浪の舟に聞ゆる蕎かな　孤屋
同　さく花をむつかしげなる老木哉　木節
白日シヅカナリ
同　とまりても翅はうごく胡蝶哉　柳梅
同　細工にもならぬ桔梗のつぼみ哉　隨友
同　竹の子にぬはるゝ岸のくづれ哉　可誠
同　いさみたつ鷹引すゆるあらし哉　里圃
同　あら鷹の壁に近づくよさむかな　畦止
同　病僧の庭はく梅のさかり哉　曾良

同　猿蓑にもれたる冬の松露哉　沾圃
同　品川に富士の影なき汐干哉　闇指
同　蓑虫の出方にひらくさくら哉　卓袋
同　のぼり帆の淡路はなれぬ汐干哉　去來
同　一株の牡丹は寒きわか菜かな　尾頭
炭　菊畠奥ある霧のくもり哉　杉風
同　秋のくれいよ〳〵かるくなる身哉　荷兮
同　一枝はすげなき竹の若葉哉　仙花
同　抱かれてもをのこゞいきる花見哉　斜嶺
同　髭宗祇池に蓮ある心かな　素堂
同　こねりをもへらしてかけし柳哉　湖春
同　傘におしわけみたる柳かな　芭蕉
同　冬がれの磯に今朝みるとさか哉　同
木曾路ニテ

同　山吹も巴もいづる田うゑかな　許六

同　川中の根木によろこぶすゞみ哉　芭蕉

同　苅蕎麥の跡の霜ふむ雀かな　桐実

同　梅がゝにつと日のいづる山路かな　芭蕉

同　山ざくら小川飛こすをなご哉　普全

同　行燈をしひてとらする凉み哉　探芝

同　瀧つぼに命うちこむ小鮎哉　爲有

同　氣相よき青葉の麥のあらし哉　仙華

同　町中へしだるゝ宿（シユク）の柳かな　利牛

同　土はこぶ籠にちりこむ椿哉　孤屋

同　五人扶持とりてしだるゝ柳哉　野坡

同　おほろ月まだはなされぬ頭巾哉　仙花

同　念入れて冬からつ（こ）（マヽ）ぼむ椿かな　曲翠

同　青柳の泥にしだるゝ汐干哉　芭蕉

同　障子ごし月のなびかす柳哉　素龍
同　四ッ五器の揃はぬ花見ごゝろ哉　芭蕉
同　梅がゝの筋にたちよる初日哉　支考
同　とば汁も顔ににほへる薺かな　其角
同　うぐひすの聲に起ゆくすゞめ哉　桃隣
同　鶯にホウと息するあした哉　嵐雪
同　鶺鴒の尾は見つけざる柳かな　一風

これらいづれも同し例にて。名の哉の正例なり。みあはせて心うべし。また

炭　ほそ〴〵とごみたく門の燕かな　絲誰
同　人聲も夜半を過る寒さ哉　野坡
同　團うる侍町のあつさかな　怒風
續　梟のなきやむ岨の若菜哉　曲翠

かくのごとき句は。名の哉のごとくなれど。へごみたく門へ夜半を過るへ團うる侍町へ鳴やむ岨など。上の詞。直に名につゞきたれば。しからず。これらは。うちあひ詞を。やがて哉にふくめたる

例之と心うべし。混ずべからず

○またうちあひ詞をはぶく例あり。連俳にては。これまた一例とすべし。哥にはよむまじき例なり。されど。かゝる哉も。後世哥によむはあやまり也

炭　有明となればたび〳〵（フル）。じくれ哉　許六

續　麥糠に餅屋の店の（ヤワナル）。わかれかな　荷兮

同　爼に人參の根の（アル）。さむさ哉　沾圃

荒　うすぐもりけだかく（ミユル）。花のはやし哉　信德

同　わが宿はどこやら秋の（ヤウナル）。草葉哉　宗和

續　立ありく人にまぎれて（スル）。すゝみ哉　去來

同　柿の名の五助とゝもに（スル）。月見哉　如眞

猿　病鴈の夜寒に落て（スル）。た・びね哉　芭蕉

炭　うか〳〵と來ては（サセラル、）。花見の留守居哉　丈艸

春　山寺に米搗くほどの（アカサナル）。月夜哉　越人

炭　並枩を見かけて（マサル）。町のあつさかな　臥高

旅行

同　うの花に芦毛の馬の○（ヤウナル）夜明哉　許六

猿　水底をみて來たがほの○（ヲカシキ）小鴨哉　丈草

同　茶の湯とてつめたき日にも○（スル）稽古哉　龜翁

續　十六夜はわづかに闇のはじめ○（デアル事）かな　芭蕉

春　雪の原蕣の子の○（ヤウナル）薄かな　昌碧

炭　箒目に霜の蘇鉄の○（冬木セヌ）寒さ哉　游刀

春　腰てらす元日○（ノヤウニモナキ）里のねふり哉　犀夕

猿　おほろとは枩のくろさに○（イフ）月夜哉　其角

續　年切の老木も○（ヤハリ出ル）柹の若葉哉　千川

員　麥喰し鳫とおもへど○（ヨシキ）わかれ哉　野水

瓢　木のもとに汁も鱠も○（匂フ）さくら哉　芭蕉

炭　朧月一ト足づゝも○（近ヅク）わかれかな　去來

同　梅一木つれ〳〵草の○（通リナル）すがた哉　露沾

春　藤の花たゞうつむいて（ヰ井ル）別かな　越人
炭　ほとゝぎす。（ガナク）一二の橋の夜明哉　其角
猿　彼岸まへさむさも。（ワヅカニナツタ）一夜二夜哉　路通
炭　枝長くきらぬ習を。（モツテ井ル）椿かな　湖春
同　あすといふ花見の。（キモセナル）よひのくらさ哉　荊口
續　李もる店のほとりの。（タマリタル）暑さ哉　万乎
炭　花のあとけさはよほどの。（日ノ立タヤウナル）茂りかな　子珊
同　猫の子のくんづほぐれつ。（スル）胡蝶哉　其角

何某ノ殿ノ花見ニ

同　中下もそれ相應の。（タノシミナル）花見哉　素龍
同　法度場の垣より内は。（フマレズニアル）すみれ哉　野坡

これらいづれも。かくのごとく上にはぶきたる詞あるをみて。靡の哉正例なる事しるべし。かく心えて。此はぶきたる例ともつかふに。とがなき事なり。また靡の哉のやうにて。すこし哥によむとは。うけやうのかはりたる句あり

荒　すゞしさは座敷より釣る鱸かな　昌長
同　さびしさはかしの實落るね覺哉　芦夕
春　ふもと寺かくれぬものはさくら哉　李風
猿　しづかさは栗の葉しづむ清水哉　柳陰
同　うれしさは葉がくれ梅のひとつ哉　杜國

これらの句。いづれも正例と畧例とのごとくにはみゆれども。皆。なりけりとよむべきをば。哉といへるなれば。これはまた一例の變例たるべし。哥にはよまぬつかひやう之。いはゞ少し心よからぬつかひやうなれど。俳諧は字數すくなきが故なれば。これは歌に。なには何之けりとよむべきを。それに又哉の心をそへていふなりと心うべし。これらの例は。つかふもつかはぬも。人〻の心によるべき事之

○また。まへの靡の哉のうちに出したる。へされはこそひなの拍子のあなる哉といふ句も。哥にていはゞ。けれとうくべき句也。しかるを哉といひたるも。まへにいふ一例に同じく。こその例と。哉の例とふたつを。ひとつにしてつかひたる物之と心うべし哥にても。變例疑例多き事なれど。（此變例疑例ヲシルヿハ。例ノ多キト少キトニテ定ムルヿナリ）亡父があらはせる脚結抄にも。變例疑例は捨られたり。されば心あ

らん人は。連俳とても。このむべき事にはあらず。いかに字數すくなくとも。天尓波だに自由ならば。いかやうにもいはるべき物なるをや

○集にへ梅柳さぞ若衆哉女哉　芭蕉　これはいとめづらしき例之。さぞといふ詞は。哉にうちあはせたるにあらず。そこにてきれたる句意なり。かやうの事皆少字たる所謂なり。哥よみなどこれをそしらば。かへりておのれが非あらはるべしかし

○また。哥につかはぬ例みゆ。これはへならんへなるべしなどいふべき所をは。哉といへるなり。

員　月に柄をさしたらばよき團かな　傘下

荒　あの雲はいな妻をまつたより哉　芭蕉

これらの例も。また前にいふがごとく。ならんといふ心を持て哉とはいはれたるなるべけれど。哉の正しき例とはすべからず。蕉翁も此句あれども。よも正しき例とおもひてはせらるまじき之。これらは。はたらきてつかはれたるものなれば。例とはすべからぬ句なるべし

○また。何も何かなとつかふ例あり。たとへば

猿　水無月も鼻つきあはす數寄屋哉　几兆

炭　鬼の子に絣(餅)をすゆる(居)もひいな哉　如竹(行)

同　この比はまづ挨拶もさむさ哉　示蜂

荒　衣がへ刀もさしてみたきかな　鼠彈

同　うら白もはみちる神の馬屋哉　胡及

同　それがしも月みる中のひとり哉　湍水

同　いざよひもまださらしなの郡哉　芭蕉

同　一本の茄子もあまるすまひ哉　杏雨

同　よし野山もたゞ大雪のゆふべ哉　野水

續　うちこぼす小豆も市の師走哉　正秀

同　大名の閨にも寐たる夜寒哉　許六

荒　木がらしもしばし息つぐ小春哉　野水

かやうの句ども。たゞくはしくしらずしてみれば。詠の。何も何かなのやうなれども。大にたがへるは。此上に置たるもの字。下に出せる毛家のもにて。詠のもにはあらねば。これらはたゞ上の脈の哉。名の哉。又畧例の哉などに。上に毛家のものあるなり。よく句意を味はひて。此例何も何かなとは別例なるを知るべし。何も何哉の正しき例。哥にはおほき例なり。連哥俳諧にはいとまれ

なり。たゞ上に出せる靡の哉に。上に詠のもの打あへる也。名の哉にもあり。靡へあやめもしらぬ戀もする哉 古今　同へ女郎花うしろめたくもみゆる哉 同　名へおほつかなくもよぶこ鳥かな 同　かくのごとくつかふなり。これをば詠のもといふ。次下にいふをあはせてみるべし

荒　角落てやすくもみゆる小鹿哉　　蕉笠

善光寺開帳

猿　すゝしくも野山に滿る念佛哉　　去來

此句ども正しき例なりかくのごとく。哉にもを打合はする心は。まへにいふがごとく。哉はもと。相敵するものに。こなたの理をあてむとすれど叶はぬ心なれば。猶そのこなたの理を。かげにつよくみせん爲に。もとはおく事之。たとへば。此はじめの句の意は。小鹿の角落たるが安心らしくみゆるに。こなたは不自由にあるべしと思ふ心なるを。かげにつよく思はせて。もとはおかれたるなり

○また。世に一字哉と称するあり。我門ニテハ哉ノカト云 哥にては。多くは。上にもの字をうけてよめり。上ノ何モ何哉ノ例ニ同ジ　もの字のなきは。疑のかなるが多し。されどもの字あるは哉のか。もの字なきは疑のかなりといふにはあらず。もの字なくても。此例のかはよむ事なり。へあかなくにまだきも月のかく

るゝか 伊物 これらの哥は。もの字ある例之。されど又。此もの字も。詠のもにあらざれば。下のかは疑ともなるべきなり。たとへば

荒　草まくら犬もしぐるゝかよるの聲　芭蕉

この句しひていはゞ。此へも何かの例ともいふべけれど。此心を思ふに。これは猶へ疑のかの心にてせられし句とおぼしき之。これは。續後拾遺集に 冬隆 へ秋はぎのうつりもゆくかといふ哥へもゆくかとはよみたれど。作者の心は。へ疑のかなるべしとて。亡父脚結抄にくはしく論じたり。但。もは。此句のは。毛家のもなり。此哥のは。詠のもにてたがへり 今此蕉翁の句。この冬隆朝臣の。同日の論なるべし

猿　鳥どももね入てゐるか余吾の海　路通

同　鶏もばら〱時か水鶏なく　去來

續　やまぶきも散るかまつりの鱠なます　洒堂

これらの句。まへの蕉翁の句に同じく。詠のかのごとくにして。疑のかなるべし。すべて發句どもをみるに。詠のかは一向にその例みえず。いづれもへ疑のか也。これさもあるべき事は。俗言に此一字哉はたえていはぬ詞にて。かとだにいへば。たゞ疑のみなるが故に。俳諧にこの例のなきなるべし

荒　ほろ〳〵と山吹ちるか瀧の音　芭蕉

冬　すてられてくねるか鴛のはなれ鳥　羽笠

これらの句は。しひていはゞ。この〳〵哉のかの心ともなるべき句之。されど猶。蕉翁羽笠。ともにうたがひの心にてせられしにこそ。かやうに詠疑はまぎらはしきものなるをもても。かの上古には。詠疑ともにかとよめるは。ことわりなる事を知るべし

[も] これを詠のもと云。これもそれもなどいふもとは別の例なり。さりながら。まへにいへるがごとく。たゞつかひ方により。その事がらによりて。詠の心ともなるにて。本義においてたがふ事はなき事。猶下の毛家の条下をもこゝにあはせてしるべし。もとは。本意ならぬ筋をいひて。わが本意の筋におもひよせさせんとする心之。その本意の筋のいはれぬ所。歎息の詞とはなる之。哥にては。終に〳〵たもとすゞしも〳〵子日すらしもなどもよめども。發句にはみぬ事之。その外〳〵ぞも〳〵はも〳〵けらしも〳〵つもなどもよめり。中におきても。此例なるもあり。萬葉集などには。ことに此もは多くみゆ。げにいとふかく意味をもつ詞なれば。むかしはおほかりしもことわりなり

炭　てう〳〵しくも響るかいわり　嵐雪

といふ短句有。此句前句は。へ隣から節〻嫁をよびに來る　野坡　といふ句なり。この前句の心。嫁の姑ににくまるゝを笑止がりて。隣家の人。節〻よびにおこす心とみて。そのいたはらるゝを悦びのあまり。何がな隣の機嫌をとらんとて。門の畠などのかいわり菜を。天にも地にもなき物のごとくほむるを。姑の内より聞て。あらてう〱しやと思へる心にて附たるなり。されば此もは。その嫁をにくしとも又ねたしとも思ふ本意の筋におもひよせさせむがために。てう〱しき事を。かく。もとはいへるもの之

集　あか〱と日はつれなくも秋の風　芭蕉

冬　笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨　野水

猿　またも大事の鮓をとり出す　去來

〇疑屬

[か] 凡うたがひは。かとやとのふたつなり。しかるに後世は。此ふたつの差別をしらずして。哥よみすらみだりにつかふ事とはなりにけり。此故に。わが父脚結抄にこの差別くはしくときおかれたり。それをみて心うべし。今その要をいはゞ。かはあてゝみる心之。やはおもひやる心之。古今集に。在五中将齋宮ニ忍ビテアヒ奉ラレシソノ後朝ノ哥ニ〽君やこし我や行けんおもほえず夢かうつゝかねてかさめてか。といふ哥。上句はみなやなり。下句は皆か之。これ上の句意は。君が來たりとも。我がゆきたりとも。いかに思へども思ひさだめがたき心にて。やとよめる之。下の句意は。行たるにもせよ。來たるにもせよ。いづれにも逢みたるには相違なきことなるを。それを。夢かとあて。現かとあて。ねてかとあて。さめてかとあてゝみたる心之。されば。上はわが思ひさだめられぬをいひ。下はその実をたづね知らんとする心ある之。この故に。亾父脚結抄に。かは問ふ心なり。やはおもふ心之といへり。よく思ひわかつべし

荒　奥山はあられに減るか岩の角　湍水
千子ガウセタリシ寸

猿　なき人の小袖も今や土用干　芭蕉

この二句湍水が句は。岩のかどのへりたるをみて。奥山は人もかよはぬ故。ふみへらすこともあるま

じければ。霰にてへりたるかと試にあてゝみたる之。これへりてあるは眼前にて。そのへらしたるものゝしられぬが故にかといふ之。次の蕉翁の句は。現存の人の衣服は。虫にはまれじとて土用干する事なるに。亡人の衣服は。さる手當もいらぬ事ながら。おくれゐる人の心には。かたみとみるべき小袖の事なれば。いつまでもそこなはじとて。もし土用干もやすらん。あはれの事やと思ひやられたる心之。これはほすかほさぬかのもとよりしられぬ故にやといへり。その差別あるをおもふべし

猿　神迎水口だちか馬の鈴　珍碩
同　鳥どもゝ(ママ)寐入てゐるか余吾の海　路通
同　麥めしにやつるゝ戀か猫の妻　芭蕉
冬　ひとりは典侍の局か内侍か　杜國
同　しら〳〵と砕けしは人の骨か何　同
同　霧に舟ひく人はチンバか　野水
同　捨られてくねるか鴛のはなれ鳥　羽笠
員　ねながらかくか文字のゆがむ戸　傘下
同　太鼓たゝきに階子のぼるか　同

猿　僧や丶さむく寺へかへるか　几兆
同　雲の峯今のは比叡に似た物か　之道
續　寐時分に又みむ月か初さくら　其角
猿　鉢叩隣はかほに似ぬものか　乙州
續　山吹もちるか祭の鱠なます　洒堂
集　花の雲かねは上野か淺草か　芭蕉
炭　かへるけしきか燕さわつく　去來
續　火の消て堂にまよふか虫の聲　正秀

竜口寺ニテ

同　首の座はいなづまのするその時か　木節
荒　ほろ〳〵と山吹ちるか瀧の音　芭蕉
同　哥か否連哥にあらずにし肴　文鱗
同　さと人のわたり候か橋の霜　宗因
同　草まくら犬もしぐる丶かよるの聲　芭蕉

同　こがらしに二日の月の吹ちるか　荷兮

同　綿脱は恣風きゝにゆく比か　野水

續　狼をおくりかへすか鉢たゝき　沾圃

同　髮剃はふり來る雪か比良のたけ　陽和

猿　舟引の妻の唱哥か合歡の花　千那

これらのごとく。かはすべて捕へたる物ありながら決しがたきを。決せんとする心なり。やはさるとらへ物はなき也。猶下のやの条にあはせてみるべし。但コレラノ内。〽麥めしに〽すてられて〽偖やゝさむく〽寐時分に〽山ふきも〽ほろ／＼とナドノ句ハ。哉のかノ心ニナシテモカナヘリカヽルヿハ哥ニモアル之 ○又かの下に。らんけんなどうちあはする例あり。哥にも〽花かちるらん〽いつかへにけんなどのたぐひ之。これもとたゞひとつの例にて。即此上に引たる句どもゝ。〽ほろ／＼と山吹ちるかといへるは。〽山吹かちるらんといふべきを。かくいへるもの之。〽狼をおくりかへすかといへるは。〽狼をか送りかへすらんといふ心なるがごとし。かくのごとく。らんけんなとの詞をうちあはするは。そのかくれたる所のもやうを。せちにおもはせんとする時の用にて。かとうたがふ心は更にたがふ事なし。しかるに俳諧は。例の字數すくなきが故にらんけんなどおくべき所も。みなはぶきたる例のみなり。これを中のかといふ之 但畧スルト畧セヌト二例ナリ。脚結抄ヲミルベシ

猿　春のよはたれか初瀨の堂籠り。（スラン）　曾良

同　いつまでか雪にまぶれてなく千鳥。（ナラン）　千那

同　いく人かしぐれかけぬく。（ラン）せたの橋　丈草

集　たれ人かこも着ています。（ラン）花の春　芭蕉

續　いづくへか。後（ユキケン）は沙汰なき甥坊主　里圃

員　なに事かよはりあひてはうちわらひ。（〳〵スラン）　鼠彈

猿　天井まもりいつか色づく。（ラン）　去來

荒　夕立にどの大名か一（ト）しぼり。（ナルラン）　傘下

これらのごとく。側にくはへ置たる詞をもて心うべし

○又たゞかとばかりいひて。かはの心なるあり。これにまがふべからず

○又哥にては。らんかてかとかかとなど。さま〳〵に他の天尓波を繼てもつかふ之。俳諧にてはその變化すくなし

猿　內藏頭かと。よ（イフテ）ぶ聲はたれ　乙州

炭　名月や富士みゆるかと。（思フテ）駿河町　素龍

同　盆の月ねたかと。門をたゝきけり　野坡

員　柳ちるかと。例の莚道　野水

荒　一重かと。山吹のぞくゆふべかな　襟雪

同　つきたかと。兒のぬきみるさし木哉　舟泉

續　名月の花かとみえて棉畠　芭蕉

これらのかとは。みなカト見テ　カトキヽテ　カトシテ　カト思フテ　カトイフテなどの心之。此へ名月の花かとみえてといふ句は。やがてへみえてとあれば論なし。との字の心に。へト見へト聞へト爲へト思へト云のいつゝの心こもる事。猶との條下にておもひあはすべし。

○又この外にも。哥にはかにかはかもかやなどもつかひたり。くはしくこゝにいふべけれど。かにかはかもは例なきが故に畧す。されども俳諧にすまじき天尓波といふにあらねば。脚結抄をみてひろくつかふべき之。かにかはかもなどいづれもつかふに甚おもしろき詞なるを。いかにしてつかはれざりけん。これ思ふに。俗語にて事をすますが故なるべし。されど俗言は義淺く。古言は義深ければ。かの魂のため。しるとしらぬとは大なる損得あるべきぞかし。これが中に。かはといふ例にて。かはのかとて。かの一字にしてかはのこゝろとなるあり。その例たゞ一句みゆ

猿　うす壁の一重はなにか年のくれ　去來

これ之。薄かべのごときたゞ一重の隔は。何ほどの事ぞといふ心を。なにかとはいひしもの之。これ即かはのかの例なり。すべてものゝ道理を。我は未決にいひ出して。きく人の心にて決するやうにいふが。かはの本義之。やはといふ詞もその心得は同じ。但やトかトノ別ハアルヿナリ　かやといへる例は

猿　一里はみな花守の子孫かや　芭蕉

此句ノ詞書云　いがの國花垣の庄は。そのかみならの八重櫻の料につけられたるといひ傳へはべればトアリ

これはかとやとをふたつあはせたる天尓波なり。されば。必定かやうにてもあらんと思ふことの。さはいへ。定めかたきを思ひたゆたふ心にて。かやとはつかふ之。いとおもしろき詞之。此句も詞書のごとく。八重櫻の料につけられたりといふ傳あるからには。その子孫なるべき事明らかなるやうにて。さはいへ。まことにしかりやしからずやと思はれたる心にて。かやとはつかはれたる也

拾　六玉川高野の外は清水かや　去來

これまたこの例におなじ

【や】上にいふがごとく。いかに思へどもおもはれぬことを思ひやる心之。上のかの条下とあはせて心うべし。やといふ音の本義は。上の詠のやの下にいひしに同じ。そこにもいひしが如く。本義はかはる事はなけれど。たゞそのつかひやう。上下の味はひにて。詠とも疑ともわかるゝ事之

炭　こがくれて茶摘もきくや時鳥　芭蕉

この句意。もと茶摘は三月の物なり。されどそれはすべて上品の茶をつむにて。いまだ茶の芽出しを摘む事なれは。そのつむ人あらは之。夏かけてつむは。はや茶の葉も大きく茂くなりてつむ下品の茶之。そのつむ人しか茶の木しげりたれば。木がくれてとはいふ之。その人みえぬにおもひやりたる心なれば。やとはいはれたる之。木がくれてといふが。即やといふ心の出る所なり。此句は。誰かはしらねど。聞かせたき人あるを寃とす。されば。かくたゞ一人きくは口をし。茶摘だにきくやらんとはいはれし之。詞のつけ所たぐひなき物之

續　よひの雨しるや(カ)土筆の長短　闇指

同　かれはてゝ名にも恥ずや(ヌカ)をみなへし　杉風

荒　すご〳〵とつむや(カ)摘まずや(ヌカ)土筆　其角

アル人ノ追善ニ

同　埋火もきゆるやなみだの烹る音　芭蕉

續　夕やみは螢もしるや酒ばやし　水鷗

員　すゞしやとむしろもてくる川の端　野水

冬　初花の世とや嫁のいかめしく　杜國

猿　山つゝじ海にみよとや夕日かげ　智月

同　ばせを葉のなにゝなれとや秋の風　路通

これらいづれも疑のやの正しき例なり。されど。此終に引たるばせを葉の句は快からず。その快からずといふは。哥によむ上のうけざまにたがへば也。正しくいはゞかといふべきを。やといへるなり。これは俳諧にかぎらず。後世の哥よみも此差別をよく心得ずしてよみ誤れるも多くみゆる之。猶其たぐひなるは

荒　蓑虫のいつからみるや歸り花　昌碧

此句ナドハ。いつからみるぞトイフベキヲ。やトイヘリ。快カラヌ例ナリ。モシやトイハデ叶ハヌヿナラバ。みるやいつからトイフベシ。スベテいつたれなにナドイフ詞ノ下ニハ。やハツカハヌ例ナリ。かハツカフナリ。タトヘバ。いつからかみるトツカフナリ。コレラハ哥ヨミモワキマヘヌ人多

炭　けうときは鷲の栖や雲の峯　祐甫

―コレハかトイフベキヲやニアヤマレルナリ

員　たらかされしやねる月　荷兮

猿　春雨のあがるや軒になく雀　羽紅

春　柳よき陰ぞこゝらに鞠なきや　重五

續　霜ばしらおのがあげしや土龍　圃仙

荒　うぐひすになじみもなきや新屋敷　夢々

コレライヅレモかトイヒテ叶フベキ句ドモナリ快カラヌヿハ脚結抄ニイヘルウケザマヲ見テ會得スベキナリ

○中のやといふ例ありこれに二例あり下のうち合を畧すると畧せぬと之上の中のかに同じやの下にうちあふ詞あるを一例とすすなはちらんけんなどの詞のうちあふなり

春　永き日やけさをきのふにわするらん　荷兮

猿　子やまたんあまり雲雀の高あがり　杉風

焼數辭ヲツクリテ

同　子(ゲ)やなかん(ウカ)その子の母も蚊(カ)のくはん(ウカ)　嵐蘭

安国論寺ニテ

荒　たふとさのなみだや(ガ)直にこほるらん(ノデアロカ)　越人

集　はつ眞桑たてにやわらん(ウカ)輪にやせん(ウカ)　芭蕉

續　かくてや此山に秋をまたれけん(タデアロカ)と思ふに云々　今宵賦

員　狐つきとや〻人のみるらん(デアロカ)　越人

荒　物すきや(ハ)むかしの春のまゝならん(デアロカ)　同

同　たらちめの暖甫(ガ)や冷ん(ツカ)かねの聲　鼠彈

同　行人(ガ)や堀にはまらん(ウカ)むら薄　胡及

同　小柑子栗(ヲ)やひろはん(ウカ)松の間　舟泉

同　桐の葉(ヲ)やひとつかぶらん秋のかぜ　圓解

春　ときてやおかむ(ウカ)枝むすぶ衾　冬文

拾　江鮭ありもやすらん(ルデアロカ)富士の湖　芭蕉

續　春の野やいづれの草にかぶれけん(タデアロゾ)　羽紅

これら皆中のやの正しき例なり。又畧せる例なるは

荒　さみだれにかくれぬもの（ハ）や勢多の橋。（ナラン）　芭蕉

同　たびねして見し（タノハ）や浮世の煤拂。（ナラン）　同

續　名月に麓の霧（ガ）や田のくもり。（ナラン）　同

集　梅白しきのふや鶴を盗まれし（タカ）　芭蕉

同　象潟の雨や西施が合歡の花（ナラン）　同

續　山茶花も落てや雪のちり椿。（ナラン）　露笠

同　夕だちに傘かる家（ハ）やま一町。（アルラン）　圃水

同　ながれ木の根やあらはるゝ。（ナラン）花の瀧　如雪

猿　桶の輪（ガ）やきれて鳴やむ。（ナラン）きり／＼す　昌房

同　大峯（ハ）やよし野の奥の花の果。（ナラン）　曾良

同　一俗これ（ハ）や鳥羽田のことし麥。（ナラン）　之道

同　風流のはじめや奥の田植哥。（ナラン）　芭蕉

芭蕉菴ノフルキヲ訪

同　すみれ草小鍋あらひし跡やこれ。　曲翠

瓢　鳫ゆくかたや白子若枩。　芭蕉

員　月のおほろやあすか井の君。　冬文

春　山や花。かきね〳〵の酒ばやし　龜洞

炭　麥跡の田植やおそき螢とき　許六

同　さゝの葉にまくらつけてや星むかへ。　其角

猿　水無月の名を種にや。水仙花　不玉

千子ガウセケル寸

同　なき人の小袖もいまや土用干。　芭蕉

同　今やわかれの刀さし出す。　去來

荒　目や遠う耳や近よる。年の暮　西武

續　鳴瀧の名にや契りあふ。ほとゝぎす　如雪

同　門砂やまきて。師走の洗髮　里東

追　儺

荒　おはれてやわきにはづるゝ鬼の面　荷兮

續　八専の雨やあつまる。菊の露　沾圃

荒　妻なしと家主やくれし女郎花　荷兮

猿　馬かりて竹田のさとやゆく時雨。　乙州

荒　たてゝみん霞やうつる。大かゞみ　野水

同　見おぼえんこやあらたまの年の海。　長虹

續　寐道具のかた〳〵やうき。竈まつり　去來

荒　あけぼのは春のはじめや胴ぶくら。　野水

續　その蔓や西瓜上戸の花の種。　沾圃

實方中將ノ塚ヲ尋テ

猿　笠嶋やいづこ。五月のぬかり道　芭蕉

此句ナドイト正シキツカヒ方ナリ。コレヲ以テモ上ニイヘル蓑虫のいつからみるやトイフ句ノ誤ナルヲ思フベシ

續　一田づゝゆきめぐりてや水の音。　北枝

集　水鶏なくと人のいへばやさや廻り。　芭蕉

【伏や】この伏やといふも猶うたがひのやの一例なり。哥にはへなれやへけれやへたれやへぬれやなとよむ之、俳諧にはたゞへなれやのみ見ゆ。これはへなればやといふを。ばを畧せる詞なれば。ヂヤニヨッテ何〻ガといふ心之。又は下に打合の詞を畧せるは。ヂヤ、ラといふ心ともなる也。たゞ同じ心得之。伊勢物語にへ秋の日は春日わするゝ物なれや霞に(チヤニヨッテ)霧や千重まさるらん(ノデアロカ)これはうちあひある例なり。古今集にへまどほにあれや君が(ルヿヂヤ、ラ)きまさぬとよめるは。打合をはぶける例なり。これらにて心うべし。

春　一夜かす宿は馬かふ寺なれや(チヤ、ラ)　野水

前句へ都に廿日はやき麥の粉　羽笠　都ヨリ廿日ハヤク麥粉ヲツカフハ。馬カフホドノ寺ナレバニヤトノ心ニテツケタルナリ後句ハへこは魂まつるきさらきの月　旦藁　コレナリ二月ニ竈祭ルトイフヿ。即なれやノ詞ヲウケタルナリ

員　醉ざめの水ののみたき比なれや　傘下

前句へ内へはいりて猶ほゆる犬　傘下　犬ノ内ヘハイリテ猶吠ルハ。醉ザメノ水ノ飲タキ比ノ顔ノアヤシゲナレバニヤトノ心ニテツケタルナリ。後句へたゞしづかなる雨の降出し　越人　コレハ雨ノ降出ノシヅカナルニテ。なれやノ詞ヲウケタルナリ

猿　ひばりなく小田に土持つ比なれや　珍碩

前句へかさあたらしき春の曙　乙州　コレハ旅人ノ立出ル笠ノアタラシキガミユルハ。小田ニ土モツ比ナレバニヤトノ心之後句へしときいはふてくだされにけり　素男　コレハ祝フテ下サレタルハ。田ニ土持ツヲイハフ心ニテカトノ心ニテウケタル之

同集序　此道のおもておこすべき時なれや云々　其角

コレハコノ集ノ出來タルハ。コノ道ノ面目ヲホドコスベキ時運ノイタリタレバニヤトノコ丶ロナリ

續　弓固とる比なれやふぢばかま　支浪

コレハ藤袴ノサキツルハ。弓固トル比ナレバニヤト云心ナリ

この伏やに四例あり。第一はへ疑ふ伏やといふ。即此上にあぐる例これ之。第二はへかへす伏やと云。これはならんやはといふ心之。此ときはやはのやといふやなり。第四へながむる伏やと云。此時はなりやとよむ心にて。やは詠のやなり。第四へねがふ伏やと云。此時はねがひそ丶のかす心になる也。此四例。つねにいふがごとく。いづれも上下の事がらによりて。四例とわかる丶なり

集　春なれや名もなき山のあさ霞　芭蕉

同　み所のあれや野分の後の菊　同

この二句ともに。この四例のうちにては〽詠むる伏やの例なり

やは これは理をわれよりは決せずして。きく人の心に決定を發せさする詞之。上のかはの所にいふが如く。〽かは〽やはは同じ類の詞なれども。その落着。かははソウデハナイと決定し。やははソウデハアルマイと落着する也。これ自然とやとかとの差別にて。かくはなる事之。七部のうち此例みえず。されど上にもいふがごとく。甚つかふにおもしろきてにはなれば古例なしとてつかふまじきにあらず。脚結抄にてこの心をえ。發句にも附句にもその魂をたすくべき之。

炭 なく事のひそかに出來しあさぢふに　　芭　蕉

やそ これもやは疑にて。そと添たるは。それといふ心にて。たゞやとうたがふべきをば。今一たびその事がらの筋をおもはせんとて。そとはそふる也。これは俳諧などにはみえぬもことわり。哥にだに。一條院御宇の比より後は。たえてよまぬ脚結也

○願屬

世ニハ願ト誂トヲ混ジテ。願トノミイヘド。願ハ我子ガフナリ。誂ハ人ニアツラフルナリ。亾父ハジメテコレヲワカテリ

［ばや］これは。俗に〽カウシタイ〽ア、シタイ其ほか〽行タイ〽聞タイ〽見タイなどいふタイにあたる詞なり。古言に〽めでたき〽うれたきなどいふたきは。これにことなり。畢竟。〽みせばやといふは。みせたらばいかに本望ならんといふ心也。〽ゆかばやといふは。ゆかばいかにおもしろからんなどいふ心なりとしるべし。謠に。一見せばやと存候などいふは。すこし古言とはたがへり。それは今おもひたつ時にいふ詞のやう之。ばやはもとさる心にあらずその思ふ事のいまだならぬ内に。成らん時を思ひねがふ心をいふにて。そのたがふ所あるを思ふべき之

炭　蓬萊にきかばや伊勢のはつ便　芭蕉

蓬萊におくものは。伊勢より來る物多きが故に。それがのぼるにつけて。伊勢の初便をきかば。いかにうれしからんとの心なり。即きかまほしき心なり。此句など。凡例に論ぜるがごとく。俳諧の魂といふ事かならずありといちじるき之。いかにとなれば。此句。蓬萊の句なれども。実は伊勢なる人を思ふ情をのべられたる句之。後世言靈の道をうしなひつれば。これらたゞ蓬萊の句之とのみ思ふは。蕉翁

の腸をさぐるといひがたし。哥よみもたゞこの醉のみさめずして。言靈の道をわすれはてたる事。なげかしき事之。序によりて今これをいふ之。心あらん人はさとるべし

荷兮が室にたびねする夜。草風直せとて。箔つけたるかはらけいだされければ

荒　土器の手際みせばや菊の花　其角

戀

同　山畑にものおもはばや蕪引　松芳

翁行脚ノ古キ衾ヲアタヘラル

猿　首出して初雪見ばや此衾　竹戸

續　脊たらおふ物をみせばや花の春　野童

炭　さうぶかけてみばや五月の風の色　洒堂

同　はつ日影わが莖立もつまればや　利牛

集　青葉して御目の雫ぬぐはばや　芭蕉

右いづれも。何シタラバイカニ何ナランとの心にみれば明らか也。へばやなとつかふは。なは詠嘆に

いへる詠のな也。これは何シタラバイカニ何ナランといふ心を。いかにもと人におもはせたき心にて。なとは添ふる之

集　年の市線香かひに出ばやな　芭蕉

荒　落葉かく身はつふねともならばやな　越人

哥にもへきかばやなへみせばやななどよむ之

もがな　もがとももがもとも哥にはつかふ之。その外ともがなずもがなにもが物にもが又もがもやもがもなもがもやなどもよあり（ママ）。いづれも例はなくとも。俳諧にもつかふべき之。凡もがなといふ詞はたとへば酒の飲たきに。とても叶はねば。水なりともほしと思ふ時にへ水もがなとよむ心之。されば。本意の事はとても叶はぬにし置て。かたはらの事をねがふ詞なれば。いたりてかたき事をねがふ詞之。かく側をねがふ心となるは。もの字あるが故之。くはしくはこゝにいひつくしがたし。後世セメテといふ詞。上古はなき詞なるが。そのかはりにもの字をつかひ。セメテの心としたる哥。萬葉集などにいと多し。天智帝の大御哥に。へいもが家もつぎてみましをとあそばしたるは。御本意は妹がかほの見たくおぼすに之。これらをもても。もの字の心をさとるべし。がなは畢竟哉を濁りたる之。すべて濁

音は。ふたつの物をひとつにあはす聲なり。たとへば山さくらといへば山と櫻と之。これをさの字を濁れば。山のさくらといふ心になるがごとし。されば哉といふほどの心のねがはしさなるをみせて。がなとは濁る之。哉といふ詞。もとたづぬるほどの心あれば。その心とねがふ心とを合せてみする心之としるべし

集　子日しに都へゆかん友もがな　芭蕉

てしがな　てしがともつかふなり。又何も何てしが何も何てしがなともつかふ之。もの字あるとなきとは。上のもがなにいふがごとく。本懐の事あるを。それは叶はぬにしおきて。かたはらの事をねがふ心之。凡てしがなてよてきてんてしてめなど。ての字ある天尓波は。てといふ字の下に。別に詞あるべきをはぶきたる物之。たとへば。てしといふは。テオイタといふ心之。てんは。テユカウといふ心之。（テノ下ノ詞ハ。コレニカギレルニハアラズ）かやうに詞をはぶきたる物之としるべし。されば古今集の。〽耳なしの山のくちなしえてしがなといふ哥は。耳梨山の山梔子をえて。染くさにするといふことのあらまほしといふ心之。同集〽梓弓はるの山べにうちむれてそこともいはぬたびねしてしがといふ哥は。心のあひたる友とつれだちて。いづかたといふ事なしに。春山にたびねして。おもふかぎりたのしみをつくしたきと

の心なり

も何しが これもての字なきばかりにて。わが望の事をなしえたりといふやうにあらまほしと、成就のうへをねがふ心なり。哥には〳〵かひがねをさやにもみしがとよめり。甲斐の山をさはりなく見たりといふことのあらまほしき心なり

ね これを願のねといひて。哥には〳〵たえなばたえね〳〵ひなへさそはねなどよめり。これはもと夫倫のぬ（世に早のぬといふこれ之）のかよひたるにて。願といふうちにも。物事のおもふごとゝなりはてんことをねがふ心なり。てしがしがなどもさる心ながら。しとぬとはその心たがへる詞なれば。ねがふやうもそれにしたがひてかはる之。しとぬとの条下をみて心うべし。かの〳〵玉のをよたえなばたえねといふ哥も。命のたえんとならば。なまなかにとりつゞきてあらずて。絶はてゝしまへとねがふ心之。さればテシマへといふ俗語によくあたる天尓波之

以上みな發句に例なけれど。哥の例をもてこゝにのす。たとひ例なくとも。つかひて句意をたすくべき之

○誂屬　上ニイヘル如ク。コレハ人ニモ物ニモ向ヒテ。トセヨカクセヨトアツラフル心ニテ。願トハ筋コトナリト知ベシ

［よ］これは俗語にいふヨに心同じ。しかれどもすこし心えてつかふべき事あり。むかふのものゝ。心つかずしらざる方へ引よせて思はする心之。コレ五十音ニヨレル義之　俗語につねにいふにも。おのづからかゝる音義はそなはりたれども。人〻しらず〳〵ヨとはいふ之。さればかくくはしき義をしらずともありぬべき事ながら。ふと事にあたりて。かやうの心ある時。いかなる天尓波をかつかはんと。みづからまどひたる時。又は人の哥をも發句をもなほしなどする時などは。かく義をくはしくしりたらねば。たしかにこれを定むる事あたはざるもの之。此故にわが家學。五十音の義によりて。かくその義をくはしくする也。後世の人の心にては。迂遠（マハリドホ）なることをいふやうに思ひもいひもすべければ。此ひとつにはかぎらぬ事ながら。こゝにこれを弁じおく之

菅廟奉納　　　　　　　　　　　　　　　　龜洞

荒うぐひすも水あびてこよ神の梅

これは。鶯の。水も浴ずして神の梅に來てなくをば。かしこくおもふによりて。沐浴じて後來よと。鶯の心つかぬ所へ引よせてあつらふる心之

猿　かたつぶり角ふりわけよ須磨明石　芭蕉

荒　春の雨弟どもを呼でこよ　鼠彈

同　若水をうちかけてみよ雪の梅　龜洞

許六ヲ木曾ヘ別ル

猿　たび人のこゝろにも似よ椎の花　芭蕉

荒　星崎の闇をみよとやなく千鳥　同

同　もろこしに富士あらばけふの月もみよ　素堂

狩野桶トイフ物ヲ其角ノ餞ニオクルトテ

同　狩野桶に鹿をなつけよ秋の山　荷兮

同　首出して岡の花みよ蚫とり　同

同　霧はれよすがたを松にみえぬ迄　鼠彈

同　水あびよ藍ほす上をふまずとも　釣雪

吉野ニテ

續　椀賣も出よよし野の初しぐれ　空牙

荒　砧うちてわれにきかせよ坊が妻　芭蕉

戀

同　きぬ〴〵を霰みよとてもどりけり　冬松

十月更衣

同　玉しきの衣かへよとかへり花　荷兮

續　顏に似ぬ發句も出よはつざくら　芭蕉

同　酒部屋に琴の音せよ窓の花　惟然

炭　あかつきの目をさまさせよ蓮の花　乙州

猿　うき我をさびしがらせよかんこ鳥　芭蕉

翁ヲ茅舍ニヤドシテ

同　おもしろう枩笠もえよ薄月夜　土芳

春　風のなき秋の日舟に網いれよ　荷兮

前句ヘ碁打を送るきぬ〴〵の月　野水　コレハ碁ノヿニノミアル心ヲオドロカシテ。よトイヘルモノナリ

續　齒朶の葉にみよ包尾の鯛のそり　耕雪

冬　うぐひす起よ紙燭とぼして　芭蕉

前句ヘ櫛箱に餅すゆるねやほのかなる　荷兮　コレハ鶯ノ元旦トモシラズアル心ヲ。オドロカシタル心ナリ

員　かけがねかけよ看經の中　野水

前句ヘ天仙蓼に冷食あさし春の暮　荷兮　コレハ人ヲ憚ル心モナキヲ。オドロカセルナリ

同　うちむれてうらの笘屋の潮干みよ　越人

前句ヘ着もの丶糊のこわき春風　同人　コレハスギハヒニ一途ナルモノ丶心ヲ。オドロカシタルナリ

猿　野を横に馬引むけよほと丶ぎす　芭蕉

同　はひ出よかびやが下の蟾の聲　同

翁ヲ茅屋ニマ子キテ

炭　もらぬほどけふは時雨よ草の庵　斜嶺

冬　我月いでよ身はおほろなる　杜國

前句ヘ江を近く獨樂庵と世を捨て　重五　コレハワガ身ノナリ出ル道絶タルニナシ置テ。ヨトハイヘルナリ

これらの例。上の詠のよ。にまがはすべからず

「や」このやは。哥にへなけや鶯へこやとも人をなどよめるたぐひなり。よのかよへるなり。されども。やは五十音の阿緯（アヌキ）にあり。よは於緯（オヌキ）にありて。その義相反したり。されば。よはむかふのものに心をつくるほどの心之。やはむかふの物のわがあつらへにまかすまじきを心とする之 コレニテ。詠疑ナドノやニ。ソノ義一致ナルコトヲオモフベシ

荒　のこる葉ものこらずちれや梅もどき　加生

これ。のこる葉はのこるともやむことをえぬに。しひてあつらふる故にやといふ之。よのごとく心をつくる詞にあらざる事。よく思ふべし

荒　詞書　ある人のもとよりみよやとて落葉を一籠おくられて云〻　コレハ見ルホドノ物ニテモナキヲ。シヒテやトハアツラヘタルコヽロナリ

續　青柳のしだれくゞれや馬の曲　九節

集　草の戸をしれや穂蓼に唐がらし　芭蕉

「ね」これを誂のねと云之。上の願屬に出せるねとおなじ詞にして。誂らふる心にもつかふが故に。又こゝにもその条をたつる之

［なん］これを世に願のなんといふは。誂とわかるゝ事をしらざる故之。わが家にては。是を誂のなんといふ之。なんといふ心。あつらふる心にて。願ふ心にはあらざれば之。テクレイといふ俗語にあたる之。もとへなんへけんへらんなどんの字そひたるは。たゞへなへけへらと一字なる心なり。その故は。へんといふ音はありて文字なし。文字なきが故に。むにみなどをかりてかく之。難波（ナニハ）丹波（タニハ）錢蘭（セニラニ）などは。にをかりたり。へなんへけんへらんなどは。むをかりたり。蟬（セミ）などは。みをかれり。もとより文字なきもことわりなるは。五十音の外なればなり。われ五十音を經緯弁とてくはしくとけるにいふがごとく。へんは五十音の源にして。口を閉ながらある音之。すべての音。口をひらかずして音ある事なきに。へんのみひとりかくのごとし。へんといふ音。その口を開けばへうとなる也五十音の親は。へうなりその源はへんなり。此故にこれを神音のうとは名づけおけり。これ成元がおもひえたる事なれば。きかん人思ひよるまじき事なれども。今このなんをとく因にこれをいふなり。されば此へんは。心のうちにして物を分別することをさとす音なり。俗にも。いはずして合点ゆきたる事ある時。へン、といふをも思ふべし。なの字の義は。詠の屬になの条にいふがごとく。ひとつにはならぬはづの物を。ひとつ物になす心なれば。我思ふことは彼は心もなきをしひて一枚ものゝごとくなすべしと。心のうちに思ふぞとさとす心之。へんの字そへる詞は。すべて心のうちにての形容にして。みする詞なりとし

るべし。詠のなは。わが心の彼とひとつ物にならぬをなげく心あるにて。猶ひとつことわり之。これ皆上の詞下の詞のさまによりて。屬はわかるゝ事なり

○近昔より。あれなといふ詞出來たり。此なも即このなん之。かへりて上古は。なとばかりもつかひたる事なり

拾　瓜つくる君があれなとゆふすゞみ　芭蕉

○誂らふるにへゆけへのぼれへいへへつくせなどいふは。いづれも裝の詞の下の衣緯（エヌキ）になりたるにて。衣緯の義の誂らふる心となる之。天尓波にはあらず

續　ほし合を見置てかたれ朝がらす　凉葉

同　山人のひるねをしばれ蔦かづら　桃妖

同　魚あぶる幸もあれ澁うちは　馬莧

猿　一月はわれに米かせ鉢たゝき　丈草

同　いとゆふにかほ引のばせつくり獨活　配力

同　弱法師わが門ゆるせ餅の札　其角

これらのたぐひ。天尓波と思ふべからず

○禁屬

イサムトハ。カウハスルナ。ソウハスルナト。制止スル心ナリ。スベテ誂モ禁モ今ノ俗言ヨリミレバ押柄ナルヤウナリサレドソレハ今ノ耳ニテキクガ故ナリ。古ハサルヿナク。上下ニカヽハラズイヒシナリ

［な］上の誂のなんの下にいふがごとし。これ又。われはさうはさせまじとおもふ心を。彼は貪着もなきを。しひてひとつ心にせんとする心なり。まへにもいふがごとく。かく制止する心となるも。上下の事がらによりて也。なの字の義はたゞひとつにて。さま〴〵に變化する事。たとへば。木偶（ニンギヤウ）の衣裝のごとし。官女の衣裝をきすれば官女となり娼妓のよそほひをつくれば娼妓となるなり。五十音の本義は。裸（ハダカ）木偶のごとしと知るべし

猿　春かぜにこかすな雛の駕籠の衆　　荻子

雛の駕夫。春風にはよもこけじと油斷におもふべき心を。猶大切にさせんと思ふわが心とひとつにせんとていふ之。もし此制止に叶はぬ時は。わが心とはふたつのものになる之。それをふたつのものにせじとするにて。なとはいふ之

續　蝶の舞おつる椿にうたるゝな　　闇指

同　あたまうつなと門のかきつけ　　芭蕉

荒　朝がほをその子にやるなくらふもの　荷兮

炭　御火燒の盆物とるな村がらす　智月

門人送別

集　わするなよ藪の中なる梅の花　芭蕉

同　われに似なふたつにわれし眞桑瓜　同

同　うたがふなうしほの花も浦の春　同

猿　氷ちかき岩梨をるな猿のあし　千那

同　はつ鳫に行燈とるなまくらもと　落梧

これらいづれも。わが制止せんと思ふ心とふたつものになるを。ひとつ物にせんとする心とみるべし。さて以上の句どもは。上の詞のうけざま。哥によむとひとしきに。俗語にては。上のうけざまたがふ也。その俗語のやうにいひし句は

續　をみなへし鵜坂の杖にたゝかれな　馬莧

荒　松の木にふきあてられな秋の蝶　舟泉

これらの句。古言のごとくならば。へたゝかるなへあてらるなといふべき也。されどもこれはもとよ

り俗語にしていふ俳諧の事なれば。いづれにてもよき事なり。さりながらこれら。へたゝかるなへあてらるなといひたりとて。あしきにもあらず。事によりては。俗語なりにいふが興ありてよき事もある物なれど。さるゆゑもなき詞は。正しからんにしく事あるべからず。句によりて差畧あるべき事之。俳諧と。だにいへば。俗語にてすみたる事なりと。後世の俳者は。心えたる人もあれど。すでに蕉翁が桐一葉の中をみるに。なるべきたけは。いやしき詞はつかふなといはれたり。されば今いふ事。さらにわが哥よみひが見にあらず。みん人心あるべき事之

な何そ　な何そといふは。なとばかりいふよりは。一段その事に切なる禁詞なり。されば餘をゆるす心はかゝる也。たとへば。いつまでもこれはするなといふ時はななり。又明日などはくるしからぬが。今日はするなといふ時は。な何そなり。これほどのたがひめあり。よく〱つかひおぼえてつかひわくべし。漢文に。勿莫の字のわかれと同じ心なりと脚結抄にみえたり。これそといふ字のそふとそはぬとにてのわかれ也。しかるに。なとはいはずして。そとばかりつかはれたる句あり。これは元來あるまじき事なり。哥にはかつてよまぬ事之。されば心あらん人は。かならずなといはずそとばかりはつかふまじき也畧する例もある事なれども。それは詞によるべし。これらのなは。はふく例には混ぜられ

ぬ事之。天尓波の理を知らぬ人は。畧例之と思はんかとてことわりおく也貞柳が狂哥に。栞の赤葉なるを。人の持來ては門のあたりに捨けるをわびて。書つけてはりたるけるよし(ママ)へわれあかば人もあかばとおもふべしかさねてこゝになすてたまひそ　アカバハ飽バト赤葉トヲカケタリ。なハ栞ニヨセテイヘルナリ　これらは正しくつかはれたり。此狂哥の意は。人のいとはぬ所へもち行て捨られよといふ心をもちていはれたる也。すべてこれを制してかれをゆるす處あるが。此てにはの正義之

句選　さかづきに泥なおとしそむら燕　芭蕉

集　花に遊ぶ虻なくらひそ友すゞめ　同

尼貞壽ガ身マカリケルトキ、テ

有磯海　數ならぬ身となおもひそ寛祭　同

以上正例なりかのなの字なきは

浪人ノ宿ニテ

猿　鼠ども春の夜あれそ花靱　半殘

集　玉川の水におぼれそをみなへし　芭蕉

春　鳥羽の湊の踊わらひそ　冬文

これらなの字はなけれど。その義はな何そとつかふ例のごとくに。へ鼠どもの句は。夏秋冬あるゝ事は勝手次第之とゆるす所あり。へ玉川のといふ句は。餘の水にならば溺れもせよとゆるす所あり。へ鳥羽の湊の句は。餘の事はわらふも勝手次第とゆるす所はあるえ。されども。まへにいひしがごとく。たとひ翁の句ありとも。はぶきてはつかふまじき例之

○なゆめゆめ何なゆめな何そまたゆめよゆめ何なども つかふなり。ゆめとはへゆまはるなどいふゆの心にて。ゆとはいむといふふたつの音のつゞまりたる之。此故にゆはへいむの心にてへいむとはつゝしむ之。萬葉集には。勤愼努などの字をみなゆめとよみたり。つとめよ。つゝしめよとの心なる事。この假字にてもしるべし

俳諧天尓波抄卷之二終

俳諧天尓波抄卷之三

○十九家

○曾　家

ぞ凡ぞといふは。もとそれといふ詞をはぶきたる心にて。濁りてぞとはいふなり。その本義。人の思ふ筋あるに。其うしろの筋へ思戻らせ。その筋をつたはする詞之。にごる心は。わが思ふ意味と同心させんためなり。古今集へ名にめでゝをれるばかりぞといふ哥は。たゞこのをみなへしといふ名にめでゝをるといふ筋へ。人意をそはせんの心にて。人の心は。色にまよひて馬より落たるかと思ふべき。その心を引もどしてぞとはいふ之。重く思ふ心を。輕き所へ引もどして。そのあだならぬ心味を思はせたる之。これによりて。ぞは決定の詞之と世にはいへどそれはたゞうはべの心を見とりていふにて。実はいとあらきこと也。決定といふも。さま〲決定のしかたもある事なれば。決定とばかりいひては。ぞの字を手ごたへしてはつかはれぬ之。今いふ所の本義。五十音より出たるなれば。心あらん人は。ふかく心を用ひてつかひしるべし。ぞに三例ありへつむるぞへうたがふぞへ中のぞ但コノ中のぞトイフニハ。畧ス

ルト畧セヌト二例ナリ。ナホ下ニイフベシ　これなり

○第一　つむるぞ

春　柳よき陰ぞこゝらに鞠なきや　重五

この句柳よき陰は蹴鞠によろしといふ事のすぢへ心をなはせてそこの意味を思はせたるものゝ

炭　年よれば聲はかるゝぞきり〳〵す　智月

集　蛤の二見にわかれゆく秋ぞ　芭蕉

同　かくさぬぞ宿は菜汁に唐がらし　同

同　よし野にてさくらみせうぞ檜木笠　同

荒　うつかりと春のこゝろぞほとゝぎす　市凶

同　鳫くはぬこゝろ佛にならはぬぞ　荷兮

人の鶉（ママ）と鶉とをくはぬに感して雁をくはす

春　さきわけの菊にはをしき白露ぞ　越人

同　はだしのあともみえぬ時雨ぞ　重五

冬　秋水一斗もりつくす夜ぞ　芭蕉

炭　鉢巻をとれば若衆ぞ大根引　野坡

同　雪の日にいほり借うぞみそさゞい　依々

題竹戸之衾

猿　たゝみめはわが手のあとぞ紙衾　曾良

これらいづれも。ジャゾといふ俗語によくあたる之。されども中には。シャゾとつゞかぬ句もあるは。外にはぶきたる詞あれば之。これは。物の名をうけたるは。いづれもジャゾとよくつゞく之。詞をうけたるはつゞかぬ之こゝに引たる智月が〽年よればといふ句。荷兮が〽鳫くはぬといふ句。依々が〽雪の日にといふ句など。ジャゾとはつゞかぬ句ども之。此〽年よればといふ句は。邑はかるゝならひジャゾといふ心。〽鳫くはぬといふ句は。佛にならはぬ心ジャゾといふ心。〽雪の日にといふ句は。いほりかさうと思ふ心ジャゾと心うれば。たゞ同じ心えなる事みるべしいづれも。人の心を引もどして。こなたの筋へそはせて。其筋の心を思はする心之

○第二　うたがふぞ

うたがふ心となれば。その本義たかふべきやうなれど猶かはらずこれは其うしろなる所の筋へむかふの筋持たる人の心を引もどしておもはせんとする心之。濁るは。かなをがなといふにおな

じく。わが思ふ心と人の心とひとつ物になさむとする心なり

荒　なに事ぞ花みる人の長刀　去來

此句は長刀さしたる人のその心のうちの物好をわが心えずおもふすぢへ引もどして。そのいはれなかるべきことを思はする心なり。さればたとひいかなる理屈あるかはしらねど。理屈にあたらぬ事ならずやと問ひ詰て。むかふの人の。なるほどゝわが方へ同心するやうにいふ詞ゝとしるべし

集　秋ふかき隣はなにをする人ぞ　芭蕉

同　風髭を吹て暮秋歎ずるは誰が子ぞ　同

猿　はつ霜になにとおよるぞ舟の中　其角

荒　初花にたが傘ぞいま〳〵し　長虹

續　百なりていくらが物ぞ唐がらし　木節

猿　なに事ぞ粥すゝるにも涙ぐみ　去來

炭　たが母ぞ花に珠數くる遲さくら　祐甫

同　かづらきの神はいづれぞ夜の雛　其角

これらの句まへにいふがごとく。いづれもその所謂なきをもどきおもはせたる心あり。よく〳〵心をつけてみるべし。さればかりにうたがひて。その所謂なきを思はする詞之と知るべし。又へぞもへぞやへぞはへぞとよへぞやもへにけるぞもなど。哥にはつかひたり。これらがうち

猿　いつたきて蕗の葉にもるおふくぞも　里東

この句のみ見ゆ。もは上の詠のもなりあはせて心うべし

○第三　中のぞ

これはつねに多くつかふ例なりへ何ぞ何けるへ何ぞ何しきなどつかふこれ之。これはぞの字の下にある詞が。その意味を思ひとらする導の詞之としるべし。義はまへにいふへつむるぞに露たがふ事なし。たとへば能因法師がへ山寺の春の夕ぐれきてみればといふ哥は。人たれも〳〵無常の理を弁へず。うか〳〵としてくらすを。無常の理へ心を引もどして。はかなかるべき理をおもひとらせんとて。へ花ぞとはいふ之。さて下のへちりけるは。即寂滅爲樂の所へ思當らする詞之

越人ト吉田ノ駅ニテ

荒　寒けれど二人たびねぞたのもしき　芭蕉

此句。たひねはくるしと。たれも〳〵思ふべき心を引もどして。二人。ともにぬるそのうれしさを

思はせたるにて。へ賴もしきとはみちびかれたる之。たのもしきの詞妙之といふべし。女と二人ぬるは。暖なるべき事いふもさら也。越人と二人のたびねなれば。女とぬるたぐひにはあらねども。二人といへば寒かるまじと思はるゝ心を。へたのもしきとはいはれし也。これらの詞。後世の俳者。ふるきよゝの哥などをもみず。たとひみても言靈のさかひに心いたらざればかゝる詞づかひなど。おもひもよらざる事之。蕉翁が人がら。ならびにふかくやまとだましひありしことも。これひとつにても思ひやるべし。これらの詞をみて。後學。はづる心も出來て。むかしにかへらん人もあらば。わが言靈の道をとく幸たるべしかし

瓢　こゝろのうちに戀ぞありける　　里東

荒　ちるたびに皃ぞひろひぬ芥子の花　　吉次

同　一トしきりひだるうなりて夜ぞ長き　　野水

同　はなもなき梅のずわいぞたのもしき　　冬松

集　うの花も母なき宿ぞすさまじき　　芭蕉

荒　佛より神ぞたふときけさの春　　とめ

猿　雪の日は竹の子笠ぞまさりける　　羽笠

荒　ねいらぬにめしたく宿ぞあけやすき　冬松
同　若菜よりたなばた草ぞおぼえよき　荷兮
同　うち明て施す米ぞ虫くさき　同
同　しら菊のちらぬぞ少し口をしき　昌碧
同　おぼえなくあたまぞさがる神の梅　舟泉
同　爐を出てたび〳〵月ぞおもしろき　野水
猿　じねんこの藪ふく風ぞあつかりし　野童
瓢　ながめやるあきのゆふべぞだゞびろき　荷兮
員　印判おとす袖ぞもののうぎ（ママ）　野水
同　馬見よりふみはづしてぞ落にける　冬文
春　行燈のすゝけぞさむき雪のくれ　越人
集　夢よりもうつゝの鷹ぞたのもしき　芭蕉
同　口きりに堺の庭ぞなつかしき　同
同　霧しぐれ富士をみぬ日ぞ面白き　同

續　駒鳥のねぞ似合しき白銀屋　長虹

瓢　なによりも蝶のうつゝぞあはれなる　芭蕉

員　袖ぞ露けきさがの法輪　釣雪

此同じ例にて下の詞をはぶきたる例あり

春　あとぞ花。四の宮よりは唐輪にて　旦藁

冬　今ぞうらみの矢をはなつ声。　荷兮

春　蚊ひとつにねられぬよはぞ春の暮。　重五

こゝに加へたる詞をみて。畧例なるをしるべし

○また

集　ほとゝぎすなき〳〵とぶぞいそがはし　芭蕉

この句。哥にはかやうにはうちあはせぬ事之。へいそがしきといはでは。正例にあらざるなり

猿　あやまりてぎゞぞおさゆる鯖かな　嵐蘭

此句などもつかひ方よからぬ之。これはもとより。哉と下にいひたる事なれば。ぞの字はおかるまじき事なるを。しひてつかはれたるは。哉のうへにつかひてもくるしからぬものと思はれたり

けん。されどこれは上古以來さらに〳〵例なき事なれば。たとひこの句ありとも。ゆめ〳〵つかふべからざる事之

○又何ぞ何きとつかふ例のごとくにして。さならぬあり

冬　かぶろいくらの春ぞかわゆき　　野水

これ之。これはいくらの春ぞと問ふ心にて。その年のゆかぬ所が可愛きといふ心なり。これらははたらかせたるつかひやうなれど正しき例にあらざる也

こそ

こそは。これそれといふ詞をつゞめたる心なる事。脚結抄にくはし。元來このこれといふ詞とそれといふ詞とは相反したるが如き心ある詞之。その故は。これとは。しひてひきつくるこゝろあり。それとは。そはしむるこゝろなれば（コレハか經トさ經トノワカレニテカクハナルナリ）おのづからけぢめあるなり。これふたつをひとつにしたる天尓波なれば。いとも〳〵その用多き詞なるを。後世はいかなる心とも心えず。たゞ古哥の口拍子をのみおぼえていふ事となれり。されど古人の。しりてよめるあとを似するなれば。おのづからそこ〳〵にはつかひあつる事ながら。手ごたへしてつかふ人よにみえず。すべて天尓波は。言靈をひゞかすものなれば。その哥により句によりて。こゝはこそといふべき所之と。みづから心うる

やうになくては叶はぬことなり。このひとつにかぎらぬ事ながら。ついでにこれをいふは。こそは後世哥よみなども多くよみ損したる天尓波なれば。こと更にいふなり。古今集にへ梓ゆみひけばもと末わが方によるこそまされ戀の心はといふ哥は。ひるもわするゝとにはあらねどもといふ心をおもはせて。こそとよめるにてひるの事はいはざる。これらはこそとよめる詮ある之。また同集へそこひなき渕やはさわぐ山川のあさき瀬にこそあだ波はたてといふは。淺せにこそといはゞ。渕はあだ波のいかでかたゝんといふ心は。おのづからあるに。此上句あるは。こそをよみながら。殺したりといふべし。かゝることわりをいはずして言外に思はせんためこそこそはよむを。かやうのあやまり。はや上古よりもある事之。よく〳〵心えてつかふべし。まづこの義は。これと定め置て。さてそれといひてそのすぢへむかふよりしたがふやうにする天尓波之これに二例あり。下のうちあひの詞を畧すると畧せぬとなり

〇第一　あたるこそ　畧セヌ例ヲ云之

多　炭うりのおのが妻こそ黒からめ　重五

此句は。その夫にいふ心にて。お手前までが色黒きはなに事ぞやと思ふ心を思はする爲なり。これらのつかひかた。まことによく叶へり

集　元日に田毎の日こそ戀しけれ　芭蕉

同　白魚に價あることそうらみなれ　同

瓢　喰物に味のつくこそうれしけれ　珍碩

拾　わづらへば餅こそくはねもゝの花　芭蕉

荒　ふたつこそ老には足らねとしの春　落梧

○第二　めぐらすこそ　コレハ畧スル例ヲ云ナリ

荒　さればこそあれたきまゝの霜の宿　芭蕉

この句は。〵さればこその下に。かねて思ひしにたがはぬ事なれといふべきをば畧したるゝ。これらは。〵さればといふ詞をこと定めて。さてそのすぢにしたがひて思はせんためにそとはいひたる心なり。畧するも畧せぬも。心得はかはる事なし

拾　秋のくれ男は泣かぬものなればこそ　芭蕉

猿　はつざくらまだ追〻にさけばこそ　利雪

これは。なほこれよりおひ〳〵にさけばこそ。なにとなく心にもそれをたのみに思ひて。これほどのあはれさなれ。もし追〻にさくといふ事なくば。此うへいかに〳〵あはれならんといふ心を

思はせたる也即〳〵まだしもこれほどのあはれさにてすめといふ詞を畧したる心なり
かくのごとくいとも〳〵はたらき多き天尓波なればよく〳〵正しき例につかひおぼえて。言靈をたすくべき之。いづれも今一事の。陰(カゲ)になりたる方とさしわけて。しひてこなたへ人の心を引つけて。さてその引つけたる筋にそはする心なり。しかるに今片方の方をも詞にいだすは。こそといふ天尓波の詮はなき事ぞかし。すべてこれにかぎらず。天尓波は。ふたついはねば聞えぬ事を。片方をいひて片方を思はする爲のものなり。これをよく味はひしらば。すべての天尓波掌のうちたるべし
○又こそはとつかふ事もあるなり。これは。こそといふ所の事がら。(ママ)をば。人の混じたる所あるを。ことわらんために。はをそふる之。はの心は。なほ下の波家をみあはせてしるべし

○平　家

[を] をといふ天尓波は。たれも〳〵俗語にもつねにつかふ詞にて。なにの心もなくつかひて。おのづから本義にもかなひてある詞之。されども。ふとをにやせん。にやせんなどまどはれたる時は。心をしらではあるまじき事なれば。今くはしくいふ之。（をノ字無用ナル所へ。をトイフヿ。俗語ニモ多キコトナリ）たゞつねにいふがごとく。〽ソレヲカウスル〽コレヲドウスルといふ時の用なれども。琴はひくべき物につくりたる物なれば。琴をひくとはいふべからず。されども。物思ひにてもありて。なぐさめんとて心の外にひくならば。琴

をひくとつかふべき之。又書物はみる物にしたる物なるが故に。書をみるとはいふべからず。されどもし書物ぎらひが書をみるといふ事もあらば。をといふべきがごとし。かくのごとく。もとよりそれがさうすべき物ならば。をといはでも聞ゆる事なれば之。此故にそれはさうすまじき物なるにさうするといふ事には。必をの字をつかふべき之。古今集離別の哥の詞書に〽人をわかるとのみ書て。〽人にとはかゝぬ事によりて。古來國學者。にとをとはかよふ之といふ。これすべて國學者の逃詞なり。此たぐひなる國學者の逃詞は〽音通〽通用〽やすめ詞〽助辞〽發語などこれ之。わか家學。これらをひとつもいはず。ひとつひとつその差別をば五十音もてわかてり。にをかよふといふ事。さやうにわがまゝにかよはしてもよきならば。けりをらんにもかよはすへけれど。さすがにさやうにはえいはぬ事。これ逃詞なる證なり。とく者もとく者なれど。またまなぶ人も。此逃詞をそれなりにしてうたがひもせぬは。いかなる淺ましさそや。かの詞書。かならずをと書てにとはかゝぬをもても。かよはぬはしるべし。これは。別るべきこゝちはさらになき人なるにそれをわかるといふ心にて。ふかく別るゝ人のをしき心をば。をとはいふ之。別にはをしからぬ別といふはなき事なるが故に。いつにてもをとはいふ也。にといふは後世の俗語なるを。俗語ニハカヽル誤多キモノナレバ。古言ノ貴キヿシルベシ　れき〱の國學者たち。俗語之とも弁へずして。にとをとかよふ之などいふは。まことに面目もなきことならずや

猿　うき人を枳殻垣よりくゞらせん　芭蕉

此句は。うき人なれど。もとわが思ふ人の事なれば。いかにもして心をとらんと思ふべきことなるに。あまりの事にてうらめしき心を。をとはいはれたる之

猿　かたちなき画をならひたる(ママ)會津盆　嵐蘭

炭　ない袖をふりてみするものゝおもひ　利牛

荒　あかつきをむつかしさうになく蛙　越人

同　わがまゝをいはする花のあるじ哉　路通

炭　この島の餓鬼も手をする月と花　芭蕉

同　年よりたものを常住ねめまはし　利牛

續　山ぶしや坊主をやとふ魂まつり　沾圃

同　たつ鴨を犬追かくる堤かな　乍木

同　巣の中や身を細うして親燕　峯嵐

荒　五月雨や柱芽を出す市の家　松芳

瓢　蝙蝠ののどかにつらをさし出て　路通

炭　はつち坊主を上へあがらす　利牛
冬　ふしみ木幡の鐘花をうつ　荷兮
瓢　にくまれていらぬ踊の肝をいり　珍碩
冬　戀せぬきぬた臨濟をまつ　芭蕉
同　僧ものいはず欵冬をのむ　羽笠
續　猪を狩場の外へ追にがし　曲翠
同　いそがしき中をぬけたるすゞみ哉　游刀
炭　飯の中なる芋をほる月　嵐雪
集　うぐひすや竹の子藪に老をなく　芭蕉
員　いく年を順礼もせで口をしき　松芳
同　よさむの蓑を裾に引きせ　釣雪
猿　年の夜や親父をきけば小手枕　長和
炭　敷金に弓同心のあとを繼　野坡
員　かゝる府中を飴ねぶりゆく　野水

冬　江を近く獨樂庵と世を捨て　重五
春　傾城乳をかくすあけぼの　昌圭

○また。此下のうちあふべき詞を畧したる例あり。心えはたゞおなじ事なり。いづれも。その畧せる詞をくはへ置たるをみて心うべし

猿　稲の花これを佛のみやげ。哉　智月
炭　枝ながくきらぬならひを。椿哉　湖春
荒　先いはへ梅を心。の冬ごもり　芭蕉
同　里かすむゆふべをまつのさかり。哉　野水

品川ニテ人ニ別ル
同　沢庵の墓をわかれの。秋のくれ　文鱗
同　さみだれは傘に音なきを雨間。かな　龜洞
續　おのづから草のしなえを。野分哉　雨燕
猿　あしはらや鷺のねぬよを。秋の風　山川
同　紙鳶されて青(白)ねが峯をゆくへ。哉　桃妖

同　葉がくれぬ花を牡丹のすがた。（トスル）哉　全峯

員　風の目利を。（スル）はつ秋の空　荷兮

炭　柿のなる本を子供のより所。（ニスル）　利牛

三月尽

續　おぼろよを。（ヨシム）白酒うりのなごり哉　支考

有徳ナル人ニツレテ參宮スル從者ノ餞ニ

猿　みじかよを。（ヨシム）吉次が冠者になごり哉　其角

神田祭

同　花ずゝき大名衆を。（マチク）まつりかな　嵐雪

冬　寅の日のあしたを。（大切ニシテ）鍛冶のとく起て　芭蕉

同　樫檜山家の体を。（ナシテ）木葉ふる　重五

猿　梅の木やこの一筋を。（タガヘス）蕗のとう　其角

明石夜泊

同　蛸壺やはかなき夢を。（ミルラン）夏の月　芭蕉

續　わがでに豚を。（ミテ）大事がらるゝ　同

炭　絎（カセ）賣の七ツばかりを。音（サダマリニ）信て　利牛

これらいづれも畧せる法なり。いづれの天尓波とても。打合を畧するはおもしろきものながらをはことに畧するに意味ふかき天尓波なり。その故は。上古の哥には。此をといふ天尓波をば。かの正例のごとくコレヲカウスルなどやうにつかはずして。歎息のこゝろに。をとばかりよみはなしたる哥多し。これ畧せる例の格なり。かく上古よりつかふ事なれば後世までも。なにとなくめでたく聞ゆる之。いはゆる八雲神詠のへその八重垣をのたぐひ之。國史中萬葉集中など例多し。

○又この畧例のやうにて又つかひ方かはれるをあり。（上古ノ例ハ。コノ格ノ心ナリ）これを。おもきをと名づく。へジャニへジャノニへノニなどいふ俗語の心なり。これも本義はたがふ事なし。もとよりさはあるまじきものなるにさある心をもどきいふ心。すなはち上にくはしくいへる心に露たがはず。よく／＼心うべし

猿　しづかさを（ジヤノニ）珠數もおもはず網代守　丈艸

荒　しら菊や素顔でみんを（ヨウノニ）秋の霜　野水

炭　いそがしき春を（ジヤノニ）雀の柿袴　洒堂

上の正例のうちにもへかゝる府中を餡ねぶりゆくなどいふ句は。ゆくといふ詞。をにうちあひたれば。正例にはあれども。此おもきをの心もこもりて。かゝる府中ジヤノニといふ心となれり。これもとをの本義なれば之。哥にては。ものをとよむ事つねに多し。即この重きをの例なり。そのほか。へぬをへしをへじをへざりしをへなりしをなどつねによむ之。いづれもこの例なり。これらのうちへものをとつかはれし句

集　青くてもあるべきものを唐がらし　芭蕉

同　ひるがほに晝寐せうもの床の山　同

この後の句。ものとばかりいはれたれども。へものをの心なり又俗言のまゝにつかはれたる句あり

拾　ふぐ汁や鯛もあるのに無分別　芭蕉

字數たらねばかやうにもいふ事俳諧の徳なり。されどノニといふと。をといふとは。そのこもる所の意味において。淺深大にことなる事之

○をばとよむ心は。をといふことの落着。人のおもひかけぬ方なるよしをさとす心之。濁音なるは。をといふ筋とはといふ筋とをひとつにして。わが心に同じくなさむがため之。猶下のはの条をあはせて心うべし

波　家

[は] はといふは。すべて物を引わけてことわる詞之。されどもそれに心うべき事こそあれ。たとへば。枩は木なり。萩は草なりなどいふも引わけたるにてはあれど。これらはもとより定まれる事なれば。こと更にひきわけていはでもよき事之。すべてかやうの類には。はの字。用なき所なり。たとへば。けふは十日也。所は五条之などいふも。その定まれる所をいふ事のやうなれども。けふは九日とか。又は十一日とか。まぎらはしき事ある時。けふは十日ぞと引わけてことわる心之。所はといふも。三條とか四條とか。まぎらはしき事ある時の用なり。このけぢめよく〳〵心えて。おなじ引わけてことわるうちにも。正面ばかりの事なるには。はの字は無用なる事をしるべし。此故に。へこれはへそれはなどいひて。問ふ詞ともなるは。その引わけてしりことわらんとの心なる之。されば物事の落着の。まぎらはしき事あるに。引わけてみする詞之としるべし

續　家は皆杖に白髪の墓まゐり　芭蕉

此句は。蕉翁故郷にかへられて。盆會いとなまれし時の句之。家とは。久しくかへられざりし翁の家之。家を出られてのち。さほど久しともおもはれざりし心にむかひてはといひて。いたく年へたりしをおどろかれし心をさとされたる之。後世の人は。かやうの所は心もつかず。家は皆老人ばかりにな

りぬといふまでの用と思ひて。おのれもつかふ事。いとかたはらいたき事なり。かくのごとく。すべてまぎれに對しての詞之としらば。生涯つかひあやまる事あるまじき之。これにへ清むはへ濁るはの二例あり。清むは

猿　秋かぜやとてもすゝきはうごく筈　子尹
同　名月や所は寺の茶の木はら　昌房
同　やがて死ぬけしきはみえず蟬のこゑ　芭蕉
同　草むらやゆりはなか〳〵花の皃　半残
同　海人の屋は小海老にまじるいとゞ哉　芭蕉
同　朝がほは鶴ねふる間のさかりかな　風麥
同　はたおりや壁に來てなく夜は月夜　同
同　春は三月あけほのゝ空　野水
同　市中はものゝにほひや夏の月　凡兆
同　ひるまではさのみいそがずほとゝぎす　智月
同　藏ならぶうらは燕のかよひ道　凡兆

同　道心のおこりは花のつぼむ時　去來
同　今は世をたのむけしきや冬の蜂　且(旦)藁
集　山ざとは萬歳おそしうめの花　芭蕉
續　一すぢは花野に近し畑道　烏栗
同　莚道は年の霞の立所哉　百歳
同　三日月に草のほたるは明にけり　野荻
同　穂はかれて臺に花さく椿かな　殘香
同　時〻は水に勝けり川柳　意元
同　曙はたちばなくらし旅姿　我峯
同　裁屑は末の子がもつ衣くばり　山蜂
同　何のあれかのあれけふは大師講　如行
同　さびしさは夜着をかけたる巨燵哉　桃先
同　高みよりしぐれて里は寐時分　里圃
同　うづみ火や壁には客の影ぼうし　芭蕉

同　冬川や木葉は黑き岩の間　惟然
同　牛のゆく道は枯野のはじめ哉　桃醉
同　鶺鴒家はとぎるゝはだれ雪　祐甫
同　老の身はこよひの月も内でみん　重友
同　山茶花はもとより開くかへり花　車痛
冬　三日月の東はくらく鐘のこゑ　芭蕉
同　秋蟬の虛(カラ)にこゑきくしづかさは　野水
同　うきははたちをこゆる丸顏　杜國
春　萱草は隨分著き花の色　荷兮
同　馬はぬれ牛は夕日の村しぐれ　杜國
同　尋よる坊主はすまず錠おりて　芭蕉
炭　ひだるきはことに軍の大事也　同
同　坊主の着たる蓑はおかしき　其角
同　濱まではやどの男の荷をかゝへ　野坡

同　此たびの薬はきゝし秋の露　同
同　日のあたるかたはあからむ竹の色　孤屋
同　京は惣別家に念入　利牛
同　弟はとう〳〵江戸で人に成ル　同
同　黍の穂はのこらず風に吹倒れ　野坡
荒　すがれ〳〵柳は風にとりつかん　一笑
同　みよし野はいかに秋たつ貝の音　破笠
同　衣がへや白きはものに手のつかず　路通
同　いなづまやきのふは東けふは西　其角
員　さびしさは垂井の宿の冬の雨　舟泉
同　一里の炭うりはいつ冬ごもり　一井
同　唱哥はしらず聲ほそりやる　嵐雪
同　駒の宿きのふは信濃けふは甲斐　野水
瓢　醫者のくすりはのまぬ分別　芭蕉

猿　身はぬれ紙のとり所なき　土芳

此句前句ハヘ大膽におもひくずれぬ戀をしてコレナリ。コノ前句ノ思ひくづれぬトイフニアタリテはトハイヘルナリ。思ヒクヅレ子バ。身モ亦サヤウニアルベキコトナルガ故ニ。はト引ワケテ。コトワレルナリ

これらの例は。下のうけざまも哥によむに同じ

○また哥にては。なりとよむべき所を。哉と置たる句あり。これは正しき例にはあらねど。畢竟なる哉といふべきを畧したるもの也

荒　大ぶくは去年の青葉のにほひ哉　防川

同　わか菜つむあとは木を刻る畑かな　越人

同　鴫突は萱津のあまのうまご哉　淵支

同　月花のはじめは琵琶の木どり哉　釣雪

同　春雨は伊勢の望一がこよりかな　湍水

これらいづれも。なる哉としてみれば。上のはの落着たしかにみゆる句なり。哥のうへよりいへば。あるまじき例なれども。これらはかの俳諧少字のゆゑにして。いづれも哉といふ上に。なるといふ詞を畧せるもの之。しかるを哉とつかひたるは。也とばかりいひては詠歎の心なきが故に。なりといふべ

き事とはしりながら。哉といへるものなるべし。よく弁へて正例との別をしるべし

荒　手のとゞくほどはをらるゝ櫻かな　　一橋

此句などは。下に哉とはつかひたれども。前にあげたる例にはあらず。正例なり。その故は。へ折らるゝといふ詞にてはの字落着すれば也。くはしく心えてわかち知るべし。また

荒　名月はありきもたらぬ林かな　　釣雪

この句はすこしおもふ所あり。いかにといふに。此哉はもと名月につきて。名月哉といふべき句意也。それをかくいはれたる故にすこし穏ならず。されど。名月は林をありくにあきたらずとの心なれば。名月はといはれたることわり也。此故に此句は。名月はありきもたらぬ也さても／＼名月哉との心を。かく上下になしたる之と知るべし。しかれども。句のつくりやうは。いかやうにもなる物なるを。しひてかやうにいはずともありぬべき事なれば。とにかくにこの句などは。いかに古人の例たりとも。まねぶべきにはあらずこそ

○濁るはありタラバナラバなどといふ心之へればへらばへなばなどもさまざまいふ之

集　たなばたにかさねばうとし絹合羽　　芭蕉

同　みわたせばなかむればみれば須磨の秋　　同

○毛　家

[も] もといふ心は。これもあれもなどいふもにて。もとよりそれが正面なる物事のあるに。その劣りなる物事をば。もとさして。かの正面を思はする義なり。これらは世人もよくしれる事ながら。つかふ所には。後世心えたがへることあり。たとへば。旦那が酒好なるに家來も酒好じやといふやうにつかふは。もの字の詮なき事なり。上のをの条下にいふがごとしすべて天尓波は。かやうにつかふ物にはあらず。凡物の理といふものはふたつにて落着するものなり。しかるにそれを兩方ともにいふ時は。我より理をつくして出すわざなるが故に。かの寃なくなる之。予つねに。言の道をしらんには神道をしるべしといふはこゝの事にて。もとより神道の敎。ひとへにこゝにある事なれば。そのふたつながらいひて。我より落着して出ては叶はぬことなり。さればその理をば。片方をいひて。片方は人の心にまかするが古人詠哥などのつね之。詠哥等は。もと言は寃を殺すが故に神道だにふるまへば言に及ばぬ事なれど。やむことなくいはで叶はぬ時の用なればこ。發句などは少字なれば。いよ〳〵これを弁へずしては。魂を入るゝ事かなふべからず。この。片方をいひて片方をしらさんがために。天尓波といふものはある事。卷首にいふがごとし。これによりて。家來も酒好なりとばかりいへば。さては旦那も酒好にこそと。きく人の心をもつておもふなり。そこを魂とはいふぞかし。よく〳〵此ことわりをし

りて。兩方をばいふまじき之。物事によりて。わざと兩方をいふべき事もあるは。その外に正面あれば之さなくは天尓波はつかふべからずこのことわりこゝにいひつくしがたし

猿　合歡の木の葉ごしもいとへ星のかげ　　芭蕉

これは七夕の句なり。合歡といふもの。葉いとこまかにして。其間わづかなるにて。たゞ一葉の間は。隔つるといふほどの間にてはなきもの之。されども二星のたまく〳〵あふ七月七日の事なれば。さほどの隔もいとへといふ心之。さて此もの字の心は。合歡の葉ごしをいとふほどの事なれば。まして他の廣葉大葉なる木の葉ごしは。げにくちをしき事ぞと。人の思はんやうに。もとはいはれたる也。これその廣葉なる木をいひて。さて。合歡をいはでは。ことわり聞えぬ事なるを。もの字にて片方を活かされたる。実にもの字の正例とすへき句之

孤屋ヲ品川マデ送リテ

炭　雲霞どこまでゆくもおなじ事　　野坡

同　このくれもまたくり返し同じ事　　杉風

春　莚二枚もひろきわが庵　　越人

前句へむさぼりにきぬ着てありく世中に多文　コレラ前句ノ絹ニアタリ

テモトイヘルニアラズ。莚ノ數ヲ思ハセタルモナリ。アシク心エナバ。前句ノ絹ニアタレルヤウニオモハルベケレバ。弁ジオクナリ、

猿　水無月も鼻つきあはす數寄屋哉　凡兆

炭　鬼の子に餅をすうるもひいな哉　如行

員　みるもかしこき紀伊の御魂屋　胡及

瓢　文珠の智恵も槃特が愚痴　越人

猿　百姓も麥にとりつく茶摘哥　去來

續　人の氣もかく竄はしはつ櫻　沾德

猿　若楓茶色になるもひと盛　曲水

同　君が代やつくま祭も鍋ひとつ　越人

同　人に似て猿も手を組む秋の風　珍碩

續　茨はら咲そふものも鬼薊　荒雀

炭　この比はまづ挨拶もさむさ哉　示蜂

同　まだこの春もすまぬ牢人　野坡

草庵ノ留守ヲトヒテ

猿　衰老は簾もあげず庵の雪　其角

同　初しぐれ猿も小蓑をほしげ之　芭蕉

同　こゝもとはおもふ便もすまの浦　猿雖

炭　駿河路や花たちばなも茶の匂ひ　芭蕉

春　春ゆく道の笠もむつかし　野水

荒　蛛の巣のこれも散行烌の庵　路通

炭　はつ霜や猫の毛もたつ臺所　楚舟

荒　うら白もはみちる神の馬屋哉　胡及

同　それがしも月みる中のひとり哉　湍水

同　いざよひもまだ更科の郡かな　芭蕉

同　一本の茄子もあまるすまひ哉　杏雨

同　よしの山もたゞ大雪のゆふべ哉　野水

續　喰物もみな水くさし竈まつり　嵐雪

同　うちこぼす小豆も市の師走哉　正秀

同　二月や大黒棚も梅の花　野水

荒　木がらしもしばし息つぐ小春哉　同

續　こねかへす道も師走の市のさま　曾良

同　翁草二百十日も恙なし　蕉（雫）

同　けふばかり人も年よれ初しぐれ　芭蕉

炭　どの家も東の方に窗をあけ　野坡

○かさぬるもといふは。たとへば。柴も薪も夏も冬もなどいふがごときをいふ也。しかるにこのかさぬるも。後世つかひやうをしらず。その故は。上にいふがごとく。旦那の酒好なるに。家來も酒好之といふことを。旦那も家來もといふ事のやうに心えたり。されどそれしからざる事なるは。そのふたつにてつくる事ならば。旦那か家來か。片方にもの字をつけてありぬべし。すべて正面なる物ありてそのかたはらなるものをばもとはいふなれば。その正面とかたはらと。ふたつにもといはん事あるまじき事之。ひとつにてもふたつにても。もといふは皆かたはらの物なる之。この故に。旦那も家來もといはゞ。それはふたつながらかたはらなる物にて。內儀も娘もなどいふ正面のもの。言外にあるなりと

しるべし。つかふにも此心にてつかふべき之。萬葉第一卷　雄畧帝の御製にヘかたまもよ。みかたまもち。ふぐしもよ。みふぐしもち云〻といふ長哥。このかたまも（籠の事之）ふぐしも（菜をほる道具之）皆かたはらのものにて。このふたつにて。此女の容儀のいたくすぐれたる事をおぼす御心を。活かしてのたまひしもの之。正面をいかさんためのもなるを。ひとつは正面ぞと思ひてつかふは。天尓波のことわりを弁へぬ故のひがこと之

題落柿舍

猿　豆植る畑も木部屋も名所哉　凡兆

これらもひとつは正面なるやうなれど。これにて。味噌部屋も雪隱も。名所なる事を思はする爲之と心うべし

續　むれて來て栗も榎もむくの聲　沾圃

員　くふ柿もまたくふ柿も皆澁し　傘下

サマヲカヘシ寸

猿　かうがいも櫛もむかしやちり椿　羽紅

同　乾鮭も空也の瘦も寒のうち　芭蕉

續　くひかねぬ聟も舅も口きいて　同
同　柚も柿もをがまれにけり御影講　沾圃
荒　名月や海もおもはず山もみず　去來

これらはいづれも。言外に正面のことをたづねてみるべし

炭　年の豆密柑の核も落ちりて　晋子

この句などは。名たゝる晋子が句なれども。すこし心ゆかぬ之。いかにとなれば。この年の豆といふ豆の字。正面とみゆる句意なればなり。もしこれを奪はずしていふ時は。年の豆もみかんの核もといふ心にて。正面は他の物などの落ちりたるむさくろしさをいかしたるかといはむに。しからば年の豆もと。上にも必もの字あるべき事之。此差別よくわきまへて後は。いかやうにも轉用すべき事ながら。

これをしらではあるまじき事之

員　烹た玉子なまの玉子も一文に　野水

といふ句もこの例なり。くはしくいはゞ。上の正例のうちに引たる珍碩が句のへ人に似て猿も手を組むといふは。人といふが正面たるべく。又重ぬるもののうちに引たる翁が句のへ喰かねぬ聟も舅もといふ句なども。正面は片方のうちなるべくみゆ。よく〳〵心えざればつかひあやまるべし

○もやとつかふはやは疑のやなり。上の疑のやをあはせて心うべし

炭　牡丹すく人もや花見とは櫻　湖春

これは。牡丹すく人は。外の花はかへりみもすまじき事ながら。花見とさへいへばさくらなりといふ心にて。此やは詠のやなり。よく詠と疑をわかちしるべし

○又もぞもこそとつかふは。いづれも下のうけやうはぞこそに同じくして。心はモシソウナドモアレバワルイニといふ心につかふ詞之。されば。もしかうあらん。かと案じて思ふ時につかふ詞にして。いと用多き詞なり。例はみえねど。哥にはいと多くつかふ詞なれば。句意によりて随分つかふべき之。くはしくは脚結抄にみゆ

○又もあれまれ（まれは即もあれのつゞまりたるにて同じ）などつかふは。へ時しもあれなどいふたぐひ之。これは。時モアラウニといふ心之。多くは眞裏なる詞をかさねて。へみまれみずまれなどつかふ之。その時は。ミルニモセヨミヌニモセヨといふ心之。又ミテモミイデモといふ心なり

○又へ何み何みとかさねてつかふ詞あり。これは。へ何も何もといふべきが。伊綷に（五十音ノ伊ノ綷ノ事之）うつりて。みとなりたるにて。畢竟もの轉語之。古言にはへふりみふらずみへいけみころしみなどいふ之（何タリ何ナンダリ。何タリ何タリシテ。ナド云心之）

○仁　家

[に]にとは。今めのまへなる物を。そのうしろのものに持あはせていふ詞なり。たとへば。荷といふもの擔たる人の。前なる荷をうしろのみえぬ所の荷と重さをつりあはせたる拐のごとし。この心にて荷とはなづくるなり。これをもてさとり知るべし。但によりて上の詞がうしろの所なり。下はめのまへの所なりと心うべし

續　味はひやさくらの花に嫁がはぎ　車來

目のまへならぬさくらの花に。目のまへなる嫁がはぎをもちあはせてその味はひをおもはする爲之。この目前うしろといふ事もなづみておもふべからず。目前とは主とする所之。うしろとは客とする所之。みゆるみえぬは。さとしのためまでにいふなり。実にもたりて心えなば。心たがふべきなり

炭　さらしのうへに雲雀囀る　利(牛)斗

これら。晒も雲雀も。ともに眼前のものなれど。雲雀を主とし。晒をうしろになしていふ心なるが故に。まへのごとく說たる也

炭　約束にかゞみてゐれば蚊にくはれ　曾良

續　(俳)緋好のことしの花にあらはれて　曲翠

春　朝ゆふの若葉のために枸杞うゑて　荷兮

炭　かほに物着てうたゝねの月　其角

續　味噌部屋のにほひに肥る三葉哉　夕可

同　搗栗や絣(餅)にやはらぐそのしめり　沾圃

荒　ふるさとや臍の緒になくとしの暮　芭蕉

冬　雉子おひに烏帽子の女五三十　野水

員　大根きざみてほすにいそがし　荷兮

續　笹の葉に小路うづみておもしろき　沾圃

員　里深く踊をしへに二三日　長虹

同　ついたづくりに落る精進　野水

同　秋風に女車の鬢男　龜洞

猿　蕗の芽とりに行燈ゆりけす　芭蕉

同　竹の子や畑隣に悪太郎　去來

員　人並にわさざし指て花にゆく　釣雪

猿　枇杷の古葉に木芽もえたつ　史邦

同　初雪に鷹部屋のぞく朝ぼらけ　同

炭　燃しさる薪を尻手にさしくべて　野坡

續　大キナ鐘のドンに聞ゆる　惟然

炭　隣の小言たれも見舞に　野坡

員　烹た玉子なまな玉子も一文に　野水

集　梅がゝにむかしの一字あはれ之　芭蕉

炭　一トつゝなりに鱈の雲腸　孤屋

同　松かげや生舟橋に江の月見　里東

瓢　寐言におきてきけば鳥啼　昌房

冬　銀に蛤かはむ月は海　芭蕉

炭　段ゝに西國武士の荷のつどひ　孤屋

同　挑灯の空に詮なし郭公　杉風

猿　膳まはり外に物なし赤柏　良品

炭　傘におし分見たる柳かな　芭蕉
續　はつ瓜や道にわづらふ枕もと　支考
荒　うぐひすの啼にぬぎたる頭巾哉　市柳
同　かざり木にならで年ふる柏かな　一晶
同　おもしろや理屈はなしに花の雲　越人
スミダ川ニテ
同　いざのぼれ嵯峨の鮎くひに都鳥　貞室
イセニテ
續　濱荻に筆をゆはせて年の暮　呂丸
送別
荒　から尻の馬にみてゆく千鳥哉　傘下
續　小屏風に茶を挽かゝる寒さ哉　斜嶺
荒　夕月や杖に水なぶる角田川　越人
同　似あはしや白髪にかづく麻木賣　亀洞

續　鳫がねにゆらつく浦の笘屋哉　馬莧

同　山がらのどこやらになく霜の稻　斗徒

同　しら濱やなにを木陰に郭公　會良

同　居りよさに河原鶸來る小菜畠　支考

俗言には。にといふべきをデといふ事多し。これらの句にも。デといひてかなふもありかなはぬもあり。かなふは。俗言にもひとしきいひやうなる也。かなはぬは。俗にいふとはすこしたがふ所おのづからある也としるべし。されども上にいふ所の本義をだにうしなはで心うれば。俗にかなふもかなはぬもたゞひとつなり。俗にかなふといふうちに。たとへば。臺所でめしをくふなどいふはその場所をさし。扇でたゝくなどいふは。物をさすなり。この所をさすは。古言も同じ。物をさすは。古言にては。にてしてもてなとさま〳〵につかふ之。されども物をさすも。その物を場所とする心なる時は。にとばかりもつかふ事つね也これ俗にデといふ心なり。かくその意をうつす事。古言はいと精微なり。是古言と俗言との精麁ある所なり。今この古言のにと考あはすべきために。俗言のまゝにつかひたる句をこゝに出す

續　つばくらは土で家する木曾路哉　猿雖

この句。木曾は良材多き地なれば。家たつるには。木に不自由なしとおもふに。燕は。そこにても猶土をもづてすることを歎していへるなり。木をもつてするにことに自由たるべき地に。土をもつてするといふ心なれば。これらは古言にてはもてなどいふべき所なり。この句意を見て。俗言にデといふうちには。古言にはわかれある事をもおしこめたるをしるべし

荒　つりがねを扇でたゝく花の寺　冬松

續　蕎麥はまだ花でもてなす山路哉　芭蕉

炭　弟はとう〳〵江戸で人になる　利牛

同　馬に出ぬ日は内で戀する　芭蕉

同　内でより菜(サイ)がなうても花の陰　利牛

同　ちゝめきの中でより出す瑠璃頬赤　同

同　いく月ぶりでこゆる逢坂　野坡

猿　せわしげに櫛でかしらをかきちらし　凡兆

炭　折かへるさくらでふくや臺所　孤屋

續　八九間空で雨ふる柳かな　芭蕉

炭　長松が親の名でくる御慶かな　野坡
同　藤ですげたる下駄のおもたさ　同
續　尾張でつきしもとの名になる　芭蕉
同　しなぬ合点でわづらふてゐる　沾圃
炭　子は裸親はてゝれで早苗舟　利牛
續　蔫で工夫をしたる照降　支考
炭　買こんだ米で身(シン)体(ダイ)たゝまるゝ　利牛
同　又今朝も佛の食で埒を明　同
同　戸でからくみし居風呂のやね　野坡
同　ひろふた金で表がへする　同
續　から身で市の中を押あふ　芭蕉
同　おもひのまゝに早稲でやねふく　里圃
但デといひて。この俗言のデの例にあらざるあり。これはいふにをよばぬ事なれども。たとへば
炭　たれとたが縁組すんで里かぐら　其角

續　ちり椿あまりもろさに續でみる　野坡

同　請狀すんで奉公ぶりする　沾圃

炭　ひまをぬすんでけふもねてくる　利牛

コレラハイヅレモ。清音ノてナルガ。濁ルハ俗言ノナラヒニテ。にヲデトイフトハコトナリ。古言ナラバへすみてへつぎてへぬすみてトイフ所ナリ。マガハスベカラズ

續　老の名のありともしらで四十雀　芭蕉

猿　縫物や着もせでよごす五月雨　羽紅

同　手をかけてをらで過行むくげ哉　杉風

荒　椶櫚の葉にとまらで過る胡蝶哉　梅餌

同　うごくともみえで畑うつふもと哉　去來

コレラハずしてトイフベキヲでトイフニテ。古言ニモでトツカフヿナリ。コレハコヽニ出スベキヿニハアラ子ト。でトイフヿノマギレヲワカヌ童蒙ノ爲ニイフナリ。ナホ下ノ不倫ニ出セルヲ見テコヽロウベシ

これらまがはすべからず。さてまた古言のごとくにてとつかひて、俗言のデの心なる例をもこゝに

あぐ

荒　はつ雪やまつ草履にて隣まで　路通

猿　みのむしやつねのなりにて涅槃像　野水

員　むかふまで突やるほどの小舟にて　荷兮

前句へこゝろやすげに土もらふなり　龜洞　コノ句意ヲ見テ。コノにてハ。デノ心ナルヿ知ルベシ

炭　髪おくは雪踏とらする思案にて　野坡

同　帷子も肩にかゝらぬ暑さにて　同

荒　肩衣は戻子にてゆるせ老の夏　杉風

同　から崎の松は花よりおぼろにて　芭蕉

集　わすれずはさよの中山にてすゞめ　同

右いづれもデといふべきを。古言のごとく。にてとつかはれたる之

○又上に。へ何にといひ下にへ何するといふべきを。へ何する何にと倒につかふ事あり。すべて。これにかぎらず倒句の法は。上の方にいふ方は舞臺之。下の方にいふは藝者之と心うべし。されば詞のつ

ねにていへばへ何に何するといふはづの事をも倒につかふなり

冬　はやり來て撫子かざる正月に　杜國
同　血刀かくす月のくらきに　荷兮
春　傘のうち近付キになる雨の暮に　李風
員　はつ雪やことしのびたる桐の木に　野水
同　いつやらも鶯きゝぬこの奥に　落梧
同　朝ごとの干魚そなふる瑞籬に　同

これら皆倒句のになり。又これに似てこれにあらざるもあり

猿　新疊敷ならしたる月かげに　野水

これは倒句にあらず。もし倒句ならば。上と二事にならでは叶はぬ事之。こゝをもて倒句にあらずと定むるなり。前句へ油かすりて宵寐する秋 芭蕉 後句へならべてうれし十の盃 去來 この前句後句ともに。此にの字にうちあひたるをみて。倒句ならざるを信ずべし

○にを畧して。にある心なるもあり。哥にもつねにつかふ事之。畧するは。是非おくべきを畧するにあらず。いはでもしらるゝが故之

續　さよ千とり庚申まちの舟屋形。に　丈草

○またにといひて。ジヤニジヤノニノニなどいふ俗語にかなふもあり。これも前にいふ所の本義はたがふ事なし。たゞ上下の事がらによりて。かく聞ゆるやうになる之

瓢　この村のひろきに醫者のなかりけり　荷兮

同　虫のこわるに用かなへたき　乙州

同　なにともせぬにおつる釣棚　越人

集　木曾の痩もまだ直らぬに後の月　芭蕉

○その外にもにはにぞにしてなど。さま〳〵の天尓波を繼てつかふ事つね之。これらはその條〻をあはせて心うべければ。それ〳〵いふに及ばず

續　なれぬ娵にはかくす內證　沾圃

同　うぐひすの路には雪をはき殘し　馬莧

炭　つたひ路には丸太ころばす　孤屋

集　景清も花見の座には七兵衛　芭蕉

續　子供にはまづ惣領や藏びらき　蔦雫

荒　むさし野やいく所にもみる時雨　舟泉
猿　なにをみるにも露ばかり也　野水
荒　月雪のためにもしたし門の松　去來
同　なに事のみたてにも似ず三日の月　芭蕉
猿　初蝶や骨なき身にも梅の花　半殘
同　わらふにもなくにも似ざる木槿かな　嵐蘭
續　水の魚をすましむるたとへにぞ侍る云々　今宵賦
集　すゞしさをわが宿にしてねまる也　芭蕉

○又してとつかひて。にてといふ心になるもあり

集　青葉して御目の雫ぬくはばや　芭蕉
炭　紙燭してたづねて來たり酒の殘　其角
荒　簾してすゞしや宿のはいり口　荷兮

○またへ何に何とかさね詞の中へつかふにあり。哥にはへきゝに聞えてへぬれにぞぬれしへかたりにかたれなどさま〳〵つかふなり。これは同じ事の。せんぐりに下地の事が場所となりゆく心なり

多　奥の二月を只なきになく　野水

俗語にもヘモミニモンデヘイサミニイサンデなどいふこれなり

〇止　家

[と] ととは。へこれとあれへ人と我などいふにつかふばかりを人よくしれり。その餘も。たまくは俗語にもいへど。くはしくこれをしらざる之。すべて六例あり。第一いつゝのとゝいふ。これはト見ルト聞クト云フト思フト爲ルといふ五つの詞を。との字のうちにもちていふ也。畢竟下の詞ははぶきたる物之。但コレチム子トシテ。餘ノ詞チモツケテツカフベキナリかれとこれとをつきたる物にする詞なり。くはしくいはゞ。人のみる所の正面なるものを。それよりうしろの方の。むかふよりはみえぬ所へ。つきたるものにする心之（コレ）五十音ノ本義ナリ

炭　花見にと（思フテ）。女ばかりがつれ立て　芭蕉

荒　ねふたしと（イフテ）。馬にはのらぬ菫草　荷兮

同　なに事もなしと過行（ト云テ）。柳かな　越人

同　おもしろと（思フテ）。鰯引けり盆の月　含咕

同　めづらしと（イフテ）。生海鼠を燒やをのゝ奥　俊似

炭　すゞしさをしれと。杓の雫かな　兀峯
猿　しる人にあはじ〳〵と。花見哉　去來
員　いの子にゆくと。羽織うち着て　野水
續　瀧壺もひしげと。雉子のほろゝ哉　去來
冬　口をしと。瘤をちぎる力なき　野水
續　人を興ぜしむと。にあらねば云々　今宵賦
員　かくすものみせよと。人のたちかゝり　越人
猿　あれきけと。時雨くるよの鐘の聲　其角
同　あつし〳〵と。門〳〵の聲　芭蕉
同　ひたふるに閑寂を好み山野に跡をかくさんと。にはあらず　幻住
同　おもふ事紙帳にかけと。おくりけり　野徑

これら此例なり。上にいふごとく。なにの詞をもはぶきてつかふべけれど。其つきたる物にする事。理屈のうへ。またはいはでも明白なる事などはと―といふ詮はなき事なり。これいづれの天尓波とても同し事之。よく心えてつかふべきなり。その心。むかふからはつきたる物とは思はぬものをばつきたる

物にする心之戸といふ名も外よりみれは内にへだたる物に[illegible]
ある事を。その戸のむかふから思はする心にて名とはする也又これをはぶかずして。直にその詞をつゞけたるもあり

荒 下〻の下の客といはれん花の宿　越人

同 ちる花を南無阿弥陀佛とゆふべ哉　守武

いふトゆふトハ假名タガヒタレバ。タトヒ秀句トテモツカフベカラヌヿナレバ。哥ニモ。上古中古ニハタエテツカハザリシナリ。近古ニイタリテ。哥ヨミモコレヲツカヘリ。サレド決シテツカフマジキヿナルハ。モト音義ノタガヘルモノナルヲヤ。コノ句ナドモいふトカケラレタレド。コレハコノ守武ガ誤ニハアラズ。ソレヲユルシソメタル哥ヨミタチノ誤ナリ。サレバ心アラン人ハカタクツカフベカラヌヿナリ近世秀句ニハカマハズトイフヿ。我マヽナルイヒゴトゾカシ

同 あだ花の小瓜とみゆるちぎりかな　荷兮

猿 金鍔と人にいはるゝ身のやすさ　芭蕉

同 お留守となれば廣き板敷　几兆

炭 よひの内ばら〱〵とせし月の雲　芭蕉

またこの例のごとくにして。猶まへの例なるあり。

續　やつと聞出す京の道づれ　馬莧

これは。やつとしてといふにて。ドウヤラカウヤラトイフ心之。聞といふ字につゞけるにはあらず。まがはすべからず。

○又。ものを試みていふ例あり。これは上にかならずやをうくるかかをうくるか。このふたつをいでず。このやかにひかれて。おのづから試むる心になる之。これまた。つかぬはづの物を。つきたる物にしていふ心より。試むる心とはなる事之と知るべし。哥には。へをりてかざらん老かくるやとへかくれて思ふかひのなきかと。などつかふ之。かくのごとく。やかのふたつをうくるなり

炭　盆の月ねたかと門をたゝきけり　野坡

猿　内藏頭かとよぶ聲はたれ　乙州

炭　明月や富士みゆるかと駿河町　素龍

貝　柳ちるかと例の莚道　野水

荒　一重かと山吹のぞくゆふべ哉　襟雪

同　つきたかと兒のぬき見るさし木哉　舟泉

此例のやうにてあらざるあり。

續　名月の花かとみえて棉畠

これは。直にへみえてとつゞけたり。哥にもよむ事之。此例に心うべき事あり。その故は。かといふにて。その試むる心をはらせて。さて。へみえてとつゞくなり。へいく世へいく千世などいひて。疑の詞とせずしてつかふに同じ心之

○とてとつかふ事あり。これに又二様あり。ひとつはたゞ。トイフテト思フテなどいふ心につかふ之。今ひとつは。へしかりとてそむかれなくになどいふがごとく。むかふの道理をおさへて。おもひかへさする詞之

員　弓引たくる勝角力と(イフ)て　舟泉

瓢　いらぬと(イフ)て大わきざしも打くれて　正秀

續　米搗もけふはよしと(イフ)てかへる也　支考

冬　しのぶ間のわざと(イフ)て雛をつくりゐる　野水

荒　すゞめと(イフ)て切ぬきにけり北の窓　同

おもひかへさするこゝろなるは

猿　誰とても健ならば雪の旅　卯七

荒　上ヶ土にいつの種とて麥一穂　　玄寮

○第二例　にのと ト云

これは引あはせて思はする爲につかふと之。〜花とふる〜雪とちるなどやうにいふ之。これも上にいふごとく。むかふよりはつかぬものとみる事をつきたるにしていふ心なればトイフヤウニトイフホドニなどいふ心につかふをいふ也　〜ふら〳〵と〜くはらりとといふは。外に。ふら〳〵する物。くはらりとひらけたる物あるに。おもひよせ思ひつけさせていふなりと心うべし

續　つぶ〳〵と箒をもるゝ榎実哉　　丕翠

猿　こほ〳〵と草鞋をつくる月夜さし　　凡兆

炭　ひたといひ出すお袋の事　　芭蕉

同　ひらり〳〵と雪のふり出し　　利牛

員　づぶとふられてすぐる村雨　　越人

續　くはらりと空のはるゝ青雲　　芭蕉

員　ふら〳〵と昨日の市の塩いなだ　　荷兮

炭　どんど〳〵水の落る秋かぜ　　野坡

同　そつとのぞけば酒の㝡中　利牛
同　どたりと塀のころぶ秋風　孤屋
猿　芙蓉の花のはら〳〵と散　史邦
荒　すご〳〵と親子つみけりつく〳〵し　舟泉
同　すご〳〵とつむやつまずや土筆　其角
同　すご〳〵と案山子のけけりつく〳〵し　蕉笠

これらいづれもたとへていふがごとし

○第三例　ともにと ト云

これつねにいふ。我と人。犬と猿などいふとの事之。よせつくる心は。まへに返〻いふがごとし

荒　山ぶきと蝶のまぎれぬあらし哉　卜枝
同　名月や皷の聲と犬の聲　土水
同　馬と馬よばりあひけり郭公　鈍可
續　灌佛や釈迦と提婆は従弟同士　之道
荒　花鳥とこけら葺ゐるをのへかな　冬文

馬　糞　掻

同　こがらしの松の葉かきとつれ立て　舟泉

猿　川上とこの川下や月の友　芭蕉

續　春もやゝけしきとゝのふ月と梅　同

炭　伐透す椴と檜のすれあひて　孤屋

此例にて。へ何と何ととふたつにとをつかひたる句あり

續　あるとなきと二本さしけり芥子の花　智月

瓢　それ世はなみだ雨としぐれと　里東

但コノ句ハ。マヘノ句トハタガヒテ。雨といひしぐれといひトイフ心ナルベケレバ。第一例ノいつゝのとヲカサ子タルナリマガハスベカラズ

このごとくつかふは。上のもの条下にいふがごとく。片方にいひてすむはづの事なるに。ふたつにいふは。必この外に又それとおもひつけてみん事ある心之。脚結抄にいふがごとく。へ何と何とゝふたつにいふ時は。ふたつともとふたつにいはぬは。片方が主片方が客となるなり。へ何と何とゝふたつにいふ時は。ふたつとも客になりて。別に主あるとしるべし。即このへあるとなきとの句は。有無の二見の事をさとす

句意なるなり コノ句ノ前ニ。去來がへすゞしくも野山にみつる念佛哉トイフ句アリテ。ソレノ詞書ニ眞如堂にて善光寺如來開帳の時トアレバ。コレモソノ時ノ句ナレバカクハイフナリ。又ハ眞如堂ニ元善光寺トテ堂アレバ。ソノ佛ト二体ナルヿイフニヤトモオボシキ之。シカラバイヅレカマコトナラントノ心ヲ思ハセタル心ニテ。フタツノとヲチツカヒタルナリ

○第四例　にごるど ト云

雖といふ字のこゝろ也。これはまた。雖といふ心も。つかずとするものをおもひつけさせんためなれば。本義は同じ

集　月はあれど留守のやう也須磨の夏　芭蕉
荒　元朝やなにとなけれど遲ざくら　路通
同　むさし野と思へど冬の日あし哉　洗惡
同　膝節をつゝめど出るさむさ哉　塩車
炭　みな〳〵に咲そろはねど梅の花　野坡
同　ちかくに居れど長谷をまだみぬ　同
同　坊主になれどやはり仁平次　利牛
同　こちにもいれどから臼をかす　野坡

○第五例　いふと ト云

つくにする心は前に同じ。ともと云心に同じ。へたとへといふ事をくはへてみるべし。脚結抄にいはれたるがごとく。これはもと俗語なり。さればいたりてふるき歌にはみえぬ事之。俗に。ドウアロトマ、ヨなどいふと之。集中例みえず

〇第六例　へだつると　ト云

哥にはへふきと吹ぬるへたちとたちなんなどつかひたり。一事のいくたびも引つき〳〵ゆくかたち之。集中例なし

續　なになりと唐めかしゆく秋のかぜ　　文考

同　鷄があがるとやがて暮の月　　芭蕉

これらの六例の外に。俗語につかふと二種あり

へ何なりとゝいふは。せいめきめにする心をいふ之。へ鷄があがるとゝいふは畢竟へあがればといふをといふ之。これらは古言のてにはにはつかはぬ事之

〇てふといふ天尓波はへといふといふ事をつゞめたる之。發伊の反知なれば萬葉には。ちふともかき。又いをはぶきてとふとも書たり。てふとかくは。ちをてにかよはしたる之ともいふべけれど。実は誤なり。さて此てふといふ詞は。へといふといふ心に直につかひたるもあり。又いひならはしたる事。

又は世に人のいひをる事などを。てふとつかふなり。此故に後世にてはなるといふ詞のやうにつかひたれど。あたらざる事也。ゆめ〳〵さやうにはつかふべからず。かの定家卿の〽衣ほすてふと（萬葉ニハ衣ほしたりトアルナ）直したまひしも。なるの心之。その世などよりつかひあやまれるもの也。集中例見えず

○ともとつかふは。上の第五例に大かた同じ。まへをあはせて心うべし

集　ふらずとも竹植る日は蓑と笠　芭蕉

同　紙衣ぬるともをらん雨の花　同

荒　青くとも木賊は冬の見物かな　文鱗

猿　いづくにか倒れふすとも萩の原　曾良

これらは第五例にいひしがごとく。〽たとへといふ詞を加へて心うれば。よく聞ゆる之。さて此〽青くとも〽いづくにかの二句。てにはのうちあはせやう快からず。その故は。〽たとへ青くともといはゞ。下は。木賊は冬の見物にせんといはねば。ともは落つかぬ之。されどこれは。例の發句少字の故に。その〽せんといふべきをふくめて哉とつかへる之ともいふべし。次の曾良が句は。ゆるしてみるべきやうなく。うち合いとあしき之。その故は。〽いづくにかといふかの字あたらぬ事之。〽いづくにかといはゞ。〽たふれふすべき〽たふれふすらんなどこそいふべけれ。もしかくのごとく〽たふれふすと

もといは丶へいづ方にといはではすまぬ事之。これらは天尓波にくはしからぬが故の麁相なり。されどかやうの誤は。哥よみにも多き事なり

○又哥には。へこりともこりぬへ神とも神と聞えくるなどつかふ例あり。これはひとついひては今少しこたへぬやうなる時に。仰山におもはせんとていふ詞なり。たとへば。へうらめしとももうらめしなどいふは。たゞへうらめしと斗いひては輕ければ。つかみつきもしたきほどうらめしき心をさとさむとて。へうらめしともうらめしとはつかふ事之。公任卿の哥にへ物とも物と思ふとよみたまへるは。いたつて大切の物に思ふ心なるをみるべし。集中例みえず

○にごるどもあり。雖の心なり。

荒　さはれども髮のゆがまぬ柳哉　杏雨

續　晝がほや日はくもれども花盛　沾圃

炭　二三番鶏はなけどもあつさかな　魯町

瓢　よびありけども猫はかへらず　正秀

員　ちる花に日はくるれども長咄　越人

炭　おこり日をまぎらかせども待ごゝろ　利牛

集　水無月や鯛はあれども塩くじら　　芭蕉

此どもといふ詞の下へ。ヤツハリといふ詞をくはへて心うべし

○とすとつかふ事あり。へかくるとすれどあらはれにけりへふすかとすればへつまむとすなるなど哥にはよめり。いづれも集中例なし。これは。その事をしてゐれども。むかふからさやうにはみえぬ時にいふ詞之。本義一致なるを思ふべし

俳諧天尓波抄巻之三　終

俳諧天尓波抄卷之四

○十九家　下

○志家

此シハ。世ニ助字トイフしナリ。助字ナラヌ丁。コノ注ヲミテ知ルベシ。過去ノしトイフハ。下ノ去倫ニアルコレナリ

[し] しとは。わがうちの筋へそはせて。その様子をおもはする心なり。去倫の部に出したる過去のしも。此本義は。たがふ事なし。そことあはせてみるべし。脚結抄には。これをしかしと名づけて。へしかとつかふ詞と心同じといへり。くはしくは脚結抄をみて知るべし。哥には古事記にへ君がよそひしたふとく有けりなどよめるしなり。これは。これまでその君のよそひをも思はずして。はなれたりし心を。はじめの所の君がよそひへそはせておもはする心之。集中例みえず。その外へしぞへしこそへしかへしかもへしかはへしもへしはなどさま〳〵よめり。脚結抄を見てしるべし。いづれもいにしへより哥に多くつかふ天尓波なれば。よく弁へて發句たりとも。よくつかひこなさば。おもひをのぶるにいとたよりあるべき也。

○何し何ばとつかふ事あり。いはゆるへ名にしおはゞへたねしあればなどの類なり。これ又集中例見

えず

拾　初ざくらをりしもけふはよき日なり　　芭蕉

○乃　家

［の］これは俗語につねに多くつかふてにはなれば。ことにくはしくいふにをよはねども。猶その本義をいはゞ。むかふへすわらんと思はるゝものを。そのあとの方へすゑていふ心之。たとへば。〽山のさくらといふは。里にも野にもあるさくらを。山にすゑてみする心なり。俗には。古言にのといふ所をもがといふ事多し。古言にもがといふ事もあれど。のとがとは。そのつかひ方大にたがへり。たとへば。〽梅が香といふは。多く梅がとのみいひならへるに。古今集に〽梅の香のふりおける雪にまがひせばとよめる歌あり。梅がゝといへば。梅の香に餘の花のかのをよばぬをいふ心之。梅の香といへば。餘の花のかをむかふに置て。さて梅にすゑて香をいふこゝろ也。かくのごとくわかれある詞之。今の俗。のといへば。かしづきていふ心。がといへばいやしみていふてにはのやうにおもふはいと誤なり。脚結抄に宇治拾遺を引かれたるがごとく。それもはやふるくさやうにおもひたりしこと也

荒　兄弟のいろはあげけり花の時　　鼠弾

同　枯芝やまだかげろふの一二寸　芭蕉

員　日のみじかきと冬の朝起　落梧

炭　抱上る子の小便をする　利牛

猿　なにおもひ草狼のなく　野水

續　初あらし畠の人のかけまはり　支考

炭　竹の皮雪踏に暮る夏の來て　石菊

員　隆辰も入齒に聲のしはがるゝ　冬文

春　内侍のえらふ代〻の眉の圖　荷兮

猿　猿引の猿と世をふる秋の月　芭蕉

同　一ト吹キ風の木の葉しづまる　同

員　火ばしのはねて手のあつき也　荷兮

猿　白玉の露にきはづく椿かな　車來

同　蝶の來て一夜ねにけり葱のきは　半殘

同　堤より田の青やぎていさぎよき　几兆

同　能登の七尾の冬は住うき　同

續　寝汗のとまる今朝がたの夢　支考

員　氣だてのよきと聟にほしがる　野水

猿　年のくれやぶれ袴のいくくだり　杉風

冬　五ゲン形ゲすみれの畠六反　杜國

員　狐つきとやひとのみるらん　越人

瓢　看經の嗽にまぎるゝ咳氣聲　里東

同　鉢いひならふ聲の出かぬる　珍碩

員　橇の道もしどろに春の來て　荷兮

猿　梅が香や酒のかよひのあたらしき　蟬鼠

いづれもまへにいふがごとく。のといはねば。その置く所持あふ所などの。ふれん所あるが故之。むかふよりは。いづかたへも持あふものにしてゐる物をそのうしろのかたに。外にふれずもちあふ所あるを思ひとらする心。くはしくみざれば。中には聞えにくきもあるべし。この引たる句どものうち。〽五形すみれの畠六反といふ句は。野菜をうゑたる畠。むかふにあるに。そこにある人の神氣を。あれたる

島に引かへさせんとて。五形菫にもちあはせたるにて。これらはいとよく聞ゆべし。すべて天尓波のあまり近きは。かへりてその義聞えにくきものなれば。今かへす〳〵くはしくこれをいふなり。○また哥にも。のとよむに右に引たるがごとく。普通のつかひやうにたがへるもあり。されど上古中古にはすくなき事にて。近古よりおこれる事なり。上古はなに事も。言靈をむねとしていふ故に詞すべて正面につかず。中古より後近古は。ことにたゞ正面をのみかしこくいはむとする故に。上古のてにはを正しくつかふ事をえせず。さま〳〵畧してつかふ事。全く詞のうへにいひつくさむとのみして。言靈を貴はさるが故之。發句は少字なれば。畧例をつかふも。哥のごとき罪とはいひがたし。これらをもても。中古近古の正しきをうしなへる事をしりて。心あらん人は。かの晋子が猿蓑の序よく〳〵思ふべし。哥よみも。上古を貴ぶといふ人も。うはべの萬葉体なる詞をまねぶばかりにて。かの幻術といふ所に心つく人なし。俳諧は少字なれば。ことに言靈をむねとせざれば。なにをかいはれん。なにをかつくされん

荒　人かすむ舟と陸との塩干哉　友重

同　雨の月どこともなしの薄明り　越人

同　風のふくかたをうしろの柳かな　野水

同　風ふかぬ日はわがなりの柳かな　　校遊

員　蝙蝠にみだるゝ月の柳哉　　荷兮

續　行鴨や東風につれての磯惜ミ　　釣雪

瓢　秋かぜの舟をこわがる浪の音　　曲水

冬　北の御門をおしあけの春　　芭蕉

いづれも。外にいふべき詞あるを。皆ののうちにもたせてもいひ。又は外の詞にかへてものといふなり。たとへば此へ風のふくかたをうしろの柳哉といふ句は。ウシロニスルといふ心をのにかへたる也。へ秋風の舟をこわがるといふ句は。ツヨクユルといふ事をはぶける心之。いづれもはたらかせてつかふのなりと知るべし

○又よするのと名づけて。ノ如クといふ心につかふのあり。これは上古より哥にも多くよむ事之。物にたとふる時につかふてにはえ

春　陽炎の（ノ如ク）もえのこりたる夫婦にて　　越人

猿　雨のやどりの（ノ如キ）無常迅速　　野水

員　しら露の（ノ如ク）むれて泣ゐる女客　　越人

猿　世中は鶺鴒の尾の隙もなし　凡兆

○哥に。の留メとて。一首の終にのとつかふ事あり。古今にへうつりもゆくか人の心のとあるたぐひ猶多し。いづれも必上に心の落つく所ありて。さて終にのとつかふ事之。發句には例みえず。これつかひにくき事のやうに哥よみも思ふ事なれば。むつかしきやうにおもひてつかはれざりけるにや。かつてむつかしき事にはあらず。たゞ何ガドウアルといふべきを。ドウアル何ガと倒につかふばかり之。倒句の事は上に論じたるがごとし

[が]がといふ心は。上のの条下に粗いふがごとく。その物にはたらきをあらせていふ心なり。のといふ時は。たゞそのうしろの持合をさとす心之がはそのものゝ他にことなるをさとす心あれば。よく心えてつかふべし

瓢　たつか弓紀の関守が頑に　珍碩
集　きさかたの雨や西施が合歡の花　芭蕉
春　松の木に宮司が門はうつふきて　雨相
炭　祖父が手の火桶もおとすばかり也　其角
冬　日東の李白が坊に月を見て　重五

員　後ぞひよべといふがわりなさ　越人
續　おれが事哥によまるゝ橋の番　芭蕉
同　孫があとゝる祖父の借銭　馬莧
猿　此春も盧同が男居なりにて　史邦
同　花とちる身は西念が衣着て　芭蕉
同　晦日も過ゆくうばが玄子かな　尚白
同序　これが序もその心をとり云ゝ　其角
續　聟が來てにつともせずに物語　支考
猿　摩耶がたかねに雲のかゝれる　野水
瓢　籾臼つくる杣が早わざ　曲水
員　宮司が妻にほれられてうき　胡及
猿　丁雅が荷ふ水こぼしたり　凡兆
員　道のべに立くらしたるきねが麻　荷兮
炭　番匠が樫の小節を挽かねて　孤屋

猿　わぎも子が爪紅のこす雪まろけ　探丸

荒　松かざり伊勢が家買ふ人は誰　其角

同　山がつが案山子つくりてわらひけり　重五

イチハラ野ニテ

同　おく露や小町が骨の見事さよ　釣雪

續　春雨や光うつろふ鍛冶が鎚　桃首

同　里の子が燕にぎる早苗かな　支考

同　小米花奈良のはづれや鍛冶が家　万乎

猿　夏草やつはものどもが夢の跡　芭蕉

これらみないにしへつかふ法のごときつかひ方也。中には此法の如くにして俗語のがなるもみゆ。今此下にこれをわかちて出す。いかなる故にてかやうに雅俗のわかるゝぞといふに。まへにいへるがごとく。がはすべて。その上の物に德用をあらせていふ時につかふ詞なるをば。下なる詞に主とする所あるにも猶がとつかふ。これ俗語之。かやうの所は古言にてはみなのとつかふ之。この上に引たるへ孫があとゝる祖父の借錢といふ句。のとがとふたつをつかへり。よくつかひわけたる句之。祖父がこ

しらへたる借錢なれども。今此句意は。その借錢が主意之。又その跡とりて身に引うくるは孫なれば。孫は主なるが故に。がとつかひたり。これらをもて俗語にがといふには。雅俗まじりたる事をしるべし

炭　雜役の鞍をおろせば日がくれて　野坡
同　時鳥啼〱風が雨に成る　利牛
同　馬がはなれてわめく人聲　孤屋
續　花のあと躑躅の方がおもしろい　里圃
同　荷がちら〱と通る馬つぎ　同
炭　訴訟が濟て土手になる筋　野坡
同　婿が來て娘の世とは成にけり　利牛
續　夜京みやむかひの店は月がさす　里圃
同　山かげや猿が尻抓て冬日向　ユ谷

これらいづれも古言にはのとつかふべき句意之。よく味はひてわかつべし。概していはゞがは上おもく下輕し。のは上輕く下重しと心うべきなり

○邊　家

「へ」へとは方角をたてゝそこへむかはする心なり。萬葉集には。方の字を。へとよませたる所多し。行方（ユクヘ）などかきたり。（後世。ゆくゑトカクハ仮名誤レリ）にといふ詞とまぎらはしき事あり。後世の人はこれをつかひわけず。哥などにはたゞへといふべき所をもにとよむなり。これ。には雅にして。へは俗なるやうに心うるが故之。俗言には。多くはにといふべきをもへといふによりて。さる心えとなりぬるなるべし。今も平言ににといふ國〻もある之。さてこのふたつ。たがふ心あればこそ。哥には古今に〽北へゆく鴈ぞなくなるなどよめり。にといへば。うちつきをうしろにしていふ心となり。へといへば。うちつきをむかふにしていふ詞となるがたがへり。古今集秋部に詞書〽僧正遍昭がもとにならへおはしましけるにとかけるあり。これら後世の人のえかゝぬ事之。上をにといひしは。遍昭が家に行つきてのうへのかたちをいふ之。そのゆくべき家は奈良なれば。下はへといふなり。これ五十音の。い緯とえ緯とのわかれなるなり。かくいひわかちてみれば。へはにといふべからず。にはへといふべからぬ事明らかなるをや。たとへば。いづくへゆくぞと問ふは。方角をとふ心なり。いづくにゆくぞと問ふは。そのゆきつき所をたづぬる心之としるべき之。〽野べへ山べへ春べなどいふもみなこの心なり

荒　ひくいきにうしろへころぶ柳かな　　鴎歩

炭　松坂や矢川へはいる裏通り　　野坡
同　海へ降る霞や雲に波の音　　其角
同　さみだれや隣へ懸る丸木橋　　素龍
員　供奉の草鞋を谷へはきこみ　　野水
續　着かへの分を舟へあづくる　　臥高
炭　脊中へのぼる子を可愛がる　　桃隣
同　せどへまはれば山へゆく道　　岱水
續　十里ばかりのよそへ出かゝり　　里圃
炭　ほし物を日向の方へゐざらせて　　利牛
同　お頭へ菊もらはるゝ迷惑さ　　野坡
瓢　いふ事をたゞ一方へおとしけり　　珍碩
炭　僧都のもとへまづ文をやる　　芭蕉
續　柳のそばへ門をたてけり　　里圃

集　その玉を羽黒へかへせ法の月　芭蕉
同　山城へ井手の駕かるしぐれ哉　同

○良家

「ら」らといふてにはは。その物と同じやうなる物のむかふにある事をさとす詞なり。萬葉などに。等の字をあてゝつかひたるもうべなる哉へわれらへまろらなどいふみなこの心之。古言には。古今の詞書にへものらいひける。又その外へうまらにへうすらにへまれらなるへ雪とらもなるなどつかひたり。これら後世えつかはぬてには也。べらなりといふてにはのらもこれ也。くはしくは脚結抄に出たり。猶上古には。ろといふてにはあり。これ此らのかよひたる也へともしきろかもへよのほどろなどつかひたり。（イヅレモ万葉集ニアリ）らんらしなどつかふらも。即此らなりとしるべし集中例みえず

○能美家

「のみ」のみとは。俗言に。バカリ。バッカリなどいふにあたる故に。後世にては。のみとばかりを混じてつかひわくる事をえせぬ也。ばかりと古言につかふ心は。それにかぎる心をさとす之。のみといふは。その一筋ばかりなる心なれば。ばかりは体なり。のみは用なり。その用ふる筋大にたがへり。よくおもひわかちてつかふべし

多　こつ〳〵とのみ地藏きる町　荷兮
春　わや〳〵とのみ神輿かく里　重五
同　蛙のみきゝてゆゝしきね覺哉　野水
同　高低のみぞ雪のやま〳〵　越人
同　郭公白湯のみたきてぬる夜哉　李風
同　具足着た顔のみ多し月見哉　野水

素堂へマカリテ

荒　はすの実のぬけつくしたる蓮のみか　越人
集　月のみか雨に角力もなかりけり　芭蕉

いづれも物のうへばかりにいへるにあらず。事のつゞきたるさまをいへるをおもふべし。猶この次のばかりの条をあはせて心うべし。さればのみのばかりにことなる事は。事のうへと物のうへとのけぢめによる事之

ばかり　ばかりとは。上にいふごとく。外の物に同じからぬことをみせんとてつかふ詞なり。のみと

ばかり──とのわかれ、脚結抄にくはしくいはれたり

員　蚊のをるばかり夏のよの疵　越人
炭　損ばかりしてかしこがほなり　杉風
荒　これは〳〵とばかり花のよしの山　貞室
同　今來たといはぬばかりの燕かな　長之
同　晝ばかり日のさす洞のすみれ哉　舟泉
同　雪の日や川筋ばかりほそ〴〵と　鷺汀
同　雨のよは下ばかりゆく螢かな　含咕
同　麥かりて桑の葉ばかりのこりけり　不知
同　わたし守ばかり蓑きるしぐれ哉　傘下
同　枯色に麥ばかりみる夏野哉　生林
炭　鑓持ばかりもどる夕月　野坡
人ノミマカリシニ
荒　たちばなのかほり顔みぬばかり也　荷兮

猿　やぶの雪柳ばかりは姿哉　　探丸

炭　月花にかきあげ城のあとばかり　　利牛

此句どものうち。貞室が名たゝる〽これは〳〵とばかりといふ句意を思へば。何とやらんのみともいふべき句のやうなれどさにあらず。上に〽これは〳〵とゝいふにて。自然といくたびも〳〵同じ詞をいひしことにはなりて。其外の詞をまじへぬ事肝要なれば。ばかりの詞よく叶へり。杉風が〽損ばかりしてといふ句も。その句意。損徳のわかれをむねといはむとて。ばかりとはつかひし之。哥にも〽ばかりしてとも〽のみしてともつかふ事なれど〽のみしてはそのすぢ一筋にしてつゞくをいひ〽ばかりしては。その筋の別〻なるをいふがたがへるが故に。此句も。なに事をしても徳の方はせぬを云之。さればたとひ事はつゞきたりとも。別筋のうへの事ならばばかりとつかひ。別筋のうへのやうにみえても。その片方のつゞくをいはむには。のみとつかふべきなり

〇俗言にクラ井　ホド　ダケなどいふにあたるもあり

炭　画にかくばかりのこる名月　　芭蕉

高野ニテ

荒　腰の扇礼義ばかりの御山かな　　一雪

同　一葉ちる音かしましきばかり也　仙化

員　さかづきもわするばかりの下戸の月　昌碧

炭　帶ほどに川のながるゝ塩干哉　沾德

集　はつ雪や水仙の葉のたわむほど　芭蕉

これいづれも本義はたがふ事なし。やがてホドとつかひたるは

これなり。古言にはこれらはばかりとつかふ所なり。古言にほどゝつかふ詞あるは。又これとは別なり。それは俗言にウチといふ詞にあたる也。へよのほどへ春のほどなどいふこれ也

までまでといふ詞。これまたばかりにまぎれやすき詞之。たとへば。へ道もなきまであれにけりへ山とよむまでなく鹿のなどのごとし。これは限をたてゝいふ詞之。されども後世は。そこまでこゝまでなどつねにいふにも。此意はありながら。それをしらずして。たゞ限をたつる詞とのみ心えたれど。かへすへいひしがごとく。詞はもといふに及ばぬことをいふものにあらず。いはでは筋のたゝぬ事ある故の用なれば。これらも定まりたる限ならば。までといふには及ばぬ事之。かのへいはほとなりて苔のむすまでといふ哥も。小石のいはほとなるが。もはや頂上の事と人の思ふ。猶そのむかふをい

ふ故に。までとはいふ之。そこまでは人の心のをよぶまじき所なるが故之。たとへばつねにも。へコレハコレマデ御出忝シなどいふは。玄関までは送るべきが。門前まで送りたるやうの時の詞にて。即おのづから古義のごとし。又小児をたはふるゝ詞に。へコヽマデオジヤッタラ甘酒ノマソといふ。これそのむかふにをる小児の足たしかにして。我ゐる所まで來るほどの力あらば。誰かは甘酒のませんとはいはん。必その兒。わが所にをよばずしてとゞまるべし。必その足つゞかじと。むかふに限をたてゝその限よりこなたの限をさすが故之。さればまでといふ詞は。いつとても大抵人のかぎりとたつる所ある。そのむかふの限をさとす時の詞之としるべし

荒　八重霞奥までみたる龍田哉　杜國

これは。此霞の二重三重。あるひは四重五重をかぎりとたてゝ。さて奧まではいひしなり

荒　いざゆかん雪見にころぶ所まで　芭蕉

同　峠まで硯抱へて月見かな　任他

同　鶏頭の雪になるまで紅かな　市凶

續　芥子蒔と畑までゆかん月見哉　空牙

同　二見まで庵地たづぬる月見哉　支考

冬　野菊までたづぬる蝶のはねをれて　芭蕉
瓢　双六の目をのぞくまで暮かゝり　同
炭　祭まであそぶ日なくて花見哉　野坡
貝　八日の月のすきと入るまで　荷兮
拾　なりにけり〳〵まで年のくれ　芭蕉
續　うす雪や梅の際まで下駄の跡　魚日
炭　五日まで水すみかぬるあやめ哉　桃隣
同　塀の外まで桐のひろがる　同
冬　まがきまで津浪の水にくづれゆく　荷兮
瓢　潮のさす椽の下まで日和なり　珍碩
猿　麥出來て鰹まで喰ふ山家哉　花紅
同　なくやいとゞ塩にほこりのたまる迄　越人
同　魚の骨しはふるまでの老をみて　芭蕉
炭　まづ沖まではみゆる入舟　桃隣

この桃隣が句の。へまづ沖まではといふは。こなたに湊といふものをたてゝいふなり。すこしつかひやうたがひたるやうにみゆれど。かなたよりにても。こなたよりにても。猶同し法なり

此のみばかりまでの三ッは。つねにまがはす天尓波なり。これ同じ種姓なる天尓波なれば也。この故にこの家にひとつに出せり。これわが亾父の見解。脚結抄のてにはのくはしき所なり。これらの類是にて知べし

○陀尓家

たに　だにといふ詞は。俗言のサヘといふ詞にあたる詞也。又誂らふる心。願ふ心。禁る心。などにつかふときはナリモといふ詞にあたり。又その外。デモといふ詞にあたる所もある之。たとへば。猪口でさへのめぬに。まして茶碗ではといふ時など。猪口にてだにのめぬとつかふ也。又誂らへには。たとへば。十日居てもらひたき時せめて三日なりともゐてくれいといふ。これを。三日だにゐよとつかふ之。又願には。たとへば。着物がほしけれど。せめて羽織なりともほしと思ふ時。羽織だにほしとつかふ之。又禁には。たとへば。打擲はせぬがよいと思ふが。せめて叱る事なりともやめよかしと思ふ時。しかりだにすなとつかふ之。かくのごとくすべて其かたはらをいひて。本筋正面の方をつよく〳〵きかする詞之。しかるに後世俗語に。此だにをもさへといふより。だにさへ混じて。哥よみすらこれをよく〳〵よみあやまたぬ事かたく成にたり。俳諧者流は俗語をやがてつかふものなれば。とがなしとはいへども。

だにとつかひてあしき事やはある。同じくは心えて後自在をもすへき之 此部にや 此集中にも たゞ
とつかはれたる例はみえずして。のこらずさへとつかひたる句のみなり。されどもそのさへとつかひたる中に。まことのさへもまじれり。此次の條さへの下にくはしくいふをあはせてみるべし

さへ ソトサト音通ズレバナリ

さへは。萬葉集に副の字をさへといふ假名につかはれたり。これをみるに。即副の心なる詞之。副とは。主たる物ありて。それにそひたる物をいふ心なれば。天尓波につかふ時も。その主たる物のことの。をよぶべからざる物へも及びたるを云詞之。もとよりをよぶべきものならば。さへといはむ詮なかるべし。たとへば〵よるさへや夢のかよひ路人めよくらんといふ歌。現にて人目を憚ることの。夜の夢中までにをよべるをいふにて。即その晝うつゝにて。人めをはゞかりてあはれぬがくるしきをさとす詞也。晝かやうにあるが。夜までかやうなりといふべきを。その副たる方ばかりをいひて。主たる方をいはぬは。例の言靈の道のつね之。かくのごとき心なる故に。哥よみもつねにこれをよみあやまる也。よく〳〵心えてわかち知るべし。されば。古言のさへは俗言のマデにあたり。古言のだには俗言のサヘにあたるなりとこゝろうべし

荒　かなぐりて蔦さへ霜の塩木哉　千閣

炭　星さへみえず二十八日　孤屋

猿　すゞしさやこの庭をさへ住すてし　會良

春　馬をさへながむる雪のあした哉　芭蕉

續　はなしさへ調子あひけり春の雨　乃龍

冬　蕎麥さへ青し滋賀樂の坊　野水

猿幻住記　いとかり初に入りし山のやがて出じとさへ思ひしみぬ

同同　やどかし鳥のたよりさへあるを　同　芭蕉

工齋ミマカリシ後

荒　その人の軒さへなし秋のくれ　其角

これらは古言のさへにかなへる句どもなり

荒　あやめさす軒さへよそのついで哉　荷兮

猿　みやるさへ旅人さむし石部山　智月

瓢　文かくほどの力さへなき　珍碩

荒　すびつさへすごきに夏の炭俵　其角

これらはいづれもだにゝあたる句どもなり。中にも其角が句はへ夏の炭俵と下におかれたるに[illegible]波を殺したるいひやう也。へすびつだにすごしといふは。まして炭俵などはといふ事をきかせん爲のてにはなれば也。くはしくは脚結抄をもみて心うべし。芭蕉句集に。嵐雪が画にへ舜は下手のかくさへあはれ也といふ句。ましてこれは上手なればといふ心なれば。此さへは俗語のさへならず。其角の句づくりとはすぐれたるものなり。くらべて思ひしるべし

○余利家

[より] よりとは。すべて。さす所一處ありて。そこより外におもひうつす時の詞なり。三例あり。いづれも。そこよりいづる事。人の思ひかけぬ事がらにいふべし

○第一例　いづるより　ト云

これはたとへば。東より西にゆく。内より外へ出るなどいふ時つかふ詞之。俗言カラと云

荒　うしろよりみられぬ岨のさくら哉　冬松

同　くらきよりくらき人よぶ螢かな　風笛

同　なりあひや初花よりの物わすれ　野水

同　つく／＼し頭巾にたまるひとつより　青江

續　巨燵より寐にゆく時は夜半哉　雪芝

荒　草かりの袖よりいづるほたるかな　下枝

同　葉より葉に物いふやうや露の音　鼠彈

續　すゞしさや椽より足をぶらさげる　支考

荒　竃まつり舟より酒を手向けり　龜洞

續　中國よりの狀の吉左右　惟然

員　けさよりも油あげする玉だすき　越人

猿　ほとゝぎす瀧よりかみのわたり哉　丈草

多　袂より硯をひらき山かげに　芭蕉

春　岩の間より藏みゆる里　野水

瓢　あふより顏をみぬ別して　荷兮

猿　霞より見えくる雲のかしら哉　行口

同　秋かぜや田上山のくぼみより　尚白

同　そよ〳〵や藪のうちより初あらし　旦藁

同　鶯の聲きゝそめてより山路哉　式之

續　七ツより花見におきる女中哉　陽和

炭　与力町よりむかふ西風　利牛

同　きり〳〵す薪の下より鳴出して　同

春　鳥井より半道奥の砂ゆきて　昌圭

此句どものうちに。第二例のよりのごときもあれど。さにあらず。よく句意を味はひて知るべし。ことに荒野員外のへけさよりもといふ句はまがひやすかるべし。よく思ふべき之

○第二例　おくより　ト云

おくとは。片方をさしおく心にて名とす。俗言には。ヨリホカニといふなり。これ又そのさしおく方の物を人はさしおかぬが故にことわるための詞にて。猶本義はたがはぬ之。哥には。へまくらより又しる人もなき戀をなどよめり　集中例みえず

○第三例　まさるより　ト云

これは。片方のまさるよしをいふ詞之。これまたそのまさる方を劣れりと人の思はむこゝろをたてゝつかふ詞之としるべし

炭　北より冷る月の雲行　孤屋
荒　雪の日の大舟よりは小舟哉　芳川
同　雲雀より上にやすらふ峠哉　芭蕉
續　淀よりも勢多になげかし子規　順礼ノ吟ジタル句
荒　芦の穗やまねく哀よりちる哀　路通
續　麓より足ざはりよき落葉哉　一道
猿　きぬ〳〵や餘の事よりも時鳥　除風
炭　いつより寒い十月の空　桃隣
貝　誰より花をさきへ見てとる　落梧
續　酒よりも肴のやすき月見して　支考
猿　すゞ風やわれよりさきに百合の花　乙州
炭　宮城野の萩や夏より秋の花　桃隣
同　凩や沖より寒き山のきれ　其角
同　鰒汁わかい者よりよくなりて　芭蕉

はじめにいひしがごとく。俗言にはカラといふ故に。やがてからとつかひたるも多し。これは次のからの条にいふをみるべし

から からといふは。たゞよりの俗語のやうにおもふ人あれども。さにあらず。古言に多くつかひたるてには也。中昔のほどよりはよりの方雅也とやおもひけん物名などに辛崎へいつからさきにとよみ兄弟へあまのはらからなどつかひて多くみえぬは。哥よみもはや中昔の比よりかくあさましくなれるをみるべし。これひとへに。からぶりの其世にさかりになれるよりの事なり。よりはより也。からはから也。聞にくしとていはずは。いかでか自在の變化をなさん。後世たゞ表ばかりをみがく事となれる事なげくべし。かへすがへすわが　神道うしなはれしよりの事なりかし。これに二例ありて。へ名からへ裝からと云。へ名からは物名をうけへ裝からはよそひの詞をうくるを云。そのへ名からは。後世にもまゝつかふ也。いはゆるへ宿からへ我からなどの類なり。抑このからといふ詞は。上古に。故の字をへかれと訓じてよむ。即此心之。さればなに事にもあれ。その故をふまへとしていふ詞なり。よりはもと依因などの心にて。そのものをより所と定めて。さてこなたの事をいふためなれば。くはしくいはゞ。からはかなたを主とし。よりはこなたを主とする心あり。これまたつかふべき心えは。いつもい

ふごとく。その故とは人しらぬ時にことわる詞也と心えてつかふべし。集中例みえず。これは俗言にカラといふ詞ある故に。かく別にからといふてにはの。かばかりのたがひめある事をも思はでつかはれざりしなるべし。これまた俳人の誤ならず。上にいふごとく。そのはじめ。はや五百年ばかりも前よりの哥よみの。からぶり心よりえつかはざりしがつたはりし也。集中からとつかひたるは。みなよりの俗語のまゝにつかひたるものなり。古言ならばみなよりとつかふべき句ども也。いづれも第一例のよりの俗言なり。第三例は俗言古言おなじ

荒　若葉からすぐにながめの冬木哉　藤　蕪

續　後よびの内儀は今度屋敷から　支　考

炭　はけば跡から檀ちるなり　野　坡

同　隣からせつ〳〵嫁をよびに來る　同

同　姉(ママ)をよい處からもらはるゝ　孤　屋

猿　股引の朝からぬるゝ川こえて　凡　兆

續　きのふから日和かたまる月の色　沾　圃

同　山から石に名をかいて出す　臥　高

炭　賣人からうつてみせたるたゝき鉦　嵐雪

同　川からすぐに小鮎いらする　石菊

同　瓜の花これからナンボ手にかゝる　桃隣

猶哥には。からにものからづから口づから心づからみづからなど云からもなどつかひたり。くはしく脚結抄にみゆ。此うち。物からといふ詞は。つかふにいと用多き詞之。モノ、クセニといふ俗言にあたる詞なり

ゆゑ　ゆゑとは。俗にもつねにいふ詞之。これは上のからといふ詞にひとしきやうなれども。からといふ時は。その故よりおこりたる所にていふなり。ゆゑといふ時は。その内の故をさす心ある也。いはゞゆゑとはその末より本をさし。からとはその本より末をさす心なり。されどこれも。詞の品にて變化もすべけれど。今はその大抵をいふ也

猿　なにゆゑぞ粥すゝるにも涙ぐみ　去來

同　蓑虫は茶の花ゆゑにをられける　猿雖

この句へなにからぞとはいはれぬをもて。からとゆゑとは必そのわかれある事をさとるべし。此句意。その涙ぐみてゐる人の涙ぐむわけをたづぬる心之。もしこれを。なに〳〵の故によりて涙ぐむと。

その故を出していはゞ。からといふ詞あたるべきえ。そのつかひやうのわかれ。よく心うべし。俗語にワケといふ詞よくかなふなり

○哥には。ものゆゑとよむ詞あり。上の物からと同類の詞にて。モノ、クセニといふ心なり。されどふたつのわかれは。此からとゆゑとのわかれにしたがふなり

○那牟家

なん　これを〽中のなんと名づく。五屬のうちに出せる誂のなん。又此下の六倫のうちの。去倫のなんなどにはことなり。これは多く文章につかふなんにて。哥によめるはいとすくなし。今世に和文をかくとて。いかめしくなん侍るなど。いかなる故とも弁へずつかふ人多し。さやうに心にまかせておくべき事にあらず。侍るはこゝに用なければいはず。ワガアラハセル言灵弁ノ附錄ニクハシクイヘリ　なんとは。一章一段一篇のうちに。そこをむねと人にきかせたき物事に。なんとはつくる事なり。されば。なんといふ詞ある所は。すべてそこの主意たる所えとみるべし。なといふ音は。すべて外に混ぜずして一方へよく持あふ事をむかふにするゑていふ詞なれば。人にものをいひきかするに。ふかくむかふの心にもたせんとする心也。俗にも。物語するうちに。ドウシテナといふは即これにて。そこをきく人にあつくもたせんとていふえ。哥には〽これなんそれとうつせみんかしなどよめり。集中句には例みえず。文章のうちに

猿蓑幻住　あるじの僧何がしは。勇士菅沼氏曲水子の伯父になんはべりしを　芭蕉

炭俵序　やゝ吟をはり篇なりて。つひにあめつちのふた巻にわかつとなん　素龍

などみえたり。いづれもその文にむかひてその意を味はひ。わがいふ所たがはぬ事をしるべし。上古にはなもといへり宣命などにおほくみえたり

○非登家

[ごと]これは毎の心なり。詞をうけたるは。タビゴトニとあてゝみるべしものゝ名をうけたるは。俗言にも同じやうにいふ之。これらもたとへば。百あるうちに五六十ならんと人のおもふを。百にわたしていふ時の詞之

集　元日に田ごとの日こそこひしけれ　芭蕉

同　秋すゞし手ごとにむけや瓜茄子　同

同　雪ごとにうつばりたわむすまひ哉　同

○毛天家

もて　これは。もつての心之。たとへば。筆もて火ばしにするなどいふ時につかふ詞之。筆もて物をかくなどいふべからず　コレモ故アラバ云ベシ。今ハ此詞ノ持前ヲ云ナリ　この詞は集中例みえず。さてまたしてとつかふ詞。このもてと同類の詞なり。へ心もてともへ心してともつかふがごとし。されど。もてといふは。その物を直につかふ心之。してはその物をつたひにする心あり。伊勢物語のへついまつのすみしてといへるを思ふべし。枕草子にもへ消たる炭のあるしてとかけり。いづれもそれをつたひにしたる心なり

炭　紙燭してたづねて來たり酒の殘　其角

また俗に。物イヒモツテユクなどいふモツテを。もてと古言にもつかひたりへいひもてゆけばへうらがれもてくなど哥にも文にもみゆ。又してといふに。たゞへなくてといふべきを。へなくしてとつかひ。又ニ居テ　デアツテなどいふ詞をもしてとつかふ事あり。脚結抄にくはし

集　團扇もてあふがん人の脊中つき　芭蕉

○加保家

かほ　これはたゞ。顔良などいふ名の。てにはになりたる也。たとへば。へあるじがほといふ詞は。主にてもなき物が。しひて主らしく体をつくりてゐるを云詞之。されば物事のおもひよせらるゝ情ある

時。われかくおもふといはゞ。さかしらになりぬべきが故に。そのものゝさる情にてゐるがごとくいひなして。我思ひよせられし情をさとす詞にて。ラシイヤウスカナンゾノヤウニなどいふ俗言にあたる也。源氏物語などに。へわれはがほなどいふは。実はさほどにもなき事をさとすにて大かた此心なり

荒　ゆく春も心えがほの野寺かな　野水

續　こと草にわれ勝チがほや園の紫蘓　蔦雫

集　菜畠に花見がほなる雀かな　芭蕉

同　寺に寐てまことがほなる月見哉　同

同　山吹の露菜の花のかこちがほなるや　同

野水が句意は。野寺の僧侶。放下して。行春もなにともなしといふやうすなりといひて。さて実は心のうちには猶をしからん。春のうちは。花もあり。野の小草などにつけて。人も多く來て。おのづから寺のにぎはひともなるべきが。春くれてはさびしくなりぬべきさまをも含みていとも〳〵神妙の句なり。されば猶をしきは我にかはらじと。わが心の春のをしさを。野寺の僧侶によせてさとせる之。まことに句はかやうにこそあらまほしけれ。野といふ字。寺といふ字。そのさかひを持たる廣さ。たゞなに

ともいはぬ所よりおもひやらるゝ言靈の妙おもひしるべし。もとより我春のをしさをのふる句をば。野寺の僧徒の心としていふなど。後世の人のおもひもよるまじき事也。哥よみもたゞこゝをおどろけとて。數年口さがなくいひくらせども。千歳餘の醒(ママ)とけがたし。今此書によりて。俳諧者流の人〻も。ねふりをさましたまへかし。又その次の紫蘇の句も。高くひろくさかえたるは。こと草に勝たりともいふべけれど。実はさもなき物也といふ心にて。これ又。大にしてもよにならびなしとはいふべからざるわが見識をさとしたる也

〇那加良家

ながら ながらといふ詞。後世にては。たゞナレドモジヤケレドモなどいふ詞のごとくおもへるはあやまれり。ナリニといふ俗言にあたる詞也。たとへば。御苦勞ながらといふは。御苦勞なれどもの心。さりながらといふは。さうじやけれどもといふ心也とおもへり。しからず。御苦勞とはおもふなりに。此事をしてくれられよといふ心。またさうではありなりにと云心なり。たゞ物事のさうしてはおくましき事あるをそれなりにし置ていふ詞なり。哥に〽みながらといふ詞あり。かの伊勢物語の〽草葉みながら哀とぞみるなどこれ也。これは。數多きものなれば。これ〳〵とえりわけてとるべき事なるを。下

は千なり。萬は萬なりに哀と思ふ心にて。即その數なりにといふ心なり。皆といふ詞これ之。

續　わかるゝや柹くひながら坂の上　惟然

荒　名月や年に十二はありながら　文隣

同　すゞしさよ白雨ながら入日影　去來

戀

同　しりながら薄にあくる妻戸哉　小春

集　痩ながらわりなき菊のつぼみ哉　芭蕉

同　年くれぬ笠着てわらぢはきながら　同

荒　枝ながら虫うりにゆく蜀漆かな　舍咕

西施

同　花ながらをりかへさるゝ牡丹哉　越人

同　からながら師走の市に賣るさゞい　同

續　[二八]場にゐて月見ながらや莚機　利合

同　冬のまさきの霜ながら飛　沾圃

猿　骨柴のかられながらも木の芽哉　凡兆
同　うぐひすや窗に灸をすゑながら　魚日
同　苔ながら花にならぶる手水鉢　芭蕉
續　ぬれ椽や薺こぼるゝ土ながら　嵐雪
炭　帶ときながら居風呂をまつ　孤屋
猿　下闇や地虫ながらの蟬の聲　嵐雪

・いづれもいとよくかなへり。かへす〳〵。なれどもの心にまがはすべからず

[まゝ] これはもと。へまに〳〵といふ詞。へまゝにといふ詞など同じ詞之。上古は。へまにまともつかひたり。俗語のへまゝといふにはすこしたがへる詞なり。いかにとなれば。萬葉おほく隨の字をよめり。俗語にても。それにまかせたるやうなる時いふは叶ふやうなれど。それも多くは。古言のながらと混じたるあり。此故に。ニシタガフテ　ニツイテ　心マカセニなど脚結抄に訳したり。そのむかふのあるかたちにしたがひてゆく心なり。これ又したがふべからぬ事と人の思ふべきをことわる爲之

集　柴の戸の月やそのまゝあみだ坊　芭蕉

荒　葬やかきほのまゝのじだらくさ　[illegible]

同　さればこそあれたきまゝの霜の宿　芭蕉

炭　たゞゐるまゝに肱わづらふ　野坡

同　投うちもはらだつまゝにめつた也　孤屋

へまに〳〵へまにまなどは例みえず

○加天良家

[がてら] がてらといふは。もとへかてといふ詞に。らのそひたるにて。へかてといふは加ふる心なり。らはまへにいふをあはせてみるべし。俗言にいふも同じ。又カタ〳〵といふ心もある之。ひとつの事に又一事をくはへてする心を云。これ又一事之と人の思ふべきをことわる詞之。すゞみがてらに月をみるなといふ類之。俗語も同じ詞なるに集中例みえず

俳諧天尓波抄巻之四　終

俳諧天尓波抄巻之五

○六　倫

○可　倫

［べし］べしとは。俗語にソウナといふ詞のごとく。そのほどをはかりていふ詞なりと脚結抄にいはれたるうべなる哉。後世の人はよく弁へしらぬこと也。漢文にて可とつかふもこの心にひとしきつかひやうなり。されど漢文には。應當などつかふも猶べしといふ和語にあてられしは。和語のべしは。上下のうちあひにて應當可などさま〳〵の心とはたらくが故之。これまたもとしかあるべきはずなる物ならば。べしといふに及ばず。人はそこへはめてはおもふまじき事ある時にことわる詞なりとしるべし。此故にたとへば。いまた物語してゐる人を。イニソウナとはかりあてゝいふ時。〽いぬべしといふがごとし。ハズナ　ソウナなどいふ俗語。その句意をみてあつべし。されば。〽暮ぬべしといふは。いまだ暮ぬに。暮るべき勢あるをはかりあてゝいふ詞なり。〽花ちるべしといふは。いまだ散らざる花のちるべき勢あるをはかりていふ詞也。これによりて。らしといふ詞にまがひやすし。よく心えてわ

かつべし。されどもらしは。むかふの内のもやうにしたがひて察する心なり。べしはこなたよりはかりあてゝいふ心なるがたがへり。らんも時ありては混じやすき詞なり。後世。人にかくせよなどいふ詞のごとく心うるは誤なり。そのほどをしらする時に。さる心のごとく聞ゆるなり。これにつけていとをかしき事あり。長崎にて清人花見に出けるに。此花不可折と書たる札のたちたるをみて。あやしげなるかほして。手に〳〵その枝を折てみて。いよ〳〵あやしげなるさましたりしとかや。げに漢文に不可折とつかふは。をられぬといふがごとき心なれば。をれぬ枝かと心えてをりてみたるいとをかしきこと也。後世。不可といふは。たゞいさむる詞之と心え來れるはあやまれり。そのほどのそれにあふをはかりてべしとはいふなる事此話によりてもさとるべし

荒　髭にたく香もあるべし衣がへ　荷兮
同　峯の雲すこしは花もまじるべし　野水
同　釣鐘草後につけたる名なるべし　越人
同序　この野のはらの野守とはなれるなるべし　芭蕉
同　餅花のあとはすゝけて散ぬべし　野水

妻ノウセタリシ寸

同　水無月の桐の一葉とおもふべし　同

續評　平田渺々とくもりたるは老杜が唯雲水のみなり
といへるにもかなへるなるべし　支考

員　八重山吹ははたちなるべし　野水

猿　たなばたやあまりいそがばころぶべし　杜若

同序　いかならん吟聲もいでぬべし　其角

同序　其句に魂の入らざれば夢に夢みるに似たるべし　同

續　白魚のしろき噂もつきぬべし　山蜂

同序　吾心なんぞ是非をはかる事をなさんたゞ後の人
猶あるべし　支考

多　元政の草の袂も破ぬべし　芭蕉

いづれも。むかふのやうすのかくれたるにしたがひて察する心にあらず。みな此方よりはかりあてがひていふ心なりとみるべし。べきべくべかりけりなど。哥にはさま〴〵につかひなせり。脚結抄にゆづりてこゝにいはず

續　抄汐にころび入るべき生海鼠哉　利雪

同　たなばたをいかなる神にいはふべき　沾圃

春　口すゝぐべき清水ながるゝ　越人

猿　千世ふべき物をさま〴〵子日して　芭蕉

同　この瘤は猿の持つべき柳かな　卜宅

同幻住記　鳰のうき巣のながれとゞまるべき芦の一本のかげたのもしく　芭蕉

員　わがまゝにいつか此世をそむくべき　越人

猿　竹の子のちからを誰にたとふべき　凡兆

炭　踊るべきほどには酔て盆の月　李由

猿　節季候にまたのぞむべき事もなし　順琢

同幻住記　よるの物をさむべき所などいさゝかしつらへり　芭蕉

冬　わが祈明がたの星孕むべく　荷兮

員　賤を遠からみるべかりけり　野水

べみべらなりなども哥にはつかふ也。發句には例みえず

○不　倫

[ず]ずとは。ぬといふにひとしき事ながら。ぬといふは。ずといふ音の奈經にうつりたるにて。義もそれにしたがひてつよくなりて。ずといふ事の。もはやそれになりぬきて再びかへらざる勢あり。たとへば。ずといふは路のほどをいひ。ぬといふはむかふへゆきすわりたる心なり。これ五十音義の自然のいきほひなり。しかればずといふ時は。わが思ふ筋とはあらぬすぢにゆくさまをいふなり。かゝるわかれあるに。俗語にはおしなへてぬとのみいふ事。後世の詞のくはしからぬ所之。されどもさすが飯クハズニアルク　湯ヲツカハズニ出ルなどいふ時は。ずともいふこれ即古言のずによく叶へり。されど俗言は。かやうの時ならではずといはぬ之。古言には。ぬといふべきやうの所も。義叶はねばずともつかふ事之。もと湯ツカハズニなどいふが如く。その路のほどをいふ天尓波なれば。古言のずにも。ズニといふ心おのづからあるなり。へ思はすへきかすと。すの字清音にいふ時は。思はせらる聞かせらるなどいふ心なり。（コレハ上古ノ詞ナリ）それを濁音にいへば。不思不聞の心となる事。わが國の聲のつかひやう。いとも／＼簡約にして。義いとふかきを思ふべし。この事こゝにかきつくしがたし。くはしくは

口授すべし。心ざしあらん人は。わが門に來て問給ふべし

猿　この筋は銀も見しらず不自由さよ　芭蕉
同　澁柿や烏もくはず荒畠　正秀
同　むつかしき拍子もみえず里かぐら　曾良
炭　舞羽の糸も手につかず緑　野坡
猿　人にもくれず名物の梨　去來

明年弥生尋旧菴

同　春雨やあらしもはてず戸のひづみ　嵐蘭
荒　けさの春さびしからざる閑居哉　冬松
續　涅槃像赤き表具も目にたゝず　沾圃

ナルミニテ翁ニ逢テ

荒　いく落葉それほど袖もほころびず　荷兮
同　さびしさの色はおぼえずかつこ鳥　野水
續　名月やなにも拾はず夜の道　野荻

荒　餅搗や内にもをらず酒くらひ　李下

炭　今に庄屋の口はほどけず　野坡

同　市中に木葉も落ず富士おろし　桃隣

續　正月ものゝ襟もよごさず　臥高

炭　鳥のねも絶ず家陰の赤椿　支考

木曾塚

猿　その春の石ともならず木曾の馬　乙州

いづれもまへにいふごとく。ぬといふまでうちつきたる心ならず。どうぞもしたらば。今一筋の方にもなりさうにおもはるゝ心をふくみていふほどの心なり。されば畢竟は。今一筋の方をおもふこゝろをさとす心也としるべし

○じとつかふは。即此ずの伊緯にかよひたる也。俗にマイといふ詞にあたるなり。これは。わがさうはゆくまいと思ふ時にも。又人のさうはゆくまいとおもふ時にもつかふ詞なり。ずといふは。字緯の音之。それを伊緯にかよはして。じといふなれば。めのまへにずといふ詞のしかとはかけがたき時の用とはなる也。さればずと定めていひがたき心なりとしるべし。内に今一筋を思ふ心あるはずに同じ

瓢　なれ加減又とは出來じひしほ味噌　荷兮
炭　花はよも毛虫にならじ家櫻　嵐雪
員　我もらじ新酒は人のさめやすき　同
猿　智恵のある人にはみせじけしの花　珍碩
集　馬方はしらじ時雨の大井川　芭蕉
荒　うぐひすにちひさき藪もすてられじ　一笑
同　つくり置てこはされもせじ雪佛　一井
同　物いはじたゞさへ秋のかなしさよ　舟泉
同　むつかしと月をみる日は火も焼かじ　荷兮
同　雪の旅それでは明じ秋の空　野水

○まじきまじとつかふ詞あり。これは俗言のマイといふ詞のもとにて。マイといふにはたがへるは。人物事のうへにはいひて。わがうへにはいはぬなり。俗のマイは人我にわたりていふなり。此故にじにあたりて。まじにはかへりてあたらぬよし脚結抄にくはしくいはれたり。俗にソモナイ　ハズデナイなどいふ詞にあたる也

○ざるとつかふ詞は。ずあるといふがつゞまれる也

[ぬ]ぬとは。上のずの条にいふがごとく。ずといふよりは一段つよくて。ふたゝび外の筋にはならぬさまをさとす詞之

續　くるしさも茶には渇へぬ盆の旅　曾良
荒　精出してつむともみえぬわか菜哉　野水
炭　時鳥かほの出されぬ格子かな　野坡
瓢　口上はてぬいにさまの時宜　正秀
續　喧嘩のさてもむさとせられぬ　惟然
炭　むすめを堅う人にあはせぬ　芭蕉
同　淡氣の雪に雜談もせぬ　野坡
同　ことしの暮はなにも貰はぬ　同
瓢　駕籠のとほらぬ峠越たり　路通
炭　ことしは雨のふらぬ六月　芭蕉

同　壁をたゝきて寐せぬ夕月　　同

猿　もゝの花境しまらぬかきね哉　　烏巣

○ぬとかよはせてもつかふ也。これは衣緯へかよはせたるにて。ぬといふ事を。むかふの用にかけんとていふ時の詞なり。すへて衣緯の音は。みなこなたの物をかなたの用にかけていふ義なるなり。たとへば。士はくはねど高楊枝といふは。くはぬといふ事をば。それを又はたらかせて。高楊枝つかふ所へかけてみせんとて。ぬをねとははたらかする也。後世哥よみも此五十音の經緯にかよふ聲妙をたづねしらざるが故に。たゞ古人の句拍子につくがゆゑに。へふるといふべき所にへふれるといひ。へなくといふべき所にへなけるなどいふ事まゝみゆ。いとも〳〵理なき事也。これ皆衣緯になしていふは。今いふごとくこと更にはたらかせて。かなたの事へかけんとての事なりと弁へざるがゆゑ也。たとへていはゞ。すわつてをる人をたゝせて使をいひつけたるがごとしと知るべし

續今宵賦　はじめより尊卑の席をくばらねど　　支考

しば〳〵酌てみだらず（コレソノクバラヌトイフヿヲ。乱ラズト云所ヘハタラカセテミスル爲之）

炭　人の物おはねば樂な花ごゝろ　　野坡

同　君こねばこはれ次第の家となり　　共角

いづれも。ぬといふ事を又さらにはたらかせて。かなたの事にかけていふ心なりとみるべし
○でとつかふ事あり。これ即まへにいふ所のぬのすこし淺き也。これはずとぬとの淺深に同じく音の自然なり。上に論ぜるずとぬとの差別の所に。俗言のズニといふ事をいへる。このでにあたる詞なり。俗に。イデともいふ。見イデ　キカイデの類之。ずてともずしてともつかふにひとしき詞なり。でとねとの音はいと近き音なればたゞすこしの淺深のみにて。大かた同じやうなるもの也。されど。多經奈經のわかれおのづからありて。でといふは。そのはたらきをおもくもたする心にはあらで。かなたの事にかろくつくる事にしていふ時の詞なり。支考が葛の松原に云へての字を濁りて用ふる事は。哥にはあまた侍れど。外の詞艶なれば。さのみ見ぐるしからずといへり。即このてにはの事なり。このでを艶ならぬてにはとや思はれけん。すべて詞の艶なるなどいふは。さすがに後世の哥よみの弊を傳へられたるにて。言靈の貴きには。たとひ聞にくき詞なりとも。かふべき事にはあらざる事之。みむ人まどふべしとて今これを論ずるなり

荒　梭櫚の葉にとまらで過る胡蝶哉　梅餌(畫)
同　うごくともみえで畑うつふもと哉　去來
同　かざり木にならで年ふる柏かな　一晶

續　老の名のありともしらで四十雀　芭蕉

猿　縫物や着もせでよごす五月雨　羽紅

同　手をかけてをらで過行むくげ哉　杉風

これらの句意をみて。ねとはかろき所味はふべし。但ねをでとはつかふべからず。でをねとはつかふべからぬてにはなれど。これは音の義のうへにて論ずるなり

なし　なとばかりもつかふなり。もとなしといふ詞は装にて（ワガ亾父。詞ヲ三ニワカチテ三具トセリ。イハユルかざしよそひあゆひコレナリ。かざしトハ。スベテ句ノ上ニツク詞ナリ。よそひトハ。中ニアル詞ナリ。あゆひトハ。下ニツク詞。即天尓波ナリ）てにはにはあらねどもなくになしになどいふ詞てにはなれば。これらは装を脚結にしてつかふ詞也としるべしかゝる事は。詞にいと多し。たとへば物の名にも。へひかるといふは装なるをへひかりといひて名とするたぐひなり。さればとなしもなしはなしずもなししもなしずしもなしなどいふは装にあらずと。脚結抄にくはしくみゆるがごとし。此事かへりて哥よみはわきまへしらぬを。俳諧にては。かの切字と称するうちにへもなしといふ詞の入りたるは。てにはの理のこれりといふべし。されど俳諧につかふは皆装のへなしにて天尓波にはあらず。さればこゝに句どもをひくべきにあらねど。装と脚結との別をしるべきために。此句どもをあげたる也。おも

ふにこれは。天尓波のなしを心えあやまりて。裝のへなしに混じてつかひなりたるなるべし。哥には

へわれとはなしにへとゝむべき物とはなしになどもつかひたり。心はたゞ俗言にいふに同じ

荒　花の山常をりくぶる枝もなし　一井

同　暮いかに月の氣もなし海の果　荷兮

同　牛もなし鳥羽のあたりの五月雨　一髮

能登ノ海ヲ見テ

續　塵濱にたゝぬ日もなし浦千どり　句空

同　名月や遠見の松に人もなし　圃水

同　冬がれに去年來てみたる友もなし　乃龍

同　名月や灰吹すつる陰もなし　不玉

荒　秋の雨はれて瓜よぶ人もなし　野水

猿　郭公けふにかぎりて誰もなし　尙白

瓢　なか〳〵に土間にすわれば蚤もなし　曲水

炭　文もなく口上もなし粽五把　嵐雪

これら皆装のへなし之。物の有無にいふは装なりとしるべし。理につくは脚結なり

集　もろき人にたとへん花も夏野哉　芭蕉

これは。無を夏のかしらによせていはれたるなり。なくにあらなくにならなくにからなくになど哥にはつねにつかふてには也デハナイノニ　モセヌコジヤニなど俗言にいふ心なり。とはなしにはト云デハナイノニといふ心なり。装との別よく／＼思ふべし

集　あら何ともなきのふも過てふぐと汁　芭蕉

これはなとばかりつかはれたるにて此句ばかりは天尓波なり。よく味はひてわかつべし

○將　倫

［ん］んといふ詞の事。まへの第二巻の誂屬のなんの下にくはしくいへるがごとく。予これを五十音の本源神音のうと名づくる音にて。和漢ともに此文字はなき之。そこにいへるがごとく。たゞこれは心のうちに思ふ事ある形容なりとしるべし。俗にはウ　ヨウなどいふ。たとへばへみんといふは見ヨウへきかんといふはキカウといふこれ也。宇治拾遺に。小式部がつぼねに關白殿のねておはしゝに。小式部がおもひ人の定頼。つぼねのまへを哥うたひてとほられし声を聞て。小式部ンといひてふしかへ

りし事。心ぐるしかりしと語りたまひしといふ事あり。いまだ声に發せねども。心のうちにかの人ならんと思ひしりたる心のひゞきたる也。さて此ん。人のうへにも我うへにもいふ詞なり。たとへばへこん人といふ時は人のうへなり。へゆかむ(ママ)などいふ時は我うへなりと知るべし

續　早乙女にむすんでやらん笠の紐　　闇指

此句は。田植る女の手の泥によごれたれば。みつからむすばんは心わろかるべければ。むすひてやるがよしと。心のうちにおもへる事をさとしたるなり

續　はな笠を着せて似合はん人は誰　　其角

同　客あるじともに蓮の蠅おはん　　良品

憶翁之客中

同　裾折て菜を摘しらん草枕　　嵐雪

炭　うぐひすに藥をしへん聲の文　　其角

續　うぐひすの手もとやすめんながしもと　　智月

春　須磨寺に汗の帷子ぬぎかへん　　重五

炭　行燈を月のよにせん郭公　　嵐雪

續　寐所や梅のにほひをたてこめん　大舟
同　蒟蒻の名物とはん山ざくら　李由
猿　ひとりねもよき宿とはん初子日　去來
同　かへり花それにもしかん莚ぎれ　其角
春　表町ゆづりて二人髪そらん　越人
冬　夏ふかき山橘にさくらみん　荷兮
　　イセニ詣ケル寸
猿　葉月や矢橋にわたる人とめん　千子
炭　うの花の絶間たゝかん闇の門　去來
猿　月見せんふしみの城の捨廓　同

○めとつかふ事あり。めやめどてめけめらめなめなどつかふなり。んをばむとかく故に。むをかよはして衣緯にてめといふ也。これまた上のねの下にいひしがごとく。こと更にはたらかせていふなりと心うべし。かやうの例はいづれにても同じ事なり。こそをうくる時何めとつかふ例なり。されどこそに打合はせずてもつねにつかふなり

「まし」これはしの字清(スミ)てよむ詞なるを。後世の俗。哥によみたるをも。まじと濁りてよむ事。よく弁へざるが故之。これは畢竟んとひとしき詞のごとくつかひ來たれば。哥よみもこれを混ぜる事多し。されど差別ありて。んは心中におもふさまを出さずしてさとす音なり。ましは未來の事を兼ていふ詞なり。未來の事をかねて思ふ事を。へあらますへあらまし（あらますは用之　あらましは体之）といふ此詞のへあらをはぶきて天尓波にしたるものとみえたり（あらますといふ時は裝なり。此例まへにいへるがごとし）されどもましといふ二音に。あらます義はあるが故なり。音義によりてみれば明らかなる事之。されば私にはぶけるものにはあらずとしるべし。哥にはつねに入用の義なれば。いと多くつかふ詞なり。馬内侍集にへさかりありてちらましいかにをしまゝしとよめる哥もあり。これは散るもをしむも。皆未來の事にしてかねていふ之。こゝにおいてその差別をしるべし。されどんもまたへゆかんへとらんなどいふ時。みな未來の事なるが故に。まどふもことわり也。さりながら。んは。くれ〳〵もたゞ心中におもふ様子をさとすが正義なり。混ずべからず。ましかはませばからませばならませばならましかはなましかはなどもつねにつかふ之。これ皆。もし行末かやうにあらばといふ心なり。集中例みえず

【らん】らは。上にもいひしがごとく。等の字を萬葉にかゝれたるはその等類なる心あるが故之。たとへば。我等といふは。我と等しきものを。人の心のうちにおぼえてをるをさす心なり。此ゆゑに。らんは。察する詞ともなれる也。俗言にデアロウといふ心之。これを疑の詞なりと心うるはあやまり也。おほくは上にやか其外疑のかざしなどを（疑のかざしトハ。いづれたれいかにいかゞいかでなどなに等の詞の事なり。亾父があらはせる挿頭抄にくはしくみえたり）うけてらんとはつかひたり（又さならでもつかふ事つねなり）その上なる疑の詞にひかるゝ故に。うたがひの詞となるにてこそあれ。上にうたがひの詞なき時は。たゞ察する詞なる也。よく心えてつかふべし。んは上にいふがごとし

續　年の市たれをよぶらん羽織どの　其角

荒　いちはつは男なるらん杜若　一非

同　なでしこや蒔繪かく人をうらむらん　越人

此やハ疑ノやニテ。哥ニヨムヘ何や何らんノ例トオナジツカヒヤウナリ

同　聲あらば鮎もなくらんうかひ舟　同

同　朝鮮を見たもあるらん友千鳥　村俊

猿　しよろ〳〵水に藺のそよぐらん　几兆

冬　麻呂が月袖に羯鼓をならすらん　重五

員　月の朝うぐひすつけに急ぐらん　野水
春　春の旅節供なるらん袴着て　荷兮
瓢　酒ではげたるあたまなるらん　曲水
炭　金佛の細き御德をさするらん　嵐雪
猿　しぬるまで操なるらん鷹の顏　旦藁
員　呼子鳥とは何をいふらん　越人
春　けふとても小松負ふらん牛の夢　聽雪
猿　うそつきに自慢いはせて遊ぶらん　野水
員　とつくりをたが置かへてころぶらん　傘下
此たがトイフハ疑ノカザシナリ
同　夕霞そめ物とりてかへるらん　冬文
炭　泥染を長き流にのばすらん　嵐雪
員　狐つきとや人の見るらん　越人
コレモ此やハ疑ナリ

同　春のくれありき〳〵も眠るらん　胡及

○やらんといふ詞あり。これは。ふるくは哥によまぬ詞也。後世には哥にもよみたれど。もとは俗語なり。へ何やあらんとよむべきを。かくつゞめたるなるべし。畢竟後世出來たる詞とみえたり

瓢　たそかれは舟幽靈の泣やらん　珍碩

同　虫はみなつゞれ〳〵となくやらん　正秀

これを正しくいはゞ。黄昏は舟幽灵やなくらん。虫は皆やつゞれつゞれとなくらんといふべきがかくなれる物之。されども俳諧にはとがなし。續猿蓑にへ朔日の日はどこへやら振舞かといふ句ある。此やらといふ詞は。畢竟これと同物なり。されば是は。俗言なる事あきらかなり

○らめとつかふは。らんのうつりたる也。これは。上にんとめとの差別をいふに同じく心うべし

［らし］この詞。らんとまぎれて。後世は哥よみもよみ損じたる哥などもみゆるなり。これ皆たゞ古人の句拍子をおぼえて。その口拍子にて哥をよむが故に。しかとあたるかあたらぬかの差別をみづからたづねしる事あたはざるが故之。義のたがふ所はさて置ぬ。上のうけざまよりして。らんとは大にたがふ事なるに。亾父脚結抄をあらはせるまで。古今これを弁じたる人なかりし也。（これは此詞にかぎらず大かたてにはの義の事之）

うけざまとは。らんは上に疑のやかまたは疑のかざしなどをもうくるに。らしは疑の詞をうくる事なきこ。後撰にへかくやあるらし後拾遺にへ聞つるやはつねなるらしとあるをあげて。脚結抄に委しくいはれたるをみて心うべし。はや此世などよりかゝる誤は出來たる事なり。詞は世〻轉用する事多き事にて。正義にたがはざらんは。それにしたがひてもつかふべけれど。此へや何らしなどは。決してつかふべからざる事なり。たとひ後撰にありともそれを例とはしがたき事は。らんはむかふの内を察しやる心之。らしはその内のもやうしかとはしれねど。大抵思ひあたらるゝ所をもつて察する詞なれば。上にうたがひの詞をうくべき種姓の詞にあらず。此故にこそ上古以來疑の詞はうけざるを。後世これを弁へずしてあやまれるなり。たとへばへ龍田川もみぢ葉ながる神なひの三室の山にしぐれふるらし古今此の哥は。龍田川に紅葉のながるゝが。其内に。必定三室山に時雨ふるなるべき理のおぼゆるが故に。らしとはいふ之。三室山にしくれのふりふらぬは。しかとは行てみねども。龍田川にながるゝ紅葉にてこれを察するなり。らんはかやうに據とする物なき時の詞なり。上古にへあらそふらしきなどつかひたる詞の。きの字のはぶかりたるなり。俗にも今ラシイといふ詞のあるも。しかとは定めがたけれど。内のもやうのすこし外にうつりたるをもていふ詞なるをや。俗にサウナといふ詞にあたる也。但上のべしといふ詞も。サウナといふ詞にあたれども。これには又たがひめあり。たとへばへ

散ルサウナへ散リサウナといふが如し。チルサウナハらし也。チリサウナハべし也としるべし。荒野員外に越人へ曉をむつかしさうになく蛙といふ句あり。これは哥ならば。へ曉のむつかしからしなく蛙とよむべき之。これら古言のらし。俗言のサウニのよくあたるをしるに便ある句なり

員　かしこまる諫に涙こぼすらし　野水

猿　鯖釣る比もあるらし鱸つり　半残

員　麥をわすれ花に溺れぬ鳫ならし　素堂

同　めでたくもよばれにけらし生御魂　野水

集　そのかみは谷地なりけらし小夜砧　芭蕉

同　月雪とのさばりけらし年の暮　同

このならしは。なるらしのつゞまれる也。けらしは。けるらしのつゞまれるなり

○有　倫

ありの此ありといふ詞も。もと上のなしの条にいふがごとく。装なるが脚結になりたるものなり。なしは。ありと混ずべき事ある時にいひ。ありはなしと混ずべき事ある時にいふ詞なり。さきにもいひ

しがごとく。なしありなどは。もとてにはにあらねども。活用のうへにていふ時はやがて天尒波なるが故に。かく条をたつるなり。委しくはあゆひ抄にみるべし

集　青くてもあるべきものを唐がらし　芭蕉

同　水無月や鯛はあれども塩くじら　同

これら天尒波のあり也。この次の句。鯛はよくはあれどもの心なれば。これは脚結なり

炭　袴着ぬ聟入もあり年のくれ　李由

續　盗人にあふた夜もあり年のくれ　芭蕉

猿　梅咲て人の怒の悔もあり　露沾

員　ほとゝぎすまたぬ心の折もあり　荷兮

猿　先たのむ椎の木もあり夏木立　芭蕉

これらはいづれも装なり。物につけていふは。てにはにあらずとしるべし

○かりとつかふは。くありのつゞまれるなり。かるかりしかればからばからんからめなどもかよはしてつかふなり。此外にもなほこのたぐひの詞多きなり

集　寒からぬ露や牡丹の花の蜜　芭蕉

同　くすり飲むさらでも霜のまくら哉　同

員　賤を遠から見るべかりけり　野水

炭　けふは懸隔さびしかりけり　野坡

同　くる秋は風ばかりでもなかりけり　北枝

猿　菊をきるあとまばらにもなかりけり　其角

荒　名月は夜あくるきはもなかりけり　越人

多　月は遲かれ牡丹ぬす人　杜國

集　蛤のいけるかひあれ年のくれ　芭蕉

○けれといふは。かれといふが。そのかのけにかよひたるにて。下の來倫のけりのかよひてけれとなりたるとは別なり。よく心えわくべし。古今へ散ればこそいとゞさくらはめでたけれなどよむ類也。めでたくあれといふを。かくいひたるもの也。その外。けれどければけれやなどつかふもこの例なるありとしるべし

續　日はさむけれどしづかなる岡　芭蕉

けん これまたからんといふ詞のうつれる也。からんはくあらんのつゞまれる也。後世にてはつかはぬ事なれど。上古にては〽うれしけん〽いちじろけんなどよめり。中昔までは。〽いづれ高けんなどよめるに。その後はたえてよまず。これ又來倫のうちのけんとはことなる詞なり。上のけれも。このけんも。來倫のうちの。けんけりなどゝは。上のうけざまたがふをもて異詞なる事をさとるべし。これわが亡父はじめて目のをよびたる事にて。古來しらざりし事なり。脚結抄を見て心えわくべし。集中例なし

たり たりは。とありのつゞまれる也。氐身のうちにいだせるたりに混ずべからず。哥にもいたりてすくなき例なり。文章にはまゝ例みゆる詞なり。源氏物語桐壺に〽ことゝある時は。猶より所なく心ぼそげなりとかゝれたるは。此たるをばつゞめずしてとあるといへるなり。氐身に出せるたりは。てありのつゞまれるにて。上のうけやうことなり。よく思ひわかつべし。集中例見えず

なり このなりは。にありのつゞまれるにて。那利身にいだせるなりにはことなり。哥にはやがてにありともよみたり。〽花まちどほにありし菊などいふこれなり。俗言にジヤノジヤなどいふにあたる

なり。脚結抄にくはし

續　守梅のあそび業なり野老賣　其角

荒　楠もうごくやうなり蟬のこゑ　昌碧

同　鵜のつらに篝こぼれてあはれ也　荷兮

續　なにごとも寐入るまでなり紙ぶすま　小春

猿　鉢たゝきこぬよとなれば朧なり　去來

同　何事も無言のうちはしづかなり　同

同　馬士のいひ次第なり五月雨　史邦

續　目利で家はよいくらしなり　馬莧

同　夏やせもねがひの中のひとつなり　如眞

荒　はつ雪やおしにぎる手の奇麗なり　傘下

同　名はヘチマ夕皃に似てあはれなり　長虹

同　聞しらぬ哥も妙なり神かぐら　利重

冬　寉みるまどの月かすかなり　野水

炭　杉の葉の雪おほろなり夜の崔　支考
同　ふり賣の鴈あはれなり夷講　芭蕉
瓢　つれもちからもみな座頭なり　里東
員　毒なりと瓜一トきれもくはぬなり　長虹
此上ノなりハ此例ナリ。下ノなりハ那利身ノなりナリ。ヨク味ハヒ知ルベシ
猿　加茂のやしろはよき社なり　芭蕉
炭　小栗よむ片言まぜてあはれなり　其角
同　塩魚のうらほす日なり衣がへ　嵐雪
同　猫の戀初手から泣てあはれなり　野坡
員　みわたすほどはみな躑躅なり　胡及
同　蛤とりはみな女中なり　一井
同　十日の菊のをしきことなり　荷兮
炭　投打もはらたつまゝにめつたなり　孤屋

續今宵賦　支考は。伊勢のかたに住所もとめて。時雨の比は。むかへんなどもおもふなり　支考

同　金柑はまださかりなり桃の花　雪芝

員　月の秋旅のしたさにいづるなり　荷兮

同　捨て春ふる奉加帳なり　越人

猿　うき世のはてはみな小町なり　芭蕉

この外なりしをなりけりなりけるなりけれなりせばなどつかふなりは。みな此例なり。これまた人のそれとも定めずしてをる所をおもふ詞なり。たとへば。飯は米じやといふは。しれたる事をいふやうなれども。麥めし粟飯などゝ人の思はむ所を思ひていふ心ならんにはかくもいふべきなり。されば。たゞしれたる事をさだめていふ詞にはあらざる事みるべし

○又かよはして。なるなるらしなるらんならんならばならなんならぬなれどなればならずならでならなくになどいひ。又は。にあらぬにあらなくににやあるらんにぞありけるにも有哉などいふもみな此例なり

猿　まつさきにみし枝ならんちる櫻　丈草

貝　やゝ初秋のやみあがりなる　野水

冬　冬まつ納豆たゝくなるべし　同

ヒミトイフ山ニテ卯七ニワカレテ

同　君が手もまじるなるべし花薄　去來

炭　茸がりや鼻のさきなる哥がるた　其角

續　麁相なる膳は出されぬ牡丹かな　風弦

冬　賤のやに賢なる女見てかへる　重五

猿　幻住記　そのかみ國分寺の名をつたふなるべし　芭蕉

つたふト斗ヲなるべしトハウケガタシ。つたふるなるべしトイフベキ例ナリ。コレハ書寫ノアヤマリニヤアラン

同　小刀の蛤刄なる細工箱　半殘

瓢　唯四方なる草庵の露　珍碩

炭　奈良がよひ同じつらなる細もとで　野坡

續　飯櫃なる面桶にはさむ火打鎌　惟然

炭　この春はどうやら花のしづかなる　利牛
集　かずならぬ身とな思ひそたま祭　芭蕉
荒　さほ姫やふかいの面いかならん　鼠彈
同　野の宮や年のあしたはいかならん　朴什
同　さし柳たゞ直なるもおもしろし　一笑
續　春しづかなる竿の染纑　里雨
員　山のはに松と椴とのかすかなる　野水

俗言にナといふは。此なる之。俗語のまゝにつかひたるも多し

炭　人のものおはねば樂な花ごゝろ　野坡

これらなり。其外。てにはを繼たる句どもは

瓢　素布子ひとつ夜寒なりけり　正秀
猿　すみきる松のしづかなりけり　素男
員　年たくるまであほうなりけり　傘下
冬　冬の朝日のあはれなりけり　芭蕉

瓢　風呂の加減のしづかなりけり　野経（ママ）

猿（幻住記）　あじろもるにぞとよみけん萬葉集のすがたなりけり云々　芭蕉

荒　灯のかすかなりけり梅の中　釣雪

同　いちはつは男なるらんかきつばた　一非

春　春の旅節供なるらん袴着て　荷兮

猿　しぬるまでみさほなるらん鷹の貞　旦藁

續　弓固とる比なれや藤ばかま　支浪

員　酔ざめの氷の飲たきころなれや　傘下

春　一夜かす宿は馬かふ寺なれや　野水

猿　ひばりなく小田に土もつ比なれや　珍碩

同（序）　この道のおもておこすべき時なれや　其角

荒　釣鐘草後につけたる名なるべし　越人

員　八重山吹ははたちなるべし　野水

○去　倫

[ぬ] これはへいぬといふ裝なるを。つゞめて脚結としたるもの也。へいぬとは。こゝを去りてかしこへいたる事をいふ。世にこれを卆のぬといふ。わが家にては。去倫のぬといはするなり。テシマウ　ヤウニナル　叚ニナル。所によりては。テシマウタ　ヤウニナッタ　叚ニナッタといふ俗言にあたる詞なり。此ぬといふ音。去倫ともなり。不倫のぬともなる事。上の詞にひかれての事之。たとへばへふりぬといふは。此去倫なり。へふらぬといふは。不倫のぬなり。へきゝぬといふは。去倫なり。へきかぬといふは。不倫なり。これらにては。上の字。去倫なるは伊緯をうけ。不倫なるは阿緯をうくるが故によくわかれたり。コレ伊緯阿緯ノ義ニヨルヿナリ。コノヿコヽニ委シクイヒツクシガタシ　されどまた。衣緯をうけて。へいはれぬなといふ時は。去倫にも不倫にもたがひにかよふ詞となれば。まぎらはしきやうなれど。去倫の時は。上聲にいひ。不倫の時は。去聲にいふなり。つねに俗語にも平上去入はあるものなれば。いひ試みてこれをしるべし。この四声。わが國にては平上去の三こゑばかりにて。入声はいはぬ事古言のさまなり。この三こゑ。いづれも義ありて。わかるゝが故に。それにしたがひてかく不倫去倫とはわかるゝ事なり。これらの事は。音義をまなびてしるべし。かやうの事はしらでも。ふるき哥ふるき句などをとくには。自然とその事

がらによりて。去倫不倫はわかるゝものなれど。つかふ時には。やうせずはまぎるゝ事あるべし。よく心えわくべし。すべてぬといふ義は。ふたつのもの事の。ひとつ物のごとくなるをいふなり。この義をば不倫とも去倫ともなしてつかふ事なりとしるべし

荒　ひとつ脱てうしろにおひぬ衣がへ　芭蕉

この句は。行脚の身の無造作をいはれたるなり。すべて世の人は。衣がへとて事むつかしくすれども。これにても猶衣がへはすみたるものぞと行脚の身の心やすさを言外にさとし。世人の心をうごかされたるなり。このぬの心は。今着てゐらるゝ衣と。うしろに負はれたるとはもと二物なるが。そのうしろにおはれたる衣が。今身に着てゐらるゝ衣とひとつ物のごとくなるもやうをさとしていふ之。これ所詮は。我身はこれにて衣がへをすませたれども。世人はすまさぬといふ所をおもはせん爲のぬなり。たとへば壁をぬるといふは。その壁下地と土とは別にてありしが。その壁下地に。土のくひあひてひとつ物となるわざをする事をいふがごとし。されば世に乎のぬとのみいひ心うるは。いと淺くして。つかふにもその用せばき事思ふべし

續　十團子も小粒になりぬ秋の風　許六

同　その親をしりぬその子は炼の風　支考

同　漸に寐所出來ぬ年の中　士芳

荒　庵の夜もみじかく成ぬすこしづゝ　嵐雪

同　嵯峨までは見事あゆみぬ花盛　荷兮

同　この比は小粒になりぬ五月雨　尙白

同　肩付はいくよになりぬのどか也　冬文

同　火とぼしていく日に成ぬ冬椿　一笑

續　里〳〵の姿かはりぬ夏木立　野荻

員　いつやらも鶯きゝぬ此おくに　落梧

猿　春雨や屋根の小草に花さきぬ　嵐虎

同　栗稗とめでたく成ぬ初月夜　半殘

瓢　羅綾のたもとしぼりたまひぬ　正秀

タビ子ノ比

炭　さよしぐれ隣の臼は挽やみぬ　野坡

春　あらましのざこね筑广もみえ過ぬ　野水

冬　凩ふきぬ秋の日瓶に酒なき日　芭蕉

員　ひさしをつけてすまひ替りぬ　荷兮

猿　木瓜莇旅して見たく野は成ぬ　山店

同　鳶の羽もかいつくろひぬ初しぐれ　去來

同　ふりかねてこよひに成ぬ月の雨　尚白

春　初鴈の聲にみづから火をうちぬ　冬文

同　わしの巣の樟の枯枝に日は入ぬ　凡兆

いづれもまへにいふがごとく心うべし。句々その言靈をとくにいとまあらずといへども。この野坡が句の。〽さよしぐれ隣の臼は挽やみぬといふ句は。旅ねに寐られぬわびしさをいはんために。隣に臼ひく音のやみたるをぬとはいひしもの之。臼ひきやむは即寐る之。ぬといふ字にてわが寐られぬ旅ねのあはれをおもひやらせたる。まことに後世の人のをよばぬさかひぞかし

○ぬるとつかふは。いづれも此例なるぬにるを添たるなり

荒　尺ばかりはやたわみぬる柳かな　小春

炭　すゝけぬる御前の箔のはげかゝり　子珊

瓢うたれて蝶の夢はさめぬる　芭蕉

ぬるといふ字は。すべてへちるへながるなど。下にそふる詞多きものなり。これは。へちといひへながといふもやうを。その物のうちにつけかためて來るもやうをみする詞なり。さればこれらも。ぬといふもやうをそのうしろの方につけかためて來るさまをみせんためにぬるとはいふなり。なるつるけるなど。いづれも同じくこの例なり。この故に。へ尺ばかりたわみぬといふもやうを柳のうしろのもやうとしてぬるといへる也と知るべし。又ぬればぬらんなどもかよはしてつかふなり

○なといふもこのぬのかよへるなり。これは。ぬはもと宇緯なるを。阿緯になしていふなり。なの義は。はじめより所々にいひたれば。こゝにくはしくいはず。ぬといへばその事現在となり。なといへば。むかふに。手のとゞかぬものとなりたる物になしていふ心なりと知るべし

荒寐入なばもの引きせよ花の下　野水

猿こひしなば我塚でなけほとゝぎす　遊女 奥州

今寐入たるをいはゞ。ぬといふべし。とくと寐入たるにしてはなといふべきなり。又今戀死たるは。戀しぬといふべし。とくと戀したるには。戀しなといふべし。いづれもとくとしはてたるうへが入用なる故に。なとはいふ也

○にといふも此ぬの伊緯にかよひたる也。これはぬといふ場をば。かなたのうちにもちたるをいふ詞なり。なといふに似たれど。なは。むかふに。手のとゞかぬものとなりてあるをむねとしていふがたがへり。にしにきにけんにけるにけりにけらしにける哉にたるなど。つねに脚結を繼てつかふなり

荒　夢にみし羽織は綿の入にけり　野水
拾　なりにけり〳〵まで年のくれ　芭蕉
員　高みより踏はづしてぞおちにける　冬文
冬　花になく櫻の黴とすてにける(ママ)　芭蕉
荒　時〻は蓑ほすさくら咲にけり　除風
同　柴舟の花さきにけり宵の雨　卜枝
同　萬歳の宿を隣にあけにけり　荷兮
同　ほとゝぎす啼やむ時をしりにけり　一井
同　まつ虫はとほる跡より鳴にけり　一髮
同　きり〳〵す燈臺消て鳴にけり　素秋
同　蚊遣火にねところせばく成にけり　杏雨

續　わが宿はかづらに鏡すゑにけり　是樂

集　旅烏古巣は梅に成にけり　芭蕉

續　夷講酢うりに袴着せにけり　同

同　えびす講鵞も鴨になりにけり　利合

荒　笠を着てみな〳〵蓮に暮にけり　古梵

同　咲にけりふべんな寺の紅牡丹　一非

猿　しとき祝ふてくだされにけり　素男

春　朝がほは末一りんに成にけり　舟泉

炭　うぐひすの一聲も念を入にけり　利牛

猿　いとざくら腹一はいに咲にけり　去來

炭　年貢すんだとほめられにけり　芭蕉

春　笠白き太秦祭過にけり　野水

炭　はき掃除してから椿散にけり　野坡

家ヲヤキテ

猿　燒にけりされども花はちらすまじ　北枝

仲秋ノ望猶子ヲ送葬シテ

同　かゝる夜の月も見にけり野べ送　去來

春　鰆おふて大津の濱に入にけり　旦藁

炭　そら豆の花さきにけり麥の縁　孤屋

員　芥子の花とり直すまに散にけり　松芳

同　月のかげよりあひにけり辻相撲　越人

此前句ヘさゝやくことの皆きこえつる　ソノ呼カザリシ人マデ來集リケルヿヲ思フ心ナリ。コレ前句ノつるトイフ天尓波ヲウケテ。ソノサヽヤキタリシ寸ヲ現在トシテにけりトハイヘルナリ。つるトにけりトノウチアハセヤウ。後世ノ人ノ及バサル境ナリ

春　箒木はながむる中にくれにけり　塵交

續　三日月に草の螢は明にけり　野荻

○ねといふも。此ぬの衣緯にかよひたる也。衣緯の義は。上にも所〻いひおけるがごとく。一旦ありし事を更にはたらかする時の用なれば。これもぬといふもやうある事をさらにはたらかする心なり

炭　人の物ゟはねば樂なはなごゝろ　野坡
同　君こねばこはれ次第の家となり　其角
同　みな〳〵にささそろはねど梅の花　野坡
荒　ふたつこそ老にはたらねとしの春　落梧
集　酒のめばいとゞねられねよるの雪　芭蕉

○來倫

|き|きとは。すべて過來たる事を語る詞なり。此故に俗にコトデアツタ　タなどいふ詞にあたるなり。それも。たゞありしことをかたる心なりとばかりにては。きといふ音の心は盡ぬ之。くはしくいはゞ。俗にキトキイタ　キトユカウなどいふキの字のごとく。しかとさありしといふ心なり。これ加伎久計古の音義なれば也。この故に。まへつかたにありしことを。人うたがはしく思ふべき事ある時につかふ詞なりとしるべし

猿　しぐれきやならびかねたる魦舟　千那

きときてふきやきなにきざりきてきかりきなどつねにつかふなり

けり　萬葉に來の字をけりとよみたれば。きのけにかよひてりの字そひたる天尓波なる事明らかなり。その故に義もまたきといふにひとしき詞なり。されどきは伊緯の音。けは衣緯の音なるうへに。りの字さへそひたればたがへり。そのけぢめは。きはたゞまへつかたの事のしかとかくありしとかたるばかりの詞なり。けりはそのきとかくありしといふ事をばさらにはたらかせて。その内の形容としていふ詞なるゝ。この故に。きく人おもひかけぬ事におもふべき心あり。これおのづからけの字ときの字とのわかれ。ならびにりの字の義にしかあるなり

炭　天滿の狀をまたわすれけり　野坡

これらは。先だつてもわすれたる事あれば。此たびはよもわすれまじと人のおもふにあたりて。又わすれけりとはいふにて。そのものゝ人がらをおもはせたる詞ゝ。此前句へ餅搗の臼を年〻買かへて利牛といふ句なり。此句にかくつけたるは。かく餅つく臼を毎年あらたに買かふるほどの人なれば。なに事も行とゞくかと思ふに。天滿の狀は此たびもわすれて屆けぬは。この人おのが事には念いりて。人の事は心頭にかけぬ人がらとみゆるゝ。さてはこれは。內福なるにまかせて我まゝ氣まゝなる人さうなとみゆるやうにいひたるものなり。附句はことに天尓波のうち合おもしろき物なるは。一首の哥

のてにはのうち合に同じければ之。俳者流の人。こゝには目をよばざる事ながら。古人はこゝにかく骨折たる事。これらにてもしるべし

荒　馬と馬よばり合けりほとゝぎす　鈍可
同　おもしろと鰯引けり盆の月　含咕
炭　盆の月ねたかと門をたゝきけり　野坡
猿　おもふ事紙帳にかけと送りけり　野經（ママ）
續　きつと來て啼て去りけり蟬の聲　胡故
同　書寐のくせを直しかねけり　芭蕉
員　さびしき秋を女夫をりけり　落梧
同　うつくしき鯰うきけり春の水　舟泉
猿　炭竈に手負の猪の倒れけり　几兆
瓢　一貫の錢むつかしとかへしけり　曲水
續　娵入の門も過けり鉢たゝき　許六
猿　都にも住まじりけり角力取　去來

員　座敷ほどある蚊帳を釣けり　一井
炭　黒みけり沖のしぐれのゆき所　丈草
瓢　涙ぐみけり供のさふらひ　珍碩
春　舟〻の小松に雪ののこりけり　旦藁
炭　梅さくら二ヶ月ばかりわかれけり　利牛
員　蒜くらふ香に遠ざかりけり　鼠彈
炭　赤みその口を明けり梅の花　游刀
同　うめ咲て湯殿のくづれ直しけり　利牛
同　五百のかけを二度にとりけり　野坡
猿　三日月に鱶(フカ)のあたまをかくしけり　之道
員　桶のかづらをいれ仕廻けり　昌碧
炭　菊好のむしろ織けり花ざかり　嵐雪
續　座頭のむすこ女房よびけり　沾圃
猿　灰汁桶の雫やみけりきり〱す　凡兆

員　また獻立のみなちがひけり　傘下
炭　ゆふ涼あぶなき石にのぼりけり　素堂
春　田を持て花みる里に生れけり　羽笠
續　賭にして降出されけりさくら狩　支考
炭　はつ雪に隣を顔でをしへけり　野坡
猿　木履ぬぐそばに生けり蓼の花　木節
同　みゝづくは眠る所をさゝれけり　半殘
員　花さきけりとこゝろまめなり　荷兮
炭　芋喰の腹へらしけり初しぐれ　荆口
瓢　熊野見たきと泣給ひけり　芭蕉
荒　をる時になりて逃けり花の枝　鴎歩
同　行春のあみ塩辛をのこしけり　野水
同　さくら咲里をねふりて通りけり　夕楓
續　年よりて牛に乗りけり暮の道　木節

荒　いそがしき中に聞けりほとゝぎす　釣雪
猿　まじはりは紙子のきれを讓りけり　丈草
荒　つれて來て子にまはせけり万歲樂　一井
同　すご〳〵と案山子のけけり土筆　蕉笠
同　ひとり來て友えらひけり花の山　冬松
同　とまり〳〵稻すり哥もかはりけり　ちね
同　雪の富士藁屋ひとつにかくれけり　湍水
同　すご〳〵と親子摘けりつく〳〵し　舟泉
同　年男千歲樂をならひけり　同
同　湖の水まさりけり五月雨　去來

留別

續　鼠ども出立の芋をこかしけり　丈草
荒　蚊のむれて栂の一木の曇りけり　小春
同　枯朶に烏のとまりけり秋の暮　芭蕉

更科ニユク人々ニムカヒテ

同　さらしなの月は二人にみられけり　荷兮

同　蚊のやせて鎧のうへにとまりけり　一笑

アル人ノ餞別ニ

同　ほとゝぎす涙おさへてわらひけり　除風

高野ニテ

同　ちる花にたぶさ恥けり奥の院　杜國

續　風毎に長くらべけり蔦かづら　杉下

同　菊畠客も圓座をにじりけり　馬莧

同　團栗のおちて飛けり石佛　爲有

同　鉢たゝき乾鮭賣をすゝめけり　馬莧

荒　霜の朝栴檀の実のこぼれけり　杜國

同　おもはずの人に逢けり夕すゞみ　如風

同　今日に成て菊つくらうと思けり　二水

○けるけれ有倫ノけれニマガハスベカラス　けらしなどかよはしてもつかふ事なり。また。にけりてげりなりけりざりけりかりけりなど。猶さま〳〵に脚結をつぎてもつかふなり。くはしくは抄にみえたり。けるといふ時は。るの字宇緯なれば。けりといふべきことを現在になしていふ心なり

猿　蓑虫は茶の花ゆゑにをられける　　猿雖

この句など。けりといはゞ。それになしかためていふ心となり。けるといふは。此むしの茶の花ゆゑにをられたる事のよしを活かして。其あはれさを。きく人の心にゆづりておもはする心とはなる也。さればをられける事を思へといふほどの心之と思ふべし。哥にも。けりといふべき所をば。かくけるといかしてよみたる哥多きもの之。これら天尓波の心をよくしらざれば用ひがたき事なり。心あらん人はくはしくまなぶべし。かゝるけぢめをしらでは。古人の哥も發句も。手にとるがごとくその肺肝をみる事あたはさるべきぞかし。生涯口拍子にのりたる斗にてはてん事は。いとあさましき事ならずや

瓢　ひとりある子も矮鷄(チャボ)にかへける　　珍碩

猿　三里あまりの道かゝへける　去來

冬　烹る事をゆるしてはぜを放ける　杜國

炭　よもすがら尼の持病をおさへける　野坡

望湖水惜春

猿　ゆく春を近江の人とをしみける　芭蕉

同序　伊賀越しける山中にて云々　其角

荒　もみぢにはたがをしへける酒の間　同

瓢　くひものに味のつくこそうれしけれ　珍碩

けん　けんとは。畢竟けるよりうつれる詞なり。もときよりうつれるけるなるにひかれて。過さりたる事をうたがふ詞なり。前条どもの心えをもちてみるべし。元來けるといふべき事ながら。まさしく聞かぬ事なるが故に。んとはいふなりと脚結抄にくはしくいはれたるがごとし

員　なに事を泣けん髪をふりおほひ　落梧

糊賣

荒　朝露のきほう折けんつくもがみ　舟泉

集　鎌倉をいきて出けんはつ鰹　芭蕉
荒　すご〳〵と山や暮けん遲ざくら　一髪
猿序　たちまち斷腸のおもひをさけびけん云々　其角
同幻住記　むかし住けん人のことに心高く住なし侍て云々　芭蕉
拾　摘けんや茶を木がらしの秋ともしらで　同
此句珍ラシキ天尓波ナリ。けんやノやノ字ハ疑ニテ。しらでやつみけんトイフベキヲ上下ニナシタルナリ

にけんかりけんざりけんなど。猶さま〳〵に脚結をつぎてもいふ之

［く］くともくるとも歌にはよめり。へうらがれもてく〳〵人のときくるなどこれ也。これは。きといふへきをいかしてくとはいふ之。字緯の字はすべてその事活動するなり。この詞ももとは裝なれど。上に裝脚結の別をときしがごとく。これらも裝の脚結となれるなり。集中例みえず

俳諧天尓波抄巻之五　終

俳諧天尓波抄巻之六

○十二身

○氐身

［て］てとは。かなたにつきたるものを。こなたにはたらかせつくる心なり。たとへば。逃てゆくといふは。逃る事になりたる身を。又ゆくわざにつくるさまをさとすなり。手をばてと名づけたるも。人の身につきたる物にして。そのはたらき。物につきて。取り持チなどするがゆゑなり

荒　おもしろうてやがてかなしき鵜舟哉　　芭蕉

この句など。てのつかひかたいとよく聞ゆる句なり。面白き方につきたるを。またはたらかせて悲しき方につくるなり。やがてハ。トリモナホサズトイフ心ナルヿ挿頭抄ニ委シ。コレラノやがてイトヨクオカレタリ。俗語ノやがてニハアラザルナリ　されば。てはすべて片方につきたる事と人の思ふべき時にこなたへもつきたる事をさとす詞之と知るべし

炭　栗を苅られてひろき畠地　　利牛

同　道くだり拾ひあつめて案山子哉　　桃隣

同　なしよせて鶯一羽年のくれ　智月
猿　油かすりてよひ寐する秋　芭蕉
荒　月花もなくて酒のむひとり哉　同
同　青柳にもたれて通す車かな　素秋
同　七草をたゝきたがりて泣子哉　俊似

翁ヲ送ル

同　なきくて袂にすがる秋の蟬　一井
續　夕がほや裸で起て夜半過　嵐蘭
同　五六十海老費して鯊（ハゼ）一ッ　之道
荒　門苓をうりて蛤一ト荷ひ　內習
續　きつと來て啼て去けり蟬のこゑ　胡及
炭　梅咲て湯殿のくづれ直しけり　利牛
荒　つれて來て子にまはせけり万歳樂　一井

イセニテ

續　濱荻に筆をゆはせて年のくれ　呂丸
炭　よひ〳〵の月をかこちて旅大工　依々
同　魚店や莚うちあげて冬の月　里東
猿　さみだれに家ふり捨てなめくじり　凡兆
炭　田の畔に早苗把て投て置　孤屋
猿　書なぐる墨繪おかしく秋くれて　史邦
炭　江戸の左右むかひの亭主のぼられて　芭蕉
コレハ上ヘカヘルて｜ナリ。のほられて江戸の左右を聞たりトイフ句意ナリ
貟　露しぐれ歩鵜にいづる暮かけて　荷兮
コレモいづるトイフ所ヘカヘス爲ニオキタルて｜ナリ
猿　春の日に仕舞ふてかへる經机　正秀
春　せどの畑茄子きばみてきり〳〵す　旦藁
員　此年になりて灸のあともなき　一井
猿　うき友にかまれて猫の空ながめ　去來

同　襟巻に首引入れて冬の月　杉風

同　片隅に虫歯かゝへて暮の月　乙州

乙州が新宅ニテ

同　人に家を買はせてわれは年忘　芭蕉

炭　茶のうり置キをさげて賣出す　孤屋

同　箕にほして窓にとちふく綿の作　同

同　鋸にからきめみせて落椿　嵐雪

瓢　月まちて假の内裏の司めし　珍碩

春　立て乗るわたしの舟の月かけに　冬文

炭　やう〳〵と雨ふりやみて秋の風　利牛

續　花ちりて竹みる軒のやすさ哉　酒堂

同　朝露によごれて涼し瓜の土　芭蕉

瓢　砂の小麥の痩てはら〳〵　里東

猿　蛭の口處をかきて氣味よき　芭蕉

員　月の宿昔を引ちらす中に寐て　越人
猿　この木戸や鎖のさゝれて冬の月　其角
同　常齋にはづれてけふは花の守　千那
續　煎りつけて砂道暑し原の馬　史邦
荒　子をひとり守りて田を打ッ孀かな　快宣
同　とりつきて筏をとむる柳哉　昌碧
續　天鵞毛の財布さがして年の暮　惟然
荒　ゆき〳〵て程のかはらぬ霞かな　塵交
同　袖すりて松の葉契る今朝の春　梅舌
續　芥子畑や散しづまりて佛在世　乙州
同　よそに寐て純子の夜着の年忘　支考
荒　さくら見て行あたりたる乞食哉　梅舌
續　高みよりしぐれて里は寐時分　里圃
炭　足もともしらけて寒し冬の月　我眉

同　上塗なしに張ておく壁　孤屋
同　だまされて又薪部屋にまつ　野坡
同　明しらむ箱挑灯を吹けして　孤屋
同　箱こしらへて鰹節うる　野坡
多　捨られてくねるか鴛のはなれ鳥　羽笠

○てのつかひ方に。はたらきたるあり

集　山はみな蜜柑の色の黄になりて　芭蕉

この句。發句のやうにはみえねども附句にあらず。めづらしくつかひ捨たるての字なり

集　きよくきかん耳に香灶てほとゝぎす　芭蕉
同　種芋や花のさかりを賣ゆきて　同
同　しぐれゆくや舟の舳縄にとりつきて　同

これらのての字は。上へかへる心につかはれたるなり

○てはとつかふに。すむてはにごるてはあり。濁るは例みえず。すむは。からありては又から／＼ありと。いくたびも外の事のかはる／＼つゞきゆくさまをいふ詞なり。つゝとよむに似たる詞也。かの蟬

丸が哥後撰集にはヘわかれつゝとあるを。定家卿ヘわかれてはと直したまひしも。大かたつゝに似たる詞なればなり

炭　ふりてはやすみしぐれする軒　野坡

猿　抨合て寐てはまたたつかり枕　芭蕉

同　草庵にしばらくゐては打破り　同

瓢　こそぐられてはわらふおもかげ　路通

員　なに事かよばりあひては打笑ひ　鼠彈

炭　雛頭みてはまた鼾かく　野坡

これらの外に。てはといひてこの例ならぬ句あり

炭　とりあつめては多き精進日　曾良

これは。てみればなどいふほどの心なりとしるべし。にごるてはは。哥にはヘ袖にうつしてとゞめてばヘ此やどにだにすぐしてばなどよめり。これは。タラバといふほどの心也

○其外てもてんてましてよてきてをてしてげりてげらしてぬなどつかふなり

員　とはれても涙にものゝいひにくき　一非

荒　夏來てもたゞひとつ葉のひとつ哉　芭　蕉

同　冷汁に散てもよしや花の陰　胡　及

○てんとつかふ事心えあり。んは上にいへるがごとし。されば此てとんとの間に詞をはぶきたる詞なりと心得てつかふべし。たとへばへもらふておかうといふをへもらひてんとつかひ。へはいて捨うといふをへはきてんとつかふ之。これは上に出せるてもてよてき等の如く。下に外のてにはを繼たるは。のこらずこの心得なる詞なり。さればかやうの時は。てんともてよともてきとも。猶いづれもさる心にてつかふべし。古哥古句なども。この心をえて。そこに詞をくはへてみるべきなり。すこしにてものずくなくいふほど。事は活る事なるが故に。我御國の言はかゝる事おほし。こと更てにはは。こゝをつかさどる物なれば。ましてかゝる事多き之

たりとありといふことのつゞまりたるは有倫に出せるたり之。これにまぎらはすべからず。これはてありのつゞまれる詞之　テアル　テキルなどいふ俗言にあたるなり

猿　郭公みな啼しまふたり　芭　蕉

荒　山あひの花を夕日に見出したり　心　苗

同　くらきよに物陰みたり雪の隈　二水

同　うつかりとうつむきゐたり時鳥　李桃

續　虫干のその日に似たり藏びらき　圃角

瓢　うす雪たわむ薄痩たり　正秀

集　誰やらが姿に似たりけさの春　芭蕉

炭　きくまでは二階に寐たり郭公　桃隣

員　おもひあふたりどれも高田派　釣雪

春　見つけたり廿九日の月さむき　荷兮

猿　海棠の花は滿たり夜の月　魯舩

同　春雨にたゝき出したりつく〳〵し　元志

續　澁柹もことしは風にふかれたり　里圃

炭　秋の空をのへの杉にはなれたり　其角

猿　幻住記　やねもり壁落て狐狸ふしどをえたり　芭蕉

いづれもまへにいへるがごとく。ての字の下に詞をはぶきたる物とみるべし。たとへば。此幻住菴記

のへふしどをえたりといふは。狐狸ふし處をえて住むやうになりてありの心なり

○この外たるたらんたればたらばたれやたらしなど。さま〳〵につかひたり。これがうちたるとつかふは。前にいふがごとく字緯の字なれば。いかしていふなる故に。たりといふにはかはりて。多くは何したる何と中に置てつかふなり。此故に何シテアルソノ何といふ心にみるべし。たりといふ時は。伊緯なれば。例の内になしていふ心。それになしかためていふ心なり。これ又たりに同じくテアルといふ間には。畧せる詞ある也とみるべき之。俗言にもへねふつてゐるへならべてあるなどいふも。みなての字の下にはへゐるへあるなどの詞はあるをや。これてといふ音義のしからしむる所なれば。五十音をまなひ(ママ)で信ずべき也

炭　吹とられたる笠とりにゆく　利牛
同　熊谷の堤きれたる秋の水　岱水
集　年〻や猿に着せたる猿の面　芭蕉
冬　つり柿にやねふかれたる片庇　羽笠
炭　うんじ果たる八専のそら　利牛
春　うりのこりたる虫はなつ月　執筆

猿　さし木つきたる月のおぼろ夜　凡兆
炭　老僧も袈裟かづきたる花見哉　之道
多　佛喰たる魚ほどきけり　芭蕉
炭　早乙女にかへてとりたる菜飯哉　嵐雪
猿　二階の客はたゝれたる秋　芭蕉
炭　切蜡(ウツ)のくひのこしたる植たばこ　野坡
猿　おもひ切たる死ぐるひ見よ　史邦
員　道のべにたちくらしたる宜祢(ママ)が妻(ママ)　荷兮
猿　ほつれたる去年の寐ござのしたゝるゝ　凡兆
瓢　無理にすゑたる膳もすゝまず　珍碩
猿　うぐひすの笠おとしたる椿かな　芭蕉
續　笹づとを棒につけたるはさみ箱　臥高
員　哥うたふたる聲のほそ〴〵　舟泉
炭　椽ばなに腫たる足を投出して　孤屋

猿　里人の臍おとしたる田螺哉　嵐　椎
續　職人の帷子着たる夕凉み　土　芳
炭　雪のあとふきはがしたる朧月　孤　屋
猿　大年や手のおかれたる人ごゝろ　羽　紅
炭　神送荒たる宵の土大根　洒　堂
續　寺のひけたる山際の春　馬　莧
猿　蝸牛うちかぶせたる椿かな　坂上氏
員　ころ〳〵とねたる木賃の草枕　荷　兮
續　行秋や手をひろげたる栗の刺イガ　芭　蕉
同　もち搗やあがりかねたる鷄のとや　嵐　蘭
同　橙や日にこがれたる夏木立　闇　指
荒　石釣てつぼみたる梅おとしけり　玄　察

接　木

同　つまの下かくし兼たる繼穗かな　傘　下

同　あゝたつたひとり立たる冬の宿　荷兮

同　花の陰謠に似たるたび寐哉　芭蕉

同　隼の尻つまげたる白尾かな　野水

同　元日は明すましたる霞哉　一笑

同　立臼に若草みたる明屋哉　龜助

同　土橋やよこに生たる土筆　塩車

炭　蟷螂に組んで落たるぬかご哉　爲有

荒　菊の名はわすれたれども植にけり　生林

猿序　俳諧に寛の入りたらんこそとて云ゝ　其角

○俗言にタといふが。このたるにかなふもあり。即タと俗言のまゝにつかひたる句は

炭　家のながれたあとをみに行　利牛

續　直のしれた帷子時のもらひ物　里圃

古言にては。たるつるけるぬるしなど。その事がらによりていひわくるを。俗言にてはみなタといふなり。古言と俗言とは。事に親疎ある事かくのごとし。多くの詞を。たゞひとつにて事を足らするは。

簡易なる事のごとくなれど。その情のかたちをうつさむ事難かるべしかし。天尓波の用。ひとへにそこにあるをや

[つ] つ|は。ての宇緯なる音なれば。て|といふべき事の活たるとしるべし。物の一方につきて。外へはつかぬ勢をいふ詞なり。其つく方は。もとつくまじき所とおもふ方なりと心うべし。前に出せるき|にまがひやすき詞なり。此わかれの事。脚結抄にくはしくいはれたり。き|はもと伊緯なれば。宇緯なるつ|とは。經の義のみならず緯の義さへ同じからざるをおもふべし。文章にへつととつかふ詞あり。源氏物語などにいと多し。これ今俗にも。ツト出ルなどいふに同じ。すべてそのつきたるをいふは。今一方につかぬ方ある所を思はする心なりと心えてつかふべきなり

猿　いね〳〵と人にいはれつ年のくれ　路通

これは。誰が所にもあれ。いねといはぬ所あれかしと思ふ心をさとして。つ|とはいふなり。すべて此心をえて見るべきなり。この句。世はみな世事にいそがはしく。路通はいとまある事おのづから言外に活たり。さてつ|もじをもてその情を言靈とし。あらぶべき心をなごめられたる。まことにいとめでたき句なりかし

集　観音のいらか見やりつ花の雲　芭蕉

員　おもふさま押あふ月に草臥つ　野水

荒　おくられつおくりつ果は木曾の秋　芭蕉

無常迅速

同　咲つ散つ隙なき芥子の畠かな　傘下

○上古につもとつかふ天尓波あり。冬の日にへおもひかねつもよるの帯引重五といふ句あり。されど此句意を思ふに。上古のつもの心にはあらず。つゝもといふ心にてつかはれたりとみえたり。上古のつもは。へおもひかねつもといふは。思ひ兼つといふにもを添へて。その事の正面ならざるを示す詞なり。此句は。思ひかねつゝもよるの帯を引くといふ心なれば。古義にはたがへる事之。これは。上古のつもをば。つゝもの心之と心え誤りてつかはれたる歟。又は新作につゝもの心をつもとつかはれたる歟。いづれにもあれ。これは天尓波のつかひやうに叶はぬ事なれば。轉用の例のごとくゆるしがたし。後人まねぶべからず

○つるとつかふは。つといふ事をうしろにもたせて活かす詞なり。たとへば古今集にへ鶯の鳴つる花とよめるは。その鶯の鳴たりしは今の事ならぬを。それを今の梅のうしろにもたせていかせたる心な

り

員　さゝやくことの皆きこえつる　荷兮

これは。前句へ柏木の脚氣のころのつく〳〵と野水此病者のつくづくとゝいふに付たる句にて。即かしは木のそれを聞しられし事を。後にしれる心にてつるとはいへる也。この後句はへ月のかけより合にけり辻相撲越人此句またつるをよく心えて。にけりを以て打あはせられたる手際。まことに手だれといふべし。にけりの条下に委し これそのつといふは。呼きし時のさまをさす也。るといふは。今そのより合たるものどもの心の内に。聞しりもちて居るさまをみするゝ。これらの事七部集の注にくはしくいへるをみるべし

荒　蓑虫としれつる梅のさかり哉　蕉笠

○つれつらんなどかよはしてもつかふ事つねゝ。つらんはつるらんのことろなりとしるべし

郭公ヲ放ッ寸

荒　鳥籠のうきめみつらんほとゝぎす　季吟

冬　すてし子は柴苅るたけにのびつらん　野水

集　青はしや草餅のほにいでつらん　芭蕉

同　白芥子や時雨の花の咲つらん　同

【つゝ】つゝとは。即つといふをふたつかさねたる詞なり。脚結抄にくはしくとかれたるをみて此詞のもとをしるべし。これは一たびつとなりたる事の。外にもうつるべきが。猶そこにつきて。はなれずしてゆくさまをいふ詞之されば つの下にいふがごとく。もとそこにはつくまじき所なるにつきたれば。又はなれて外にもつくべきに。やはりそのつくまじき所につくさまをいふ心之としるべし。後世へながらづゝとて別にある事のやうにいふはしからず。今いふごとき心ある詞なるが故に。あらく見れば。ながらといふ心のやうにみゆる也。これにかぎらず。すべてうはべにのみよりて。あらはなるをしりかくれたるをしらぬは。わらはべにひとしかるべし。かくるともあらはるとも。つかふ事がらによりてこそしかあれ。いかでか本義はたがふべき。哥にては。つゝと哉とは。おほやけに制し給ふ天尓波なるに。其源をたづぬれば。加難小点などの詞ども。皆哥合の判詞をのりとしての事なり。この事はわが言靈の辨の附錄にくはしくいへるをみるべし。哥人は制をやぶる事あたはざるに。俳諧者流は是を自在す。制外なりとせらるゝ故にやとはおぼゆれど。はゞかる所なくつかふは。俳諧の徳とぞおぼゆる。もと古歌をとくにも。すべて天尓波はよく心えではあるまじき事なるが故に。我家。其おほや

けの制はやぶるべからず犯すべからねど。いかでか委しくこれをしらであるべきとてかくは論ずる也。凡詞は心よりおのづから發する物なる事。たとへば咳嗽などのいづるがごとし。心あらん人は。さる理よく〳〵思ひとるべき事なりかし

員　涙見せじとうちわらひつゝ　松芳

この句は戀の句にて。人に涙をみせまじとしひて笑ふをば。つといひ。さてわらふ心もなければ又涙もしられさうなるを。なほしひてわらふ心の切なきさまをさとしてつゝとはいふ之（をかしからぬをわらふにてつの義はある之）

員　ともし火に手をおほひつゝ春の風　舟泉

同　墨染は正月ごとにわすれつゝ　野水

春　餅をくひつゝいはふ君が代　旦藁

員　紙子の綿の裾におちつゝ　長虹

冬　引ずる牛の塩こぼれつゝ　杜國

員　配所にて干魚の加減おぼえつゝ　釣雪

猿　木曾の酢莖に春もくれつゝ　凡兆

瓢　細き筋より戀つのりつゝ　曲水

○之身

し　これをば。きしかたのしと名づく。世ニ過去ノしト云之　まへに出せる志家のしは。しかしといふ。まがはすべからず。これはこれまであり來りし所へもどしておもはする詞なり。これ五十音の本義にして。志家のし之身のし。ともにひとしけれど。そのつかふ所の事がらにてかくはわかるゝ之。すべて伊緯の十音は。さしあたりたるものゝうしろのかたを思はする詞なり。さて又佐經は。むかふのあるかたちにしたがひそひゆく心なれば。この經緯をあはせば。むかふにそふ事をうしろにもたする心之と知るべし。此故に過去とのみいふははや端の義なり。さりながらこゝに之身をたてたるは。志家のしとは共つかひ方たがふをしらせて。この之身は。既往の事をいふ例の方をばいふなり

荒　廣庭に一本植しさくら哉　笑草

猿　すゞしさやこの庭をさへ住すてし　脊良

荒　はかられし雪の見所あり所　野水

同　おひし子の口まねするや郭公　松下

同　宵にみし橋はさびしや月のかげ　一髪

同　大粒な雨にこたへし芥子の花　東巡

同　夢にみしはをりは綿の入にけり　野水

續　水仙や練塀われし日の透間　曲翠

同　明月にかくれし星のあはれ也　泥芹

荒　いつこけし庇おこせば冬椿　龜洞

續　封つけし文箱來たる月の暮　芭蕉

猿　わが事と鯲のにげし根芹哉　丈草

員　引捨し車は琵琶の敵にて　野水

續　かたばみや照りかたまりし庭の隅　野荻

炭　なく事のひそかに出來しあさぢふに　芭蕉

猿　ひとり直りしけさのはらだち　去來

同　ぶしやうさやかきおこされし春の雨　芭蕉

同　まつ人いりし小御門の鎰　去來

炭　此ごろは宿の通りもうすらぎし　利牛

前句へすた〳〵いふて荷ふ落鮎　孤屋　コレヲミレバコノしは。うすらぎしにナドイフホドノ心ナリ

冬　縁さまたげのうらみのこりし　芭蕉

前句へ床ふけてかたれば從弟なる男　荷兮　コレヲミレハコレマデ人ニ妨ケラレテアハレザリシ中トシテツケラレシ句意ナリ。へしハ其女ノ心ノ内ノサマヲミスル爲ニテ。コレライトヨクオカレタリ

歳　かれし柳を今にをし見て　俗水

續今宵賦　いく年なつかしかりし人の。さしむきてわするゝに似たれど云ゝ　支考

これらいづれも正しきつかひざま也。さて此しに後世の心得違あり。いかにといふに。俗言にタといふべき所を。しとつかふ事。これは哥にもある事なれど。今の世の哥どもをみるに。俗言のタを本としてつかひたるしまゝあり。もと俗言のタといふは。いとあらき詞にて。その中には。つるたるけるぬるしなどさま〳〵のわかれあるを。ひとつに。タといふなれば。そのタはし也としてつかふ時は。必あやまり出來る也。されば歌人は。よく心えて。タをば麁忽にしとおもはでつるたるけるぬるなどあたるべきをつかふべし。中にはけんらんナドノアタル所モアルヿナリ　俳諧者流の人は。それにもをよばぬ事ながら。かやうのしをつ

かふ事あるまじき事なるは。いかに俗言のまゝをいふ俳諧なればとて。あたりもせぬ所にしひて夕とやはいふべき

續　角いれし人をかしらや花の友　丈草

同　冬よりはすくなうなりし池の鴨　沾圃

同　腰かけつみし藤棚の下　臥高

同　平畦に菜を蒔たてしたばこ跡　支考

荒　麥蒔て奇麗に成しいほり哉　昌碧

同　みのむしや形に似合ひし月のかげ　杜若

これらの句いづれも現在のさま主どなる句意なれば。古言のしはあたらぬ之。句によりては。現在のさまのやうにして猶過去なるもあるべし。續猿蓑に芭蕉へ封つけし文箱來たる月の暮といふ句は。現在文箱に封のつきたるをいふやうなれど。そのむかふの人の家にて封をつけたりし所が此句の言靈となる所なるが故に。しの字よく叶へり。これらの差別よく心うべし。その外まへに引たる句どものうちにも。かやうなる類のごときもあれど。みなそのしとうけたる上の詞のうちに。言靈ある句どもなれば。俗言の夕をしといひたるものとは定めしなり

〇〽山吹うすし〽川かぜ寒し〽簀子も青しなどいふしは。此しにはあらず。裝の芝狀鋪狀とて。裝の詞の下にしきとつける詞にて。天尓波にてはなき之。これは大かたの人よくしれる事なれど今は兒女子のためにいふなり

［せば］このせは即きしかたのしのかよひたる也。せといふは衣緯(エ)の音なれば。まへにも所々いひしがごとく。しといふべき事を。はたらかせて。こなたの事へかけてみする心なり。たとへば〽吹かぜと谷の水としなかりせばみ山がくれの花を見ましやとある心は。ふく風と谷の水とがなくなりしといふもやうを。今山がくれなる花をみるうへにはたらかせかけていふ心之。しは上にいひしがごとく。過さりたるもやうをみする詞なれば。ふく風と谷の水とのなしといふもやうに成たるかたちをいふにて。それを今の事にはたらかする心をばせとはいふ也。もと此せばとは。もとよりあるまじき事なるを設ていふ詞なり。これもとあるべき事ならば。設ていふ詮はなき事之と心えてつかふべしされば俗にニシテミタラバ　ニシタラバ　などいふにあたる詞なり。これを爲者(セハ)といふ心のやうに思ふは誤なり。上の詞のうけやう。此之身のしと同じうけやうなれば。このせは。之身の部なる事明らかなるをや。これらの部分。亡父が曰いたれりといふべし。爲者の心ならば。上の詞。かくはうけぬ理なりかし

○ませばかりせばざりせばなりせばにせばなどもつかふ之さて下には。ましもましものをましやざらましをからましなましなどさま〴〵にうけたり

しか　この詞は。上に何こそとつかひて下におく詞なり。へきのふこそさなへとりしかへ人しれずこそおもひそめしかなどのごとし。これはしかどといふほどの心なり。俗にはかやうの所をシガと濁りていふ故に。これをも濁りてよむ人あれども。しかどしかばなどつかふと同じ詞なればかならす清てよむべきなり。此詞をつかふべき心得は。既往にありし事を。其間をはぶきて今の事をいはん爲の詞なり。かく既往の事と今とをいふは。即その既往と今との間の所をいかしていはむため之とするべし。活カストハ。不言ニシテサトスヲ云ニテ。ワガ意ヲカレガ心ヨリ知ルベキヤウニナスヲイフナリ　かのへ人しれずこそと拾遺によみたる哥は。既往には人しれぬやうにと思ひ。今は戀するといふ名の立たる兩方をいひて。その思ひそめしより名立たるまでの間。かつておろかにはつゝしまざりしとおもひしに。猶わが愼の態ならざりしゆゑにこそと悔る心をいかして。女にわが情のあつきをしらせたる言靈なり。すべて既往より今へ一トた飛にしたるやうにつかふが。此天尓波の用なり

荒　なにとなく植しか菊の白きかな　巴丈

同　こぞの春ちひさかりしか芋頭　　元廣

同　見あげしか梦になりぬ花の瀧　　俊似

いづれも正例のごとくこそをうけざるは。發句少字なるが故なれば。罪とはいひがたし。さればいづれもこそのある心にてみるべし。句意みなしかり。これらの句ども。まへにいへるがごとく。既往當今を一ト飛にいへり。これ皆その間が言靈のある所にて。かの幻術こゝにあるとしるべし。コレラ皆かノ字スミテヨムベシ

○しかどしかどもしかばなどもつかふ之。どどもばなどは。その条〻を引あはせてみるべし

○咩利身

めり　この詞を心うるにいと便ある事あり。律の正律にすこし過たるを。カルといひ。すこし及ばぬを。メルといふ。そのメルといふ義よくかなへり。いかにといふに。大抵はその正律にして。すこし及ばぬ所ある義。即この詞の義なり。なに事にもあれ。定めてもいふべけれど。すこしさだめがたき事ある心を。めりとはいふ之。されば。なりとさだめていふべきが。すこし定められぬ所ある時の用之と心うべし。たとへば。古今のへたつた川紅葉みだれてながるめりといふ哥は。ながる之ともいふべけれど。十に八九は紅葉に相違なけれどもすこし定められぬものとしてめりとはある之。これ錦といひ

なさんがため之。此故に下句へわたらば錦中やたえなんとはよめる之。しかるに今ひとつ心うべき事あるは。わが　大御國は。すべて何事もわれよりはじむるを。ちはやぶるあらぶるとて。あしき事にをしへたまひしは。たとひ人容れても。しひごとゝなりて。無益なれば之。されば何事にもあれ。人のかなたより思ふ所こそ。まことにわが情の通徹したるにはあれとて。よろづ言行ともに。かれが心よりおこらん事をむねとす。こゝをもて。事がらによりて。なりと定めていふ時は。正而と成てちはやぶる詞となるべきには。わざと未決になしてめりとよむ事あるなり。これ我　御國言の大かたの心得之。かの基俊のへあはれことしの秋もいぬめりとよまれしも。大殿の御心もて。秋はいぬ之と定めたまはむやうにめりとはよまれたる之。これにかぎらず。らんけんなどうたがふ詞にも。かゝるつかひざまは多き事之。よく／＼心うべし。文章にへ何めくとつかふ詞多し。哥ニモヨムナリ俗語にも。医者メク女メクなどいふ。このめくといふ詞も。めは此めりのめにて。まづたゞ医者とも女ともいふべけれどすこしは実の医者にも女にも及ばぬ所あるが故にめくとはいふ之。春日にへ春めくや人さま／＼の伊勢參りといへる句も。やゝ春色満たりといふべきほどの時なるをいふ之。集中例なし

○めるめれとかよはしてつかふもつねなり

○那利身

［なり］このなりをば。末なりといひつけたり。まへの有倫に出せるなりとは種姓となり。それはにありのつゞまりたるなれば。此なりとは上のうけやうたがふ事なり。たとへば。有倫のなりにてへかへりこぬなりとよむは。帰リコヌノジヤといふ心也。この那利身のなりにてへこゑすなりとよむは。声ガスルワイといふ心なり。さればかれはことわる義。これはむかふのさまをながむる詞なる也。くはしくいはゞ。こなたの事に持あはぬ事の。手とゞかぬかなたにあるさまを思はする詞なり。たとへば

・

炭　かゝさずに中の巳の日をまつるなり　　利牛

前句へ又たのしみて美濃だよりきく　野坡　この前句。美濃よりいでたる人にしてその故郷を思ふ体につけたるもの也。さればかゝさずに中巳日をまつるは。其故郷の親などの安全をいのりてするわざをいへるにて。その大切におもふ情のあつき事。他の人の及はざる所ある事を思はせんとて。なりとはいはれたる也。世にはたゞ何事もなき天尓波也とおもへる天尓波也。かほどの心こもる事なればよく／＼おもふべし。かの喜撰がへよを宇治山と人はいふなりとよみしも。その世をうしといふ人の心の置所。われとはたがへる事をおもひくらべさせていはれたるもの也。されば。此詞。たゞむかふの

様子をいふ詞之とのみ心えては義いと淺し。むかふのさまをこと更になりとしもいふは。かならず其むかふのさまにつけてこなたの心にたがふ所あるが故之と心えて。古哥古句をも見。おのが哥俳諧にもつかふべき之

猿　宵の月西に薺のきこゆ也　如行
炭　鹽出す鴨の苞(ツト)ほどくなり　孤屋
同　食堂に雀なくなり夕しぐれ　支考
同　椋の実おちて屋根くさる也　野坡
同　小ひるの比の空しづかなり　利牛
荒　雲の峯腰かけ所たくむなり　野水
員　ねふりころべとひばりなくなり　落梧
春　鎧ながらの火にあたるなり　李風
員　こゝろやすげに土もらふなり　龜洞
續　批(ママ)杷の葉の猶たしかなり初霞　斜嶺
炭　人のさはらぬ枩くろむなり　利牛

續　春かぜに普請のつもりいたすなり　惟然
春　くもらずてらず雲雀鳴なり　荷兮
猿　年に一斗の地子はかる也　去來
炭　晩の仕事の工夫するなり　岱水
猿　いとゆふのいとあそぶなり虚木立　氷固
續　千苅の田をかへす也なには人　一鷺
員　山伏住て人しかるなり　野水
續　三嵜敦賀の荷のかさむ也　馬莧
員　湯殿まゐりの木綿たつなり　舟泉
集　秋をへて蝶もなめるや菊の露　芭蕉
瓢　たび／＼芋をもらはるゝなり　珍碩
○なるなれならばなどかよはす事つねなり
猿　桐の木にうづらなくなる塀の内　芭蕉

○由久身

ゆく　これももとは裝なれど。物にしたがはざる分をば脚結にしてつかふなり。上のありなしなどの條にくはしくいへるがごとし。次第〳〵ニ何ユクといふ心なり。裝の時は。その物の実に行くかたちをいふ也。脚結の時は。へふりゆくへなりゆくなど。その事のゆくやうなる形容をいふなり。これ裝と脚結とのたがひめなり。炭俵に利牛へ家のながれたあとをみにゆくとつかひたるは裝なり。これ人のみにゆく事なればこ也。又猿蓑に万乎へ田の畝の豆つたひゆく螢かなこれらも脚結のごとくなれども。ほたるのゆく事なればこ。猶裝なり。これらにて心えわくべし

葛城ノフモトヲ過

猿　猶見たし花に明ゆく神の顔　芭蕉

荒　なに事もなしと過行柳かな　越人

炭　蜘の巣のきれゆく冬や小松原　斜嶺

集　ほとゝぎす消ゆくかたや島ひとつ　芭蕉

同　爐びらきや左官老ゆく鬢の霜　同

いづれも物はうごかずして。その用のゆくをいへる事みるべし

かやうにもつかはれたり

○句集拾遺百韻の支考が評を出せるに曰。〽月の形(ナリ)次第に細き寒さ哉。評ニ云。冬枯の心細く。まづつねにはあらざれども。次第の二字重ければ殘念とあり。この次第にといふは。今いふゆくの心之。この評支考が心には。〽細くなりゆくとすべき事におもはれけるなるべし。げに〽次第にといへば。形の事におもくかゝる故に。かの幻術の効うすしたゞゆくといはゞ。支考が心にも叶ふべしかし。これをもてみれば。一向に俳諧は俗語にてすむ事ともいひがたく。翁もしかをしへられけん事明らかなり。されば句意によりて雅俗はえらひ用ふべき事之

○阿不身

あふ　これまた裝なれども脚結となれるなり。心得まへに同じ。あふといふ詞ながら。いづれもあへぬあへずなど。不の字をつぎてつかひつけたり。かの鸕鷀草葺不合命(ウガヤフキアヘズノミコト)の御名など。即このあへずにて。御産屋をいまだふきはてぬ間にうまれさせたまひし。御安産のかたちを申すなれば。これにて此詞の義をおもふべし。されば此詞。テキルマモナイ　マサヘナイなどいふ俗言にあたる之。しはてんとす

る物事の。その間のなきさまをいふ詞なり。哥には〽道もさりあへずとよめるは。よけてゐるまのなきなり。又その外。〽せきあへず〽とりもあへず〽思ひもあへず〽あへず散ぬる〽もみぢあへなくになどやうにさま〲つかはれたり。又文章に。〽あひなく〽あへなくなどつかふもみなこの詞のかよへるなり。集中例なし

○也留身

【やる】これまた装を脚結としてつかふなり。たとへば。文をやる使をやるなどいふ時は。装なり。哥にも〽鶯さそふしるべにはやるなどよめるは装なり。〽やるかたなき〽思ひやるなどいふ時は。装にあらず。まへにいふがごとし。但この思ひやるといふ詞。萬葉に〽おもひやるとよみたるは。思ひをやりはらす心なり。上古にては多く此遣悶の心につかへる詞なり。後世にては。たゞ想像の心にのみつかふ詞となれり。其外〽やらぬ〽やらずと不の字をつぎてつかひたるが多し。此〽やらすといふは。速にせんとする事のはかどらぬかたちをいふ詞なり

猿　霜・やけの手をふいてやる雪丸け　羽紅

これらのやるは。装にて俗言なり。これと混ずべからず

○加奴身

かぬ これもとは兼といふ裝なり。心えまへに同じ。物事に堪ざる心なり。くはしくは裝抄にいへるをあはせて心うべし

荒　かやはらの中を出かぬる胡蝶哉　炊玉

同　山まゆに花咲かぬるつゝじ哉　荷兮

戀

同　一トめぐり人まちかぬるおどり哉　尙白

此やらぬとかぬとはまぎらはしき詞なり。くはしく心えわくべし。へ行やらぬといふは心からゆく事をはたさぬ心之。へ行かぬるといふは。心にはゆかんとすれどもゆかれぬ心なり。かくのごとくせんとは思へどせられぬと。コレハかぬナリ せんとおもひながら心からせぬとの別なりと知るべし コレハやらぬナリ

○かねてかねつかねつもかねしなどもつかふなり

集　蜻蛉やとりつきかねし草の上　芭蕉

湯　尾

同　月に名をつゝみかねてやいもの神　同

○被身

[る] これは〽くもる〽ちる〽とる〽見るなどいふるにはあらず。それは裴の末といふものなり。これは俗にレル　ラレルなどいふ詞なり。〽またるとつかふはマタレルの心なり。〽いはるとつかふはイハレルの心なり。すなはちらるともつかふなり。すべてわざとせんとも思はぬに。勢によりて自然としかなさるゝ心なり。さればみづからの心からするにはあらざるをことわる詞なりとしるべし。たとへば。〽月夜にはこぬ人またるとよみたるは。月の人まつ心を自然と促すにて。わが心からまつにはあらずと。こぬ人の心にあたらぬやうにとてよみたるもの也。上ノめりノ条下ニイヒシ。わが御國言ノ心エテ思ヒアハスベシ　これをれともかよはしていふ事つねなり。〽ひかれ〽とられなどいふこれ之。これに二例あり。第一例は上にいふ心なるなり

炭　麻の種毎年踏まるもゝの花　利牛

第二例は。むかふをすこしあがめていふ心なり。哥には〽たゝりなさるなどいふこれ之。俗語にもいふ事之。〽ゆかるゝ〽せらるゝなどいふこれ之

炭　分にならるゝ嫁のしあはせ　利牛

續　おれが事哥によまるゝ橋の番　芭蕉

但るといふと。るゝといふとは差別ある事なり。裝なれどもたとへば〽ながるといふと〽ながるゝといふとの別のごとく。下のるは。その事のうしろになりゆくさまをいふ之。されば〽分にならるといはゞ。分になるそのわざをいふ心となり。るの字添ふ時は。分になるわざのもはやあとになりゆくもやうをいふ心となる也

炭　粟を苅られてひろき畠地　利牛

集　梅白しきのふや鶴を盗まれし　芭蕉

同　語られぬ湯殿にぬるゝたもと哉　同

同　せつかれて年忘する機嫌かな　同

〇令　身

[す]これは俗言には。サス　セルなどいふ詞之。たとへば〽ながすといふは。流サスの心なり。〽わたすといふは。渡サスの心なり。〽いはすといふは。イハセルの心なり。それをしてしかせしむる義なり

集　吹とばす石は淺間の野分かな　芭蕉

同　もゝの木の其葉ちらすな秋の風　同

同（又猿）　うきわれをさびしがらせよかんこ鳥　同

同　鰹うりいかなる人をよはすらん　同

續　引たてゝむりに舞はするたをやかさ　同

さともせともしともかよはしてつかひたり。いづれも脚結抄に引哥あるをみてしるべし

猿　一ト月はわれに米かせ鉢たゝき　丈草

同　弱法師わが門ゆるせ絣（餅）の札　其角

同　いとゆふに負引のばせつくり獨活　配力

これらは此例にあらず。いづれも裝の末の衣緯（エヌキ）にかよひたるなり。もとへ貸すへゆるすへのばす（此すナ裝ノ末トイフ之）といふ詞のかよひて。令する詞となれるにて。種姓ことなれば。混ずべからず

春　うたひつくせる春の湯の山　旦藁

これも猶上に同じく。へつくすといふ詞の衣緯（エ）になりたるにて。令する詞にはあらねども。この例とはことなる事之。これはへふるをへふれるへなくをへなけるなどいふ詞の例之

炭　むすめをかたう人にあはせぬ　芭蕉
同　壁をたゝきてねせぬ夕月　同
同　のこぎりにからきめみせて落椿　嵐雪
集　水ばなにまことみせけり御取越　芭蕉

これらの句は正しくこの例なり。よく〳〵心えわくべし

[む] もとこれは。ますといふ詞のつゞまりたる詞なるよし。脚結抄にくはしくみゆるがごとし。上古にはしむとつかひたる哥も多けれど。後世はつかはず。むとのみ多くつかひたり。これ猶上のすといふにおなじく。サスルなどいふ心之。たとへば〳〵よわむる〳〵つよむるなどいふむなり。されどすとむとは。佐經麻經のたがひめはある事にて。すといふ時は。おもふすぢへ。そのわざをしたがはしむるをいふ之。むといふ時は。そのわざを内にもたする心なれば。内外のたがひめあり。上古にしむといふは。畢竟このふたつをかねたる心にて。外へわざにすべきことを内にもたしむる義なりとしるべし

集　雲をり〳〵人をやすむる月見哉　芭蕉

○爲身

［す］これまた装なれど。脚結としてつかふ之。心えまへに同じ。たとへば〽花のかぞする〽こゑはしてなといふこれ也。わざにするといふにはあらねどさる形容なるをおもはする詞之

集　眉はきをおもかげにして紅の花　芭蕉
同　龍門の花や上戸のみやげせん　同
伏見ノ任口上人ニ逢テ
同　わが衣にふしみの桃の雫せよ　同
猿　とかくして夘花つぼむ弥生かな　山川
荒　二日にもぬかりはせじな花の春　芭蕉

これらいづれも正例にて。畢竟は。事を為るといふ詞をかりて。心を發（オコ）す情を形容する詞之と心うべし

集　やどりせん藜の杖になる日まで　芭蕉
續　白雨や中もどりして蟬の声　正秀
猿　月見せんふしみの城の捨廓　去来
續　昼ねして手のうごきやむ團哉　杉風

猿　さま〳〵に品かはりたる戀をして　　　几兆

これらは皆裝なり。まがはすべからず

春　釣瓶ひとつを二人してわけ　　　昌圭

此句は。にての心なるしてなり

○如身

ごと哥には。ごとくごときともよめど。多くはごととばかりつかへり。ごとしといふは。文章にのみみえたり。ノヤウニ　ヤウニ　ヤウニアル　ノヤウナなどいふ俗語にあたるなり。これはもとこの字を清(ス)めば。異別(コトコト)などの心なるを濁りていふ之。濁音の義は前にもいひしがごとく。すべてふたつの物事をあはせ成す義なれば。即その異(コト)物をひとつにする心とはなる之。音義の妙おもふべし。たとへば歌に〽きり〳〵すわがねぬごとやとよめるは。蛬と我とは異物なるが。丁ど同じやうなるといふ之。似るといふ詞にまがはすべからず。似るは。双方の物の持あひたる所内にあるをいふ詞なり。如はもちあふ心にはあらす。兩方を。きとひとつになす心なり

續今宵賦　その交のあはき事は砂川の岸に小松をひたせる

がごとし　　支考

この如といふべきを。直に俗語のまゝつかひたるは

集　つき鐘もひゞくやうなり蟬の聲　　芭蕉

同　月はあれど留守のやうなり須磨の夏　　同

○上古には。なすといふてにはあり。即如の心なり。へうづらなすへ玉もなすなどよめり。されど如となすとは別義にて。上古にも如ともつかひたり。この差別は。古歌脚結にくはしくいへり

○八　隊

○美　隊

み　これは。へをしみへくるしみへ苦をあらみへ都をとほみなどいふみなり。もとへうとむへしたしむなどいふむを伊緯にかよはしたる詞なり。伊緯にかよはす故に。俗言のサニといふ詞にあたる心とはなる之。此例にはあらねど。伊勢物語にへうるはしみせよとよみ。上古にはかくつかへる哥多し。このみは。たゞうるはしむといふ事を体にいひしもの之。俗にガルといふ心なり。それが脚結となりて。俗言のサニの心に。此みをつかひなりたる也。この俗言のサニといふ詞。ニコッテといふ詞のやうな

れど。それはたゞ理をさとす詞なり。これはそのうしろの方に。その用の出所あるをさとす詞なる之。たとへば。暑イニヨツテ勞レタといふ時は。そのつかれたる理をときたる心なり。暑サニ勞レタといふ時は。わが身いたく暑さにくるしみ堪たる心はかゝる也。このけぢめをもて。此ふたつの別をしるべし。俗言のニヨツテハ。ればといふ詞にあたるなり

拾　袖よごすらん田螺の蜑のひまをなみ　芭蕉

多　かげうすみ行燈けしに起わびて　野水

同　かも川や胡磨千代祭やゝ近み　荷兮

前句へ荻織る笠を市に賣らする　後句へいは倉の聟なつかしの比　コノ前後ノ句モニみニ打合たり

春　肌さむみ一度は骨をほどく世に　同

此句ハさむみノ下ニ詞ヲ畧セルナリ。ソノ畧語ハ。衣ナド重子着ルヿヨトイフベキヲ。下ノ詞ニテキコユレバナリ。人ハ是非一度ハツヒニ骨ヲホドクニイタルベキ身ナレバ。肌サムシトテウレフベキニアラヌヲ。猶衣ヲカサ子着ルヿヨトノ心ナリ。古人詞ニ力アリシヿ。コノ一句ニテモ見ツベシ

さ　これまへの何みといふにかはらぬ詞のやうなれど。その心得あり。みといふは。いづべきもの丶出所を思はする心なり。さは。その味はひのもとよりその内にもちたる所を思ふ詞なれば。似たるやうにてたがへり。たとへば。へくるしさといふとへくるしみといふとは。へくるしさは。外より内を思はする心あり。へくるしみは。内より外へかけて思はする心なれば。その用ひやう心うべき事なり。俗にも苦シミとも苦シサともいふ。自然とこのわかれある事なり。上のみを。俗言のサニにあつれども。実は右の如くさとみと別あり。されば古言に俗言をあつる事。くはしくいへば。麁なる事之。凡詞の義をくはしくせんには。經緯五十音之の義を知るより外の道あるまじき事。これにても思ふべし

猿　此寒さ牡丹の花の眞裸　東來
荒　蕣やかきほのまゝのじだらくさ　文鱗
猿　さびしさに客人やとふまつり哉　尙白
同　露うごかぬひるのねふたさ　去來
同　あはれさや盲麻かる露のたま　摫（ママ）市
同　京筑紫こぞの月とふ僧仲間　丈草
炭　ちつとも風のふかぬ長閑さ　野坡

同　門しめてだまつてねたる面白さ　芭蕉

同　たゞ奇麗さに口すゝぐ水　利牛

同　師走比丘尼の諷ふさむさよ　孤屋

續　仰(ゲウ)に加減のちがふ夜寒さ　馬莧

同　引たてゝむりにはするたをやかさ　芭蕉

冬　しづかさに飯臺のぞく月の前　重五

員　旅するうちのこゝろ奇麗さ　落梧

猿　日の暑さ盥の底の蟻(ウンカ)かな　凡兆

荒　うれしさやねいらぬさきの郭公　傘下

續　かなしさや麻木の箸もをとな並ミ　惟然

同　自由さや月を追行置巨燵　洞木

同　李もる店のほとりの暑さ哉　万乎

炭　あすといふ花見のよひのくらさ哉　荆口

同　箒目に霜の蕪鉄のさむさ哉　游刀

猿　夕がほによばれてつらきあつさ哉　羽紅
炭　並松を見かけて町のあつさ哉　臥高
續　爼に人參の根のさむさ哉　沾圃
同　茨ゆふ垣もしまらぬあつさかな　素覧
炭　人こゑの夜半を過るさむさ哉　野坡
同　團賣る侍町の暑さ哉　怒風
續　すゞしさや椽より足をぶらさげる　支考
員　さびしさは垂井の宿の冬の雨　舟泉
續　さびしさは夜着をかけたる巨燵哉　桃先

釈　敎

荒　をりかけの火をとる虫のあはれさよ　探丸
炭　息災に祖父のしらがのめでたさよ　岱水
同　すゞしさよ塀にまたがる竹の枝　卯七
續　凉しさよ牛の尾ふりて川の中　万乎

同　百姓になりて世間ものどかさよ　馬莧

猿　ちる時のこゝろ安さよ芥子の花　越人

同　昼眠る青鷺の身のたふとさよ　芭蕉

炭　鍋ぶたのけば〳〵しさよ年の暮　孤屋

猿　この筋は銀も見しらず不自由さよ　芭蕉

○久　隊

［く］これは。へいふをへいはく。へかよふをへかよはくなどいふく｜これ之。その事を。きととりすゑていふ心なり。たとへばへある人のいふといへば。たゞいふさまばかりの心となり。へある人のいはくといへば。その人のいひたる事にはと。しかとするていふ心となる之。これひとへにきく人の心をば。その事につよくおかせんがためなり。集中例みえず

○哥には。らくけくまく（又まトモイフ之）さま〳〵にいへり。らけまなどは。上の詞にしたがひてなり。老らくなどいふ即これなり。老トイフ物といふほどの心之。すべてトイフ物　トイフヿなどいふ俗言にかなへり

○介　隊

〔げ〕へをしげへくるしげなどいふこれ也。これはもとけは異の心にて。それを濁りたるなり。されば
たとへばへをしげにもあるかとよめるは。しかとをしといふ心があらはにはなければ。をしといふと
は異ものながら。猶ひとつものにおぼゆる心を。げとはいふ之。濁音ノ義前ニイフガゴトシ例集中にみえず

○加之隊

〔かし〕これは俗言にタガヨイハサテ　ハテソデハアルマイカヤ　ジヤハサテなどいふ心之。たゞそ
の理をおもはせんとてつくる詞なり。後世にはこれをねがふ詞につかふは。その理を思はする心より
轉じて誤れる物なり。西行上人のへとめこかしなどは。古のかしとも見るべく。又後世のかしともみ
るべし。これをもても。うつりつる詞なる事しるべし

荒　千観が馬もかせかし年のくれ　　共　角
　　釈　教

ねがふ詞となれるも。畢竟は俗語なれば。哥にこそ心ある人はつかふまじけれ。俳諧にはなにのはゞ

かりもなき事なり

有國曰。この序に大人のかたられつる事あり。俳諧はもと俗言のまゝを用ふるものなれば。哥よりは自在なるがごとし。しかるときは。哥よみやめて俳諧をこそすべき事なれども。もと哥とよみ發句とするは。言語の道斷（タエ）たる時の用なれば。言語にいふがごとくあらはにいふべくは。哥も發句も無益のわざたるべき之。しかるを。俳諧は俗言を思ふまゝにつかふ自在さにひかれて。おもはずその言語道斷の時の用たる事をわするゝ事あるもの之。たとへば〽松の木に宮司が門はかたふきてといふ句は。宮司にみせんはかたはらいたかるべし。又〽いともかしこき五位の鍼たてといふ句は。鍼家の御医にみせば心ぐるしからん。又〽直（チ）のしれた帷子時のもらひものといふ句は。夏ものくれたる人にはみせがたかるべし。一巻中の奥なればとて。かゝるかたはらいたき事あらば。俳諧の本意はうしなふべき之。これ詞に自在なるよりの弊なれば。俳諧者流のつゝしむべきはこの獘（ママ）之。哥は俳諧にくらぶれば。おもしろからぬものなれど。詞の不自由なるによりて。あらはにいはまほしきこともいはれぬ所より。かへりて此獘（ママ）はおのづからのがれたるもの之。されど哥とても。人の神氣にさはる事いはんは猶この同罪たるべし。この故に言靈をむねとせんには。歌も俳諧もこと道にはあらざるべきなり。俳諧もと詞の

自在なるより。かゝる事をもわするゝ事。古人だに猶あり。今の人よく〳〵つゝしむべき事なり。俗言にはありて。古言にはなき物事などは。哥よみは生涯えいはではつるものゝやうに思はるべけれど。さにあらず。言靈にだにしづむれば。俗言にいふよりも猶無愧なる事もいはるゝぞかし。詞の表にて自在不自在を論ずべからず。この故に予は哥をのみよむ之。俳諧者流は。哥を流行におくれぬとし。哥よみは。俳諧をいやしとすれども。かたみにかゝる僻（ママ）はあるぞかし。不自在なるに得あり。自在なるに失ありと心うべき事。わが發天地の御敎なりとかたられき

○奈倍隊

なへ　上古はなへとばかりもよめり。中昔よりなへにと。にの字必そひたり。これはヤサキニ　ニアハセテなどいふ心なり。並の字の心なり。一事のうへに今一事のさしあはせたるさま也。これさしあはすまじき理をおもはする詞之と心うべし。集中例なし

○母乃隊

もの もとより物なる物をはいふに及ばずと。脚結抄にいへり。なに事にもあれ。世にはそれになしかためざるものを。かためていふ時の詞なり。俗言にもいふ事なり。オカシイ物ジヤ　イラヌ物ジヤなどいふこれ也。道理ナモノ　ワケナヿ　理屈ナモノ　チガヒナイヿなどいふ俗語にあたるなり

荒　朝がほをその子にやるなくらふもの　荷兮

集　さみだれにかくれぬものや勢多の橋　芭蕉

○八多隊

はた これは。詞の中また上にもつかふ詞にて。その上中につかふを挿頭とす。くはしくは挿頭抄脚結抄にみえたり。されどいづれも。もと〳〵はまたといふ詞の。まのはぶかりたるなり。上におき下におくにて。おのづから上のうけざまもかはる事なれど。実はたゞ同じ詞なり。脚結抄に。セウヿモナイヿといふ心にあたる之といはれたり。此俗語の心をよく〳〵思ふに。すなはちへ〳〵はまたといふ詞に合したればこ。たとへば後撰にへ〳〵から衣きてかへりにしさよすがらあはれと思ふをうらむらんはたといふ哥は。こなたはあはれと思ひをるからは。うらまるゝはづはなき事なれど。猶わがつらきになさむはまた是非なき事之といふ心なり。されば是れは。わがむねとする所ありて。そこへ人の心をさそふ

べきために。片方のかたをばいふなり。此故にそのはたといへる方の事は。わが心の外なる事にて。自然の勢しかあるべきをいふなりと心うべし萬葉にこのはたを爲當とかけるは。ハタトアタルといふ俗言の心にて假られたる文字なるべし。しかるにそのハタトアタルといふ事も。即今いふ所の義に相かなひたり。わが思ふ筋にて事すめば論なけれど。やむことをえぬ筋の。その事につけて出來たる時の詞なれば。ハタトアタル形容なり。音義の至妙なる事みつべし。集中例なし

○加天隊

がて　この詞。難の字の心とみるが故に。いまだ全く說きえたる人なし。萬葉にがてぬがてなくになどよめるをば。難の字にあつれば不難の心となりて。かへりて易き心になる故に。萬葉の注者ときかねて。さま〳〵にいはれたり。しかるにもとこれは勝の字の心にて。難の字をかたしとよむも。もとは被勝といふ心をえて訓じたるものなり。されば字は末なる之。こゝに無用の事なれども。もと漢字どもの訓は。わが國本來の詞なり。字は後に漢土より來れるものにて。我國の詞に。かなたの字をあてたるにてこそあれ。この故に。訓は本なり。字は末之しかるにやゝもすれば。これをよく弁へたる人すち。字を本訓を末とするより。かゝる心えあやまりはいでくる也。けだしあたかもなどいふ詞も。蓋恰

の字をあてたる故に。漢土よりしも來れる詞のごとく人おもへり。萬葉には哥にも多くよまれて。わか國本來の詞なるをや。されば此がても。難の字をたのむ故にまどはしき之。もとがてとは。かたれのつゞまれるにて。被勝の心なり。されば〽出がて〽過がてなといふは。出る事過る事よりまさりて。出るわざすぐるわざのせられぬ事あるをいふ之。萬葉のがてぬとよめるは。不レ被レ勝の心にて。猶それも同じくその事のせられぬ心之。此故にがては。そのすぐれたるかたの事をいひ。がてぬは。そのかたれざる方の事をいふまでのわかれ之。イヅレモ詞ニイヘル方ハ客ナリ。陰ニナリタル方ガ主ナリ。コレニカギラヌヿナガラ。ナホ心ウルタヨリニイフナリ　さるによりて萬葉に不勝とかゝれたるうべなる哉。集中例みえず

○かぬとがてとのわかれよく心うべし。たとへば〽行かねて〽行がてになどいふ時まぎらはしきもの之。もとかぬといふ詞は。神代卷に思兼神といふ神あり。此神は。今目前なる所の一段さきを見こす智恵の名にて。これ兼の義なり。その外〽后がね〽坊がね〽むこがねなどいふも皆この心にて。今はいまだ后にも太子にもむこにもあらねども。行末しかなさむと思ひおくをいふなり。されば〽行かぬといふは。ゆきての後を思ひはかりて今ゆきわづらふなり。〽行がてといふは。何にもあれ。わがゆかむとする心の負けて行がたき事ある時の詞なれば。かねは。わが心からさきを思ひてゆきかぬる之。がては。物のためにゆかれぬにて。詞のいづる所ことなるなり。こゝをよくおもひはかりてつかふべ

し。すべて天尓波には。かくのごとくまぎらはしき事多きものゝ。委しくまなびしらでは。古哥古句の意をもときうべからず。みづからつかひもうべからぬ事なれど。後世にては。たゞ古人の句拍子をおぼえて。拍子をあてにつかふ事いとあやふき事なり。上古はくはしくこれをまなびたりとにはあらねど。詞に雅俗なかりしかば。おのづから天尓波のよくかなひしなり。今詞に雅俗出來て後は。くはしくこれをまねぶべきになりたるは。今人は古人よりも事多くなれりといふべし

俳諧天尓波抄卷之六　大尾

南臺藏梓

文化四年丁卯仲冬

皇都　野田治兵衛

中川藤四郎

佐々木總四郎

葛西市郎兵衛

橘仙堂善兵衛

浪華　柳原喜兵衛

東武　野田七兵衛

脚結玄義

此脚結玄義は我うし富山の駅にたひやとりし給ひし頃何かしにかきて給ひたるなりそのころ萬葉集ともし火をかき給ひて筆のいとまなかりければこれはたゝこと短にさとし給へるにてくはしくは萬葉集ともし火にときたまへりかへさに此駅に舎り給ひて遠田何かしにその草稿をあたへゆき給ひしとてもてりけるを此度おほやけことありて旅舎りせるいとまのひまにうつしとりぬところ〳〵かき入給ひ（ママ）るけち給へるなとわきかたきはありのまゝにうつしぬ年は文政六とせといふとし時はきさらきのはしめにて庭の紅梅にほひそめたり

蟹瀬の篤よし

梅花むかしの人のそての香に
　なににほふらむ戀しきものを

春毎にをりなわすれそ梅さかは
　とひことといひし人はいつらそ

われこそはかくなからへて春ことに
　來つゝ見むとはおもはさりしを

あなさためなの世や

五　属

●詠属

○や　○よ　○な　○かな　○もかな　○もか

○も

●疑属

○か　○かに　○中のか　○かは　○中のかは　○かも

○中のかは（も）　○かや　○や　○中のや　○伏や　○やは

○やそ

●願属

○ばや　○はやな　○もが　○もかもや　○てしが　○もてしが

○もしが

●誂属

○よ　○や　○ね　○なむ

◎禁属

○な　○なそ　○なそも　○なゆめ　○ゆめなそ

十九家

●曾家

○ぞ　○中のぞ　○こそ　○中のこそ　○こそは

●平家

○を　○てを　○ものを　○をは

●波家

○は

●毛家

○も　○もや　○もそ　○もこそ　○まれ　○みみ

●仁家

○に　○中のに　○にて

●止家

○と　○てふ　○とも　○とす

●志家

○し　○しぞ　○しこそ　○しが(ママ)　しかも　しかは　○しも

○しは　○中のし

●乃家

○の　○のとも　○のから　○が

●邊家

○へ

●良家

○ら

●能美家・

○のみ・　○はかり　○まで

●陀尓家

○だに　○すら　○さへ

●余利家

○より　○から　○からに　○ものから　○つから　○ゆゑ

○ものゆゑ

●那牟家

○なむ

●碁登家

○ごと

●毛天家

○もて　○して

●加保家

○かほ

●那加良家

○ながら　ながらに　○まゝ　○まに〱

●加天良家

○かてら

六倫

●可倫

○べし　○べみ　○へらなり

●不倫

○ず　○じ　○まじ　○ざる　○ぬ　○で

○なし　○なく　○なくに

●將倫

○ん　○め　○まし　○ませは　ましかは　ませは（衍カ）　○らん

○らめ　○らし

●有倫

○あり　○り　○くあり　かり　○けれ　○けん　○たり

○にあり　●去倫
○ぬ　●來倫
○さ　○けり　○けん　○く

十二身

●氐身
○て　○ては　○てん　○てき　てけり　てし　てぬ　てよ　てけん　てけらしも
○たり　○つ　○つる　○つゝ
●之身
○し　○せば　○しか　○しかと　しかとも　○しかば
○ましか
●咩利身

○めり　●那利身

○なり　●田久身（由）

○ゆく　●阿不身

○あふ　あへず　●也留身

○やる　●加奴身

○かぬ　●被身

○る　らる　●令身

○す　○む

●爲身

○す

●如身

○ごと

八隊

●美隊

○み　○をみ　○さ　○のさ　かさ

●久隊

○く　○らく　ま　まく

●介隊

○け

●加之隊

○かし　●奈倍隊

○なへ　●母乃隊

○もの　●八多隊

○はた　●加天隊

○がて

脚結玄義

大かた脚結の用多言すへき事をひとつの脚結にこめて多言をつゝしむか爲の物なりこの義をとる事經緯の音義に古人の用ひたる例を微（徵）すしかるにその用ふる所義をのみしりて用ひさまをしらされは用をなさすわか大御國すへてふたつをそなふへき事（ふたつとは天地なりくはしく神典にをしへられたり）事に大となくこれをそむくへからすこれをやまとたましひとも眞心ともいふ之脚結をしらむにまつ義をしりさてその用ひさまをしるへき事肝要なる之義は古今貫通なりもちひさまは新古の別ありその別とは上古人は歌ふみともに倒語ならさるはなし（もと哥文（ママ）つくるへき根は私情なれはなりたとへは國史に天皇の御名の后（ママ）妃御子たちの御名また御よはい御はかなと記せるは直言之これらは情にあつからぬ事なるかゆゑなりいさゝかも情にあつかるは紀中とても倒記なり神書はみな倒語之御世〻の紀は倒語直言ましはりたる物なりとしるへし万葉集の歌みな倒語之その外古き祝詞もおなし）此京に及ひては直言となる（されとも土佐日記伊勢物語その外いふへからぬ事のいはてかなはぬ時のうた文は古にたかふ事なししかれとも上古倒語をむねとし後世は倒語たまゝなりこの故に古言新言おのつから用ふるに淺深はあるなり）直言に用ふるには義のまゝ之用ひさまをしらむに古人倒語せる歌文ならてはみる事あたはさるもの之何事をいはむにもわか情の人の心に入らむ事をむねとして詞つくりはすへきそかしその要もはら脚結にある也

脚結玄義

○五属

●詠属

○や　その内に思ひ入れんとすれとも及はさるを歎く脚結也用ひさまはもと歎かでもよき事からなるをやとよめりこれをいかにとなれはきく人この事はさまて歎くに及ぬ事なるをと思はむ所すなはちもとよりわか思ふ所にて人をしてしか思はするはおのつからわか情の坪にはまれる也もし我よりそこをいはゝ必反をもて人きくへきか故也下皆この心えをもてみるへし

四例　第一冠のや

義は上にいへりされともこの例は歎息一首にわたらさるを例とすたとへは郭公なと(く)やさ月のあやめ草云々たゝさ月までにかゝりてあやめ草まてには及はされは畢竟このやもしより上は序歌の例にて序歌枕詞さ(すカ)へていふへき事のいへは人の心にせまりて害あるへき時これにかふる也此故に五月の郭公をなかしむる事をやと称嘆したる心なれとも歎息すへきほとの事

にもあらさるをやとなかむるはそのいはすしてそれにかへたる情を心つかせむかため也と心うへし

第二状のや

これはめつらしやはかなしやなといふ例なり義上にいへりこのやもと詠のやの正當なりさまてめつらしくもあらぬ事をやとなかめさまてはかなくなき事をやとなかめてまことのわか情を人の心から思はせむの手段なり

第三中のや

花やもみちなといふこれ之もと花もみちなとを歎息する心よりおくなれは詠属なからまことは里言之その故に中ころよりよみ中昔にたによます

第四末のや

此例も詠正當なり をや（脚） はや（脚） は脚結をうけたりその餘かなし（状）の宮の山かせ（名）やなと名をうけ

万一高山波らねび

をゝしとみゝなしと灯二ノ二波もしをは(ママ)の心に見よと代匠記にいへりしかれともをはのへをゝ畧たるにはあらすをといふへきをはとはよませ給ひる之云ゝ是は疑る(敢する)心に用ふるにハ(とよむ)て者也よは心なりはやのやもしのなき之

万一歌今はこきいでな灯一ノ廿九氏なは云ゝむなのむをはふきたるにてこゝは漕出乍楽(コキイテムナ)の心なり

たるはまことは上の狀のやの例に同し義まへにいへり　はや　をや　なともさまてもあらぬ事にやとはいふ之

○よ　思ひこむ所のとほくなれるをなげく脚結なりされは忘れたりし事心のつかさりし事なとをなけくなり

へまろかまろねよいく夜へぬらむといへるはわかまろ(ママ)せし數に心つかさりしをなけく之やとその義相反せり　やよともにや經にてあ緯とお緯とは義反する故之たかひに照らして義を明らむへしこれまた本意のすちには用ふる事なしさのみなけくましき事によとはおくなり

○な　もちしめさせむとする事の及はぬなけき之へいつともしらぬ船出かなしなといふはかなしと思ふ事をきく人のもちしめぬなけき之なけくはそのかなしさをふかく持しめむか爲也これもまことにそこをなけくには(お)なく事なしさまてもなきすちをなとよみて本意の(ママ)のすちに人の心をやらむの手段におく也つねの物語になといふもその筋をよく人にきゝ入てもたせんの心にいふ之これをもてしるへし

○かな　上古はかもとよむ中昔よりかなは詠かもは疑となれりこれはすへて定たる理ある事に引たかひたる事出きてその定まれる理もておさむとすれとおしかたき歟なり中昔よりなとなれるは上にいふなの義をかにそふるなりかはもと疑の詞にてこのかなのかも猶疑の心なりか

は物のさためかたき歎也くはしくはかの条をあはせてみるへしその定めかたきことのもちしめかたきかたちを思はせてなとはいふなり上古もをそふるもは主たる物におとれるものゝそこによせらるゝ心なれは詞に慎はみゆる之新古の別このなともにもしるへし大かた哉は歎息の詞の王と人〻おもへれと上古人は実にわか歎にかもを用ふる事なしさもあらぬすちを設てその筋をふかく歎きてかもとはよむ也かゝる事はいかてしかはなけくらんと思ふより人の心をわか本意に導かむ爲なる之因に云近世このかなとつゝを禁せらるこれ此二詞のかたきゆゑにあらす近昔歌合さかりにしてよしもなきかなつゝを多く用ひたりし七言に二言たらぬらめくさにはよろしき脚結之たとへは山さくらつほすみれなといふ時よしなき哉を置あやまたれいさなはれなとにはよしなきつゝをおくこれによりてよむなといはれしかならすとなりつる之よく叶はんをよむなといはれしにはあらす公にこそはゝかるへけれみつからも用ひしらされは古哥の哉も解らへからす
こそ

二例あり〔靡の哉〔名の哉といふ名をへたてたるはかりにて猶上にある靡をうくる之靡とは裝の名目にてみゆる思ふよするさくなといふ詞の下つかたをいふ名之千載集にへむかしなからの山さくら哉とよめる古例にたかへり古今集のへおほつかなくもよふこ鳥哉はよふに哉をつけたるなりことに上にもしもあれはそれにはこと之俊成卿のえ(き)らされたる集にかの歌あれは後世さま〳〵理をつけてさる哉を用ふれともともとあやまり之又思ふ哉みゆる哉なと思ふみゆるを哉とよむ事近來當世多し思ふ哉は思ふを歎きみゆる哉はみゆるを歎く心なるをや

○もかな　哉の上にももじある之たとへはへ戀もする哉へみえもする哉なとの類之これはかひ

あるへき戀をこそせめ同し戀なからかひ〻なき戀をすることをさとす爲にもとはよむ也もなき哉も所詮は猶もあるかことき物なりこれかなのもちまへ之これまた本意のすちにはおくへからさる事わか萬葉燈をみて心うへし

○もか　畢竟もかなのなもじなき例之かなのななきをはかなのかといふ哉の条下にいへりしかことくもとかもじ哉の本意なれはななきはその義のそはぬはかりなりすへて脚結は(倒)例に用ふるをむねとすれは実に(總)傳せられすその情のよく通せんことをはかりて脚結は用ふへきなり

○も　上にもいひしかことく大かた主たる物ありてそれにはよりもつくましき物をよする脚結也〵くものおこなひかねてしるしも蛛のおこなひはいと〳〵たのもしかるへき物にあらねとこれたにせめてたのまるゝ心にもとはおかれたる之又萬葉集に〵かたまもよみかたまもちふくしもよみふくしもち云〻はその女の容儀を主としてもとはよませ給ひてめしいれまほしき御心言靈となれり上古人はつねに用ひたる脚結なりこの用ひさまを弁せすなれる世よりやゝすくなくなれる(に脱)こそ

万一長歌大殿はこゝといへとも云〻かすみたつ春日のきれるもゝしきの大宮処見れはかなしも灯二四十七もはすへてナレ圧ケレトモなといふこ(に脱)ゝろみれは明らか也亾父はサテモと(詳)記せりよく此義を心得れはサテモの心となるか故之されはこゝも見れは

かなしけれともいかにともせんすへなき心之灯五ノ十五にも說あり

●疑属

○か（か）　よとや疑のあゆひの主たるよし抄にいへるか如しこれならすはこれならんと思ひてさためかたきをなけく脚結なりこれまた情のために設たるすちのうへにていふへしたとはゝへあらものすそに潮みつらむかとよめるたゝその潮みつ（る）かをめつらしとみすは侘しとみるらむいつれとも定かたきをいふにて言霊はもはら行幸のうへをいふなり

○かに　これは上古にがねといふ脚結ありがにともよめり后がね坊かね聟かねなといふに同しくかねてそれを設けおく義なりしかるを亡父かの属に出すはこれと別の詞と心えられたるなるへし聞えぬにはあらねとふるくがにといふ脚結あれはそれに従ふへきいまたしからぬにかねてその設にする時の詞は（之カ）これ又倒語のうへに用ふへきなり

○中のか　おき所たかへるまてにて義は上のかに同し置所たかふはその上を皆うくるとその分をうくるとの別なりへたのめか置しへけぬとかいはんこのおしさ（マヽ）いはんはかの義のかゝる主

ならねは之用ひさま猶本意のうへにいふへからす二例あり〔思ふ中のか〔うたかふ中のか也それはくはしくいはれたるにてカト思フと里せられたるも猶うたかひなり

○かは　よに半語といふ上古はかはやはをかもやもとのみよめりかははかこれはといふほとの心之半語といふはもとなか〳〵なる事之たゝ疑にてきく人に治定をゆつる詞之されは古今集の〔人の心にあかれやはせぬといふ歌なと半語にならすとてさま〳〵論(アゲツ)らひあれとおのれ半語なりとさためて半語ならぬを論らふ事わ(ら)とふに堪たりまへにいへるかことくたゝ疑の詞なるをや又脚結(は)も多言をはぶく爲之といふもこれらに信すへし大かたよく定まれる事からをわさとかはとよむ之人をして決せしめむの手段之

○中のかは　これは置所たかひ(一)る斗にて上と同しすへて詞は上下におく事人の名字と名の如しかはとうけたる上の詞斗にてよき事なれとあまり事たらねは下にまたその意をのふる之義用ひさまも同しまたかのかはかはのかとてかはにてかの心なるありかにてかはの心なるありこれは上下の詞のかゝりによるへし

万一歌吾妹子をいざ見の山を高見かも大和の見えぬ國とほみかも灯三ノ三十にかもの說くはし

○かも　畢竟かはを用ふるに義は同しされとはもしとももしのたかひありてはは目たつ事の歎之もはさならぬものた主（入カ）本ノマヽによせらるゝ歎之もとうたかはしからぬ物をわさとうたかふ事上に同し

○中のかも　置所たかふ心得まへにかへす〳〵いへり二例思ふ中のか　うたかふ中のか　かの中のかの条下にいふに同し

○かや　これはかとやをあはせたる脚結也やもしの心はまへの詠の属にいふかことく詠も猶うたかひの歎之されとかは大抵思ひあたるすちありてのうたかひなりやは思ひあたりもなきかたかへ（り）もされは思ひあたりもあるやうなれとたしかならぬを歎く詞之へ針はこのふたつの袖にさしつれとひとつも見えす落にけるかやはしめ袖にさしつるかかの心之後にひとつもみえぬがやの相當なる之これ又情の上に用ふへからす疑はわさとなる事をしる（忘）へからす

○や　思ひいれんとすれと及はぬ歎なり詠はその思ひ入かたきを歎く之疑はその実をしらむとする心なりともに一義なる之用ひさまも詠にまれうたかひにまれ決定を人にゆつらんためにおくへし又やはの心となるもあり上下の詞のかゝり之

○中のや　置所たかふ心えまへに同し二例さす中のやさゝぬ中のや義においてかはる事なしくはしく抄にいへり用ひさまも同し

○伏や　れやとよむ之上古もつねありれはやのばをはふける之下にうちあひあるか正しなさ(き)ははふける之義用ひさまたかふ事なし後世下にうちあひをはふく例ならぬあるは又轉用なり四例ありうたかふ伏やかへす伏やなかむる伏やねかふ伏やくはしく抄にみるへし義用ひさま心え同し

○やは　かはの心得に同し返ゝ半(反カ)語とおもふへからすたゝうたかひ之されと(ママ)かはとのたかひめおのつからその決定を誘ふにかとやの別あり上のうけさまもたかへり二例さす中のやはさゝ

ぬ中のやは抄に見るへし心得かはらす

○やそ　畢竟やにそをそへたる之そはそれはとその事をさすなりそはその事のまゝに云ふ心なれはその疑のかゝるものゝかたちにそふ心をみせて外の筋との分をいふなりことにそのすちの疑はしきを思はせんかため之義用ひさま上に同し

●願属

○ばや　畢竟さかばやはきかはいかならんの心なるか故にねかふ心とは成なりされはばはきゝたき心と願ふすちを合成しさてその事のしかならぬを歎き願ふなりこれまたあらぬ事を願ふへし後世の詞なからその心得わするへからす

○はやな　詠のなをそへたるはかりなり

○もが　もかも　もかな　もがはもかなをはふける之もかもは古のまゝに用ふる之もかも上古に

よめりもかな比京以來の脚結なりいつれももは本意ならねとせめてとてねかふなりこれ本意を願ふよりも却而重きなりもをかなにそふるこの心なりもなきもありそれは本意のすちをもねかふへし本意とても本情ならねは害なしされと本意ならぬすちをねかふ事願の切なる所なるをやもなをはふきてもかといひもする之もなの別詠屬に見るへし（もかな）

○もかもや　もかもな　もかなや　やとなをそふる別はかりなり義も心得も上に同しやなともに詠屬にみるへしその願ふ事をおもくいふは願のかたかるへきによれりされと皆本情に引く手段なり

○てしか　てしかな　二詞なのそふとそはぬ別なりそふ事上にいへりてしはてきてめてよてをてんなといつれもての下にかく〳〵してなといふ多くのわさをてにこめていふ例之しは去倫のし之しかしてしか〳〵してしと過去に成はてんやうの事を願ふ心なりたとへは〳〵耳なしの山の口なしえてしかなとよめるは山梔子をえてのうへならては下染することも能はさるか故にてしとはいふなりと知るへしこれまた（マヽ）又本情のうへにはいふへからす

○もてしが　もてしかな　もは上のもかなの下にいひしか如く本意のすちには不足なる筋をねかふ之なのそひそはぬは上に同しかの義用ひさま上に同し

○もしが　も上に同しこれは上のてしがのてもじの意なき之しはなほ去倫なり義用ひさま上に同し

●誂屬

○よ　しかせよかくせよなといふ類なりよにこれをも願といへと願はひとりもねかふ之誂は木對する物ありㅿ父はしめてこれをわかてりよもし詠屬にいへるかことく思ひこむ所のとほくなれるをなけく詞なりされは此誂わか歎するひゝきをもて誂とはする之大かたえ綽（合）（ゝ脱カ）合する詞となれゝとそれは行末かくあれと合するなりよは未然はからす用ひさま又情につくへからす

○や　なけやなけ津の國のこやの類なりこのや猶歎なりなけくより誂となるなりこれはよにたかひてとゝかぬ所あるをなけく詞なれはよも猶入の心をさそふ詞なれとやはことにかなたを

誘さそふ詞なるなり誘ふは即誂く（ら）ふるなれとさしつけてあつらへぬなりこれ又本情のあつらへに用ふましきなり

○ね　これはもと去倫のぬのかよひたるにてその事をなしはてよとあつらふる義なりしがのしに似たれともぬはそのしかなりはてさりしほとよりかけていふ詞なり遂にといふ心のかゝる詞之後世ねといふへき所を多くはよといふくはしからぬ之上古にはね多しこれも本情のうへに用ふへからす

万一歌小松か下のかやをからさね灯一ノ三十五に注あり

○なむ　なこれも去倫のぬのかよひ之しかなりはてん事をあつらへまほしく思へと聞入かたかるへきをなけく義なりむは諸音の源にして心にもの事を思ひていまた發（ハツ）せぬ義なり（これには經も緯もいまたなきなり）何事にまれなと思ふ事をひとり心に思ひていまた發せぬ事をいふは即誂之對する物にはいひかねたるよしを思はするそとしるへし去倫になんあり文にかくなんありこれとは別なり去倫のなんはたとへは上をゆきなんといふなり誂はゆかなんといふ之その餘もあれと大かたあぬきをうくるは誂なりい緯をうくるは去倫なりこれ大体をいふ之これまた本情のあつら

へに用ふへからすねなんはしかしはてんうへを願ふなりよや（よや）に混すへからすならん（ゝ）は上のな去倫なり去倫のなんと誂のなんをかさねたる心なり

●禁属

○な　氐なもとは詠属なると同しくてその持しめさせんことの及さるをなけくより禁する心を示すなりその及かたき事をなけくにて却て持しめさせんの心とてなる（は）也これはかたゝ（かたき）物を禁する詞なり下のなそにておもふへしこれまた却而その禁をやふらせんの手段また禁するは却てゆるへん手段にも用ふへし

○なそ　此そもしはそれはといふ心なりその一筋のみにそふは片方にそはぬ方あるを示すなり氐故にゆるす所ありて一方を禁する詞なりなとなそは勿莫の字のことしと臥父抄にいへりこれはそのゆるす方より本情に導くに用ふへし

○なそも　なゝそも　畢竟なそにものそはりたるなりものそふはせめてこれなりとものの心をさと

すなりもなくてもなそにその心もあれとも添ひたるはことに歎ふかしなゝはかさねたる之禁
する事をかたくせんかためなり堅きは手段あるへきなり

○なゆめ　ゆめな　ゆめはつゝしめなり禁をかたくせさせんとする事なく（なこ）に同しけれとゆめはなゝよりも又重し禁せられてせぬと心よりつゝしむとの別おもふへしこれ手段によるへしゆめ
上下にあるは禁するよりゆめの心切なるへき事からなるとしからぬとの別なり

○ゆめなそ　かのゆるさぬ方をつよくつゝしめといふなりみな本情のいきほひにひかれての事
なり

○十九家

●曾家

○ぞ　そはもとそれの義なからこれは濁音なれは下と合成する之ぞはすへてその一筋に思はす

万一（軍）里王長歎おも
ひそやくる我下情

灯一ノ廿三ぞもし氏一首の眼之供奉といひ丈夫といひかく思(ひ)すやくる事いとも〳〵筋なき事よとの心をいふ也そふましき筋へそふ歟之灯三ノ三十九にも説あり同五ノ十二

万一長歌大和の國はおしなへてわれこそをれ灯一ノ六御身ひ(た)とつをとりわけてまふは他の人の此國に住さ(き)ぬを羨みおほす心之

にそはるゝ歟之されは本そはんと思ふすちあれともその筋へはそはれすて今一筋にそはるゝをいふ之よにはたゝ治(治)定の詞なといふは麁なりふかく歎をこむる詞なりこれまた本情の筋にそふへからすかたき方のすちなりと知るへし

○中のそ　中におくも義用ひさまともにたかふ事なし中におくはその事にぞの下におくへきけぢめあるか故之二例めくらす中のそあたる中のそとはいへ下の詞のうけさたかなるとかくれたるとなり

○こそは　これはもしのそひたるはかりにて義用ひさま同しされとはもしそふにてその分別をつよく思はする心なり本情のいきほひによりてかくつよくもいふへきなり

●平家

○を　すへてしかはすへからぬ物をしかする心なりされは古今集別の部に人をわかるとのみかけるは別へきこゝちなき人をわかるゝをしさを氏一字に思はするなり上古には〳〵そのやへか

きを〳〵えをとこをなと氐をにふかく心をもたせて置たる脚結なり後には二例かろきをおもきをとなれりおもきはノニシヤニなと里す義は猶同し用ひさまこれ又本情によすへからす返〻これにかきらぬ事なから多言を脚結にもたする事脚結の本（必カ）用なれはこと更此をもしなとおほくの言をもつへき脚結なり

○てを　とを　にを　これには你我のふたすちありされと兩用ともにさもあるましき事からをあつらへもし思ひたつにも用ふへしては下に詞をはふける例なる事まへにいふか如し無理なる事をあつらへ無理なる事を思ひたつみな本情に導（く）し手段なり

○ものを　上のおもきをと同しをの義用ひさま同しものといふはその事のなりかたまりたるかたちをいふなれはたゝをとよむよりは心おもしこれまた本情のいきほひによるへし

○をば　これはをにばをそへたるなりこれはもとの条理かへかたき勢のおもきをしらせておくなりもとの条理をおもくするも皆本情にひかれての手段なり

灯一ノ五者もしはすへて目に立事物（あ）（る）かにつけての歎之只物の分別をたつる詞と心うるは阿緯の義かへ（く）る之又万一長歌うましき國そあきつしまやまとの國は灯一ノ十二者もじは氏國の國らまき事他國の類にあらぬ事を歎し給へる之

万一軍王長歌丈夫とおもへるわれも云ゝおもひぞやくる我下情灯一ノ廿も二母は丈夫と思はぬ人に我をもてよせていふなりされは丈夫と思はぬ人ならはさもあるへきにといふへきをも母にてはぶける之

●波家

○は　多かる物の中にめにたつ事をことわる詞なりされとそのめにたつにつきてことにいかしくめにたつをなけく心はある之されは分別ならぬやうの所に用ひたるもあり二例すむはにごるはにごるは上と合成となるはかりにて義は同し

●毛家

○も　何にもあれそれとはこと筋なるものゝ猶それとひと筋なる事を歎くなりその主物言外なれとも本情にはあらすとしるへし何も何もとも二ッおくはふたつなから言外の主物へよする之その二物をもといふにはあらす

○もや　畢竟もに疑ひのや（ママ）をそへたるなりもの義用ひさま前に同し

○もぞ　もとぞの義をあはせたるものなりもしその筋にならむかと思ふ心をいふ脚結なり本情

の上に用ふへからすもしさありてはと心を勞する心に用ふるなりぞもしの歎まへにいふかことし

○もこそ　上のもぞの用ひさまに同ししかれともそとはたかひてこれはこれは(マヽ)そのこせる(さカ)かたを思ふ心ありぞはその筋へそふをなけくがたがへり用ひさま本情にさそふにかゝる事設くるは手段なるへし三例つむる(かぬる)もこそ　むかふるもこそ　さもこそいつれも置さまのたかふはかり之義は同し

○まれ　もあをつゝむれはまゝもあれの心なり猶もとの筋をたてゝ必(も)といふなり本情の上に用ふへからす

○みみ　み(え)みみみ(え)すみふりみふらすみなといふこれなりこれものうつりたるなりされともにはかはりてもはそれをもよせで叶はぬあか(るを)きなけくなりみはそれこと筋なからよりたるものになりたるさまをいふなり用ひさま同し

●仁家

○に｜　これはそこに持しめたる物になりてあるを言なり必外にむかへていふへしもちしめましき物のもちしめたるさまなり本情にいふへからす思はぬ所に持しめたるにするは手段なり

○中のに｜　きゝにきゝて(こえて)かたりにかたれなといふ例なりその一筋を持しめたる物に成てあるかたちを云これ又手段にて聞人の心をしてその(マヽ)をはなれんとする心をつくるなり

○にて｜　にして｜　持しめたる事につけて又しか〳〵のわさある事をて｜にもたせていふなりこれ又もちしむへき道理の物にはいふへからす二詞全同とはいへともし｜もじ添たるはその筋のそふものになりてあるさまをいふにて一段ねもころなり

●止家

○と｜　六例ともに同し思はぬ所にものゝとまるを云なりこれ又わさととまるになして本情に導

くなり〔いつゝのとみな外にとまるへき所あるなり〔にのとこれは外にとまるへき所あるへきにそれにとめていふなり〔ともにと妹と我なといふとなり外の人にもとまるへきをその人にとめていふなり〔にごるととまるへき理ならぬをそこにとめて合成するなり〔いふとともといふ心に用ふるとなりそこにとまるへき理にあらねといふなり〔へたつると吹と吹ぬるの類なりとまるまじき所にとまりてその一筋にのみあるをいふなりいつれも同し義なり用ひさまはそのとむるにおいて手段あるへし

○てふ　といふをつゝめたるなり上古はちふとふといふちふはといをつゝめたるなりとふはといふをはふけるなり後世てふとかくは誤なり是もさるまじき所にとまるをいふなりいふはもと装なれと熟して脚結となれるなり或は人のいひ或はうはさなとにいふなりわかいふを人のいふにする手段なり

○とも　六例たゝ上のとの六例にもを添たるなり上のもの義をかけて心うへしとまるまじき所にとめてそれを筋ことなる物につくるなりこれ又人情を主たる筋のかたへやる手段なり

○とす　すはするなり装なれと熟して脚結となれる之とまるましき所にとむるその事ワザにとりかゝる勢をいふなりこれ又そのとまるへきすちに人情をやる手段なり三例〔ことゝすかくるとすれとの類〔かとすふすかとすれはの類〔未とすつまむとすなるの類なり皆義同し

灯一ノ廿七古今集に春雨のふるは涙か櫻花ちるををしまぬ人しなければといふ歌世の中に花のちるををしまぬ人とてはなき事を一首のむねとするよしをしもじにおもはせたるなりもと春雨を涙かといふ事理もなき事なれと散を惜ぬ人世になき筋たしかなる時は理なきも理ありて見ゆれは之灯四ノ四十九同五ノ四に說あり

●志家

○し　そのそふるなり（に脱カ）てある事をいふなり去倫のしも氏義より去倫とはなるなりされは一首の詞みなこのしもじを置たる筋へそふなり後世これをやすめ字なといふは遯辞にてしかもその一首の主とすへき筋をさとすに必用の脚結なるなり人情をしてこと筋を設さする手段なり

○しぞ　畢竟ぞとよむ上にしを置たるなりしの義前に同し用ひさまも同しぞの義前をみるべし

○しこそ　こその上にしあるなりこそ前にいへりしもしの義用ひさま同し

○しか　しかも　しかは　かかもかはの上にしもしをおきたるなりいつれもそこをおもくするなり義用ひさま上に同し

○しも　そふへき筋と成たる筋を思はぬ筋へよする脚結なりソレニカキツテと思す君しも物をおもはするを（哉）の類なりとさの日記に春の海に秋の木はしもちるらむやうにとかけるなとそれにかきる義はしもしにありもはその思はぬ筋によする用なりたとへは誰にても物は思はすへきに又春の物に何とてもたとへ物はあるへきにといふ筋によらす思はぬ筋へよるをいふなり本情にあつかるへからす二例〔落ゐるしも〔かへすしもと云いつれも義同しその中にかへすしもは後世の用ひさまなりもの上にしを置たるなり

○しは　はの上にしもしをおけるなり心得全く上に同しことにおもきすちをしめすなり目たつ心はの専義なり

○中のし　二例〔あらます（本ノマヽ）中のし〔みる中のしといふ〔うゑしうゑは〔人のうへのこと〻しいへ

ばなとの類なり二例心得義用ひさま同一首にことに主とする筋におくなり主とする筋をしめすは手段なり

●乃家

○の| 思はぬ所に持しむるを云人をして必持しむへき所あ(た衍カ)たるを思はせん爲なりたとへは春の野といふは夏の野秋の野冬の野を思はせんとてなり又「のつめの歌心得同しすへてかへりつめ(倒)は例句の法のことく一首の主をまつよみ次に一首の実をよむその実にののつきたるなり「ことくのといふもの(こ脱カ)義より形容するなり

○のとも| 寻竟とも|にの上にの|を置たるなり義用ひさま同し

○のから| からの上にのを置たるなり義用ひさま上に同し

○が| の|に同しやうなれとの|はその持しむる所をさすなりが|はそのはたらきのことをいふなり

万一軍王長哥山越風の獨りをるわか衣手に朝夕にかへら(ママ)すめれは丈夫とおもへる吾も云ク思ひぞやくる吾下シタ情コヽロ 灯一ノ二十一氏のもじ心をつくへし此山風しもわがつゝしみを破らするやうに置たる脚結之しかれども情は氏山風のわざにはあらで月頃旅にあるより鄕思しのびかたきを山風のわざのやうになしたるのもじにて是氏一首の手段の本なり

万一歌野守は見すや君か袖ふる灯二ノ廿三が|はその物のはたらきのこと

上つ(世)せのがとよめるを思ふへし人情それにきそふ心をおこさしむる手段なり〔何が何さとよむ例ありこれも心得同し

●邊家

○へ　にに似たれとにはその持しむる所をいひへはその方をさすなり古今集に〔僧正遍照かもとにならへまかりけるにとかけるを思ふへし野へ山へ春へなと萬葉集方の字を用ひたり他の方を思はせんの手段なり

●良家

○ら　物の中に物あるかたちなりその中なる物たしかにこれとはしりかたき心あり実物をさゝ

なるをいふ脚結之のはその処をさすにての〻下の詞おもくなる之されはこれをもしのといは〻袖ふる事のみおもくなるへし灯の□てのといへる下か主となりがといへは上か主となる之とあり灯三ノ廿四大宮人の玉もかるらんといへる所にくはしくのもしの(殺)祝あり

万一いさ子ともはやく大和へ大伴のみつの濱松まちこひぬらん灯四ノ四十五へもじは方角をさす詞にてその方角のかなたに意ある事をさとす義なる事例の江緯の常之

さるに思ふへしこれあ緯のしるしなりされはおのつから等願(類)する義となれりをとめらなといふは一人をいへりこれその一人をは人にさためさする手段なりこれらに脚結の用ひ方をさとるへしへら也のらもこれなり上古にろといふ脚結あるは氐反之

●能美家

○のみ　はかりはそのひと色なるを云のみはその一筋にてつゝくかた(たかへりカ)は之思はぬ方に持しめたる事の一方につきはてゝあるさまをいふなりきく人の心をこと筋によせせんの手段なるなり

○はかり　二例〔中はかりとはそれほとゝ程をたつるなり〔示(末)はかりはそれはかりなるをいふともに程をはかる詞なり必それはかりにはなすましき手段に用ふるなり

○まて　限を超たる限までをまでといふなり定まれる限はまでといふ詮なきなりこれはその定まれる限を思はせんかために用ふるなり我よりかきれは人また限をこゆへけれはなり二例〔名まて〔装までともに同し心えなり

●陀尓家

○たに　おとれる物の上をいひてまされる物のしかなきを思ふ詞なりそれまされる物をしてそゝのかす心なり人情をしてともにそこをそゝのかさせんの手段なるなり誂禁願なとに用ふるも義は同しそのまされる方は及ひなき物にし置ていふなり

○すら　萬葉集尙の字をすらに用ひたりなほといふ心なからすらは分際ある物のその分を過るを云なり尙の字氏義なりその分際をおもひていふ詞なり人情もしか思はせんの手段なり

○さへ　ひとつしかるに又ひとつもしかるを云又ひとつの方もとひとつに及ふましき物をいふなりされはそのはしめのひとつの方人の心をやるへき手段なりたにとまきらはしき脚結なりよく分別すへし

●余利家

○より　三例〔いつるより〔おくより〔まさか(る)より〔いつれも心得同し物のうちにその出來(イデク)る所あ

るを思はする之おくもまさか(る)も猶出所あるを思はする之そのすてたる方を人にとらせんの手段なり上古ゆよなといへり

○から　もとそこよりおこる義なり二例ともに心え同しそこからおこりてはかくなるへき事なるにさはなくてかくなるといふ心に用ふるなりそのかくなるへき理なりといふ所を思はせんの手段なり

○からに　からににもしをそへたるなりからをおもくいふなりににて一きはその理と引たかひたる事を思はするなり

○ものから　物の事まへにいへりこれはその出所をおもくいふなり用ひさま上に同しかくあるへき理なるにといふ事を詞にいはすこれにもたせて用ふる例なり下のものゆゑ同し

○つから　つはその物につきとまれるかたち也そこにつきておこるさまなりそのつかぬ方を思

はせんの手段なり

○ゆゑ　からの用ひさまに同しくその故にかくあるへきにといふ事をはふきそこを思はせんかために下にその理にたかへる事をよむなり

○ものゆゑ　物上に同し義用ひかたも上に同しされはからはそこからおこるをいひゆゑはそのわけをいふかたかへり

●那牟家

○なん　これを中のなむといふ誂去倫にあらすふみに多く用ふるなんなりふみにてそこをむねと持しめさせんと思ふ所におくなり持しめさる歎即持しめさせんの心なり歌によむも同しむの事上にいへり

●碁登家

○ごと　毎になり日毎に木毎になとあるを云人をして異ならんことを思はしめん手段に用ふるなりこれもと異なる義より毎となれるなりにこるにてその異物を合成するなり

●毛天家

○もて　二例⌒名もて⌒きしかたもて同し心なり名もては心もて糸もてなとなりきしかたもてはうらかれもてくいひもてゆけはなとなりいつれもそれを以て次の事にかゝるをいふなり次の事にかゝるにそれを以てかゝる不都合なる心に用ふるなり人情をしてその不都合をおもはする手段なり

○して　二例⌒名して⌒あゆひして心得同し里言にデといふついまつのすみしてなとはもてに似たれとももてはわさ〱それを以てする心なりこれか（は）そのあり（本ノマヽ）來れる筋にしたかひて次の事にかゝる心なりこれも不都合をおもはする爲なり

●加保家

○かほ　そのかほをして実はさならぬものをいふなりそのかほなるをにくむ詞なりきく人をし

てその実を思はせんの手段なり

●那加良家

○なから　なからに　下はにもしを添たるはかりにて全同しナリニと思すもとのまゝにてさはらぬさまをいふなり俗に云は叶はすさなからおかむは思はしからさる事にいふなりされは人をしてそれにさはらせむの手段にて用ふるなり

○まゝ　それについてゆく心なりまゝにとのみ中昔中ころはよめり近昔よりまゝのなと轉用せりそれにつかむ事やむことをえぬ時に用ふるなり間たにと万葉集によめりそれに混すへからす人をして心にあらぬ事（ワザ）なる事を察せさする手段なり

○まに〳〵　畢竟上のまゝに同しもと此事まに〳〵本語にてにを畧きてまゝにといふなるへし續紀宣命にまにまともありまにとも古くは用ひたりすへてかさぬる詞はその一事ならすいく事も〳〵つゝくかたち之それに従ひなからゆくかたちを云之まゝにも此心得なり心え用ひさ

ま上にいへるに同し

灯五ノ四十三に説あり

㊞加天良家

○かてら　もとがては加の義にて一事に又一事を加へてする事の内にその形容のみゆるを云古はかてりとよめりもとい緯たるへき事なりされと後世いひなり本ノマヽたれはかてりともよみかたし全体一事ならまほしき心をいふなりされはきく人も一事ならせんとする手段なり

○六　倫

㊞可倫

○べし　未然の勢ひ必定かくなりゆくへしと思ふ時の脚結なりその必の心にあたる時の用なりべらなりのべへみのべ是なりその必然にてらして今の事を人に心えさせむの手段に用ふるなり

○べみ　もとべしと美隊のみを合せたる脚結なりされは必定かくあるべき未然の勢ひなれはとの心なり未然必定のいきほひを思ひしらせんかためなりみのうちあひ必あるべきなりべくとよむは未然の事を現當にならん事のねかひなれはこれもそのうちあひ必あるへきなり用ひさま皆今の事のさしつかへを思はするなり

○べらなり　中昔はかりにありし脚結なりべとらと也とをあつめたる脚結なり未然必定かくあらんとおもふかたちのうちにみゆるが目心につくかたちなりべしとよむにいたくかはらすされは上古又中比はべしにて事をたらせたるなるへし心(得)ひ用ひさま上にいふに同し

●不倫

○ず　不はそのいまたしかならさるをなけく詞なりされはその不の反を思はせんかためなり今はしかあらされともつひにはしかならんを思ふ心ありぬといふ時は下へ不の義をつゝくる用なりぬとつめたる歌はそのぬの下に必はふける詞あるなり

○じ　里にマイといふましとよむは別の詞なりまじきといふはさやうにすべからざる事をいふ詞なりじはさやうにはなるましき事をかねて思ふなり人をしてその反をおこさせんかためなりさやうの時か（はわざとカ）さわとさあるまいになして用ふへし你をともにいふ

○まじ　ハズデナイと里せりさはあるまじくなるまじき事をはかりていふなりそのはずにたがふ時に用ふるなりされは人心をそのはずにはめんとする脚結なり

○ざる　ずあるの約なりぬといふと同しく下に必つゝくへき詞なり用ひさまは是又人心に反を起させんか爲なり

○ぬ　上のざるに同し必つゝくへしぬにてつめたるは下に必はふける詞あるなりこれ又その不は（マヽ）ぬはしからぬ時の用なり人をしてこれに反せしめんがためなり
ねばと用ふるねはこのかよひなり

○で　しかせすして次の事にうつるを云詞なり上古はすてすしてとのみよみではよまざりきぬ

灯一ノ廿二白土（シラニ）は里言にシラヌノデといふ心也云〻尓は奴のかよへる也されとやかて奴の義とする説は麁之伊緯にかよはせたるはヌノデといふ心にせんか爲之

に似たれとぬはそのしかせさる物を下につゞくるなりこれは改りて次の事にうつらまほしさにしかあらぬ歎きなり濁音はあらたまらすして次の事にうつるを示すなり人をしてそのあらたまりを思はせんかためなり

○なし　なしはもと裝なるに脚結にうつして用ふるなりされは有の反にて無の悦ばしからぬ心をいふなり人をして有に誘はんかためなりとはなしにともなしにはなし（ママ）もなしの類なりいつれも心え同しなくなきともかよはするなり

○なく　なくとよみつむるなりすへてまゝ（く）けくらくさくなと用の詞を体の如く重くなす詞なりすてに老らくを老人の事なりと後世誤れるに思ふへし下にかくよみつむるはへしらなくはそのしらぬといふ事の佗しきなと思ふ事をはふきてしらなくとよむなり上古多し用□かたちもなく行過るを引とめたる心なりかく引とむるはその事につきて思ふ所あるをしめさんか爲なり

○なくに　二例〔かへるなくに〕〔かへらぬなくにともに同し心えなりかへるはそのなくににうちあふ詞をあらはによめるなりかへらぬはふけるなり上古これにもたせてはふけるが多しはふくは脚結の心用なれはなりなくの心得用ひさま上に同しされとにもしそひたるには心(必)えあり里セヌノニといふされはその所を人に思はせんか爲の詞なり

●將倫

○ん　すへて何事をも心に思ひていまた言に發せぬかたちなりされはそれには事はさま〳〵なる也きく人にそこをはからせんか爲なり大かたんはいまた五十音となり出ぬさきの音にていまた音に發せぬと心にかく思ふと云事を形容する義となれりいまた音に出ぬほとの音なれはあつへき字もなきか故にむにみうなとかりたりそ之をもて此義を心うへしいまた音にあらは(是カ)さぬほとの音なれはいまた心をあらはさぬ義あり

○め　むをえ緯にかよはせたる也んの義に同しされとえ緯の義にての心に思ふ所の行さきをいはんためにえ緯へかよはせるなり行さきをおもはするは今をおもはせんか爲なるなり

○まし　このしをにごるはいふかひなき人のいふ事なりにこるへからすまは即むのあ緯にかよへるなりそれにし家のしをそへたる也んはその事実なりましはその事虚なるかたかへりたとへはへ世中にたえて櫻のなかりせはなと設出たる事の末をいふなりされはもしかくあらはといふことの行末を云なり未然をいひて今の事を思はする手段なり又ましといひてへほかの散なん後そさかましなとのやうにさあるへき事なりといひたるやうの例ありこれ又猶ましの義より轉用するなりおのつからましにさる心もこもれはなり

○ませは　ましかは　ませははもとましかはのしをせにかよはせはにてかはの義をもちていふ全同詞なり行末もしもかやうにあらばと思ひあまり設出て云之ひとへに現當の故を思はせんの手段なり

○らん　らは内に物ありと思へとたしかにしられぬ歟なりんは前にいふかごとくいまた心の内にありて外に發せぬ義なりされはむかふの物のうちを心に思ふ心の詞なり用ひさまは人をし

てその実を思はせんの手段にいふなりしかとしりてうたかふに及はぬ事からに古人らんを用ふるにてこのらんの用をおもふてし（一）

片響のらんといふものあり上にやか又いつれたれいくなと疑の詞をおかすしてらんをおくなりこれは必なとといふ詞のはぶかりたる例なりされはもしなどを加へて心えかたき歌ならは此片響の例にたかへりとしるへし

○らめ　めの義上にいふか如くこれはむのえ緯にかよへる也されは心えらんに同しこの詞は必こそにうちあふへき詞なりらめどいはめどなとよめるにはこそのうちあひなきもあれと大かたこそをはふける也と心うへき之未然をいふ心なる事え緯の詞のさたまりなり用ひさま上に同し

○らし　すこしはその證とすへき事ありてたしかにはしりかたき事にいふなりしもじむとの別にて義はらんの心なりその筋にしたかふへき事になりてある事ある心しもしの義なれはこの義をなすなりこれもたしかによく〳〵しれたる事をわざとらしとよむ古人の手段なりさく〳〵人に決

万一長歌うつせみも妻を争ふらしき灯二ノ四らしきはもとらしは此らしきのきのはふかりたる之今里にラシイといふこれ之

定をゆつる事らんに同し事からによりてらんとはいふへからねは此詞はあるなり

万一み草かりふき屋とれりし（本ノマヽ）灯一ノ廿六被りしのれは衣緯の儀必用なれは之諸注やどりしといふ心にみたるは例の庵之是はそのやとりての（マヽ）末に心ある事をしめしめす爲なり（マヽ）云ゝ中昔に心しられん人に見せはやとよめるも心知りての上の人といふ也しるらんといふ時は今心をしらむ人と云義となりその別思ふへし

● 有倫

○ありこれ全く裴なれと脚結になして用ふるなり無の反なり無をねかふ時の用之人心をも無になさんの手段なり次〻の条みなありのかよへる也

○りこもれりいけらはしれらん氷れるまされるふれゝはたてれなとこれ之心得用ひさま上にいへり

○くありかりかはくあ（マヽ）を約めたる之心得全上に同し多かるをしからんはかなかるなとの類なりまへにいふか如く無を思ひてのみ用ふへしたゝうめくさに用ふへからす

○けれかれと同しこれは必こそのうけなりれはえ緯の音なれはその心得ある也來倫のけれとは別にてくあれのつゝまれるなりよく思ひわかつへしくあの約はかなるを又けにかよはすな

りと(本ノマヽ)おほし

○けん　これを狀のけんと名つく來倫のけんにまかはすへからすこれ又からんの心なりくあを約めてそ(かヵ)にかよはせまたけにかよはせたるものとおほしらはおのつからんにもつへけれはなるへしたかけんしけゝんふかけんの類之うちあひのやうらんに全同しこれにも片響ありらんの片響の例に同し

○たり　とありのつゝまれる之たるたれともかよふ之下の氏(氐)身のたりにまかはすへからすこれまた無をねかふ事まへに同し

○にあり　なり　なはにあの約之二詞全同し心得はこれも無をねかふなり〽花まちとほにありし菊〽おもひたちぬる草まくらなりなと之氏なり那利身のなりにまかはすへからすなるへしなりけりなとのなりは皆これなりならんにあらぬならはなるなれなとかよふ之〽鳴なる聲はなとのなるは那利身之

●去倫

○ぬ　もといぬといふ裝の脚結になれるなりいまたしかならさりしさきよりをかけていふ詞なりされはトウ／＼サウナッタといふほとの心ありいまたさなかりしさきの心かゝらすは此詞はあたらすとしるへしされはその事の成りぬる時にいふ詞なからそれよりも以前のならさりしほとを思はするが此詞の主意なりぬると用ふるはその成はてたることを次の事におくる爲にるといふ也るはすへて次へおくるためにそふる之此故にるをつけたる詞多きもの之なになとかよはす也みなこの心得にてなはなましなばやなめどなぬなて又にしにきにけりなともこれなりこれらか中にことにけりのにもしは心にもあらすおく物之よく心うへし。

●來倫

○き　今とたかへる事のしかなりはてゝある事をかたる詞なりけりの約なりといふ說あるは例の麁なりあ經の音をかねされは反功(切)する事なしその餘は音便にて二音の一音のことくなる也

ことにけりにはりもしあり必その義なくては叶はぬ詞なれはなりさる説にまとふへからすきはきなりけりはけりなりいかてかひとつにいはん用ひかたももとよりこと也たしかに既往の事をかたるは今の事にたかひて今の事を思はしからす思ふ故なりされは人も今の事を既往のことくせんをそそのかすため用ふるなり既往の事を以て今をそゝのかす詞なりと心うへし

○けり　これは今の事の心に引たかふより既往の事を以て今にむかふるなりきに似たれともけはきのうつれるにて末(未)然をおもはする爲にえ綷(へ)くうつせる之その未然とは既往よりさす未然なれは即今なりさてその義のうちにあるかたちをりとか(は)いふなりその義もて今のそれにたかふを歎する詞とはなるなりきけともに異なる義にて今とたかふ所以これなりとしるへし物語なとにへむかし男ありけりなといふにてきと混していへとも今の人それを知るましけれは既往をかたるにてきに似たれときは既往を以て今にてらす義なりけりは今のたかふをもて既往を驚歎するかたかへりけらしけるけれなと全く同心得に用ふへし大かたるは現用のかたちなれは条にたつるにはるよりの變化とすへき事なれといつれもりを踏たる詞を条の本にたてられたるはしかなりはてたる義あるをもて本とせられけるなるへしわか經緯の説を見て知るへ

し

○けん　これはけはけるのけなり今とたかふ既往を思ふなりさてそこを心に思ふをんといふ之これまた既往を歎くをもて今をなけく心に用ふるなり人も今を思はせんがためなりけめともかよふなりめの心まへにいふかことし

○くくる　二詞全同しるもしそひたるは次におくるためなり來るか思はしからぬに用ふるなり人をしてその反をおもはせむの手段なり

○十二身

●氐身

○て　これは物のそこにつきとまりての末然を思ふ詞なりたしかに次第する事の間にてを用ふるはての詮なし萬葉集卷一長歌藤原宮役民の歌へ水にうきゐてわがつくる日の御門に云〻とあるを先

學者みなうたかひて脱語あるへしといふこれ脚結は多言をつゝしむための物かつてもし事からつゝきてはての詮なしといふ事も心えさる説之後世直言にひかめる事これらの説にもしるへしたとへは一二三四五六とつゝけるを一より直に六へとばせてとよむなりしかる時は二三四五はてもしにふくむなりとしるへしつゝにかよふなといふもたゝこの多言をつゝしむ理をしる時は明らかなるへしされは人をしてその次第を心からつたはせんの手段なりとしりて用ふへし

○ては　二例〔すむては〔にごるては心得はたかふ事なしすむはさしては又次にうつり〳〵するかたち之にごるはさしてかく〳〵したらばといふ心なり次の事に合成せんために濁る也後の世の脚結なれはすむ方なとは直言にもあるへけれと猶てもじの義よく心えて用ふへき之みな未然をさすなり今を思はせんかためなり

○てん　ての下かく〳〵してんの心をふくめて用ふる詞なりてもしを蒙れる脚結みなかくのことし未然を思ふ事え緯の義なりんもし上にいふんもしをくはへて心うへしこれ又今を思はせ

万一軍玉歎ぬる夜
おちす家なる妹を
かけてしぬびつ灯
一ノ廿四つもしは
つくましき所へつ
くをいふ脚結なり
されは供奉をこそ
片時も忘するまし
けれ家なる妹を連
夜しぬふへき事か

んかためなりてめてましてまほしこれか變なり

○てき　てけり　てし　てぬ　てよ　てけん　てけらしも　ての心え上に同し下につぎたる脚結はみなその条下をくらべて心うへし大かた今を思はせんの手段なりての下詞をはぶく例いつれもみつるへからす

○たり　これはてあをつゝめたる之へ木かくれたりとたれやたらはたれはなともかよふなりこれ又てもしの義をわするへからすたにかよはせるは及はぬ事をなけくなり人をして今を思はする爲なりたらはたれはなとはらはれはの義をあはせて思ふへし

○つ　わか思ふ方にとゝまるへきにその方にはとまらであらぬ方につきとまるをいふ詞なりこれその思ふかたを思はせんかためなり後世ての所またはつゝなとのおくへき所におくは誤なりよく心うへし

はとみづから歎たる心(こ)て灯五ノ十五にも説あり

〇つる　上のつの義にるをそへたるなり次の事にうつるおくる(り)にるをいふなりるもしにてつは過去の事となるなり現在の詞か(の)やうに思ふはるもしをしらぬなりつらんつれなとかよふなり

〇つゝ　これは畢竟つもしをかさねたる也あらぬ方につくを思ふすちにと思へと猶そこにつき〳〵するかたちをいふなりされはすへて好まぬ事のやまぬかたちなり好まぬ方につく脚結なりとは後世しらすなれりされは中昔よりは氏義ならぬもましれり此詞公に禁せられたれはことに故ある詞のやうに人おもへりその理かなの下にいへりてし(てゝ本ノマヽ)といふ脚結萬葉集にあれとてとつは同音なからえ緯う緯の別はあるなりよく心えて用ふへし二例〔中のつゝ〔末のつゝたゝ置所のたかふはかりにて心得同しこれまた人をして思ふ方に誘ふ詞なりつよりはそのさそひつよきなり

●之身

〇し　これは世に過去のしといふ之志家のしをしかしといふこれをきしかたのしと名つけたりそふへきすちになりかたまれるかたちをいふなり里言にク(タ)といへとつもさもタなりあやまり

て此しを夕とはかり心えて用ひたる事いと後のよの歌連哥誹諧なとにみゆ誤るへからすその
したかふへきすちのそのしたかふへきになりてあるかたちよく〳〵たつね知りて用ふへし

○せば　せはしのかよへるなり〔ふりおける雪にまかひせはへいとかくかたき物としりせはな
との類なりこれにてしもしの義思ひしるへし

○しか　しかとの心なりしは上のしなりしかは必こそにうちあふへきなりそひたるすちの今さ
だかならぬ心なり是又今を思はせんかためにいふなり

○しかと　しかとも　ともじともしなとそふは必下にうち合せんためなりどもはともに雖の
心なりしはまへに同し心得用ひさま同し

○しかば　しか上に同しば下にうちあはせんか為なりは濁音なるは下と合成せんかためなり心
え用ひさま同し

万一長歌みとらしの梓の弓のなか弭の音すなり灯一ノ十四奈利はその耳目に立はそれ二つけて深く心にあたる事あるをしめす之云ゝおほしめす情をは仰られずしてたゝ弭音のいたく御耳にたつよしを奈利をもておも

○ましか　ましは上のましに同しかは氏しかのかなりこそにうちあはすへしかの心ましと未然を思ふ事のしかとさあらんかを今より思ふこゝろなり

●咩利身

○めり　たしかに治定したる事の今少し治定しかたき所あるにいふなりたしかなるにわさと治定を人にゆつるとて用ふる脚結なり律の本律に及はさるをメルと云これにかなへりめるめれなとかよふなり

●那利身

○なり　有倫のなりにまかはすへからすこれを未なりといふなりすへて目につき耳につく事をいふ詞なりしかれともその目耳につくはその物によりて情あるか故なりそこを思ひ入らせんとてそこをいはてたゝ也とはよむなりたとへは嵐のふくにつけて寒くその寒き故に郷思さかりなるを思ひ入らせんとてあらし吹也といふかことし

はせ給ひしなり灯
（ママ）
五ノ十五にも說あり

〽露そおくなる又なれはなれとなとかにはす之（かよはす）本ノママ、

〽鳴なる

●由久身

○ゆく　もと行は裝なるを脚結として用ふるなりふりゆくなり行なとの類なりすへてその物のむかふへゆくかたちをあとの方よりいふなりそのゆくにつけて情あることを思はせんかためなり

●阿不身

○あふ　あへすとのみよむなり万葉集堪の字をあてたり物に堪ぬ心なりもとあふは合の義にてその物と拍子調子なとのあはす事のせられぬかたちなりあへぬはそれにつけての情を思はせんとてなりそれに堪へきいとまもあるをわさとあへすとよむこれ人心をしてそこを察しむる手段なり

灯四ノ四十九おもほゆとは何事にもあれ心とおもふにはあらでおのづから思はるゝをいふなり灯五ノ四しぬ（ゆか）ばる此ゆも心にもあらすしのはるゝを云之

●也留身

○やる　後世の詞なり〳〵行やらてなといふ是なり多くやらぬとのみよむ之何事そによりてすへきわさをえせぬ歟なりそのせねはならぬわさを猶豫せられんことをねかふ心をさとすなり

●加奴身

○かぬ　かねてその事のなしおかれぬ歟なり人をしてそのしかねたる事の許諾をさそはむかためなり

●被身

○る　らる　二詞全同らもるも内にその事のあるかたちをさす詞之その内にとりこまるゝかたちをもて被の義を形容するなり上古にはこれをゆともよめりそれはや經の義にていふなりわか心にはあらさる事を示す詞なり人にも心からにあらさる事を思はせんの手段なりまたるたな（いとはるゝカ）ひかれまたるゝいひはなたれよなといふ又少しかしつきてらるといふ例ありかしつくたゝるとなつく〳〵たゝりなさるななとこれなり

●令身

○す　令の義なりこれ又思はすなる心をみするなりわかすせさするきかせそくらせるちらしゝ皆さすか(るか)心之上古はしむるなとよめり被身は人につかはるゝ心なり令身は人をつかふ心なりされと人より我をつかひわかつかふ人になしてもいふへし

○む　ガラスと里にいふ心なりかなしむうるはしむなとのむなりもと令の義より出たるなり人にうれしがらさるゝかなしからさるゝ心なりこれも心にもあらぬことをおもはせんかためなり

●爲身

○す　するは全く裝なから脚結として用ふるなりへやとりせしへたえせぬ明そしにけるなとなりこの爲(ス)をかろくみるへしといふは裝との別をいふ之その故之(はカ)わざとわさにてするほどの事なる形容なれは之ことと更にその事に心を入るゝ(よ)はしをしめさむ爲なり

●如身

○こと　その恰好の似たるをもて引あはする詞なり上古になすといふありこれはさならぬものを似るやうにしなし思ひなすなり如にはしかなす義はなきなり後世はなすを（よますカ）よるに上古はくはしかりしなりこれは似たる物もて形容するなりその寅（寶）（本ノマヽ）物を言外に思はせんかためなり

○八　隊

●美隊

○み　もとはむのうつれるなりうとひ（む）したしむなとのむなりうとがるしたしかるのがるの心なりそのがるにつけて事の起るをいふ詞なりされは里言サニとはあてられしなりへ風をいたみは風をば波のいたがるなりそのいたがるより岩をうつ事のおこるをいふなり下へそのうちあひをなすはみはい緯の音なれはなりされは風をいたみ笘をあらみなと皆上にををおくなりがるの心なれはなりそれか所爲なるよしを云之これ又心にあらさる事をさとすへきみのみこれ

なり

○をみ　をあるもなきもみはがるの心なりされとあるは重かるへし本情にひかれておもくも輕くもする皆手段なり

○さ　さ經もとその物のまゝにそふ心なりそはんとすれとかたき心さの義なりそのかたちを言外に見せんがための詞なり人をしてそこを味はひしらしめむとて用ふるなりその塩梅様子を思はしむるなり

○のさ　がさ　のとがの別上にみるへしさ前にいへり何ぞ何きとよむに似たれとその筋のしたがはるゝをなけく心なりこれはそのさまを味はゝせんとの心あるなり

●久隊

○く　これはまくけくらくさくなとのくなり詞の下なるもじをうつしてくを添ふるなりたとは

万一山下風の寒けくに灯五ノ十九に說あり

ゝいふのふをはにかよはせていはくといひゆかむのむをまにかよはせてゆかまくといふこれに例してしるへし用の詞を体とするなり上にくはしくいへりその事にふかく心をとゝめさせんの手段なりらくはるの延たるなりといふ説あり例の麁なりるとらく大に異なる事經緯弁にてしるへし

○らく　ま　まく　らく上にいへりまくも上にいふまくまく(まはカ)をはふけるなり

●介隊

○げ　氣(ケ)の心なりその様子を云なりえ緯なれは末脚(本ノマヽ)(然)と今のたかひをいふへしをしきをしけといふ類なりたしかなる物をわさとその実を人心にゆつるなり濁るはその物の様子とわか思ひとを合成する義なり

●加之隊

○かし　二例〔みるかし〔末かしといふともにその理をおしてしらする詞なからおのつから人心

をうこかしてあつらふる心のこもるこれをみるかしといふなり定めかたきすちのそふへき筋となりたるをいふ義なれはひとへに人にその理をおす詞とはなれるなりこれその理を人に思はせんの手段なり後世の詞なれは直言に用ひたるもましれり

●奈倍隊

○なへ　中昔よりは必にもしをそへてよめり二事の先後なくならす來る（ひか）を云なりこれ先後あらんを思ふ事をさとすなり

●母乃隊

○もの　しかもあるましき事の心にあたる物となりたるかたちこれそのならひとなれるをさとす詞なり

●八多隊

○はた　またと同しく後世思ふは誤なりはたと行當る心にて是非なき事やと思ふ心の詞なりこ

万一み吉野の山下風の寒けくにはたや今夜もわれ獨ねん灯五ノ二十はた

は又は一事の上に更に一事の重るをいひはたはせん心ちもなき事のやむ事なくせらるゝ歎なり里言にセウコトモナイフといふ義なりこゝも今夜獨ねせんこゝちさらに〳〵なけれと從駕なれは云、

のすべあらん事をいさなふ手段なり万葉集爲當の字をあてられたり

●加天隊

○がて　がたのたをてにかよはせたるなり難くもあらぬをわざとがてとよむは易をねかふ爲なり

文政四年辛巳越中國富山客中著

富士谷御杖

脚結玄義終

嘉永元年五月寫之

吉田友香

わかりかたき所〻はもとの字形の〔マヽ〕寫置

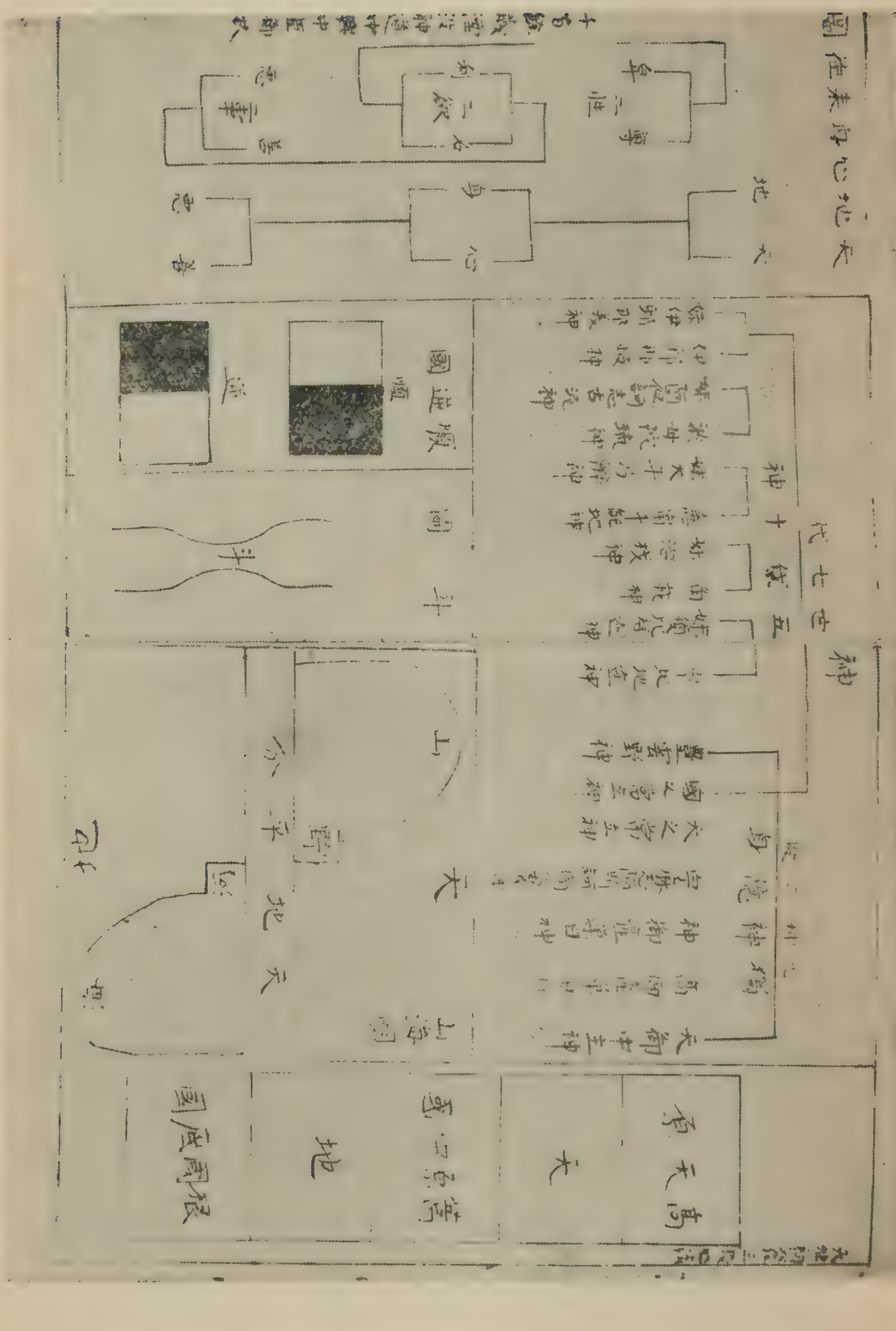
天地初發之圖

歌ノ五級
經緯畧弁

天地初發之圖

歌之五級

經緯畧辨



歌之五級

一上　詞たくみなくをさなけにて心は深く思ひやらるゝ級

一中　一上にすこし劣れる

一下　詞にこめたる心少しあらはなる

二上　詞つよくおかしさもたくひなき級これは人力の極之
　一はいはゝこの級をおしつゝみて詞をさなきなり
　此故に一よりは此級の方おもしろき物なり

二中　二上に少し及はぬなり

二下　たくみ詞に出たる

三上　詞うるはしくつくりおほせてたくひなきなり世によしと思ふは此級なり一に似て一にあらす二を經すしてこゝより一はよみえかたき物なり

三中　三上に及はぬなり

三下　一とほり哥と成たるなり世上これを哥よみと覺えたりされと皆所詮古人の糟粕なり

四上　以下罸点哥にならす疵あるなり

四中　事物詞に誤あるなり

四下　蕗題傍題なり（ママ）

五　古歌を或は上或は下みなからをかしたるを云

富士谷御杖

徑(經)緯畧辨

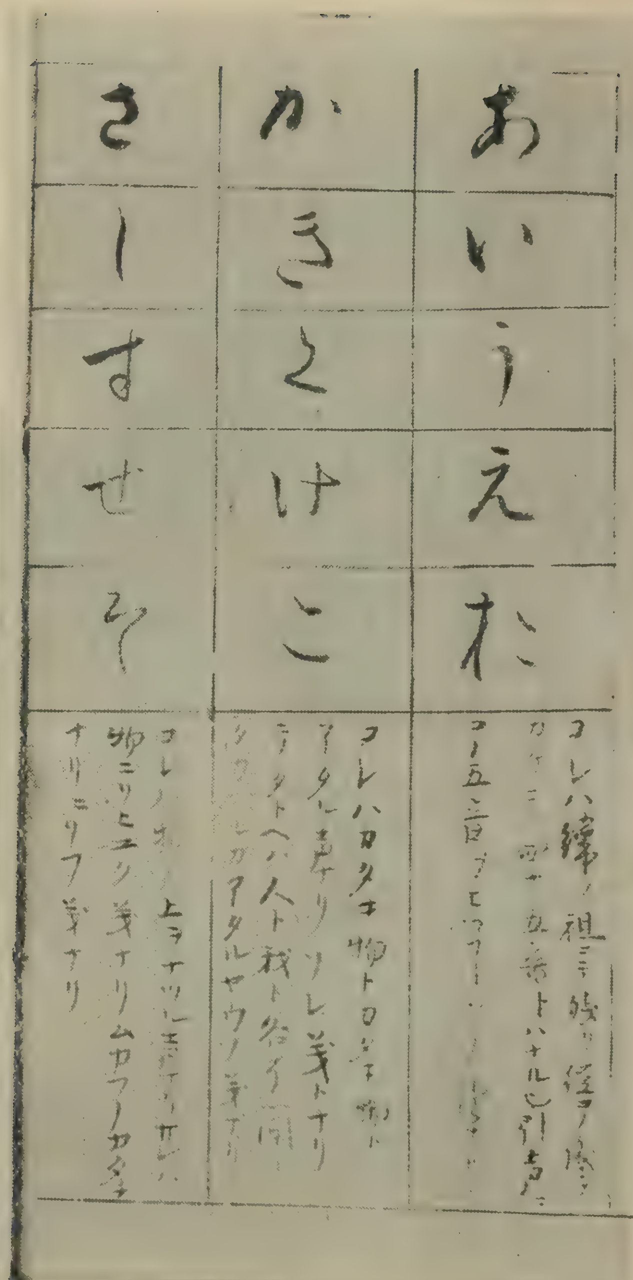
富士谷御杖著

仏父成章著脚結抄中に徑(經)緯弁あるよしを載たれとも草稿なし凡これわか御國言の本なれは積年に忘るゝ時なかりきわか伯父皆川愿韻學に長す又密宗の僧悉曇に長したるにもしは／＼とひけれと漢土天竺音におきてはたかふ事あるましけれと風土のしからしむる所にや用ふる所ことにして和音に叶はすされ(は)。所詮和韻は別に草創するにしかすと國書をみることに心を用ひたる輩(事)久しふと思へらくこの五十音みな口を開きての音なり(也)口を閉ての(音)。はんより外なしいまた口を開かさる間の音なれは大かた五十音は此んより出る音なる事をしりぬん口を開けは字となる此(氏)事くはしくは予か随筆(筆)にいへり此(氏)故にんは音の源字は音のはしめなる事をさとるへし大かた和言は字緯を下にふむを正とし(しと)すたとへはおもふこれなり(也)これをおもはぬ　おもひ　おもへ　おもほゆとかよふは變化なるなり(也)大かた韻學口中のかたちをもて儀(義)をとらむとす近きか如し(く)にして迂遠なり予は自然の聲(声)によりて儀(義)をしるなり凡經はあ經を除きて九ッその九經にあいうえお五音の緯をかけ經緯の儀(義)をあはせて一音の儀(義)をな

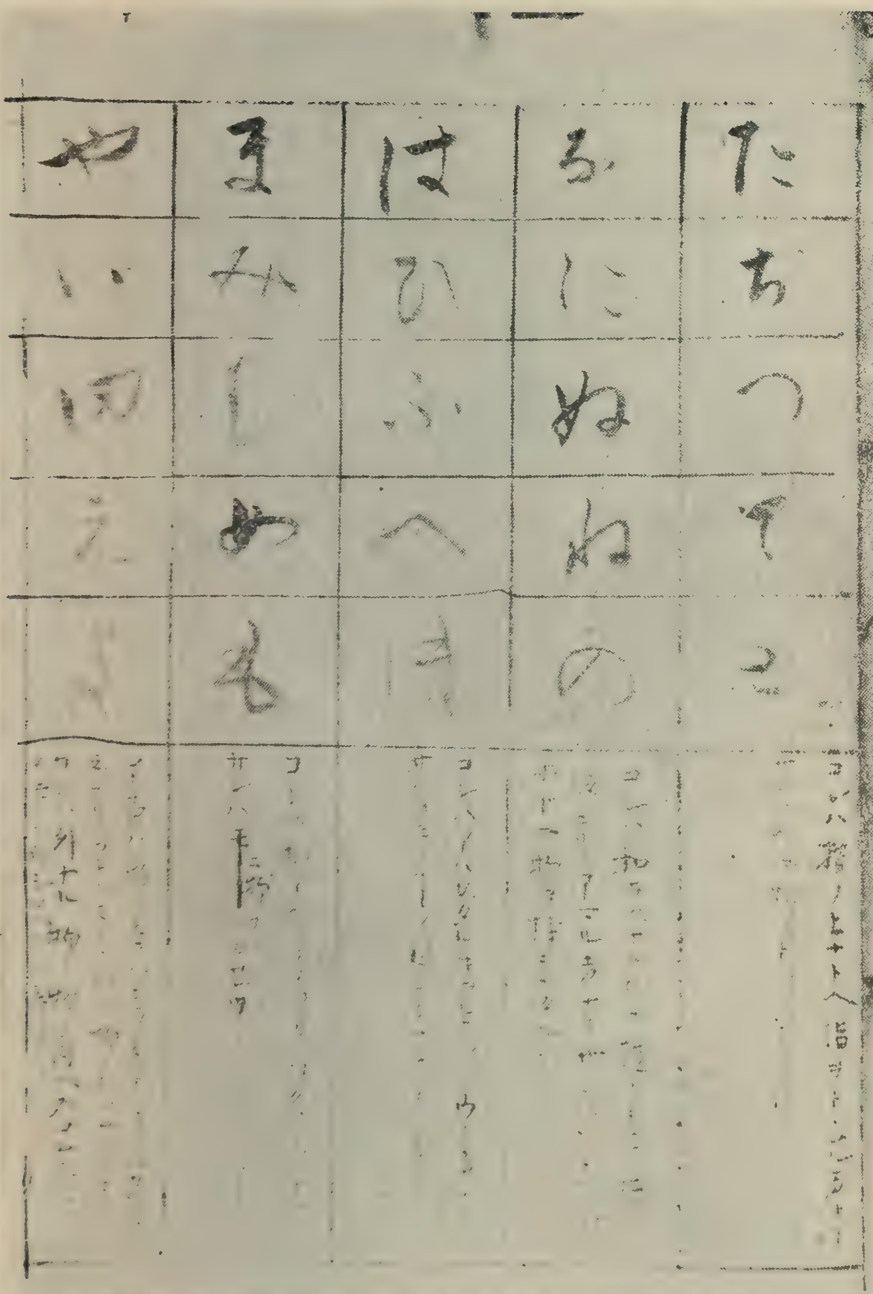
す也四十五音みなこれに同しあ經を除(のそ)くはのそくにあらす緯の儀(義)即あ經の儀(義)なり(れは也)悉曇体文九ッに摩多五ッをかけて語をなすは似たれと和音はこれをもて誣かたき事まへにいふかことしかのみならす字をはしめとする事他城(域)にことなる所謂にして我(わ)か御國もと天地ふたつをその(な)ふる事(こと)神典の大むねなれは音もまた經に緯をかけて後はしめて儀(義)をなす事やむことをえさる所なりかし此(氏)故に儀(義)をとるにはまつ經の儀(義)をとりさて緯の儀(義)をかくへし緯の儀(義)その語の實とはなるなり(之)愿(愿)標實をいふこれ即經緯は標實なり二音三音農(乃)至五音七音の語も上はみな標下の一音實なりと心うへし先輩此(氏)五十音をとけとも私なりとるにたらすその私なりといふ故は經も一儀(義)緯も一儀(義)なるか(が)ふたつあひて儀(義)をなすことをしらされはなり大かた人の用ふる音五十に過されは情もまた五十に過さる輩(事)明らか之(なり)國學に【編者註。龜田氏藏本コ、ヨリ枠内ニ記ス。】おゐ(い)て此(氏)音學はむねとすへき事これにて思ふへし此(氏)妙用あけてときかたし九經のうちや經とわ經もの丶声の形容すへきなきはもとこの二經必故あるへし思ふにいうえゑをなとこの二經にのみあるは重音なれはなるへし重音とはや經にはいあれはいをかねり經(わ)にはうあれはうをかねていやいいいゆいえいよの声わ經はうは(わ)う ぬ(ゐ)うううゑうをの声にや引聲(声を)ともには畢竟三音の合音なり猶考ふ(可)へし

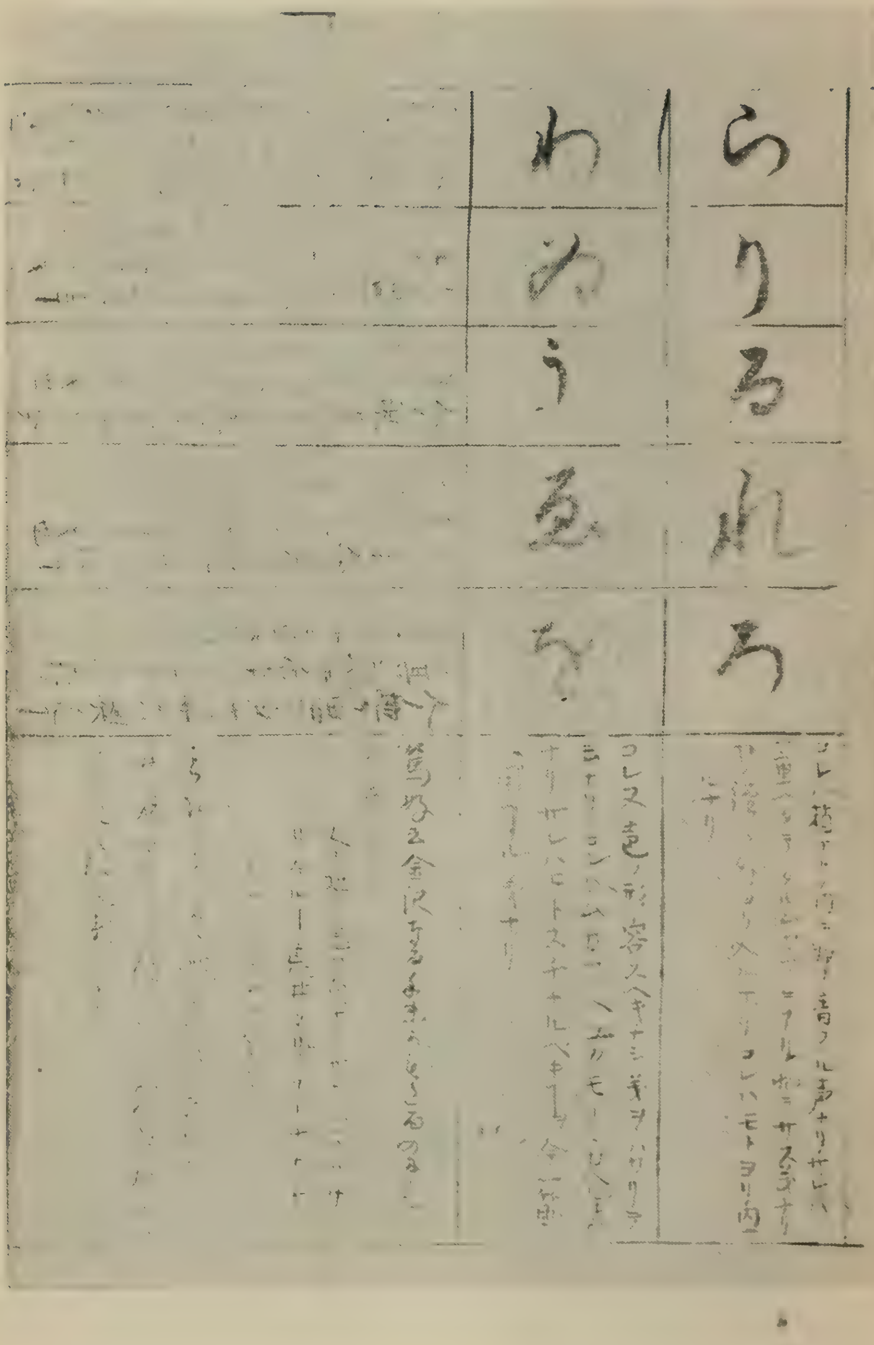
此(氏)外濁音清陽(濁)音三声の別(引)各儀(義)あるへし濁音は二物合成の義なり(也)

（文政四年辛巳十月）



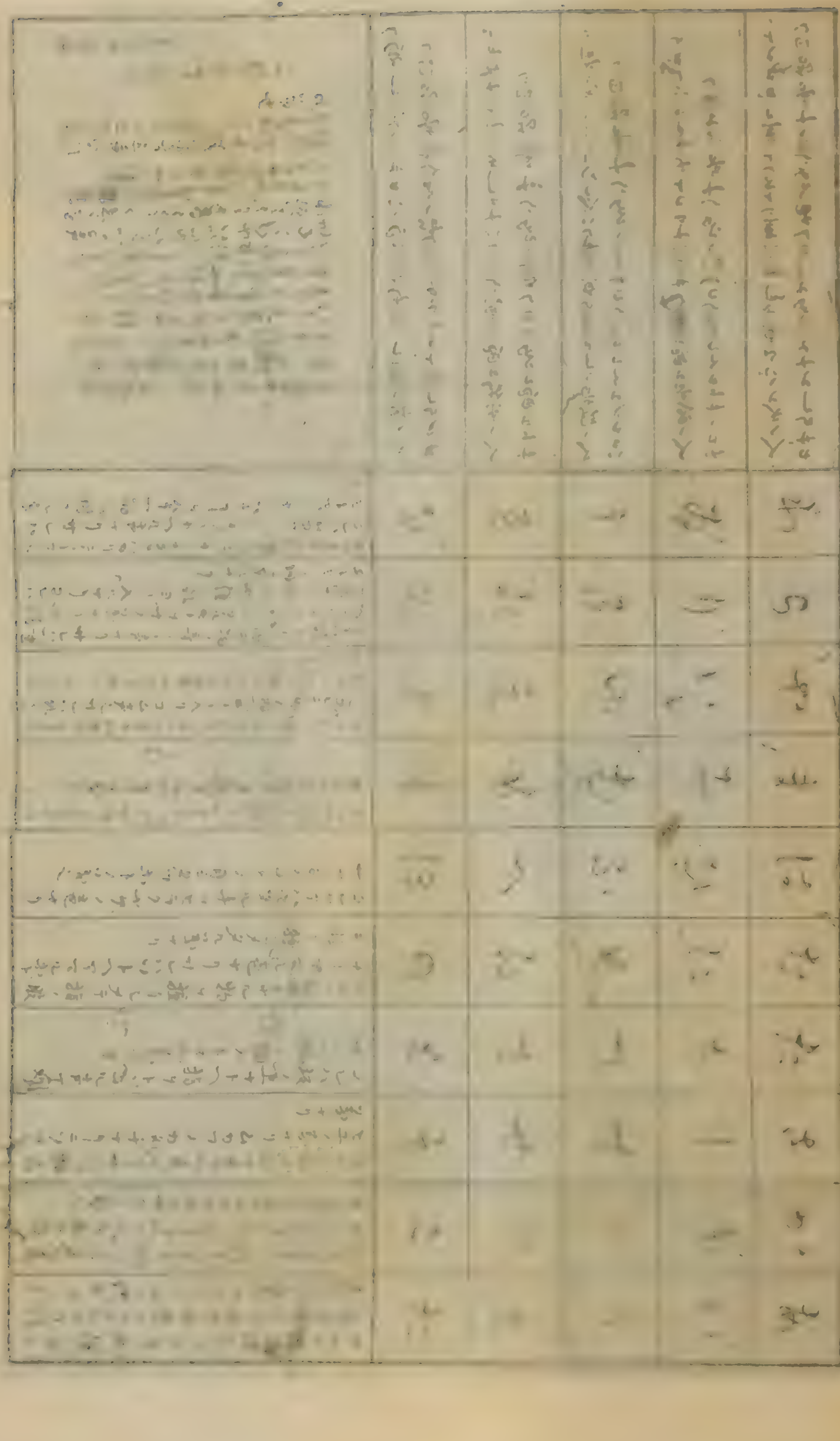
（富士谷御杖識）


たちつてと
なにぬねの
はひふへほ
まみむめも
やいゆえよ


らりるれろ
わゐうゑを

己丑仲春寫之

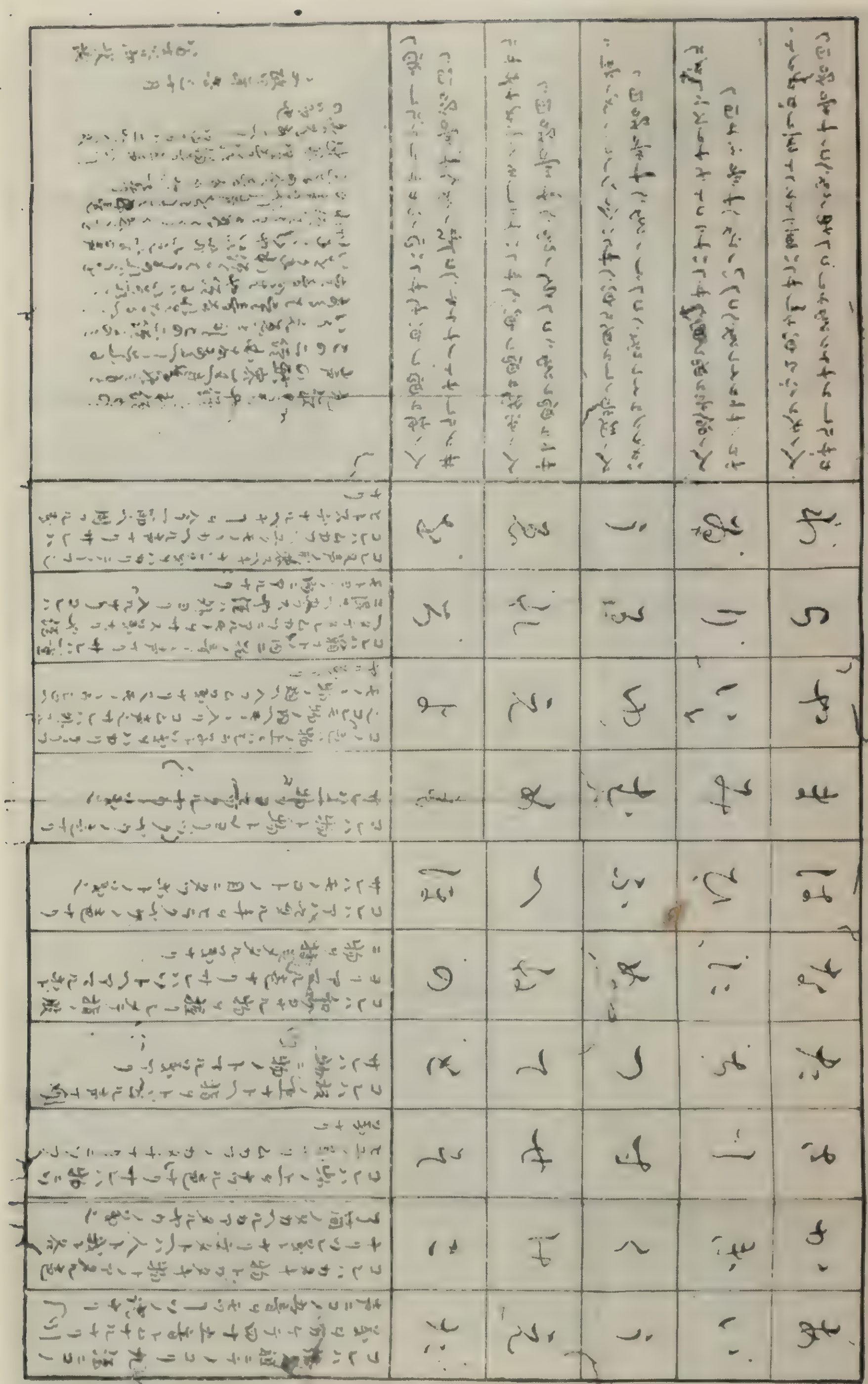
定重



嶋田次郎氏所藏　經緯著辨「經緯圖」

己丑仲春寫之

定重



昭和十五年十月廿二日印刷
昭和十五年十月廿六日發行

東京市品川區上大崎長者丸二八四
國民精神文化研究所
電話大崎(49)三一一七
三一一八
三一一九

(合資會社光文社印刷)

19